

鑄師屋遺跡群

# 前田遺跡

—長野県北佐久郡御代田町前田遺跡発掘調査報告書—

1987

御代田町教育委員会

鑄師屋遺跡群

# 前田遺跡

—長野県北佐久郡御代田町前田遺跡発掘調査報告書—

1987

御代田町教育委員会

卷頭図版 1  
鑄師屋遺跡群





卷頭図版 2

前田遺跡第1区





卷頭図版 4

前田遺跡第Ⅳ・Ⅴ区



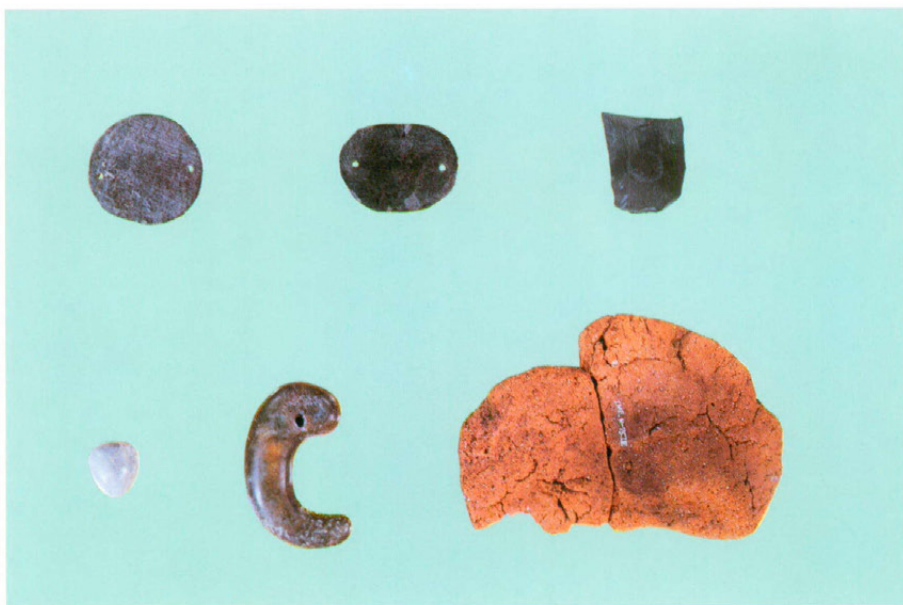
1 奈良時代の竪穴住居址 (H-52~H-55)



2 カマドと遺物の出土状態 (H-84)



1 初期須恵器



2 祭祀遺物



3 円面硯



# 序 文

雄大な浅間山の麓にあたる小田井・御影地区において、農業生産の向上化を目的として県営圃場整備事業が実施される運びとなりました。当御代田町内においては、その小田井・御影地区にあつて野火付遺跡の存在が確認されましたが、当該事業実施に伴つて破壊がやむなき事となり、発掘調査を実施して記録保存に努めることとなりました。調査は、由井茂也氏を団長とする調査団、町文化財審議委員、並びに関係者皆様の御尽力によつて滞りなく進められ、奈良・平安・鎌倉期を中心とした遺構が多数検出されました。その中でも、平安初頭の埋葬馬の検出は特筆すべき発見となり、貴重な文化遺産が我々の目の前に姿を現しました。

この野火付遺跡を含む一帯は、奈良・平安時代を中心とする古代の大集落を眠らせており、鑄師屋遺跡群と総称されております。野火付遺跡の北に隣接するのが、今回の調査をみた鑄師屋遺跡群前田遺跡です。

前田遺跡の24万㎡におよぶ広大な調査地区からは、古墳時代中期の集落をはじめとして、奈良・平安時代の竪穴住居址100軒あまりが検出されました。また、90棟近くの掘立柱建物址は、おそらく県内で最も多い検出事例ではないでしょうか。古代の地方集落がまさに現代に顕現したと言えるでしょう。

前田遺跡の発掘調査は昭和60年の4月より9月にかけて実施され、ひき続き本昭和61年度にかけてはその整理が行われ、本書刊行の運びとなった次第です。

埋蔵文化財はできれば原状のまま保存しておくべきでありましようが、やむをえずに実施した今回の調査であります。正確な記録保存のために献身的な御協力をいただいた各位に深甚な謝意を呈して序といたします。

昭和62年3月

御代田教育委員会

教育長 原 田 正 夫

# 序 文

「しなのなる浅間の嶽に立つ煙遠近の人の見やはとがめぬ」。伊勢物語において在原業平が詠じている浅間は、東山道を旅する途中、この御代田付近でも作られたものでありましょうか。浅間の雄姿はいにしえの人々の眼にも今と変わりなく映ったことでしょう。

さて、この雄大な浅間の麓、御代田町において、遠く奈良・平安を中心とした遺跡が調査されることになりました。しかし残念なことにそれは、県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査で、破壊を余儀なくされた記録保存のための調査となりました。幸いなことに調査は、佐久考古学会を中心とする探究心旺盛な調査員諸氏と地域の歴史を自ら掘り起こそうとする地元の協力者の皆様のお力を得て滞りなく進んでまいりました。鑄師屋遺跡群と総称される一帯において、まず、昭和59年には野火付遺跡が調査され、ひき続いて昭和60年に調査されたのが本前田遺跡であります。

前田遺跡は予想以上に広大なひろがりを見せ、そこからは奈良・平安時代を中心とした竪穴住居址117軒・掘立柱建物址87棟あまりが検出されました。東国の一集落が今千年の眠りから目覚めたのです。この集落は、付近を通過したともいわれる新しい東山道や御牧塩野牧との深いかわりあいが認められそうです。本報告書においては、こうした点についての論及を試みました。また、当地域において八世紀代の土器様相の変化が細かに追えることもしだいに明らかになり、それに基づいて集落様相の一端を垣間みることができました。

前田遺跡を含む鑄師屋遺跡群一帯は、御代田町のみならず、佐久市・小諸市の三市町にまたがっており、そのそれぞれの努力により、また、その協力によって調査が進められてまいりました。この調査によって東国の地方集落の実像が、僅かなりとも解明されることを願ってやみません。

最後になりましたが、本調査実施に際し深い御理解をいただきました農政および文化財保護部局各位、調査に実際にあたられた方々、本調査・報告に際し貴重な御配意・御助言を賜りました皆様に対し厚く御礼を申し上げ、序にかえさせていただきます。

昭和62年 3月

前田遺跡発掘調査団

団長 由 井 茂 也

# 例 言

- 1 本書は、昭和60年4月15日より昭和62年3月31日までにわたって発掘調査・遺物整理された長野県北佐久郡御代田町大字御代田所在の鑄師屋遺跡群前田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、北佐久地方事務所（旧東信土地改良事務所）の委託を受け、御代田町教育委員会が実施した。
- 3 本調査の体制については、本文中発掘調査の概要のなかに記しておいた。
- 4 本書を作成するにあたっての作業分担は以下のとおりである。
  - ◎遺物復原 伴野有希子 ◎遺物実測 鳥居 亮、堤 隆、小林美智明、太田和子、伴野有希子、下角圭司
  - ◎遺物トレース 堤 隆 ◎遺物写真撮影 鳥居 亮 ◎遺物観察表作成 堤 隆
  - ◎遺物拓本 尾台久美子 ◎版組み 鳥居 亮、小林美智明、太田和子、田村祐子
  - ◎遺構トレース 鳥居 亮
- 5 本書の本文編の執筆は、堤 隆が行った。
- 6 本書の付編については以下の各位より玉稿を賜わった。厚く御礼申し上げる次第である。その掲載については、受付順とした。
  - パリノサーヴェイ株式会社 「前田遺跡出土材樹種同定報告」
  - 奈良県橿原考古学研究所 木下 亘先生 「前田遺跡の初期須恵器について」
  - 奈良教育大学 三辻利一先生 「前田遺跡出土土器の蛍光X線分析」
- 7 本遺跡出土の石器の石材鑑定は、白倉盛男先生にお願いした。
- 8 本書の編集は、堤 隆、鳥居 亮が行い、御代田町教育委員会がこれを校閲した。
- 9 本遺跡の佐久市分についての写真・図面の掲載にあたっては、佐久市教育委員会に快諾を得た。厚く御礼申し上げる次第である。
- 10 本調査および報告書刊行に際しては、以下の方々に貴重な御助言・御配慮を得た。御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。（順不同・敬称略）
  - 金井塚良一、笹沢 浩、田中正二郎、花岡 弘、岩崎直也、林部 均、西山克己、桐原 健
  - 小林 孚、樋口昇一、小林秀夫、太田喜幸、芦部公一、宮下健司、川島雅人、林原利明、
  - 鋤柄俊夫、諏訪間順、諏訪間伸、檉田 誠、菅谷みのぶ、新田浩三、関口昌和、林 幸彦、
  - 石野博信、関川尚功、羽毛田卓也、高村博文、小山岳夫、三石宗一、福島邦男、齋藤洋一、
  - 村沢正弘、伊丹 徹、中田 英、大上周三、山下誠一、木内 捷、保坂康夫、河西 学

# 凡 例

## 1 遺構の略称

H→竪穴住居址 F→掘立柱建物址 D→土塹 M→溝状遺構

## 2 遺構ナンバーは、時代別になっておらず、分布のまとまりの順に付してある。

## 3 挿図の縮尺

遺構および遺物の挿図の縮尺は、各図毎に明示してある。

## 4 写真図版の縮尺

遺構写真の縮尺については統一されていない。

遺物写真は、土器・石器ともに挿図と同じ縮尺に統一してある。

材の鑑微鏡写真については図版中に縮尺を示しておいた。

## 5 挿図中におけるスクリーントーンは下記のものを表す。

### 1) 遺構

斜線 = 遺構断面                      網点 = カマド(太点)、炉(細点)

### 2) 遺物

断面の網点 = 須恵器                      内・外面の網点    太=黒色処理    細=赤色塗彩

石器表面の網点 = 使用痕範囲

## 6 遺構面積の計測にはプランメーターを用い、3回の計測の平均値を面積として示した。

## 7 出土遺物一覧表〈土器〉の法量は、上から口径・器高・底径の順に記載し、無記載は不明

( )は推定値、< >は大幅な推定値、カッコがない場合は完存値を表す。単位はcm。

## 8 出土遺物一覧表〈石器・金属器〉の法量は、無記載が不明、( )は現存値、( )がない場

合は完存値を表す。単位はcmおよびg。

## 9 遺構の層序説明は本文中に記した。

## 10 遺物胎土の色調は『新版 標準土色帖』の表示に基づいて示した。

# 目 次

序 文

例 言

凡 例

目 次

I 発掘調査の概要	1
1 調査に至る動機	1
2 発掘調査の概要	2
3 発掘区の設定と遺構の検出	3
4 発掘調査経過	4
II 遺跡の環境	7
1 前田の風土	7
2 前田遺跡の歴史的環境	9
III 層序	13
IV 遺構と遺物	15
1 竪穴住居址	15
(1) H-1号住居址	15
(2) H-2号住居址	17
(3) H-3号住居址	19
(4) H-4号住居址	21
(5) H-5号住居址	23
(6) H-6号住居址	25
(7) H-7号住居址	28
(8) H-8号住居址	30
(9) H-9号住居址	32
(10) H-10号住居址	33
(11) H-11号住居址	35
(12) H-12号住居址	37
(13) H-13号住居址	38
(14) H-14号住居址	40
(15) H-15号住居址	43
(16) H-16号住居址	44
(17) H-17号住居址	47
(18) H-18号住居址	48
(19) H-19号住居址	50
(20) H-20号住居址	54
(21) H-21号住居址	57
(22) H-22号住居址	61
(23) H-23号住居址	63
(24) H-24号住居址	67
(25) H-25号住居址	70
(26) H-26号住居址	72
(27) H-27号住居址	77
(28) H-28号住居址	78

(29) H-29号住居址·····81	(61) H-61号住居址·····165
(30) H-30号住居址·····84	(62) H-62号住居址·····173
(31) H-31号住居址·····86	(63) H-63号住居址·····175
(32) H-32号住居址·····87	(64) H-64号住居址·····180
(33) H-33号住居址·····90	(65) H-65号住居址·····182
(34) H-34号住居址·····93	(66) H-66号住居址·····184
(35) H-35号住居址·····94	(67) H-67号住居址·····189
(36) H-36号住居址·····94	(68) H-68号住居址·····193
(37) H-37号住居址·····96	(69) H-69号住居址·····195
(38) H-38号住居址·····99	(70) H-70号住居址·····198
(39) H-39号住居址·····102	(71) H-71号住居址·····200
(40) H-40号住居址·····104	(72) H-72号住居址·····201
(41) H-41号住居址·····105	(73)·(74) H-73·74号住居址·····204
(42) H-42号住居址·····110	(75) H-75号住居址·····208
(43) H-43号住居址·····113	(76) H-76号住居址·····212
(44) H-44号住居址·····114	(77) H-77号住居址·····214
(45) H-45号住居址·····118	(78) H-78号住居址·····219
(46) H-46号住居址·····121	(79) H-79号住居址·····220
(47) H-47号住居址·····125	(80) H-80号住居址·····224
(48) H-48号住居址·····127	(81) H-81号住居址·····227
(49) H-49号住居址·····132	(82) H-82号住居址·····231
(50) H-50号住居址·····134	(83) H-83号住居址·····232
(51) H-51号住居址·····135	(84) H-84号住居址·····234
(52) H-52号住居址·····136	(85) H-85号住居址·····239
(53) H-53号住居址·····140	(86) H-86号住居址·····240
(54) H-54号住居址·····143	(87) H-87号住居址·····243
(55) H-55号住居址·····148	(88) H-88号住居址·····247
(56) H-56号住居址·····153	(89) H-89号住居址·····249
(57) H-57号住居址·····154	(90) H-90号住居址·····252
(58) H-58号住居址·····157	(91) H-91号住居址·····253
(59) H-59号住居址·····160	(92) H-92号住居址·····255
(60) H-60号住居址·····162	(93) H-93号住居址·····257

(94) H-94号住居址	259	(106) H-106号住居址	284
(95) H-95号住居址	260	(107) H-107号住居址	285
(96) H-96号住居址	261	(108) H-108号住居址	288
(97) H-97号住居址	262	(109) H-109号住居址	294
(98) H-98号住居址	265	(110) H-110号住居址	296
(99) H-99号住居址	268	(111) H-111号住居址	298
(100) H-100号住居址	271	(112) H-112号住居址	302
(101) H-101号住居址	272	(113) H-113号住居址	305
(102) H-102号住居址	275	(114) H-114号住居址	309
(103) H-103号住居址	277	(115) H-115号住居址	311
(104) H-104号住居址	280	(116) H-116号住居址	313
(105) H-105号住居址	282	(117) H-117号住居址	314
2 掘立柱建物址	317		
(1) F-1号掘立柱建物址	317	(20) F-20号掘立柱建物址	334
(2) F-2号掘立柱建物址	317	(21) F-21号掘立柱建物址	336
(3) F-3号掘立柱建物址	318	(22) F-22号掘立柱建物址	336
(4) F-4号掘立柱建物址	319	(23) F-23号掘立柱建物址	337
(5) F-5号掘立柱建物址	319	(24) F-24号掘立柱建物址	338
(6) F-6号掘立柱建物址	320	(25) F-25号掘立柱建物址	339
(7) F-7号掘立柱建物址	321	(26) F-26号掘立柱建物址	340
(8) F-8号掘立柱建物址	322	(27) F-27号掘立柱建物址	340
(9) F-9号掘立柱建物址	323	(28) F-28号掘立柱建物址	341
(10) F-10号掘立柱建物址	323	(29) F-29号掘立柱建物址	342
(11) F-11号掘立柱建物址	324	(30) F-30号掘立柱建物址	343
(12) F-12号掘立柱建物址	325	(31) F-31号掘立柱建物址	343
(13) F-13号掘立柱建物址	325	(32) F-32号掘立柱建物址	344
(14) F-14号掘立柱建物址	326	(33) F-33号掘立柱建物址	346
(15) F-15号掘立柱建物址	327	(34) F-34号掘立柱建物址	346
(16) F-16号掘立柱建物址	328	(35) F-35号掘立柱建物址	347
(17) F-17号掘立柱建物址	329	(36) F-36号掘立柱建物址	348
(18) F-18号掘立柱建物址	331	(37) F-37号掘立柱建物址	351
(19) F-19号掘立柱建物址	332	(38) F-38号掘立柱建物址	352

(39) F-39号掘立柱建物址	352	(64) F-64号掘立柱建物址	377
(40) F-40号掘立柱建物址	353	(65) F-65号掘立柱建物址	378
(41) F-41号掘立柱建物址	354	(66) F-66号掘立柱建物址	378
(42) F-42号掘立柱建物址	354	(67) F-67号掘立柱建物址	379
(43) F-43号掘立柱建物址	355	(68) F-68号掘立柱建物址	380
(44) F-44号掘立柱建物址	356	(69) F-69号掘立柱建物址	381
(45) F-45号掘立柱建物址	357	(70) F-70号掘立柱建物址	381
(46) F-46号掘立柱建物址	358	(71) F-71号掘立柱建物址	382
(47) F-47号掘立柱建物址	359	(72) F-72号掘立柱建物址	382
(48) F-48号掘立柱建物址	361	(73) F-73号掘立柱建物址	384
(49) F-49号掘立柱建物址	362	(74) F-74号掘立柱建物址	385
(50) F-50号掘立柱建物址	364	(75) F-75号掘立柱建物址	386
(51) F-51号掘立柱建物址	364	(76) F-76号掘立柱建物址	386
(52) F-52号掘立柱建物址	365	(77) F-77号掘立柱建物址	388
(53) F-53号掘立柱建物址	366	(78) F-78号掘立柱建物址	388
(54) F-54号掘立柱建物址	368	(79) F-79号掘立柱建物址	389
(55) F-55号掘立柱建物址	369	(85) F-80号掘立柱建物址	389
(56) F-56号掘立柱建物址	370	(81) F-81号掘立柱建物址	390
(57) F-57号掘立柱建物址	370	(82) F-82号掘立柱建物址	390
(58) F-58号掘立柱建物址	372	(83) F-83号掘立柱建物址	391
(59) F-59号掘立柱建物址	373	(84) F-84号掘立柱建物址	391
(60) F-60号掘立柱建物址	374	(85) F-85号掘立柱建物址	391
(61) F-61号掘立柱建物址	375	(86) F-86号掘立柱建物址	392
(62) F-62号掘立柱建物址	375	(87) F-87号掘立柱建物址	392
(63) F-63号掘立柱建物址	377		
3 土 壙	399		
(1) D-1号土壙	399	(5) 第I区ソ-41グリッドの土壙群	402
(2) D-2号土壙	400	(6) 第II区シ・ス-23・24	
(3) D-3号土壙	400	25グリッドの土壙群	403
(4) 第I区シ-41・42グリッドの土壙群	402	(7) D-52号土壙	403
4 溝状遺構	407		
(1) M-1号溝状遺構	407		



5	表面採集遺物	408
V	総括	411
1	はじめに	411
2	前田遺跡における古墳時代中・後期の土器様相	411
	(1) 古墳時代中期(前田遺跡第I期)	411
	(2) 古墳時代中期末(前田遺跡第II期)	417
	(3) 古墳時代後期中葉(前田遺跡第III期)	421
3	前田遺跡における奈良・平安時代の土器様相	423
	(1) 須恵器坏について	423
	(2) 須恵器高台付坏	432
	(3) 須恵器長頸瓶	434
	(4) 須恵器蓋	434
	(5) 須恵器円面硯	435
	(6) 須恵器その他の器種	436
	(7) 土師器坏	437
	(8) 土師器長胴甕	437
	(9) 土師器小形球胴甕	440
	(10) 土師器坑	440
	(11) 土師器その他の器種	441
	(12) 奈良・平安時代の土器様相とその編年的予察	442
	(13) 畿内糸暗文を有する土器について	446
4	奈良・平安時代の石器・鉄器について	448
	(1) 石鏃	448
	(2) 紡錘車	448
	(3) 鉄器	450
5	前田遺跡における遺構および集落の様相	452
	(1) 竪穴住居址	452
	(2) 掘立柱建物址	472
	(3) 前田遺跡における集落様相	482
	(4) 奈良・平安時代における住居廃絶時のカマド破壊について	497
6	前田遺跡における古代集落の性格とその歴史的背景	499
	(1) 古墳時代中期	499

(2) 古墳時代後期	500
(3) 奈良・平安時代	501
引用・参考文献	505
付 編 1 前田遺跡出土材の樹種同定	
付 編 2 前田遺跡の初期須恵器について	
付 編 3 前田遺跡出土土器の蛍光X線分析	
図 版	
後 記	

## 挿 図 目 次

第1図 前田遺跡発掘調査対象区	1	第28図 H-10号住居址実測図	34
第2図 発掘区の設定と拡張区	5・6	第29図 H-10号住居址出土遺物	34
第3図 御代田町地形地質図	8	第30図 H-11号住居址実測図	35
第4図 前田遺跡と周辺の遺跡分布	10	第31図 H-11号住居址カマド実測図	36
第5図 H-1号住居址実測図	15	第32図 H-11号住居址出土遺物	37
第6図 H-1号住居址カマド実測図	16	第33図 H-12号住居址実測図	38
第7図 H-1号住居址出土遺物	17	第34図 H-13号住居址実測図	38
第8図 H-2号住居址実測図	18	第35図 H-13号住居址カマド実測図	39
第9図 H-2号住居址出土遺物	18	第36図 H-13号住居址出土遺物	39
第10図 H-3号住居址実測図	19	第37図 H-14号住居址実測図	41
第11図 H-3号住居址カマド実測図	20	第38図 H-14号住居址カマド実測図	41
第12図 H-3号住居址出土遺物	20	第39図 H-14号住居址出土遺物	42
第13図 H-4号住居址実測図	21	第40図 H-14号住居址出土遺物	42
第14図 H-4号住居址カマド実測図	21	第41図 H-15号住居址実測図	43
第15図 H-4号住居址出土遺物	22	第42図 H-15号住居址出土遺物	43
第16図 H-5号住居址実測図	23	第43図 H-16号住居址実測図	44
第17図 H-5号住居址出土遺物	24	第44図 H-16号住居址カマド実測図	44
第18図 H-6号住居址実測図	25	第45図 H-16号住居址出土遺物	45
第19図 H-6号住居址カマド実測図	26	第46図 H-16号住居址出土遺物	46
第20図 H-6号住居址出土遺物	27	第47図 H-17号住居址実測図	47
第21図 H-7号住居址実測図	28	第48図 H-17号住居址出土遺物	48
第22図 H-7号住居址出土遺物	29	第49図 H-18号住居址カマド実測図	48
第23図 H-8号住居址実測図	31	第50図 H-18号住居址実測図	49
第24図 H-8号住居址出土遺物	31	第51図 H-18号住居址出土遺物	49
第25図 H-9号住居址実測図	32	第52図 H-19号住居址実測図	50
第26図 H-9号住居址カマド実測図	32	第53図 H-19号住居址カマド実測図	51
第27図 H-9号住居址出土遺物	32	第54図 H-19号住居址出土遺物	52

第55図	H-19号住居址出土遺物	53	第96図	H-31号住居址出土遺物	87
第56図	H-20号住居址実測図	54	第97図	H-32号住居址実測図	88
第57図	H-20号住居址カマド実測図	54	第98図	H-32号住居址カマド実測図	88
第58図	H-20号住居址出土遺物	55	第99図	H-32号住居址出土遺物	89
第59図	H-20号住居址出土遺物	56	第100図	H-33号住居址実測図	90
第60図	H-21号住居址実測図	58	第101図	H-33号住居址カマド実測図	90
第61図	H-21号住居址カマド実測図	58	第102図	H-33号住居址出土遺物	91
第62図	H-21号住居址出土遺物実測図	59	第103図	H-34号住居址実測図	93
第63図	H-21号住居址出土遺物実測図	60	第104図	H-35号住居址実測図	94
第64図	H-22号住居址実測図	61	第105図	H-36号住居址実測図	94
第65図	H-22号住居址カマド実測図	62	第106図	H-36号住居址カマド実測図	95
第66図	H-22号住居址出土遺物	62	第107図	H-36号住居址出土遺物	95
第67図	H-23号住居址カマド実測図	63	第108図	H-37号住居址実測図	96
第68図	H-23号住居址実測図	64	第109図	H-37号住居址カマド実測図	97
第69図	H-23号住居址出土遺物	65	第110図	H-37号住居址出土遺物	98
第70図	H-23号住居址出土遺物	66	第111図	H-38号住居址実測図	100
第71図	H-24号住居址実測図	67	第112図	H-38号住居址カマド実測図	101
第72図	H-24号住居址カマド実測図	67	第113図	H-38号住居址出土遺物	101
第73図	H-24号住居址出土遺物	68	第114図	H-39号住居址実測図	102
第74図	H-24号住居址出土遺物	69	第115図	H-39号住居址カマド実測図	103
第75図	H-25号住居址実測図	70	第116図	H-37号住居址出土遺物	103
第76図	H-25号住居址カマド実測図	71	第117図	H-40号住居址実測図	104
第77図	H-25号住居址出土遺物	71	第118図	H-40号住居址カマド実測図	104
第78図	H-25号住居址出土遺物	72	第119図	H-40号住居址出土遺物	105
第79図	H-26号住居址実測図	73	第120図	H-41号住居址実測図	106
第80図	H-26号住居址カマド実測図	73	第121図	H-41号住居址出土遺物	107
第81図	H-26号住居址出土遺物	74	第122図	H-41号住居址カマド実測図	108
第82図	H-26号住居址出土遺物	75	第123図	H-41号住居址出土遺物	108
第83図	H-26号住居址出土遺物	76	第124図	H-42号住居址実測図	110
第84図	H-27号住居址実測図	77	第125図	H-42号住居址カマド実測図	110
第85図	H-27号住居址出土遺物	77	第126図	H-42号住居址出土遺物	111
第86図	H-28号住居址カマド実測図	78	第127図	H-43号住居址実測図	112
第87図	H-28号住居址実測図	79	第128図	H-43号住居址カマド実測図	113
第88図	H-28号住居址出土遺物	80	第129図	H-43号住居址出土遺物	113
第89図	H-28号住居址出土遺物	81	第130図	H-44号住居址実測図	115
第90図	H-29号住居址実測図	82	第131図	H-44号住居址カマド実測図	116
第91図	H-29号住居址出土遺物	83	第132図	H-44号住居址出土遺物	117
第92図	H-30号住居址実測図	84	第133図	H-45号住居址実測図	119
第93図	H-30号住居址カマド実測図	85	第134図	H-45号住居址カマド実測図	120
第94図	H-30号住居址出土遺物	85	第135図	H-45号住居址出土遺物	120
第95図	H-31号住居址実測図	86	第136図	H-46号住居址カマド実測図	121

第137図	H-46号住居址実測図	122	第178図	H-59号住居址実測図	161
第138図	H-46号住居址出土遺物	123	第179図	H-59号住居址出土遺物	161
第139図	H-47号住居址実測図	125	第180図	H-60号住居址実測図	163
第140図	H-47号住居址カマド実測図	125	第181図	H-60号住居址出土遺物	164
第141図	H-47号住居址出土遺物	126	第182図	H-60号住居址出土遺物	165
第142図	H-48号住居址実測図	127	第183図	H-61号住居址実測図	167
第143図	H-48号住居址カマド実測図	128	第184図	H-61号住居址炉	168
第144図	H-48号住居址出土遺物	129	第185図	H-61号住居址出土遺物	169
第145図	H-48号住居址出土遺物	130	第186図	H-61号住居址出土遺物	170
第146図	H-49号住居址実測図	132	第187図	H-61号住居址出土遺物	171
第147図	H-49号住居址カマド実測図	133	第188図	H-62号住居址実測図	173
第148図	H-49号住居址出土遺物	133	第189図	H-62号住居址炉	174
第149図	H-50号住居址実測図	135	第190図	H-62号住居址出土遺物	174
第150図	H-51号住居址実測図	135	第191図	H-63号住居址実測図	176
第151図	H-51号住居址出土遺物	136	第192図	H-63号住居址炉	176
第152図	H-52号住居址実測図	137	第193図	H-63号住居址カマド実測図	177
第153図	H-52号住居址カマド実測図	138	第194図	H-63号住居址出土遺物	178
第154図	H-52号住居址出土遺物	139	第195図	H-63号住居址出土遺物	179
第155図	H-53号住居址実測図	140	第196図	H-64号住居址実測図	180
第156図	H-53号住居址カマド実測図	141	第197図	H-64号住居址カマド実測図	181
第157図	H-53号住居址出土遺物	142	第198図	H-64号住居址出土遺物	181
第158図	H-53号住居址出土遺物	143	第199図	H-65号住居址実測図	183
第159図	H-54号住居址実測図	145	第200図	H-65号住居址炉	183
第160図	H-54号住居址カマド実測図	146	第201図	H-65号住居址出土遺物	183
第161図	H-54号住居址出土遺物	146	第202図	H-66号住居址実測図	185
第162図	H-54号住居址出土遺物	147	第203図	H-66号住居址カマド実測図	186
第163図	H-55号住居址実測図	149	第204図	H-66号住居址出土遺物	187
第164図	H-55号住居址カマド実測図	150	第205図	H-66号住居址出土遺物	188
第165図	H-55号住居址出土遺物	151	第206図	H-67号住居址実測図	189
第166図	H-55号住居址出土遺物	152	第207図	H-67号住居址カマド実測図	190
第167図	H-55号住居址出土遺物	153	第208図	H-67号住居址出土遺物	191
第168図	H-56号住居址実測図	154	第209図	H-67号住居址出土遺物	192
第169図	H-56号住居址カマド実測図	154	第210図	H-68号住居址実測図	193
第170図	H-56号住居址出土遺物	155	第211図	H-68号住居址出土遺物	194
第171図	H-57号住居址実測図	156	第212図	H-68号住居址出土遺物	195
第172図	H-57号住居址出土遺物	156	第213図	H-69号住居址実測図	196
第173図	H-57号住居址カマド実測図	157	第214図	H-69号住居址カマド実測図	197
第174図	H-58号住居址実測図	158	第215図	H-69号住居址出土遺物	197
第175図	H-58号住居址カマド実測図	159	第216図	H-70号住居址実測図	198
第176図	H-58号住居址出土遺物	159	第217図	H-70号住居址カマド実測図	199
第177図	H-59号住居址カマド実測図	160	第218図	H-70号住居址出土遺物	199

第219図	H-71号住居址実測図	200	第260図	H-85号住居址出土遺物	240
第220図	H-72号住居址実測図	202	第261図	H-86号住居址実測図	241
第221図	H-72号住居址カマド実測図	202	第262図	H-86号住居址カマド実測図	241
第222図	H-72号住居址出土遺物	203	第263図	H-86号住居址出土遺物	242
第223図	H-73・H-74号住居址実測図	205	第264図	H-87号住居址カマド実測図	243
第224図	H-73・H-74号住居址出土遺物	206	第265図	H-87号住居址実測図	244
第225図	H-75号住居址実測図	207	第266図	H-87号住居址出土遺物	245
第226図	H-75号住居址カマド実測図	208	第267図	H-87号住居址出土遺物	246
第227図	H-75号住居址出土遺物	209	第268図	H-88号住居址実測図	248
第228図	H-75号住居址出土遺物	210	第269図	H-88号住居址カマド実測図	248
第229図	H-76号住居址実測図	213	第270図	H-88号住居址出土遺物	248
第230図	H-76号住居址カマド実測図	213	第271図	H-89号住居址実測図	249
第231図	H-76号住居址出土遺物	214	第272図	H-89号住居址カマド実測図	250
第232図	H-76号住居址出土遺物	214	第273図	H-89号住居址出土遺物	251
第233図	H-77号住居址実測図	215	第274図	H-90号住居址実測図	253
第234図	H-77号住居址炉	215	第275図	H-91号住居址実測図	254
第235図	H-77号住居址出土遺物	216	第276図	H-91号住居址カマド実測図	254
第236図	H-77号住居址出土遺物	217	第277図	H-91号住居址出土遺物	254
第237図	H-78号住居址実測図	220	第278図	H-92号住居址実測図	255
第238図	H-78号住居址カマド実測図	220	第279図	H-92号住居址出土遺物	256
第239図	H-79号住居址実測図	221	第280図	H-93号住居址実測図	257
第240図	H-79号住居址カマド実測図	222	第281図	H-93号住居址カマド実測図	258
第241図	H-79号住居址出土遺物	222	第282図	H-93号住居址出土遺物	258
第242図	H-79号住居址出土遺物	223	第283図	H-94号住居址実測図	259
第243図	H-80号住居址実測図	224	第284図	H-94号住居址出土遺物	260
第244図	H-80号住居址実測図	225	第285図	H-95号住居址実測図	261
第245図	H-80号住居址出土遺物	226	第286図	H-96号住居址実測図	262
第246図	H-81号住居址実測図	227	第287図	H-97号住居址カマド実測図	262
第247図	H-81号住居址カマド実測図	228	第288図	H-97号住居址実測図	263
第248図	H-81号住居址出土遺物	229	第289図	H-97号住居址出土遺物	264
第249図	H-81号住居址出土遺物	230	第290図	H-98号住居址実測図	266
第250図	H-82号住居址実測図	231	第291図	H-98号住居址カマド実測図	266
第251図	H-82号住居址出土遺物	231	第292図	H-98号住居址出土遺物	267
第252図	H-83号住居址実測図	232	第293図	H-99号住居址カマド実測図	268
第253図	H-83号住居址カマド実測図	232	第294図	H-99号住居址実測図	269
第254図	H-83号住居址出土遺物	233	第295図	H-99号住居址出土遺物	270
第255図	H-84号住居址実測図	234	第296図	H-100号住居址実測図	272
第256図	H-84号住居址カマド実測図	235	第297図	H-100号住居址出土遺物	272
第257図	H-84号住居址出土遺物	236	第298図	H-101号住居址実測図	273
第258図	H-84号住居址出土遺物	237	第299図	H-101号住居址カマド実測図	273
第259図	H-85号住居址実測図	239	第300図	H-101号住居址出土遺物実測図	274

第301図	H-102号住居址実測図	275	第342図	H-115号住居址実測図	312
第302図	H-102号住居址カマド実測図	276	第343図	H-115号住居址カマド実測図	312
第303図	H-102号住居址出土遺物	276	第344図	H-115号住居址出土遺物	313
第304図	H-103号住居址実測図	277	第345図	H-116号住居址実測図	314
第305図	H-103号住居址カマド実測図	278	第346図	H-117号住居址実測図	314
第306図	H-103号住居址出土遺物	279	第347図	H-117号住居址カマド実測図	315
第307図	H-104号住居址実測図	280	第348図	H-117号住居址出土遺物	316
第308図	H-104号住居址カマド実測図	280	第349図	F-1号掘立柱建物址実測図	317
第309図	H-104号住居址出土遺物	281	第350図	F-2号掘立柱建物址実測図	318
第310図	H-105号住居址実測図	282	第351図	F-3号掘立柱建物址実測図	319
第311図	H-105号住居址カマド実測図	283	第352図	F-5号掘立柱建物址実測図	320
第312図	H-105号住居址出土遺物	283	第353図	F-6号掘立柱建物址実測図	321
第313図	H-106号住居址実測図	284	第354図	F-7号掘立柱建物址実測図	322
第314図	H-106号住居址カマド実測図	285	第355図	F-10号掘立柱建物址実測図	323
第315図	H-106号住居址出土遺物	285	第356図	F-11号掘立柱建物址実測図	324
第316図	H-107号住居址実測図	286	第357図	F-12号掘立柱建物址実測図	325
第317図	H-107号住居址カマド実測図	286	第358図	F-13号掘立柱建物址実測図	326
第318図	H-107号住居址出土遺物	287	第359図	F-14号掘立柱建物址実測図	327
第319図	H-108号住居址実測図	289	第360図	F-15号掘立柱建物址実測図	328
第320図	H-108号住居址カマド実測図	290	第361図	F-16号掘立柱建物址出土遺物	328
第321図	H-108号住居址出土遺物	291	第362図	F-16号掘立柱建物址実測図	329
第322図	H-108号住居址出土遺物	292	第363図	F-17号掘立柱建物址実測図	330
第323図	H-108号住居址出土遺物	292	第364図	F-17号掘立柱建物址出土遺物	330
第324図	H-109号住居址実測図	294	第365図	F-18号掘立柱建物址出土遺物	331
第325図	H-109号住居址出土遺物	294	第366図	F-18号掘立柱建物址実測図	332
第326図	H-109号住居址出土遺物	295	第367図	F-19号掘立柱建物址出土遺物	332
第327図	H-110号住居址実測図	296	第368図	F-19号掘立柱建物址実測図	333
第328図	H-110号住居址カマド実測図	297	第369図	F-20号掘立柱建物址実測図	333
第329図	H-110号住居址出土遺物	297	第370図	F-21号掘立柱建物址実測図	334
第330図	H-111号住居址カマド実測図	298	第371図	F-22号掘立柱建物址実測図	335
第331図	H-111号住居址実測図	299	第372図	F-23号掘立柱建物址実測図	336
第332図	H-111号住居址出土遺物	300	第373図	F-24号掘立柱建物址実測図	337
第333図	H-111号住居址出土遺物	301	第374図	F-25号掘立柱建物址実測図	338
第334図	H-112号住居址実測図	303	第375図	F-26号掘立柱建物址実測図	339
第335図	H-112号住居址出土遺物	304	第376図	F-27号掘立柱建物址実測図	340
第336図	H-113号住居址実測図	305	第377図	F-28号掘立柱建物址実測図	341
第337図	H-113号住居址カマド実測図	306	第378図	F-29号掘立柱建物址実測図	342
第338図	H-113号住居址出土遺物	307	第379図	F-30号掘立柱建物址実測図	343
第339図	H-113号住居址出土遺物	309	第380図	F-31号掘立柱建物址実測図	344
第340図	H-114号住居址実測図	310	第381図	F-32号掘立柱建物址実測図	345
第341図	H-114号住居址出土遺物	311	第382図	F-33号掘立柱建物址実測図	346

第383図	F-34号掘立柱建物址実測図	347	第424図	F-70号掘立柱建物址実測図	382
第384図	F-35号掘立柱建物址実測図	348	第425図	F-71号掘立柱建物址実測図	383
第385図	F-36号掘立柱建物址出土遺物	348	第426図	F-72号掘立柱建物址実測図	384
第386図	F-36号掘立柱建物址実測図	349	第427図	F-73号掘立柱建物址実測図	385
第387図	F-37号掘立柱建物址実測図	350	第428図	F-74号掘立柱建物址実測図	385
第388図	F-38号掘立柱建物址実測図	351	第429図	F-75号掘立柱建物址実測図	386
第389図	F-39号掘立柱建物址実測図	352	第430図	F-76号掘立柱建物址実測図	387
第390図	F-40号掘立柱建物址実測図	353	第431図	F-77号掘立柱建物址実測図	387
第391図	F-41号掘立柱建物址実測図	354	第432図	F-78号掘立柱建物址実測図	388
第392図	F-42号掘立柱建物址実測図	355	第433図	F-79号掘立柱建物址実測図	389
第393図	F-43号掘立柱建物址実測図	356	第434図	F-80号掘立柱建物址実測図	390
第394図	F-44号掘立柱建物址実測図	357	第435図	D-1号土壌実測図	399
第395図	F-45号掘立柱建物址実測図	358	第436図	D-4号土壌実測図	400
第396図	F-46号掘立柱建物址実測図	359	第437図	D-6, D-5号土壌実測図	401
第397図	F-47号掘立柱建物址実測図	360	第438図	D-30, D-31, D-32号土壌実測図	401
第398図	F-48号掘立柱建物址実測図	361	第439図	D-23・20, D-24, D-26・25, D-22・21号 土壌実測図	402
第399図	F-48号掘立柱建物址実測図	362	第440図	D-10, D-11, D-12, D-13号土壌実測図	404
第400図	F-49号掘立柱建物址実測図	363	第441図	D-15・14, D-16号土壌 D-52号土壌実測図 .....	405
第401図	F-49号掘立柱建物址出土遺物	363	第442図	土壌出土遺物	406
第402図	F-50号掘立柱建物址実測図	364	第443図	M-1号溝状遺構実測図	407
第403図	F-51号掘立柱建物址実測図	365	第444図	表面採集遺物	409
第404図	F-52号掘立柱建物址実測図	366	第445図	第I期土器分類図	413
第405図	F-53号掘立柱建物址出土遺物	366	第446図	第II期土器分類図	418
第406図	F-53号掘立柱建物址実測図	367	第447図	第III期土器分類図	422
第407図	F-54号掘立柱建物址実測図	368	第448図	須恵器坏形態A・B・Cの法量分化	428
第408図	F-55号掘立柱建物址実測図	369	第449図	須恵器坏分類図	428
第409図	F-56号掘立柱建物址実測図	370	第450図	須恵器高台付坏の形態	432
第410図	F-57号掘立柱建物址実測図	371	第451図	須恵器高台付坏形態A・B・Cの法量分化	432
第411図	F-58号掘立柱建物址実測図	371	第452図	須恵器蓋分類図	434
第412図	F-59号掘立柱建物址実測図	372	第453図	円面硯	435
第413図	F-60号掘立柱建物址実測図	373	第454図	須恵器その他の器種	436
第414図	F-61号掘立柱建物址実測図	374	第455図	土師器坏分類図	437
第415図	F-62号掘立柱建物址実測図	375	第456図	土師器長胴甕分類図	438
第416図	F-63号掘立柱建物址実測図	376	第457図	土師器長胴甕器形変遷模式図	439
第417図	F-64号掘立柱建物址実測図	376	第458図	小形甕分類図	440
第418図	F-65号掘立柱建物址実測図	377	第459図	土師器塊	440
第419図	F-66号掘立柱建物址実測図	378	第460図	土師器その他の器種	441
第420図	F-67号掘立柱建物址実測図	379	第461図	畿内采暗文を有する土器	447
第421図	F-68号掘立柱建物址実測図	380	第462図	奈良・平安時代の紡錘車	449
第422図	F-69号掘立柱建物址実測図	381			
第423図	F-70号掘立柱建物址出土遺物	381			

第463図	紡錘車最大径と重量のグラフ	450
第464図	奈良・平安時代の鉄器	451
第465図	竪穴住居址における支柱穴のあり方	453
第466図	各期毎の竪穴住居址形態別面積分布	464
第467図	奈良・平安時代時期別住居形態構成比	465
第468図	竪穴住居址の上屋構造の推定	467
第469図	奈良・平安時代時期別遺物分布図	470
第470図	奈良・平安時代竪穴住居址における機能空間の想定	471
第471図	掘立柱建物址の分類	474
第472図	掘立柱建物址形態別面積分布	475
第473図	一遍聖絵にみる掘立柱建物址 (佐久伴野市・歎喜光寺本)	477
第474図	墨書土器「倉」	478
第475図	第I期の集落	483
第476図	第II期の集落	484
第477図	第III期の集落	485

第478図	第IV期・第I区集落	486
第479図	第IV期・第II・III区集落	487
第480図	第V期・第I区集落	489
第481図	第V期・第II区集落	490
第482図	第VI期・第I区集落	491
第483図	第VI期・第II区集落	492
第484図	第VII期・第I区集落	494
第485図	第VII期・第II区集落	495
第486図	第VIII期の集落	496
第487図	前田遺跡の集落と低地(網点)	499

付 編

第1図	前田遺跡第I期集落と初期須恵器の分布
第2図	前田遺跡出土初期須恵器
第3図	佐久市舞台遺跡初期須恵器
第1図	前田遺跡蛍光区線分析対象遺物
第2図	前田遺跡出土土器の各因子の分布と他遺跡との対応

## 付 表 目 次

第1表	前田遺跡と周辺の遺跡地名表	11
第2表	H-1号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	16
第3表	H-2号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	18
第4表	H-3号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	20
第5表	H-4号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	22
第6表	H-5号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	24
第7表	H-6号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	26
第8表	H-6号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	27
第9表	H-7号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	29
第10表	H-8号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	31
第11表	H-9号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	33
第12表	H-10号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	34
第13表	H-11号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	37
第14表	H-11号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	37
第15表	H-13号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	40
第16表	H-14号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	42
第17表	H-14号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	42
第18表	H-15号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	43
第19表	H-16号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	46
第20表	H-16号住居址出土遺物一覧表〈金属器・石器〉	46

第21表	H-17号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	48
第22表	H-18号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	49
第23表	H-19号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	53
第24表	H-19号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	53
第25表	H-20号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	56
第26表	H-20号住居址出土遺物一覧表〈金属器・石器〉	57
第27表	H-21号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	60
第28表	H-21号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	60
第29表	H-22号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	62
第30表	H-23号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	66
第31表	H-23号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	66
第32表	H-24号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	69
第33表	H-24号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	70
第34表	H-25号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	72
第35表	H-25号住居址出土遺物一覧表〈金属器〉	72
第36表	H-26号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	75
第37表	H-26号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	76
第38表	H-27号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	78
第39表	H-28号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	80
第40表	H-28号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	81



第41表	H-29号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	82	第80表	H-59号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	162
第42表	H-29号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	82	第81表	H-60号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	165
第43表	H-30号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	85	第82表	H-60号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	166
第44表	H-30号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	86	第83表	H-61号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	171
第45表	H-31号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	87	第84表	H-61号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	172
第46表	H-32号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	89	第85表	H-62号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	175
第47表	H-33号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	92	第86表	H-63号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	177
第48表	H-36号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	96	第87表	H-63号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	179
第49表	H-37号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	99	第88表	H-64号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	182
第50表	H-37号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	99	第89表	H-65号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	184
第51表	H-38号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	101	第90表	H-66号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	188
第52表	H-39号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	103	第91表	H-66号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	189
第53表	H-40号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	105	第92表	H-67号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	192
第54表	H-41号住居址出土遺物一覽表〈金属器·石器〉	108	第93表	H-67号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	192
第55表	H-41号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	109	第94表	H-68号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	195
第56表	H-42号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	111	第95表	H-68号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	195
第57表	H-43号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	113	第96表	H-69号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	198
第58表	H-43号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	113	第97表	H-70号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	199
第59表	H-44号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	118	第98表	H-72号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	204
第60表	H-45号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	121	第99表	H-73·H-74号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	206
第61表	H-46号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	123	第100表	H-73·H-74号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	206
第62表	H-46号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	124	第101表	H-75号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	211
第63表	H-47号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	126	第102表	H-75号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	212
第64表	H-48号住居址出土遺物一覽表〈金属器·石器〉	128	第103表	H-76号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	214
第65表	H-48号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	131	第104表	H-76号住居址出土遺物一覽表〈金属器〉	214
第66表	H-49号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	134	第105表	H-77号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	218
第67表	H-51号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	136	第106表	H-77号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	219
第68表	H-52号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	138	第107表	H-79号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	223
第69表	H-53号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	143	第108表	H-79号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	223
第70表	H-53号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	144	第109表	H-80号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	226
第71表	H-54号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	148	第110表	H-81号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	230
第72表	H-54号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	148	第111表	H-81号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	230
第73表	H-55号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	152	第112表	H-82号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	231
第74表	H-55号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	153	第113表	H-83号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	233
第75表	H-56号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	155	第114表	H-83号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	234
第76表	H-57号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	157	第115表	H-84号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	238
第77表	H-58号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	160	第116表	H-84号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	239
第78表	H-58号住居址出土遺物一覽表〈石器〉	160	第117表	H-85号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	240
第79表	H-59号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	162	第118表	H-86号住居址出土遺物一覽表〈土器〉	243

第119表	H-87号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	247	第149表	H-113号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	308
第120表	H-88号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	249	第150表	H-114号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	311
第121表	H-89号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	252	第151表	H-115号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	313
第122表	H-91号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	255	第152表	H-117号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	316
第123表	H-92号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	256	第153表	F-16号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉	329
第124表	H-92号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	256	第154表	F-17号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉	331
第125表	H-93号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	258	第155表	F-18号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉	331
第126表	H-94号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	260	第156表	F-36号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉	349
第127表	H-94号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	260	第157表	F-48号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉	362
第128表	H-97号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	265	第158表	F-49号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉	363
第129表	H-98号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	268	第159表	F-53号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉	367
第130表	H-99号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	271	第160表	掘立柱建物址ピット一覧表	393~398
第131表	H-100号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	272	第161表	土壌出土遺物一覧表〈土器〉	406
第132表	H-101号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	274	第162表	表面採集遺物一覧表〈土器〉	408
第133表	H-102号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	276	第163表	表面採集遺物一覧表〈土製品・石器〉	408
第134表	H-103号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	278	第164表	須恵器坏底部調整手法概念表	423
第135表	H-104号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	281	第165表	須恵器坏底部調整数一覧表	424
第136表	H-104号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	281	第166表	須恵器坏底部調整事例一覧表(住居址毎)	426
第137表	H-105号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	284	第167表	須恵器高台付坏底部調整数一覧表	433
第138表	H-106号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	285	第168表	時期別出土器種・形態数一覧表	444
第139表	H-107号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	288	第169表	遺跡毎における鉄製農具出土数	451
第140表	H-108号住居址出土遺物一覧表〈金属器・石器〉	292	第170表	第I期竪穴住居址一覧表	454
第141表	H-108号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	293	第171表	第II期竪穴住居址一覧表	455
第142表	H-109号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	295	第172表	第III期竪穴住居址一覧表	455
第143表	H-109号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	295	第173表	第IV期竪穴住居址一覧表	456~457
第144表	H-110号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	298	第174表	第V期竪穴住居址一覧表	458~459
第145表	H-111号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	301	第175表	第VI期竪穴住居址一覧表	459~460
第146表	H-111号住居址出土遺物一覧表〈土製品〉	301	第176表	第VII期竪穴住居址一覧表	461~463
第147表	H-112号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	304	第177表	掘立柱建物址一覧表(時期・形態別)	481
第148表	H-112号住居址出土遺物一覧表	304			
			付 編		
			第1表	前田遺跡出土土器の分析値	

## 図 版 目 次

図版 一	前田遺跡付近の航空写真	図版 七	H-2号住居址・H-3号住居址
図版 二	第I区航空写真	図版 八	H-3号住居址・H-4号住居址
図版 三	第II・III区航空写真	図版 九	H-4号住居址・H-5号住居址
図版 四	第V区航空写真	図版 十	H-5号住居址・H-6号住居址
図版 五	第IV区航空写真・重機による表土剥ぎ	図版 十一	H-6号住居址・作業風景
図版 六	H-1号住居址	図版 十二	H-7号住居址

图版 十三	H-8号住居址	图版 五十三	H-51号住居址
图版 十四	H-9号住居址	图版 五十四	H-52号住居址
图版 十五	H-10号住居址·H-11号住居址	图版 五十五	H-53号住居址
图版 十六	H-11号住居址·H-12号住居址	图版 五十六	H-54号住居址
图版 十七	H-12号住居址·H-13号住居址	图版 五十七	H-55号住居址
图版 十八	H-13号住居址·H-14号住居址	图版 五十八	H-52·53·54·55号住居址, H-56号住居址
图版 十九	H-14号住居址·H-15号住居址	图版 五十九	H-56号住居址·H-57号住居址
图版 二十	H-15号住居址·H-16号住居址	图版 六十	H-57号住居址·H-58号住居址
图版 二十一	H-16号住居址·H-17号住居址	图版 六十一	H-58号住居址·H-12号住居址
图版 二十二	H-18号住居址	图版 六十二	H-59号住居址·H-60号住居址
图版 二十三	H-19号住居址	图版 六十三	H-61号住居址
图版 二十四	H-20号住居址	图版 六十四	H-62号住居址·H-63号住居址
图版 二十五	H-21号住居址	图版 六十五	H-63号住居址·H-64号住居址
图版 二十六	H-21号住居址·H-22号住居址·作業風景	图版 六十六	H-64号住居址·H-66号住居址
图版 二十七	H-22号住居址·H-23号住居址	图版 六十七	H-66号住居址·作業風景
图版 二十八	H-23号住居址·H-24号住居址	图版 六十八	H-67号住居址
图版 二十九	H-24号住居址·H-25号住居址	图版 六十九	H-67号住居址·H-68号住居址
图版 三十	H-25号住居址·H-26号住居址	图版 七十	H-69号住居址
图版 三十一	H-26号住居址·H-27号住居址	图版 七十一	H-70号住居址
图版 三十二	H-28号住居址	图版 七十二	H-71号住居址·H-72·90号住居址
图版 三十三	H-29号住居址·H-30号住居址	图版 七十三	H-72号住居址·H-73·74号住居址
图版 三十四	H-30号住居址·H-32号住居址	图版 七十四	H-75号住居址
图版 三十五	H-32号住居址·H-33号住居址	图版 七十五	H-76号住居址
图版 三十六	H-33号住居址	图版 七十六	H-77号住居址·H-78号住居址
图版 三十七	H-34号住居址·H-35号住居址	图版 七十七	H-78号住居址·H-79号住居址
图版 三十八	H-36号住居址	图版 七十八	H-79号住居址·H-80号住居址
图版 三十九	H-37号住居址	图版 七十九	H-80号住居址·H-81号住居址
图版 四十	H-38号住居址	图版 八十	H-81号住居址·H-82号住居址
图版 四十一	H-39号住居址	图版 八十一	H-82号住居址·H-83号住居址
图版 四十二	H-40号住居址	图版 八十二	H-83号住居址·H-84号住居址
图版 四十三	H-41号住居址	图版 八十三	H-84号住居址
图版 四十四	H-42号住居址	图版 八十四	H-85号住居址·H-86号住居址
图版 四十五	H-43号住居址	图版 八十五	H-86号住居址·H-87号住居址
图版 四十六	H-44号住居址	图版 八十六	H-87号住居址·H-88号住居址
图版 四十七	H-45号住居址	图版 八十七	H-88号住居址·H-89号住居址
图版 四十八	H-46号住居址	图版 八十八	H-89号住居址·H-91号住居址
图版 四十九	H-47号住居址	图版 八十九	H-91号住居址·H-92号住居址
图版 五十	H-48号住居址	图版 九十	H-93号住居址·H-94号住居址
图版 五十一	H-48号住居址·H-49号住居址	图版 九十一	H-95号住居址·H-96号住居址
图版 五十二	H-49号住居址·H-50号住居址	图版 九十二	H-97号住居址

图版 九十三	H-98号住居址			立柱建物址
图版 九十四	H-99号住居址	图版 百二十三	F-51号掘立柱建物址·F-54号掘立柱建物址	
图版 九十五	H-100号住居址·H-101号住居址	图版 百二十四	F-55号掘立柱建物址·F-58号掘立柱建物址	
图版 九十六	H-101号住居址·H-102号住居址	图版 百二十五	F-64号掘立柱建物址·F-65号掘立柱建物址	
图版 九十七	H-102号住居址·H-103号住居址	图版 百二十六	F-66号掘立柱建物址·F-68号掘立柱建物址	
图版 九十八	H-103号住居址·H-104号住居址	图版 百二十七	F-69号掘立柱建物址·F-70号掘立柱建物址	
图版 九十九	H-104号住居址·H-105号住居址	图版 百二十八	F-71号掘立柱建物址·F-72号掘立柱建物址	
图版 百	H-105号住居址·H-106号住居址	图版 百二十九	F-73号掘立柱建物址·F-74号掘立柱建物址	
图版 百一	H-106号住居址·H-107号住居址	图版 百三十	F-75号掘立柱建物址·F-76号掘立柱建物址	
图版 百二	H-107号住居址·H-108号住居址	图版 百三十一	F-77号掘立柱建物址·F-78号掘立柱建物址	
图版 百三	H-108号住居址·H-109号住居址	图版 百三十二	F-79号掘立柱建物址·F-80号掘立柱建物址	
图版 百四	H-110号住居址	图版 百三十三	D-1号土壙·D-4号土壙	
图版 百五	H-111号住居址	图版 百三十四	D-6号土壙·D-10土壙	
图版 百六	H-112号住居址·H-113号住居址	图版 百三十五	D-11号土壙·D-12号土壙	
图版 百七	H-113号住居址·H-114号住居址	图版 百三十六	D-13号土壙·D-14·15号土壙	
图版 百八	H-115号住居址	图版 百三十七	D-16号土壙·D-52号土壙	
图版 百九	H-116号住居址·H-117号住居址	图版 百三十八	D-5号土壙·M-1号溝状遺構	
图版 百十	H-117号住居址·作業風景	图版 百三十九	H-1·2·3·4号住居址出土遺物	
图版 百十一	F-1号掘立柱建物址·F-2号掘立柱建物址	图版 百四十	H-5·6号住居址出土遺物	
图版 百十二	F-3号掘立柱建物址·F-4号掘立柱建物址	图版 百四十一	H-7·8·9·10·11·13号住居址出土遺物	
图版 百十三	F-5号掘立柱建物址·F-9号掘立柱建物址	图版 百四十二	H-14·16·17·19·20号住居址出土遺物	
图版 百十四	F-10号掘立柱建物址·F-11号掘立柱建物址	图版 百四十三	H-20·21号住居址出土遺物	
图版 百十五	F-12号掘立柱建物址·F-13号掘立柱建物址	图版 百四十四	H-22·23·24号住居址出土遺物	
图版 百十六	F-14号掘立柱建物址·F-15号掘立柱建物址	图版 百四十五	H-24·25·26号住居址出土遺物	
图版 百十七	F-16号掘立柱建物址·F-17号掘立柱建物址	图版 百四十六	H-27·28·29·30·31·32号住居址出土遺物	
图版 百十八	F-18号掘立柱建物址·F-19号掘立柱建物址	图版 百四十七	H-33·36·37号住居址出土遺物	
图版 百十九	F-20号掘立柱建物址·F-21号掘立柱建物址	图版 百四十八	H-37·38·40·41号住居址出土遺物	
图版 百二十	F-22号掘立柱建物址·F-25号掘立柱建物址	图版 百四十九	H-41·42·44号住居址出土遺物	
图版 百二十一	F-27号掘立柱建物址·F-30·31·33号掘立柱建物址			
图版 百二十二	F-32·36号掘立柱建物址·F-39号掘			

図版 百五十	H-45・46・47号住居址出土遺物	物
図版 百五十一	H-48号住居址出土遺物	図版 百六十九 H-97・98号住居址出土遺物
図版 百五十二	H-48・49・51・52・53号住居址出土遺物	図版 百七十 H-99・100号住居址出土遺物
図版 百五十三	H-53・54号住居址出土遺物	図版 百七十一 H-101・103・104・105・107号住居址出土遺物
図版 百五十四	H-54・55・57・58・59号住居址出土遺物	図版 百七十二 H-108・111・112・113号住居址出土遺物
図版 百五十五	H-60号住居址出土遺物	図版 百七十三 H-113・114・115号住居址出土遺物
図版 百五十六	H-61号住居址出土遺物	図版 百七十四 H-117号住居址・F-48・49号掘立柱建物 址D-1・52号土壌・表採遺物
図版 百五十七	H-61・62号住居址出土遺物	図版 百七十五 石鏃・石製品・土製品・石器
図版 百五十八	H-63・64号住居址出土遺物	図版 百七十六 石器・その他
図版 百五十九	H-65・66号住居址出土遺物	図版 百七十七 敲石
図版 百六十	H-67・68・69・70号住居址出土遺物	図版 百七十八 石錘・磨石
図版 百六十一	H-72・73・74号住居址出土遺物	図版 百七十九 砥石・台石
図版 百六十二	H-75号住居址出土遺物	図版 百八十 台石・石鉢・石臼
図版 百六十三	H-75・76・77号住居址出土遺物	図版 百八十一 鉄器・遺物整理作業
図版 百六十四	H-77・79・80号住居址出土遺物	図版 百八十二 調整各種
図版 百六十五	H-80・81・83・84号住居址出土遺物	図版 百八十三 //
図版 百六十六	H-84号住居址出土遺物	図版 百八十四 //
図版 百六十七	H-85・86・87号住居址出土遺物	図版 百八十五 材の顕微鏡写真(H-32・Ⅳ区主柱)
図版 百六十八	H-87・88・89・92・93号住居址出土遺物	

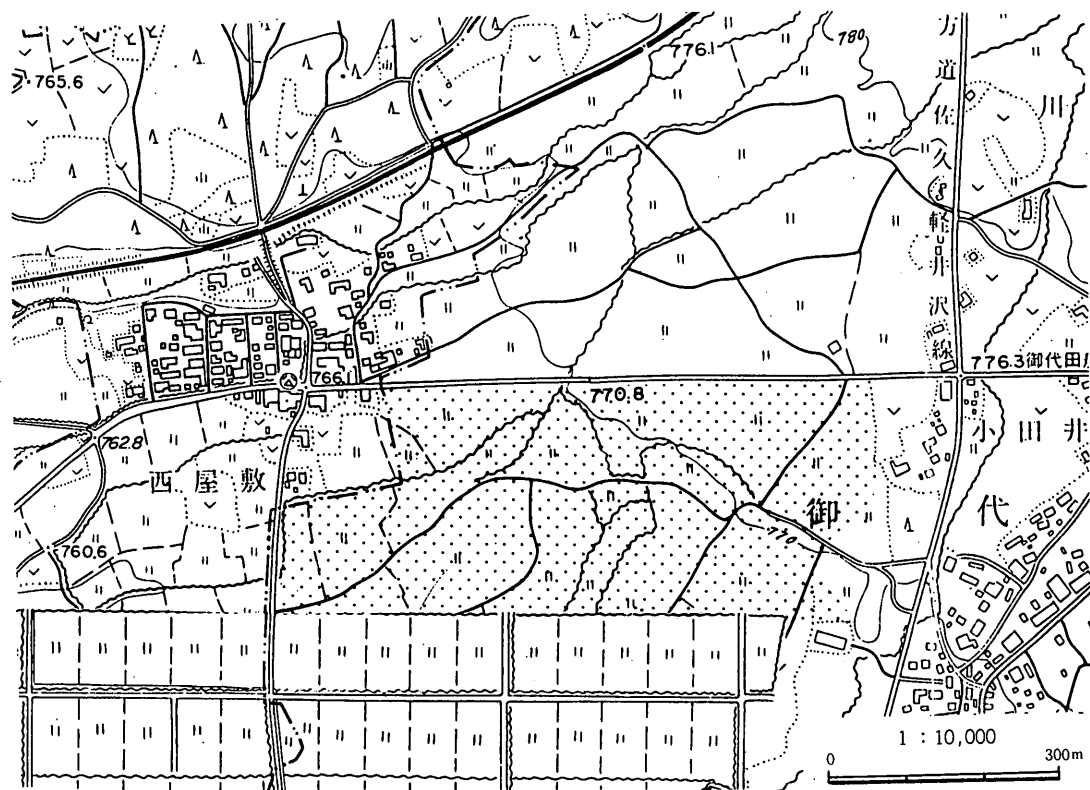
# I 発掘調査の概要

## 1 調査に至る動機

農業の近代化に即応するため、小田井・御影地区において、長野県営圃場整備事業が実施される運びとなった。しかし一方、この地区において埋蔵文化財の包蔵も確認され、その破壊が余儀なくされた。鑄師屋遺跡群がそれである。その保護に関して、事業主体である東信土地改良事務所と長野県教育委員会、当教育委員会の三者によって協議が重ねられ、当教育委員会が主体となって発掘調査を実施し記録保存を行なうことで話がまとまった。

これを受けて、昭和59年度には鑄師屋遺跡群野火付遺跡の発掘調査が実施され、多大なる成果をおさめた(御代田町教育委員会 1985)。翌昭和60年度には、野火付遺跡の北に隣接する本前田遺跡が保護の対象となった。

前田遺跡の保護にあたっては、野火付遺跡の調査成果に鑑み、その重要性を当教育委員会は主



第1図 前田遺跡発掘調査対象区(網点)

張し続けてきた。殊に予算的な折り合いをつけるべく幾度か関連当局の話し合いが持たれたが、結局二年度継続事業として分割することで双方が合意し、予算の膨大さが弛緩され、期間的な余裕をもたせることができた。

昭和60年の年度当初には、東信土地改良事務所と当教育委員会との委託契約が締結され、同年は発掘調査と遺跡整理が、翌昭和61年には遺物整理が実施され、本書刊行の運びとなった。

## 2 発掘調査の概要

- 1 遺跡名 鋳師屋遺跡群 前田遺跡
- 2 所在地 長野県北佐久郡御代田町大字御代田 字前田原・原田・竹の花
- 3 発掘期間 昭和60年4月15日 ～ 昭和60年9月30日 (昭和60年度)  
整理期間 昭和60年10月14日 ～ 昭和61年3月31日 (昭和60年度)  
昭和61年4月4日 ～ 昭和62年3月31日 (昭和61年度)
- 4 発掘理由 昭和60年度小田井・御影地区県営圃場整理事業に伴い、鋳師屋遺跡群前田遺跡の破壊が予想されるため、緊急に発掘調査を実施し記録保存を図る。
- 5 発掘方針 広大な調査対象区について、集落全体の検出に努める。
- 6 費用負担 調査費用総額のうち、72.5%を原因者である農政部局（東信土地改良事務所・北佐久地方事務所）が負担し、残りの27.5%（農家負担分）は文化財補助事業として文化財保護部局が負担した（国庫50%、県費15%、町費35%）。
- 7 事務局 教育次長 市川誠，社会・同和教育係長 萩原茂，社会・同和教育係 内堀篤志、同係 堤 隆
- 8 調査団  
顧問 古越寅男（前御代田町長）、古越顕助（現御代田町長）、原田正夫（教育長）  
参与 ㈹ 大井豊、桜井為吉、田村泉、内山俊雄、柳沢恒三郎、小林五郎、山本宣夫、堀籠源、大井源寿（御代田町文化財審議委員）  
団長 由井茂也（佐久考古学会会長）  
副団長 尾台卓一（御代田町文化財審議委員長）  
担当者 堤 隆（御代田町教育委員会）  
調査員 白倉盛男、井上行雄、大井今朝太（佐久考古学会）、鳥居亮、綿貫俊一  
協力者 小林美智明、太田和子、伴野有希子、今井みさ子、尾台春子、古越敏彦、田辺光三、重田文枝、柳沢トメヨ、宮沢節子、中島靖幸、小宮山徳男、諸星博之、須江茂和、

早川聖、木内政彦、浅沼陽二、荻原茂之、中山春彦、中山たのし、小井土みつき、武井豊子、角田すい、並木ことみ、遠藤しずか、桜井すず子、荻原ふさ、岡田せい、内堀さち子、内堀あつ子、竹内安子、高山玲子、内堀なお、六川泉、尾台久美子(一般)、宮沢陽子、篠原智恵子、柳沢晃、土屋正巳、山崎英寿、鈴木秀勝、荻原夏夫、大井さゆり、市村さよ子、山田正文、中里牧夫(高校生)、関邦吉、五加春三、仲沢芳夫、角田修、岡村政信、吉沢重光、坪川敦子(国立小諸療養所)、新田浩三(千葉県文化財センター)

### 3 発掘区の設定と遺構の検出

圃場整備の施工面積は、おおよそ25万平方メートルにもおよぶ広大なものであった。この広大な工区を把握するため、国家座標第Ⅷ系を用い、25m四方のグリッドを設定した(第2図)。したがってグリッドの一方の軸(X軸)は、真北を指すようになっている。

グリッドの名称は、鋳師屋遺跡群全体を統一してカバーできるように冠したので、本遺跡におけるグリッドの呼称は、中途から始まることとなる。

調査は集落全体を検出するという発掘方針ののち、重機による試掘トレンチにより遺跡の範囲と地形を見きわめるところから始めた。検出された遺構のまとまりについては、自然地形によって画されることを目安とし、Ⅰ区からⅤ区の5つの地区に区分した。

なお、Ⅴ区の大部分は、佐久市の行政区域(アミ線以西)となっており、本調査と併行して、佐久市教育委員会によって調査がなされている。この地区は、現在では行政管轄が異なるとはいえ、当時にしてみれば同一の集落であり、本来なら双方が一体的に報告されなければならないのであろう。佐久市分の前田遺跡の調査成果については、本報告と併行して明らかにされる予定であるので、その成果の公表をまって、改めて両者を総体的に論ずることになろう。

さて、調査は、第Ⅰ区、第Ⅱ区、第Ⅲ区、第Ⅳ区、第Ⅴ区の順で進行した。各区の面積と検出された遺構は以下のとおりである。

第Ⅰ区	面積11,250㎡	竪穴住居址57軒	掘立柱建物址63棟	土壙29基	
第Ⅱ区	面積7,250㎡	竪穴住居址40軒	掘立柱建物址9棟	土壙19基	
第Ⅲ区	面積1,125㎡	竪穴住居址5軒	掘立柱建物址2棟		
第Ⅳ区	面積1,500㎡	竪穴住居址6軒	掘立柱建物址2棟		
第Ⅴ区	面積2,875㎡	竪穴住居址9軒	掘立柱建物址11棟	土壙4基	溝1基
全区総数	面積24,000㎡	竪穴住居址117軒	掘立柱建物址87棟	土壙52基	溝1基



## I 発掘調査の概要

佐久市分 面積6,250㎡ 竪穴住居址28軒 掘立柱建物址32棟 土壇ナシ 溝3基  
井戸址2基 特殊遺構1基

なお、遺構の名称については、全区について通し番号とし、なるべく各地区毎に番号がとぶことのないよう心掛けたが、一部には数字のとぶものもある。また、御代田町分と佐久市分については、各々が名称を冠し遺構名が重複するので注意されたい。

## 4 発掘調査経過

昭和60年4月15日 発掘調査準備開始。

4月24日 重機を導入しての遺跡範囲確認開始。

4月25日 テント設営、器材搬入。

4月30日 重機による第Ⅰ区拡張開始。併行して第Ⅰ区の調査を行う。

6月 第Ⅰ区において住居址57軒を確認。

6月 重機による第Ⅱ区拡張開始。

7月17日 第Ⅱ区において調査開始。住居址40軒を確認。

7月 重機による第Ⅲ区拡張開始。

8月 第Ⅰ区～第Ⅴ区を総計し、住居址117軒、掘立柱建物址87棟を確認。

9月 第Ⅳ区・第Ⅴ区調査継続。

9月30日 発掘調査終了。

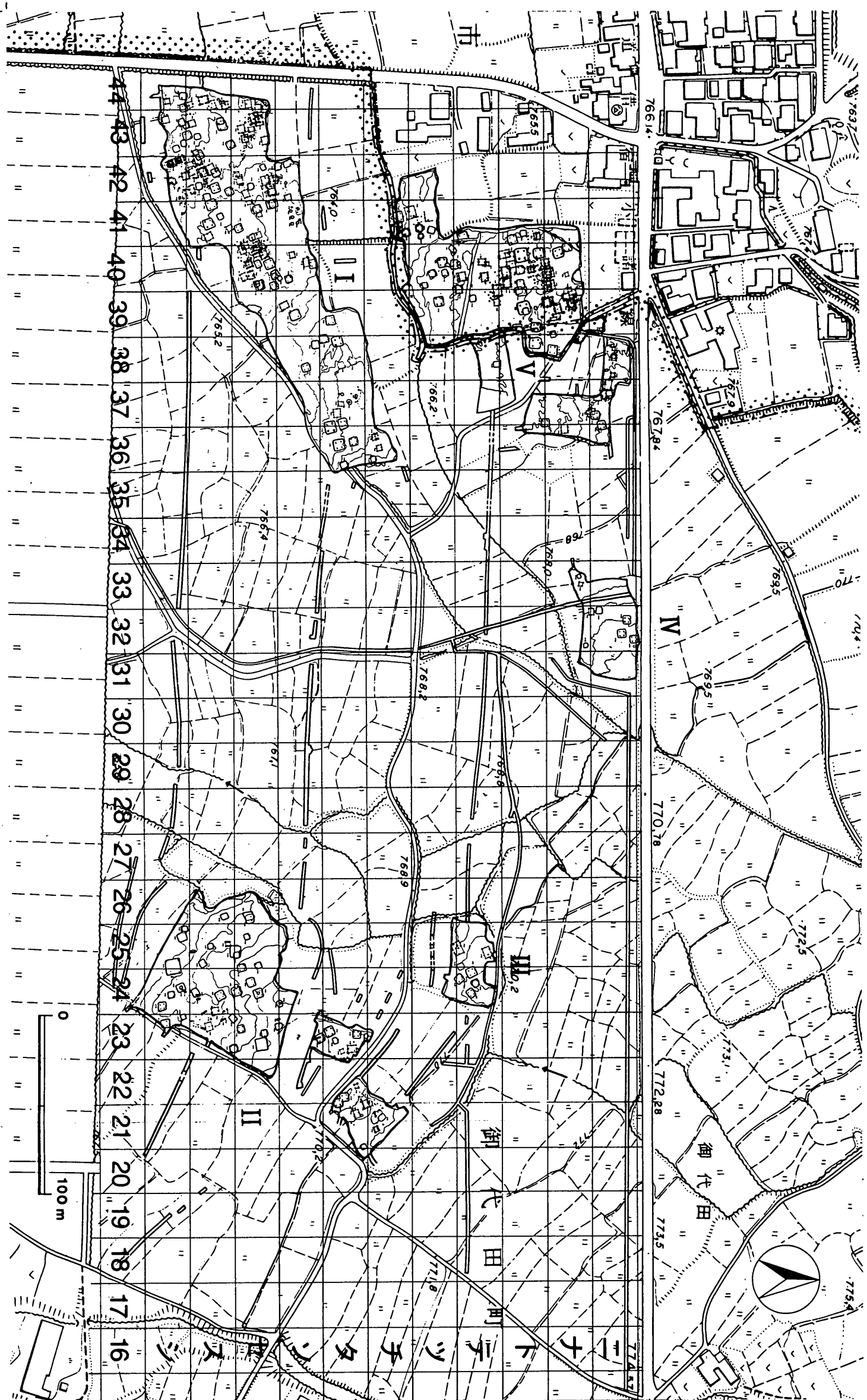
10月14日 遺物整理開始。

昭和61年3月31日 昭和60年度 遺物整理終了。

4月4日 昭和61年度 遺物整理開始。

昭和62年1月 発掘調査報告書入稿。

3月31日 昭和61年度 遺物整理完了。発掘調査報告書刊行。



第2図 発掘区の設定と拡張区



## II 遺跡の環境

### 1 前田の風土

鑄師屋遺跡群前田遺跡は、浅間山南麓の緩傾斜面の最末端部に位置し、標高765~770mを測る。

前田遺跡の背後の聳える浅間山は、現在も活発に活動を続けている三重式コニーデ火山で、標高2,560mを測る。御代田町の地形・地質の基盤は、この浅間山の影響を大きく受けて形成されたものである(第3図)。その火口から同心円状に、標高2,000m付近までは釜山噴出物が、1,200m付近までは黒斑溶岩が覆っている。

標高1,200mを境として、それ以下にあっては、火山灰砂軽石流と追分砂流が広範囲に及んでいる。その軽石流地域には、永年にわたる浸蝕によって、佐久地方に特有な「田切地形」が脈状に形成されている。前田遺跡一帯は、この軽石流の堆積地帯にあたる。

前田遺跡の東側には、浅間の中腹標高1,500mに端を発する濁川が南流しており、また、その北側には繰矢川が西流している。

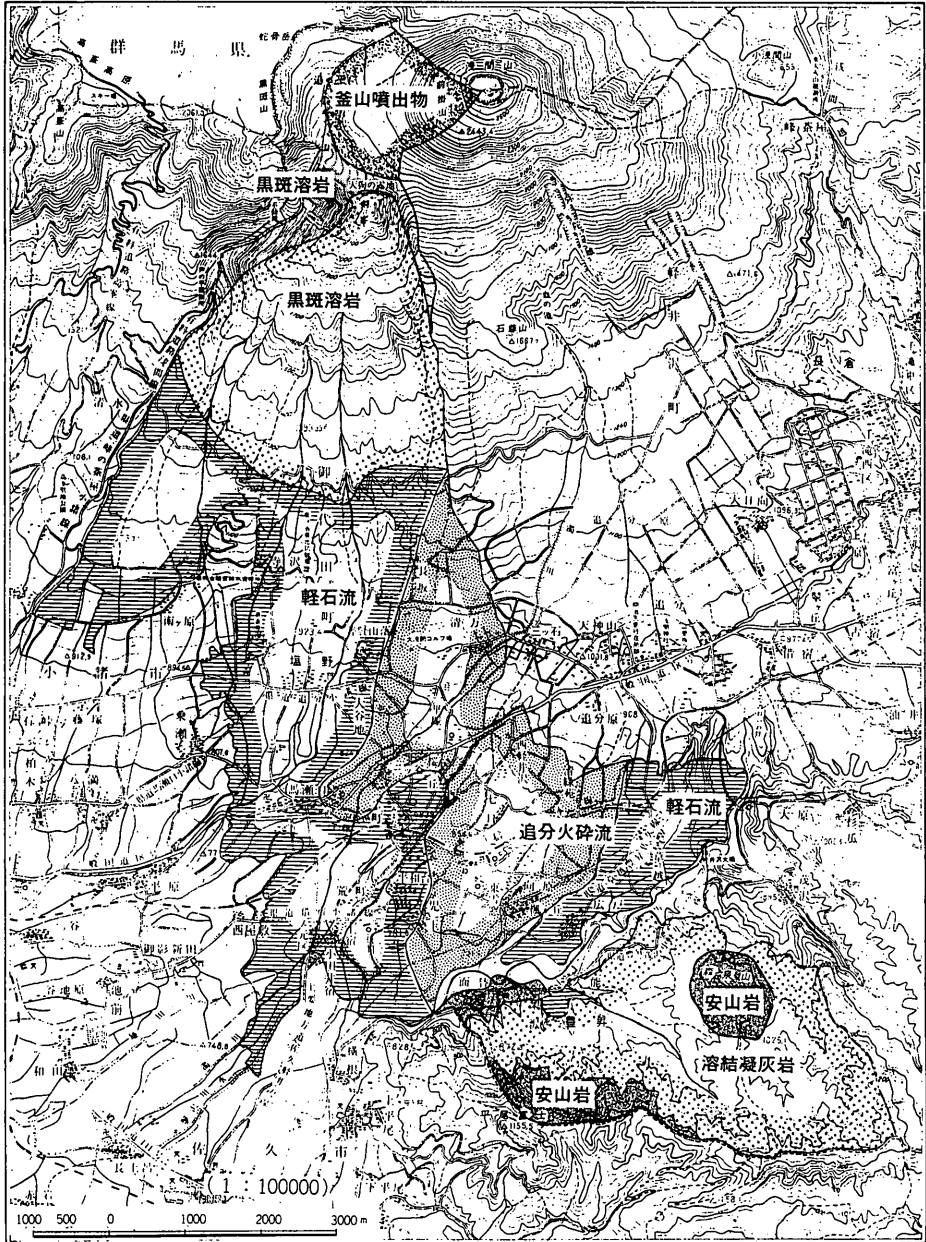
翻って、前田遺跡の東南には、標高1,155mの平尾富士を望むことができる。平尾富士は、安山岩の岩体から構成されるが、その安山岩は「安原石」とも称され、古くは古墳の石室に、近年においても墓石・石碑等に活用されている。

さて、前田遺跡の所在する御代田町は、東西9.5km、南北13.8km、周囲58.5km、面積61.54km<sup>2</sup>を測るが、その面積の約 $\frac{1}{2}$ が山林原野で占められている。年平均気温は8度前後で、年間降雨量は1,200mm前後、気候的には冷涼乾燥地帯に属することになる。

町では、その冷涼乾燥の風土を生かした、高冷地農業や精密機械工業が発達している。殊に、全戸数の4割強は農業に従事しているが、その中でも高原野菜が主要農産物となっている。反面、冷涼な気候は稲作には適しておらず、稲作の占める割合は大きいものではない。ちなみに、昭和57年の農産物粗生産額順位は、1位がレタス、2位がキャベツ、3位がはくさい、4位が生乳、5位が米となっている。米の生産額が下位であることが窺えよう。

現在、御代田町の人口は1万人強を数えるが、徐々に人口が増加しつつある。

II 追跡の環境



第3図 御代田町地形地質図 (1 : 100 : 000)

## 2 前田遺跡の歴史的環境

前田遺跡をとりまく歴史的環境のなかで、まず、当地への人類の第一歩の足跡として印された遺跡に、押型文土器を伴出した塩野地籍の滝沢遺跡があげられる(御代田町教育委員会 1985)。滝沢遺跡の押型文土器は3片のみであるが、楕円の押型がなされた縄文時代早期の遺物である。

縄文時代中期になると、浅間南麓の標高900m内外にみられる湧水地帯にそって、集落が数多く形成されるようになる。昭和60年に発掘調査を実施し、縄文時代中期後半の遺物包含層を確認するに至った大沼遺跡(御代田町教育委員会 1985)を筆頭に、西荒神遺跡・東荒神遺跡・西城西遺跡・西城東遺跡等が散見される。

大沼遺跡の東方には、広畑遺跡・西駒込遺跡・東二ツ石遺跡も存在している。この3遺跡は、いわゆる「広域農道」の予定ルート内にもあたっており、近く発掘調査が実施される予定である。

一方、前田遺跡の東南、八風山北麓の湯川沿いにも縄文時代中期から後期にかけての遺跡が点々と残されている。軽井沢町の茂沢南石堂遺跡<sup>もぎわみなかいじょう</sup>もそのうちのひとつである。南石堂より湯川をやや下ると御代田町豊昇地区に入る。この豊昇地区には、宮平遺跡が存在している。

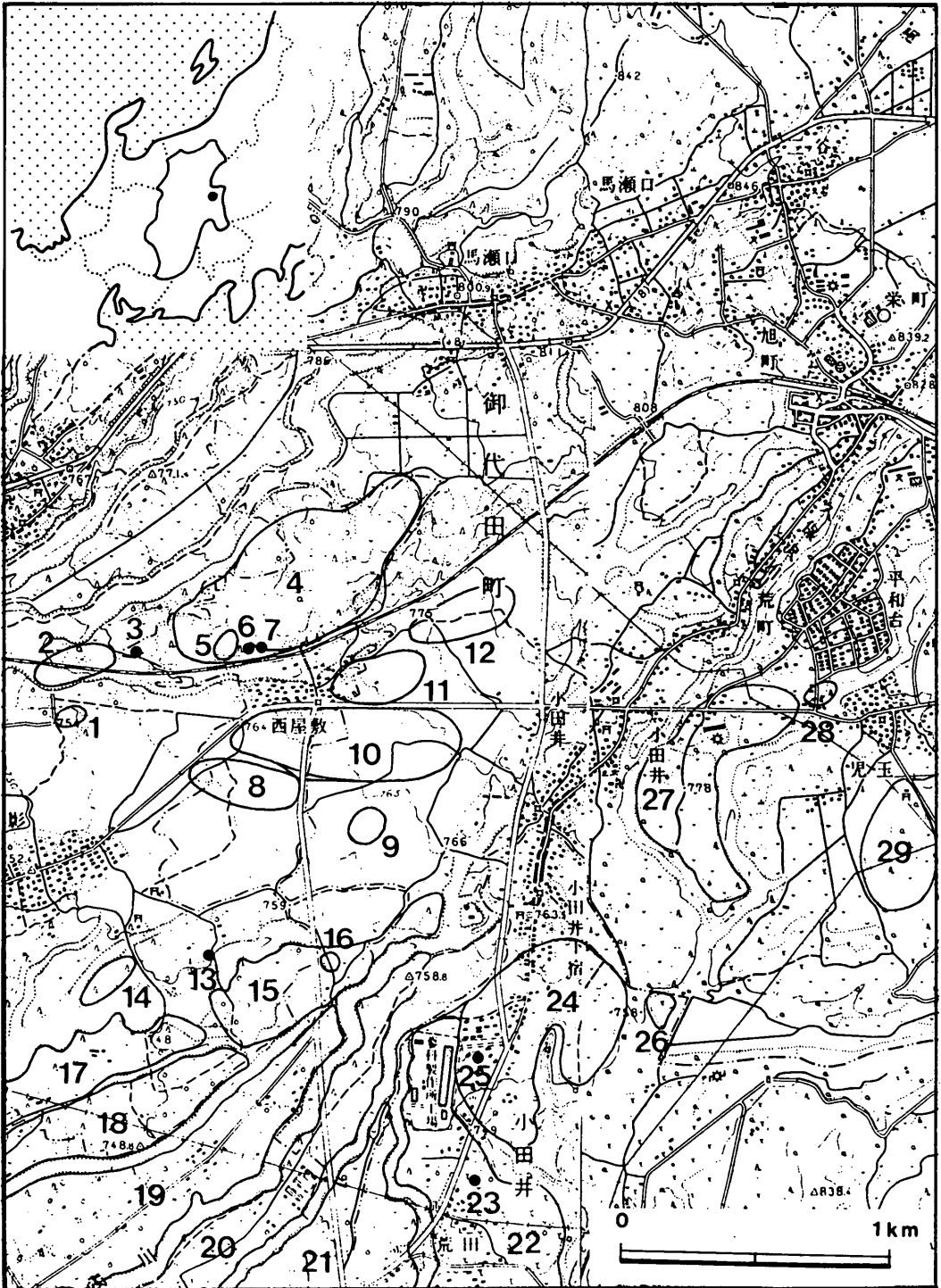
宮平遺跡は、古くから出土遺跡の豊富さで人々の関心をひいていた。昭和5年には、日本における旧石器文化の存在をいち早く説いていたことでも知られるN・G・マンローも、この遺跡を訪れている。昭和56年には、農道舗装事業に際し、宮平遺跡の発掘調査がなされた(御代田町教育委員会 1985)。僅か3mの道幅部分が130mにわたって調査されたにすぎないが、そこからは縄文時代中期後半から後期にかけての竪穴住居址27軒(うち敷石住居址8軒)・土壙50基・石組み棺4基が検出された。殊にその伴出遺物の中でも、縄文時代中期後半の加曽利E式に比定される土器は豊富で、当該期の詳細な土器変遷を追ううえでの重要な資料となるものであろう。

この宮平遺跡よりさらに湯川を下ると、本遺跡の東方に位置することになる児玉地籍の池尻遺跡がある(第4図29)。池尻遺跡では、昭和53年に御代田町教育委員会が主体となって発掘調査がなされ、縄文時代後期の竪穴住居址一軒が検出されている。

さて、縄文時代にかわる弥生時代の遺跡は、現在のところでは前田遺跡の以北には確認されていない。初期水稻栽培にあっては御代田の冷涼な気候は大きな障害となったであろう。

続く古墳時代の中期になってようやく本地域に遺跡がみられるようになる。ここに報告する前田遺跡第I期の集落が、今のところ唯一の例ではあるが、他にも同時期の遺跡が残されている可能性も大である。水稻耕作の技術等が向上し、佐久平の中央部より冷涼な本地域へと耕地が拡大してきたのはこの頃だったのであろう。

古墳時代後期の集落としても、ここに報告する前田遺跡第III期の事例が今のところ唯一ではあ



第4図 前田遺跡と周辺の遺跡分布

第1表 前田遺跡と周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	備考
1	宮ノ反遺跡	小諸市大字御影字宮ノ反				○	○		昭和59年度発掘調査
2	長野原遺跡	" 平原字大豆田					○		
3	長野原塚古墳	" 長野原				○			
4	下前田原遺跡群	佐久市大字小田井字前田原				○	○		
5	後原遺跡	" 字後原		○					昭和57年度発掘調査
6	後原1号墳	" "				○			昭和47年度発掘調査
7	後原2号墳	" "				○			"
8	鋳師屋遺跡	" 字鋳師屋					○		昭和59年度発掘調査
9	野火付遺跡	御代田町大字御代田字野火付					○	○	昭和59年度発掘調査
10	前田遺跡	" 字前田原 佐久市大字小田井字前田原				○	○	○	昭和60年度発掘調査
11	十二遺跡	御代田町大字御代田字下十二					○		昭和61年度発掘調査
12	根岸遺跡	" 字根岸					○		昭和62年度 発掘調査予定
13	野火付古墳	小諸市大字御影字野火付				○			昭和56年度発掘調査
14	野火付遺跡	" "					○		
15	曾根城遺跡群	" 曾根城					○		
16	曾根城遺跡	" "					○		昭和57年度発掘調査
17	近津遺跡群	佐久市大字長土呂字北近津			○	○	○		
18	周防畑遺跡群	" 字周防畑		○	○	○	○		
19	芝宮遺跡群	" 字北上中原			○	○	○		
20	長土呂遺跡群	" 字長土呂			○	○	○	○	
21	栗毛坂遺跡群	" 大字小田井字笹沢			○	○	○		
22	跡坂遺跡群	" 字跡坂			○	○	○		
23	島原古墳	" 字下金井				○			
24	中金井遺跡群	" 字中金井			○	○	○		
25	皎月古墳	" 字皎月				○			昭和45年度発掘調査
26	唄坂遺跡	" 字唄坂		○	○	○	○		
27	小田井城跡	御代田町大字御代田字城の内						○	
28	児玉遺跡	" 字児玉		○			○		
29	池尻遺跡	" 字池尻		○					昭和53年度発掘調査

る。しかし一方で、前田遺跡の北隣りに同時期の後原1・2号墳（佐久市教育委員会 1972）が存在し（6・7）、南隣りには野火付古墳（小諸市教育委員会 1983）が存在（13）、やや離れてその北方には下原古墳群（御代田町教員委員会 1975）が、その南方には皎月古墳（25）も存在



しており、これらの古墳を残した人々の居住地もいずれかに求められなければなるまい。したがって、本遺跡の近隣のいずれかに古墳時代後期の集落が残されていたとみるのが妥当であろう。

奈良・平安時代において本地域は、信濃国佐久郡に含まれていることがわかるが、「和名抄」によれば佐久郡には、美理・大村・大井・餘戸・青沼・刑部・茂理・小沼の八郷がみえる。このうち本地域は小沼郷に属する地域ではなかったかと推察される。ちなみに、大井郷の範囲を知るうえで重要な「大井」と刻書された平安時代の坏が、本遺跡南方佐久市近津波右エ門遺跡より採集されている。

本遺跡の南に隣接し、昭和59年に発掘調査が実施された佐久市鑄師屋遺跡(8)(佐久市教育委員会 1985)、御代田町野火付遺跡(9)(御代田町教員委員会 1985)は、奈良・平安時代を中心とした遺跡である。

野火付遺跡においては、竪穴住居址7軒で構成される奈良時代前半の一集落、竪穴住居址8軒で構成される平安時代(9世紀前半)の一集落が検出された。特筆すべきは、平安時代の集落と共時的な関係にあると思われる埋葬馬5頭の検出である。

ところで、この時代には、「延喜式」にみる御牧である長倉牧や塩野牧が、本遺跡の北方に展開していたとされている。また、官道として整備された東山道は、御代田町のいずれかの地籍を通過していたものとみられるが、前田遺跡のある前田原地籍を通過したとする見解もある(一志 1957、菊池 1985)。その中では、清水駅(小諸市諸に所在想定)に続く長倉駅が、この地域に設施されたともされている。ちなみに長倉駅では、15頭の駅馬が置かれたという。

野火付遺跡の埋葬馬は、この長倉牧・塩野牧の牧場か、長倉駅の駅馬ではなかったかと考えられた(堤 1985・1986)。ここにおいて、これらの馬を埋葬した集団の性格をも推察せしめるのである。このことは、当然本遺跡の性格にも深く係わってくるものであろう。

いずれにしても、本地域の奈良・平安時代の歴史を再構成する上で、御牧や東山道の問題は避けては通れない。後の考察において、この問題について再び取り上げることとなる。

さて、中世においては、前田遺跡の南方に八条院領大井庄の直営田である佃が存在していた。野火付遺跡で検出された60数基にもおよぶ竪穴遺構は、この佃と関連するものかと考えられている。その遺構のいくつかからは、渡来銭や中国青白磁などの遺物も検出されている。

以上、縄文時代から中世までの考古学的事象を取り上げ、前田遺跡をとりまく歴史的環境についてふれてみた。

### III 層 序

前田遺跡の層序は、14頁に示したが、殊にローム層以上の黒色土堆積は地区毎によって差がみられるようである。

Aは全体的な基本層序で、Bは黒色土堆積の厚い第V区ニ-39グリッド付近のローム層以上の層序である。

まず、Bについて述べる。

そのIa層は、水田耕作土の黒色土で、厚さ30cm前後を測った。

Ib層は鉄分をよく含んだ粘性のある水田の床土で、25cm程度を測る褐色土層である。

II層以下は耕作の影響の及ばないプライマリーな堆積である。

IIa層は厚さ27cm程度を測る若干のパミスを含む黒褐色土層であった。

IIb層は、径2～5mm程のパミスとスコリアをよく含む厚さ20cm程の黒色土層である。

IIc層は厚さ22cm程のパミス・スコリアを含む黒褐色土層であった。

III層は粘性のある黄色ローム層である。

上記のIIa～IIcの層序中においては、遺構の掘り込みを確認することができず、遺構を確認し得たのはローム層であるIII層の上面においてであった。

ところで、群馬県においては、A (AD1783)・B (AD1109)・C (4世紀前半)と呼ばれる浅間のパミスが、年代決定のための重要な鍵層としておさえられている。本地域においてもこれらの有効なパミスがみられないものかどうか、河西学氏にお願いして調査をいただいた。まず、本地域の層序中において肉眼ではこれらのパミスは認められないとのことであった。続いてIIa層からIIc層までの間を5cmメッシュに15箇所サンプリングし、パミスの抽出を試みたが、残念ながらこれらを検出することができないということであった。本地域には、おおよそ偏西風の関係でこれらのパミスは降下しなかったものと考えられる。

さて、基本層序AのIV層以下について、白倉氏の観察(白倉 1985)をもとにふれてみよう。

IV層は、明赤紫色を呈する追分火山灰流層で、軽石を多く含んでいる。本遺跡の奈良・平安時代のカマドに多用されている軽石は、この追分火山灰流層中より抜かれたものであろう。

V層は、IV層とは不整合の、粘性の強い黄褐色砂質ローム層である。

VI層は、黄赤褐色を呈する砂礫層で、径5cm前後の軽石を含んでいる。

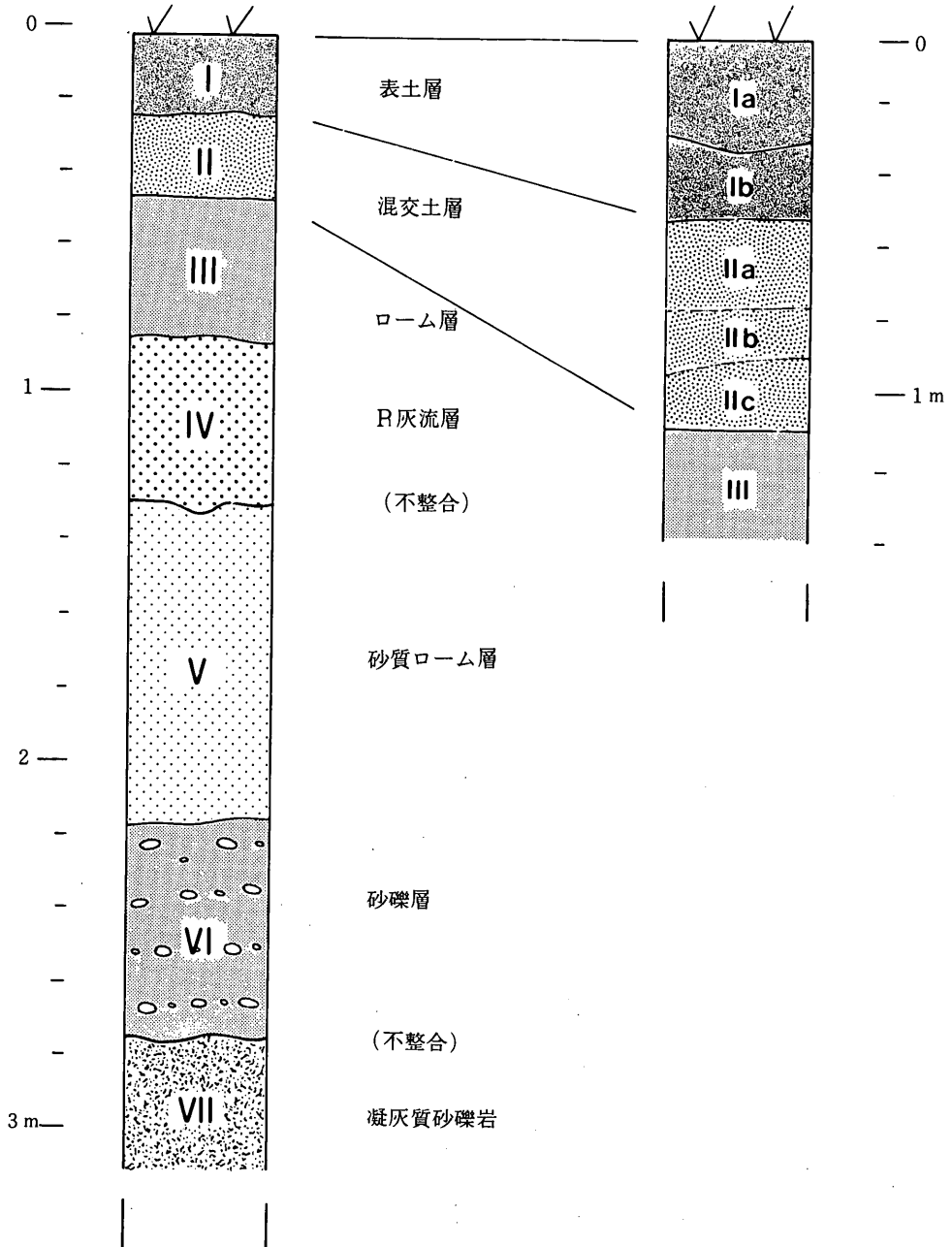
VI層・VII層間には不整合で、その層理には地下水が浸透している。

VII層は、灰褐色の堅固な凝灰岩質砂礫岩層である。

III 層 序

A 基本層序

B 第V区二-39グリッド



前田遺跡層序模式図 (1:3)

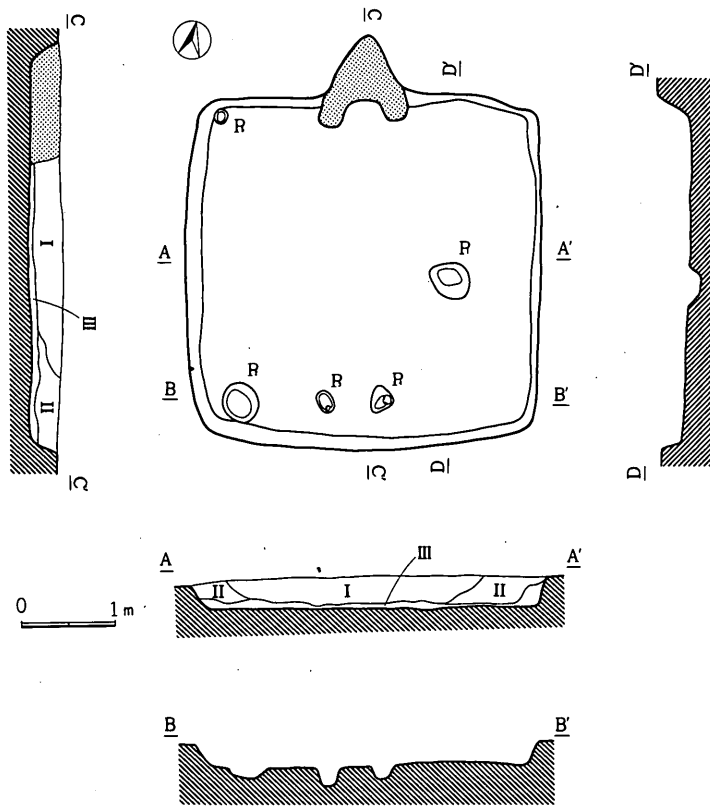
# IV 遺構と遺物

## 1 竪穴住居址

### (1) H-1号住居址

遺構 第5・6図

H-1号住居址は、第I区シー43グリッドより検出された。南北3.8m東西3.8mの隅丸方形を呈し、床面積は11.7㎡を測り、主軸方向はN-13°-Wを指す。壁高は20~30cm前後で、周溝は認められない。支柱穴と考えられるピットは認められず、入口部に付属するかとも思われるピット2個(P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>)が並んで南壁側に検出された他は、径40cm深さ10cm程度のピット2個(P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)が検出されたにとどまった。



第5図 H-1号住居址実測図

IV 遺構と遺物

覆土は3層に分かれ、プライマリーな自然堆積状況を示していた。I層は褐色土層で多量のパミスを含み、若干のスコリアと拳大の軽石を含む。II層は暗褐色土層でパミスをよく含み若干のスコリアが混入、III層は黒色土層でパミス・スコリアが含まれない粘性のある土層であった。

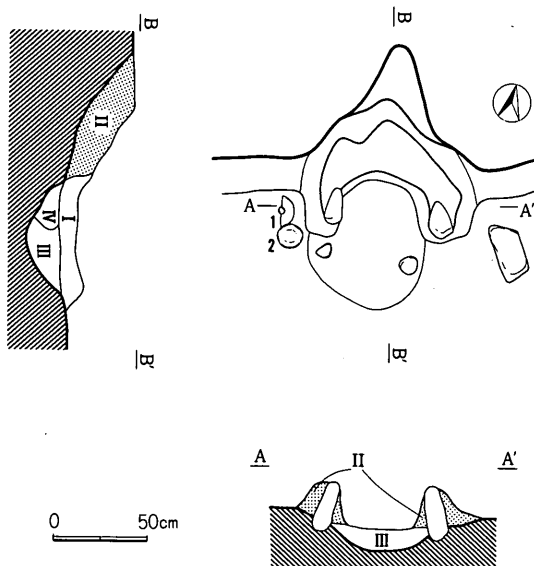
遺物は、須恵器の蓋と坏（1・2）がセットで、カマドの左袖の西側より検出された。この他は、覆土中からの出土である。

カマドは北壁中央に位置し、破壊された状態であるが、火床は掘り込まれた後

黒色土（III層）が貼られ、左右両袖は面取りをした軽石が配された後白色粘土（II層）が貼られ、煙道部にも白色粘土（II層）が貼られたもので、いわゆる石組粘土カマドである。カマドの東脇には、袖部に用いられていたと考えられる面取り軽石がみられた。カマドの覆土I層は、カマドの使用に伴うプライマリーな堆積層とは考えられないもので、カマドの構材となっている白色粘土と灰・微量の焼土粒子によって構成されるものであり、カマド破壊時の堆積土層と考えられる。

遺物 第7図

遺物の出土量は総じて少ないが、須恵器では蓋・坏・甕、土師器では甕がある。

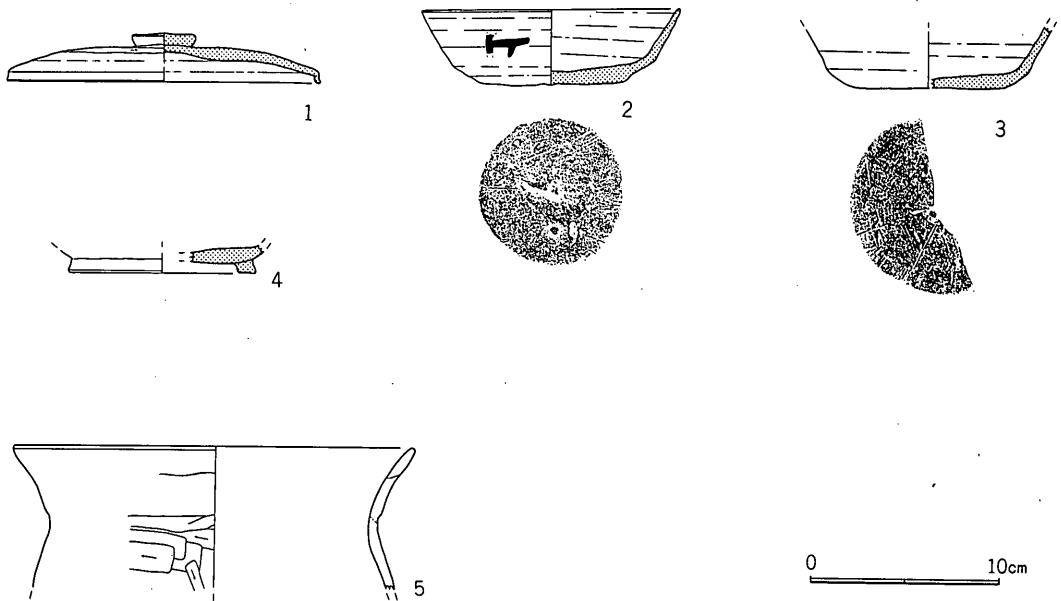


第6図 H-1号住居址カマド実測図 (1:40)

第2表 H-1号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (回)	蓋 (須)	3.0 2.6 (16.7)	つまみは全体的に偏平ではあるが、中央部がやや突出する。	外面 天井部 回転ヘラケズリ 体部 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)		胎土は精選され、灰色(N6/0)を呈し焼成良好
2 (完)	坏 (須)	13.8 4.0 8.0	底部平底、体部は外反する。完形	外面 体部ロクロヨコナデ 底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)		胎土は砂粒を含み灰白色(N8/0)。体部に「上」?の墨書あり。
3 (回)	坏 (須)	- - (8.1)	底部平底、体部は外反する。	外面 体部ロクロヨコナデ 底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)		胎土は砂粒を含み灰白色(N7/0)。底部に「×」のへら記号あり
4 (回)	坏 (須)	- - (10.0)	底部平底、高台付 (貼り付け)	外面 底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)		胎土は砂粒を多く含み、明赤灰色(5B4/1)
5 (回)	甕	(21.3) - -	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はややふくらむ。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ		胎土は砂粒を多く含み、明赤褐色(5YR5/6)

1 堅穴住居址



第7図 H-1号住居址出土遺物(1:4)

1の須恵器蓋は、その出土状態より2の坏とセットをなすものと考えられる。2の須恵器坏には体部に「上」の墨書があり、さらにもう一字書かれている可能性もある。2・3の須恵器坏はいずれも回転ヘラキリによるもので、この他糸切りによる坏底部は認められなかった。

5は、「く」の字状に外反する口縁の土師器甕である。

なお、鉄製品・石器等の出土はみられなかった。

時 期

本住居址は、奈良時代の所産で、前田遺跡第IV期に位置付けられる。

(2) H-2号住居址

遺 構 第8図

H-2号住居址は、第I区スー42グリッドより検出された。南北3.5m東西4.0mの隅丸方形を呈し、床面積11.9㎡を測り、主軸方向はN-5°-Wを指す。床面から確認面までの壁高は、全体に15cmと低く、周溝は認められない。主柱穴は、東西の壁中に1本ずつ対に配されるものと考えられるが、西側は風倒木による攪乱のため柱穴を検出し得なかった。東壁に残る柱穴は、住居址の外側に向けて斜に穿たれている感があり、深さ27cmを測る。

IV 遺構と遺物

住居址覆土はI層のみで、パミスをよく含み若干のカーボンを含む粘性のある黒色土であった。

遺物はいずれも破片のみで、良好な出土状態を示すものは認められない。

カマドは、住居址の北壁中央にあったと考えられるが、僅かに粘土をとどめるのみで、大半を失った状態にあり旧状は不明である。

遺物 第9図

遺物の出土量は少なく、須恵器では蓋・坏・甕、土師器では坏・甕の破片が認められたにすぎなかった。

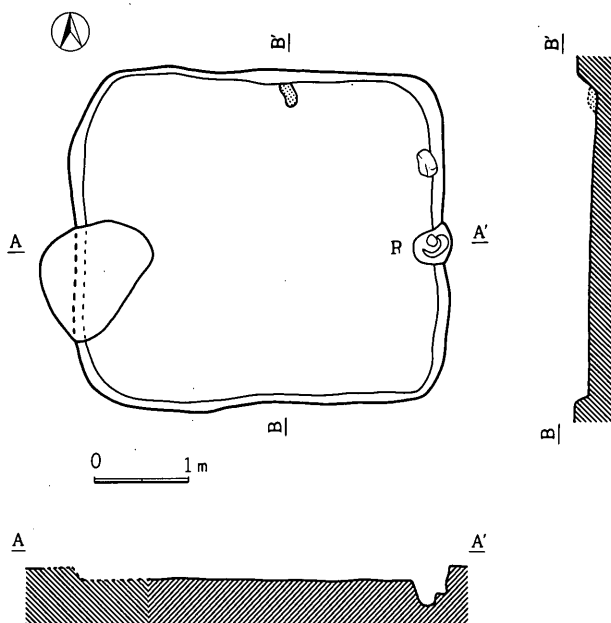
1の土師器坏は、IV区より検出された破片で、ロクロ整形がなされ内面黒色研磨がなされている。なお、この他土師器坏では、高台付坏の破片が1点認められている。

また、須恵器坏の破片では糸切り底のものが存在する。

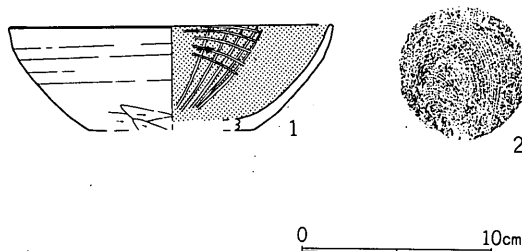
鉄製品・石器等は認められなかった。

時期

H-2号住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられる。



第8図 H-2号住居址実測図(1:80)



第9図 H-2号住居址出土遺物(1:4)

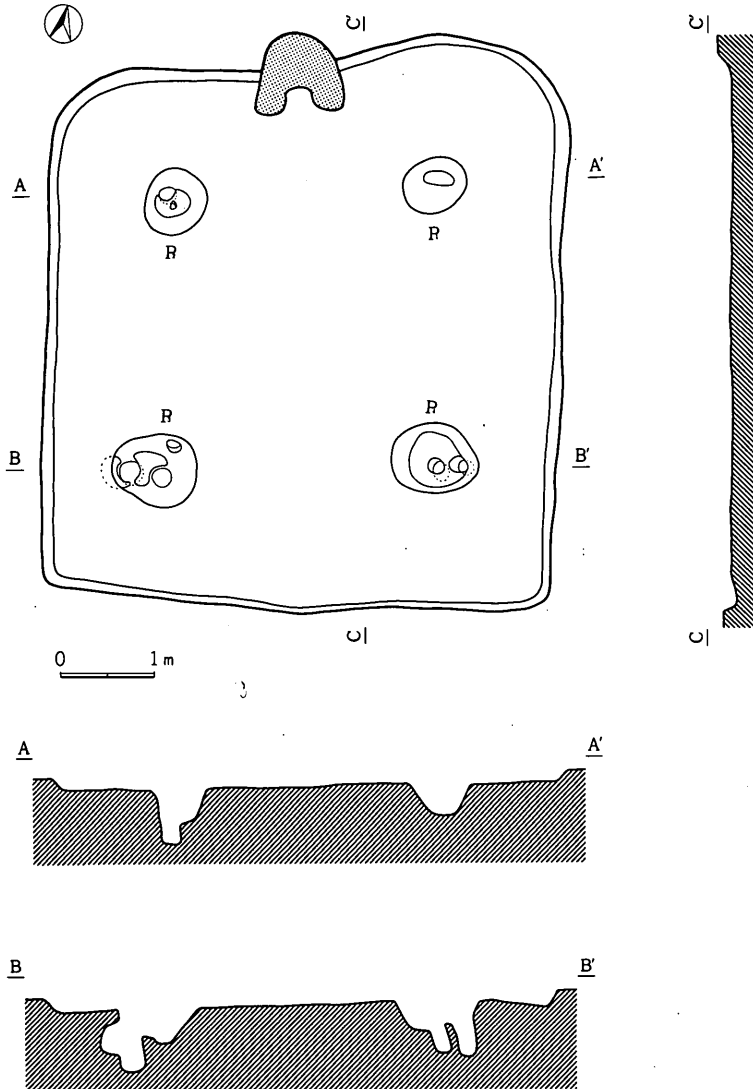
第3表 H-2号住居址出土遺物一覧表<土器>

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1(回)	坏	<17.3> 5.5 <8.8>	体部は外湾し、口唇部で直立きみに僅かに外反する。底部平底。	外面	体部ロクロヨコナデ。体部下半、手持ちヘラケズリ。底部手持ちヘラケズリ	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色(10YR6/4)。
				内面	黒色研磨(ロクロ右回転)	

(3) H-3号住居址

遺構 第10・11図

H-3号住居址は、第I区ス-41グリッドより検出された。南北6.1m東西5.5mで北壁の東半分がやや膨らんだ隅丸方形を呈し、床面積は28.1㎡を測り、主軸方向はN-14°-Wを指す。確認面から床面までの壁高は全体に10cm前後と低く、周溝は認められなかった。ピットは、支柱穴4



第10図 H-3号住居址実測図 (1:80)



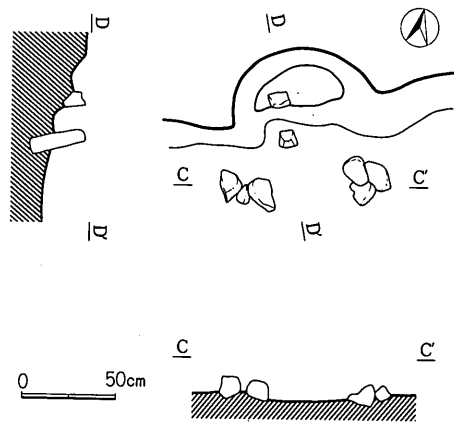
IV 遺構と遺物

個が検出された (P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。うちP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>では柱痕が確認でき径20cm前後を測った。また、P<sub>4</sub>では2本の柱痕が確認されたが、一方は支柱等の柱痕であろうか。床面は、硬質な貼床であった。

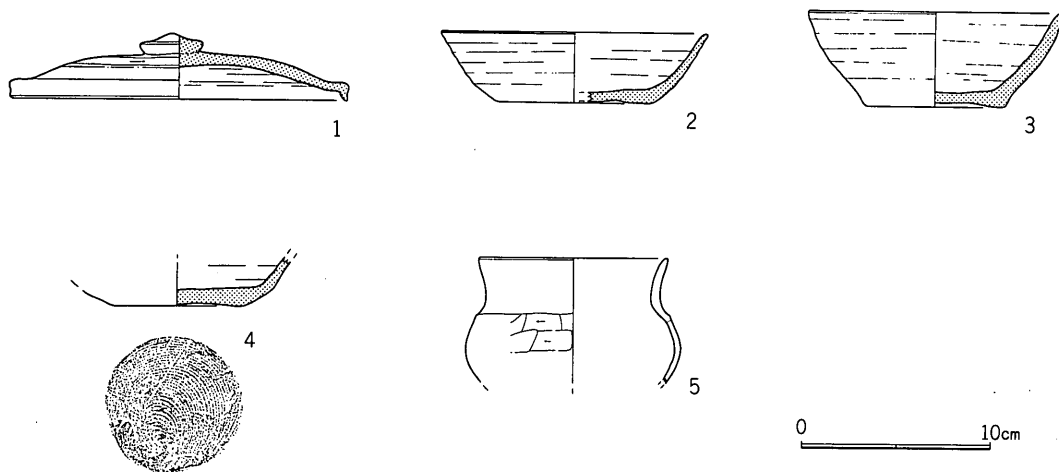
覆土はI層のみで、パミスはほとんど含まず粘性をおびた黒色土層である。

遺物は、1の蓋がP<sub>2</sub>付近より検出されたが、原位置を保っているものかどうかはわからない。

カマドは、北壁中央に位置し、大半が破壊さ



第11図 H-3号住居カマド実測図 (1:40)



第12図 H-3号住居出土遺物 (1:4)

第4表 H-3号住居出土遺物一覽表 <土器>

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	蓋 (須)	3.4 3.5 <18.0>	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み青灰色 (5B6/1)
2 (回)	坏 (須)	<14.2> 3.7 (8.2)	体部はゆるく外湾する。底部平底。	外面 ロクロヨコナデ。底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み青灰色 (5B6/1)
3 (回)	坏 (須)	<13.5> 5.0 (7.4)	体部は外湾し、器高はやや高い。底部平底。	外面 ロクロヨコナデ。底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み、にぶい黄橙色 (10YR 7/4)
4 (完)	坏 (須)	- 7.0	底部平底	外面 ロクロヨコナデ。底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒含み灰オリーブ色 (5Y6/2) 内面+文字の火標
5 (回)	甕	(10.1) - -	胸部は球状を呈し、口縁部は直立きみに外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胸部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み褐色 (10YR 4/6)

れた状態であったが、左右両袖に配された軽石はそれぞれ3個ずつ残存しており、角柱状に面取りされた長さ60cmを測る軽石製の支脚は埋め込まれたままであった。カマドの使用に伴う焼土等のプライマリーな堆積は認められない。

遺物 第12図

遺物の出土量は少ない。須恵器では蓋・坏・甕の破片が、土師器では甕の破片が検出された。

1は宝珠形つまみを有する須恵器蓋である。

2～4の須恵器坏は、いずれも回転糸切りによるものである。

5は、口縁部が直立気味に外反する小形の土師器甕である。

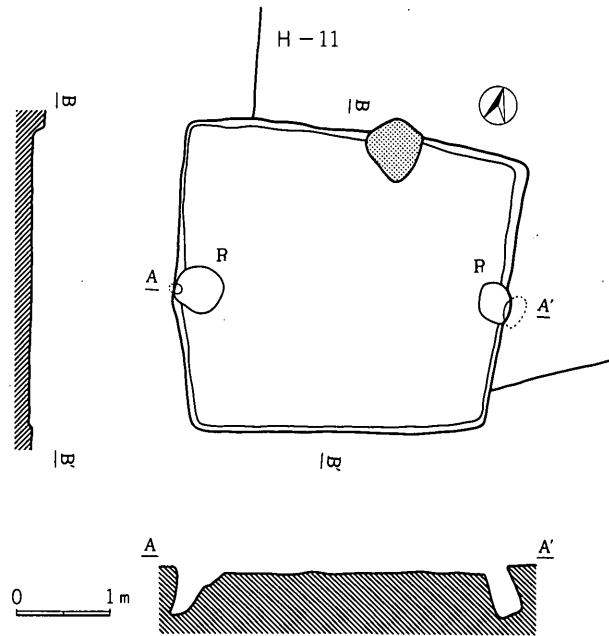
時期

H-3号住居址は、奈良～平安時代の所産で、前田遺跡第VII期に位置付けられる。

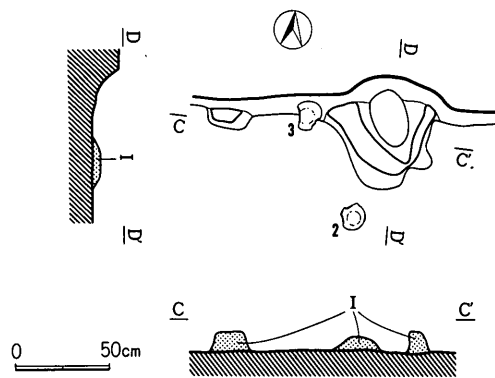
(4) H-4号住居址

遺構 第13・14図

H-4号住居址は、第I区スー43グリッドより検出された。H-11号住居址と重複関係をもつが、本住居址のほうが新しいものである。本住居址は、南北3.25m東西3.66mのやや歪んだ隅丸方形を呈し、床面積は9.9m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-16°-Wを指す。確認面から床面までの壁高は総じて10cmに満たずきわめて低い。当初より浅い掘り込みなのか、上面が削平されているのか、あるいは掘り込み面が上位にあるのか等検討を要する必要があるが、本住居址と同様

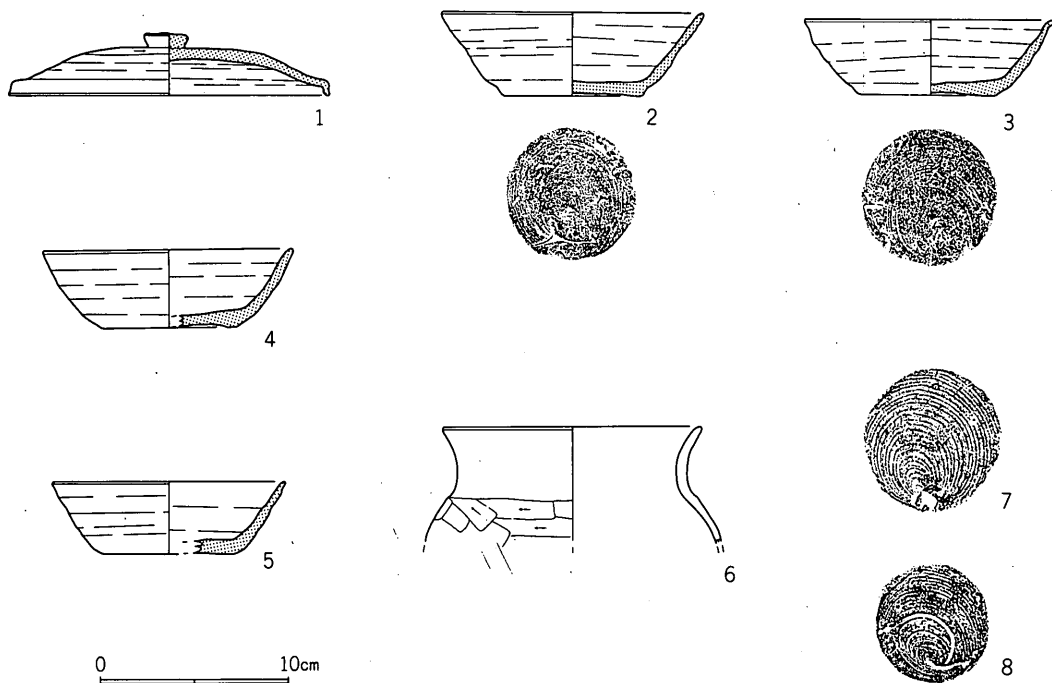


第13図 H-4号住居址実測図 (1:80)



第14図 H-4号住居址カマド実測図 (1:40)

IV 遺構と遺物



第15図 H-4号住居址出土遺物(1:4)

第5表 H-4号住居址出土遺物一覧表<土器>

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	蓋 (須)	2.5 3.2 17.1	つまみ部は全体的に偏平ではあるが中央部がやや突出する。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(N4/0) 焼成良好
2 (回)	坏 (須)	(14.0) 4.4 7.4	体部は外湾する。底部平底。	外面 ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多く含み 灰白色(N8/0) 外面火襷あり
3 (完)	坏 (須)	(13.2) 3.9 7.3	体部は外湾するが、口唇部でくびれてさらに外湾する。底部平底。	外面 ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰白色 (5Y7/1)
4 (回)	坏 (須)	<13.3> 4.1 (7.1)	体部は外湾する。底部平底。	外面 ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み オリーブ灰色 (2.5GY6/1)
5 (回)	坏 (須)	<12.4> 3.8 (7.0)	体部は外湾する。底部平底。	外面 ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多く含み、 暗灰黄色(2.5Y5/2)
6 (回)	甕	(13.8) — —	口縁部は「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ	胎土は細砂粒を含み 明褐色 (7.5YR5/6)

な規模構造をもつ住居址に浅いものが多い点を考えると、当初より浅い掘り込みであったことも十分予想される。周溝は認められない。支柱穴は、東西の壁中に斜の穴が各一個ずつ穿たれたものである(P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>ともに深さ45cm程度を測る。

覆土はI層のみで、若干のパミスを含む黒色土層であった。

遺物は、カマドの前方より坏(2)が、カマドの西脇より(3)が比較的良好な状態で検出された。

カマドは、北壁中央よりやや東寄りに検出された。その天井部はすでに破壊されていると考えられるもので、その袖の構材には軽石等を用いず粘土に黒色土を混じた土のみが用いられていた(I層)。カマド内には、掻き出されたためか焼土カーボン等の堆積は認められなかった。

遺物 第15図

遺物の検出量は少なかった。そのうち須恵器では蓋・坏・甕が、土師器では甕がみられた。

1の須恵器蓋は、つまみ部が潰れた宝珠形を呈するものである。

2~5の須恵器坏は、いずれも回転糸切りによる底部を有している。

6の土師器甕は、弱い「コ」の字状口縁をとるものである。

なお、本住居址には、鉄製品・石器等は認められなかった。

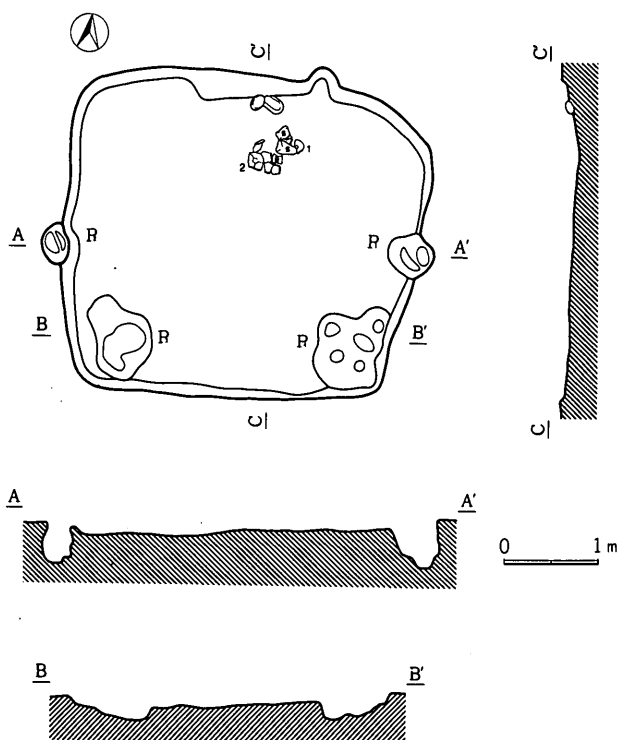
時期

本H-4号住居址は奈良~平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられる。

(5) H-5号住居址

遺構 第16図

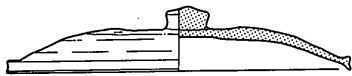
H-5号住居址は、第I区シ-43グリッドより検出された。H-10号住居址とコーナーが僅かに切り合い、微妙ではあるがH-5が新しくとらえられた。南北3.4m東西3.8mのやや歪んだ隅丸方形を呈し、床面積は10.5m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-10°-Wを指す。確認面から床面までの壁高は総じて10cmに満たずきわめて低く、H-4と同様上面が削平されているか、あるいは掘込み自体も浅いものなのかを検討する必要がある。周



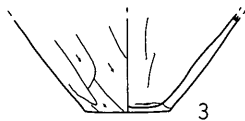
第16図 H-5号住居址実測図(1:80)

第6表 H-5号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調	備 考
1 (回)	蓋 (須)	2.3 3.3 (18.3)	つまみ部は偏平な宝珠形を呈する。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色 (N5/0)
2 (完)	甕 (須)	(26.0) — —	口縁部は短く外反する。	外面 叩きの後、ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含み灰黄色 (2.5Y6/2)
3 (回)	甕	— — (4.5)	底部平底。	外面 胴部ヘラケズリ 底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は砂粒を含 み明赤褐色 (7.5YR5/8)



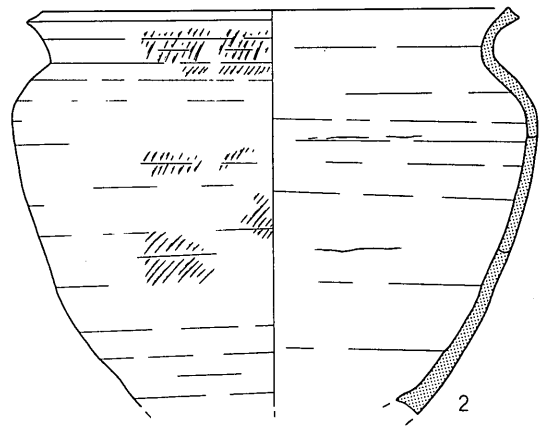
1



3



4



2

0 10cm

第17図 H-5号住居址出土遺物(1:4)

溝は認められない。主柱穴は東西の壁中にそれぞれ1個ずつ配されている( $P_1 \cdot P_2$ )。 $P_1$ は60cm×60cm深さ50cmを測り、 $P_2$ は35cm×55cm深さ50cmを測るもので、双方ともやや斜に穿たれている感がある。 $P_3 \cdot P_4$ は南壁側の両コーナーにある不規則なピットで、この両者の上面に床面が確認されないため掘り進んだが、あるいは単なる掘り方の一部かもしれない。

覆土は、I層のみで若干のパミスを含む黒褐色土層であった。

遺物は、カマドが存在したと考えられる北壁寄りの場所に、1の須恵器蓋と2の須恵器甕が検出された。破損してしまったこれらの個体が、残置または廃棄された状態であろう。

カマドは、北壁中央に位置するが、およそ原形をとどめず、カマドに使用されたと考えられる軽石4個が散乱しているのみの状況であった。

遺物 第17図

遺物の出土量は総じて少ないが、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕の器種が、土師器では甕の破片がみられた。うち、大方の器形を知り得たのは図示した1～3である。

1は、潰れた宝珠形つまみをもつ須恵器蓋である。

須恵器坏は、回転糸切りによる底部をもつものがみられた(4)。

2の須恵器甕は、外面に叩きがなされた後、ロクロ調整されたものである。

3は、土師器甕の底部である。この他、「く」の字状に外反する口縁部もみられた。

時期

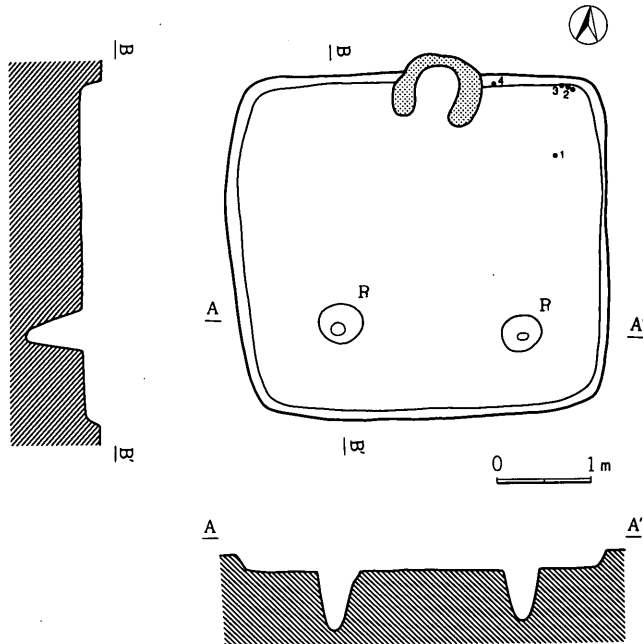
本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられる。

(6) H-6号住居址

遺構 第18・19図

H-6号住居址は、第I区シ-43グリッドより検出された。H-9号住居址と重複関係をもつが、本H-6がH-9に後出する新しい時期のものである。

本住居址は、南北3.7m東西4.1mの隅丸方形を呈し、床面積12.5㎡を測り、主軸方向はN-7°-



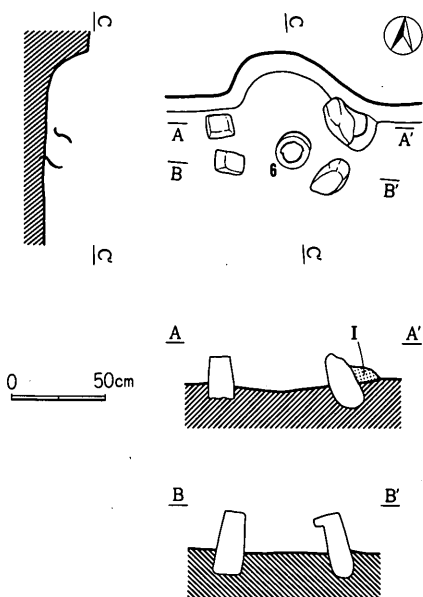
第18図 H-6号住居址実測図 (1:80)

Wを指す。壁高は、15~20cm前後で、周溝は認められない。床面は貼床となっている。支柱穴は、中央より南壁よりにP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の2個が配されているのみであった。P<sub>1</sub>は42cm×37cm深さ50cmを測り、P<sub>2</sub>は47cm×41cm深さ60cmを測るものである。

覆土は、細粒パミスをよく含みやや粘性のある黒褐色土I層のみであった。

遺物は、カマドの東側の床面直上より1の完形の須蓋器蓋が出土した。また2の須恵器坏は半割してしまったもので重ねられた状態で北東コーナーより出土し、その上に3の坏が逆転した状態で出土した。5の甕はカマド中より出土したもので、H-21号住居址のP<sub>2</sub>中より出土した同一個体の破片との接合をみた。6の小形甕はカマド中より転倒した状態で出土した。

カマドは、北壁中央に位置するもので、石組み粘土カマドと考えられるが、粘土部（I層）は僅かに東側の袖に残るのみであった。東側の袖は奥に溶結凝灰岩が、手前には「」状に面取りされた軽石が据えられ、西側の袖には面取り軽石2個が据えられていた。なお、カマドの使用に伴う

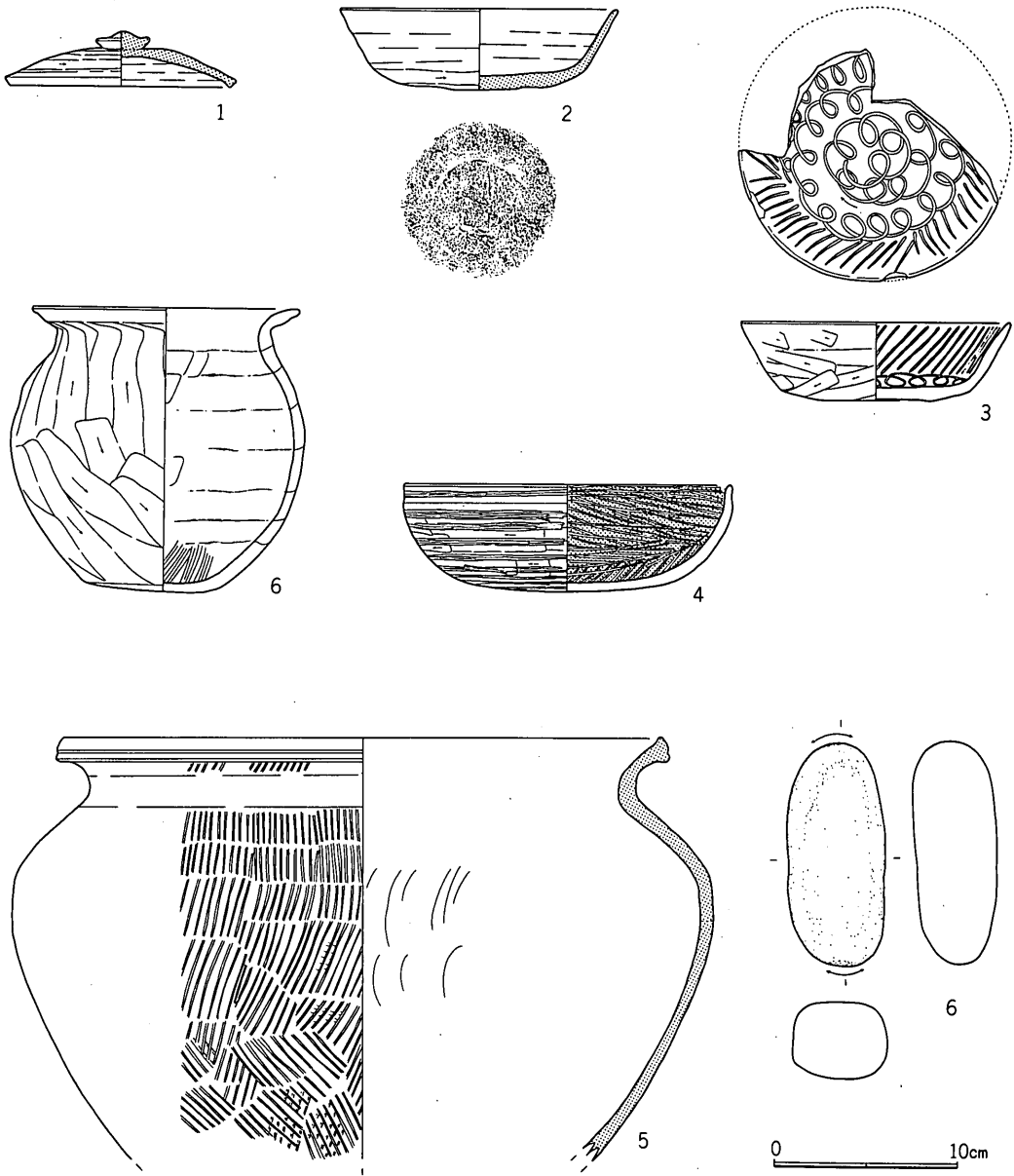


第19図 H-6号住居址カマド実測図(1:40)

第7表 H-6号住居址出土遺物一覧表<土器>

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (完)	蓋 (須)	3.0 3.0 12.1	つまみ部は宝珠形を呈する。径が比較的小さい。完形。	外面 ロクロヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ? 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)		胎土は中砂粒を多く含み灰白色(5Y7/1)
2 (完)	坏 (須)	15.2 4.5 8.8	体部は外湾する。底部平底。ほぼ完成。	外面 ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)		胎土は中砂粒を含み青灰色(5B5/1)焼成良好
3 (回)	坏	(14.8) 4.2 (10.3)	体部は直線的に外湾する。底部平底	外面 ロクロヨコナデの後、ヘラケズリ 底部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデの後、底部にらせん状暗文体部に放射状暗文を施す。		胎土は中砂粒を多く含み橙色(7.5YR7/6)焼成良好で須恵質
4 (回)	坏	(18.0) 5.9 (11.0)	体部は丸味をおびて外反し、口唇部は短く直立する。底部平底。	外面 横のヘラケズリの後、横のヘラミガキ 内面 黒色研磨		胎土は中砂粒を多く含み橙色(5YR6/8)
5 (回)	甕 (須)	(33.6) —	口縁部は短く強く外反し、胴部は球状を呈する。	外面 叩きがなされた後、口縁部にヨコナデ(ロクロ?)が施こされる。 内面 ヨコナデ(ロクロ?)		胎土は中・大の砂粒を多く含み明褐色(7.5YR5/8)H-21の破片と接合
6 (完)	甕	14.6 15.3 7.3	口縁部は「コ」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。ほぼ完形。	外面 口唇部ヨコナデ。頸部・胴部・底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ		胎土は赤褐色の砂粒を多量に含みにぶい赤褐色(5YR5/4)

1 竪穴住居址



第20図 H-6号住居址出土遺物 (1:4)

と考えられる焼土等のプライマリーな堆積は認められなかった。

遺物 第20図

遺物の出土量は少ないが、須恵器では蓋・坏・甕が、土師器では坏・甕が検出さ

第8表 H-6号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
7	敲石	安山岩	12.0	5.4	4.3	500	



れた。

1は、小形の須恵器蓋の完形品で、内面の端部はかえりを有さないが、かえりが退化したような感もうける。2の坏は、回転へラキリによる底部を有するものである。3の土師器坏は、内面の体部に放射状の暗文が、底部にラセン状の暗文が施こされている。4の土師器坏は大形の器形で内面黒色研磨がなされている。

5の須恵器甕は、外面に叩きがなされるものである。6は、球胴を呈する土師器の小形甕である。また、図示しなかったが「く」の字状口縁の土師器甕の破片もみられる。

石器では、河床礫を用いたハンマーが1点出土している。

#### 時 期

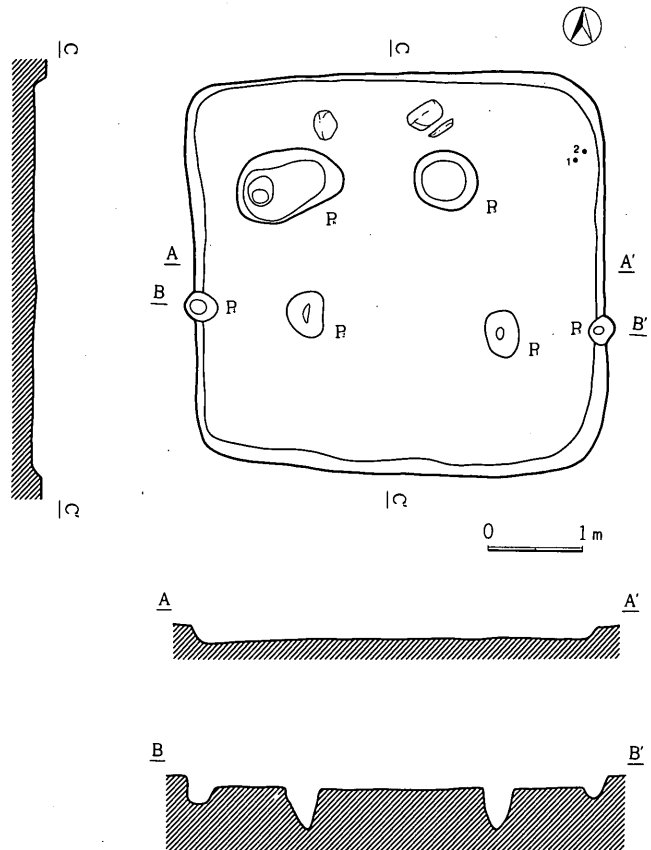
本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられる。

### (7) H-7号住居址

#### 遺 構 第21図

H-7号住居址は、第I区シ-44グリッドより検出された。

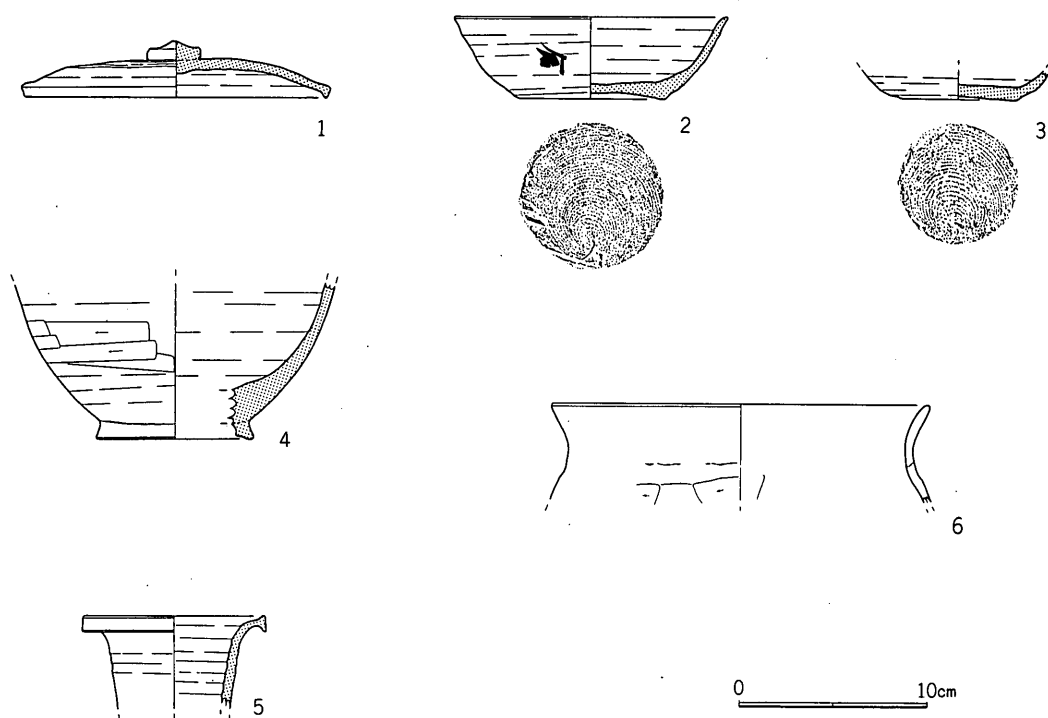
本住居址は、南北4.2m東西4.35mを測る隅丸方形を呈し、床面積16.2m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-6°-Wを指す。壁高は15~20cm前後で、周溝は認められない。支柱穴は、中央よりやや南壁寄りにP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が検出された。P<sub>1</sub>は、50cm×35cm深さ45cm、P<sub>2</sub>は50cm×40cm深さ45cmを測る。P<sub>1</sub>P<sub>2</sub>の延長線上の東西両壁中にはそれぞれ1個ずつP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>が認められた。P<sub>3</sub>は32cm×27cm深さ10cm、P<sub>4</sub>は32cm×37



第21図 H-7号住居址実測図(1:80)

第9表 H-7号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	蓋 (須)	3.0 3.0 16.1	つまみ部は宝珠形を呈する。 完形。	外面 ロクロヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を 多く含み青灰色 (5B5/1) 焼成良好
2 (完)	坏 (須)	14.6 4.3 7.7	体部はやや丸味をおびて外反する。 底部平底。	外面 ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を多 く含み青灰色 (5B6/1) 十字 の火痕あり。体部 に「倉」の墨書
3 (完)	坏 (須)	— — 6.3	底部平底。	外面 ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を 含み灰色 (7.5Y6/1)
4 (回)	長頸瓶 (須)	— — <8.4>	貼り付け高台	外面 胴部ロクロヨコナデ。胴下半部回転ヘラケズリ 底部調整不明 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含み灰色 (5Y5/1)
5 (回)	長頸瓶 (須)	<9.8> — —	頸部は外反きみに直立し、口唇部は短く 強く外反する。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ回転方向不明)	胎土は砂粒を含 み青灰色 (10B6/1)
6 (回)	甕	20.1 — —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色 (5YR4/8)



第22図 H-7号住居址出土遺物(1:4)

cm深さ20cmを測るもので、双方ともP<sub>1</sub>P<sub>2</sub>よりは浅いピットである。また、柱穴とは異なる機能を有するものと考えられるピットにP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>がある。P<sub>5</sub>は67cm×63cmの円形、P<sub>6</sub>は73cm×117cmの

楕円形を呈しその底面にはさらに小さなピットがある。

覆土は、I層のみでバミスをよく含む黒褐色土層であった。

遺物は、住居址北東コーナー近くより須恵器蓋と坏がセットで検出された(図版参称)。その出土状態より良好な位置を保っているものと思われる。坏には「倉」の墨書がなされていた。

カマドは、北壁中央付近に存在したものと考えられたが、すでに壊滅状態にあり、その部分には、構材であった面取り軽石1点と、焼土の堆積のみが認められたにすぎなかった。

#### 遺物 第22図

本住居址より検出された遺物量は少ないが、そのうち須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕の器種が土師器では甕がみられた。

1の須恵器蓋は2の坏とセットで検出されたもので宝珠形のつまみをもつものである。2の坏は、体部に「倉」の墨書がなされている。倉と墨書された事例は、多摩ニュータウンNo.769遺跡12号住居址(丹野 1985)、中央道遺跡調査地区内松本市三の宮遺跡S B 75(中央道遺跡現地説明会にて実見した)等に散見される。

2・3の坏の底部はいずれも回転糸切りによるものである。4・5は長頸瓶の一部である。

6は、弱く「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部である。

なお、本住居址からは石器・鉄製品等の出土はみられなかった。

#### 時期

本住居址、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられる。

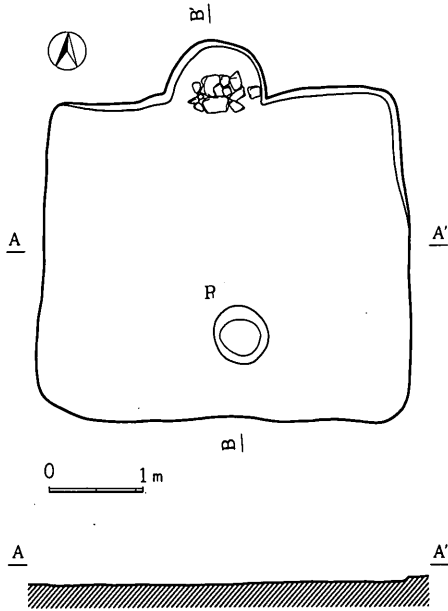
## (8) H-8号住居址

#### 遺構 第23図

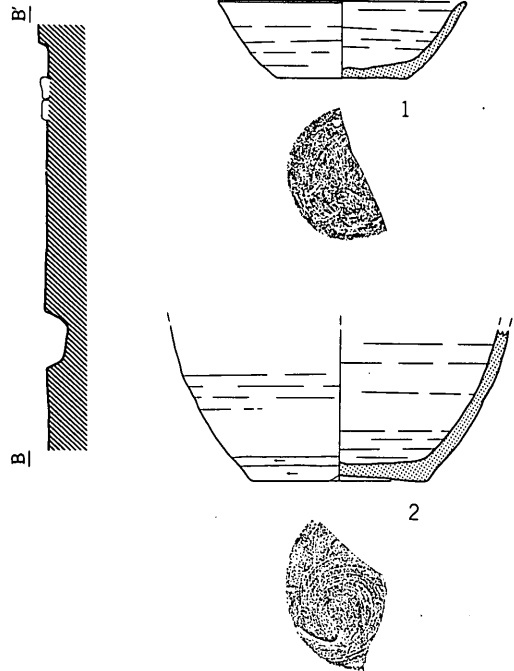
H-8号住居址は、第I区シ-44グリッドより検出された。その平面プランは、南北3.5m東西3.9mを測る隅丸方形を呈し、床面積12.7㎡を測り、主軸方向はN-2°-Wを指す。壁高は10cm未満で、前述したいくつかの住居址と同様上面が削平されている可能性もあろうが、掘り込み自体が浅いことも想定できよう。本住居址においては柱穴は認められなかったが、ピットとしてはP<sub>1</sub>が検出された。P<sub>1</sub>は60cm×55cm深さ25cmを測る不整円形のピットである。なお、本住居址においては良好な出土状態を示す遺物は認められなかった。

カマドは、北壁中央に認められたが、完全に破壊された後、その構材であった面取り軽石がその部分に整然と置かれている状態であった。そのカマドのプランは壁外に半円形に突出している。住居廃絶時におけるカマドの破壊に関する興味深い事例といえよう。ちなみにこのような事例は、本遺跡第I区のH-32・H-37・H-47号住居址において認められた。

1 竪穴住居址



第23図 H-8号住居址実測図 (1:80)



第24図 H-8号住居址出土遺物 (1:4)

第10表 H-8号住居址出土遺物一覧表 <土器>

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	<13.3> 4.0 (6.8)	体部は外反し、平部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 体部ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は白色砂粒を僅かに含み灰色(N6/1) 外面放射状の火襷
2 (回)	長頸瓶 (須)	- -  <9.5>	底部平底。 長頸瓶の底部と思われる。	外面 胴部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 胴部ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は白色砂粒を含み灰色(5Y6/1)

遺 構 第24図

検出された遺物はきわめて少ない。そのうち須恵器では坏・長頸瓶・甕の破片が、土師器では甕の破片がみられた。

1は、回転糸切りによる底部をもつ須恵器坏である。2も、回転糸切りによる底部をもつ長頸瓶の胴部下半と考えられる。

土師器甕は図示できなかったが、「く」の字状の口縁部がみられた。

なお、本住居址では石器・鉄製品等は検出されなかった。

時 期

本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられる。

## (9) H-9号住居址

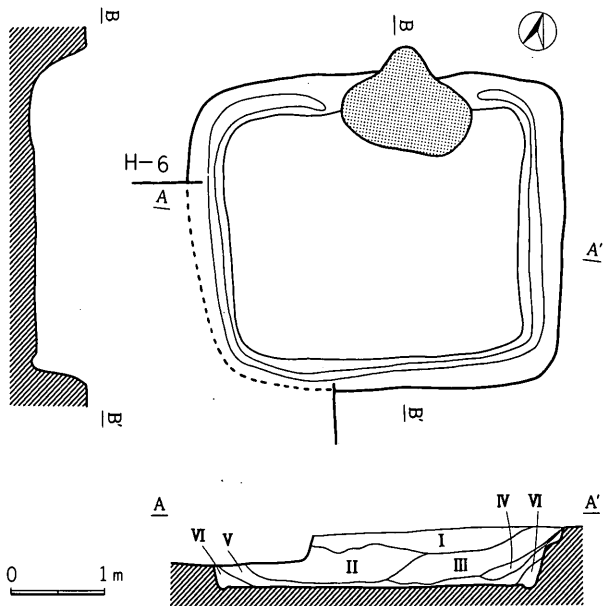
## 遺構 第25・26図

H-9号住居址は、第I区ス-43グリッドより検出されたもので、IV区上面をH-6号住居址に切られている。

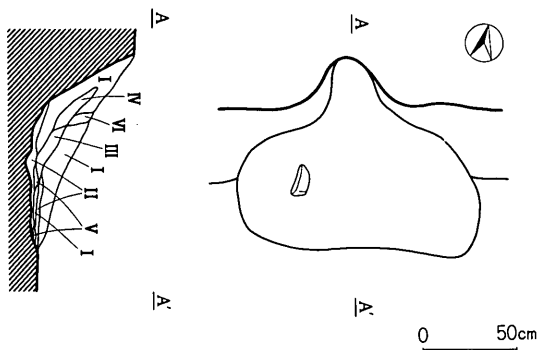
本住居址は、南北3.35m東西4.0mの隅丸方形を呈し、床面積9.8m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-14°-Wを指す。柱穴等のピットはまったく認められなかった。壁高は60cm前後を測り、他の住居址と比べて深い竖穴といえそうである。周溝は10~15cm幅深さ5cm程度のもが住居址を一周している。

覆土は、4層に分層できた。I層は径5mm程度のパミスを多く含む粘性のある黒褐色土層で、II層はローム粒子を多量に含む粘性のある褐色土層、III層もI層と同様に径5mm程度のパミスを多く含む粘性のある黒褐色土層であった。IV層はパミス等をほとんど含まない黒色土層で、V層は径5mm程度の軽石をよく含む黒色土層、VI層はローム粒子を多量に含む褐色土層である。覆土の構成と堆積状況はH-11・H-19・H-22と近似する。

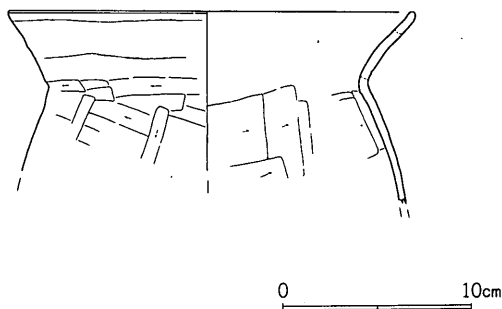
カマドは、北壁中央に存在するが、破壊されており、灰・カーボン・焼土等の分厚い堆積がみられるのみで、その構造は不明であった。土層堆積はVI層に分層された。I層は灰・焼土・炭化物を少量含む灰褐色土層、II層は炭化物を多量に含む黒色土層、III層



第25図 H-9号住居址実測図 (1:80)



第26図 H-9号住居址カマド実測図 (1:40)



第27図 H-9号住居址出土遺物 (1:4)

第II表 H-9号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	甕	21.6 — —	口縁部は「く」の字状に外湾する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ。	胎土は砂粒を多く含み、ふい橙色(2.5 YR 6/4)

は焼土を多量に含み炭化物を含む赤褐色土層、IV層は炭化物・灰を含む黒色土層、V層はローム粒子を含む黄褐色土層、VI層は小粒パミスを含む黒褐色土層であった。これらの堆積層はプライマリーなものではなく、カマド破壊による攪乱層と考えられた。

#### 遺 物 第27図

遺物の出土量はきわめて少なく、本住居址に共伴すると考えられる土器は唯一の「く」の字状口縁の土師甕のみであった。

#### 時 期

本住居址は遺物量が少ないため時期決定が難しいが、その特異な覆土の堆積状況や掘り込みの深さ、切り合い関係等から後述するH-19・H-22との共時性が考えられる。よって奈良時代・前田遺跡第IV期に位置付けられる。

### (10) H-10号住居址

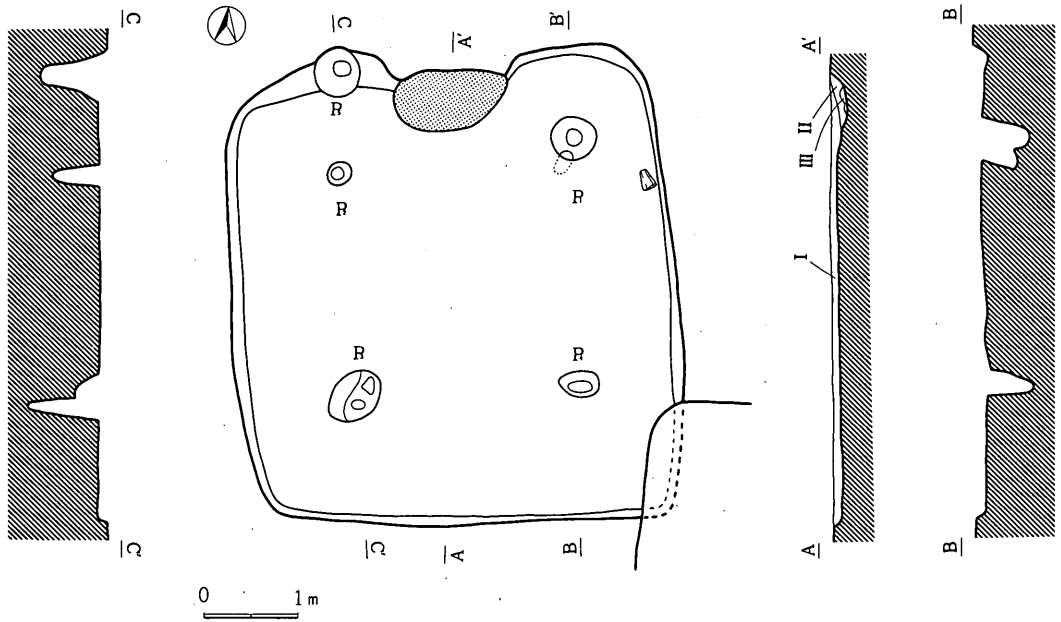
#### 遺 構 第28図

H-10号住居址は、第I区スー43グリッドより検出された。その東南コーナーをH-5号住居址に切られている。

本住居址は、南北4.9m東西4.8mを測り、基本的には隅丸方形を呈するがカマド側の北壁がカマドよりやや張り出している。床面積は20.2m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-12°-Wを指す。壁高は10cm程度を測るのみであり、掘り込み自体が浅いものなのかどうか一考を要する。周溝は認められない。主柱穴は5個検出された(P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>は45cm×50cm深さ50cmを測り、やや傾むいた二段のピットである。P<sub>2</sub>は25cm×25cm深さ50cmを測るもので、P<sub>3</sub>は65cm×45cm深さ75cmを測る二段となるピットである。P<sub>4</sub>は27cm×43cm深さ45cmを測る楕円形のピットである。P<sub>5</sub>は、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>の延長線上の北壁中にあるもので52cm×50cm深さ69cmを測る。

覆土は、I層のみで、細粒パミスを含む粘性のある黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、完全に破壊された状態にあった。図の網点はカマドの構材である粘土(II層)の範囲を示している。その粘土の下には僅かに焼土(III層)が認められた。なお、住居址の東壁付近には支脚に用いられたと思われる面取り軽石が残置されていた。



第28図 H-10号住居址実測図 (1 : 80)

遺物 第29図

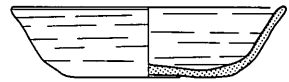
検出された遺物はきわめて少ない。そのうち、本住居址に伴うと考えられる遺物は、図示した1の須恵器杯と土師器甕の胴部のみであった。

1の須恵器杯は回転ヘラキリによる底部をもつものである。

土師器甕胴部は、外面に須恵器にみられるような叩きの施こされるものであった。

時期

本住居址は、遺物量の少なから時期決定が難しいが、切り合い関係等もふまえ、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けておこう。



1

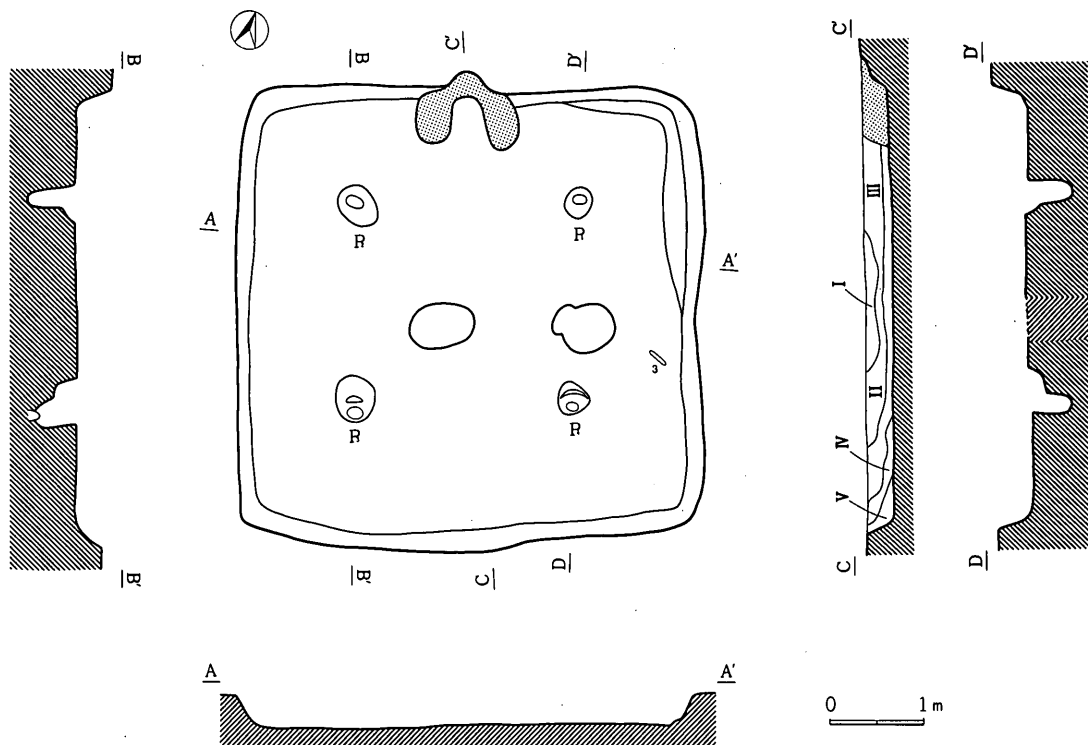


0 10cm

第29図 H-10号住居址出土遺物 (1 : 4)

第12表 H-10号住居址出土遺物一覧表 <土器>

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (回)	杯 (須)	< 14.6 > 3.7 ( 9.2)	体部は外湾する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)		胎土は砂粒を僅かに含み緑灰色 (10GY 5/1)



第30図 H-11号住居址実測図 (1 : 80)

## (11) H-11号住居址

### 遺構 第30・31図

H-11号住居址は、第I区スー43グリッドより検出された。そのIII区上部はH-4号住居址に、IV区の一部はF-38号掘立柱建物址に切られている。

本住居址は、南北4.9m東西4.0mを測る隅丸方形を呈し、床面積20.1㎡を測り、主軸方向はN-23°-Wを指す。壁高は30~35cmを測り、その北東コーナーの壁は段をもって床面へと続く。周溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個である。P<sub>1</sub>は35cm×30cm深さ47cmを測り、P<sub>2</sub>は50cm×35cmの楕円形を呈し深さは50cmを測る。P<sub>3</sub>は50cm×43cm、その底面は自然礫につきあたっており深さ45cmを測り、中段にテラスを有するものとなっている。P<sub>4</sub>は、35cm×35cm深さ45cmを測り、P<sub>3</sub>と同様中段にテラスを有している。

遺物は、IV区の東壁寄りの床面直上より岩の細長い礫が検出されたが、これが唯一良好な出土状態を示すのみで、他は覆土中よりの出土であった。

覆土は、5層に分層できたが、基本的にはH-9・H-19・H-22と同様な土層構成・堆積をみせていた。まず、I層は細粒パミスをよく含み粘性のある黒色土層で、II層はパミス・ローム



粒子の多量に混入する粘性のある暗褐色土層であった。III層は小粒パミスをよく含む粘性のある黒色土層、IV層はパミス・ローム粒子の多量に混入する暗褐色土層で、V層は粒子が細かく粘性のある黒色土層であった。

カマドは、北壁中央に存在している。両袖の前方部と、天井部がすでに崩壊してしまっているものであったが、その大方の構造は理解できた。その両側の袖は、面取り軽石が据えられ粘土（I層）で固められている。東の袖も同様に、溶結凝灰岩礫が据えられた後、粘土（I層）で固められている。天井部にも面取り軽石2個が乗せられ粘土が貼られたと考えられるが、それらはすでに崩落してしまっている。火床部は、特にその前方が掘り込まれており、その中央には柱状に面取りした軽石の支脚石がみられた。

カマドの覆土は、4層に分層できた。I層はカマドの構材となっている粘土層で、II層は炭化物・焼土を若干含み灰をよく含む黒褐色土層で、III層は灰をよく含み炭化物を含む黒褐色土層であった。

#### 遺物 第32図

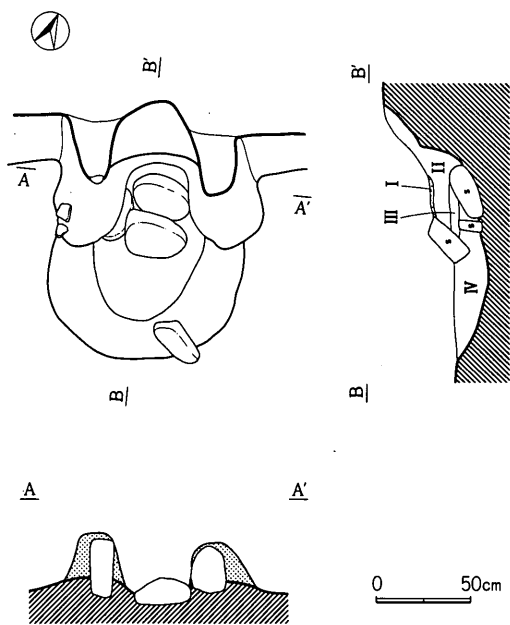
本住居址より検出された遺物は少なかった。そのうち、須恵器では蓋・坏・甕の破片が、土師器では甕の破片がみられた。

1の須恵器坏の底部には、切り離しの後手持ちヘラケズリがなされているが、おそらくその切り離し方法は回転ヘラケズリであったかと推定される。2は須恵器高台付坏で底部は回転ヘラケズリによって調整されているものである。

土師器甕の破片は図示し得なかったが、「く」の字状の口縁部が検出されている。

3は石墨石英片岩の棒状礫である。端部には敲打痕等が認められず、また石墨石英片岩という特殊な石材であるということを考え合わせると、これを日常的な工具である敲石等とするより、祭祀等にかかわる石製品とみたほうがよいであろうか。

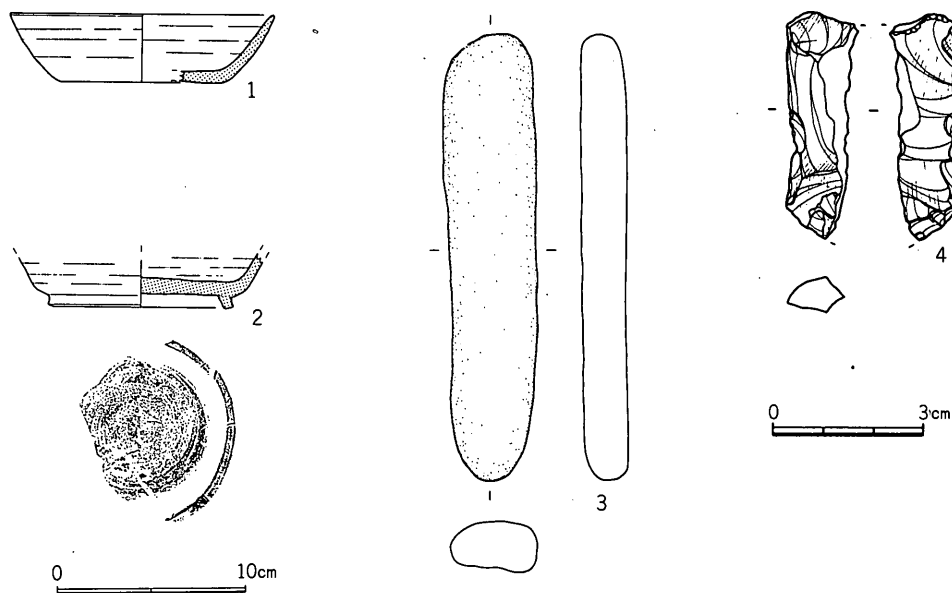
#### 時期



第31図 H-11号住居址カマド実測図（1：40）

第13表 H-11号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	<14.1> 3.6 <8.7>	体部は外湾し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土砂粒を多量に含み灰白色 (N7/0)
2 (回)	坏 (須)	- - (9.9)	貼り付け高台。	外面 ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含みにぶい黄褐色(10YR5/3)



第32図 H-11号住居址出土遺物 (4のみ2:3, 他は1:4)

本住居址は、その切り合い関係、覆土堆積状態、遺物の特徴等から考えて、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

第14表 H-11号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
3	棒状礫	石墨石 英片岩	23.5	5.0	2.8	580	
4	不明	黒曜石	(4.4)	(1.3)	0.9	(5)	

## (12) H-12号住居址

### 遺構 第33図

H-12号住居址は、第I区スー43グリッドより検出された。

本住居址は、床面近くが僅かに確認されたにすぎないが、南北3.4m東西3.65mの隅丸方形を呈し、床面積は10.7㎡を測り、主軸方向はN-10°-Wを指す。柱穴等のピットはまったく認められなかった。

カマドは、焼土等によって北壁のやや東寄りに存在することが確認できたが、壊滅状態にあった。その部分には、その構材に用いられたと考えられる面取り軽石1個と小さな軽石が残存しているのみであった。

遺物

本住居址内からは、僅かに須恵器片土師器片が計十数片程検出されたにすぎず、本住居址に確実に共伴すると考えてもよい遺物は認められなかった。

時期

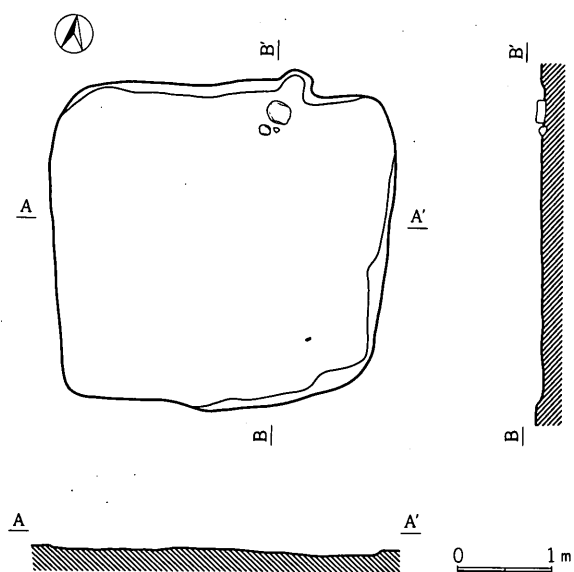
本住居址は、共伴する遺物がなただけに時期決定が難しいが、その規模や構造等から、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期の所産と想定しておこう。

(13) H-13号住居址

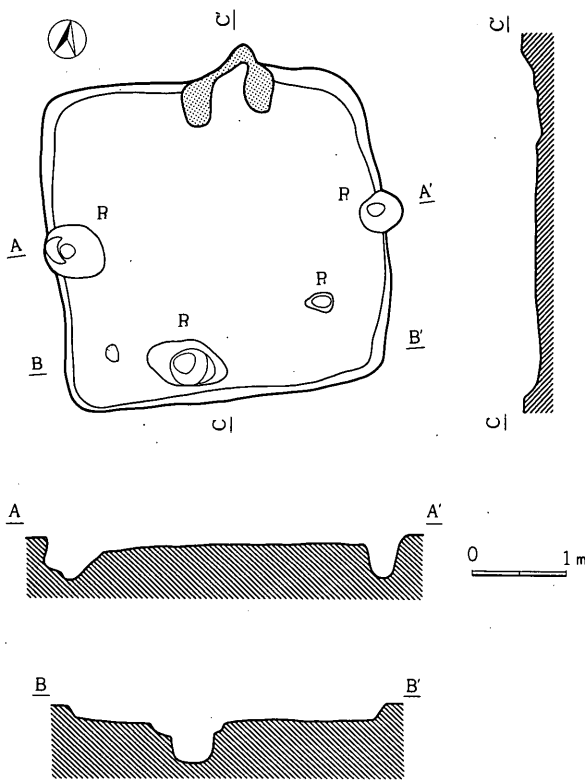
遺構 第34・35図

H-13号住居址は、第I区スー41グリッドより検出された。

本住居址は、南北3.4m東西3.5mの隅丸方形を呈し、床面積10.3m<sup>2</sup>、主軸方向はN-14°-Wを指す。壁高は10cm前後を測るのみであり、他の浅い住居址と同様な問題を孕んでいる。支柱穴は、東西両壁に1個ずつ配されたものであ



第33図 H-12号住居址実測図 (1:80)



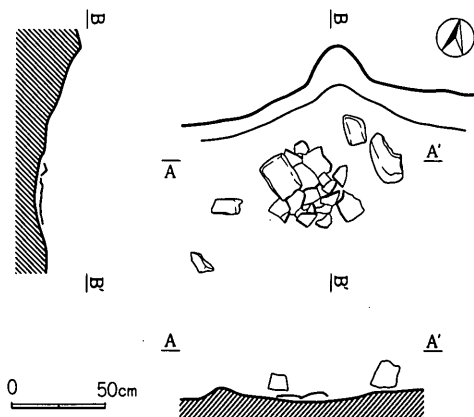
第34図 H-13号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址

る(P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は45cm×45cm深さ35cm、P<sub>2</sub>は70cm×60cmの斜にあく二段のピットで深さ30cmを測る。P<sub>3</sub>は、南壁沿いにある二段の掘り方をもつピットで、80cm×55cm深さ40cmを測る。P<sub>4</sub>は30cm×20cmの貧弱なピットである。

遺物は、良好な出土状態を示すものは認められなかった。

覆土は、細粒パミスを若干含む粘性のある黒灰色土層I層のみであった。



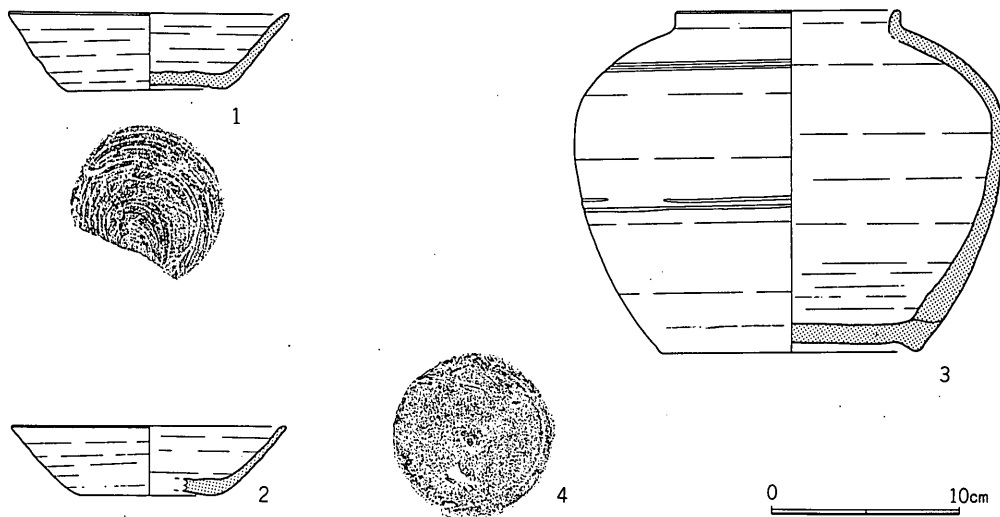
第35図 H-13号住居址カマド実測図(1:40)

カマドは、北壁の中央よりやや東寄りに検出された。完全に破壊されており、その構材に用いられていた面取り軽石等が散乱している状態にあった。また、その火床と考えられる部分からは須恵器1~3の個体の破片が集中して出土した。これらは、カマドの火床部に一括廃棄された破片と考えられる。

遺物 第36図

遺物の出土量は少ないが、須恵器では坏・短頸壺・長頸瓶・甕、土師器では甕の破片がみられた。

1・2の須恵器坏は、いずれも回転糸切りによる底部を有するもので、カマド火床部より出土したものである。なお、この他カマド火床部からは、回転ヘラキリの須恵器坏底部も認められた。



第36図 H-13号住居址出土遺物(1:4)

第15表 H-13号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	坏 (須)	(14.9) 4.3 (8.3)	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 体部ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は中砂粒を 多量に含み灰白色 (7.5Y7/1)内面 に「井」の火線あり
2 (回)	坏 (須)	<14.6> 3.7 <7.0>	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を 含み灰色 (N6/0)
3 (回)	短頸壺 (須)	<12.0> 17.9 (14.2)	頸部は短く直立する。底部には高台が貼 りつけられる。胴部には上位と中位に2 条の沈線が施こされる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を 含み灰色 (7.5Y6/1)

3は、ロクロ整形による須恵器短頸壺で、胴部の上半と下半にそれぞれ二条の沈線が施されたものである。

土師器甕は、図示し得なかったが、僅か「コ」の字状に外反する口縁部も認められた。

なお、本住居址においては石器・鉄製品等は認められなかった。

#### 時 期

本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。

### (14) H-14号住居址

#### 遺 構 第37・38図

本住居址は、第I区ス-41グリッドより検出された。その西壁においてH-15と僅かに重複するもので、微妙ではあるが本住居址がこれに先行するものとしてとらえた。

H-14は、南北5.88m東西5.7mの隅丸方形を呈し、床面積28.6㎡を測り、主軸方向はN-14°-Wを指す。壁高は15～20cm前後で、周溝は巡らない。主柱穴は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は65cm×50cm深さ50cm、P<sub>2</sub>は60cm×50cm深さ50cm、P<sub>3</sub>は70cm×55cm深さ50cm、P<sub>4</sub>は72cm×67cm深さ50cmを測る。

遺物は、良好な出土状態を示すものは認められなかった。

覆土は、2層に分層できた。I層は小粒パミスを含むやや粘性のある黒褐色土で、II層はパミス等をあまり含まない黒色土層であった。

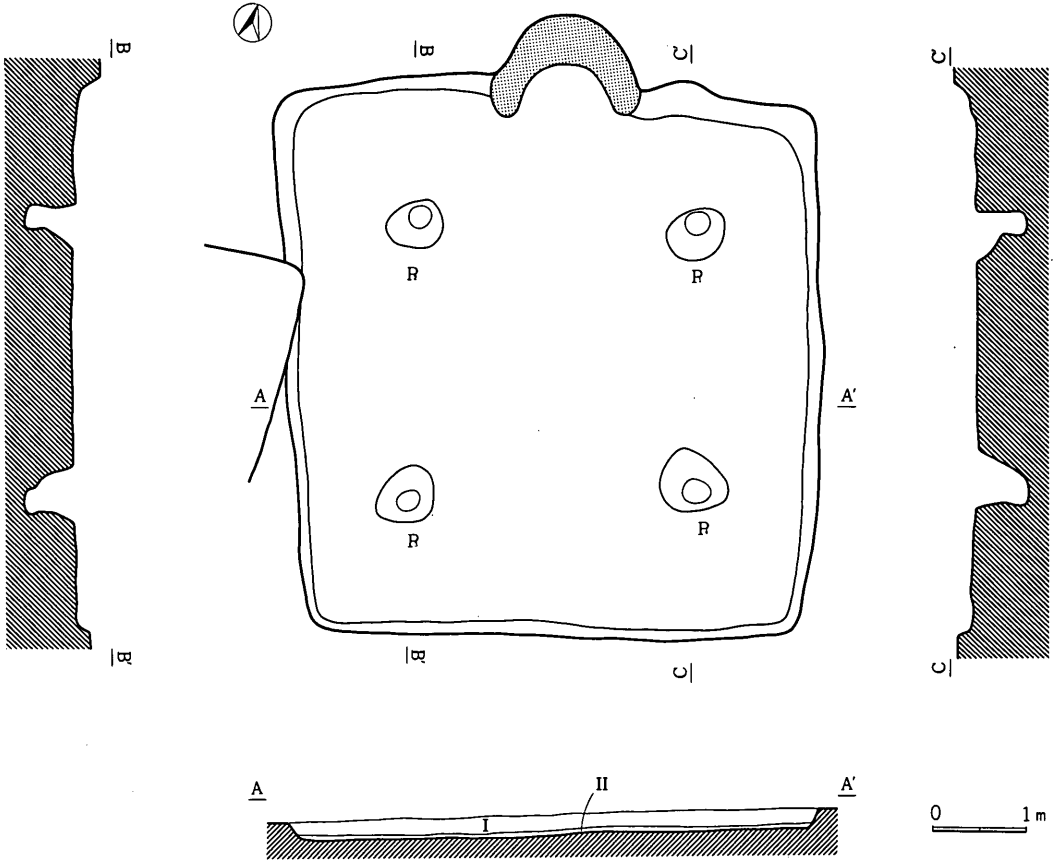
カマドは、北壁中央より検出されたが、壊滅状態にあった。しかし、僅かに袖らしきローム層の張り出しが左右に認められ、その構材に用いられたと思われる軽石数個が認められた。

#### 遺 物 第39・40図

遺物の出土量は多くないが、須恵器では蓋・坏・甕、土師器では甕の各器種が認められた。

1～3は須恵器蓋で、つまみ部が宝珠形を呈する1・2と皿状を呈する3がある。

1 竪穴住居址

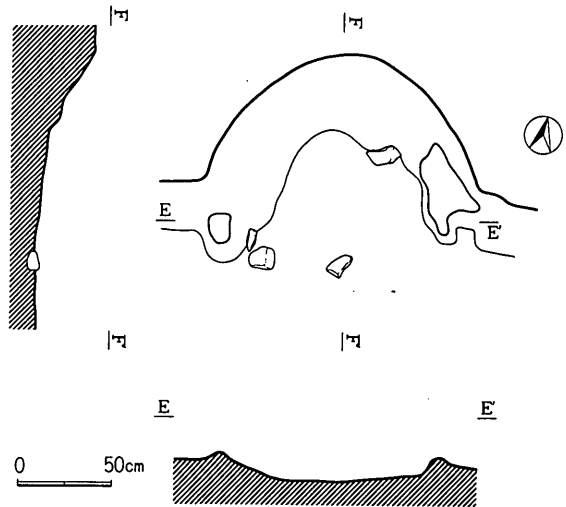


第37図 H-14号住居址実測図 (1 : 80)

須恵器坏では、底部切り離しの後手持ちへラケズリを加える例が4・5を含め7例認められ、その他糸切りによる底部が2例、回転へラキリによりその後調整を加えられない底部が2例認められた。

土師器甕は、7のように「く」の字状の口縁部をもつものがみられた。

石器は、用途不明ではあるが扁平な楕円の河床礫が認められた(8)。

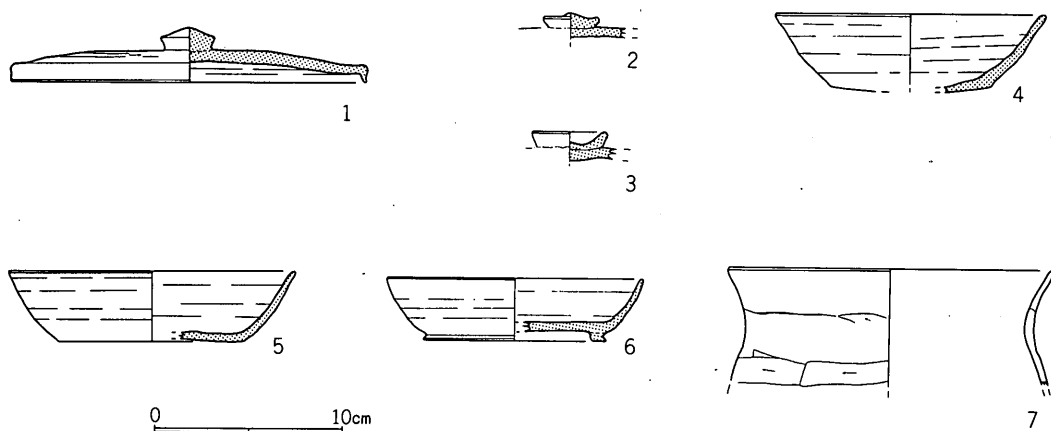


第38図 H-14号住居址カマド実測図 (1 : 40)

IV 遺構と遺物

第16表 H-14号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

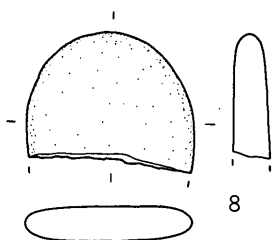
挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	蓋 (須)	2.8 2.9 18.9	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 ロクロヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を多く含み灰色 (N4/0)
2 (完)	蓋 (須)	3.0 —	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 ロクロヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を含み灰色 (N4/0)
3 (回)	蓋 (須)	4.0 —	つまみ部は中央のくぼむ皿状を呈する。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選され灰白色 (N7/0)
4 (回)	坏 (須)	<14.4 4.2 <8.7	体部は外反する。底部は僅かに丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は細砂粒を多く含み灰色 (10Y6/1) 外面火線あり
5 (回)	坏 (須)	<15.2 3.7 <9.8	体部は丸味をおびて外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を含み灰色 (10Y5/1)
6 (回)	坏 (須)	<13.7 3.3 <9.8	体部は外反する。貼り付け高台。法量では、器深があまりない。	外面 ロクロヨコナデ、底部は高台貼り付けの後回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み赤褐色 (5YR4/6)
7 (回)	甕	(17.2) —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部斜位のナデ。胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (5YR5/8)



第39図 H-14号住居址出土遺物 (1:4)

第17表 H-14号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
8	不・明	玄武岩質 安山岩	(5.0)	6.6	1.4	(80)	



第40図 H-14号住居址出土遺物 (1:3)

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

(15) H-15号住居址

遺構 第41図

H-15号住居址は、第I区スー42グリッドより検出された。その北東コーナーは、H-14号住居址の西壁の一部を僅かに切っていることが捉えられた。

本住居址は、南北3.7m東西3.9mを測る隅丸方形を呈し、床面積12.9㎡を測り、主軸方向はN-3°-Wを指す。壁高は、5cm前後を測るのみと浅く、周溝は認められなかった。柱穴等のピットも、まったく認められなかった。

覆土は、I層のみで粒子の細かく粘性のある黒褐色土層であった。

遺物は、北壁寄りの中央より須恵器片がまとまって検出された。これらの破片は、意図的に置かれた感が強い。

カマドは、現段階では捉えられなかった。本住居址が非常に浅く、カマドが飛ばされてしまっていることも考えられようが、焼土等も特に認められないためカマドはないものと判断しておこう。

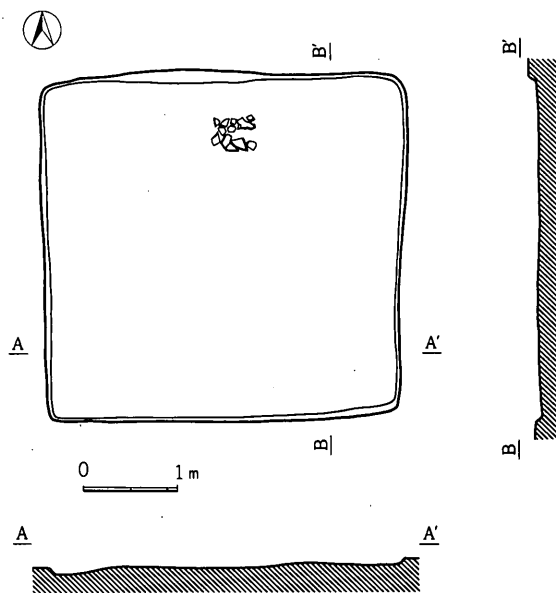
遺物 第42図

本住居址から検出された土器は、北壁寄りからまとまって出土した須恵器甕の破片のみであった。その甕については器形を知り得なかったため図示しなかった。

1は、IV区より検出された黒曜石の両面加工の石鏃で、先端部を僅かに欠損する。

時期

本住居址は、遺物がほとんどないため時期決定が難しいが、住居址の規模・構造・切り合い関係等から、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けておこう。



第41図 H-15号住居址実測図 (1:80)

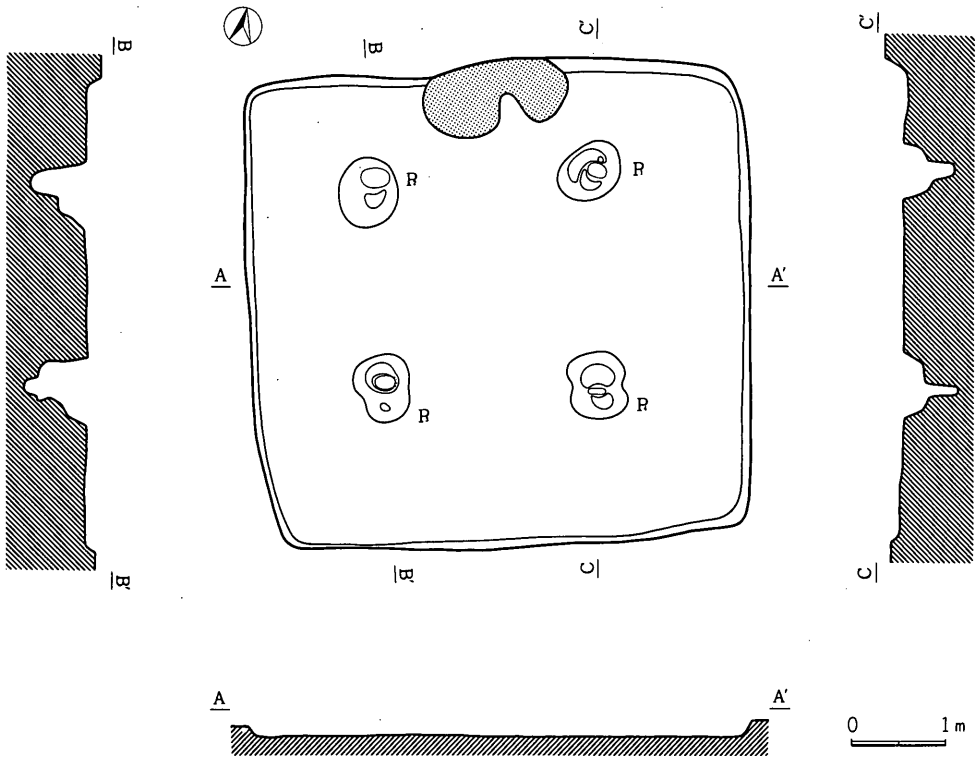
第18表 H-15号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	石鏃	黒曜石	(2.4)	1.9	0.4	(1.1)	



第42図 H-15号住居址出土遺物 (2:3)





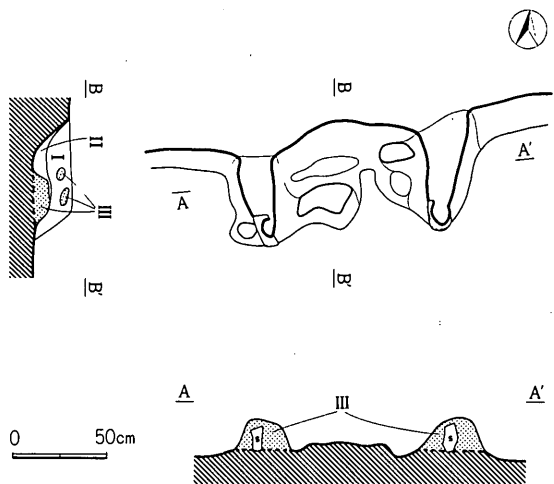
第43図 H-16号住居址実測図 (1:80)

(16) H-16号住居址

遺構 第43・44図

H-16号住居址は、第I区スー42グリッドより検出された。

本住居址は、南北5.03m東西5.3mの隅丸方形を呈し、床面積24.3m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-14°-Wを指す。壁高は10~20cmを測り、周溝は認められない。柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は70cm×55cm深さ55cm、P<sub>2</sub>は73cm×62cm深さ55cmを測る。P<sub>3</sub>は70cm×60cm深さ63cm、P<sub>4</sub>は70cm×60cm深さ55cmを測る。4個のピットはいずれも二段の掘り方を有している。



第44図 H-16号住居址カマド実測図 (1:40)

覆土はI層のみで、細粒パミスをよく含む黒褐色土層であった。

遺物は、良好な出土状態を示したものは、北東コーナー付近より出土した1の坏のみであった。

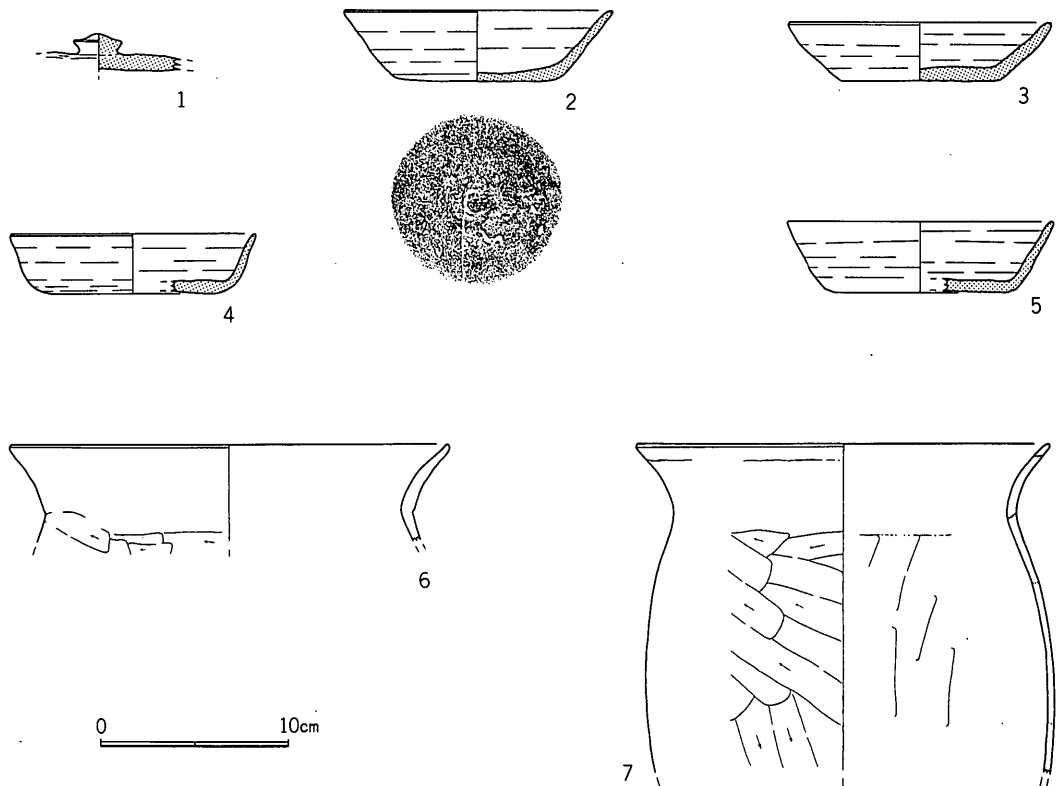
カマドは、北壁中央に存在し、その大半が破壊されていた。粘土の天井部はすでに火床部に崩落している(II・III層)。東西の両袖はその後部部が残存しており、双方とも面取り軽石を軸に粘土(III層)で固めたものであることが捉えられた。カマド内の覆土は、カマド使用に伴う焼土カーボン等のプライマリー堆積ではなかった。I層は、住居址覆土I層と同一の黒褐色土層で、II層をブロック状に含んでいる。II層は、若干の粘土を含む白色粘土層で、III層の攪散したものとみなし得よう。III層はカマドの構材となっている白色粘土層である。

遺物 第45・46図

遺物の検出量は少ないが、須恵器では蓋・坏・甕、土師器では甕の各器種がみられた。

1の須恵器蓋は、宝珠形つまみを有するものである。

2は回転ヘラキリの底部を有する須恵器坏で、3は回転ヘラキリの後手持ちヘラケズリのなき

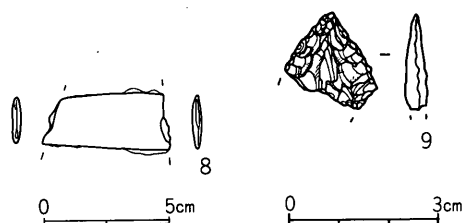


第45図 H-16号住居址出土遺物(1:4)

IV 遺構と遺物

第19表 H-16号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	蓋 (須)	2.5 — —	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を多く含みオリープ灰色(2.5GY5/1)
2 (完)	坏 (須)	14.4 3.8 9.0	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を多く含み灰白色(10Y8/1)
3 (回)	坏 (須)	<14.0> 3.1 <8.4>	体部は大きく外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み浅黄褐色(10YR8/4) 焼成は良好でない
4 (回)	坏 (須)	<13.0> 3.2 <9.0>	体部は直立気味に外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は比較的精選されにぶい赤褐色(5YR4/3) 焼成良好
5 (回)	坏 (須)	<14.2> 3.7 <10.2>	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は比較的精選されにぶい赤褐色(5YR4/3) 焼成良好
6 (回)	甕	<23.4> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色(5YR4/8)
7 (回)	甕	<22.0> — —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色(5YR4/8)



第20表 H-16号住居址出土遺物一覧表  
〈金属器・石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
8	鎌	鉄	(5.1)	2.1	0.4	(13)	
9	石 鎌	黒曜石	(1.8)	(1.8)	0.4	(1)	

第46図 H-16号住居址出土遺物(1:3)(2:3)

れたものである。4・5の坏は、いずれも回転ヘラケズリのなされた底部を有する須恵器坏である。

6・7は、土師器甕の口縁部で「く」の字状を呈するものである。鉄器では、III区より、鎌の刃部中央の破片が検出された(8)。石器では、黒曜石の両面調整の石鎌が1点みられた(9)。

時期

H-16号住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

(17) H-17号住居址

遺構 第47図

本住居址は、第I区スー42グリッドより検出された。その西半分においてF-47号掘立柱建物址と重複している。その両者の前後関係の認定は困難であったが、一応本住居址の床面上においてはF-47のピットは認められず、床面を剥がした時点において検出できたため、本住居址はF-47に後出するものとして捉えた。

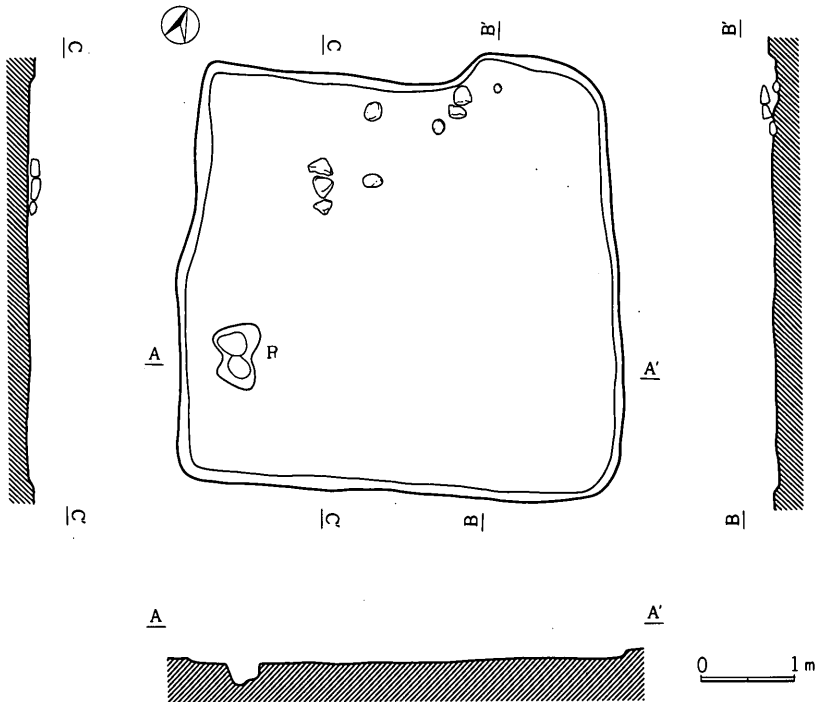
本住居址は、南北4.7m東西4.7mの隅丸方形を呈するが、その北壁の東半分はやや突出している。床面積は18.9m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-19°-Wを指す。壁高は10cm未満を測るのみで、他の浅い住居址と同様な問題を孕んでいるといえる。周溝は認められない。ピットは、70cm×50cm深さ20cmの繭形をしたピット1個をもつにすぎない。

覆土は、小粒のパミスを若干含み粘性のある黒褐色土I層のみであった。

良好な出土状態を示す遺物は認められない。

カマドは、北壁の中央よりやや東に存在したが、壊滅状態にあり、その構材に用いられていたと考えられる軽石が、住居址の北半分に散乱していた。

遺物 第48図



第47図 H-17号住居址実測図(1:80)

第21表 H-17号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 種 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	2.5 3.3 <15.1>	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 ロクロヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰色(N6/0)

本住居址より検出された遺物はきわめて少ないが、須恵器では蓋・坏・甕の破片が、土師器では甕の破片が認められた。

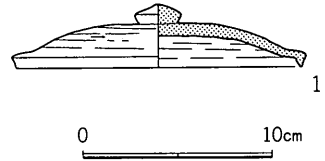
1の須恵器蓋は宝珠形つまみ部をもつものである。

須恵器坏は、図示でき得るものがなかったが、回転糸切りによる底部をもつものが2点認められた。

土師器甕は、「く」の字状の口縁部をもつものであった。

時 期

本住居址の時期決定となり得る根拠は少ないが、遺物、住居の構造、掘立柱建物址との切り合い関係等から奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けておこう。



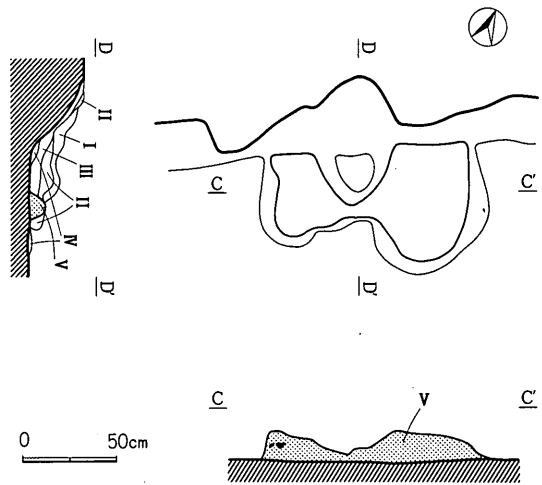
第48図 H-17号住居址出土遺物(1:4)

(18) H-18号住居址

遺 構 第49・50図

H-18号住居址は、第I区ス-42グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.5m東西4.5mの隅丸方形を呈し、床面積16㎡を測り、主軸方向はN-16°-Wを指す。壁高は20~25cmを測り、周溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が認められた。P<sub>1</sub>は50cm×55cm深さ45cm、P<sub>2</sub>は60cm×55cm深さ35cm、P<sub>3</sub>は57cm×50cm深さ40cm、P<sub>4</sub>は70cm×60cm深さ25cmを測る。



第49図 H-18号住居址カマド実測図(1:40)

覆土は、2層に分層できた。I層は多量のパミスを含む粘性のある黒褐色土層で、II層は小粒パミスをよく含む粘性のある黒色土層であった。

良好な出土状態を示す遺物は、住居址内に認められなかった。

カマドは、北壁中央に位置するが、ほぼ壊滅状態にあり、その構材に用いられ粘土（V層）の堆積がみられるのみであった。カマドの覆土は、4層に分層された。I層は灰褐色土層、II層は褐色土層、III層は暗褐色土層でいずれも焼土を多量に含むものであったが、IV層は焼土を含まない黒色土層であった。

遺物 第51図

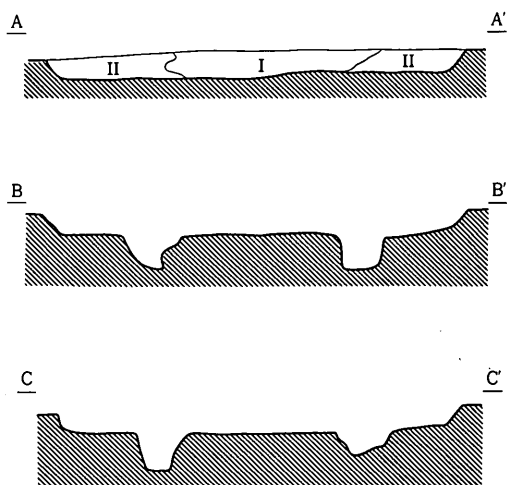
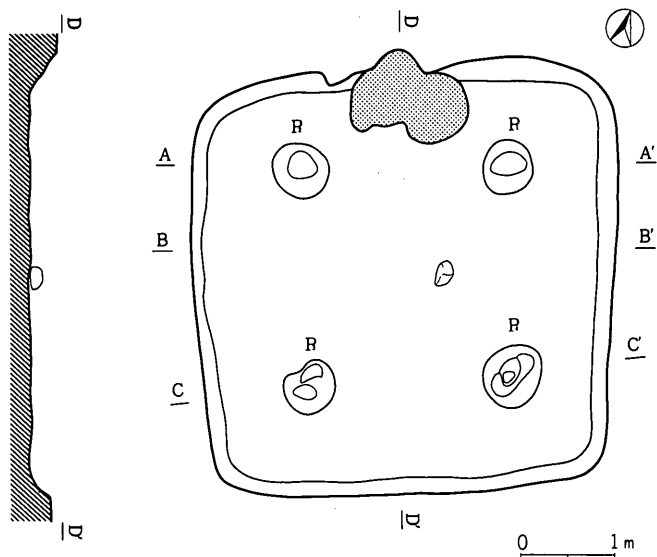
本住居址より検出された遺物は、土器片30片に満たない。須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕の破片がみられたが、いずれも器形を知り得るには程遠いものであった。ただし、土師器甕の破片で叩きの施されたものがあったことを特記しておこう。なお、石器では滑石製の紡錘車がI区より出土した(1)。

時期

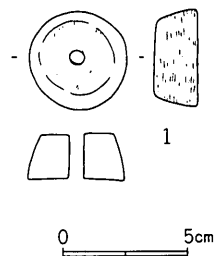
本住居址は、遺物がないのに等しいため時期決定は難しい。

第22表 H-18号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	紡錘車	滑石	3.9	3.9	1.8	50	



第50図 H-18号住居址実測図 (1:40)



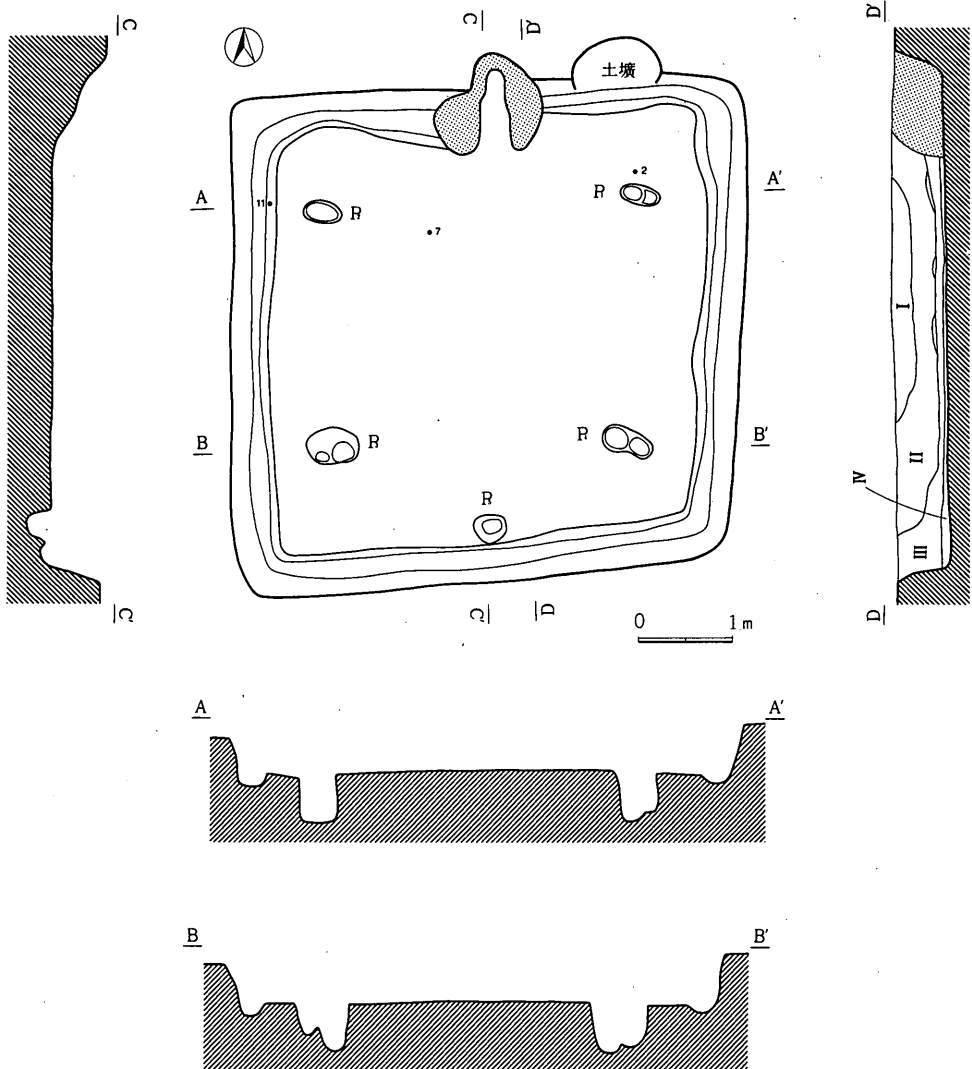
第51図 H-18号住居址出土遺物 (1:4)

## (19) H-19号住居址

遺構 第52・53図

H-19号住居址は、第I区スー43グリッドにおいて検出された。その西半分の上面をH-20号住居址に切られ、また、その北壁の一部を土壌に切られている。

本住居址は、南北5.75m東西5.45mの隅丸方形を呈し、床面積24.7㎡を測り、主軸方向はN-5°-Wを指す。壁高は、50cm前後を測り、他の住居址と比べ深いものといえる。周溝は、幅30cm深さ10~15cmを測るものが住居址を一周する。支柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は43



第52図 H-19号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址

cm×20cm深さ50cm、P<sub>2</sub>は40cm×25cm深さ48cm、P<sub>3</sub>は55cm×40cm深さ48cm、P<sub>4</sub>は55cm×30cm深さ53cmを測る。このうち、P<sub>1</sub>P<sub>3</sub>P<sub>4</sub>の3個はその掘り方がW字形を呈しており、主柱に付随する支柱的な柱があるかもしれないことを予測させた。また、P<sub>5</sub>は南壁際の中央にあり35cm×30cm深さ20cmを測る。

遺物は、北西コーナーの周溝中より紡錘車(11)が、P<sub>2</sub>の東の床面直上より土師器甕(7)がP<sub>1</sub>の北の床面直上より須恵器坏(2)が検出された。他の遺物は、覆土中のものである。

覆土は、4層に分層された。I層は小粒パミスをよく含む黒褐色土層、II層は小粒パミスを多く含む径2cm程の軽石・カーボン若干含む黒褐色土層、III層は細粒パミスを含む黒褐色土層、IV層はパミスをほとんど含まない粘性のある黒色土層であった。その土層構成は、H-9・H-11・H-22と同様なものであった。

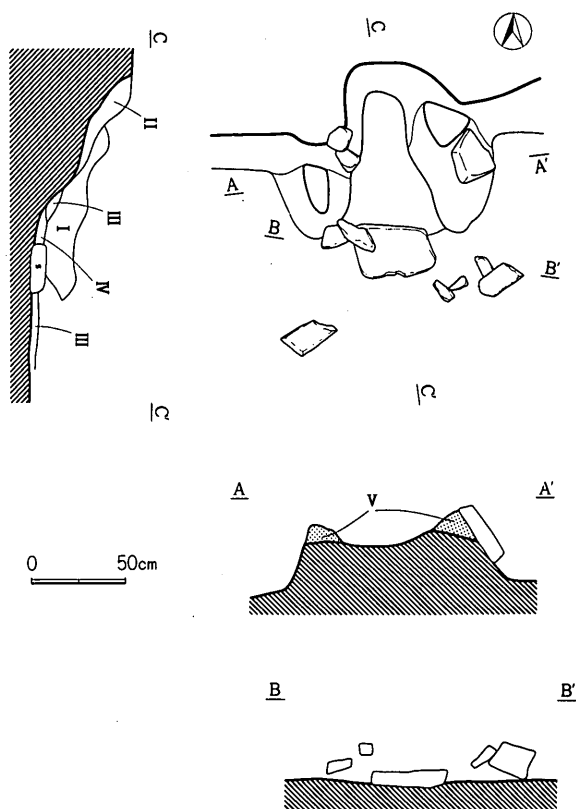
カマドは、北壁中央部に位置するもので、ほぼ半壊状態にあった。その構造としては、住居址が掘り込まれる時点でカマドの部分はロームが一部高く残され、さらにその上に粘土(V層)が貼られている。また、その前方部の袖や天井部は、面取り軽石が組まれ粘土で固められたものと思われるが、その構材である軽石は散乱している状態にあった。

カマド覆土は、4層に分層された。I層は多量の灰を含み若干のロームが混入する混色土層、II層は焼土を多く含む黒褐色土層、III層は焼土を含まない黒色土層、IV層は焼土をよく含む黒色土層であった。

遺物 第54・55図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・坏・高坏・甕、土師器では坏・甕の各器種がみられた。

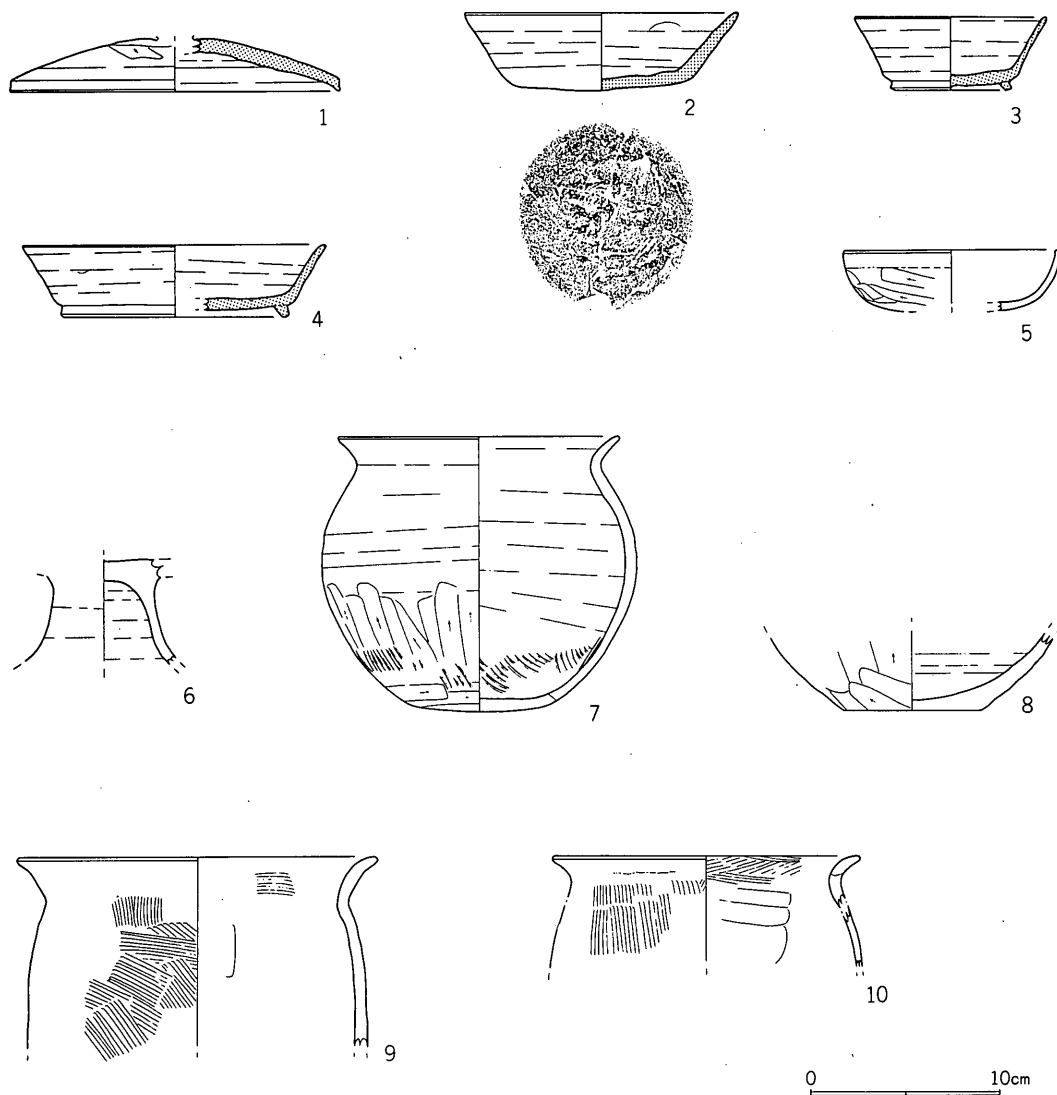
1の須恵器蓋は、かえりを有さないものでつまみ部の形状は不明である。



第53図 H-19号住居址カマド実測図(1:40)



IV 遺構と遺物



第54図 H-19号住居址出土遺物 (1:4)

2の坏は、完全な還元炎焼成となっていない須恵器坏で、回転ヘラキリによる底部をもつ。3・4は須恵器高台付坏で、3は小形品である。

5は、偏平な丸底を呈し体部が弓なりに外反する土師器坏である。

6は、2と同様完全な還元炎焼成となっていない須恵器高坏で、ロクロ整形によるものである。

7は、小形球胴の土師器甕で、ロクロ整形の後、その外面胴部下半には須恵器にみられる叩きがなされ、またこれに対応する内面には青海波文も観察されるものである。なお、8の甕も7と同様ロクロによるものかもしれない。

第23表 H-19号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器種の特徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	— — (7.2)	かえりを有さない。 つまみ部の形状不明	外面 ロクロヨコナデ、天井部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は中砂粒を多く含み、赤褐色(5YR5/4) 焼成は良好でない
2 (完)	坏 (須)	14.6 4.1 8.6	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を多く含み、赤褐色(7.5YR6/6)
3 (回)	坏 (須)	(10.2) 3.9 (6.4)	体部は外反する。貼り付け高台。 口径は比較的小さい。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部調整不明 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は若干の砂粒を含み、赤褐色(5YR4/3) 焼成良好
4 (回)	坏 (須)	<16.1> 3.8 <12.1>	体部は直線的に外反する。 貼り付け高台。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み、青灰色(5B5/1)
5 (回)	坏	<11.5> (3.2) —	体部は丸味をおびて内湾し、底部は偏平な丸底を呈する。	外面 ヨコナデの後、体部以下ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含み、赤褐色(7.5YR6/4)
6 (完)	高坏 (須)	— —		外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み、淡黄褐色(7.5YR8/3) 須恵器?
7 (回)	甕	(15.0) 14.4 8.0	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。底部はやや丸味をおびた平底。	外面 胴下半部叩きの後、全体をロクロヨコナデ、続いて胴下半部ヘラケズリ 内面 背海波のあて具痕が認められ、胴上半部はロクロヨコナデ	胎土は比較的精選され、淡黄色(2.5Y8/3)
8 (回)	甕	— — (7.2)	胴部は球状を呈し、底部平底。	外面 胴部ヘラケズリ、底部ナデ? 内面 ヨコナデ(ロクロ使用?)	胎土は比較的精選され、淡黄色(2.5Y8/3)
9 (回)	甕	<19.1> — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は比較的直線的に下降する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部に粗い刷毛目状調整を施す 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を多く含み、淡黄色(2.5Y8/3) 焼成は良好でない
10 (回)	甕	<16.4> — —	口縁部は「く」の字状に短く外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部に粗い縦方向の刷毛目状調整 内面 口縁部粗い刷毛目状調整、胴部ヘラナデ	胎土は金雲母を含み、淡黄褐色(7.5YR8/4)

第24表 H-19号住居址出土遺物一覽表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
11	紡錘車	須恵器	5.6	5.7	3.2	95	

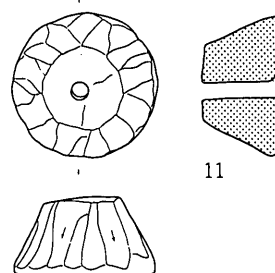
9・10は、外面に刷毛目状調整がなされる土師甕の破片である。

なお、この他図示しなかったが、いわゆる「く」の字状口縁の甕型土器の破片が認められた。

11は、須恵器製の紡錘車で、外面がヘラケズリによって整形されているものである。なお、須恵器製の紡錘車は、望月町の岩清水遺跡(望月町教育委員会 1986)等に散見される。

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。



0 5cm

第55図 H-19号住居址出土遺物(1:3)

## (20) H-20号住居址

遺構 第56・57図

H-20号住居址は、第I区スー43グリッドより検出された。その東半分は、H-19号住居址の上部を切っている。

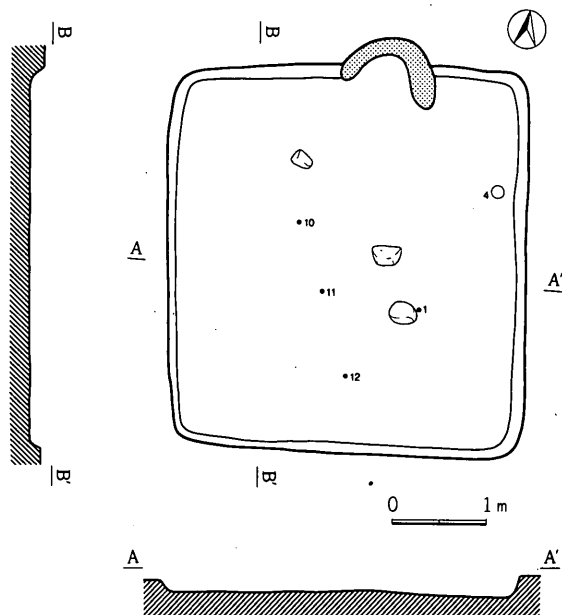
本住居址は、南北4.1m東西3.8mを測る隅丸方形を呈し、床面積13.0m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-10°-Wを指す。壁高は10~15cmを測り、周溝は認められない。床面は、非常に硬質化した貼床である。ピットは、柱穴その他1個も認められない。

遺物は、住居の中央付近より1の円面硯の破片が礫下より出土し、またその西からは床に埋め込まれた砥石が砥面を上にして出土した(11)。さらにその北の床面直上からは刃子(10)が検出された。東壁の中央よりやや北寄りの床面直上には4の坏が正常位で出土した。

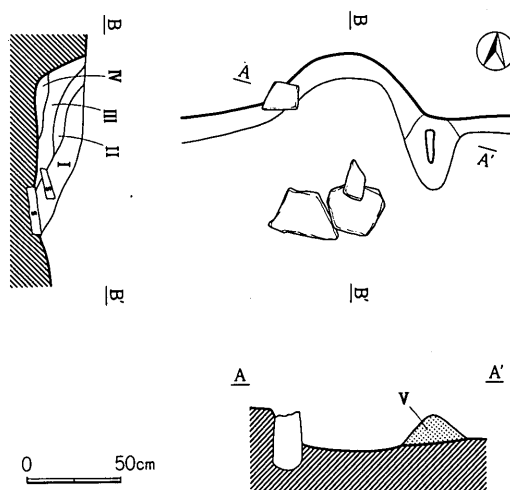
覆土は、I層のみで、細粒パミスを含み粘性のある黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央よりやや東寄りにあり、半壊状態にあった。ただし、西側の袖の奥に据えられた面取り軽石は残存しており、黒色土に若干ロームが混入する土(V層)を構材に用いた東側の袖も一部残存していた。また、火床部に残置された偏平な面取り軽石二枚もカマドの構材に用いられていたものである。

カマドの覆土は4層に分層できたが、カマドの破壊に伴いプライマリーな状態ではないものと

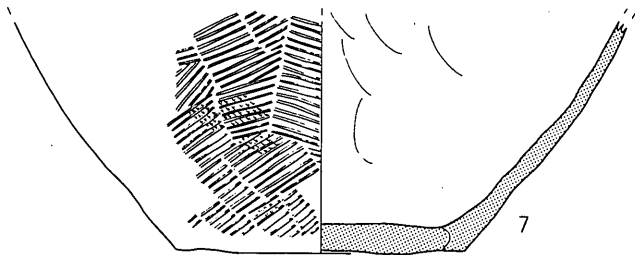
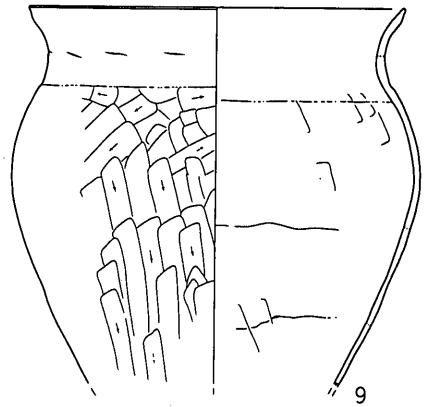
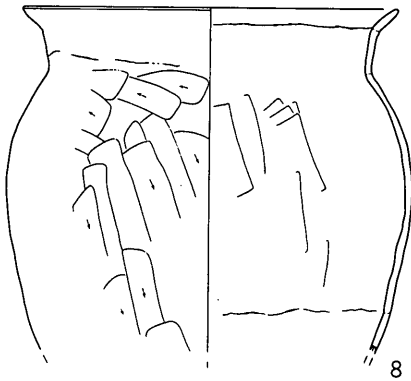
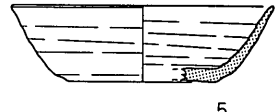
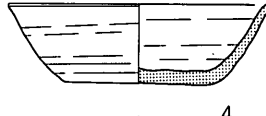
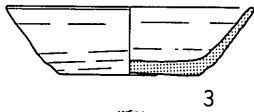
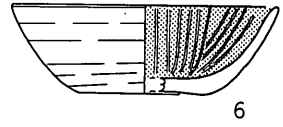
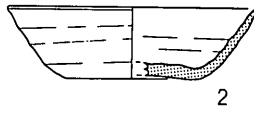
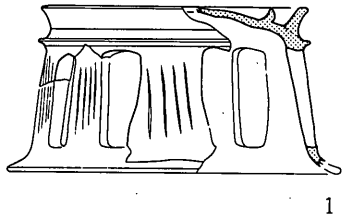


第56図 H-20号住居址実測図(1:80)



第57図 H-20号住居址カマド実測図(1:40)

1 竖穴住居址

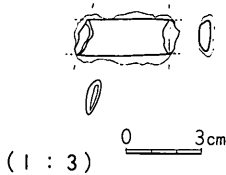


第58图 H-20号住居址出土遗物 (1:4)

IV 遺構と遺物

第25表 H-20号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

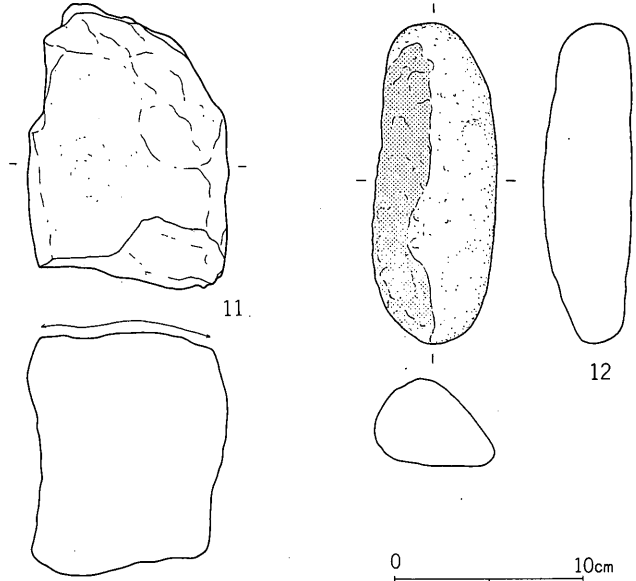
挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	円面硯 (須)	(14.2) — —	硯面部では、シャープな縁から池・内堤へと続き磨墨面でゆるく高まりをみせる。透しは9箇所になるものと考えられ、脚部には4条の沈線が施こされる。	外面 ロクロヨコナデ?磨墨面にはあまり光沢がみられず、墨の付着も認められない。 内面 ナデ	胎土は細砂粒を多く含み灰色(N5/0)脚部には自然釉付着
2 (回)	坏 (須)	(13.3) 3.7 (7.0)	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を多く含み灰色(7.5Y6/1)内外面に火襷きあり
3 (回)	坏 (須)	<13.2> 3.6 7.5	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰色(N5/0)
4 (完)	坏 (須)	14.0 4.2 8.1	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を多く含み灰白色(10Y8/1)内外面に火襷きあり
5 (回)	坏 (須)	<14.0> 4.0 8.0	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は細砂粒を多く含み黄褐色(10YR5/6)
6 (回)	坏	<14.2> 4.6 (6.9)	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 黒色研磨 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多量に含み暗褐色(7.5YR3/4)
7 (回)	甕 (須)	— (15.4)	胴下半部は外反する。底部平底。	外面 叩きが施こされる 内面 ナデ	胎土は細砂粒を多く含み灰色(10Y5/1)
8 (回)	甕	(20.0) — —	口縁部は「コ」の字状に外反し、胴上半部はややふくらむ。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色(5YR8/8)
9 (回)	甕	(20.0) — —	口縁部は「コ」の字状に外反し、胴上半部はややふくらむ。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色(5YR4/8)



察せられる。I層は若干の焼土を含む黒褐色土層、II層は多くの焼土粒子を含み若干のカーボンも含む褐色土層、III層は若干の焼土・カーボンを含む黒褐色土層、IV層は多くの焼土を含む褐色土層であった。

遺物 第58図・59図

検出された遺物は、須恵器で



第59図 H-20号住居址出土遺物 (1:4)

1 竪穴住居址

は円面硯・蓋・坏・甕が、土師器では坏・甕がみられた。

・第26表 H-20号住居址出土遺物一覧表<金属器・石器>

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
10	刃子	鉄	(3.8)	1.5	0.5	(8)	
11	砥石	砂岩	(13.8)	10.6	13.5	(2,960)	
12	敲石	安山岩	16.9	6.4	4.9	710	

1の須恵器円面硯は脚台部に9個所の透しを有するものである。その磨墨面には顕著な磨滅も認められず墨の付着もないため、使用頻度が低かったのであろうか。また、

その胎土等もあまり精選されておらず、在地の窯で焼かれた製品なのかもしれない。

2～5の須恵器坏は、いずれも回転糸切りによる底部を有している。

6の土師器坏は、内面黒色研磨のなされたもので、底部は回転糸切りとなっている。

8・9は、「コ」の字状口縁の土師器甕である。

鉄製品には、10の刃子がある。出土した時点においては、ほぼ完存していたが、錆が激しく中央部が取り上げられたのみであった。なお、本刃子は円面硯とセットとなり、文房具（木簡等の削割用）としての機能を果たしていたとも考えられよう。

石器では、11の砥石と12の敲石がある。

11の砥石は、砥面が一面のみで、その面には敲打痕も観察できる。10の刃子等が砥がれたのであろうか。

12の敲石は、その側面が敲打によって剥落するものである(図の網点)。礫の端部が用いられる敲石とは使用法が異なるのであろうか。

時期

本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。

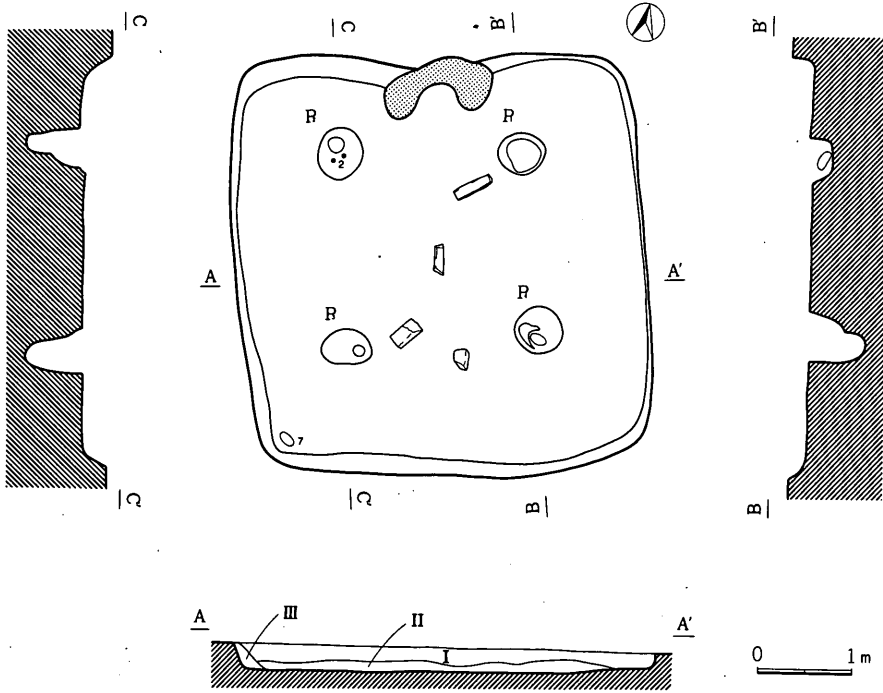
(21) H-21号住居址

遺構 第60・61図

H-21号住居址は、第I区セー41グリッドより検出された。

本住居址は、南北4.4m東西4.35mを測る隅丸方形を呈し、床面積は16.2㎡を測り、主軸方向はN-17°-Wを指す。壁高は、15～30cm前後で、周溝は認められない。支柱穴は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は、50cm×45cmで、深さは25cmと他より浅く、その内部には礫がみられた。P<sub>2</sub>は55cm×48cm深さ55cm、P<sub>3</sub>は55cm×35cm深さ60cm、P<sub>4</sub>は50cm×50cm深さ60cmを測る。P<sub>2</sub>とP<sub>4</sub>の掘り方は二段になっている。

遺物は、P<sub>2</sub>のピット内より2の須恵器大甕の破片が出土した。おそらくP<sub>2</sub>の埋土中に埋め込まれたのであろう。この甕は、H-6のカマド内出土の破片と接合をみており、両者の時間的關係



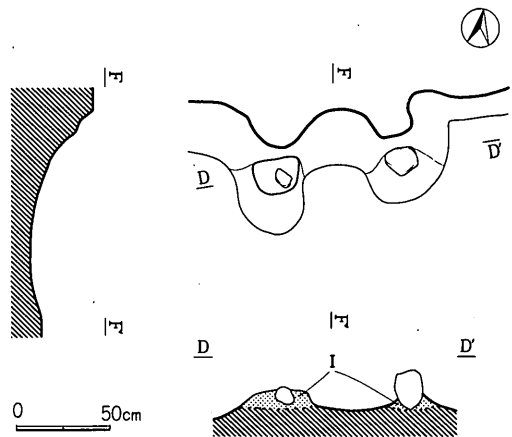
第60図 H-21号住居址実測図 (1:80)

を考えるうえで格好な資料となった。また、南西コーナー床面より7の偏平な円礫が出土した。

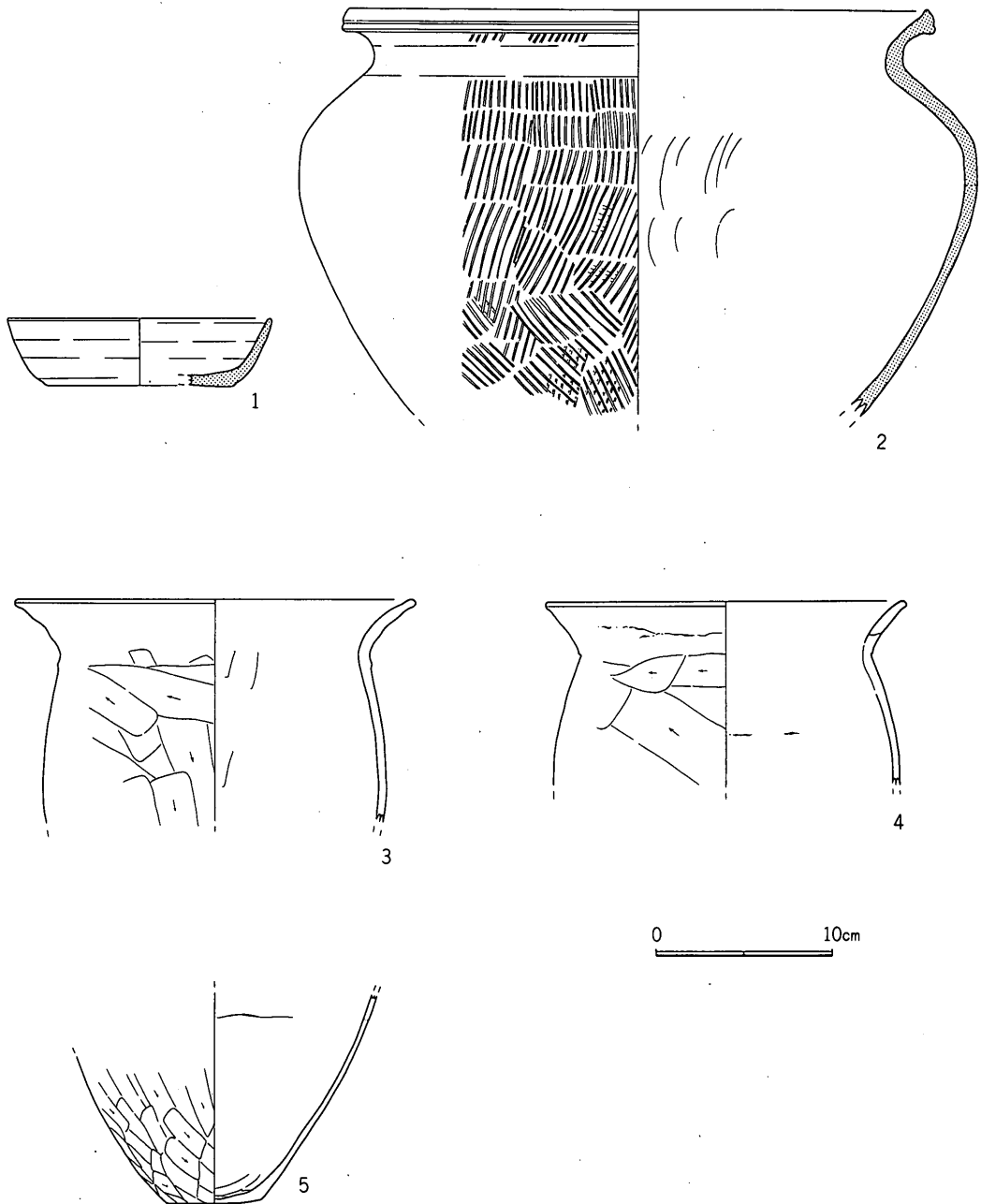
覆土は、3層に分層された。I層は細粒パミスをよく含む粘性のある黒褐色土層で、II層は細粒パミスをよく含む粘性の強い黒色土層、III層はローム粒子が多く混入する黒褐色土層である。

カマドは、北壁中央に位置するが、その大半が破壊され、構材に用いられていた面取り軽石4点は住居の中央部に散乱していた。かろうじて残された両袖の一部は、その芯に安山岩礫が据えられ、周囲を白色粘土 (I層) で固めたものであった。カマドの使用に伴う焼土等の堆積はまったくみられなかった。

遺物 第62・63図



第61図 H-21号住居址カマド実測図 (1:40)



第62図 H-21号住居址出土遺物実測図 (1 : 4)

遺物の出土量は少ないが、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕の各器種がみられた。

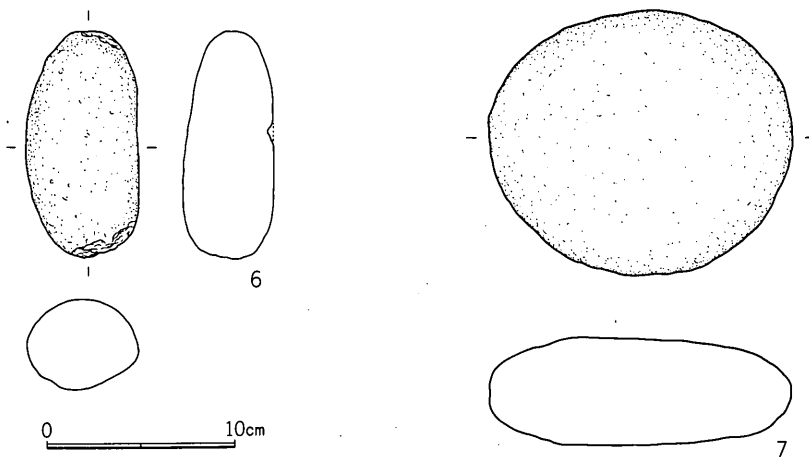
1の須恵器坏は、回転ヘラキリによる底部を有するものである。

2の須恵器甕は、叩きがなされた後、全体的に弱くロクロヨコナデの施されるものである。



第27表 H-21号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	<15.0> 3.8 <10.6>	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み淡黄色 (2.5Y 8/3)
2 (回)	甕 (須)	(33.6) — —	口縁部は短く強く外反し、胴部は球状を呈する。	外面 叩きがなされた後、口縁部にロクロヨコナデが施こされる 内面 ロクロヨコナデ	胎土は中・大の砂粒を多く含む明褐色(7.5YR 5/8) H-6の破片と接合
3 (回)	甕	<22.8> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色 (5YR 4/6)
4 (回)	甕	<20.6> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (2.5YR 5/6)
5 (完)	甕	— — 5.4	底部平底。	外面 胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ 内面 胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色 (2.5YR 4/6)



第63図 H-21号住居址出土遺物実測図(1:4)

3・4は、「く」の字状に外反する口縁を有する土師器甕である。

また、この他図示でき得なかったものに、H-6等でみられたラセン状の暗文が施される土師器坏と同様な胎土をみせる土師器坏があるが、風化が激しく暗文等は捉えられなかった。

石器では、一方の端部が敲打に用いられた敲石と(6)、あるいは台石等として使用されたのか偏平な円礫(7)が出土している。

時期

第28表 H-21号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
6	敲石	溶岩	12.0	6.0	4.8	450	
7	台石	安山岩	14.0	16.0	5.7	1,750	

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

## (22) H-22号住居址

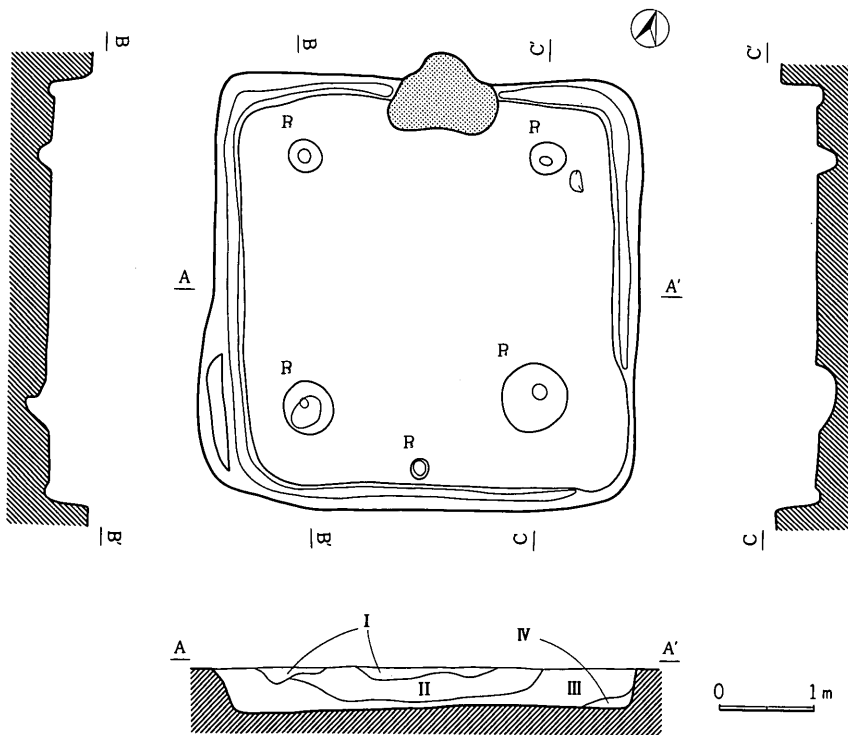
遺構 第64・65図

H-22号住居址は、第I区ス-43グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.6m東西4.5mの隅丸方形を呈し、床面積18m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-22°-Wを指す。壁高は40~45cmと深く、周溝は幅15cm深さ5cm程度のものが、東南コーナーを除きほぼ全周する。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が認められた。P<sub>1</sub>は40cm×35cm深さ20cm、P<sub>2</sub>は35cm×35cm深さ15cm、P<sub>3</sub>は55cm×55cm深さ20cm、P<sub>4</sub>は70cm×70cm深さ20cmを測るものであった。これらは、他の住居址に比べるといずれも浅い柱穴といえる。また、H-19と同様南壁際の中央からピットが検出された(P<sub>5</sub>)。P<sub>5</sub>は20cm×20cm深さ20cmを測る。

遺物は、良好な出土状態を示すものは認められなかった。

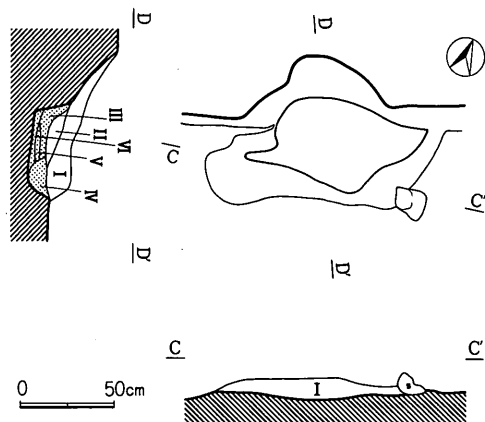
覆土は、4層に分層された。基本的にはH-9・H-11・H-19と同様な土層構成であった。I層は細粒・中粒のパミスをよく含む粘性のある黒褐色土層で、II・III層は多量のパミス・ローム粒子の混入する粘性のある暗褐色土層、IV層は粒子の細かい黒色土層であった。



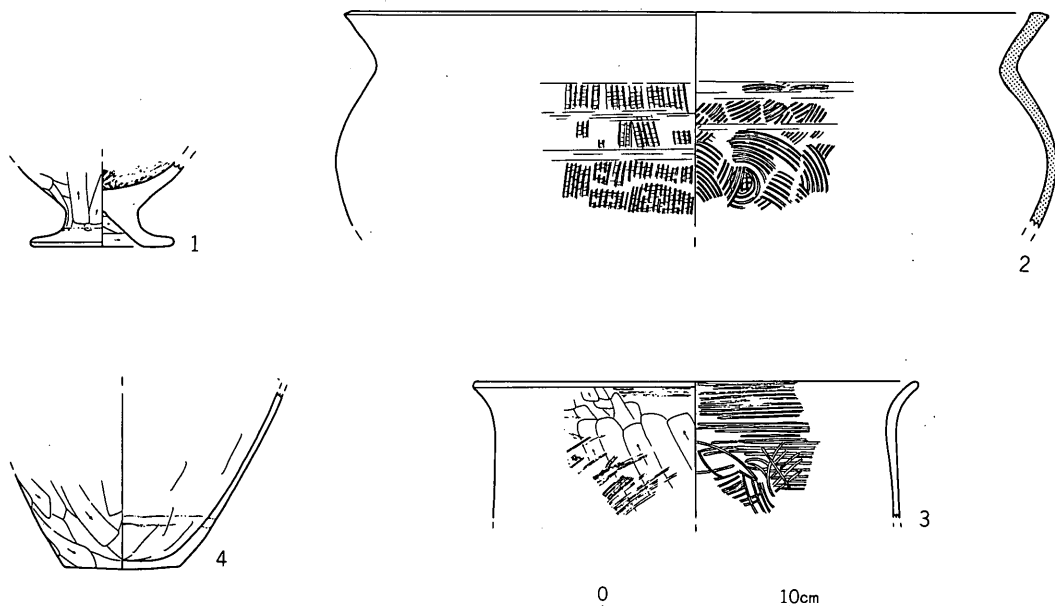
第64図 H-22号住居址実測図 (1:80)

IV 遺構と遺物

カマドは、北壁中央に存在するが、壊滅状態にあり、その構材である灰粘土層（I層）が集積するのみであった。なお、その火床部は一度ピットが掘り込まれ、それがさらに埋め戻されて火床面となっていた。その部分の埋土は、ロームが多量に混じる黄褐色土層 III・IVと黒色土層 IV・V層である。なお、II層の黒色土層はカマド使用に伴う焼土・カーボンを若干含んだ。



第65図 H-22号住居址カマド実測図（1：40）



第66図 H-22号住居址出土遺物（1：4）

第29表 H-22号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	高坏	— 7.6	丸味をおびて外反する坏部に偏平な脚部が つながる。	外面 坏部ヘラケズリ、脚部ヨコナデ 内面 坏部放射状のヘラミガキ、脚部ヘラケズリ	胎土は砂粒を多く 含む橙色 (7.5 YR 6/6)
2 (回)	甕 (須)	<37.5> —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は ふくらむ。	外面 格子目の叩きがなされた後、ロクロヨコナデ 内面 当て具痕（青海波）が認められる、口縁部ロク ロヨコナデ	胎土は細砂粒を 多く含むにふい黄 橙色(10YR 6/4)
3 (回)	甕	<23.7> —	口縁部は短く外反し、胴上半部はほぼ直 線的に下降する。	外面 胴上半および口縁部ヘラケズリの後、若干のヘ ラミガキ 内面 横位を中心としたミガキ状のヘラナデ	胎土は中砂粒を 多く含む橙色 (7.5 YR 6/6)
4	甕	— 6.1	底部平底。	外面 胴部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (5 YR 5/8)

## 遺物 第66図

本住居址より検出された遺物は少ないが、須恵器では甕、土師器では高坏・甕が認められた。

1は、土師器の高坏で坏部内面は放射状にヘラミガキがなされている。類例は、本遺跡に隣接する十二遺跡のH-1号住居址の高坏等に求められる。

2は須恵器の甕で、外面には叩き目内面には青海波がみられ、その後、弱いロクロ調整のなされたものである。

3は、口縁部の短く外反する土師器甕で、この他、「く」の字状口縁の土師器甕もみられた。石器・鉄製品等は本住居址では検出されなかった。

## 時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

## (23) H-23号住居址

## 遺構 第67・68図

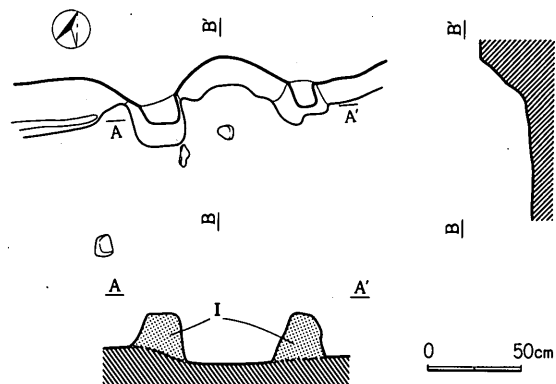
H-23号住居址は、第I区セ-41グリッドより検出された。その東壁は、F-12号掘立柱建物址と接するが、両者の新旧関係は明らかでない。

本住居址は、南北4.85m東西4.4mの隅丸方形を呈し、床面積18.0m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-11°-Wを指す。壁高は、20~25cmを測る。周溝は、幅10cm深さ5cm程度のものが、東壁北半分・北壁東半分を除き、巡っている。主柱穴と考えられるものは、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個である。P<sub>1</sub>は55cm×50cm深さ55cmを測る。P<sub>2</sub>は、II区の中央部には位置せず北西コーナー寄りに存在するもので、50cm×50cm深さ25cmを測る。P<sub>3</sub>は55cm×55cm深さ60cm、P<sub>4</sub>は75cm×55cm深さ60cmを測る。

遺物は、須恵器坏が良好な出土状態で検出された。2・6はカマドの西より、3は北西コーナーより、4は西壁際より検出された。また、12・13の河床礫は、南西コーナー寄りから他の2個とまとまって検出された。11の砥石は、I区からの出土である。

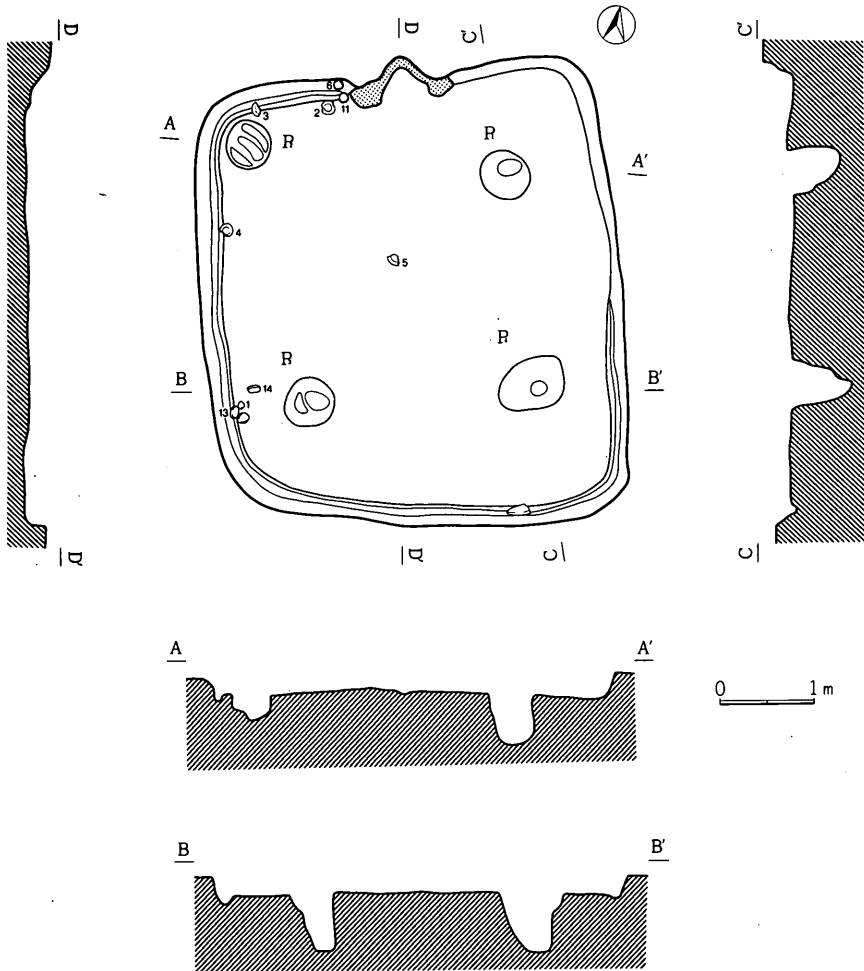
覆土は、I層のみで、細粒パミスをよく含む粘性のある黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央より検出された。



第67図 H-23号住居址カマド実測図 (1:40)

IV 遺構と遺物



第68図 H-23号住居址実測図 (1 : 80)

その大半はすでに破壊されてしまっており、僅かに粘土 (I層) を用いた両袖の後方部が残っているにすぎなかった。カマド付近には、多量の灰・焼土が散乱していた。

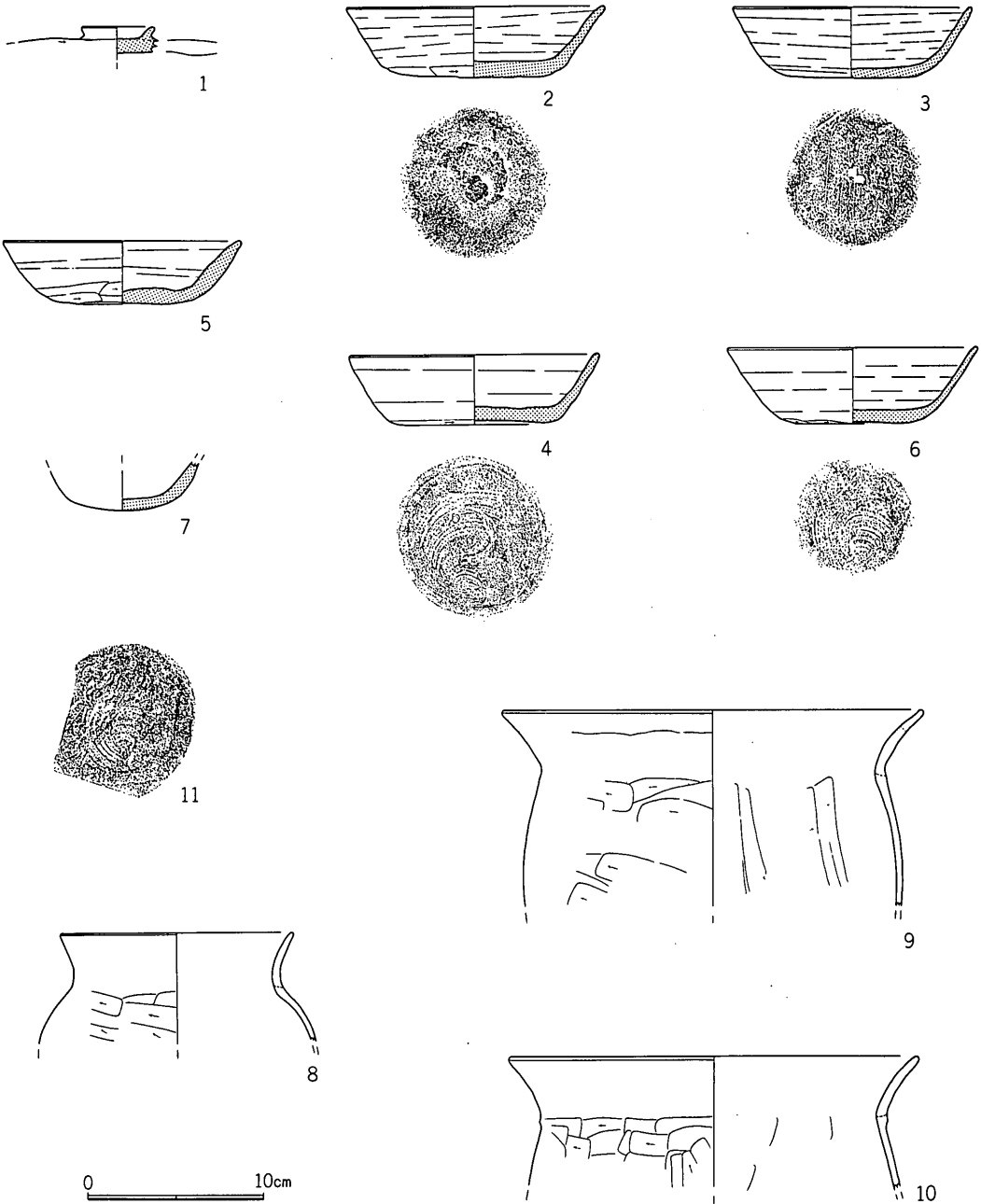
遺物 第69・70図

遺物は、須恵器では蓋・坏・甕が、土師器では坏・甕がみられた。

1の須恵器蓋は、皿状にくぼむつまみ部をもつものである。

須恵器坏では、2のように回転ヘラキリの後周囲に手持ちヘラケズリの加えられるもの、3のように切り離しの後全面に手持ちヘラケズリが加えられるもの、5の切り離しの後全面に回転ヘラケズリの加えられるもの、6・11のように回転糸切りの後周囲に手持ちヘラケズリの加えられるもの、4のように回転糸切りの後周囲に回転ヘラケズリが加えられるものと様々であったが、

1 竖穴住居址



第69図 H-23号住居址出土遺物 (1 : 4)

いずれも底部切り離しの後にへラケズリがなされるという点において共通する。

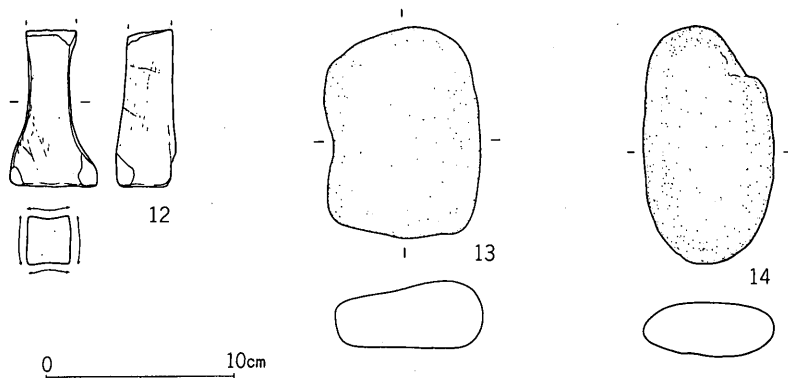
8~10は、いずれも「く」の字状に外反する口縁部をもつ土師器甕である。

なお、図示できなかったが、本遺跡にいくつかみられるラセン暗文の施された土師器坏と同様

IV 遺構と遺物

第30表 H-23号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (完)	壺 (須)	4.2 — —	つまみ部は中央が皿状にくぼむ。	外面 内面	ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は比較的精選され灰白色 (7.5 Y8/2)
2 (完)	坏 (須)	14.7 4.0 7.4	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラケリの後、 周囲手持ちヘラケズリ 内面ロクロヨコナデ(ロクロ左回転)	胎土は中砂粒を多く含み灰白色 (10 Y8/1)
3 (完)	坏 (須)	13.6 4.0 7.4	体部は外反し、底部平底。完形。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後手持ちヘラケズリ ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を含み灰白色(7.5 Y7/1) 焼成良好 内外面に「井」の火標
4 (完)	坏 (須)	14.3 4.0 8.8	体部は外反し、底部平底。ほぼ完形	外面 内面	体部ロクロヨコナデ、底部は回転系切りの後、 周囲回転ヘラケズリ ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を含み比較的精選され灰白色(7.5 Y7/1) 焼成良好
5 (回)	坏 (須)	<13.6> — <7.7> 3.6	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、 回転ヘラケズリ ロクロヨコナデ(ロクロ左回転)	胎土は中砂粒を含み灰白色 (5 Y7/1)
6 (回)	坏 (須)	<14.3> — — 4.3 6.2	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ、底部は回転系切りの後、 周囲手持ちヘラケズリ ロクロヨコナデ(ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (N7/0)
7 (完)	? (須)	— — —	底部は偏平な丸底。	外面 内面	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ	胎土は砂粒を含み灰白色 (7.5 Y7/1)
8 (回)	甕	<13.3> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (5 YR 5/6)
9 (回)	甕	<24.0> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (5 YR 5/8)
10 (回)	甕	<23.3> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色 (7.5 YR 6/6)



第70図 H-23号住居址出土遺物(1:4)

な胎土をみせる土師器坏の破片が一片出土している。

石器では、4面が使用された流紋岩の小形な砥石が出土している(12)。また、13・

第31表 H-23号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
12	砥石	流紋岩風化物	(8.1)	4.5	3.0	(125)	
13	不明	安山岩	11.1	8.1	3.5	535	
14	不明	〃	12.5	6.8	2.9	410	

14は河床礫で、この他2個とあわせて検出されたものである。編み物等における「おもり」になったものであろうか。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

(24) H-24号住居址

遺構 第71・72図

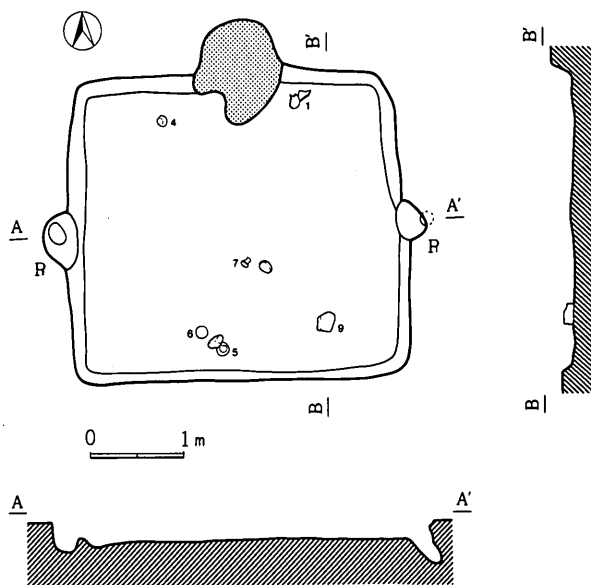
H-24号住居址は、第I区セー42グリッドに位置する。

本住居址は、南北3.28m東西3.6mの隅丸方形を呈し、床面積は10.0㎡を測り、主軸方向はN-2°-Wを指す。壁高は、10~20cmを測り、周溝は認められない。主柱穴は、東西の壁中に各1個ずつ認められた。P<sub>1</sub>は東壁中央に認められる斜に穿たれたピットで、45cm×30cm深さ25cmを測る。P<sub>2</sub>は西壁中央にあり、60cm×37cm深さ15cmを測る。

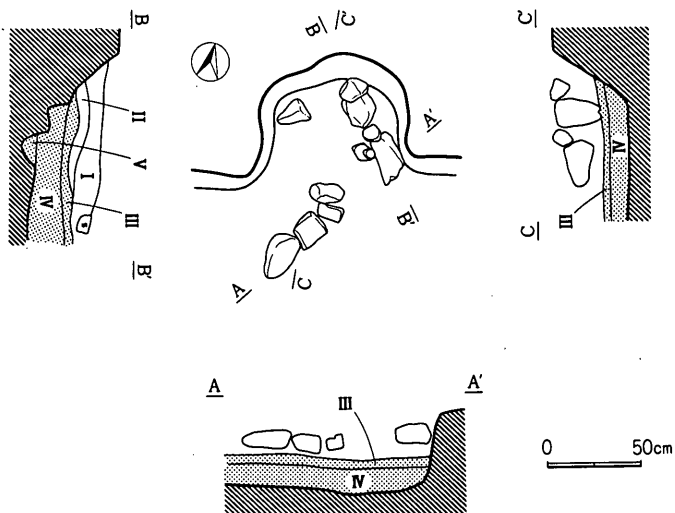
遺物は、4・5・6の坏が床面直上より出土した。6は正常位、4・5は伏せた状態で出土した。5の上には礫が乗っていた。9の台石は、機能面が上となって床面直上より出土した。

覆土はI層のみで、細粒パミスをよく含む粘性のある黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位

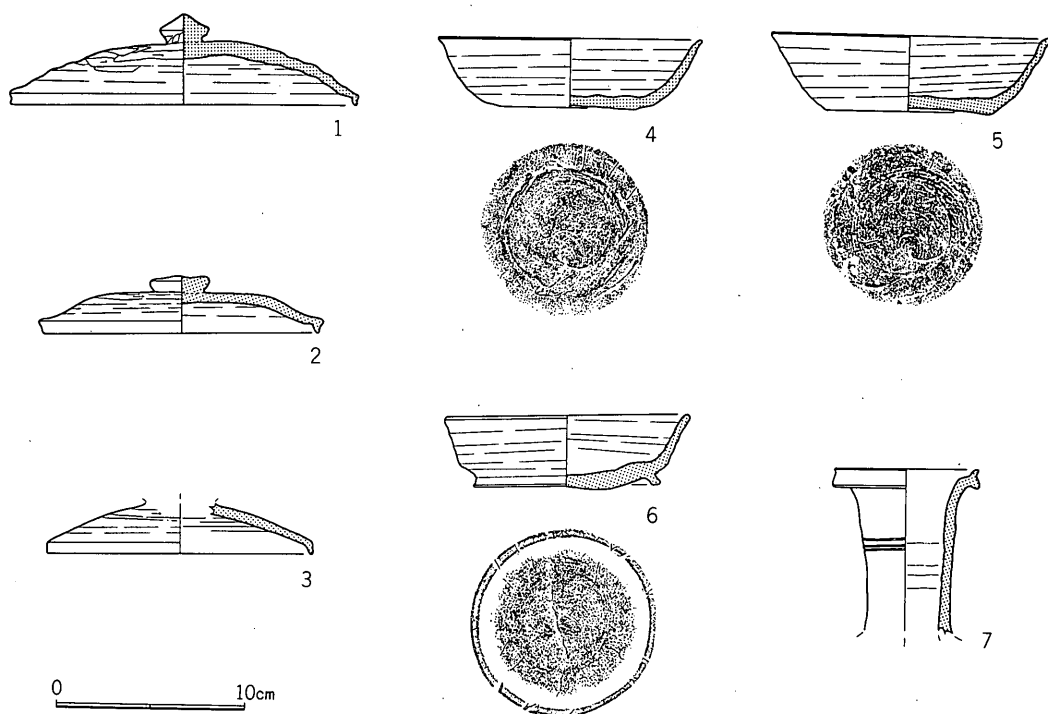


第71図 H-24号住居址実測図 (1:80)



第72図 H-24号住居址カマド実測図 (1:40)





第73図 H-24号住居址出土遺物 (1:4)

置し、すでに半壊した状態にあった。他のカマドに較べると壁外への突出が大きく、その主体部はやや奥まった部分にあったと考えられる。カマドの構材には、軽石・安山岩等が用いられていた。火床は、住居の貼床上にある。貼床は、III・IV・Vの3層より構成される。III・V層は黒色土とロームが混じるもので、IV層は黒褐色土層である。カマド覆土は、I層がカーボンをよく含む黒褐色土層で、II層は焼土層である暗赤褐色土層であった。

## 遺物 第73・74図

遺物は、残存度の高い杯・蓋等が多かった割には、総出土量は少なかった。

1の須恵器蓋は、宝珠形つまみ部をもつものである。2つの須恵器蓋は、つまみ部が宝珠形のもものが偏平化した形態といえようか。

4・5・6の須恵器杯は、いずれも回転糸切りによる底部をみせている。

7は須恵器長頸瓶の頸部である。二条の沈線が施されている。

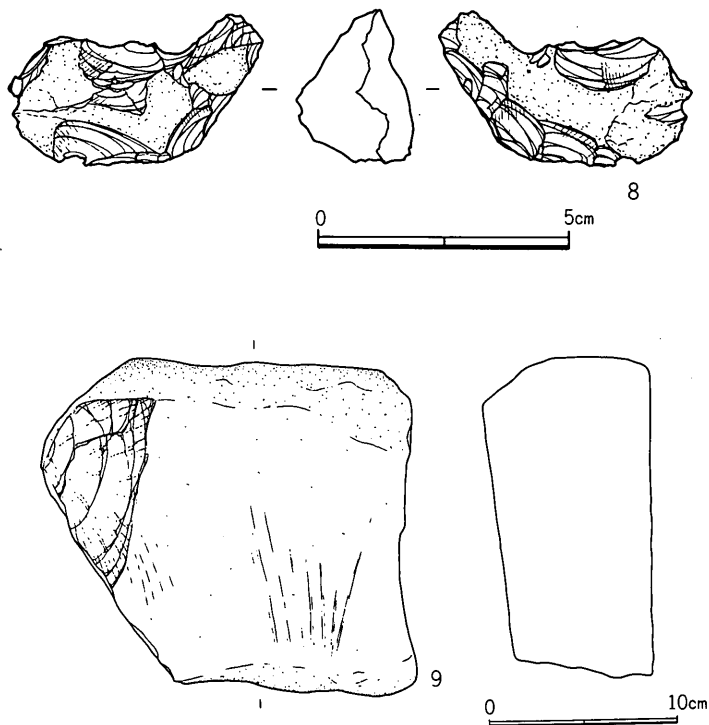
土師器は、甕の破片が十数個みられたのみであった。

石器は、8の黒曜石の小形品がみられた。小さな原石に剥離がなされたもので、石鏃等の素材を取るための石核とも考えられようか。剥離はさほど進行していない。

9は、安山岩の台石で、平坦な作業面が上になって検出された。作業面には顕著な線状痕がみ

第32表 H-24号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器形の特 徴	調 整	備 考
1 (完)	蓋 (須)	2.7 4.8 18.3	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含む暗青灰色 (5B4/1)
2 (完)	蓋 (須)	3.1 3.0 14.7	つまみ部は偏平な宝珠形を呈する。 完形。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を 含む灰色 (5Y5/1)
3 (回)	蓋 (須)	- - 14.1		外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選され 灰色 (5Y6/1)
4 (完)	坏 (須)	14.0 3.7 7.1	体部は丸味をおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を 含むにふい赤褐色 (5YR5/4) 外面に「+」の火燻
5 (完)	坏 (須)	14.8 4.0 8.7	体部は丸味をおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含 み灰白色 (7.5Y7/1)
6 (完)	坏 (須)	13.0 3.0 14.7	体部は外反する。底部は丸味をおびた平 底。貼り付け高台。	外面 体部ロケロヨコナデ、底部は回転糸切りの後、 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含む灰色 (N4/0)
7 (完)	長頸瓶 (須)	7.6 - -	頸部はラッパ状を呈する。	外面 ロクロヨコナデ、頸部中央に二条の沈線が施こ される 内面 ロクロヨコナデ	胎土は極暗赤褐 色(5YR2/4) 内外面に自然軸 付着



第74図 H-24号住居址出土遺物 (8 = 2 : 3, 9 = 1 : 4)

られた。

### 時期

本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡  
第VII期に位置付けられよう。

第33表 H-24号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
8	不明	黒曜石	5.2	2.3	2.2	24	
9	台石	安山岩	(19.5)	17.1	9.8	(6,000)	

## (25) H-25号住居址

### 遺構 第75・76図

H-25号住居址は、第I区セー  
42グリッドより検出された。

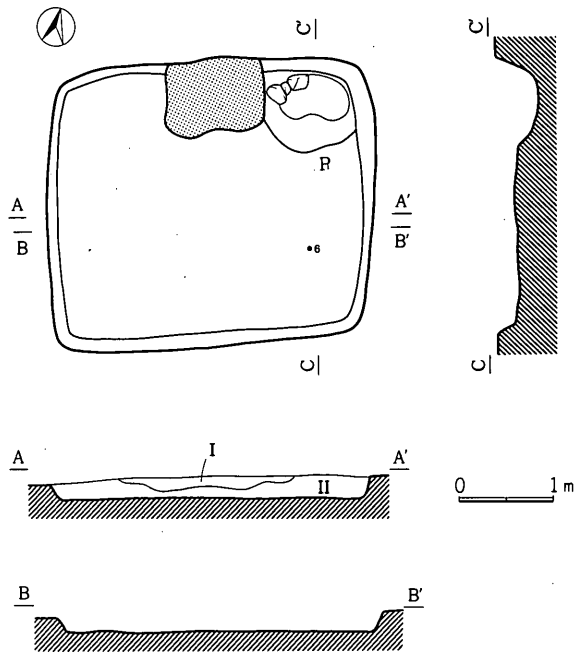
本住居址は、南北3.0m東西3.5  
mの隅丸方形を呈し、床面積8.5m<sup>2</sup>  
を測り、主軸方向N-14°-Wを指  
す。壁高は、20～25cm前後を測り、  
周溝は認められない。柱穴と考え  
られるピットはまったく認められ  
なかった。カマドの東脇から北東  
コーナーにかけては、95cm×85cm  
深さ20cmの大きな掘り込みとなっ  
ており(P<sub>1</sub>)、カマドの構材であっ  
たと考えられる礫3点が検出され、  
また、2の坏も検出された。

遺物は、P<sub>1</sub>から出土した2の坏  
以外は、いずれも良好な出土状態  
をみせなかった。

覆土は、2層に分層された。I層は、ローム粒子をよく含むやや粘性のある黒褐色土層で、II層は細粒パミスをよく含む粘性のある黒色土層であった。

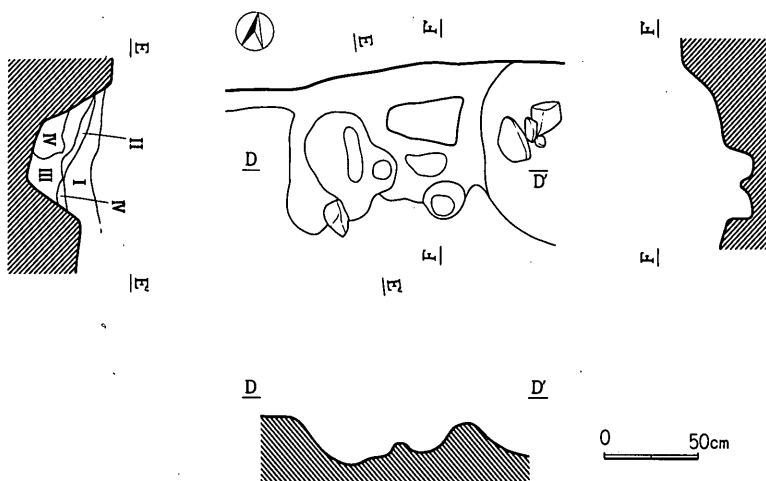
カマドは、北壁中央に位置するが、壊滅状態にあり、その構材である軽石はP<sub>1</sub>内に落ち込んでいた。図にはカマドの掘り方を示しておいた。火床部は一旦掘り込まれた後、III・IV層で埋め戻され浅く窪んだ状態にある。III層はロームを若干含む黒色土層、IV層はロームを多量に含む黄色土層である。カマド覆土は、I層が焼土を少量含む黒褐色土層、II層が赤褐色の焼土層である。

### 遺物 第77・78図

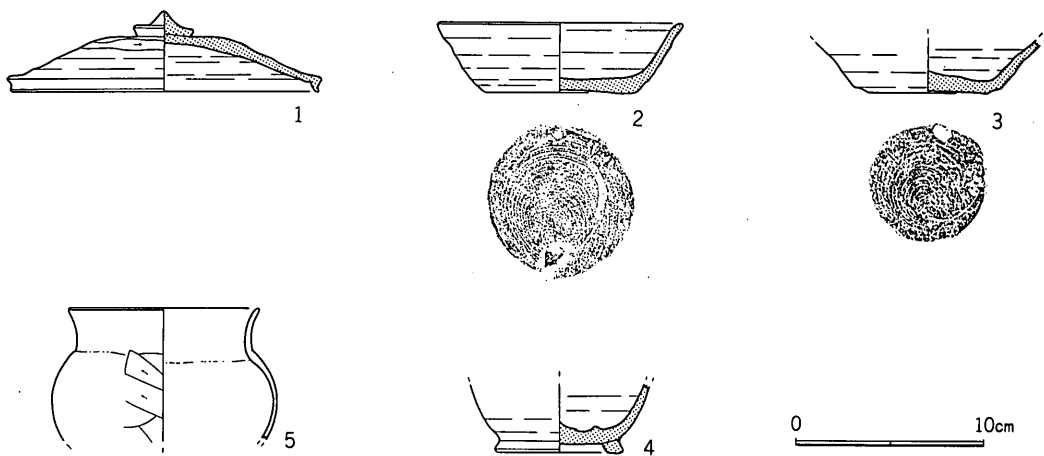


第75図 H-25号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址



第76図 H-25号住居址カマド実測図 (1:40)



第77図 H-25号住居址出土遺物 (1:4)

遺物は、須恵器では蓋・坏・長頸瓶の各器種が、土師器では甕の破片がみられた。

1の須恵器蓋は宝珠形つまみ部を有するものである。

2、3の須恵器坏は、いずれも回転糸切りによる底部を有するものである。

4は、須恵器長頸瓶の底部かと考えられる。高台が付されたものである。

5は、口縁部が直立気味に外反する球状の胴部をもつ土師器の小形甕である。

6は、鉄製の鎌の刃部である。錆が激しいが、完存品である。刃部の湾曲はさほど大きくない。

基部は一方側に僅かに折れ曲がるものと思われる。

時期

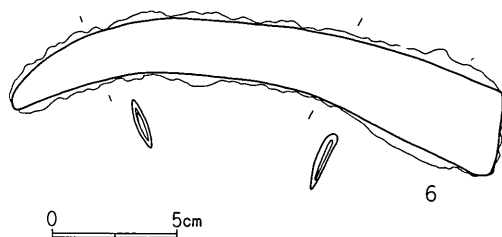
本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられる。

第34表 H-25号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (回)	蓋 (須)	3.4 4.4 (16.4)	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面	ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ	胎土は大砂粒を 含む青灰色 (5B5/1) 外面「井」の火樽
2 (完)	坏 (須)	13.1 3.8 7.9	体部は外反し、底部平底。	外面	体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面	胎土は細砂粒を 多く含む灰色 (N5/0) 外面「井」の火樽
3 (回)	坏 (須)	— — 6.2	体部は外反し、底部平底。	外面	体部ロクロヨコナデ、底部回線糸切り 内面	胎土は中砂粒を 多く含む灰白色 (5Y7/1) 内外 面に「+」の火樽
4 (回)	長頸瓶 (須)	— — 6.3	高台部は貼り付けによる。	外面	胴部ロクロヨコナデ、底部は高台部貼り付けの 後、ナデ。	胎土は細砂粒を 多く含む灰白色 (N7/0)
5 (回)	甕	(10.2) — —	口縁部はあまり大きく外反せず、胴部は 球状を呈する。	外面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ	胎土は赤褐色 (5YR4/6)
				内面	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	

第35表 H-25号住居址出土遺物一覧表〈金属器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
6	鎌	鉄	19.5	3.3	0.5	(110)	



第78図 H-25号住居址出土遺物 (1:3)

## (26) H-26号住居址

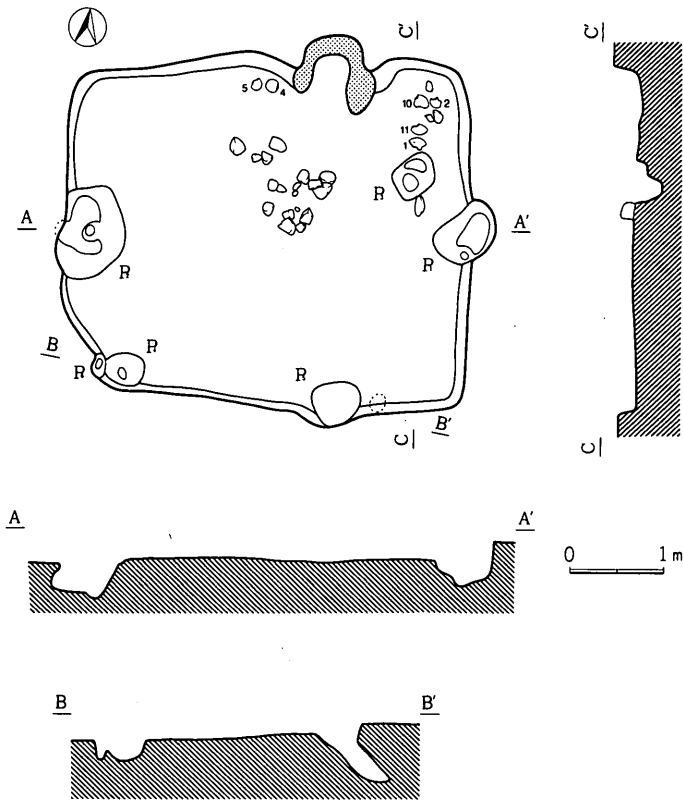
## 遺構 第79・80図

H-26号住居址は、第I区ソ-42グリッドにおいて検出された。

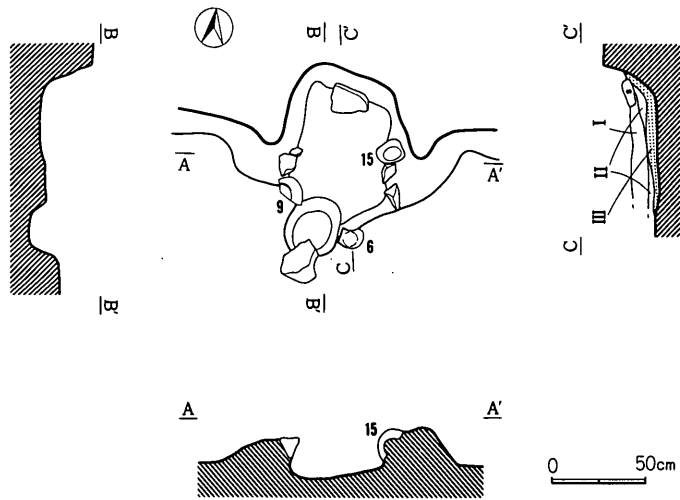
本住居址は、南北3.7m東西4.35mのやや歪んだ隅丸方形を呈し、床面積13.1m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-10°-Wを指す。壁高は20~25cmを測り、周溝は認められない。ピットは、P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>の6個が検出されたが、このうち主柱穴と考えられるものは東西の両壁中に1個ずつみられるP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>である。P<sub>1</sub>は70cm×70cm深さ27cm、P<sub>2</sub>は100cm×70cm深さ40cmを測る。P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>も柱穴と考えてよいであろうか。P<sub>4</sub>は40cm×35cm深さ23cmを測り南西コーナーに位置する。その隣りには25cm×15cm深さ10cmを測る小形のピットP<sub>6</sub>がある。P<sub>5</sub>は南壁中にありかなり斜に開くもので、50cm×45cm深さ75cmを測る。P<sub>3</sub>はI区にあるピットで、53cm×45cm深さ30cmを測る。

遺物は、須恵器坏等が比較的良好な状態で出土した。カマド東の北東コーナーからは、1・2・10の須恵器坏・11の須恵器長頸瓶底部が一括出土した。また、4・5の坏はカマドの西脇の床面上より検出された。カマド内からは、6・9の坏片が出土し、また15の石鉢は半欠した状態でカマドの東袖の構材に用いられていた。

1 竪穴住居址

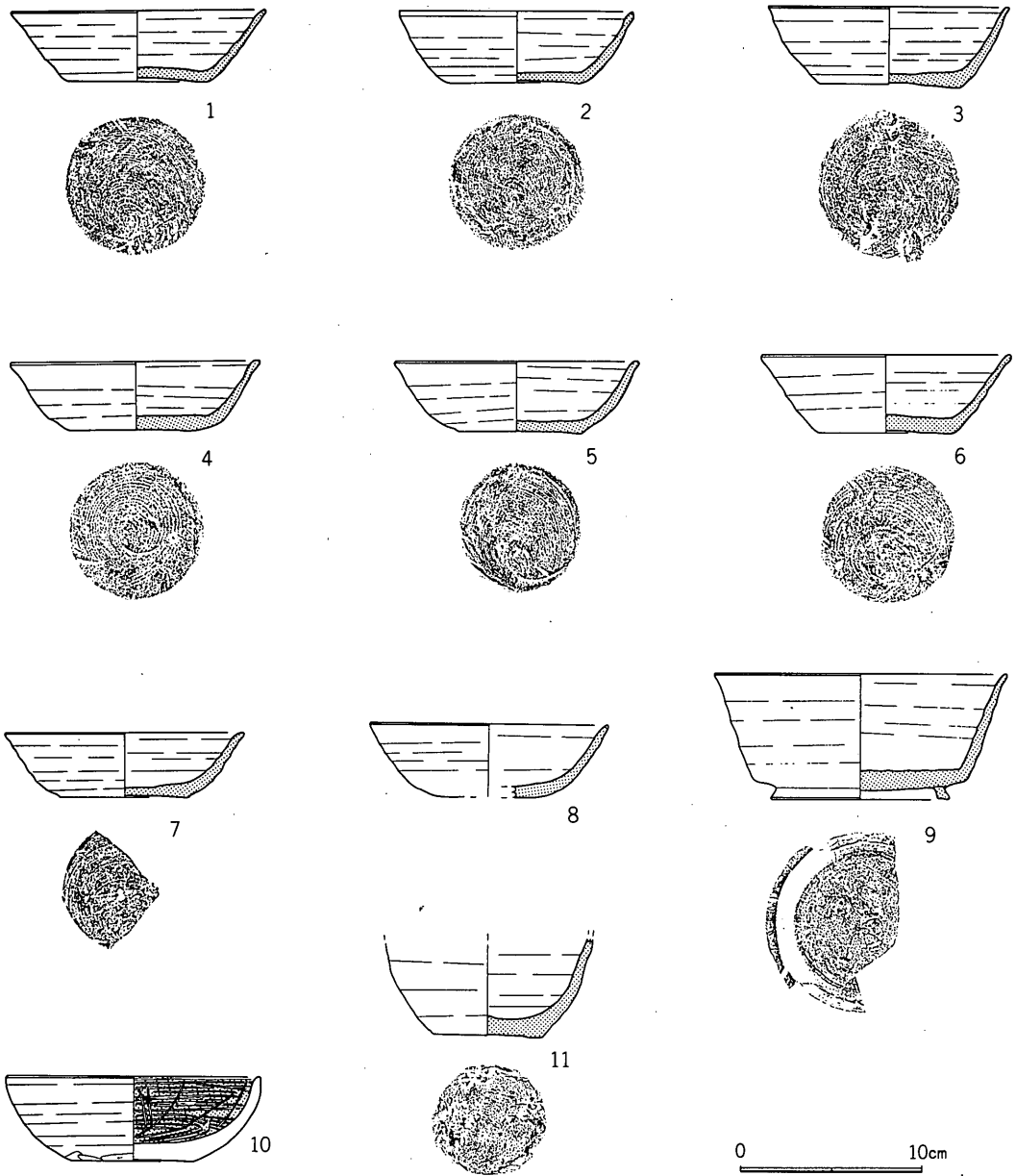


第79図 H-26号住居址実測図 (1 : 80)



第80図 H-26号住居址カマド実測図 (1 : 40)

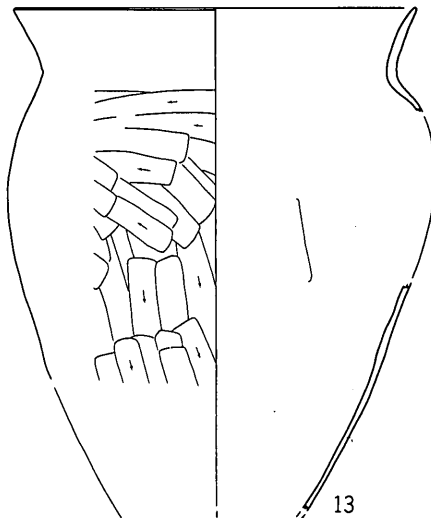
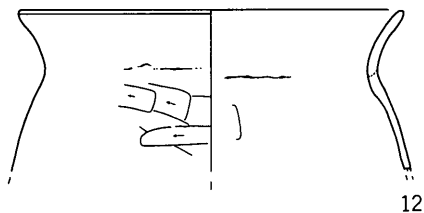
IV 遺構と遺物



第81図 H-26号住居址出土遺物 (1:4)

カマドは、北壁の中央よりやや東壁寄りに位置するが、すでに壊滅状態にあった。図には掘り方を示したが、火床部は一旦掘り込まれた後黒色土 (III層) が埋め戻された状態のものである。また、掘り方の時点で袖部が意識されロームがいくぶん削り出されており、それに続いて軽石等の石材が配列されている。ただし、その構材となった石材の大部分は、カマドの前方部へ放り出された状態であった。カマドの覆土は2層に分層された。I層はカーボンを少量含む黒色土層、

1 竪穴住居址



第82図 H-26号住居址出土遺物 (1:4)

36

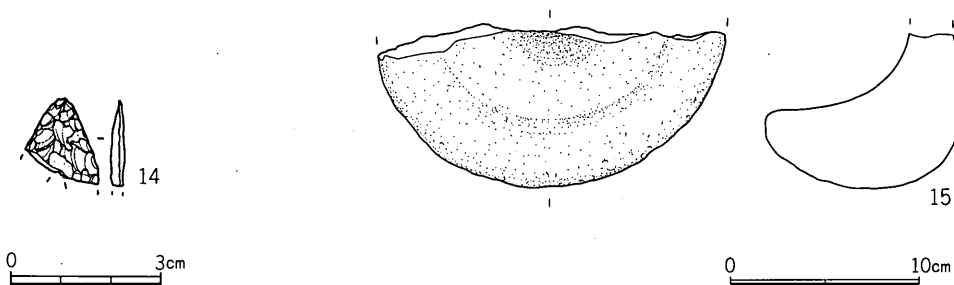
第36表 H-26号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調	備 考
1 (完)	坏 (須)	14.1 3.9 7.8	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色 (5Y 7/1)
2 (完)	坏 (須)	12.9 3.9 7.2	体部はやや丸味をおびて外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選されにぶい褐色 (7.5YR5/3)内外面に「井」の火摺
3 (完)	坏 (須)	13.4 4.2 7.8	体部はやや丸味をおびて外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (5Y 7/1) 外面に「井」の火摺
4 (完)	坏 (須)	13.8 3.8 7.2	体部はやや丸味をおびて外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(N5/0) 焼成時の油鉾がアバタ状に付着
5 (完)	坏 (須)	13.6 3.9 6.9	体部はやや丸味をおびて外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (10Y 6/1)内外面に「x」の火摺
6 (回)	坏 (須)	<13.8> 4.3 7.3	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰色 (7.5Y 6/1)
7 (回)	坏 (須)	<13.2> 3.6 <7.1>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され灰色(10Y 6/1) 焼成良好
8 (回)	坏 (須)	<13.2> — —	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転糸切りの後、周囲手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を多量に含み灰色 (10Y 6/1) 外面に火摺あり
9 (回)	坏 (須)	<16.2> 6.9 <9.9>	高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (N 5/0)
10 (完)	坏	14.1 4.7 6.7	体部は丸味をおびて外反し、口唇部はやや直立気味になる。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面 黒色研磨 (ロクロ右回転)	胎土は精選されにぶい褐色 (7.5YR 5/4)
11 (完)	長頸瓶 (須)	— — 6.1	胴下半部はややふくらむ。 底部平底。	外面 胴部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多く含み灰色(N5/0) 内外面に自然軸付着



IV 遺構と遺物

12 (回)	型	(20.5) — —	口縁部は僅か「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色を呈する (7.5YR6/6)
13 (完)	型	21.4 — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい橙色 (7.5YR6/4)



第83図 H-26号住居址出土遺物 (14 = 2 : 3, 15 = 1 : 4)

II層は赤褐色の焼土層であった。

遺物 第81・82・83図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では坏・長頸瓶・甕が、土師器では坏・甕の器種がみられるが、とりわけ坏類が良好な遺存状態で一括出土したことは特徴的である。

第37表 H-26号住居址出土遺物一覧表 <石器>

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
14	石 鏃	黒曜石	(1.7)	1.6	0.3	(0.5)	
15	石 鉢	輝石 安山岩	18.4	(8.1)	10.7	(1.940)	

1～7の須恵器坏は、いずれも回転系切りによる底部を有している。8の須恵器坏も切り離しは回転系切りによるが、その後周囲に手持ちヘラケズリが加えられている。

9は、須恵器の高台付坏で、底部は切り離しの後回転ヘラ削り加えられている。

10は、内面黒色研磨のなされた土師器坏で、切り離しは回転系切りによっている。

11は、須恵器の長頸瓶の底部と考えられるもので、切り離しは回転系切りによる。

12は、土師器甕で、口縁部は僅か「コ」の字状に外反している。13は、「く」の字状に外反する口縁を有する土師器甕である。

14は、II区より検出された黒曜石の両面調整の石鏃である。両脚を古く欠損している。

15は、半欠する石鉢の断片で、カマドの袖石に用いられていたものである。

時 期

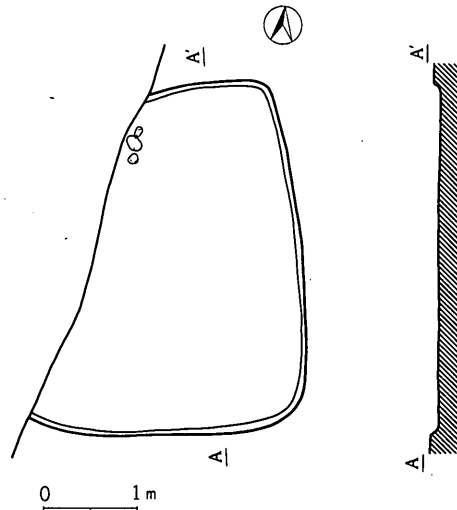
H-26号住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。

(27) H-27号住居址

遺構 第84図

H-27号住居址は、第I区ソ-42グリッドにおいて検出されたが、その西側部分を現在の水田造成時に大きく削平されてしまっている。

本住居址は、南北3.7m、東西は現況で2.9m残っており、隅丸方形のプランを呈していたものと考えられる。現状から推定した床面積は9.6㎡で、主軸方向はN-16°-Wを指す。壁高は10cm前後を測るのみで、周溝は認められない。柱穴や、その他ピットは一切検出されなかった。



第84図 H-27号住居址実測図 (1 : 80)

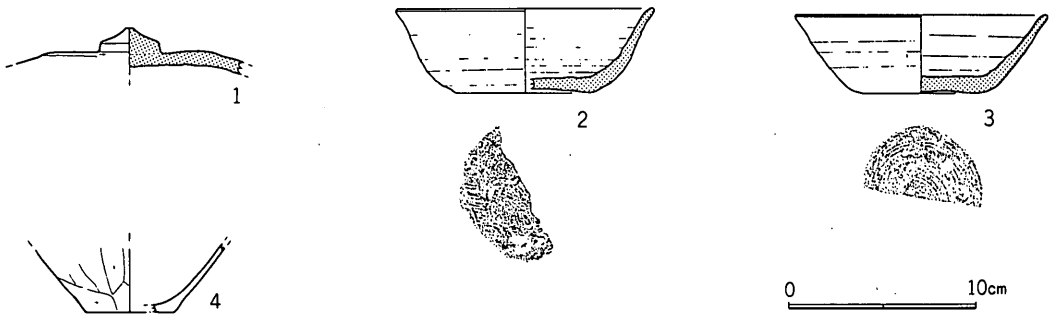
遺物は、原位置をとどめていると考えられるものは認められなかった。

カマドは、その構材であったと考えられる軽石等から、北壁中央に存在したと考えられるが、その部分はすでに削平されてしまっている状況にあった。

遺物 第85図

本住居址より検出された遺物はごく少量であったが、須恵器では蓋・坏・土師器では甕の破片が認められた。

- 1の須恵器蓋は、宝珠形つまみ部を有するものである。
- 2・3の須恵器坏は、いずれも回転糸切りによる底部を有している。
- 4の土師器甕は、底部のみで、口縁部の形状は不明であった。



第85図 H-27号住居址出土遺物 (1 : 4)

第38表 H-27号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	蓋 (須)	3.3 — —	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 ロクロヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (10Y7/1)
2 (回)	坏 (須)	<13.8> 4.4 (7.4)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され灰 オリーブ色 (5Y6/2)焼成良好 内外面に火漚
3 (回)	坏 (須)	<13.5> 4.1 <6.2>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は若干の砂 粒を含み灰色 (10Y6/1)
4 (回)	甕	— <4.7>	底部平底。	外面 胴・底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土はにぶい黄 橙色 (10Y6/4)

## 時期

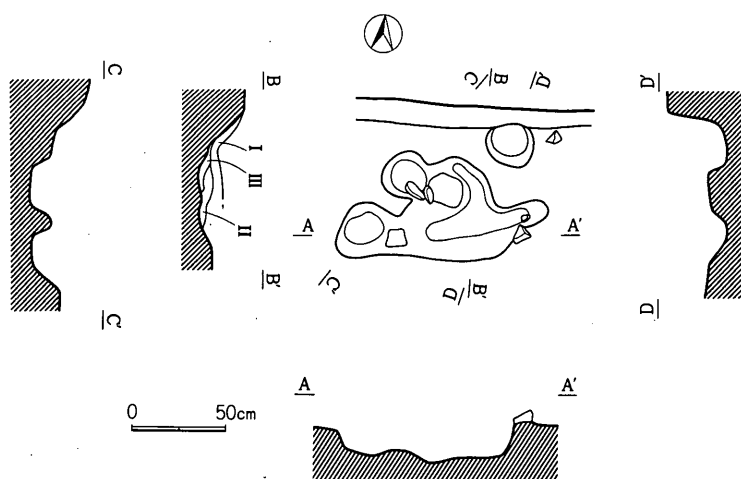
本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第Ⅶ期に位置付けられよう。

## (28) H-28号住居址

## 遺物 第86・87図

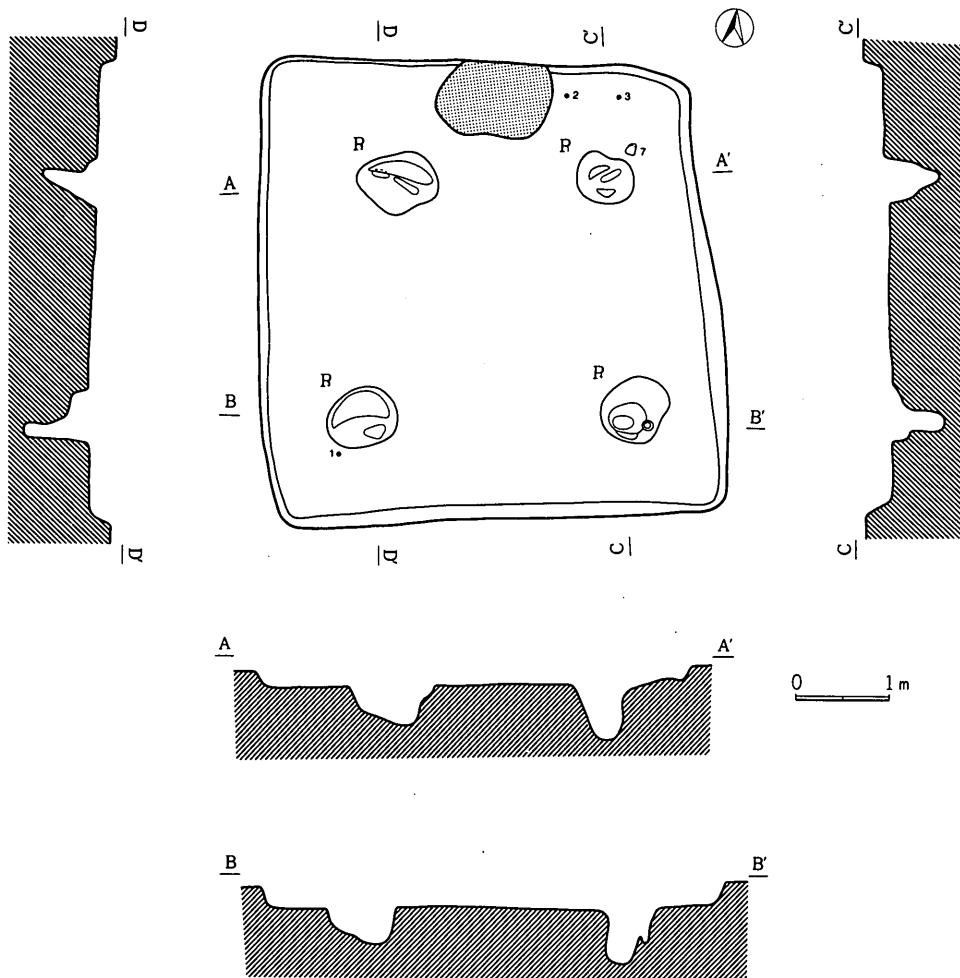
H-28号住居址は、第Ⅰ区セー41グリッドに位置し、H-29号住居址の大半を切っている。

本住居址は、南北5.0m東西4.95mの隅丸方形を呈し、床面積20.1㎡を測り、主軸方向はN-7°-Wを指す。壁高は、20cm～30cm程度を測り、周溝は認められない。支柱穴は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4



第86図 H-28号住居址カマド実測図(1:40)

1 竪穴住居址



第87図 H-28号住居址実測図 (1:80)

個が検出された。P<sub>1</sub>は65cm×55cm深さ55cm、P<sub>2</sub>は90cm×70cm深さ60cm、P<sub>3</sub>は75cm×60cm深さ70cm、P<sub>4</sub>は75cm×65cm深さ55cmを測る。いずれも掘り方は二段になっている。

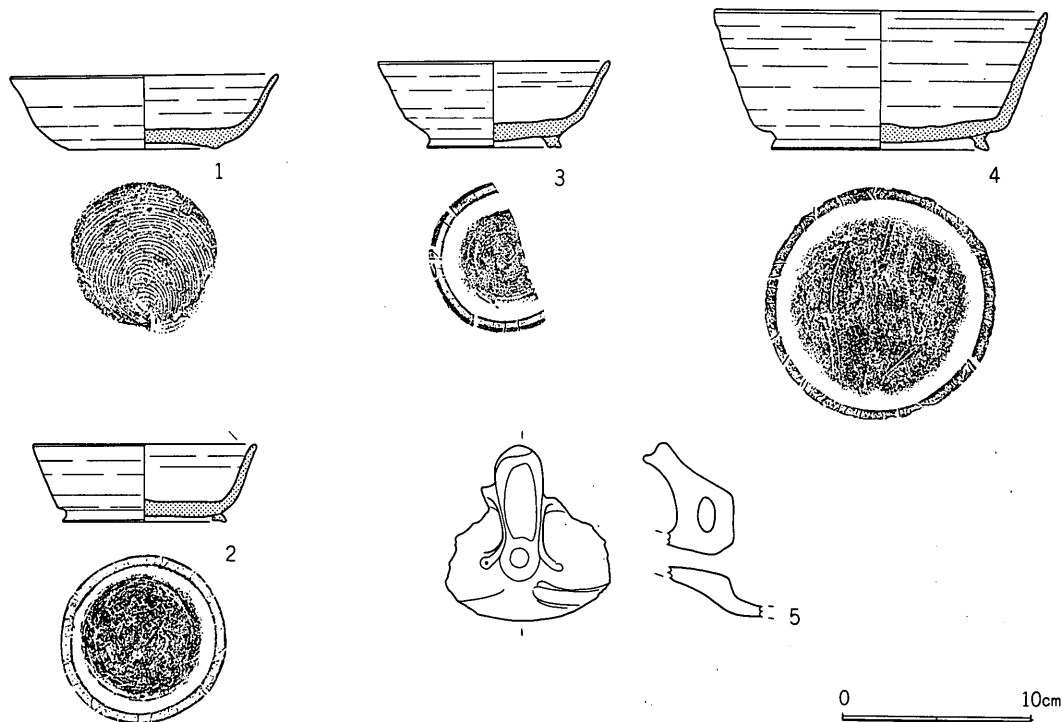
遺物は、カマド東脇より2、3の須恵器坏と7の台石が検出された。また、P<sub>3</sub>の南からは1の坏が検出された。

覆土はI層のみで、細粒パミスをよく含む黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、壊滅状態にあった。図には、その掘り方を示したが、火床が作られる以前の浅い掘り込みと、袖石が嵌まっていたと考えられるピット3個が認められた。覆土は3層に分層された。I層は焼土を含む黒褐色土層、II層は赤褐色の焼土層、III層はローム粒子が若干混じる黒色土層であった。

遺物 第88図

IV 遺構と遺物



第88図 H-28号住居址出土遺物 (1:4)

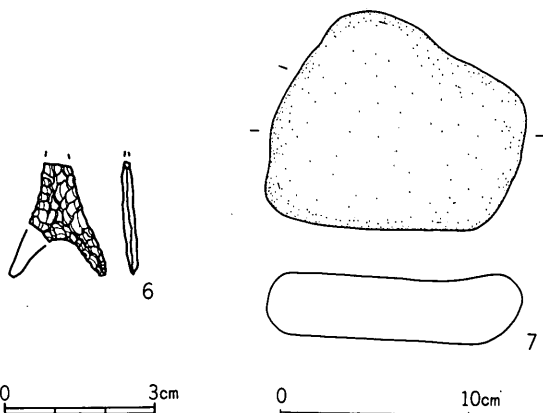
第39表 H-28号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	坏 (須)	14.1 3.9 7.9	体部は丸味をおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(7.5Y6/1) 内外面に「井」 の火襷
2 (完)	坏 (須)	11.8 4.1 8.7	体部はあまり強く外反しない。 高台が貼り付けられる。 元形。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は高台部貼り付けの 後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 緑灰色(10GY6/1) 焼成良好 内面に「井」の火襷
3 (回)	坏 (須)	<12.4> 4.5 7.0	体部は変換点をもって外反する。 高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は高台部貼り付けの 後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰色(7.5Y6/1) 焼成良好
4 (回)	坏 (須)	(17.7) 7.3 11.7	体部はあまり強く外反しない。 高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を 多く含み暗青灰色 (10BG 3/1)
5			縄文注口土器破片。 注口部円筒は欠失。		胎土は浅黄色 (2.5Y7/3) 床面直上出土

本住居址から検出された遺物には、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕が、土師器では甕の破片があり、縄文器片も検出されている。

1は、回転糸切りのなされた須恵器坏である。2・3は高台付坏で、底部は回転ヘラケズリがなされている。4も高台付坏であるが、底部は全面手持ちヘラケズリがなされている。

5は、縄文中期後半の注口土器の破片である。筒状の注口部は欠損している。III区床面直上か



第40表 H-28号住居址出土遺物一覧表&lt;石器&gt;

標図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
6	石 鏃	チャート	(2.3)	(1.4)	0.2	(0.4)	
7	台 石	玄武岩質 安山岩	11.3	13.4	4.0	860	

第89図 H-28号住居址出土遺物(6 = 2 : 3, 7 = 1 : 4)

らの出土で、本遺跡付近には縄文時代の遺構も認められないため、混入品ではなく、人の手による搬入品と思われる。どこかで目にとまった縄文土器が興味本位に住居内に持ち込まれたのであろうか。この他、図示しなかったが「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部もみられた。

石器では、6のチャートの両面調整の石鏃がみられた。また、7は偏平な河床礫の台石と考えられよう。

### 時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

## (29) H-29号住居址

### 遺 構 第90図

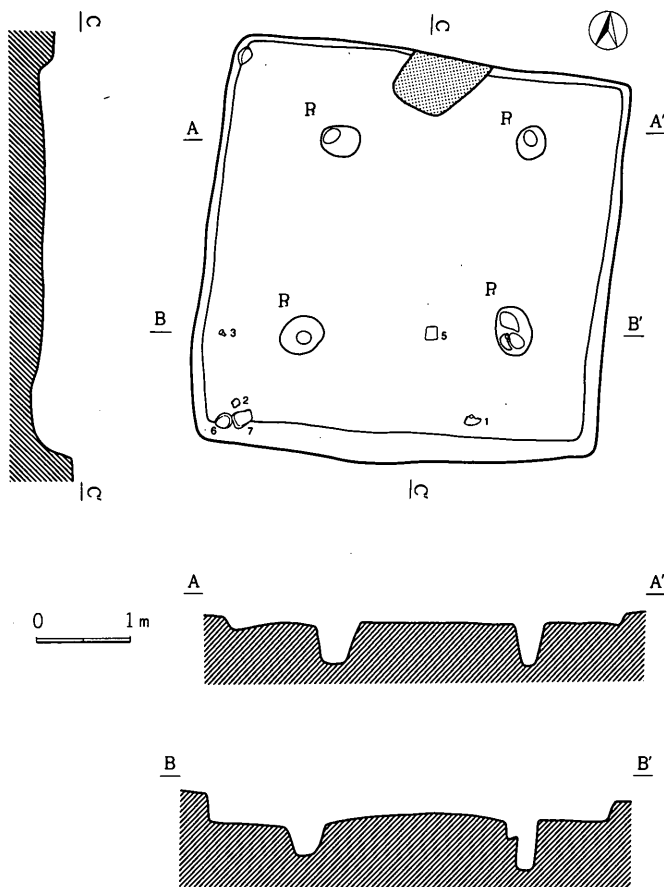
H-29号住居址は、第I区セ-41グリッドにおいて検出された。その半分以上をH-28号住居址に破壊されるが、本住居址のほうが深いものであるために、その規模等を知り得た。

本住居址は、南北4.3m東西4.35mの隅丸方形を呈し、床面積15.5㎡を測り、主軸方向はN-3°-Wを指す。H-28に破壊されていない部分の壁高は30cmを測る。支柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は35cm×30cm深さ45cm、P<sub>2</sub>は40cm×30cm深さ40cm、P<sub>3</sub>は48cm×40cm深さ30cm、P<sub>4</sub>52cm×37cm深さ52cmを測る。

図示した1~3・5・6の遺物は、III・IV区より検出されたもので、床面よりやや浮いた状態で出土している。

カマドは、焼土により北壁中央に存在することが確認されたが、H-28の構築等によりすでに破壊された状態にあった。

IV 遺構と遺物



第90図 H-29号住居址実測図 (1:80)

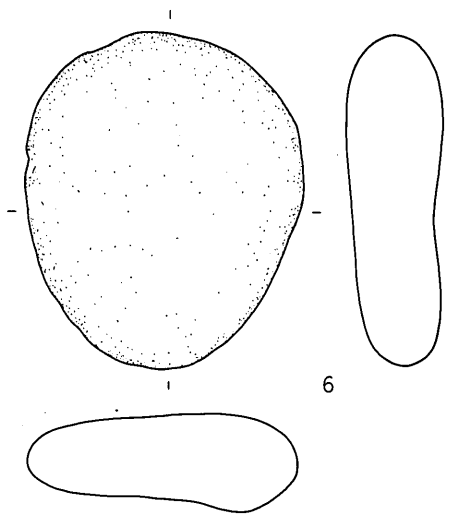
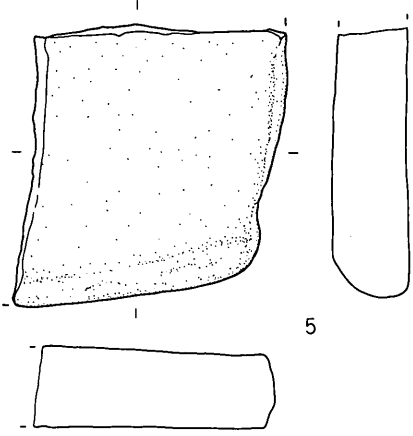
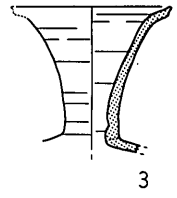
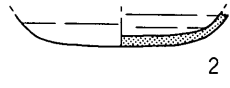
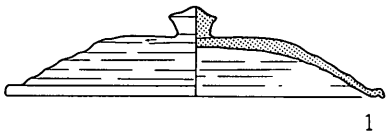
第41表 H-29号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (完)	蓋 (須)	2.7 4.7 20.2	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 青灰色(5B6/1) 焼成良好
2 (回)	坏 (須)	— — 8.0	底部から体部への変換はゆるやか。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 みにふい赤褐色 (5YR5/3)
3 (完)	長頸瓶 (須)	8.6 — —	頸部はラッパ状に外反するが、その下部 は比較的細くすぼまっている。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰色(N4/0) 焼成良好

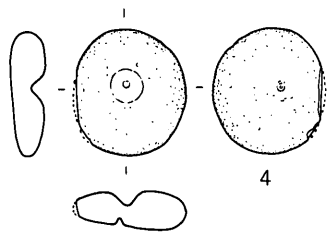
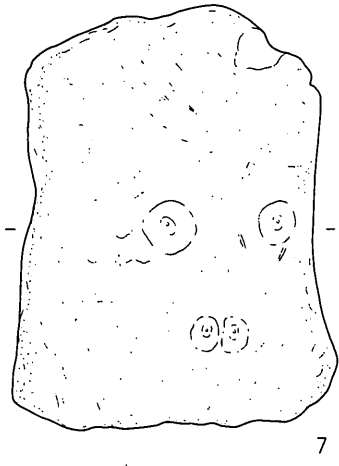
第42表 H-29号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
4	紡錘車?	砂 岩	5.0	(4.3)	1.5	(25)	未成品
5	台 石	輝 石 安山岩	(14.5)	(13.2)	4.3	(1,760)	
6	不 明	安山岩	17.7	14.7	5.4	2,140	
7	砥 石	砂 岩	22.1	16.9	7.9	4,600	

1 竪穴住居址



0 10cm



0 5cm

第91図 H-29号住居址出土遺物(4は1:3, 他は1:4)



## 遺物 第91図

遺物の出土量は少ないが、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕が、土師器では甕の各器種がみられた。

1の須恵器蓋は、つまみ部が宝珠形を呈するものである。

2は、回転ヘラキリのなされた須恵器坏底部である。

3は、ラップ状に開く須恵器長頸瓶の頸部である。

石器では、4の紡錘車未成品がある。偏平な円形の軽石に両側から穿孔がなされるが貫通していない。また、5は偏平な河床礫の台石である。6も偏平な河床礫で搬入石材であるが、用途は不明である。7は偏平な大形の砂岩の砥石で、表面一面と側面二面が研砥に供されており（図中矢印）、裏面は研砥に供されていないが4個の窪みがみられる。

なお、本住居址からはスラグ1点も出土している。

## 時期

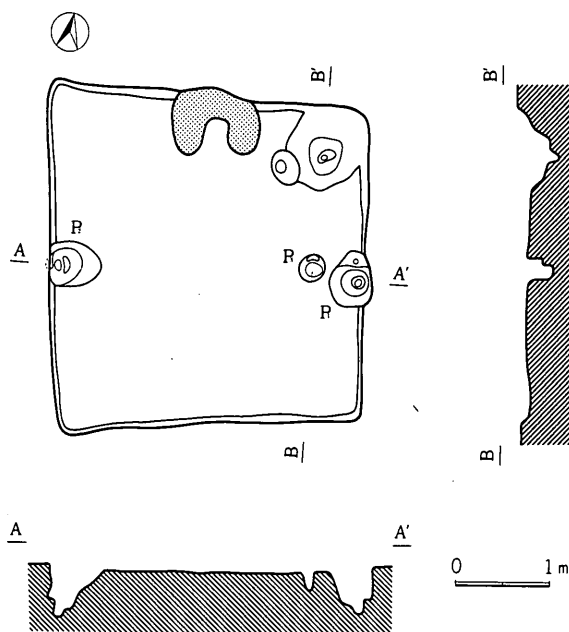
本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

## (30) H-30号住居址

## 遺構 第92・93図

H-30号住居址は、第I区ソー42グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.6m東西3.33mの隅丸方形を呈し、床面積10.7m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-13°-Wを指す。壁高は10cm程度を測るのみである。周溝は認められない。主柱穴と考えられるのは、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>で、東西両壁に1個ずつ配されたものである。P<sub>1</sub>は60cm×45cm深さ43cm、P<sub>2</sub>は55cm×45cm深さ50cmを測る。P<sub>3</sub>は、P<sub>1</sub>の支柱のピットとも考えられるもので、30cm×25cm深さ27cmを測る。北東コーナーにはP<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>が接して存在する。P<sub>4</sub>



第92図 H-30号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址

は38cm×28cm、P<sub>5</sub>は80cm×80cm深さ30cmを測る。

遺物は、1の須恵器蓋がカマド内より転倒した状態で出土した。

覆土は、パミス等をほとんど含まない暗褐色土層 I 層のみであった。

カマドは、北壁中央に存在している。半壊状態にあるが、東西両袖の袖石は旧状のまま土中に嵌っており、面取り軽石と安山岩の双方が用いられていた。カマド覆土は、I層が若干のカーボンを含む黒色土層、II層が焼土・カーボンをよく含む黒褐色土層であった。

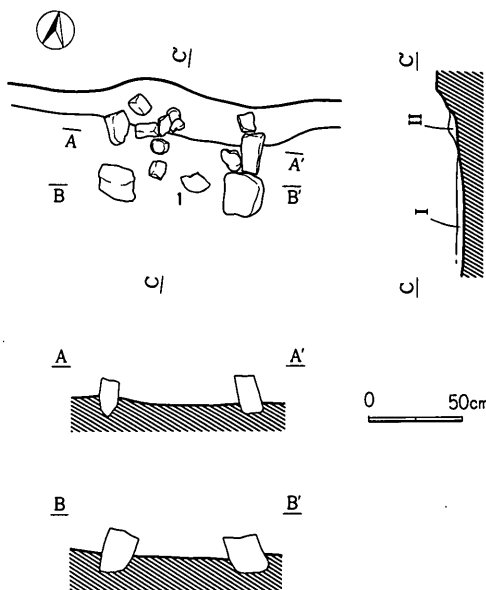
遺物 第94図

本住居址より検出された遺物は少ないが、須恵器では蓋・坏・土師器では甕がみられた。

1の須恵器蓋は、潰れた宝珠形のつまみ部を有するものである。

2の坏は、回転糸切りによる底部をみせる須恵器坏である。

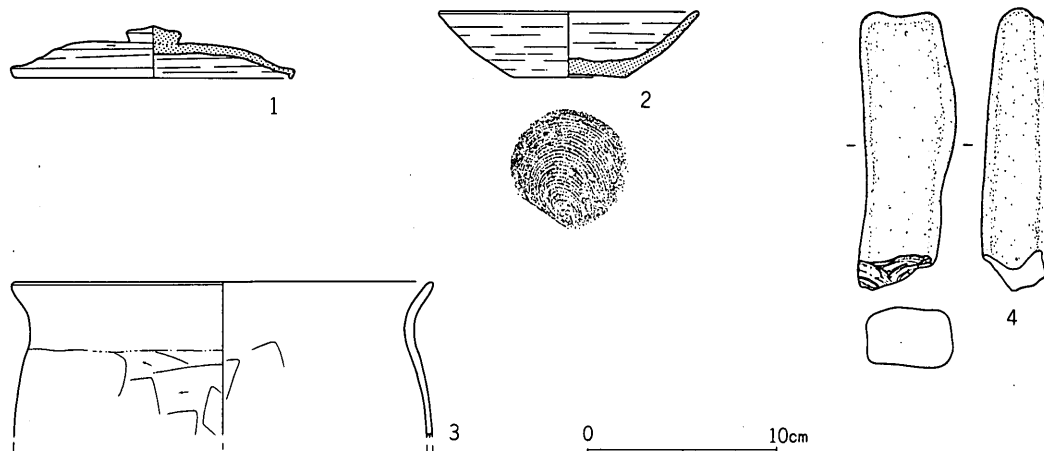
3は、僅か「コ」の字状に外反する土師甕



第93図 H-30号住居址カマド実測図 (1:80)

第43表 H-30号住居址出土遺物一覧表 <石器>

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
4	敲石	玄武岩質 安山岩	14.8	5.0	3.3	410	



第94図 H-30号住居址出土遺物 (1:4)

第44表 H-30号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (完)	蓋 (須)	2.9 2.7 14.8	つまみ部は宝珠形を呈する。 完形。	外面 内面	ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色 (10Y 5/1)
2 (回)	坏 (須)	<13.8> 3.5 6.0	体部は大きく外反する。 底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み 灰黄色 (2.5Y 7/2) 焼成は良好でない
3 (回)	甕	<22.4> — —	口縁部は僅か「コ」の字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色 (5YR 4/8)

の口縁部である。

4は、細長い河床礫の敲石で、一端のみが敲打に供され、階段状に剥落している。

#### 時期

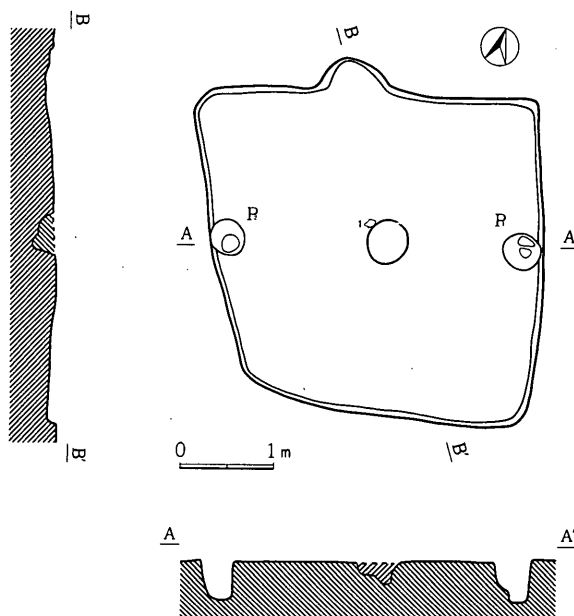
本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられる。

### (31) H-31号住居址

#### 遺構 第95図

H-31号住居址は、第I区セー41グリッドにおいて検出された。ちなみに、F-41号掘立柱建物址のプランが延長し本住居址と重複した場合、本住居址よりF-41のほうが古いものとして捉えられよう。

本住居址は、南北3.4m東西3.65mの歪んだ隅丸方形を呈し、床面積10.8㎡を測り、主軸方向はN-17°-Wを指す。壁高は、僅か5cm程度を測るのみであった。主柱穴は、東西両壁際に各1個ずつ認め



第95図 H-31号住居址実測図 (1:80)

られるもので、P<sub>1</sub>は40cm×40cm深さ40cm、P<sub>2</sub>が40cm×35cm深さ40cmを測った。

遺物は、住居中央の床面より正常位で1の須恵器坏が検出された。

覆土はI層のみで、粘性のある黒褐色土層であった。

第45表 H-31号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	<13.6> 3.3 7.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (SY7/1) 外面に「+」の火標

カマドは、北壁中央に存在したものと考えられ、北壁中央が半円状に突出している。

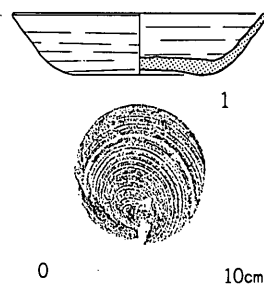
#### 遺物 第96図

遺物のごく僅か検出されたのみであった。須恵器では坏・甕、土師器では甕の破片がみられた。

1の須恵器坏は、回転糸切りによる底部をみせるものである。なお、図示でき得る遺物は、これ1点のみであった。

#### 時期

本住居址は、その構造と切り合い関係・僅かな出土遺物より奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けておこう。



第96図 H-31号住居址  
出土遺物(1:4)

## (32) H-32号住居址

### 遺構 第97・98図

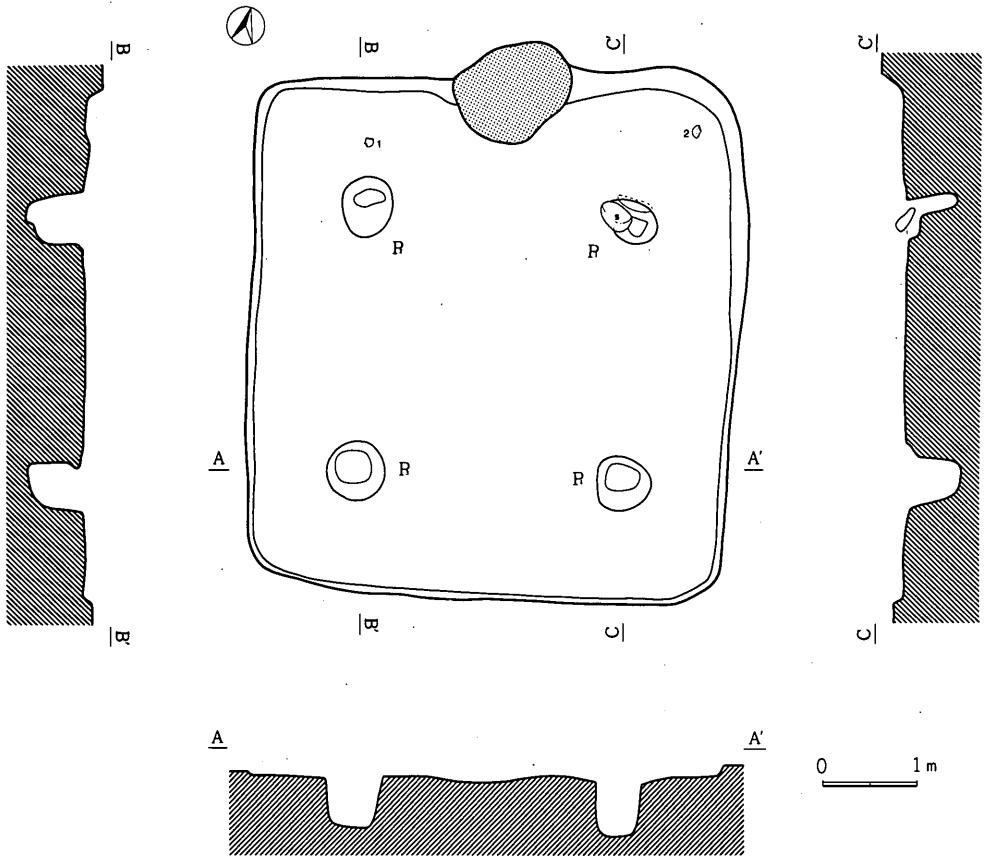
H-32号住居址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北5.6m東西5.25mの隅丸方形を呈し、床面積25.3m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-22°-Wを指す。壁高は10~15cmを測り、周溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は60cm×40cm深さ55cmを測るもので、その上面には35cm×25cmの偏平な礫がみられた。P<sub>2</sub>は60cm×55cm深さ60cm、P<sub>3</sub>は60cm×60cm深さ57cmを測る。P<sub>4</sub>は、60cm×60cm深さ60cmを測るが、そのピットの最下部には主柱が残存していた。詳細は後述するが、(株)パリノサーベいの樹種同定結果によるとクリ材であることが判明した。なお、残存した主柱の径は15cmを測り、少なくとも径15cm以上の柱が立っていたことが推察された。

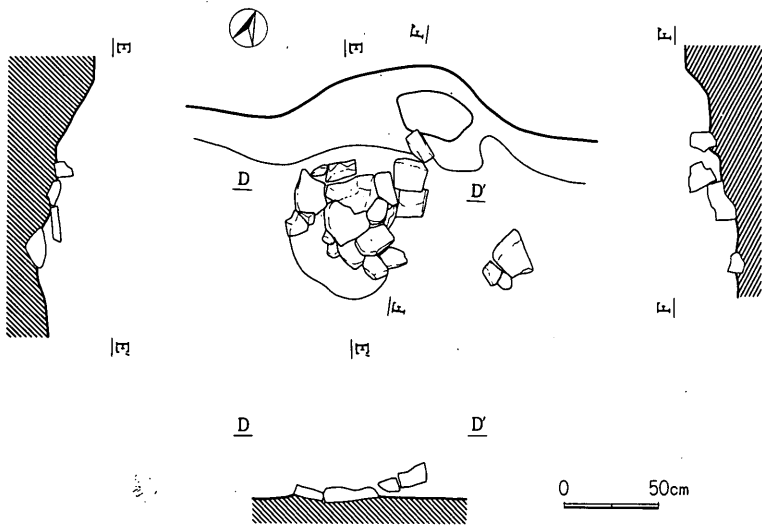
遺物は、北東コーナーの床面上より2の須恵器坏が、P<sub>2</sub>の北の床面上からは1の須恵器坏が検出された。

カマドは、北壁中央に位置するが、住居址廃絶時に取り壊されたと考えられ、その構材であった面取り軽石は火床部にまとめて整然と残置されていた。ちなみに、これと同様な事例は、H-8・H-37・H-47号住居址において認められた。

IV 遺構と遺物



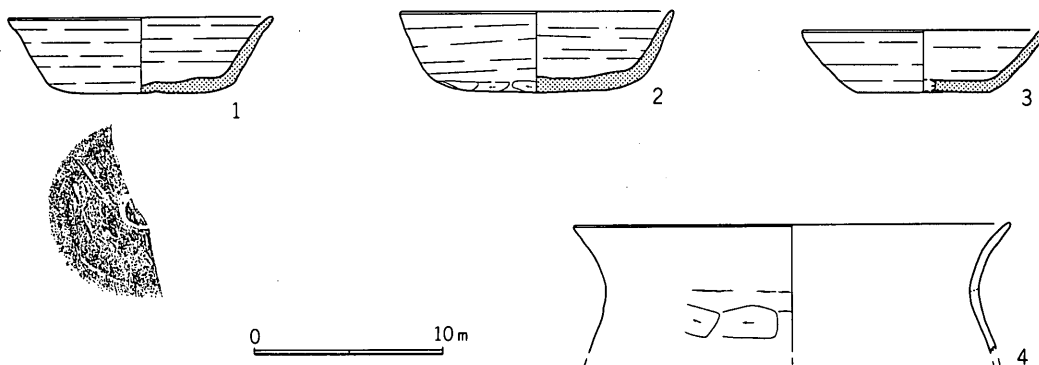
第97図 H-32号住居址実測図 (1 : 80)



第98図 H-32号住居址カマド実測図 (1 : 40)

第46表 H-32号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	(14.1) 4.0 (10.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は中砂粒を多く含み灰白色 (2.5Y8/2)
2 (回)	坏 (須)	(14.6) 4.3 (11.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を多く含み灰色 (10Y6/1)
3 (回)	坏 (須)	<12.9> 3.3 <7.0>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色 (N8/0)
4 (回)	甕	(23.2) — —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色 (5YR4/6)



第99図 H-32号住居址出土遺物 (1:4)

住居址覆土はI層のみで、若干のパミスを含み粘性のある黒色土層であった。

遺物 第99図

遺物は、須恵器では坏・甕が、土師器では甕が出土している。

1は、完全な還元炎焼成となっていない須恵器坏で、回転ヘラキリによる底部をみせている。

2は、回転ヘラキリの後、全面に手持ちヘラケズリのなされた底部をみせる須恵器坏である。3も底部切り離しの後手持ちヘラケズリのなされた須恵器坏である。

4は、「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部である。この他、図示し得なかったが土師器小形丸底甕の底部もみられた。

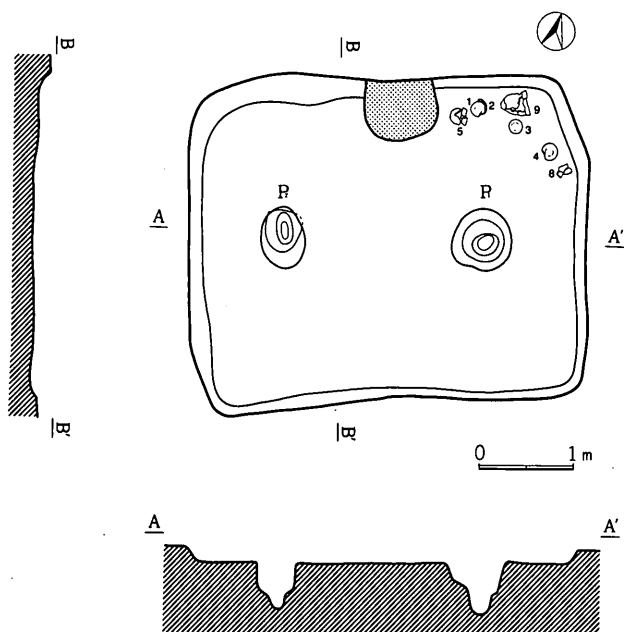
時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

## (33) H-33号住居址

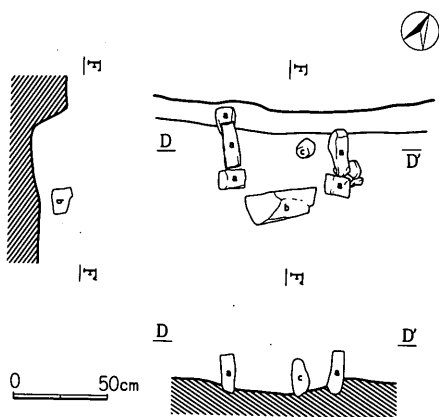
## 遺構 第100・101図

H-33号住居址は、第I区セー40グリッドにおいて検出された。本住居址は、南北3.5m東西4.25mの隅丸方形を呈し、床面積11.9m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-19°-Wを指す。壁高は10~15cmを測り、周溝は認められない。柱穴は住居の中央にP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の2個が配されている。P<sub>1</sub>は65cm×65cm深さ57cm、P<sub>2</sub>は65cm×45cm深さ48cmを測る。双方のピットとも二段の掘り方となっている。



第100図 H-33号住居址実測図(1:80)

遺物は、住居址の北東コーナーよりきわめて良好な状態で検出された。これらはその出土状態や配列性からおおよそ原位置をとどめているものと考えられよう。まず、カマドの東脇からは5の小形甕が横倒して潰れた状態で出土した。その東隣りには、半割した2の坏が重ねて置かれ、さらにその上に1の坏が重ねられていた。さらにその東隣りには、9の甕が横倒して潰れており、その南に3・4の坏が正常位で検出された。その隣りには、8の小形台付甕がみられた。このような遺物の出土状態は、住居址内における機能空間を考えるうえで、きわめて示唆的といえる。

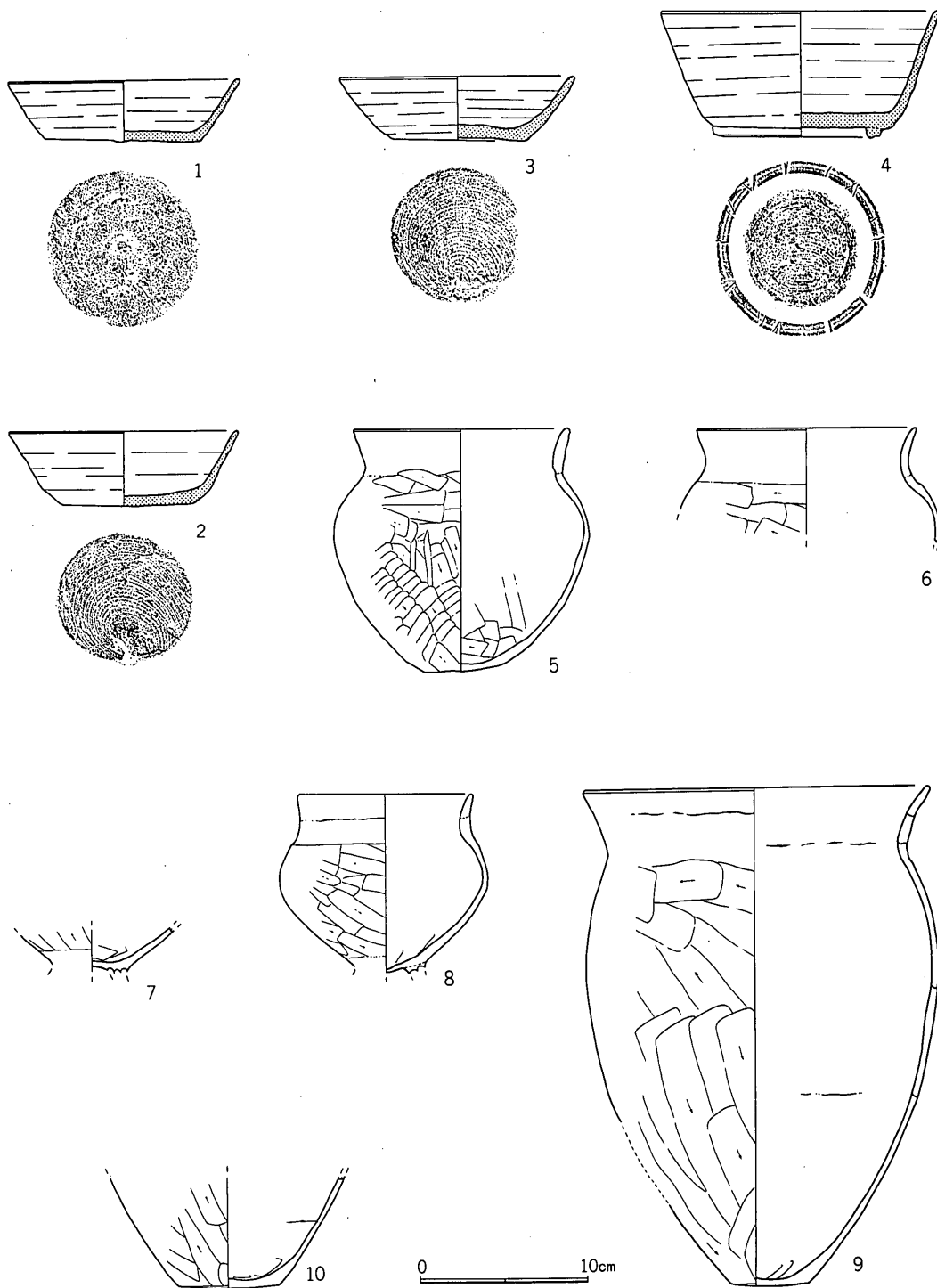


第101図 H-33号住居址カマド実測図(1:40)

住居址覆土はI層のみで、細粒パミスをよく含み径5mm程度のパミスを若干含む粘性のある黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、その袖・天井部の石組みが比較的よく残っていた。袖石(a)・天井石(b)には直方体に面取りした軽石が用いられていた。また、支脚は角柱状に面取りされた軽石であった(c)。袖石と天井石によって囲われた四角い部分が火床となっている。この石組

1 竖穴住居址



第102图 H-33号住居址出土遗物 (1:4)



第47表 H-33号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

押図番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (完)	坏 (須)	13.9 3.6 9.3	体部は外反し、底部平底。	外面	体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 (7.5 YR 5/4) 内外面に火襷
2 (完)	坏 (須)	13.7 4.4 7.7	体部は外反し、底部平底。	外面	体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 (7.5 YR 5/4) 内外面に火襷
3 (完)	坏 (須)	14.1 3.8 8.0	体部は外反し、底部平底。完形。	外面	体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みオリブ灰色 (2.5GY 5/1) 外面 [X]内面[併]の火襷
4 (完)	坏 (須)	16.6 7.5 9.9	体部は外反する。高台が貼り付けられる。	外面	体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、高台部貼り付け 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (N 4 / 0)
5 (完)	甕	13.0 14.4 4.9	口縁部は比較的直立的に外反し、胴部上半のふくらむ小形の器形。底部平底。	外面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい橙色 (7.5 YR 6/4)
6 (完)	甕	10.4 — —	口縁部がゆるく外反し、胴部のふくらむ小形の器形	外面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胆土は褐色 (7.5 YR 4 / 4)
7 (完)	台付甕	— — —	6と同一個体の可能性あり	外面	胴部ヘラケズリ 内面 胴部ヘラナデ	胎土はにぶい赤褐色 (5 YR 5 / 4)
8 (完)	台付甕	10.4 — —	口縁部は外反気味に直立し、胴部のふくらむ小形の器形。台部欠失。	外面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明褐色 (7.5 YR 5 / 6)
9 (完)	甕	20.7 29.5 4.7	口縁部が「く」の字状に外反する長胴の器形を呈する。底部平底。	外面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明褐色 (7.5 YR 4 / 6)
10 (回)	甕	— — 6.0	底部平底。	外面	ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は明黄褐色 (10 YR 6 / 6)

みに粘土が貼られていたものかどうかは不明である。なお、両袖石間は85cmを測り、焚口から奥壁までは90cmを測った。カマド覆土中には、若干の焼土とカーボンがみられた。

なお、本住居址の廃絶状況は他と異なるものと考えられる。カマドを破壊したり、遺物を搬出したことのできなかった理由が、そこに介在していたものと思われる。

#### 遺物 第102図

本住居址からは、比較的遺存度の高い土器がいくつか検出されている。器種は、須恵器では坏・甕が、土師器では甕がみられた。

1の須恵器坏は、回転ヘラキリによる底部をみせている。2～4は、回転糸切りによる底部をみせる須恵器坏で、このうち4は高台付坏である。

5は、土師器の小形甕である。また、6も5と同様な小形甕の口縁部であるが7と同一個体とも考えられ台付甕となる可能性もある。

8は、5・6よりさらに小形の土師甕で、台付となっている。ただし脚台部を失っており、その形状は明らかでない。

9は、土師器長胴甕で、口縁部は「く」の字状に外半するが、その口唇部が微妙に折れ僅か「コ」の字状に外反する要素も見出せる。

なお、本住居址において石器・鉄製品等は認められなかった。

#### 時期

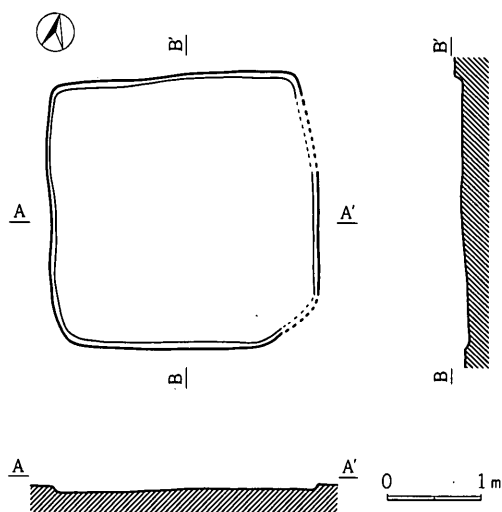
本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。

### (34) H-34号住居址

#### 遺構 第103図

H-34号住居址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。その東壁は、F-42号掘立柱建物址と重複しており、また、そのIII・IV区もF-56号掘立柱建物址と重複している。

本住居址は、南北2.92m東西2.85mの隅丸方形を呈し、床面積7.2m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-14°-Wを指す。壁高は10cm未満を測るのみであり、周溝は認められない。また、柱穴その他のピットは認められなかった。



第103図 H-34号住居址実測図 (1:80)

遺物は、本住居址からは須恵器甕の破片が1片検出されたのみであった。

本住居址内には、壁際に焼土等も検出されず、カマドの痕跡が認められなかった。

なお、本遺構を居住施設として捉えてよいものかどうか疑問も残る。

#### 遺物

前述したように、本住居址から検出された遺物は、叩き目のある須恵器甕の破片1片のみである。

#### 時期

本住居址は、その構造・規模と切り合い関係のみを手がかりとして時期決定するほかないが、一応、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期と捉えておこう。

## (35) H-35号住居址

## 遺構 第104図

H-35号住居址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。僅かにその南東コーナーが検出されたのみであり、F-83・F-84号掘立柱建物址と重複するが、その新旧関係は明らかでない。

本住居址は、その規模・構造ともに不明と言わざるを得ないが、もし4本の主柱をもつものであればしかるべき位置に柱穴が検出されてよいはずである。しかし柱穴は認められなかった。ただし、そのIV区においてP<sub>1</sub>が検出されたが、本住居址に伴うかどうかははっきりしなかった。

したがって基本的には無柱穴のタイプの住居址として捉えておこう。

その主軸方向は、おおよそN-17°-Wを指すものと思われる。

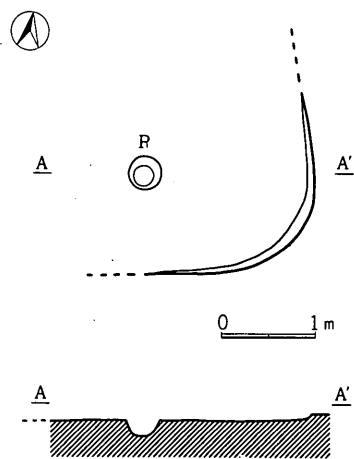
カマドの存在の有無は、確認することができなかった。

## 遺物

本住居址においては、遺物は1点も検出されなかった。

## 時期

本住居址は時期決定が困難であるが、周囲の遺構の時間的位置付けをふまえて、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期の所産と考えておきたい。

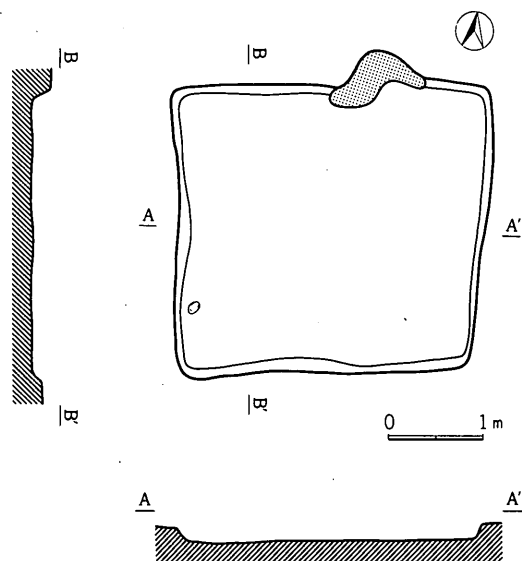


第104図 H-35号住居址実測図 (1:80)

## (36) H-36号住居址

## 遺構 第105・106図

H-36号住居址は、第I区セ-40グリッドより検出された。本住居址は、H-37号住居址を切って存在し、また、F-55号掘立柱建物址と重複する。本H-36とF-55の新旧関係については、現場において確認できなかったが、F-55が新しいものと考えられよう。



第105図 H-36号住居址実測図 (1:80)

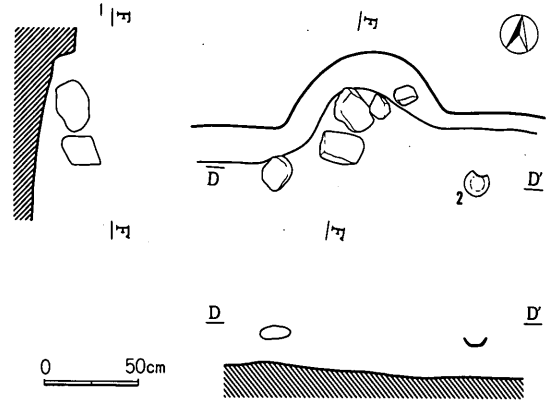
1 竪穴住居址

本住居址は、南北3.1m東西3.4mの隅丸方形を呈し、床面積8.9㎡を測り、主軸方向N-8°-Wを指す。壁高は15~20cmを測り、周溝は認められない。柱穴その他のピットは伴わなかった。

遺物は、2の坏が正常位でカマド東脇より検出されたが、床面より15cm浮いた状態であった。

覆土はI層のみで、若干のパミスを含み粘性のある黒色土層であった。

カマドは、北壁中央よりやや東寄りに存在するが、ほぼ壊滅状態にあり、その構材であった軽石や安山岩礫がいくつかみられた程度であった。

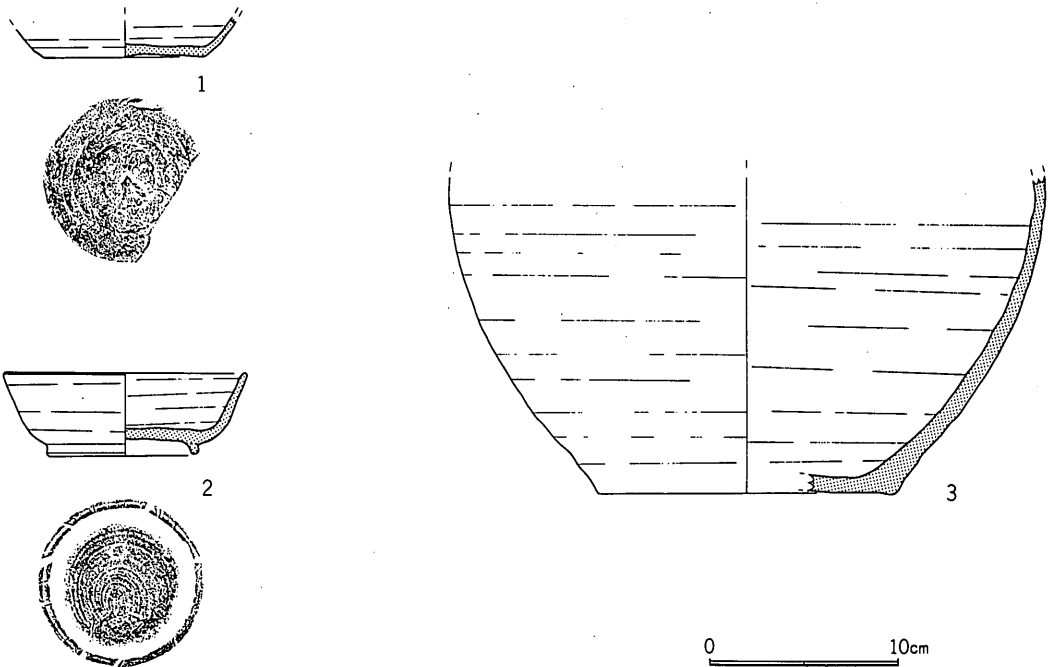


第106図 H-36号住居址カマド実測図(1:40)

遺物 第107図

遺物の検出量は少ないが、須恵器では坏・甕が、土師器では甕の各器種がみられた。

1の須恵器は、回転ヘラキリの底部をみせる坏である。



第107図 H-36号住居址出土遺物(1:4)

第48表 H-36号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (完)	坏 (須)	— — 8.5	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色 (10Y 7/1) 内面に火傷きあり
2 (完)	坏 (須)	13.0 4.5 8.1	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は細砂粒を多く含み灰色 (N 5/0)内面に「II」の火傷
3 (回)	甕 (須)	— — <15.8>	底部平底。	外面 胴部ロクロヨコナデ 内面 胴部ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (10Y 6/1)

2は、回転糸切りの底部をみせる須恵器台付坏である。

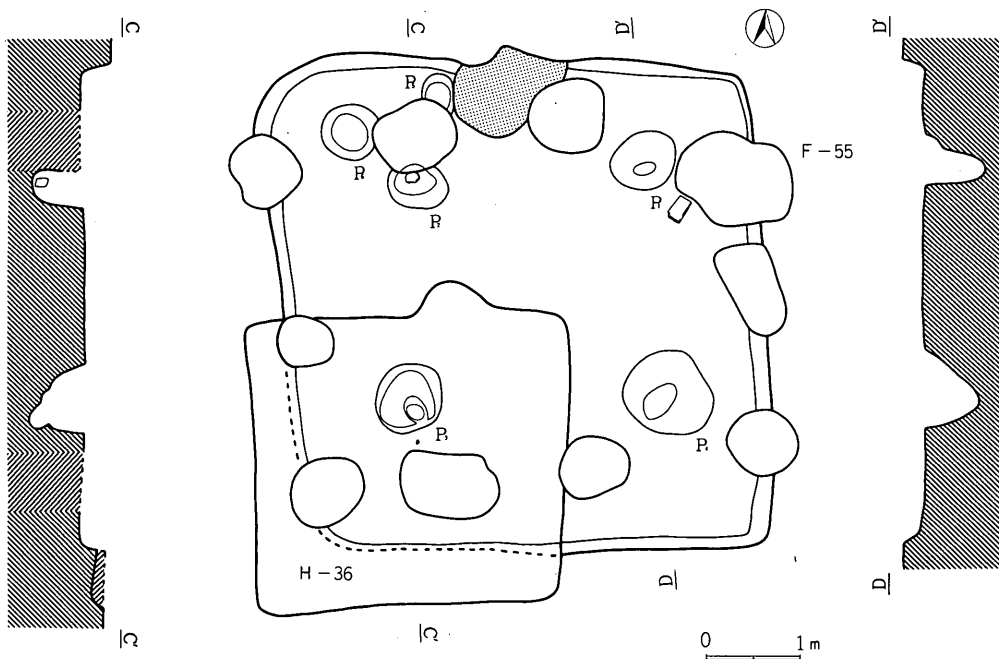
なお、図示し得なかったが、「く」の字状口縁の土師器甕破片もみられた。

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

(37) H-37号住居址

遺 構 第108・109図



第108図 H-37号住居址実測図 (1:80)

## 1 竪穴住居址

H-37号住居址は、第I区セー40グリッドにおいて検出されたが、H-36号住居址およびF-55号掘立柱建物址の双方に切られている。

本住居址は、南北5.15m東西5.3mの隅丸方形を呈し、床面積24.1m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-6°-Wを指す。壁高は15~30cmを測り、周溝は認められない。

主柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出され、この他II区よりP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>が

検出された。P<sub>1</sub>は70cm×60cm深さ60cm、P<sub>2</sub>は55cm×50cm深さ55cm、P<sub>3</sub>は80cm×70cm深さ60cm、P<sub>4</sub>は95cm×85cm深さ55cmを測る。P<sub>5</sub>は45cm×35cm、P<sub>6</sub>は65cm×60cmを測る。

覆土はI層のみで、ロームの若干混入する黑色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、住居廃絶時に取り壊されたと考えられ、その構材であった面取り軽石は火床部にまとめて整然と残置されていた。なお、粘土(IV層)の貼られた東側の袖は若干残っていた。カマド覆土は、3層に分層された。I層は灰を含む黒灰色土層、II層は二次的堆積のローム層、III層は若干のカーボンを含む黑色土層であった。ちなみに、本カマドと同様な事例は、H-8・H-32・H-47に認められた。

### 遺物 第110図

遺物は、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕が、土師器では坏・甕の各器種がみられた。

須恵器蓋では、1のようにかえりを有するものと、2のかえりを有さないものの二種がみられた。両者のつまみ部の形状は不明である。

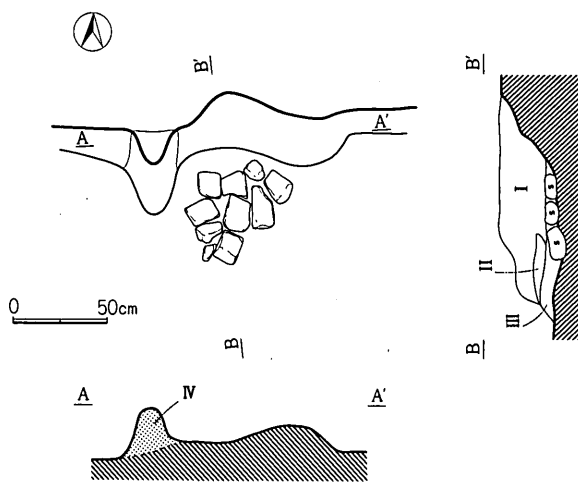
須恵器坏には3~6があるが、いずれも切り離しは回転ヘラキリによっており、その後手持ちヘラケズリか、回転ヘラケズリの加えられたものであった。

土師器坏には、ロクロ整形により内面黒色研磨のなされる7・9(高台付)と、ロクロを用いられず内面もヘラミガキのみの8がある。

土師器甕には、胎土が精選されず肉厚で小形の器形の10・11と、「く」の字状に外反する口縁部をみせる薄手の長胴甕12がみられた。

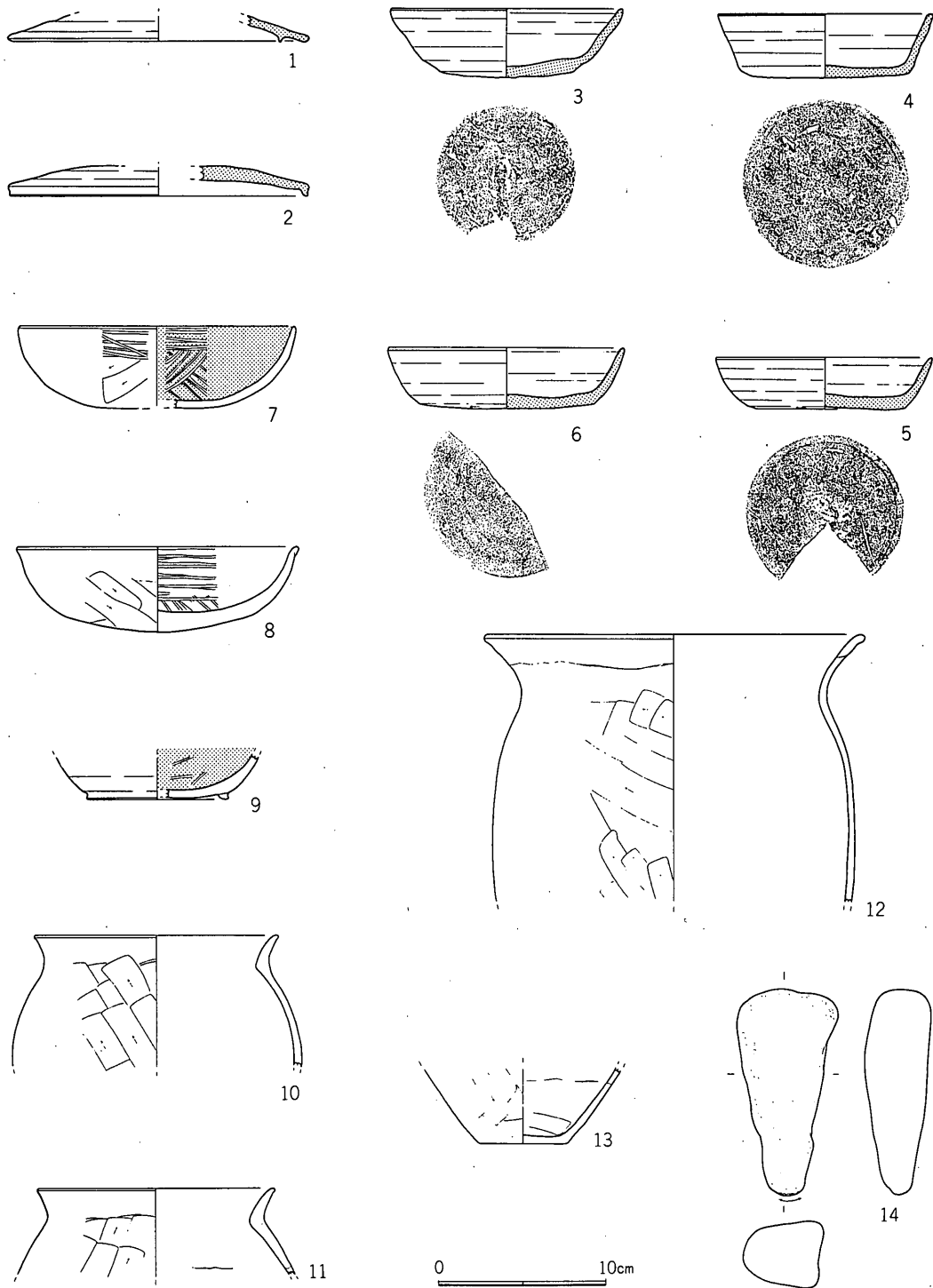
石器では、敲打痕は顕著に認められないが敲石と考えられる14がIV区より出土している。

### 時期



第109図 H-37号住居址カマド実測図(1:40)

IV 遺構と遺物



第110図 H-37号住居址出土遺物 (1:4)

第49表 H-37号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	— <18.0>	内面にかえりを有する。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰白色 (5Y8/1) 焼成良好
2 (回)	蓋 (須)	— <18.0>		外面 ロクロヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選され 黄灰色 (2.5Y6/1) 焼成良好
3 (回)	坏 (須)	14.0 4.1 8.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリの後、 若干の手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を 多量に含み橙色 (5YR6/6) 焼成不良
4 (完)	坏 (須)	13.0 3.8 10.0	体部は直線的に外反し、底部平底。 完形。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、手 持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰オリーブ色 (5Y6/2) 焼成良好
5 (完)	坏 (須)	13.0 3.1 9.4	体部は外反し、底部平底。 器高は短い。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラキリの後、 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ右回転)	胎土は精選され 緑灰色 (10GY5/1) 焼成良好
6 (回)	坏 (須)	(14.2) 3.6 10.5	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は比較的精 選され灰色 (N5/0)
7 (回)	坏	<16.6> <4.8> —	体部は丸味をおびて外反する。 底部は偏平な丸底。	外面 体部および底部ヘラケズリ、口唇部ヨコヘラミ ガキ 内面 黒色研磨	胎土は砂粒を多 く含み灰白色 (10YR8/2)
8 (回)	坏	<16.8> 5.0 11.4	体部は丸味をおびて外反する。 底部は偏平な丸底。	外面 口唇部ヨコナデの後、体部および底部ヘラケズ リ 内面 ヨコヘラミガキ	胎土は砂粒を多 く含み、にぶい 褐色(7.5YR5/4)
9 (回)	坏	— (8.4)	体部は外反し、底部には高台が貼り付け られる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 黒色研磨 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み淡黄色 (2.5Y8/3)
10 (回)	甕	<14.6> — —	口縁部は短く外反し、胴部はふくらむ小 形の器形。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ナナメのヘラスベリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は大砂粒を 多量に含み明赤 褐色(5YR5/8) 焼成はよくない
11 (回)	甕	<14.2> — —	口縁部は短く「く」の字状に外反する。 小形の器形。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ナナメのヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を含 みにぶい褐色 (7.5YR5/4)
12 (回)	甕	<22.7> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は比較的精 選され橙色 (7.5YR6/6)
13 (回)	甕	— (5.2)	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土はにぶい黄 色 (2.5Y6/3)

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に  
位置付けられよう。

第50表 H-37号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
14	敲 石	玄武岩質 安山岩	12.2	6.0	4.1	345	

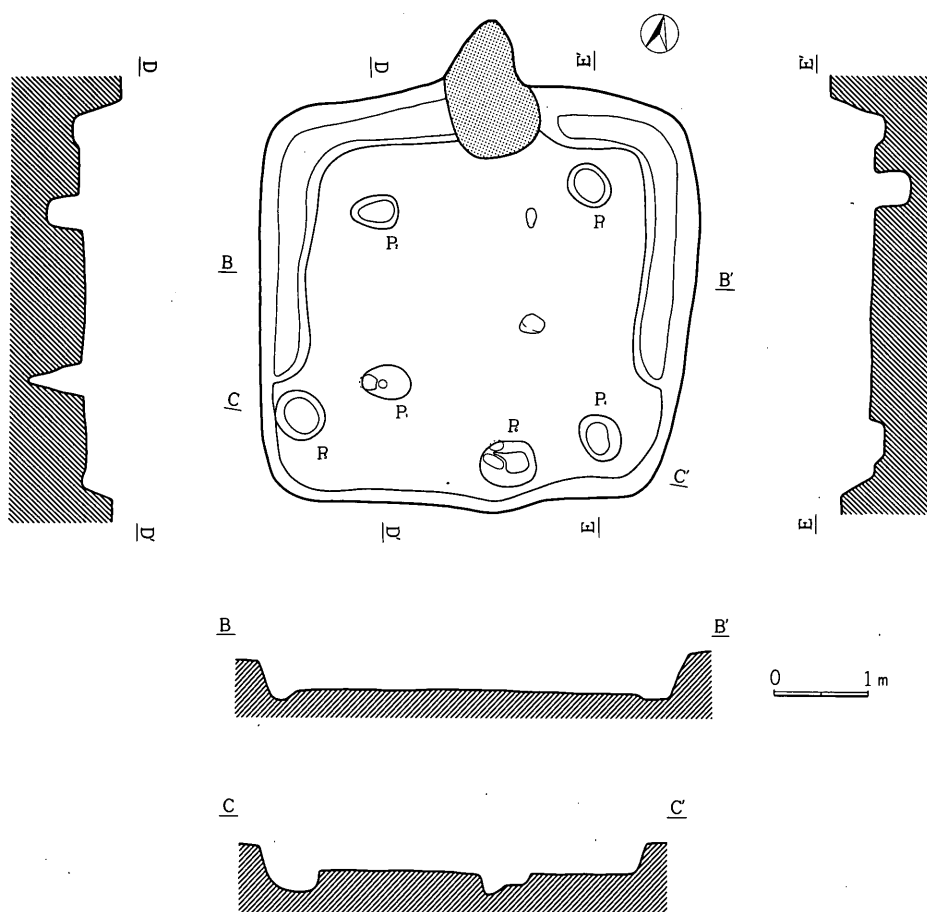
## (38) H-38号住居址

遺 構 第111・112図

H-38号住居址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。



IV 遺構と遺物



第三四圖 H-38号住居址実測図 (1 : 80)

本住居址は、南北4.4m東西4.7mの隅丸方形を呈し、床面積16.1 $\text{m}^2$ を測り、主軸方向はN-13°-Wを指す。壁高は30~40cmを測る。周溝は幅30cm深さ10cm程度を測る幅広のものが、南壁と東西両壁の一部を除いて巡っている。支柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>の3個が検出され、また柱穴かどうかわからないがP<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>の3個が南壁寄りに検出されている。P<sub>1</sub>は50cm×40cm深さ40cm、P<sub>2</sub>は50cm×35cm深さ35cm、P<sub>3</sub>は50cm×35cm深さ55cm、P<sub>4</sub>は50cm×40cm深さ15cm、P<sub>5</sub>は55cm×50cm深さ20cm、P<sub>6</sub>は60cm×50cm深さ20cmを測る。なお、P<sub>6</sub>際の南壁は僅かに突出する。

遺物は、良好な出土状態を示すものは認められなかった。

覆土はI層のみで、径5mm程度の軽石をよく含む粘性のある黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置し、半壊状態にあったが、かろうじて両側の袖石の一部と支脚石が生きていた。その構材には二点の安山岩(a)を除き面取り軽石(e)が用いられていた。また、支脚石(c)も角柱状に面取りされた軽石であった。天井部には、一部粘土が用いられていたと

1 竪穴住居址

考えられ、セクションにおいてIII層として認められた。なお、覆土I層は若干の粘土・焼土を含む黒色土層、II層はロームが混入し若干の焼土を含む黒褐色土層であった。

遺物 第113図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕の各器種がある。

1は、回転ヘラキリのなされた底部をみせる須恵器坏である。

2は、体部が弓なりに外反し、底部が偏平な丸底の形態をとる土師器坏である。

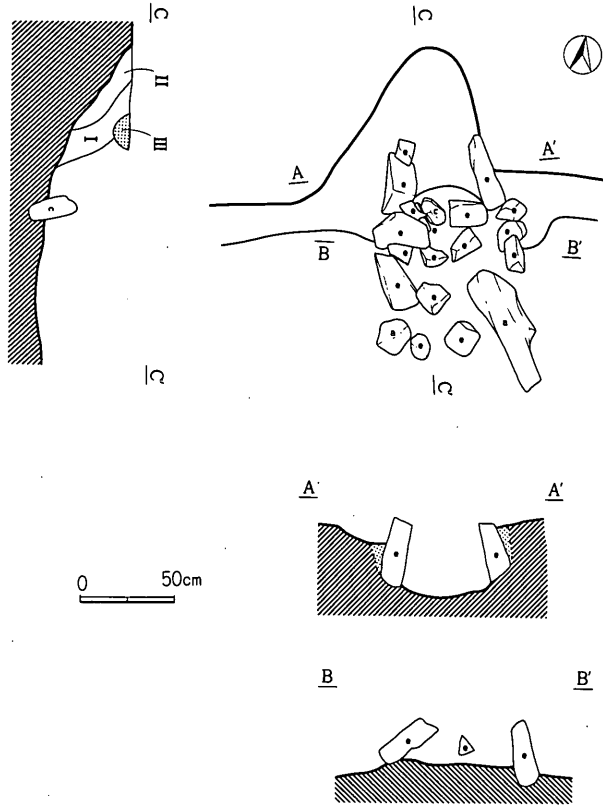
須恵器甕は、破片のみで、器形を知り得る良好なものはなかった。

土師器甕は、図示しなかったが、「く」の字状の口縁をみせる薄手の甕と、胎土が精選されず肉厚な甕の破片が認められた。

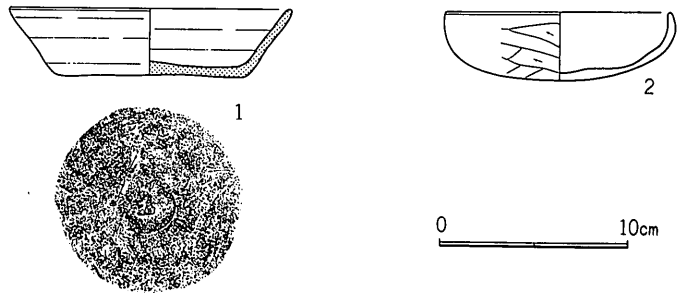
時期

第51表 H-38号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	坏 (須)	15.0 3.7 10.0	体部外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選され灰白色 (10Y7/1) 焼成良好
2 (完)	坏	12.0 3.7 -	口唇部は内湾し、底部は偏平な丸底。	外面 口唇部ヨコナデ、体部および底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含み明褐色 (7.5Y5/6)



第112図 H-38号住居址カマド実測図 (1:40)



第113図 H-38号住居址出土遺物 (1:4)

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

### (39) H-39号住居址

遺構 第114・115図

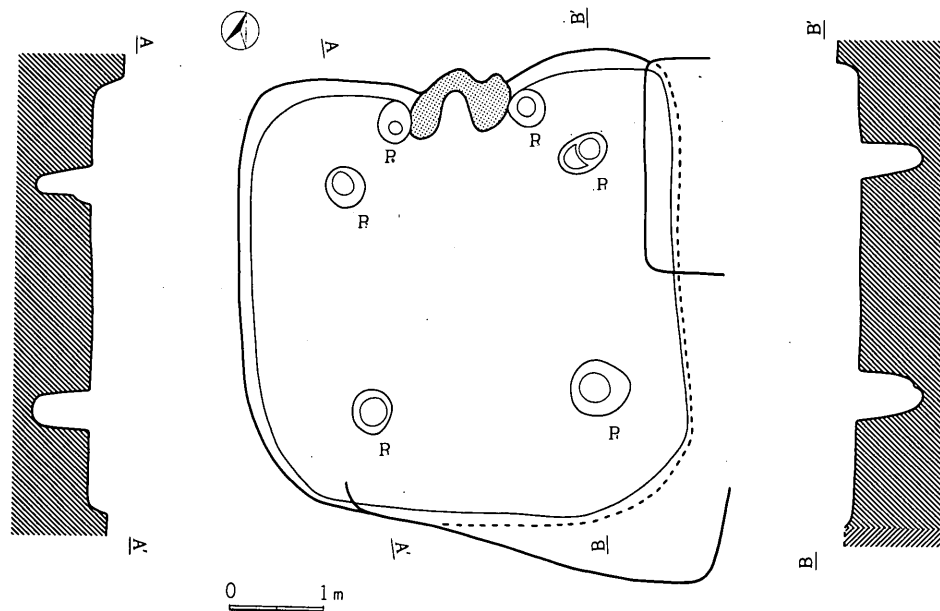
H-39号住居址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。その大半をH-47号住居址に切られ、さらにその第I区の壁際をH-40号住居址に切られていた。しかし、本H-39がいちばん深い掘り込みであった為、そのプランを知り得ることができた。

本住居址は、南北4.85m東西4.6mの隅丸方形を呈し、床面積19.9㎡を測り、主軸方向はN-24°-Wを指す。壁高は、他の住居址に破壊されていない部分において30cm程度を測り、周溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は、53cm×40cm深さ56cm、P<sub>2</sub>は45cm×40cm深さ60cm、P<sub>3</sub>は50cm×45cm深さ60cm、P<sub>4</sub>は63cm×60cm深さ70cmを測る。

遺物は、良好な出土状態のものは認められなかった。

覆土はI層のみで、カーボンを若干含む黒色土層であった。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに壊滅状態にあり、僅かにその掘り方となる袖部のロームの張り出しが認められたにすぎない。また袖の両脇には、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>が認められた。P<sub>5</sub>は43cm×40cm深さ17cm、P<sub>6</sub>は36cm×30cm深さ12cmを測った。両者は、長胴甕等でも据えておくピットだっ



第114図 H-39号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址

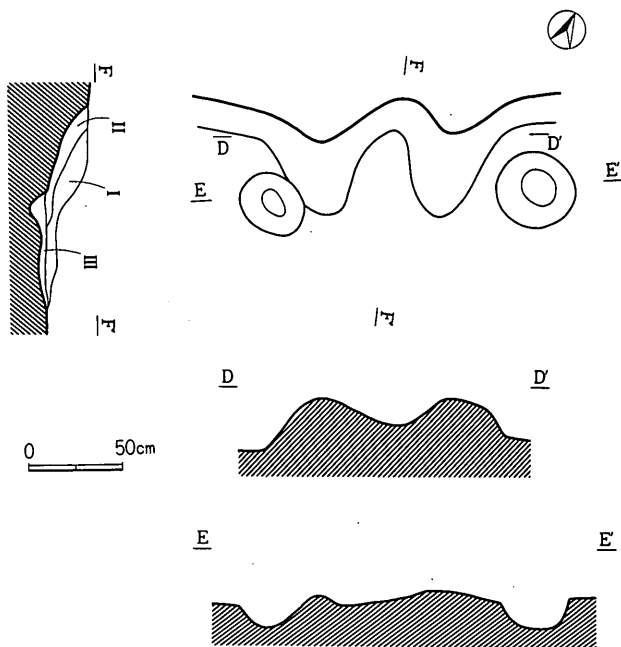
たのであろうか。カマド覆土は3層に分層された。I層は焼土・カーボンに多量の灰を含む灰褐色土層、II層が灰を含む黒色土層、III層がカーボンをよく含む黒色土層であった。

遺物 第116図

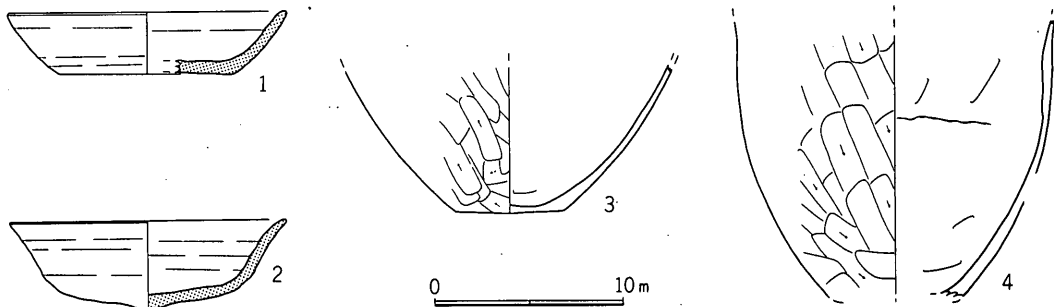
検出された遺物は少ないが、須恵器では坏・甕、土器では坏・甕の破片がみられた。

1・2は、共に回転ヘラキリのなされた底部をみせる須恵器坏である。

須恵器甕は、破片のみであり



第115図 H-39号住居址カマド実測図 (1:40)



第116図 H-39号住居址出土遺物 (1:4)

第52表 H-39号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	<14.8> 3.3 <9.1>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色 (N6/0)
2 (回)	坏 (須)	<14.7> 4.6 (9.5)	体部は外反し、底部はふくらみをおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリの後、 若干の手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多量に含み にぶい 黄褐色 (10YR 7/4)
3 (回)	甕	- (5.8)	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (5YR 5/6)
4 (回)	甕	- -		外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	胎土はにぶい赤褐色 (10YR 5/3)

大方の器形を知り得なかった。

土師器坏は、図示できなかったが、体部が弓なりに外反し底部が偏平な丸底となる内面黒色研磨のなされたものが1点みられた。

3・4は土師器長胴甕の胴～底部であるが、これに対応すると考えられる「く」の字状の口縁部破片も認められた。

#### 時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

### (40) H-40号住居址

#### 遺構 第117・118図

H-40号住居址は、第I区ソ-40グリッドにおいて検出され、H-39およびH-47号住居址の北東コーナーの一部を切って存在している。

本住居址は、南北2.4m東西2.35mの隅丸方形を呈し、床面積4.7m<sup>2</sup>を測るのみの非常に小形のものである。主軸方向はN-70°-Eを指す。壁高は15cm程度を測り、周溝は認められない。ピットはまったく検出されなかった。

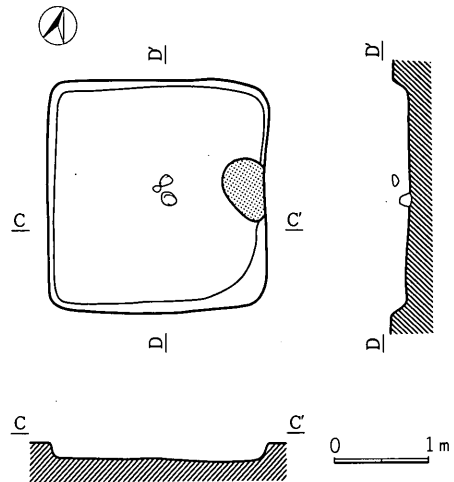
遺物は、良好な出土状態を示すものはみられなかった。

覆土はI層のみで、細粒パミス若干含む粘性のある黒灰色土層であった。

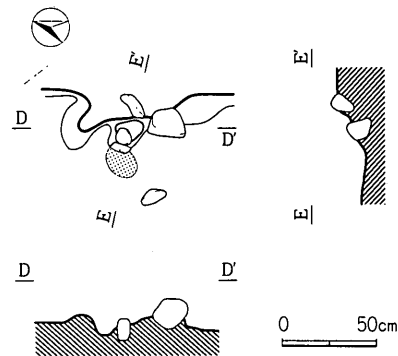
カマドは、他の多くの住居址とは異なり東壁の中央に存在した。すでに半壊状態であったが、いずれにしても本来は貧弱なカマドであったことが窺えた。その構材であった安山礫等4点が残りに、炭化物が火床部に集中的にみられた(網点)。

なお、その規模等から本遺構を居住施設として位置付けるのには疑問も残ろう。

#### 遺物 第119図



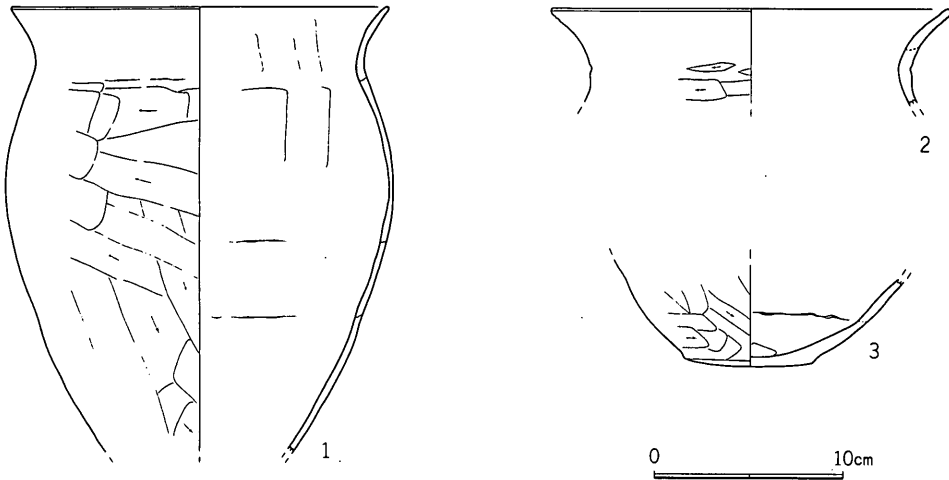
第117図 H-40号住居址実測図 (1:80)



第118図 H-40号住居址カマド実測図 (1:40)

第53表 H-40号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器形の特 徴	調 整	備 考
1 (回)	甕	<20.1> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部および胴部ヘラナデ	胎土は橙色 (5 YR 6 / 6)
2 (回)	甕	<21.3> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土はにぶい黄 橙色 (10 YR 7 / 4)
3 (完)	甕	— — 6.9	底部平底。	外面 胴部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土はにぶい橙色 (7.5 YR 6 / 4)



第119図 H-40号住居址出土遺物 (1:4)

遺物の検出量はきわめて少ないが、須恵器では坏・甕の破片が、土師器では甕の破片がみられた。

須恵器の破片では、底部の調整方法は知り得るものがなかった。

土師器甕は、1・2のように「く」の字状に外半する口縁部をもつものがみられた。

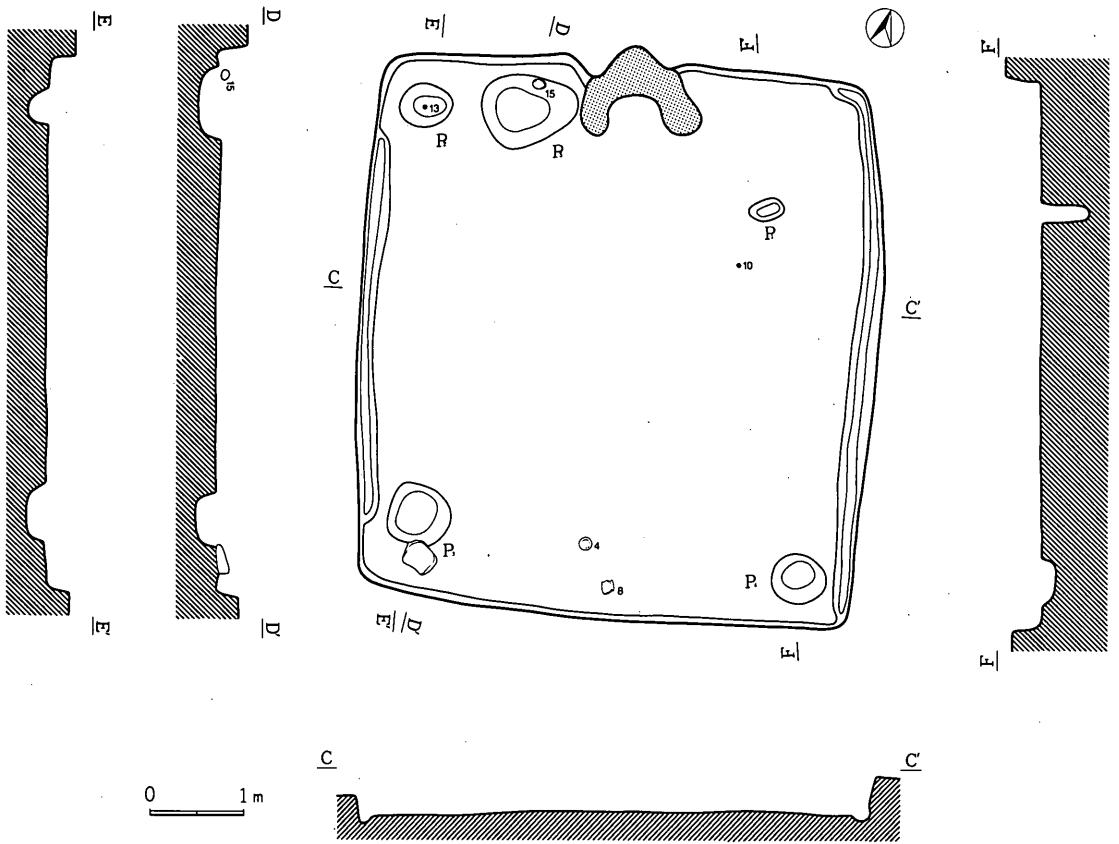
#### 時 期

本住居址は、その規模・構造・切り合い関係・乏しい遺物等より、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期のものと捉えておこう。

### (41) H-41号住居址

遺 構 第120・122図

H-41号住居址は、第I区ソ-39グリッドにて検出された。



第120図 H-41号住居址実測図 (1:80)

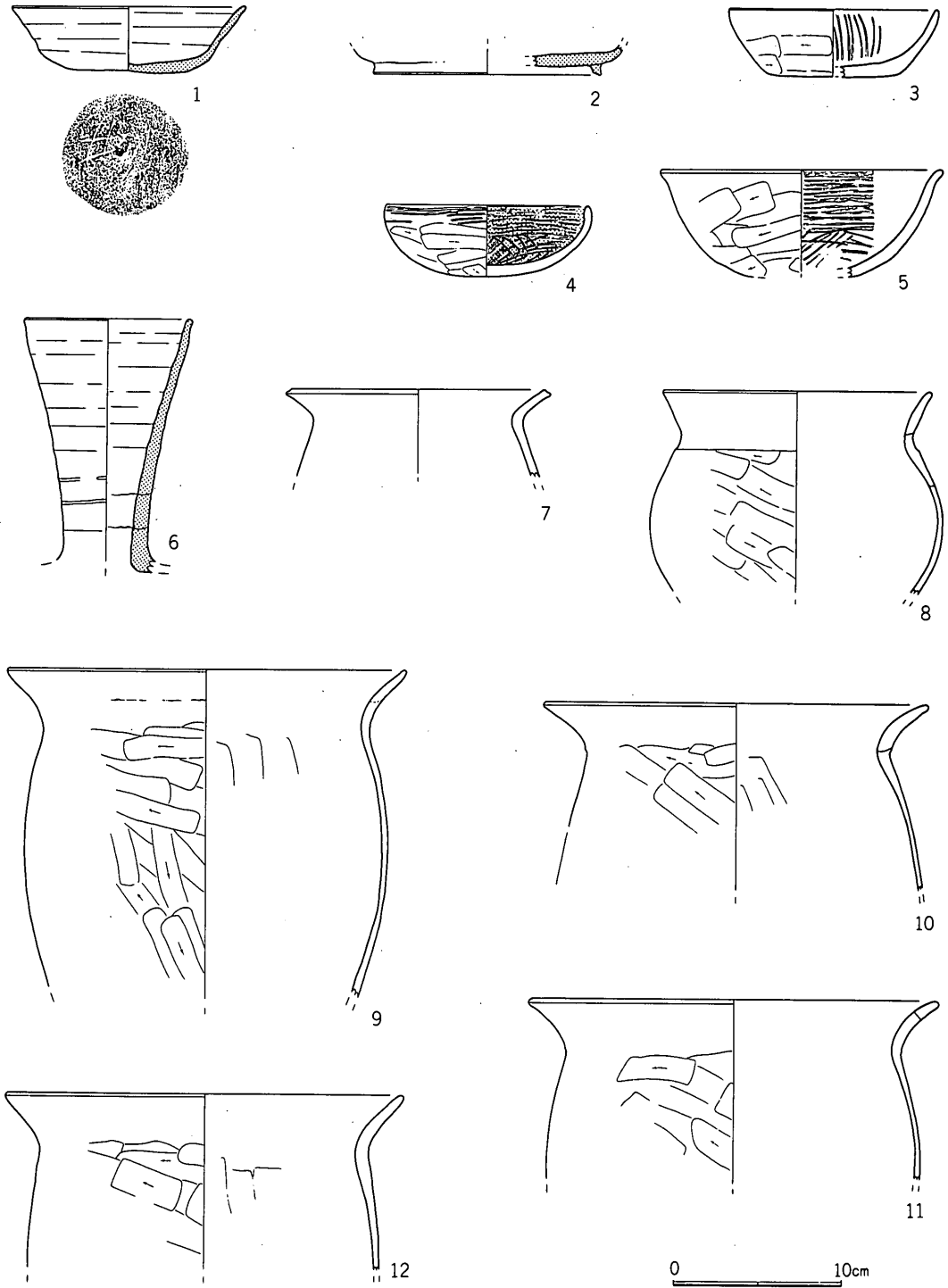
本住居址は、南北5.8m東西5.5mの隅丸方形を呈し、床面積29.1m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-13°-Wを指す。壁高は25~40cmを測る。周溝は幅15cm深さ7cm程度のものが、東西両壁際に認められる。支柱穴としては、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が認められたが、P<sub>1</sub>がI区中央に位置し径が小さく深めのピットであるのに対し、P<sub>2</sub>~P<sub>4</sub>はそれぞれ住居址のコーナー寄りにある径の大きい浅めのピットであった。P<sub>1</sub>は40cm×20cm深さ50cm、P<sub>2</sub>は58×45cm深さ20cm、P<sub>3</sub>は70cm×70cm深さ20cm、P<sub>4</sub>は55cm×60cm深さ15cmを測る。また、カマドの両脇にはP<sub>5</sub>があり100cm×80cm深さ20cmを測る。

遺物は、良好な出土状態を示したものに、南壁寄りから正常位で出土した4の坏、P<sub>1</sub>付近から出土した10の土師器甕、P<sub>2</sub>中から出土した鎌、P<sub>5</sub>の上面から出土した15の紡錘車がある。

覆土はI層のみで、小粒パミスをよく含み粘性のある黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置し、半壊状態にあったが、東西両袖の袖石が残っていた。袖口には例外なく面取り軽石が用いられ、白色粘土層(VII層)によって固められてきた。袖石で特徴的なのは、手前の両袖と東袖の後部に「」状に面取りされた軽石が用いられていたことである。カマ

1 竖穴住居址



第121图 H-41号住居址出土遗物 (1:4)



IV 遺構と遺物

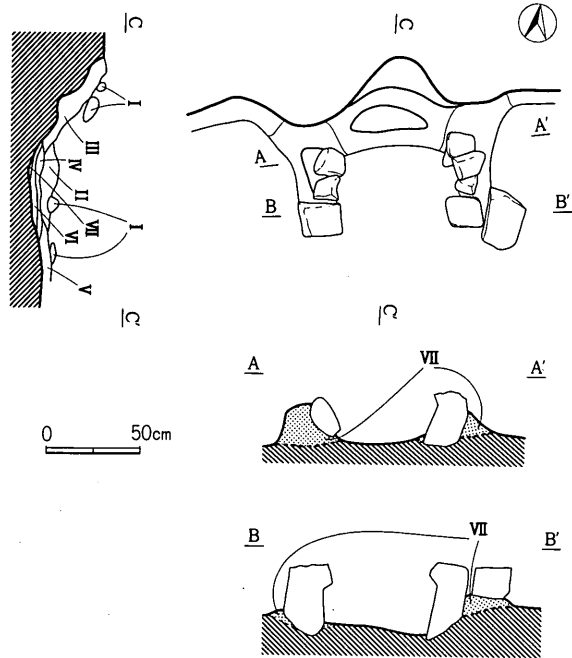
ド覆土は6層に分層された。I層がブロック状にみられる灰の堆積、II層が灰を含む灰褐色土層、III層は焼土と少量のカーボンを含む黒色土層、IV層が赤褐色の焼土層、V層がカーボンと少量の焼土を含む黒色土層、VI層は焼土・カーボンを含まない黒褐色土層であった。

遺物 第121・123図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では坏・長頸瓶・甕、土師器では坏・甕がある。

1は、回転ヘラキリによる底部をみせる須恵器坏で、2は底部が回転ヘラケズリのなされた須恵器高台付坏である。

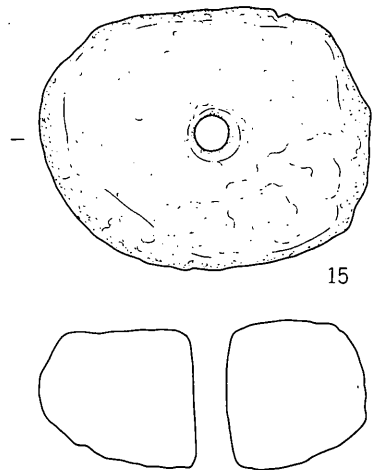
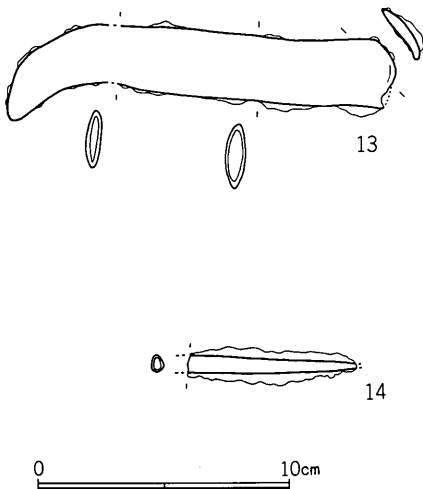
3は、体部に放射状暗文の施された特徴的な坏で、底部にはあるいはラセン状暗文がなされていた



第122図 H-41号住居址カマド実測図 (1:40)

第54表 H-41号住居址出土遺物一覧表〈金属器・石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
13	鎌	鉄	15.3	2.6	0.8	(57)	
14	鉄 鏃	鉄	(6.7)	0.7	0.5	(8)	
15	紡錘車	軽石	10.4	13.1	5.6	420	



第123図 H-41号住居址出土遺物 (1:3)

第55表 H-41号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	坏 (須)	13.9 3.8 7.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く 含みにぶい赤褐色 (5YR5/4)底部 に「#」のヘラ記号
2 (回)	坏 (須)	— — <13.6>	高台が付される。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 紫灰色 (5P6/1)
3 (回)	坏	<12.5> 4.0 <7.8>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部上半ヨコナデ、体部下半および底部ヘラケズリ 内面 体部に放射状暗文	胎土は赤褐色の粒 子を特徴的に含み 浅黄橙色 (7.5YR8/6)
4 (完)	坏	12.1 4.3 —	体部は丸味をおび、口唇部で内湾する。 底部平底。	外面 体部下半～底部ヘラケズリ、体部上半ヨコヘラミガキ 内面 黒色研磨	胎土は砂粒を含み 淡黄色 (2.5Y8/4)
5 (回)	坏	<16.8> — —	体部は丸味をおびて外反し、さらに口唇部は短く外反する。	外面 口唇部ナデ、胴部ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	胎土は砂粒を含み 明赤褐色 (2.5YR5/6)
6 (回)	長頸瓶 (須)	<10.0> — —	頸部は筒状に開いて素口縁となり、その下半には二条の沈線が施こされる。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を含み 明赤褐色 (7.5Y6/1) 焼成良好
7 (回)	甕	<15.7> — —	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁の端部は平坦に縁取られている。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され にぶい橙色 (7.5YR6/4) 焼成良好
8 (回)	甕	<16.0> — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部のふくらむ小形の器形。	外面 口縁部ロクロヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部・胴部ヨコナデ	胎土はにぶい黄 橙色 (10YR6/4)
9 (回)	甕	(23.9) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい黄 橙色 (10YR7/4)
10 (完)	甕	22.9 — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい赤 褐色 (5YR5/4)
11 (回)	甕	<24.4> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (5YR5/8)
12 (回)	甕	<23.8> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (5YR5/8)

かもしれない。4は内面黒色研磨のなされた土師坏で、体部は丸味をおび口唇部で内湾するものである。5は、内面にヘラミガキのなされた土師坏である。

6は素口縁の須恵器長頸瓶で、頸部には二条の沈線が施こされている。胴部の器形は不明。

7は、口縁の端部が平坦に縁取られた土師甕の口縁部である。8は、土師器の小形甕である。

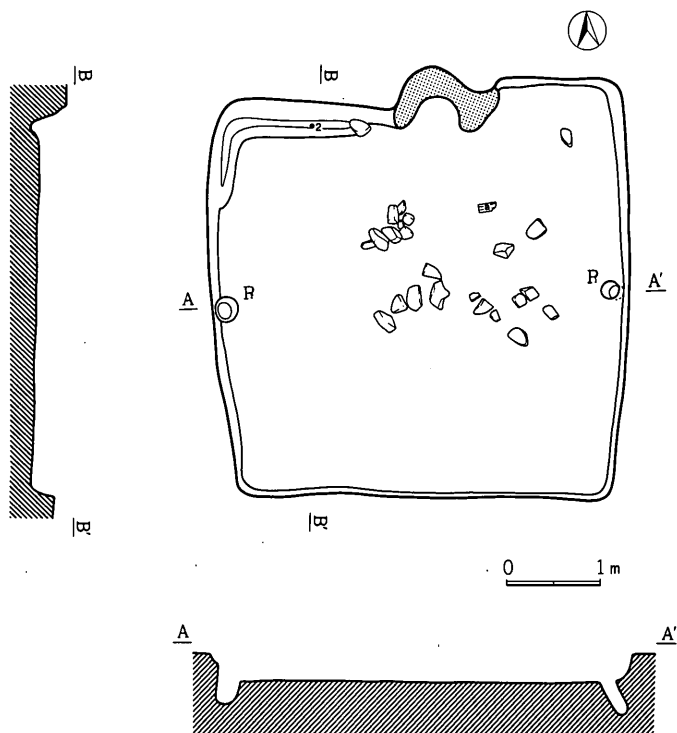
9・10・11・12は、「く」の字条に外反する口縁をみせる土師甕である。

鉄製品では、13の鎌と、14の鉄鋏の基部が検出されている。

石器では、楕円形で偏平に面取りされた軽石製の大型紡錘車15がみられる。

#### 時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。



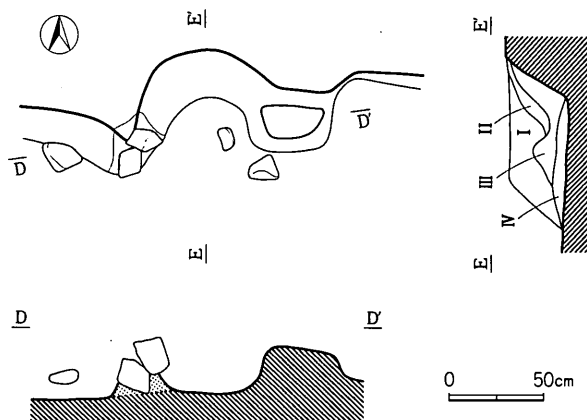
第124図 H-42号住居址実測図 (1:80)

## (42) H-42号住居址

遺構 第124・125図

H-42号住居址は、第I区ソー38グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.4m東西4.5mの隅丸方形を呈し、床面積16.7m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-2°-Wを指す。壁高は、30cm前後を測る。周溝は北西コーナーにみいてのみ認められる。支柱穴と考えられる



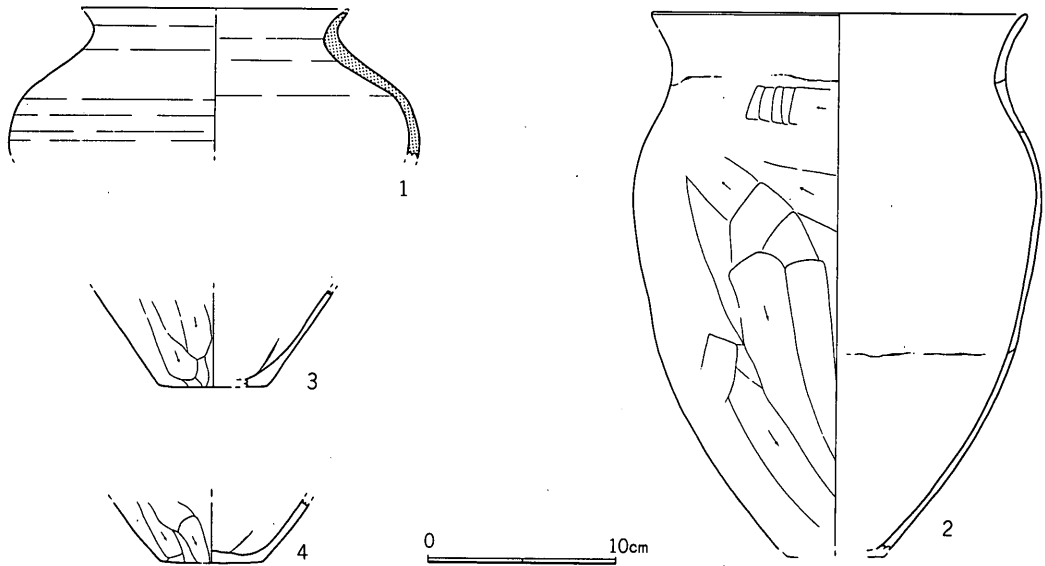
第125図 H-42号住居址カマド実測図 (1:40)

ものは、東西両壁際の中央にP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>が認められた。P<sub>1</sub>は20cm×20cm深さ40cmを測る斜めに開いた柱穴で、P<sub>2</sub>は25cm×25cm深さ25cmとなっている。住居中央の床面直上には、カマドに用いられていたと考えられる軽石が散乱していた状態にあった。

遺物は、2の甕の破片ほぼ1個体分がカマド西脇の北壁際より検出された。それ以外は、特記

第56表 H-42号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	壺 (須)	— — —	頸部は短く外反する。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み暗灰色(N3/0) 外面自然釉付存 焼成良好
2 (回)	甕	(20.0) — —	口縁部は「く」の字状にゆるく外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい黄橙色 (10YR 7/4)
3 (回)	甕	— (5.8)	底部平底。	外面 胴部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は褐色 (7.5 YR 4/3)
4 (回)	甕	— — 5.4	底部平底。	外面 胴部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は褐色 (7.5 YR 4/6)



第126図 H-42号住居址出土遺物 (1:4)

すべき遺物の出土状態は認められなかった。

覆土はI層のみで、径5~10mm程のバミスをよく含む粘性のある黒褐色層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、その大半を破壊された状態にあり、構材であった軽石は住居中央に散乱していた。そのうちaは角柱状に面取りされた軽石の支脚である。カマドの掘り方をみると、すでにその時点で袖が意識されロームが袖状に削り出されていることがわかる(殊に東袖)。カマド部分の覆土は4層に分層された。I層はカーボンを少量含んだ黒褐色土層、II層が焼土を多く含み若干のカーボンを含む黒褐色土層、III層は焼土・カーボンを含まない黒色土層、IV層は多量のカーボンを含む黒色土層であった。

遺物 第126図

IV 遺構と遺物

遺物の検出量は少ないが、須恵器では坏・壺、土師器では坏・甕が検出されている。

須恵器坏では図示し得るものがなかったが、回転ヘラキリによる底部をみせるものがある。

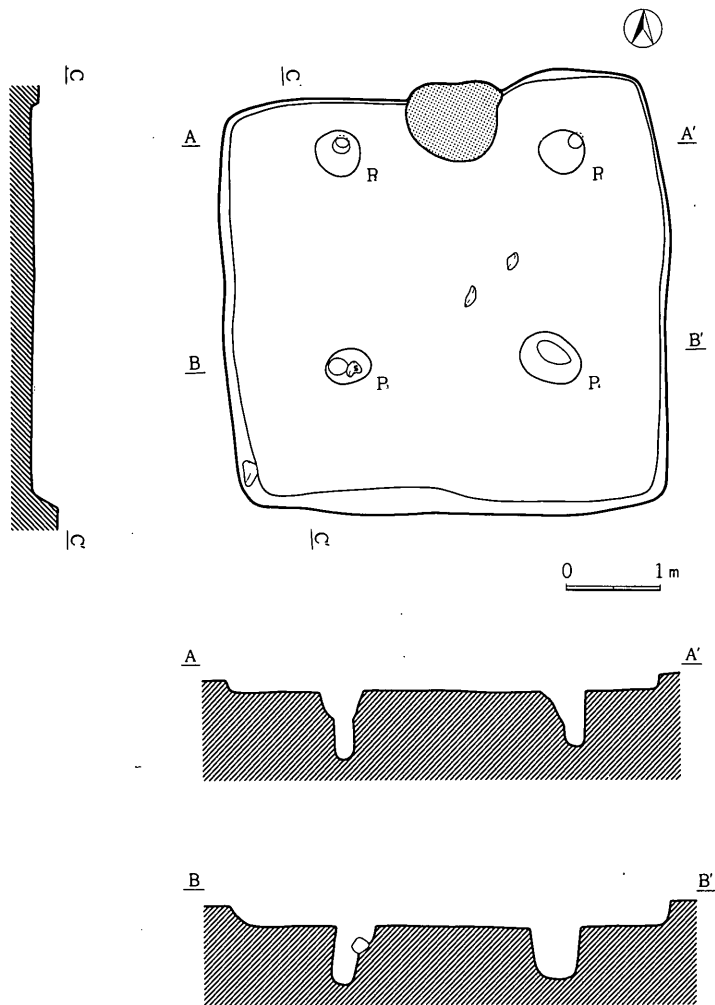
1は、小形の須恵器短頸壺で、外面には自然釉が付着する。

土師器坏も図示し得ないが、内面黒色研磨のなされたものが1個体ある。

土師器甕では、「く」の字状に外半する口縁部をみせる2が検出されている。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。



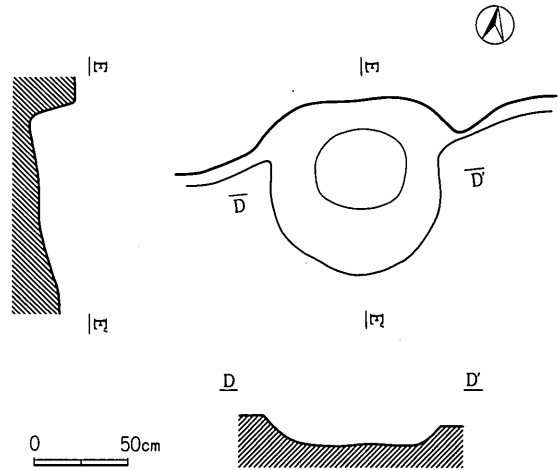
第127図 H-43号住居址実測図 (1:80)

(43) H-43号住居址

遺構 第127・128図

本住居址は、第I区ソー40グリッドにおいて検出された。そのIII区においては、F-52号掘立柱建物址と重複するが、両者の切り合い関係は微妙であった。ここでは一応F-52が新しいものとして把握しておいた。

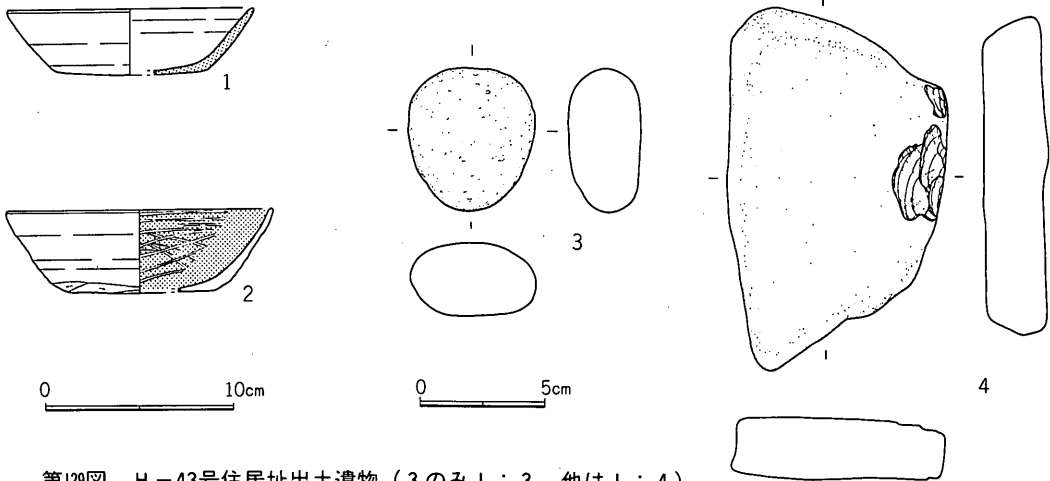
H-42は、南北4.7m東西4.8mの隅丸方形を呈し、床面積18.6㎡を測り、棟方向はN-8°-Wを指す。壁高は10~25cmを測り、周溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は45cm×50cm深さ60cm、P<sub>2</sub>は50cm×50cm深さ70cm、P<sub>3</sub>は50cm×35cm深



第128図 H-43号住居址カマド実測図(1:40)

第57表 H-43号住居址出土遺物一覧表<石器>

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
3	紡錘車	軽石	5.6	5.0	2.9	40	未成品
4	台石	玄武岩質 安山岩	19.0	11.5	3.4	1,300	



第129図 H-43号住居址出土遺物(3のみ1:3, 他は1:4)

第58表 H-43号住居址出土遺物一覧表<土器>

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	13.2 3.5 8.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ(ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (7.5 Y 7 / 1)
2 (回)	坏	<14.3> 4.4 <7.6>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 黒色研磨(ロクロ右回転)	胎土は比較的精選され赤褐色 (5 Y R 4 / 8)

さ60cmを測り、その上部には礫がみられる。P<sub>4</sub>は70cm×50cm深さ55cmを測る。

遺物は、良好な出土状態を示したものは認められなかった。

覆土はI層のみで、パミスをあまり含まない粘性のある黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、すでに壊滅状態にあった。図には、その掘り方を示したが、火床部が円形に掘り込まれた状態であり、90cm×90cm深さ15cmを測る。

#### 遺物 第129図

遺物の出土量は少ないが、須恵器では坏・甕の破片、土師器では坏・甕の破片が認められた。

1は須恵器坏で、底部は切り離しの後全面に手持ちへのヘラケズリのなされたものであった。

2は、内面黒色研磨のなされた土師器坏で、1と同様手持ちヘラケズリの底部をみせる。この他、内面黒色研磨のなされた土師器坏で、回転糸切りの後周囲手持ちヘラケズリのなされた底部をみせるものも1点存在した。

土師器甕は、図示しなかったが、「く」の字状口縁の長胴甕破片や、台付甕の脚台部がみられた。

石器は、3の紡錘車の未成品かと考えられる面取りされた軽石と、4の偏平な河床礫の台石がみられた。

#### 時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

### (44) H-44号住居址

#### 遺構 第130・131図

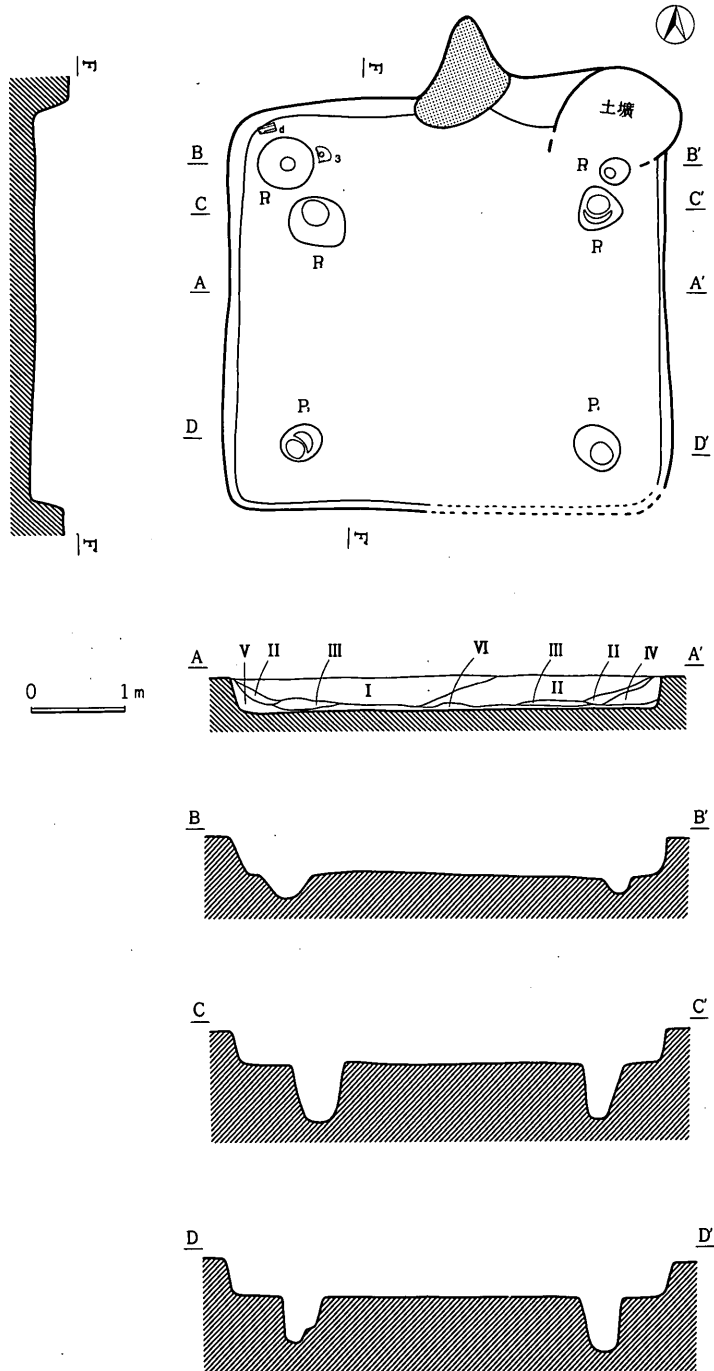
H-44号住居址は、第I区ター38グリッドにおいて検出された。その北東コーナーは土壌に切られている。

本住居址は、南北4.3m東西4.8mの隅丸方形を呈し、床面積18.0m<sup>2</sup>を測り、棟方向はN-5°-Wを指す。壁高は45cm程度を測り、周溝は認められない。支柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が認められた。P<sub>1</sub>は45cm×45cm深さ55cm、P<sub>2</sub>は55cm×55cm深さ60cm、P<sub>3</sub>は45cm×35cm深さ50cm、P<sub>4</sub>は50cm×45cm深さ55cmを測る。また、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の北側からは、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>が検出された。P<sub>5</sub>は30cm×25cm深さ15、P<sub>6</sub>は60cm×55cm深さ25cmを測る。

遺物は、P<sub>6</sub>の東側の床面直上より3の須恵器蓋が検出された。

覆土は、6層に分層された。I層が径5mm程度の軽石・ローム粒子をよく含む暗褐色土層、II層は径5mm程度の軽石をよく含むがローム粒子を含まない黒褐色土層、III層が黒色土のブロック状堆積、IV層がローム層のブロック状の二次堆積、V層はII層と同様な特徴を示すもので、IV層

1 竖穴住居址



第130图 H-44号住居址实测图 (1:80)



はパミス・ローム粒子をまったく含まない黒色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、煙道部の石組みと西側の袖石1個が残っているにすぎず、ほぼ壊滅状態にあった。その構材には、面取り軽石(a)と軽石(b)・河床礫(c)が用いられていた。また、支脚石は角柱状に面取りされた軽石(d)で、住居址の北西コーナーから検出された。煙道部は、A-A'の断面にみると、両側に軽石が配されその上に河床礫が伏せられていた状態であった。カマド覆土は、5層に分層された。I層は若干のカーボンを含む暗褐色土層、II層は黒色土層・III層は黒褐色土層とともに焼土・カーボン等を含まないものであった。IV層は焼土・灰を含む灰褐色土層、V層は灰層であった。V層の上下には薄いカーボンの集積が認められた。

#### 遺物 第132図

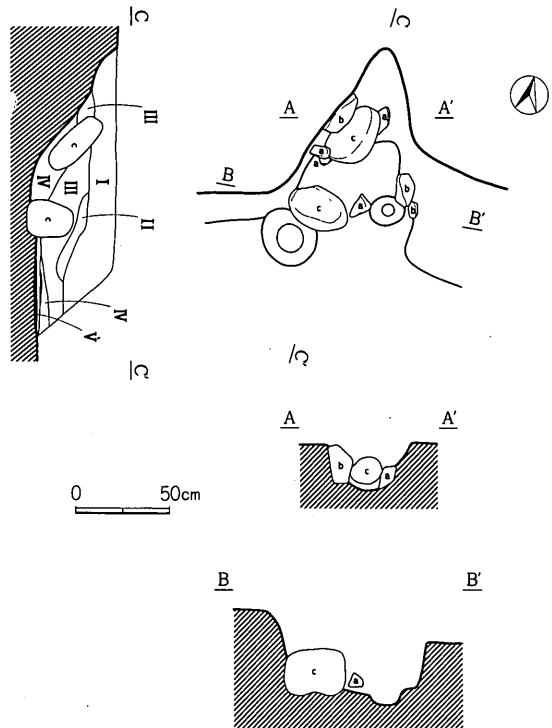
本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・坏・甕、土師器では坏・甕がある。

須恵器蓋には、内面にかえりを有する1・2と有さない3がある。このうち2はつまみ部の形状が不明であるが、1・3は中央が皿状にくぼんだつまみ部を有する。

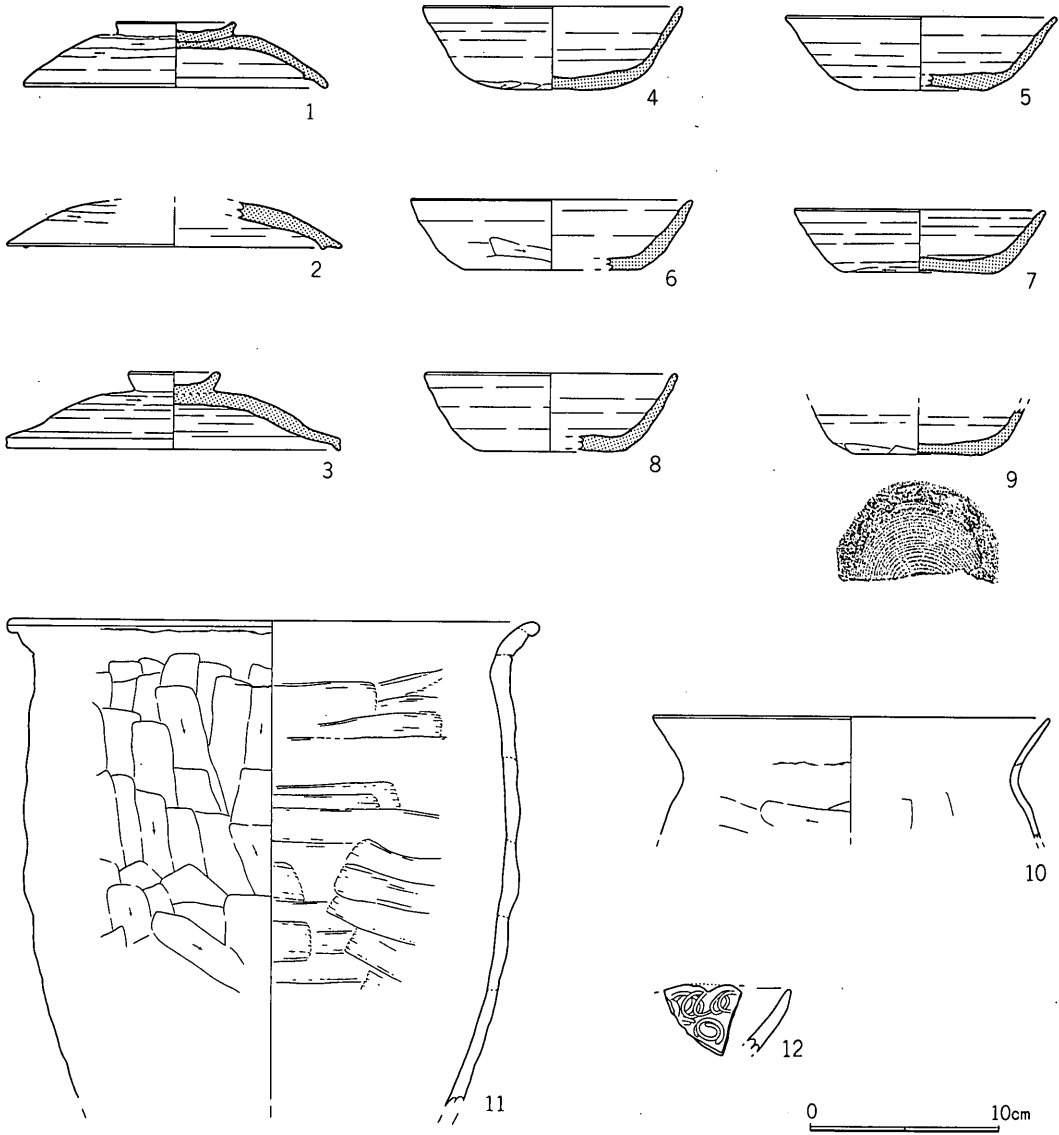
須恵器坏は、6点を図示したが、その底部の調整方法には三種が認められた。ひとつは、回転ヘラキリのままの底部をみせるもので、7とその他破片3片が認められた。次は、底部全面に手持ちヘラケズリのなされるもので、4・5・6とその他破片が1点が該当する。最後は、回転糸切りの後周囲に手持ちヘラケズリのなされるもので、8・9がこれに該当する。

このなかで、特に問題となるのは8・9の回転糸切りによる底部をみせる坏と、1・2のかえりのある蓋の伴出である。ここでは両者の出土をとりあえず事実として報告するが、8・9の坏の出土に主体性をもたせ、かえりのある蓋を混入品とみなしておくことに妥当性がある。

土師器坏では、12のように内面体部にラセン状暗文が施されるものがみられた。また図示し得なかったが内面黒色研磨のなされた土師器坏破片も認められた。



第131図 H-44号住居址カマド実測図(1:40)



第132図 H-44号住居址出土遺物 (1 : 4)

土師器甕には、10の「く」の字状口縁をみせる薄手のものと、厚手で胎土が精選されず胴部に縦のヘラケズリがなされる長胴甕の二者がみられた。

鉄製品・石器等はまったく検出されなかった。

時 期

## IV 遺構と遺物

第59表 H-44号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	6.3 3.4 (16.2)	つまみ部は径が大きく、中央部が皿状にくぼんだ形態を呈する。 内面にはかえりを有する。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰白色を呈する。 (N7/0)焼成良好。
2 (回)	蓋 (須)	— — (17.8)	内面にはかえりを有する。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰白色を呈する。 (N7/0)焼成良好。
3 (回)	蓋 (須)	4.8 4.1 (17.8)	つまみ部は中央が皿状にくぼんだ形態を呈する。 内面にはかえりを有しない。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を若干 含む灰白色。 (N7/0)焼成良好。
4 (回)	坏 (須)	<13.8> 4.4 8.2	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 ロクロヨコナデ 底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く 含む灰色 (N5/0)内外面に「1」の火線
5 (回)	坏 (須)	<14.4> 3.9 (6.8)	体部は外反し、平部平底。	外面 ロクロヨコナデ 底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く 含む暗紫灰色 (5RP4/1)焼成は 良好でない。
6 (回)	坏 (須)	<15.0> 3.7 (9.4)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデの後、体部下手持ちヘラケズリ、底部調整不明 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色 (10Y6/1)
7 (回)	坏 (須)	<13.3> 3.3 (8.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰白色(10Y8/1) 焼成良好。
8 (回)	坏 (須)	<13.4> 4.1 (7.8)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、外周手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含 み灰色 (7.5Y6/1)
9 (回)	坏 (須)	— — (6.8)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、外周手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含 み緑灰色 (10GY5/1)
10 (回)	甕	<21.1> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明褐色 (7.5YR5/8)
11 (回)	甕	(28.3) — —	口縁部の短く外反する長胴の器形を呈し、肉厚。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ (刷毛目状?)	胎土は精選されず 砂粒を多量に含 むにぶい褐色 (7.5YR5/4) 焼成不良
12 (破)	坏	— — —	体部は外反する。	外面 口唇部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面 体部にラセン暗文が施される	胎土はにぶい橙 色 (7.5YR6/4)

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

## (45) H-45号住居址

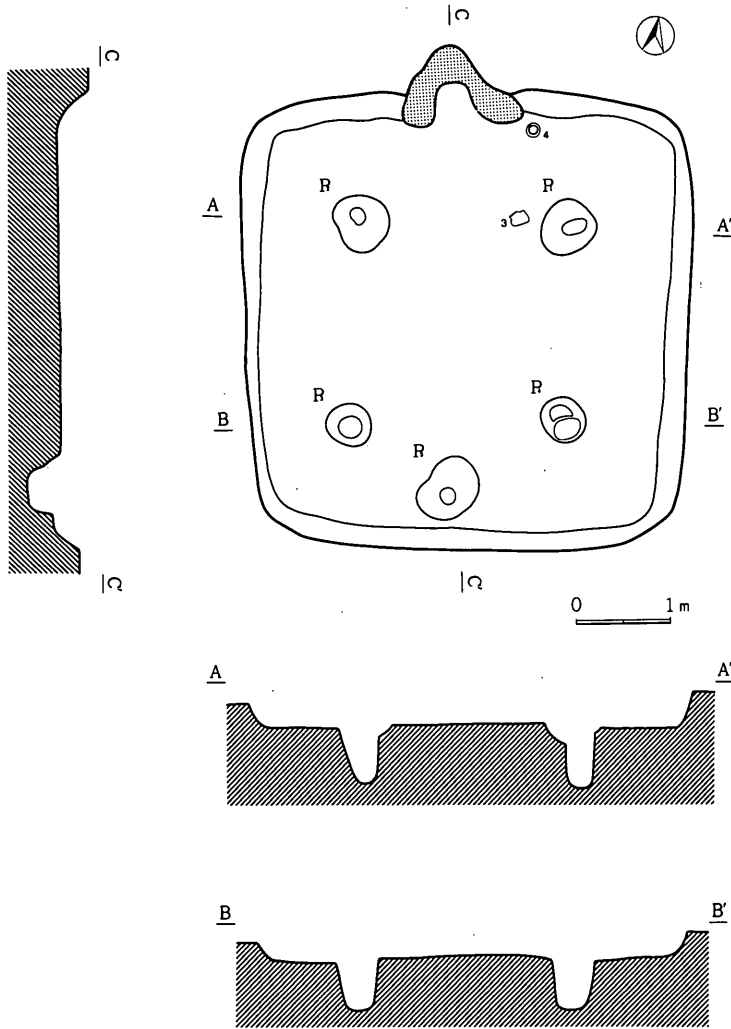
## 遺 構 第133・134図

H-45号住居址は、第I区ソ-38グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.85m東西4.8mの隅丸方形を呈し、床面積18.2m<sup>2</sup>を測り、棟方向はN-12°-Wを指す。壁高は15~40cmを測り、周溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が認められた。P<sub>1</sub>は60cm×55cm深さ65cm、P<sub>2</sub>は60cm×55cm深さ60cm、P<sub>3</sub>は50cm×45cm深さ55、P<sub>4</sub>は50cm×45cm深さ55cmを測る。また、南壁際の中央からはP<sub>5</sub>が検出され、70cm×55cm深さ25cmを測った。

遺物は、カマドの東脇の床面上より4の小形甕が検出されている他は、覆土中からの出土である。

1 竪穴住居址



第133図 H-45号住居址実測図 (1 : 80)

覆土はI層のみで、細粒パミスをよく含む粘性のある黒灰色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、後部両側の石組みを残しているのみであった。その構材には、面取りされた軽石 (a) が主に用いられており、安山岩 (b) もみられた。図のA-A'の断面をみると、カマドの東西両壁にそれぞれ二組ずつ礫が貼られており、またB-B'でも1個ずつ石材が貼られていることがわかる。カマド覆土は、4層に分層された。I層は多量の灰層、二層はカーボンをよく含む黒色土層、三層は焼土と灰からなる灰褐色土層、IV層は若干の焼土・カーボンを含む黒褐色土層であった。なお、カマド中からは2の坏が検出されている。

遺物 第135図

遺物は、須恵器では坏・甕が、土師器では坏・甕が検出されている。

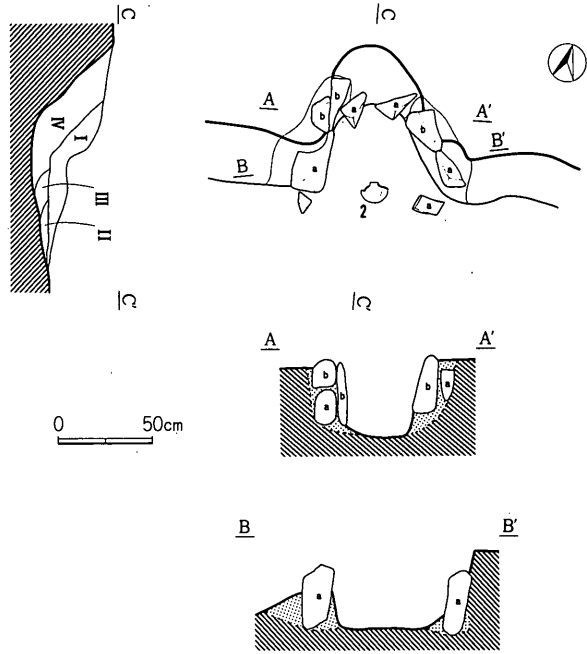
須恵器坏では、底部切り離しの後全面に手持ちヘラケズリのなされる1と、回転ヘラケズリのなされる高台付の2とがみられた。

3は、頸部のくびれの弱い須恵器甕で、外面には叩き目がみられる。

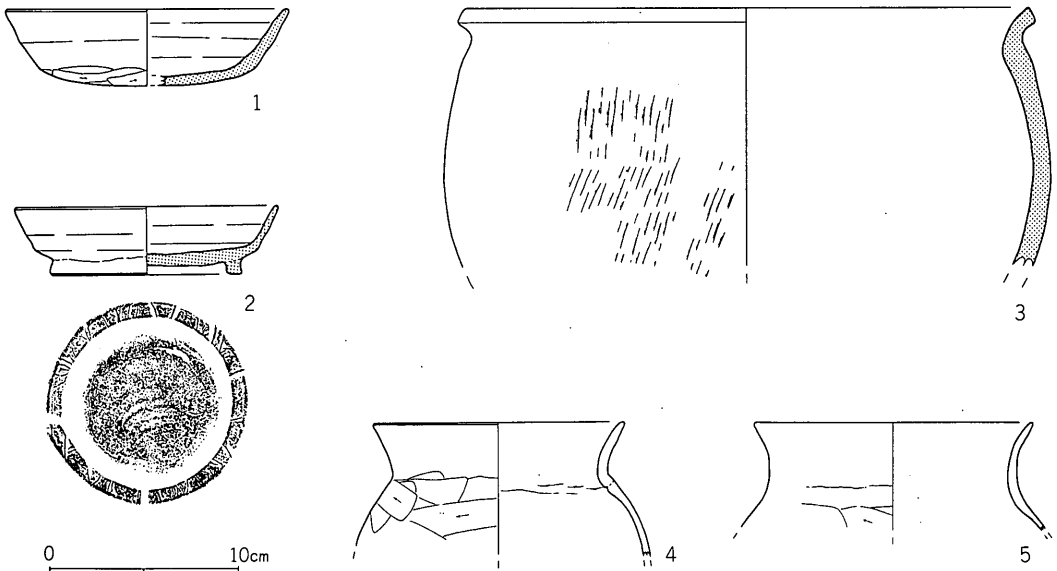
4は、「く」の字状に外反する口縁をみせる土師器小形甕で、5は僅かに「コ」の字状に外反する口縁をみせる土師器小形甕である。

土師器坏は図示し得るものがないが、内面黒色研磨のなされた破片がみられた。

石器・鉄製品等は検出されていない。



第134図 H-45号住居址カマド実測図 (1:40)



第135図 H-45号住居址出土遺物 (1:4)

第60表 H-45号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	(15.0) 4.0 11.3	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ 底部、切り離しの後、全面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 内外面に「米」の 火焼
2 (完)	坏 (須)	14.0 3.6 10.1	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰色 (7.5Y5/1)
3 (回)	甗 (須)	<30.0> — —	胴部から頸部にかけてのくびれは小さく、口縁部は短く外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部には叩きが施こされる。 内面 ナデ	胎土は砂粒を多く 含む淡黄色 (5Y8/3)
4 (完)	甗	13.4 — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。小形。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は精選され 橙色 (7.5YR6/8)
5 (回)	甗	<14.3> — —	口縁部は微かに「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は精選され 橙色 (7.5YR6/8)

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

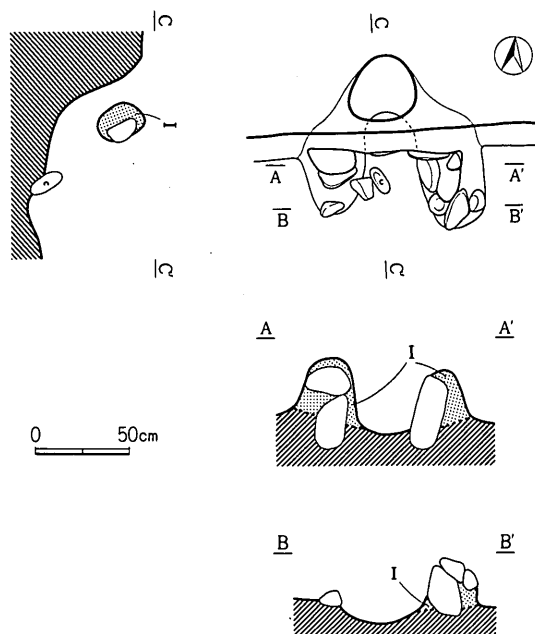
(46) H-46号住居址

遺 構 第136・137図

H-46号住居址は、第I区ソー40グリッドにおいて検出された。その東壁の一部を土壌に切られている。

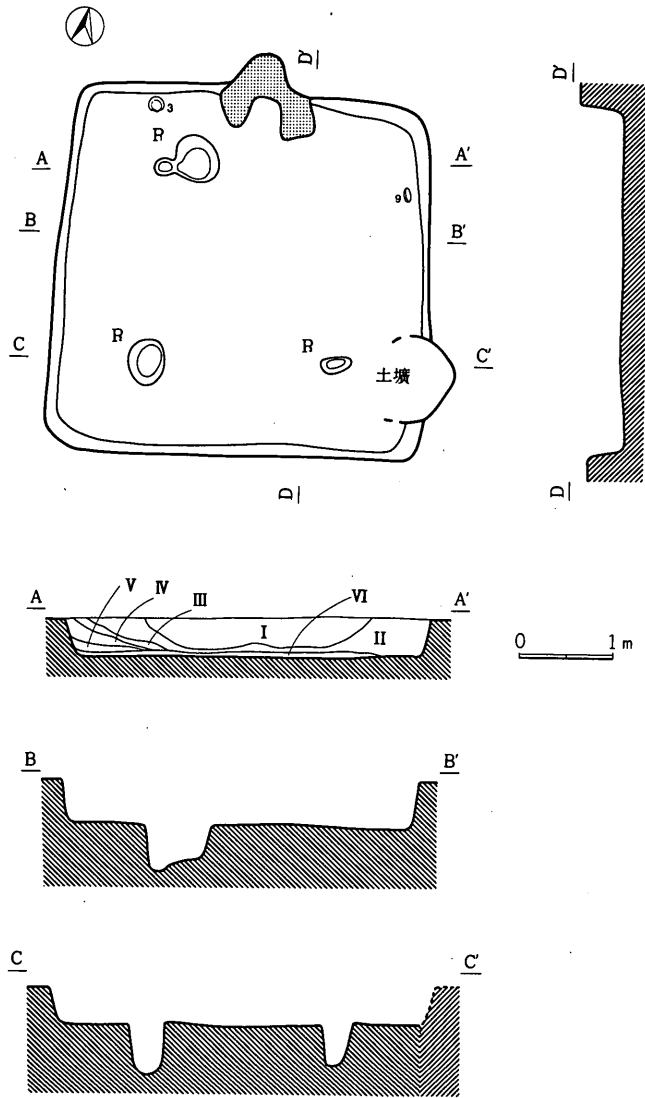
本住居址は、南北3.9m東西4.0mの隅丸方形を呈し、床面積13.2㎡を測り、棟方向N-9°-Wを指す。壁高は50cm前後を測り、周溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>の3個が検出されたが、I区中央に柱穴が認められない点において他の4本柱穴をもつものとは異なった様相を呈している。P<sub>1</sub>は70cm×50cm深さ50cm、P<sub>2</sub>は50cm×40cm深さ55cm、P<sub>3</sub>は30cm×15cm深さ45cmを測る。

遺物は、3の坏がカマドの西脇の



第136図 H-46号住居址カマド実測図 (1:40)

IV 遺構と遺物



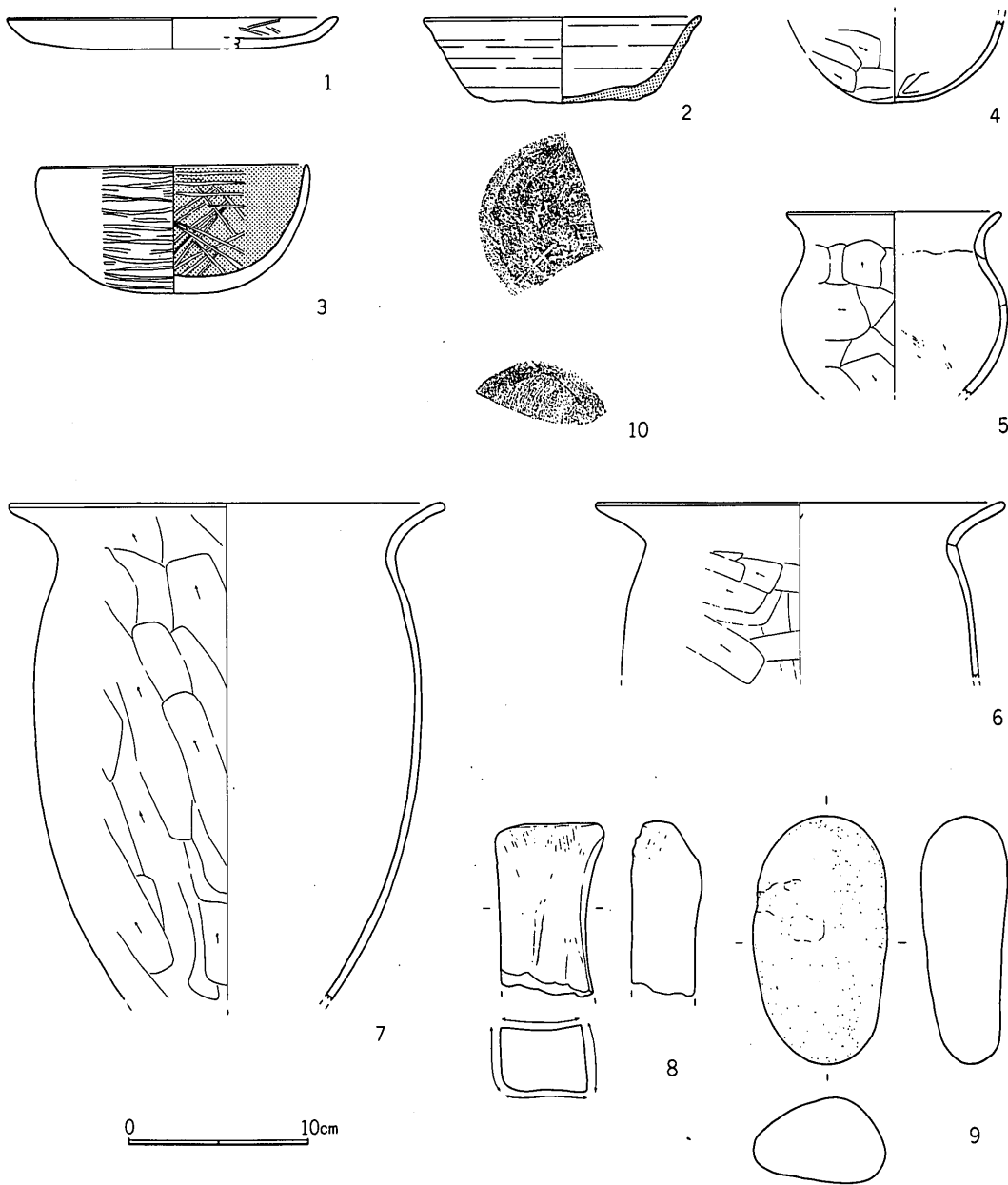
第137図 H-46号住居址実測図 (1 : 80)

北壁際から正常位で出土し、9の磨石が東壁際の床面直上より出土している。その他は覆土中からの出土である。

覆土は6層に分層された。I層がロームブロック・パミスを大量に含む黒褐色土層、II・IV層がロームブロック・パミスをよく含む黒褐色土層、III・V層がローム粒子を多く含む黒褐色土層、IV層がローム粒子・パミス等をあまり含まない黒色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置し、その前方部はすでに取り壊されたものとみられるが、後方部は比較的よく残っていた。その煙道部は壁外へと延び円形のプランとなって検出された。また、そ

1 竪穴住居址



第138図 H-46号住居址出土遺物(1:4)

第61表 H-46号住居址出土遺物一覽表<石器>

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
8	砥石	流紋岩 風化物	(9.5)	6.0	3.8	300	
9	磨石	安山岩	13.7	7.4	5.0	755	



## IV 遺構と遺物

第62表 H-46号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	皿	<18.5> — —	扁平な皿状の形態を呈する。	外面 体部ヨコナデ 底部ヘラケズリ? 内面 ヘラミガキ	胎土は砂粒を多量に含み橙色(7.5 YR 7/6) 焼成不良
2 (回)	坏 (箱)	(15.5) 4.7 10.3	体部は外反し、底部平底	外面 体部ロクロヨコナデ 底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を含み灰白色(7.5 Y 7/1)
3 (完)	坏	14.9 7.1 —	体部は球状に湾曲し、底部は扁平な丸底。	外面 体部ヨコヘラミガキ 底部ヘラミガキ 内面 黑色研磨	胎土はにぶい黄橙色(10 YR 7/4) 焼成良好
4 (完)	甕	— — —	小形の丸底甕底部。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土はにぶい褐色(10 YR 5/4)
5 (回)	甕	12.0 — —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する小形の器形。やや肉厚	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部、胴部ともにヨコナデ 胴部に爪痕が残る	胎土は精選されず砂粒を多く含み暗赤褐色(5 Y R 3/4) 焼成はあまりよくない
6 (回)	甕	<22.8> — —	口縁部は「く」の字状にきつく外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色の粒子に含みにぶい橙色(7.5 YR 6/4)
7 (回)	甕	(24.4) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部より口唇部近くまで縦方向のヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を多く含みにぶい橙色(7.5 YR 6/4)

の天井部は、軽石を芯に粘土層（I層）で固められたものであった。袖も、安山岩礫が据えられ粘土（I層）で固められたものであった。支脚石には細長い河床礫が用いられていた（c）。

## 遺物 第138図

遺物は、須恵器では坏、土師器では皿・坏・高坏・甕の各器種がみられた。

1の土師器皿は完存していないが、本遺跡の当該期の土器群のなかでは珍しい器種である。

2の須恵器坏は、回転ヘラキリのなされた底部をみせるものである。

3は、扁平な丸底を呈し湾曲した体部をもつやや深めの土師器坏で、内面黑色研磨がなされている。この他、土師器坏の破片に、内面底部にラセン状暗文・体部に放射状暗文のなされたものが認められた。また、坏部の内面に黑色研磨がなされた土師器高坏の破片もみられた。

土師器甕では、5のやや肉厚な小形甕と、6・7にみる「く」の字状に外反する口縁部を有する薄手の長胴甕とがあった。

石器では、8の砥石と9の磨石が検出された。

8は、流紋岩の砥石で直方体の4面ともに研砥に供されている。その半分を欠損する。

9は、河床礫がそのまま用いられた磨石で、微妙ではあるが磨痕が一端を中心に窺える。

## 時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

(47) H-47号住居址

遺構 第139・140図

H-47号住居址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。H-39・H-40号住居址と重複関係をもつが、それらの新旧関係は古い順からH-39→H-47→H-40となる。

本住居址は、その西壁をやや掘りすぎってしまったため、その規模はおおよそとなるが南北4.25m東西4.05mの隅丸方形を呈し、床面積は15.7㎡となるものと考えられる。棟方向はN-15°-Wを指す。壁高は生きている東壁部において10cm前後を測る。周溝は認められない。支柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が認められた。P<sub>1</sub>が深さ60cm、P<sub>2</sub>が深さ60cm、P<sub>3</sub>が深さ60cm、P<sub>4</sub>が深さ65cm程度を測るものと思われる。

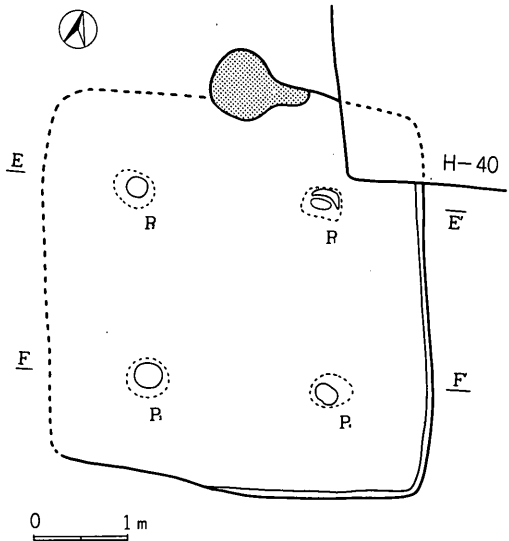
遺物は、いずれも覆土中からの出土であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、住居廃絶時に取り壊されたと考えられ、その構材であった面取り軽石は火床部にまとめて整然と残置されていた。ちなみに、これと同様な事例はH-8・H-37・H-47号住居址において認められた。

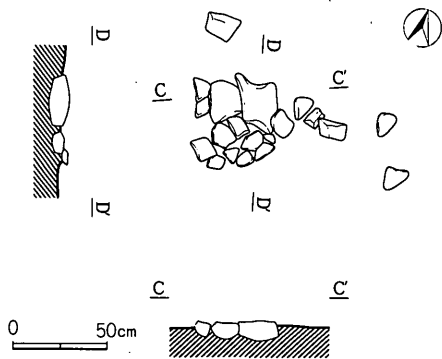
遺物 第141図

本住居址より検出された遺物は少ないが、須恵器では蓋・甕、土師器では甕の破片がみられた。

1は、偏平な円盤状の須恵器蓋つまみ部である。



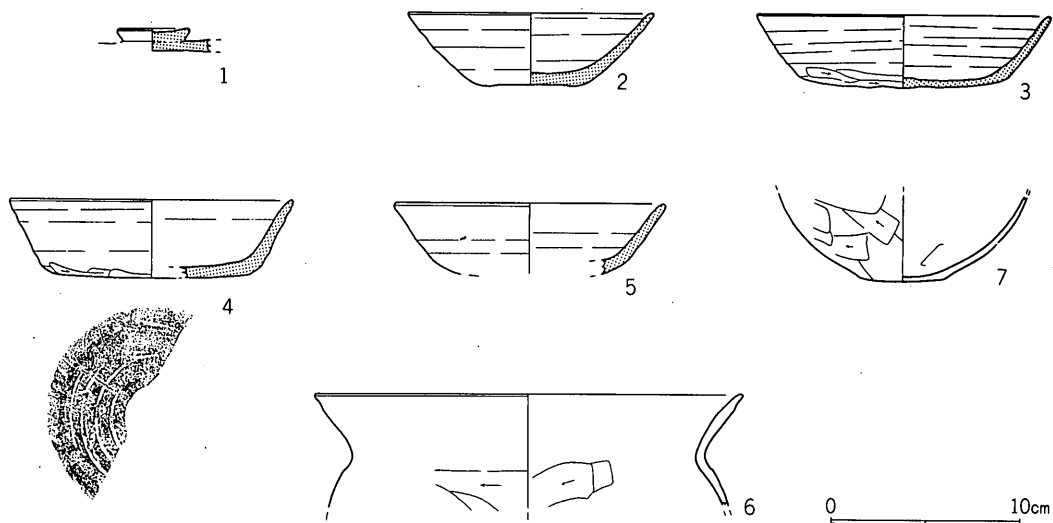
第139図 H-47号住居址実測図 (1:80)



第140図 H-47号住居址カマド実測図 (1:40)

第63表 H-47号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

挿図番号	器形	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	蓋 (須)	3.8 — —	つまみ部は中央のややくぼんだ盤状を呈す。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選され 橙色を呈する。 (7.5 YR 6/6) 焼成良好
2 (回)	坏 (須)	<13.6> 3.3 <6.0>	体部は外反し、底部平底	外面 体部ロクロヨコナデ 底部切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く 含む灰色 (7.5 Y 5/1)
3 (回)	坏 (須)	15.3 3.7 10.4	体部は外反し、底部平底	外面 体部ロクロヨコナデ 底部回転ヘラキリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 明オリープ灰色 (2.5 GY 7/1)
4 (回)	坏 (須)	<15.0> 4.2 (10.6)	体部は外反し、底部平底	外面 体部ロクロヨコナデ 底部回転ヘラキリの後、一部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色 (10 Y 5/1)
5 (回)	坏 (須)	<14.4> — —	体部は外反する	外面 体部ロクロヨコナデ、底部調整不明 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 浅黄色 (2.5 Y 7/3)
6 (回)	甕	<22.8> — —	口縁部は「く」の字状に外反する	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい黄 褐色 (10 YR 5/3)
7 (回)	甕	— — (4.7)	底部は丸味をおびた平底 胴下半は球状を呈する小形の器形	外面 胴部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は橙色 (5 YR 6/6)



第141図 H-47号住居址出土遺物 (1:4)

須恵器坏は4点図示したが、このうち底部を失う5以外の2～4はいずれも底部切り離しの後手持ちヘラケズリのなされるものである。わけても3・4は回転ヘラキリによるものであることが理解できた。

土師器甕では、6の「く」の字状口縁をみせる薄手の長胴甕がみられた。

石器・鉄製品類は検出されなかった。

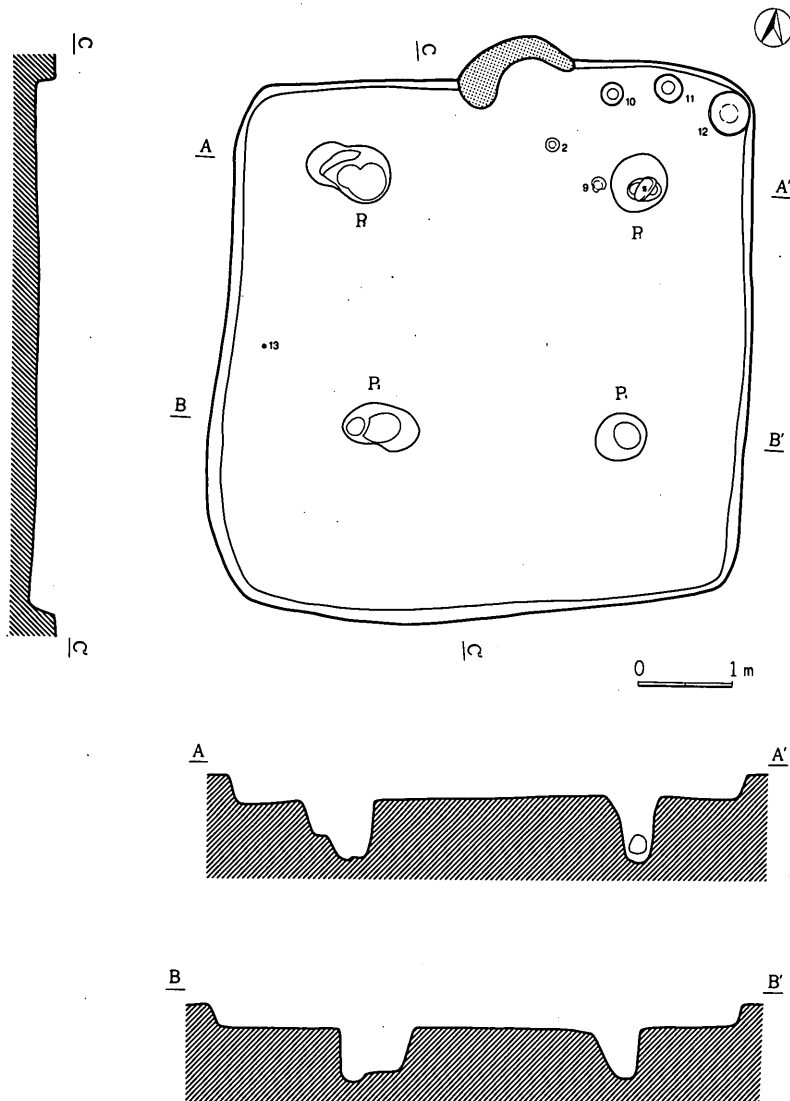
時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

(48) H-48号住居址

遺 構 第142・143図

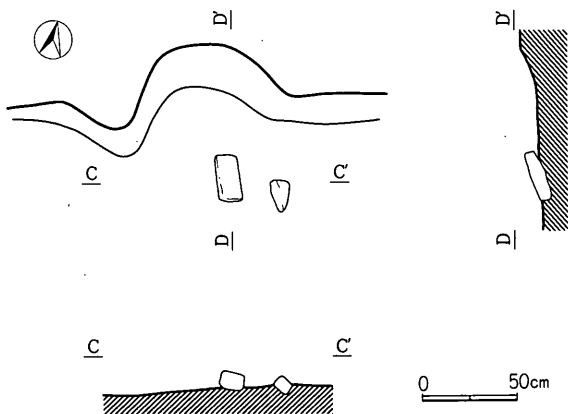
H-48号住居址は、第I区ター38グリッドにおいて検出された。



第142図 H-48号住居址実測図 (1 : 80)

IV 遺構と遺物

本住居址は、南北5.7m東西5.65mを測る隅丸方形を呈し、床面積27.8m<sup>2</sup>を測り、棟方向N-7°-Wを指す。壁高は20~30cm前後を測り、周溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が認められた。P<sub>1</sub>は55cm×60cm深さ70cmを測るもので、その下部には礫が認められた。P<sub>2</sub>は90cm×60cm深さ60cm、P<sub>3</sub>は80cm×45cm深さ60cm、P<sub>4</sub>は55×50cm深さ53cmを測る。



第143図 H-48号住居址カマド実測図(1:40)

遺物は、何点かはきわめて良好な出土状態を示していた。カマド東の北壁際には、10・11の須恵器甕の口縁部が並べて残置され、その隣りの北東コーナーには12の須

第64表 H-48号住居址出土遺物一覧表〈金属器・石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
15	鉄 鏃	鉄	(6.9)	3.3	(0.8)	(22)	
16	紡錘車?	軽石	5.9	5.8	2.5	35	未成品
17	台石	輝石 安山岩	16.6	12.8	4.0	1455	

恵器大甕の胴下半部が据え置かれていた。10・11はすでに胴部を失っているので、あるいは何らかの二次的機能が与えられて置かれていたものとも思える。また、12は上半部を失っていても貯蔵器としての一部の機能を満たし得たものと察せられ、その場所に置かれていたのであろう。2・9の坏は、カマドの前方P<sub>1</sub>の西側から正常位で検出された。なお、本住居址のIII・IV区上面からは馬歯3点が検出されたが、その部分においては河川堆積がみられたため混入品とみなせる。

住居址覆土はI層のみで、細粒パミスや5mm程のパミスをよく含み、ローム粒子も若干混入する黒灰色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、すでに壊滅状態にあった。その構材に用いられていたと考えられる軽石二点が火床部に残っているのみであった。

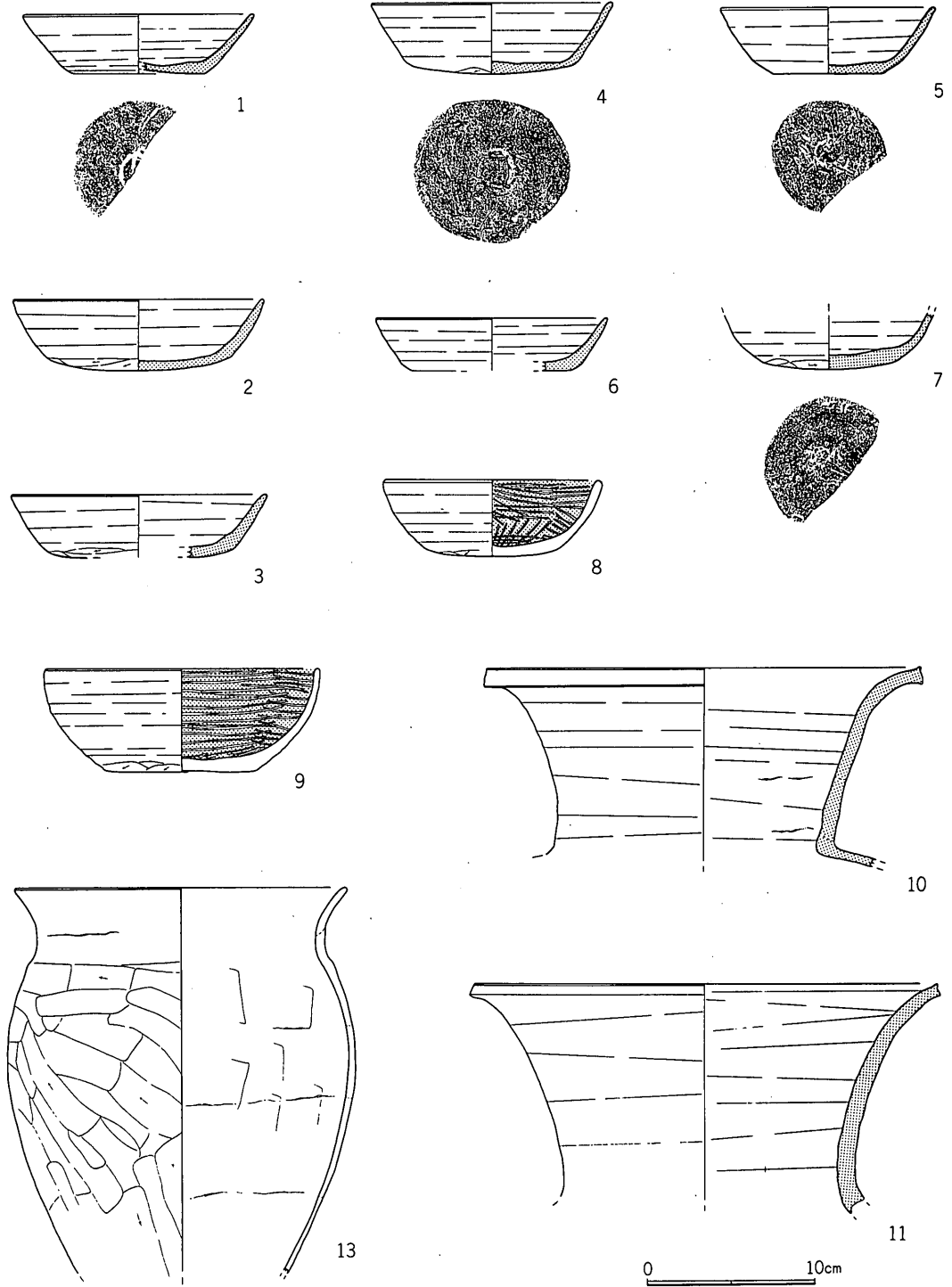
遺物 第144・145図

本住居址から検出された遺物は、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕の器種がみられる。

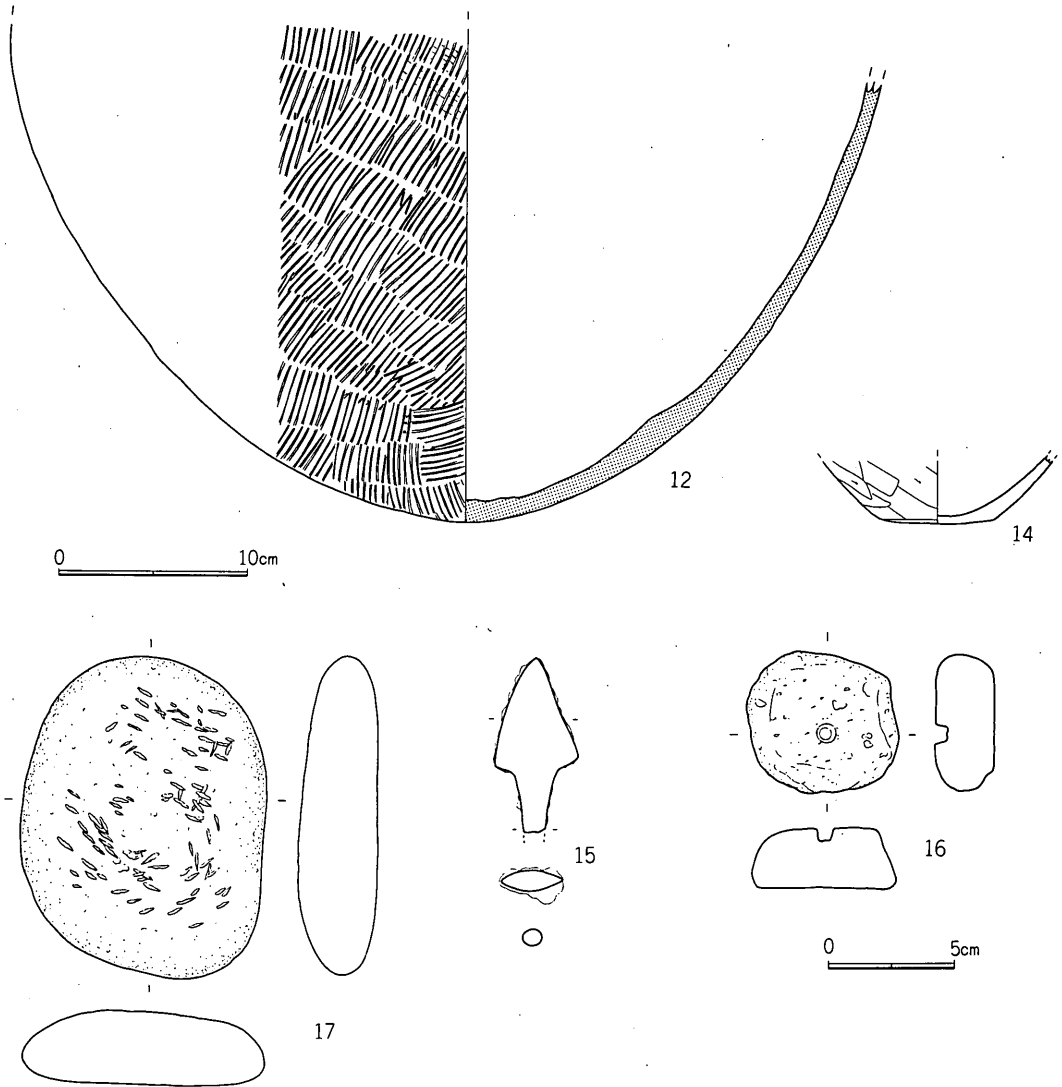
須恵器坏は7点図示したが、いずれも切り離し方法は回転ヘラキリによっている。このうち、1を除く2~7は、底部切り離しの後一部あるいは全面に手持ちヘラケズリがなされているのが特徴的である。

8・9は、ロクロ整形による土師器坏で、内面黒色研磨のなされているものである。両者の底部は全面に手持ちヘラケズリがなされており、その切り離し方法は不明である。この他、図示し

1 竖穴住居址



第144图 H-48号住居址出土遺物 (1 : 4)



第145図 H-48号住居址出土遺物（15・16は1：3，他は1：4）

得なかったが、内面体部に放射状暗文底部にラセン状暗文の施された土師器坏の破片がみられた。

10・11は、須恵器甕の完存する口縁部で、カマドの東脇に並べて残置されていたものである。胴部以下を失って後、あるいは何らかの二次的機能を担っていたのかもしれない。

12は、外面に叩き目のみられる須恵器大甕の胴下半部である。底部丸底の球状のプロポーシオンを呈する。上半部を失って後も貯蔵器としての機能の一部を満たしていたのであろう。

13は、口縁部が僅か「コ」の字状に外反する土師器長胴甕である。この他、「く」の字状に外反する土師器甕口縁部もみられた。

鉄製品としては、カマド部分より15の鉄鏃が検出された。15は、その基部を欠失する。

第65表 H-48号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	(13.7) 3.5 (7.8)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰色(N6/0) 焼成良好
2 (完)	坏 (須)	14.9 4.2 10.8	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。 完形	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリの後全 面手持ちヘラズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は中砂粒を 多く含み灰白色 (5Y7/2)の内 外面に「井」の火煙
3 (回)	坏 (須)	(15.2) — (10.9)	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリの後全 面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は中砂粒を 多く含み灰オリ ープ色(5Y6/2) 胎土は2と類似する
4 (回)	坏 (須)	(14.4) 4.2 9.6	体部は外反し、底部はやや丸味をおびた 平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリの後全 面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色(7.5Y 6/1)焼成良好
5 (回)	坏 (須)	(12.8) 3.9 (6.5)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリの後一 部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み青灰色(5B 5/1)底部に 「X」のヘラ記号
6 (回)	坏 (須)	(13.7) — (9.5)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリの後全 面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 みオリープ灰色 (5GY5/1)
7 (回)	坏 (須)	— — (8.3)	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリの後若 干の手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 みオリープ灰色 (5GY5/1)
8 (回)	坏	(13.0) 4.6 (7.7)	体部は丸味をおびて外反し、底部は丸味 をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部の切り離し方法不明、 底部手持ちヘラケズリ 内面 黒色研磨 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み橙色 (7.5YR7/6)
9 (完)	坏	(16.3) 6.1 8.9	体部はゆるく外反したのちやや内湾する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部の切り離し方法不明、 底部手持ちヘラケズリ 内面 黒色研磨 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み明赤褐色 (5YR5/8)
10 (完)	甕 (須)	25.8 — —	口縁部はラッパ状に外反する。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含 み灰色(N6/0) 焼成良好
11 (完)	甕 (須)	27.5 — —	口縁部はラッパ状に外反する。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み紫灰色(5P 5/1)10と同様な 器形を呈する
12 (完)	甕 (須)	— — —	胴下半部から底部にかけて大形球状のプロ ポジションを呈する。大形。	外面 全面に叩きが施こされる。 内面 ナデ	胎土は砂粒を含 み暗紫灰色(5 P4/1)を呈する
13 (回)	甕	(19.7) — —	口縁部は僅かに「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色 (7.5YR7/6)
14 (回)	甕	— — (6.0)	底部はわずかに丸味をおびた平底。	外部 胴下半部および底部ヘラケズリ 内部 ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (5YR5/8)

石器では、16の紡錘車未成品と17の台石が出土している。

16は、紡錘車未成品で、表裏両面を削られ扁平になった軽石の片面に穿孔がなされはじめている。ただし孔は貫通していない。

17は、扁平な河床礫の台石で、片面には非常に顕著に所謂「鼠歯状痕」的な使用痕が認められる。

#### 時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第Ⅴ期に位置付けられよう。



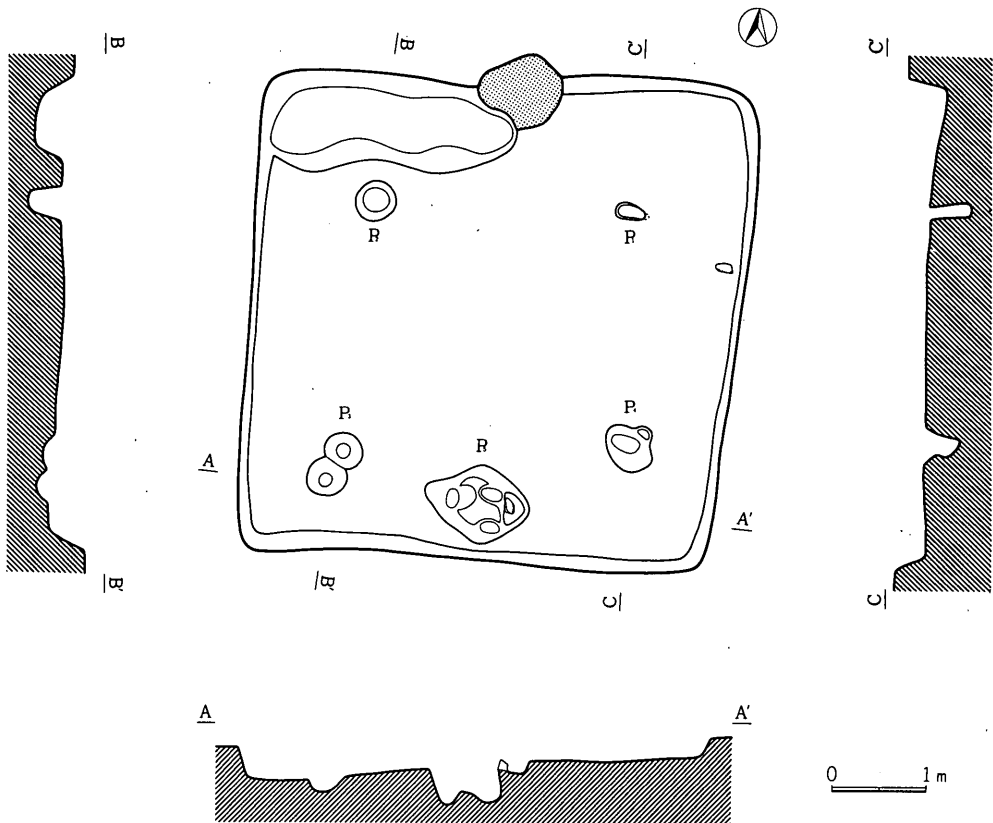
## (49) H-49号住居址

遺構 第146・147図

H-49号住居址は、第I区ター39グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北5.2m東西5.3mの隅丸方形を呈し、床面積23.9㎡を測り、棟方向N-4°-Wを指す。壁高は20~40cmを測り、周溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は30cm×15cmの小さいピットで深さ45cmを測り、P<sub>2</sub>は45cm×40cm深さ30cmを測る。P<sub>3</sub>は浅い2個のピットが接した状態を呈しており、一方は35cm×43cm深さ10cm、もう一方は40cm×40cm深さ10cmを測る。P<sub>4</sub>は55cm×50cm深さ35cmを測る。また、南壁際中央にはP<sub>5</sub>があり、115cm×85cm深さ40cmを測りその断面はW字状を呈している。なお、北壁際の西半分は船底状に掘り込まれており、250cm×90cm深さ30cm程度を測る。

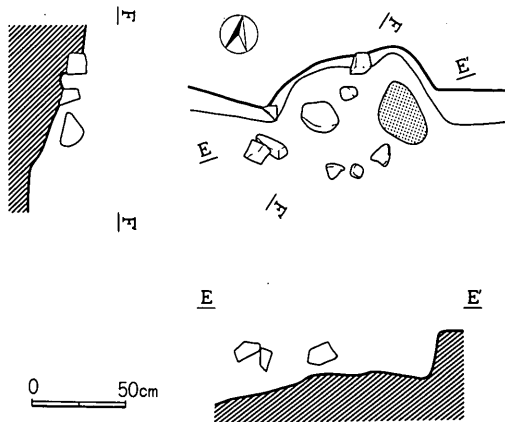
覆土はI層のみで、ロームが多く混入する黒褐色土層であった。



第146図 H-49号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址

遺物はいずれも覆土中より出土している。  
 カマドは、北壁中央に位置するが、壊滅状態にあり、その構材であったと考えられる面取り軽石が散乱していた。焼土の部厚い堆積もみられた（網点）。



第147図 H-49号住居址カマド実測図 (1:40)

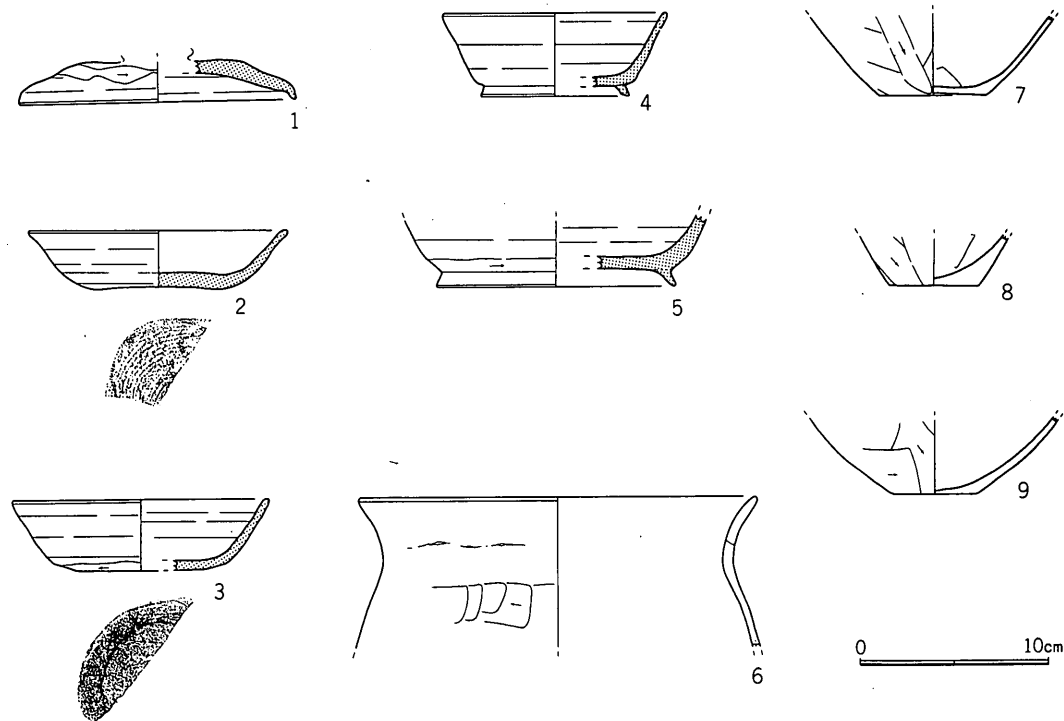
遺物 第148図

本住居址から検出された遺物は、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕が、土師器では坏・甕がある。

1は須恵器蓋で、つまみ部の形状は不明である。

須恵器坏には、2の回転糸切りによる底部をみせるものと、3・4の回転ヘラケズリによる底部をみせるものがある。5は長頸瓶の底部と考えられるもので、回転糸切りによる底部をみせている。

土師器坏は、図示し得るだけのものがなかったが、内面黒色研磨のなされた破片がみられた。



第148図 H-49号住居址出土遺物 (1:4)

第66表 H-49号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	— — 14.7	つまみ部の形状は不明	外面 ロクロヨコナデの後、天井部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色(10Y7/1)焼成不良H-53・2と接合
2 (回)	坏 (須)	<13.7> 3.0 (7.0)	体部は比較的大きく外反し、底部平底。	外面 体部にロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰色(10Y6/1)
3 (回)	坏 (須)	<13.6> 3.8 (9.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰色(5Y6/1)
4 (回)	坏 (須)	<12.0> 4.4 (8.0)	体部は直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y6/1)
5 (回)	長頸瓶 (須)	— — (12.7)	底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰褐色(10YR5/1)
6 (回)	甕	<21.1> — —	口縁部は「く」の字状にゆるく外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、 胴部ヘラナデ	胎土にはぶい赤褐色(5YR5/4)
7 (回)	甕	— — (5.7)	底部平底。	外面 胴下部ヘラケズリ 内面 底部ヘラケズリ ヘラナデ	胎土は暗赤褐色(5YR3/6)
8 (回)	甕	— — (4.7)	底部平底。	外面 胴下部ヘラケズリ 内面 底部ヘラケズリ ヘラナデ	胎土にはぶい赤褐色(5YR5/4)
9 (回)	甕	— — <4.5>	底部平底。	外面 胴下部ヘラケズリ 内面 底部ヘラケズリ ヘラナデ	胎土は赤褐色(5YR4/8)

土師器甕では、6の「く」の字状に外反する口縁をみせるものがある。

この他、石器・鉄製品類は認められなかった。

#### 時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

### (50) H-50号住居址

#### 遺 構 第149図

H-50号住居址は、第I区ター38グリッドにおいて検出された。その西側半分は、現在の水田造成時に削平されてしまっている。

本住居址は、南北3.9m東西の残っている部分2.8mを測り、隅丸方形を呈するものと思われるがその南壁の中央は弓なりに突出する。棟方向はN-7°-Wを指す。壁高は10~25cmを測り、周溝は認められない。ピットは北壁際にP<sub>1</sub>が検出された以外は認められなかった。P<sub>1</sub>は40cm×30cm深さ20cmを測る。

覆土はI層のみで、パミス等をほとんど含まない黒色土層であった。

1 竪穴住居址

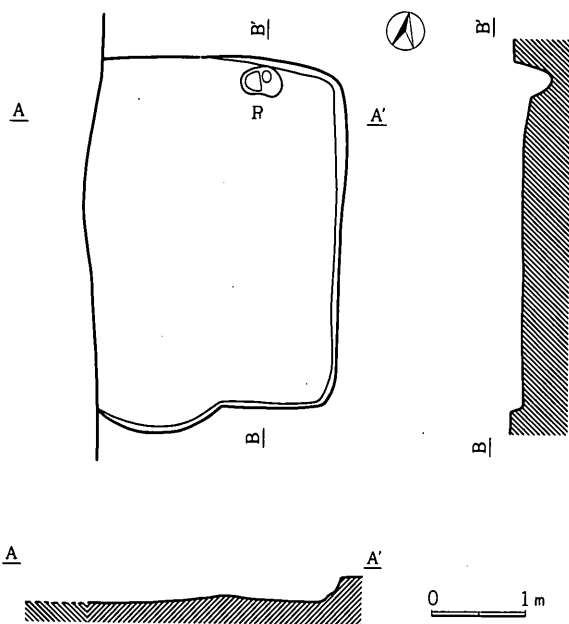
カマドは、おそらく最も存在の可能性のありそうな北壁中央付近においてもその痕跡すら窺えなかった。水田造成時に削平されているということも考えられようが、あるいはなかったのかもしれない。

遺物

本住居址からは1点の遺物も検出されなかった。

時期

本住居址は遺物がみられないためその時期決定が困難であるが、住居址の規模・構造よりおよそ前田VII期の所産とみて大過あるまい。



第149図 H-50号住居址実測図 (1:80)

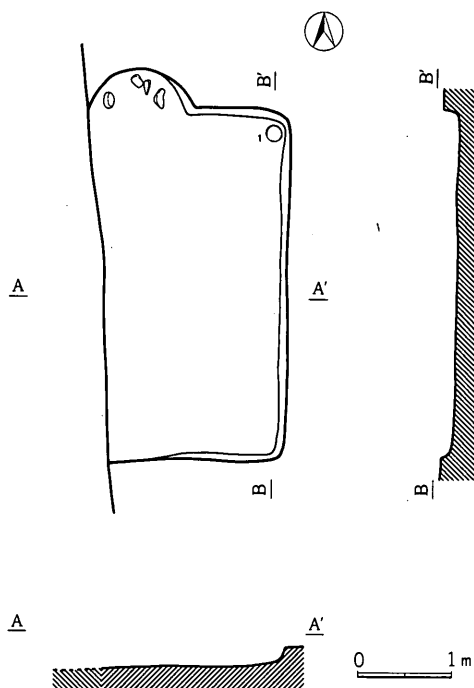
(51) H-51号住居址

遺構 第150図

H-51号住居址は、第I区ター38グリッドにおいて検出された。その西側半分は、現在の水田造成時に削平されてしまっている。

本住居址は、南北3.7m、東西の残存部分2.1mを測り、隅丸方形のプランをとるものと思われる。棟方向はN-7°-Wを指す。残存する壁の壁高は15cm前後を測り、周溝は認められない。ピットはまったく認められず、おそらくは柱穴をもたないタイプの住居址と考えられる。

遺物は、北東コーナーより1の



第150図 H-51号住居址実測図 (1:80)

第67表 H-51号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	甕	13.8 — —	「コ」の字状の口縁部を呈する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (5 YR 5/8)

小形甕口縁部が正常位で検出されたのみであった。

覆土は、パミスをよく含み、ローム粒子の混入する茶褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、すでに壊滅状態にある。その掘り方は、半円状に住居址外に張り出しており、構材であったと考えられる軽石4点が散在している状況であった。

#### 遺物 151図

本住居址より検出された遺物は、1の「コ」の字状口縁をみせる小師器小形甕1点のみであった。

#### 時 期

本住居址は、時期決定が困難であるが、その規模・構造と1の甕より、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けておこう。



0 10cm

第151図 H-51号住居址  
出土遺物(1:4)

## (52) H-52号住居址

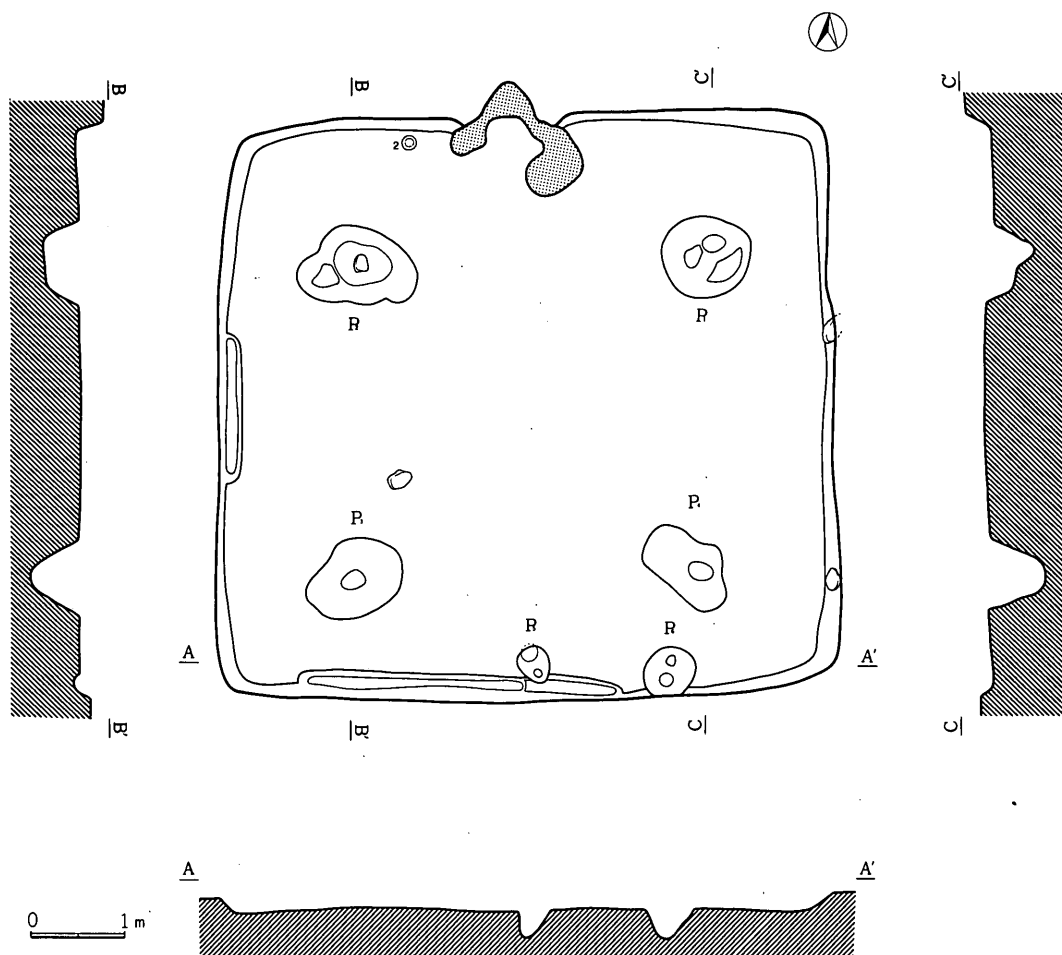
### 遺 構 第152・153図

H-52号住居址は、第I区ター36グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北6.15m東西6.55mの隅丸方形を呈し、床面積36.7㎡を測り、棟方向はN-3°-Wを指す。壁高は20~30cm前後を測る。周溝は、深さ5cm程度のものが西壁中央と南壁の一部に認められる。支柱穴と考えられるものは、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は85cm×95cm深さ50cm、P<sub>2</sub>は130cm×80cm深さ35cmを測る歪んだピットで内部には礫がみられた。P<sub>3</sub>は110cm×80cm深さ50cm、P<sub>4</sub>は105cm×65cm深さ60cmを測る。これらのピットその他、南壁際にP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>の2個が並んで検出された。P<sub>5</sub>は40cm×30cm深さ30cm、P<sub>6</sub>は60cm×50cm深さ35cmを測る。

遺物は、カマド西脇より2の完形の坏が正常位で出土した。また、カマド中より7の土師器甕の大形破片が検出された。これ以外は、いずれも覆土中からの出土である。

カマドは、北壁中央に存在するが、壁外に楕円形に抜ける煙道部と、東側の袖の一部がその痕跡をとどめているにすぎなかった。煙道部の天井および袖には赤味がかかった粘土層(IV層)が構



第152図 H-52号住居址実測図(1:80)

材として用いられていた。西袖部分には礫1点が残っていた。カマドの覆土は、3層に分層された。I層が少量のカーボンを含む黒灰色土層、II層が多量の焼土・灰を含む褐色土層、III層が大量の焼土を含む赤褐色土層であった。なお、火床部の奥からは7の土師器甕の大形破片が検出されている。

#### 遺物 第154図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕がある。

1～5は須恵器坏であるが、それらの底部のあり方にはいくつかのバラエティが認められる。1は、回転ヘラケズリのなされた底部をみせるものであるが、底部の切り離し方法は不明である。2は、回転ヘラキリによる底部をみせる坏である。3・4・5は、いずれも底部に手持ちヘラケズリのなされる例であるが、4は回転ヘラキリによるものであることが窺えた。

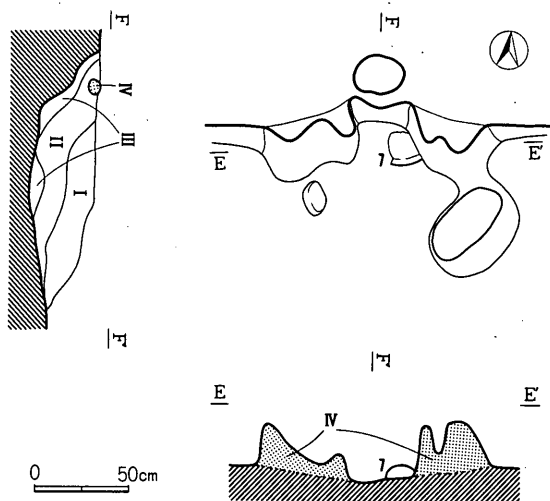
IV 遺構と遺物

土師器坏では、内面黒色研磨のなされた破片が認められた。

須恵器甕では、いずれも破片のみで大方の器形の復原できるものはなかった。

土師器甕では、6 にみる胎土が精選されずやや肉厚な小形甕と、7～10の「く」の字状に外反する口縁部をみせる薄手の長胴甕が検出されている。

なお、本住居址において石器・鉄製品類は認められなかった。

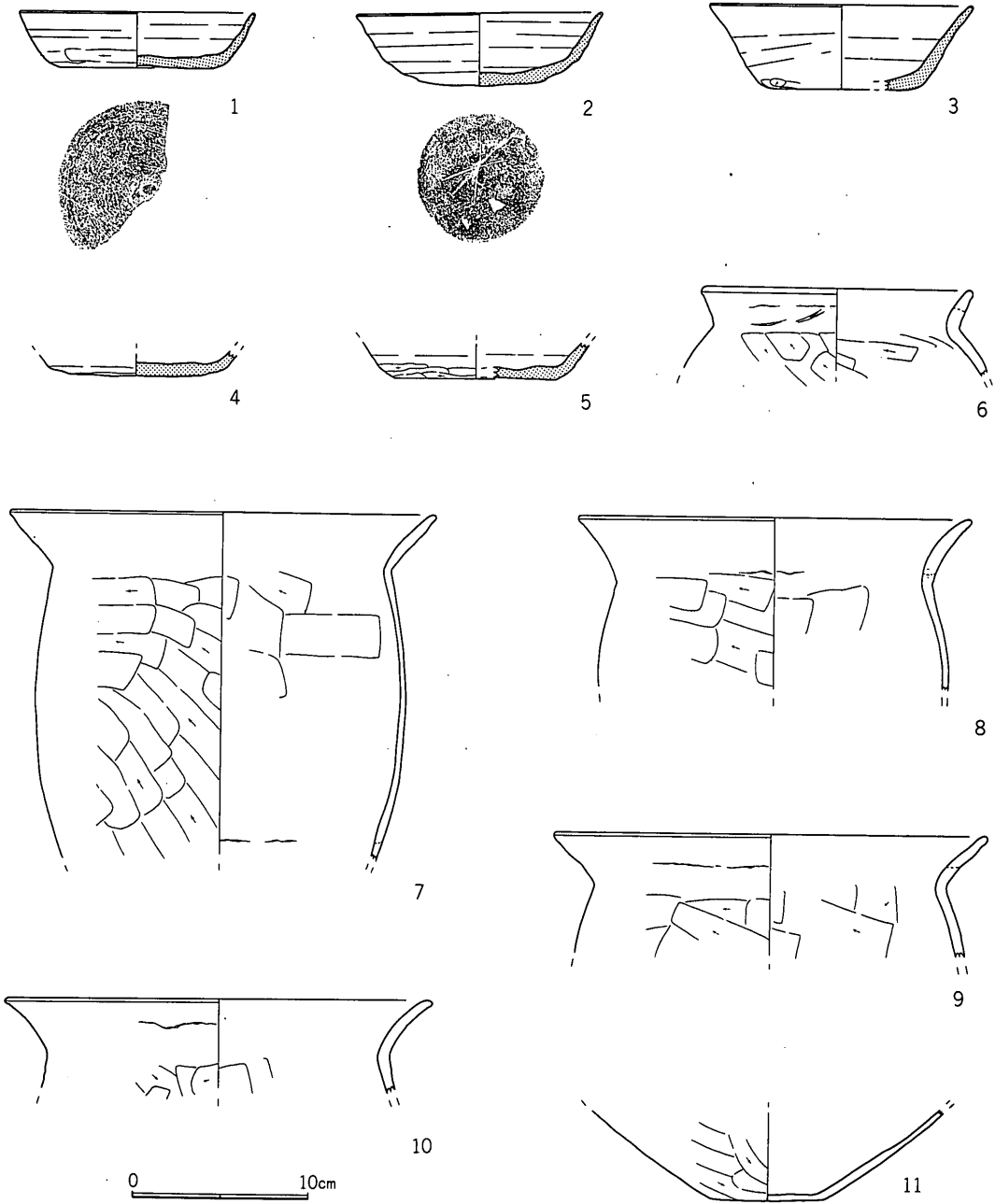


第153図 H-52号住居址カマド実測図 (1:40)

第68表 H-52号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

押図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	(13.4) 3.2 (8.7)	体部は外反し、底部平底の浅い器形。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部切り離しの後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は若干砂粒を含み灰色 (N5/0) 焼成良好
2 (完)	坏 (須)	14.0 4.1 7.4	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底完形	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 (7.5YR6/4) 底部に[X]のヘラ記号有
3 (回)	坏 (須)	(15.0) — (8.2)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色 (10Y8/1)
4 (完)	坏 (須)	— — 10.0	底部平底	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色 (5Y7/1)
5 (回)	坏 (須)	— — (9.2)	体部は外反するものと思われ、底部平底	外面 体部ロクロヨコナデ、体部下半～底部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され明褐色 (7.5YR5/8)
6 (回)	甕	(15.5) — —	口縁部は短く「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈するものと思われる小形の器形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を多く含み橙色 (7.5YR6/6)
7 (回)	甕	(24.3) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部の変換点はシャープである。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明褐色 (7.5YR5/6) を呈する
8 (回)	甕	<22.4> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は暗褐色 (7.5YR3/4) を呈する
9 (回)	甕	<24.6> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (5YR5/6) を呈する
10 (回)	甕	<24.3> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (5YR5/6) を呈する
11 (回)	甕	— — (6.5)	胴下半部は大きく外反し、底部平底。	外面 胴部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は橙色 (7.5YR7/6) を呈する

1 竪穴住居址



第154図 H-52号住居址出土遺物 (1 : 4)

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。



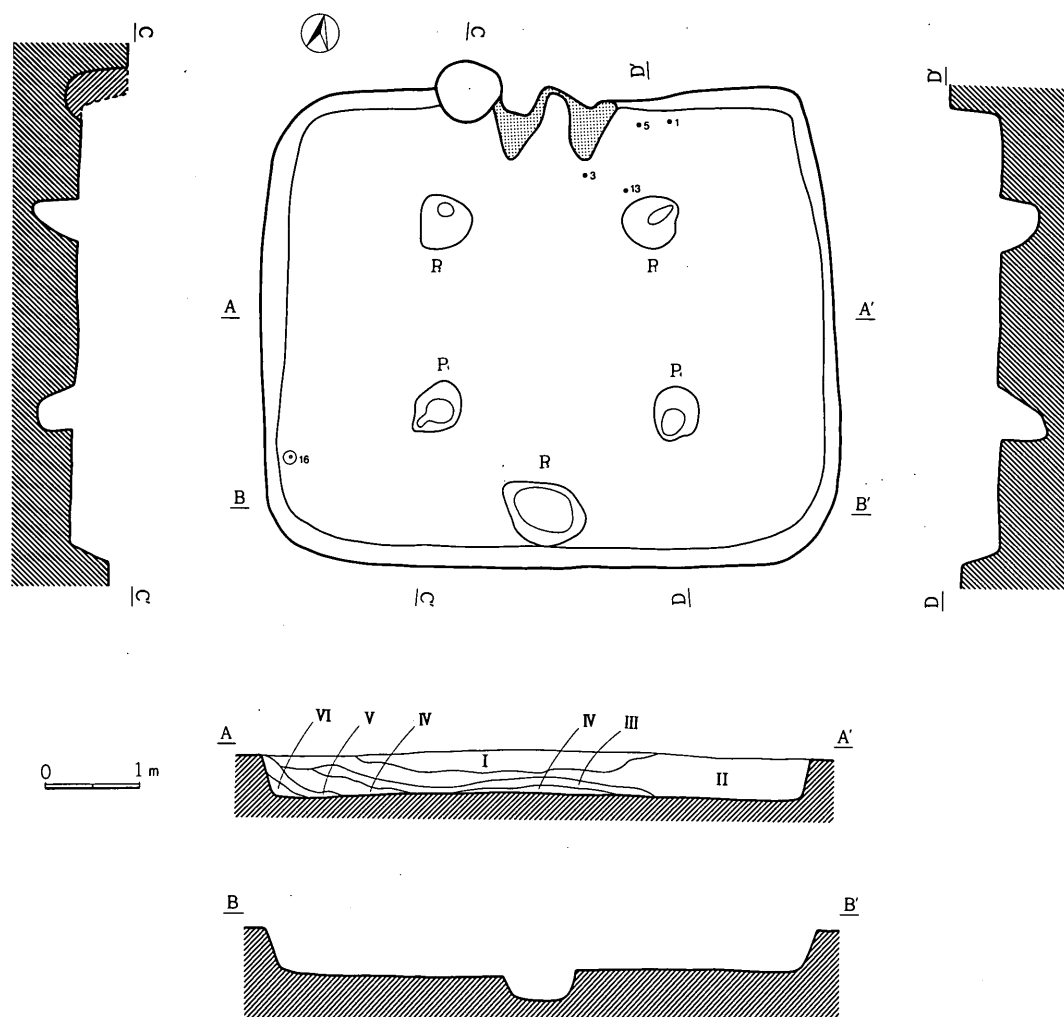
## (53) H-53号住居址

遺構 第155・156図

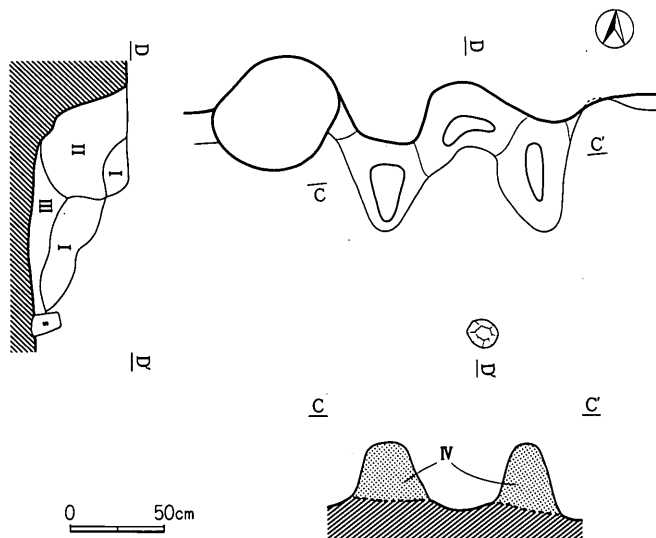
H-53号住居址は、第I区ター37グリッドにおいて検出された。そのカマドの西脇は、ピットによって切られている。

本住居址は、南北4.9m東西6.1mの隅丸方形を呈し、床面積25.4m<sup>2</sup>を測り、主軸方向N-8°-Wを指す。壁高は40cm前後を測り、壁溝は認められない。主柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は60cm×55cm深さ40cm、P<sub>2</sub>は60cm×55cm深さ50cm、P<sub>3</sub>は65cm×50cm深さ40cm、P<sub>4</sub>は60cm×45cm深さ50cmを測った。また、南壁際中央からは、95cm×65cm深さ30cmを測るP<sub>5</sub>が検出された。

遺物は、依存度の高いものは主にカマド東脇より検出された。それらは、蓋(1) 坏(3・5)



第155図 H-53号住居址実測図 (1:80)



第156図 H-53号住居址カマド実測図 (1:40)

横瓶 (13) と土師器甕である。また、14の紡錘車は西壁際の床面直上より出土している。この他の遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は6層に分層された。I層がパミスを含む黒色土層、II層がパミスをよく含み・スコリアを若干含む黒褐色土層、III層は多量のローム粒子が混入する黄褐色土層、IV層は黒褐色土層、V層が黒色土層、VI層がローム層の再堆積である黄褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置し、左右両袖の一部が残存していた。その構材には粘土 (IV層) が用いられていた。また、カマドの前方部には角柱状に面取りされた軽石の支脚が立っていたが、やや前方にありすぎたため原位置を遊離しているかもしれない。カマド覆土は3層に分層された。I層が多量の灰を含む黒灰色土層、II層が灰・焼土等を含まない黒色土層、III層は少量の灰を含む黒褐色土層であった。

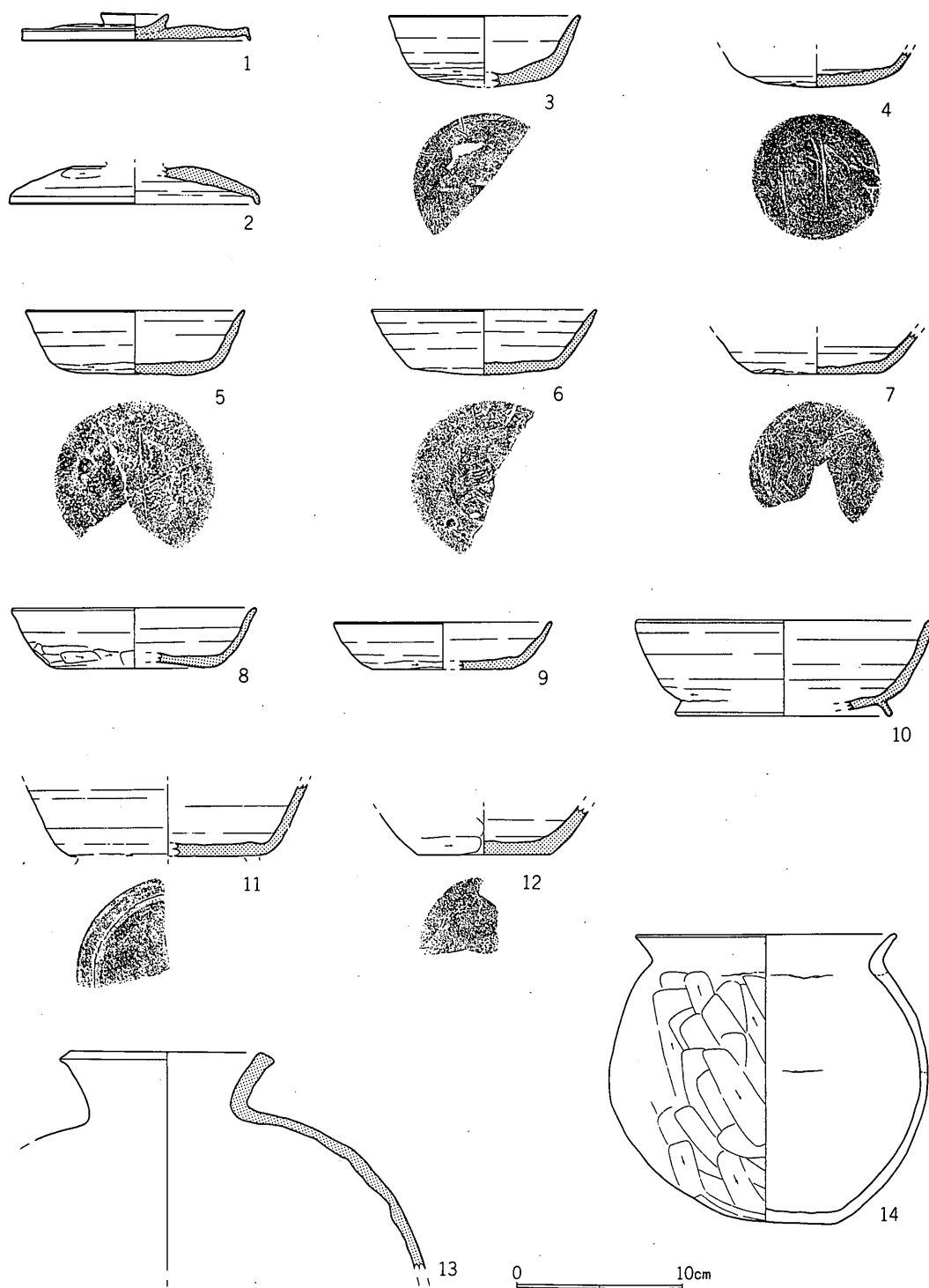
#### 遺物 第157・158図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・坏・横瓶・甕、土師器では坏・甕がある。

1の須恵器蓋は偏平な盤状を呈するもので、つまみ部は皿状にくぼむものである。2の蓋は、つまみ部の形状が不明なもので、H-49出土の1の蓋と接合をみた。

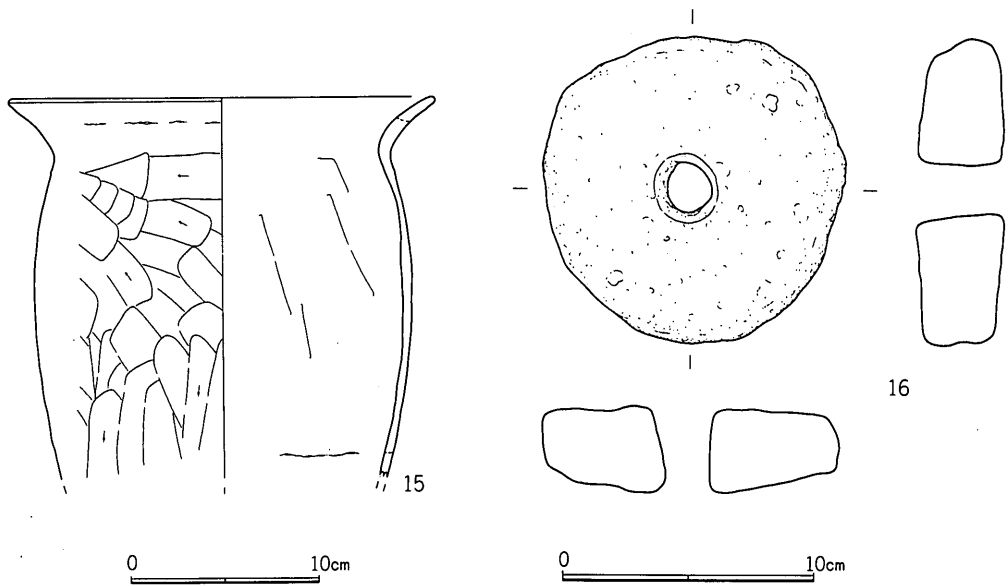
須恵器坏は、9点図示した (3~11)。このうち3~8は回転ヘラキリによる底部をみせており、その後、3には回転ヘラケズリが、5~8には手持ちヘラケズリが加えられている。また、9~11は切り離し方法は不明であるが回転ヘラケズリによる底部をみせる坏である。なお、10・11は高台付坏である。

IV 遺構と遺物



第157図 H-53号住居址出土遺物 (1 : 4)

1 竪穴住居址



第158図 H-53号住居址出土遺物 (15=1:4, 16=1:3)

第69表 H-53号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
16	紡錘車	軽石	12.1	11.9	3.4	185	

13は、須恵器の横瓶で、口縁部を残し胴部大半を失っている。

14は、小形球状を呈する土師器甕で、焼成が不良で脆いものである。

15は、「く」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕である。

この他、土師器では図示し得るものがなかったが、内面黒色研磨のなされたものの破片が認められた。

石器では、16の紡錘車が検出された。軽石を偏平に面取りしたもので、直径12.1cmを測る大形品で、内孔の径は2cmを測った。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

(54) H-54号住居址

遺構 第159・160図

H-54号住居址は、第I区ター36グリッドにおいて検出された。

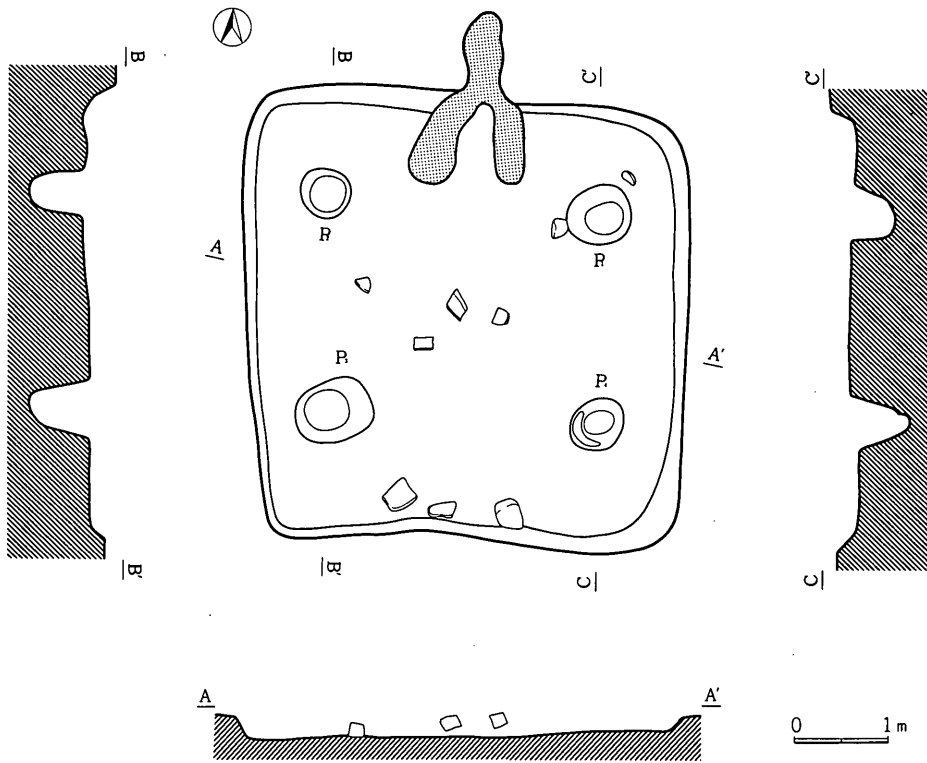
## IV 遺構と遺物

第70表 H-53号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	蓋 (須)	4.0 1.7 13.8	器形は天井部であり高まらず、偏平な盤状を呈する。 つまみ部は、中央が皿状にくぼんだ形態をとる。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰色(N4/0) 焼成良好
2 (回)	蓋 (須)	— — <15.1>		外面 ロクロヨコナデの後、天井部(回転?)ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色(10Y7/1) H-49・1と接合
3 (回)	坏 (須)	<11.6> — (7.0)	底部は丸味をおびた平底を呈し、全体的に肉厚で小形な器形	外面 体部ロクロヨコナデ 底部回転ヘラケリの後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は比較的精選され灰白色(7.5Y7/1)を呈する焼成良好
4 (回)	坏 (須)	— — (7.3)	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み赤褐色(5YR4/8)を呈する。
5 (完)	坏 (須)	13.2 3.8 10.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ 底部回転ヘラケリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色(10Y7/1) 底部に「X」のヘラ記号あり。
6 (回)	坏 (須)	<13.6> 3.8 8.9	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリの後、 全面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰色(10Y4/1)
7 (回)	坏 (須)	— — (7.6)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリの後、 全面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色(7.5Y7/1)
8 (回)	坏 (須)	<14.8> 3.6 <9.8>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデの後、下部手持ちヘラケズリ、 底部回転ヘラケリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され灰白色(5Y7/1)を呈する。 焼成良好
9 (回)	坏 (須)	<13.2> 2.8 <8.4>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ 底部切り離しの後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(7.5YR6/1) 焼成良好
10 (回)	坏 (須)	<17.9> 5.7 <13.1>	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ 底部回転ヘラケズリの後、高台が貼り付けられる 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され灰色を呈する。 (7.5Y5/1) 焼成良好
11 (回)	坏 (須)	— — <12.0>	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられたものと考えられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリの後 高台を貼り付ける。 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み赤褐色を呈する(5YR4/6)
12 (回)	不明 (須)	— — <8.0>	底部平底。	外面 胴下半部ロクロヨコナデ、底部切り離しの後、 手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(N7/0)
13 (完)	横瓶 (須)	12.9 — —	口縁部はラップ状にひらく。	外面 口縁部ヨコナデ 胴部叩きの後、ヘラナデ(ヘラケズリ?) 内面 口縁部ヨコナデ 胴部未調整(当具痕が残る)	胎土は砂粒を含み灰色(N6/0) 口縁部に粘土巻き上げ痕が残る。
14 (完)	小形甕	15.7 17.2 6.0	口縁部は短く「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。 底部はややゆがんだ平底。	外面 口縁部ヨコナデ 胴部縦～斜位のヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を多く含み褐色(7.5YR4/4)
15 (回)	甕	<22.6> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色(5YR5/6)

本住居址は、南北4.7m東西4.7mの隅丸方形を呈し、床面積18.8m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-4°-Wを指す。壁高は15~25cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は70cm×60cm深さ45cm、P<sub>2</sub>は55cm×50cm深さ60cm、P<sub>3</sub>は80cm×60cm深さ65cm、P<sub>4</sub>は60cm×50cm深さ60cmを測る。

覆土はI層のみで、小粒パミス・スコリアを若干含み粘性のある黒色土層であった。



第159図 H-54号住居址実測図 (1:80)

遺物は、いずれも覆土中からの出土で、良好な出土状態を示すものは認められなかった。

カマドは、北壁中央に位置するが、半壊状態にあり、その構材であった軽石の一部は住居の床面上に散乱していた。ただし、両袖石のいくつかは残存していた。A-A'の断面にかかる両袖石は、面取りされた軽石であり、その東袖石外面には貼られた粘土 (IV層) の一部が残っていた。またB-B'の断面にかかる袖石も面取り軽石であるが、特に西側のものは「J」状に削られていることが注意される。B-B'の断面の前方に残るピットは、袖石の抜き取り痕と考えられる。煙道部は90cm前後と他に較べると比較的長く壁外へ延びている。その中央はピット状に若干掘り込まれている。カマド覆土は5層に分層された。I層はローム粒子が多く混入する黄褐色土層、II層は若干の焼土粒子を含む黒色土層、III層は若干の灰を含む黒色土層、IV層が若干の灰を含む黒褐色土層、V層は焼土粒子をよく含む暗褐色土層であった。

遺物 第161・162図

遺物は、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕の各機種がみられた。

1は、回転糸切りのなされた底部をみせる小形の須恵器坏であるがおそらく混入品と考えられる。2は、盤状の形態を呈する須恵器高台付坏で、底部は回転ヘラケズリがなされている。

3は、体部に放射状暗文が施される土師器坏で、見込み部は風化が激しいためわからないが、ラセン状暗文が施されていた可能性もある。

4は、完全な還元炎焼成となっていない須恵器甕である。外面には叩き目がみられる。

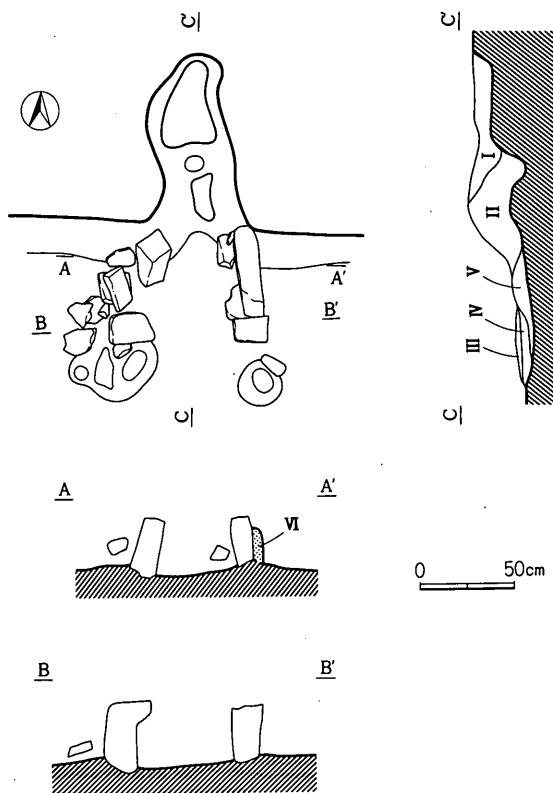
5～8は、「く」の字状に外反する口縁部をみせる薄手の土師器甕類である。

10は、軽石の紡錘車で、表裏両面が平に面取りされているが、比較的部厚いものといえる。

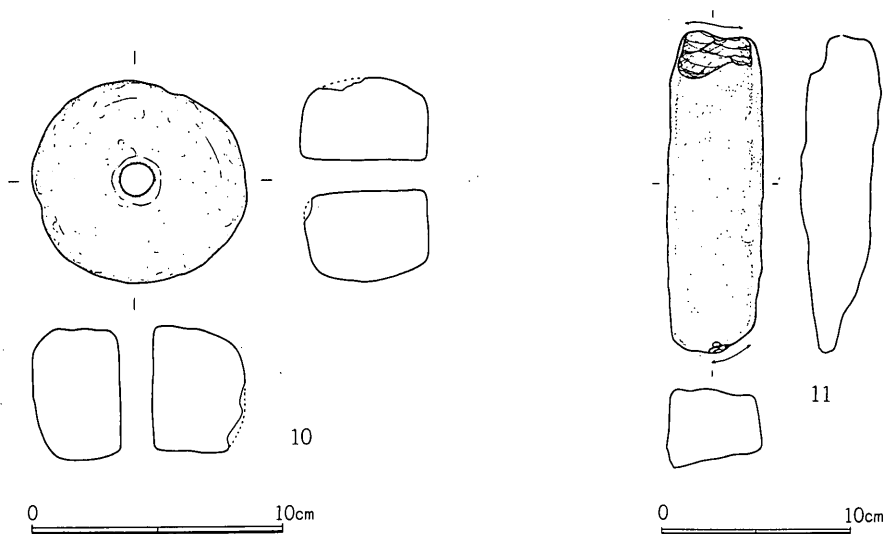
11は、河床礫を用いた敲石で、両端が敲打に供されている。その一端は嘴状に尖っている。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

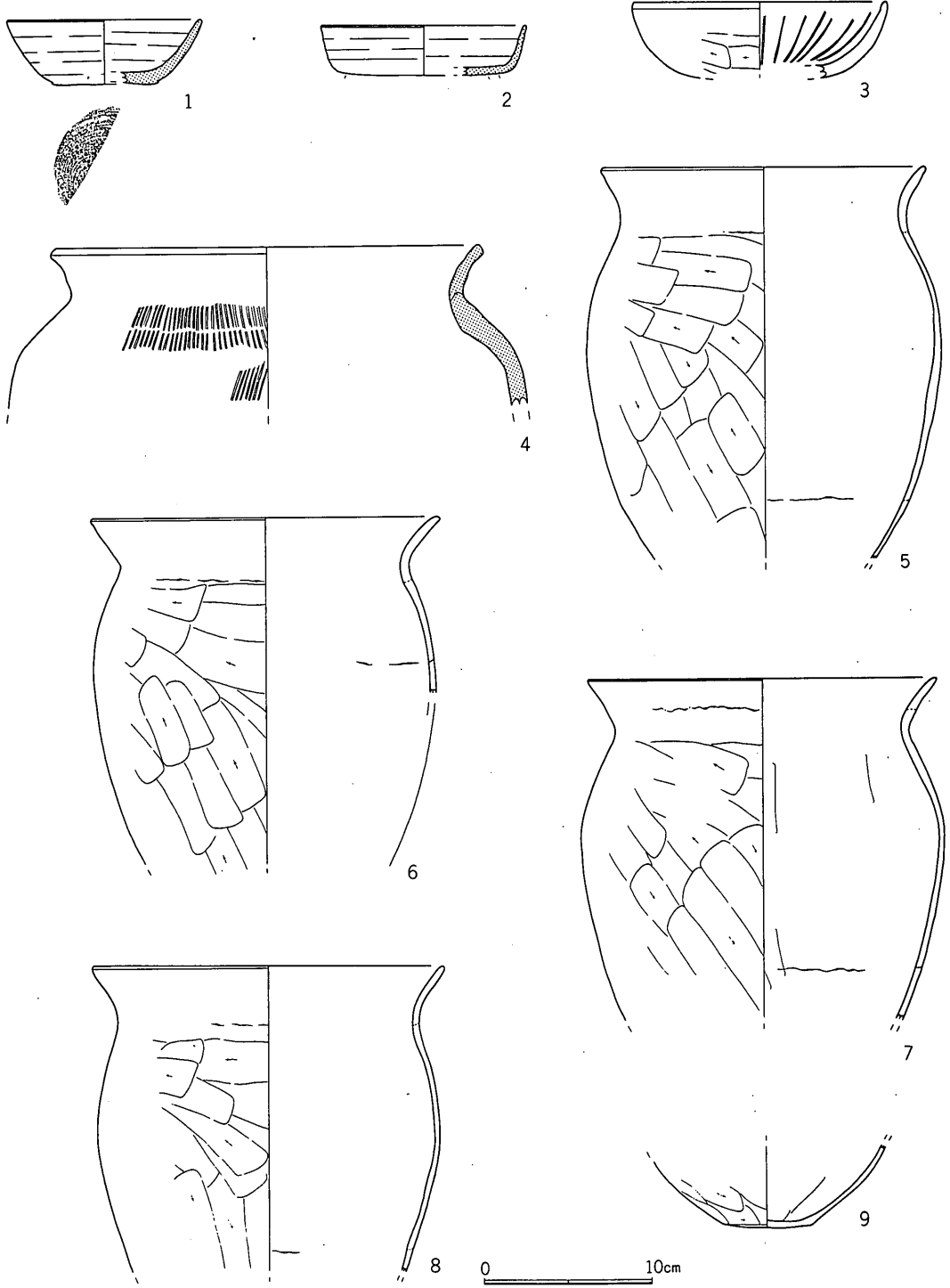


第160図 H-54号住居址カマド実測図 (1 : 40)



第161図 H-54号住居址出土遺物 (10は1 : 3, 11は1 : 4)

1 竖穴住居址



第162图 H-54号住居址出土遗物 (1:4)



IV 遺構と遺物

第71表 H-54号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	<11.6 3.8 (6.4)	体部は外反し、底部平底の小形の器形	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み青灰色 (5PB6/1)
2 (回)	坏 (須)	<12.2 — —	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられるものと考えられる。扁平な盤状の器形	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選され暗赤灰色 (5R3/1) 焼成良好
3 (回)	坏	(15.1) — —	体部は丸味をおびて外反し、内面の口唇は僅かにくびれる。	外面 体部ヨコナデ、体部下半～底部手持ちヘラケズリ 内面 体部はヨコナデの後、放射状暗文を施す。底部は風化が激しく調整不明	胎土は中砂粒を含み橙色を呈する (75YR6/6)全体に磨滅が激しい
4 (回)	甕 (須)	<25.0 — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部叩き 内面 剥落が激しく、調整不明	胎土はにぶい橙色 (75YR6/4)を呈する。完全な現元炎焼成となっていない
5 (回)	甕	<20.8 — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色の中粒子を多く含み、暗赤褐色 (2.5YR3/4)
6 (完)	甕	20.8 — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい褐色 (7.5YR5/4)
7 (回)	甕	20.8 — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (2.5YR5/6)
8 (回)	甕	(20.9) — —	口縁部は「く」の字状にゆるく外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土はにぶい褐色 (75YR5/4)
9 (完)	甕	— — (5.3)	胴下半部は球状を呈し、底部平底。	外面 胴下半部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土はにぶい褐色 (7.5YR5/3)を呈する。

(55) H-55号住居址

遺構 第163・164区

H-55号住居址は、第I区タ-36グリッドにおいて検出された。

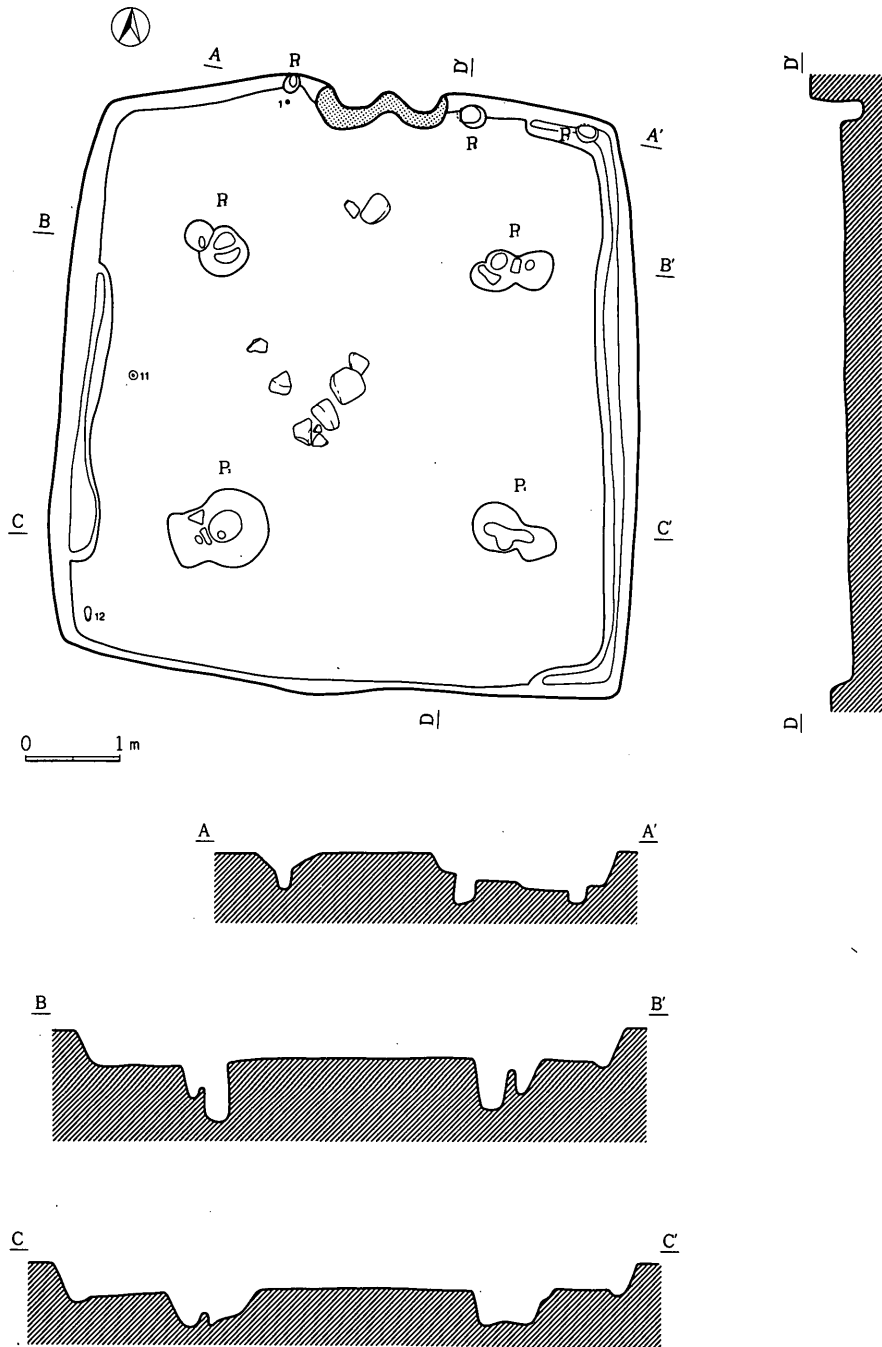
本住居址は、南北6.5m東西6.2mの隅丸方形を呈し、床面積33.3㎡を測り、主軸方向はN-4°Wを指す。壁高は25~35cmを測る。壁溝は、北東コーナーから東壁・南東コーナーにかけてと、西壁の一部において認められる。主柱穴と考えられるものは、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は55cm×40cm深さ55cmを測るもので、その東脇には補助柱穴かとも考えられる45cm×40cm深さ40cmほどのピットが付随している。P<sub>2</sub>は、55cm×55cm深さ60cmを測り、P<sub>1</sub>と同様35cm×30cm深さ35cmの補助柱穴的なピットが付随する。P<sub>3</sub>は105cm×85cm深さ35cm、P<sub>4</sub>は90cm×50cm深さ35cmを測るが、その平面形や断面形からP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>にみる補助柱的なものをもっていたと解される。また、北壁際には、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>が存在するが、これも補助柱の柱穴かと考えられる。P<sub>5</sub>は20cm×15cm深さ20cm、P<sub>6</sub>は25cm×25cm深さ30cm、P<sub>7</sub>は25cm×15cm深さ15cmを測る。

遺物は、カマドの西脇より正常位で1の坏が、西壁際の床面直上より11の紡錘車が、南西コー

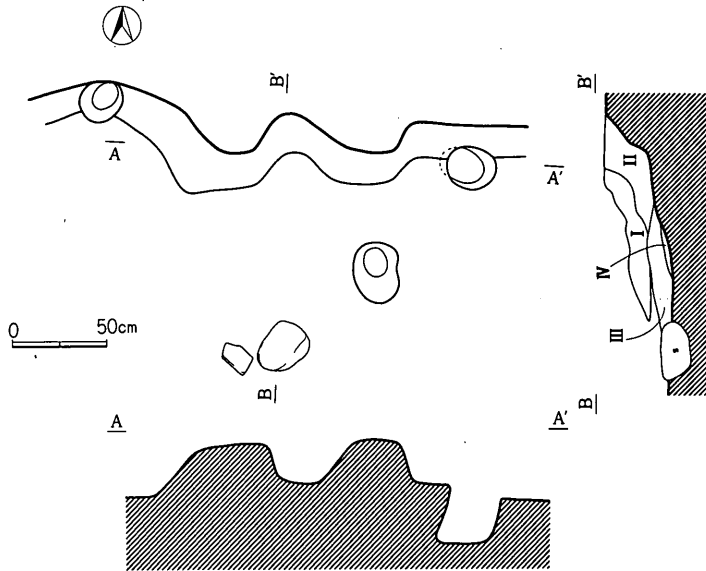
第72表 H-54号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
10	紡錘車	軽石	8.0	8.4	5.3	185	
11	敲石	玄武岩質 安山岩	16.8	5.0	4.1	585	

1 竖穴住居址



第163图 H-55号住居址实测图 (1 : 80)



第164図 H-55号住居址カマド実測図 (1:40)

ナーの床面直上より13の敲石がそれぞれ検出されている。この他は、いずれも覆土中からの出土であった。

覆土はI層のみで、小粒パミスを含みローム粒子が若干混入する黒色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、すでに壊滅状態にあり、その構材であった礫は住居中央に散乱していた。図のA-A'の断面からは、ローム部分が袖状に僅かに削り出されていたことが窺える。カマドはすでに破壊されているため、その部分の覆土はプライマリーな堆積とはみられないが、一応4層に分層された。I層が若干の焼土・カーボンを含む灰層、II層が焼土をブロック状に含む黒褐色土層、III層が焼土及び灰から構成される灰褐色土層、IV層が焼土層である赤褐色土層であった。

#### 遺物 第165・166・167図

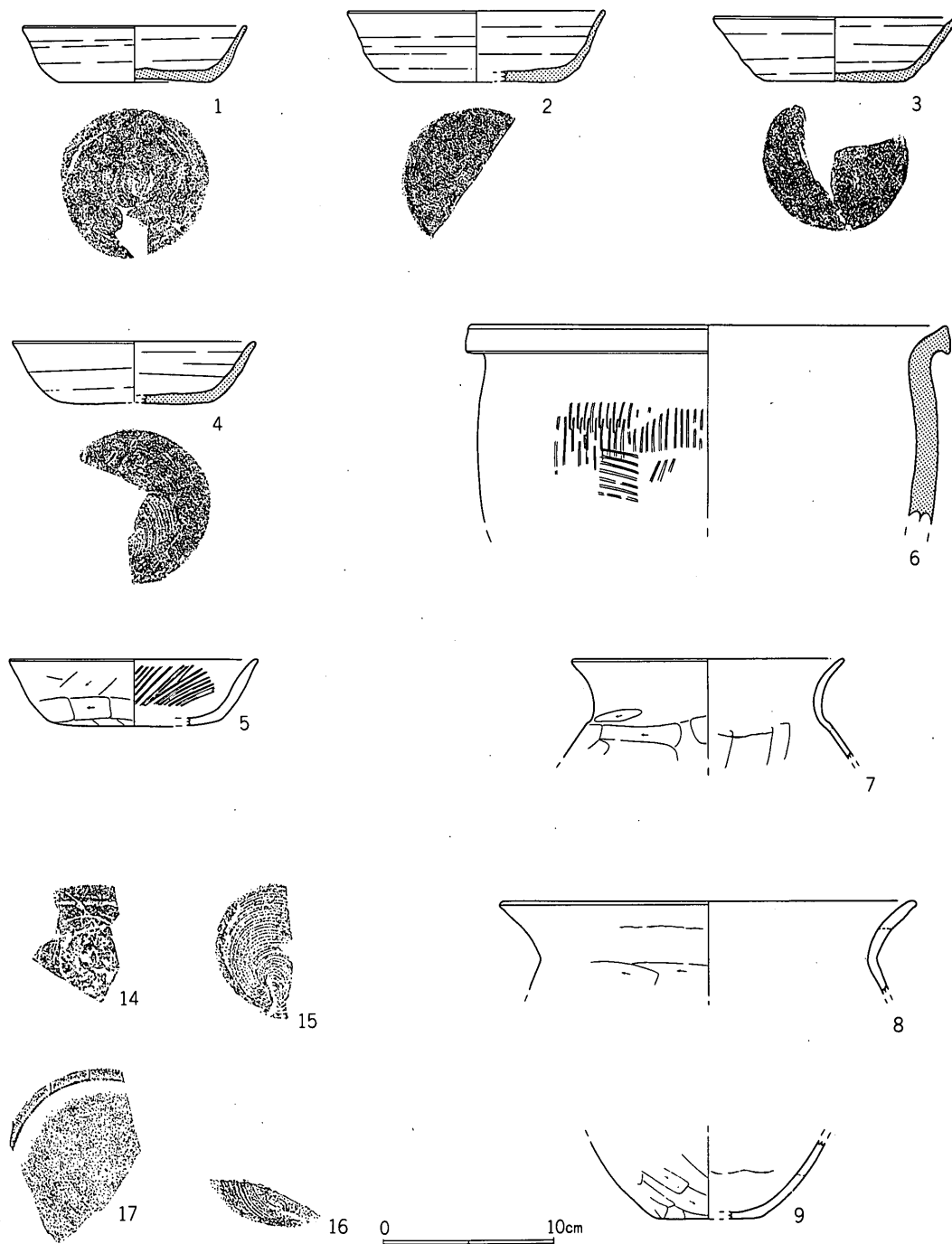
本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕が、土師器では坏・甕がみられた。

須恵器蓋は、図示しなかったが、内面にかえりを有さないものであった。

須恵器坏は1～4の4点を図示したが、いずれも底部切り離しの後手持ちヘラケズリのなされるものであった。その切り離し方法は、1は回転ヘラキリ、3・4は回転糸切りにより、2は不明である。

5は、内面体部に放射状暗文の施される土師器坏で、見込み部は風化が激しくわからないがあ

1 竖穴住居址



第165图 H-55号住居址出土遗物 (1:4)

第73表 H-55号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

補図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	<12.5> 3.3 8.8	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリの後、 全面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(5Y5/1) 内面に火燻あり
2 (回)	坏 (須)	(14.0) 4.0 (8.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部切り離しの後、全面 手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(7.5Y5/1) 内外面に「井」の火燻
3 (回)	坏 (須)	<14.2> 3.7 (8.2)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、周 囲手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く 含み灰色 (N5/0)
4 (回)	坏 (須)	(14.2) 3.6 (8.9)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、周 囲手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く 含み緑灰色 (10GY5/1)
5 (回)	坏	<14.5> (3.9) <10.2>	体部は外反し、底部は平底になるもの と思われる。	外面 口縁部ヨコナデ、 体部～底部手持ちヘラケズリ 内面 体部ヨコナデの後、放射状暗文が施される。 底部調整不明	胎土は中砂粒を 多く含み橙色 (7.5YR6/6)
6 (回)	甕 (須)	<28.5> — —	胴上部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁 部の折り返しは短い。	外面 胴部叩きの後、口縁部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ 胴部縦位のナデ	胎土は砂粒を含み 淡黄色 (2.5Y8/3) 焼成良好
7 (回)	甕	<16.0> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。 口径は比較的小さい。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ベラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	胎土はにぶい橙 色 (7.5YR6/4)
8 (回)	甕	<24.4> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	胎土はにぶい橙 色 (7.5YR6/4)
9 (回)	甕	— — (6.0)	底部平底。	外面 胴下半～底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土はにぶい褐 色 (7.5YR5/3)

るいはラセン状暗文がなされて  
いたものと思われる。また、内  
面の口唇部はあたかも一本の沈  
線が巡ったように僅かにくびれ  
ていることが注意される。

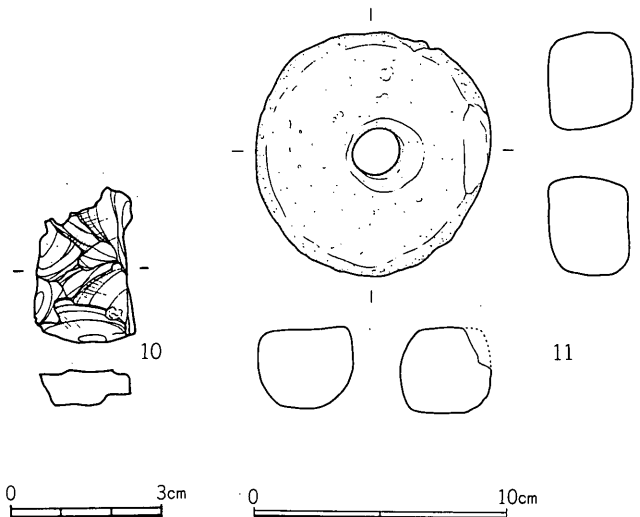
6は、胴上半がほぼ直立し口  
縁部が短く強く折れ曲がる須恵  
器甕である。

7・8は、「く」の字状に外反  
する口縁をみせる土師器甕であ  
る。

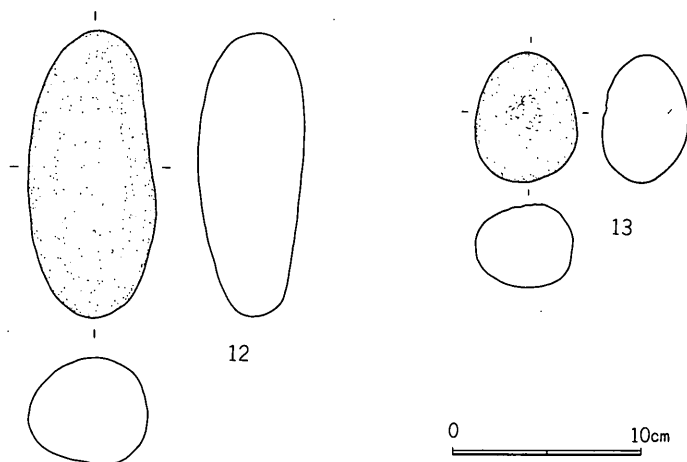
本住居址より検出された石器  
には、10～13がある。

10は、黒曜石の両面加工品で、石鏃等の素材となるものであろうか。

11は、軽石が円盤状に面取りされその中央に穿孔がなされた紡錘車である。



第166図 H-55号住居址出土遺物 (10=2:3, 11=1:3)



第167図 H-55号住居址出土遺物 (1:4)

12は、細長い河原石を用いた敲石と考えられるが、顕著な敲打痕は観察されない。

13は、卵形を呈する河床礫で、磨石として用いられたのであろうか。

#### 時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

第74表 H-55号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
10	不明	黒曜石	3.0	2.0	0.8	5	
11	紡錘車	軽石	9.6	9.2	3.4	140	
12	敲石	安山岩	15.0	6.7	5.7	770	
13	磨石?	輝石 安山岩	6.8	5.4	4.5	210	

## (56) H-56号住居址

遺構 第168・169図

H-56号住居址は、第I区ター36グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.2m東西3.6mの隅丸方形を呈し、床面積10.9m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-15°-Wを指す。壁高は40cm前後を測り、壁溝は認められない。また、支柱穴等ピットもまったく存在していなかった。

遺物は、カマド中に土師器小形甕の完存品が認められたが、盗難にあい紛失してしまった。これ以外の遺物は、いずれも住居址覆土中より出土している。

住居址覆土は、3層に分層された。I層は河川による砂利の堆積した灰色土層、II層がパミスを若干含み若干のローム粒子が混入する黒褐色土層、III層は多量のローム粒子が混入する黒褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、支脚石と天井石の一部をとどめているのみであった。その

掘り方は壁外に大きく突出しており、その主体部はおそらく奥まった部分にあったものと考えられる。したがって、住居内に張り出す袖は持たないものとみられる。図のaは、焚口部の天井に渡された面取り軽石ですすでに焚口部に崩落してしまっただものである。またbは、軽石の支脚石である。

遺物 第170図

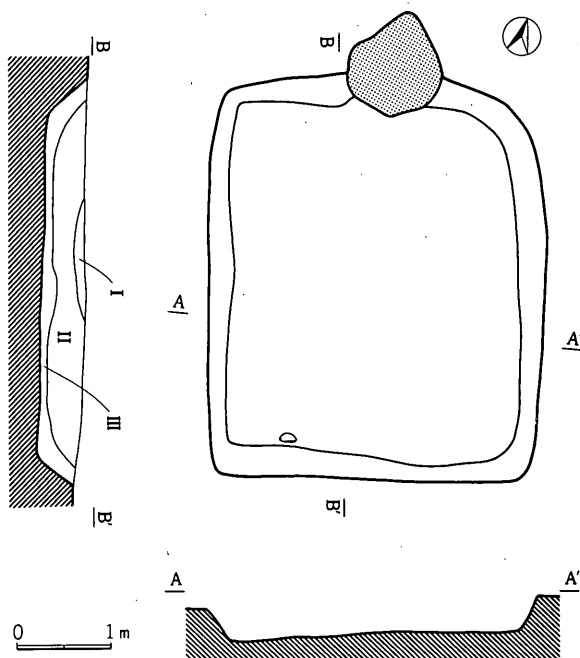
本住居址から検出された遺物には、須恵器杯・甕、土師器甕の破片がみられた。

1は、回転ヘラケズリのなされた須恵器杯の底部である。その切り離し方法は不明。

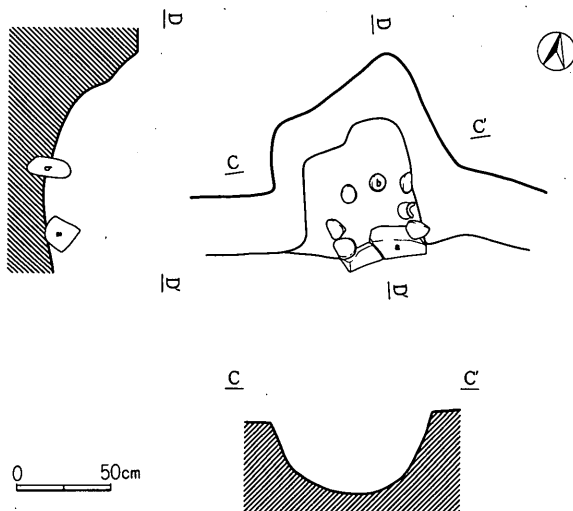
2は、「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部である。

時期

本住居址は、時期決定の手掛りとなる遺物が少ないためその所産期の推定が難しい。



第168図 H-56号住居址実測図 (1:80)



第169図 H-56号住居址カマド実測図 (1:40)

(57) H-57号住居址

遺構 第171・173図

H-57号住居址は、第II区シー23グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北5.1m東西4.7mの隅丸方形を呈し、床面積19.4㎡を測り、主軸方向N-0°-Wを指す。壁高は15~20cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴と考えられるものは、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の2個が検出された。P<sub>1</sub>は40cm×40cm深さ45cm、P<sub>2</sub>は40cm×30cm深さ45cmを測る。また、P<sub>3</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>は補助柱の柱穴かと考えら

第75表 H-56号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	坏 (須)	— — (19.6)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰色(N6/1) 焼成良好
2 (回)	甕	<19.7> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色を 呈する。 (5YR4/6)

れるもので、P<sub>3</sub>は40cm×35cm深さ20cm、P<sub>7</sub>が55cm×30cm深さ25cm、P<sub>8</sub>は40cm×35cm深さ20cmを測る。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は柱穴とは考えられない浅いピットで、P<sub>5</sub>が60cm×55cm、P<sub>6</sub>が85cm×75cmを測る。P<sub>4</sub>は、カマド西脇にあるピットで、その中には多量の灰が詰まっており、「灰落とし」と言われるようなカマドの灰を一時的に溜めておく施設とも考えられようか。

遺物は、いずれも覆土中からの出土であった。

覆土はI層のみで、小粒パミスを含む黒色土層であった。

カマドは、北壁中央よりやや東寄りに存在するもので、東西二対の袖石が残っていた。その構材には、安山岩(a)と面取り軽石(b)が用いられ、それらにさらに粘土(V層)が貼られる様相を呈していた。カマド覆土は、4層に分層された。I層が灰の堆積層、II層は灰・焼土をよく含む灰褐色土層、III層は赤褐色の焼土層、IV層は、灰・焼土をまったく含まない黒褐色土層であった。

#### 遺物 第172図

本住居址からは、須恵器では坏・甕、土師器では甕の各器種がみられた。

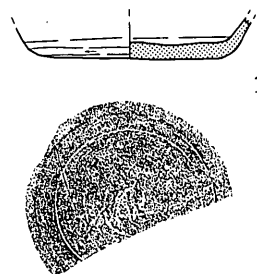
1・2は、回転糸切りによる底部をみせる須恵器坏である。

3は土師器の小形甕で、球状の胴部を呈している。

この他、石器・鉄製品類は本住居址においては認められなかった。

#### 時 期

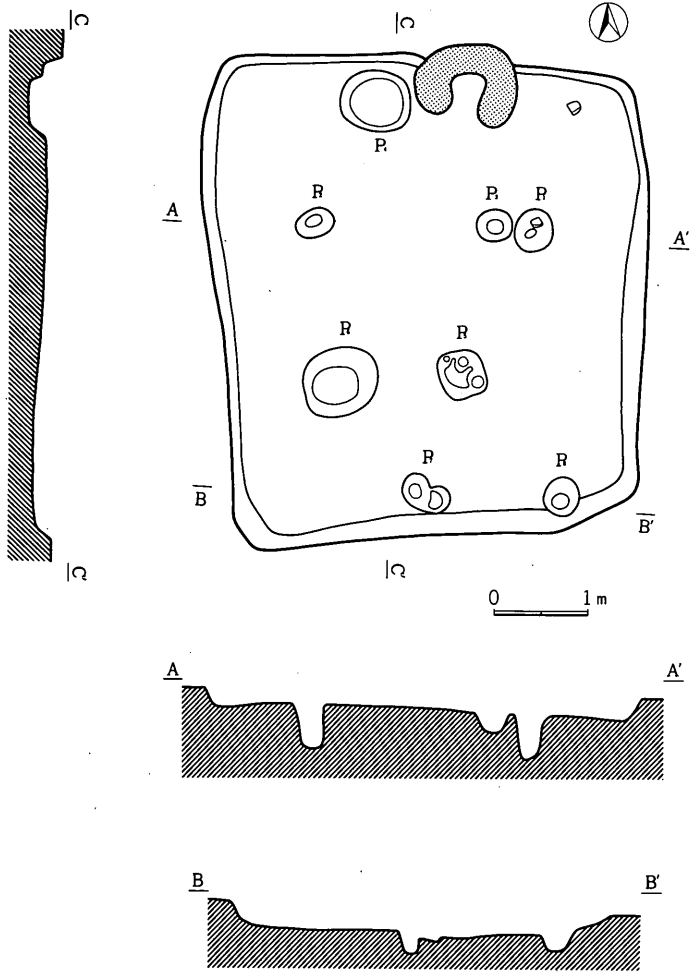
本住居址は、奈良・平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。



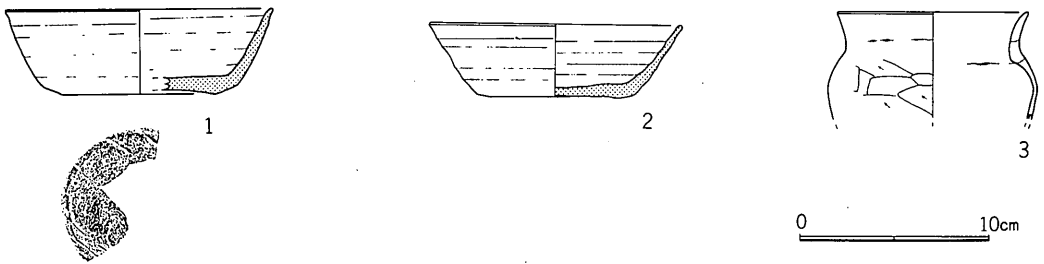
第170図 H-56号住居址出土遺物(1:4)



IV 遺構と遺物



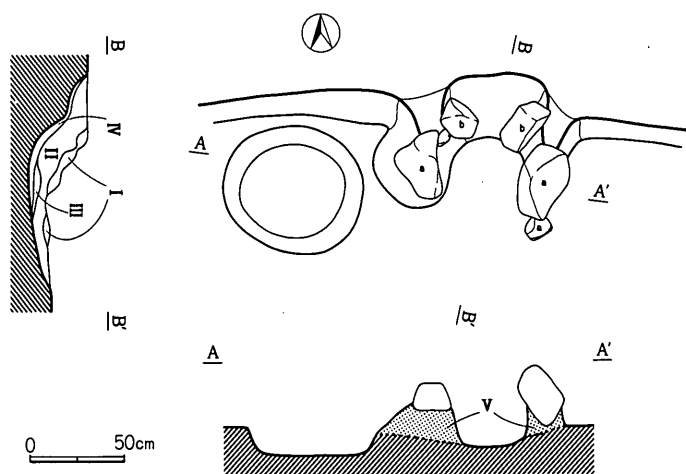
第171図 H-57号住居址実測図 (1 : 80)



第172図 H-57号住居址出土遺物 (1 : 4)

第76表 H-57号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	<14.1> 4.4 (8.2)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色(10Y4 /1)内外面に 火襷あり
2 (回)	坏 (須)	<13.4> 3.8 (8.2)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰白色 (7.5Y7/1)
3 (回)	甕	<10.1> — —	口縁部はやや外反し、胴部は球状を呈す る、小形の器形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	胎土は黒色を呈 する (10YR2/1)



第173図 H-57号住居址カマド実測図(1:40)

## (58) H-58号住居址

遺 構 第174・175図

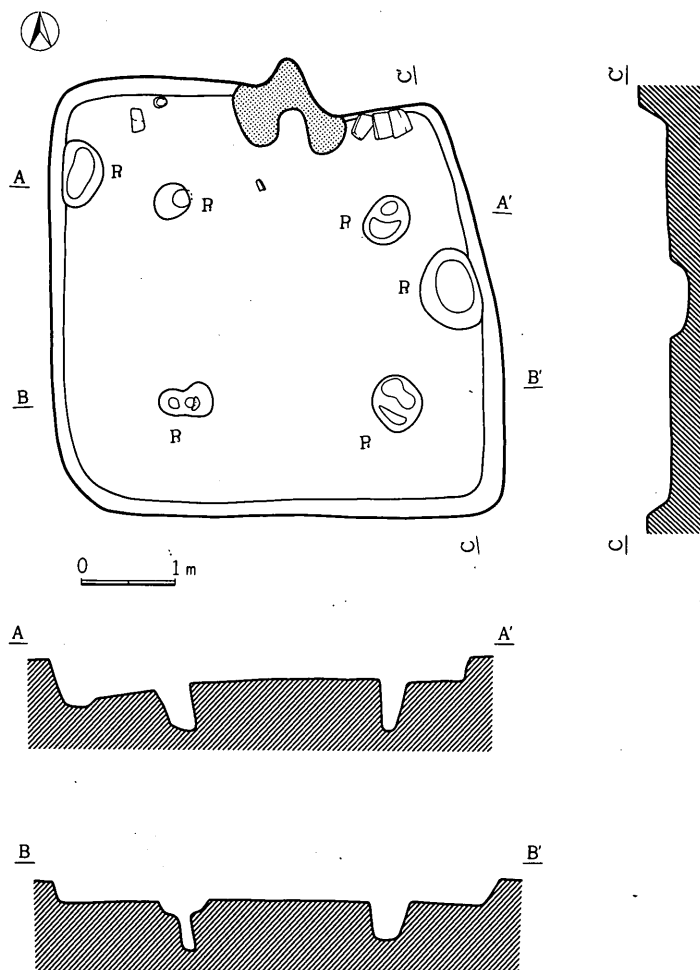
H-58号住居址は、第II区シー-24グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.6m東西4.75mを測り、北東コーナーの歪んだ隅丸方形を呈し、床面積17.5m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-0°-Wを指す。壁高は25~45cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は55cm×40cm深さ50cm、P<sub>2</sub>は40cm×35cm深さ50cm、P<sub>3</sub>は60cm×35cm深さ55cmを測り二段の掘り方をみせている。P<sub>4</sub>は60cm×55cm深さ40cmを測る。また、東壁際には、P<sub>5</sub>が、西壁際にはP<sub>6</sub>があり、P<sub>5</sub>は85cm×60cm深さ20cm、P<sub>6</sub>は60cm×40cm深さ10cmを測る。

覆土はI層のみで、若干の小粒パミスを含む黒色土層であった。

遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

カマドは、北壁中央よりやや東寄りに存在するが、その前方部はすでに取り壊された状態にあ



第174図 H-58号住居址実測図 (1:80)

り、その構材である面取り軽石3個はカマドの東脇に並べて置かれていた。また、A・B・Cの各断面にみる生きている袖石もすべて面取り軽石であり、とりわけC断面の東側の袖石が「J」状に面取りされていることは注意される。これらの袖口に粘土(VI層)が貼られ、袖となっている。カマド覆土は、5層に分層された。I層は多量の灰を含む黒灰色土層、II層は多量の焼土を含む黒褐色土層、III層は灰を含む黒灰色土層、IV層は若干の灰を含む黒褐色土層、V層は灰・焼土は含まない黒褐色土層であった。

## 遺物 第176図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・坏・甕・土師器では甕の破片がみられた。

1・2は、いずれも回転糸切りによる底部をみせる坏で、2には高台が貼り付けられている。

1 竪穴住居址

須恵器甕は、いずれも破片ばかりで器形を知り得るものがなかった。

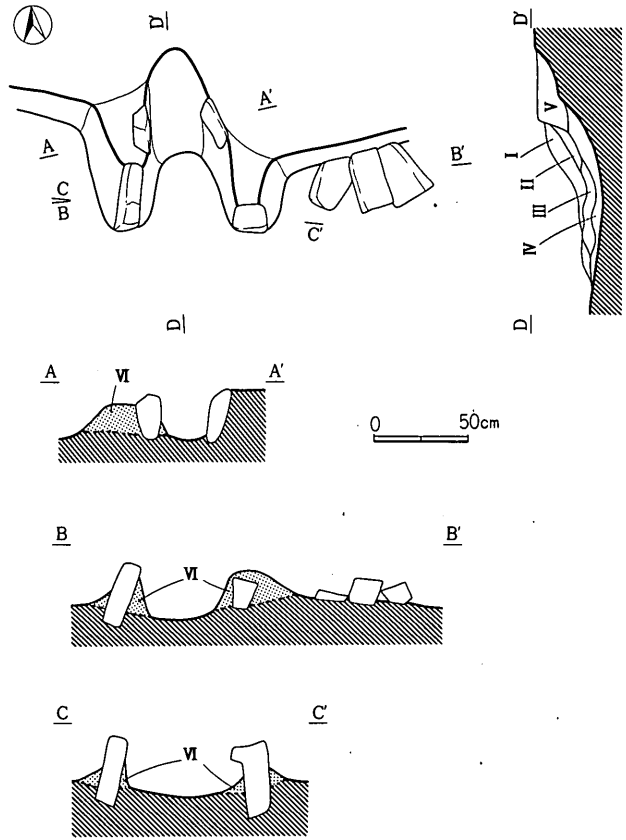
土師器甕も図示し得るものがなかったが、「く」の字状を呈する口縁部破片がみられた。

3は、砂岩製の砥石である。その表面は五面からなるがいずれも研砥に供されている。そのうち二面には線状の研砥痕が残る。器体の半分を欠損する。

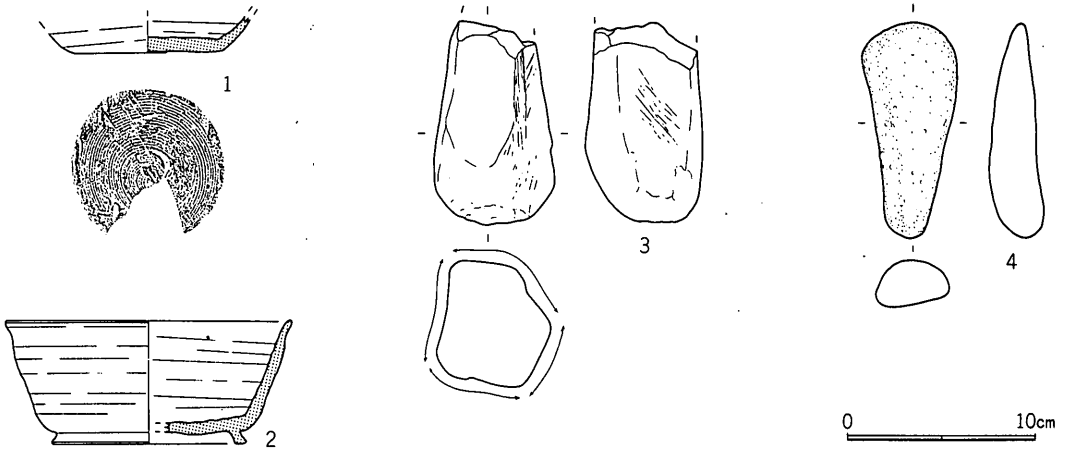
4は、揆形の敲石である。

時期

本住居址は、奈良・平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。



第175図 H-58号住居址カマド実測図 (1:40)



第176図 H-58号住居址出土遺物 (1:4)

第77表 H-58号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (完)	坏 (須)	— — (8.0)	体部はやや外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み 灰色 (7.5Y4/1)
2 (回)	坏 (須)	<15.2 6.4 10.3	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、周 辺部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は暗灰色を呈する (N3/0)

## (59) H-59号住居址

遺 構 第177・178図

H-59号住居址は、第II区シ-24グリ

ッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.7m東西3.6mの隅丸方形を呈し、床面積は18.7m<sup>2</sup>を測り、主軸方向N-2°-Wを指す。壁高は20~40cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴と考えられるものはP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>の3個が検出された。それぞれ3カ所のコーナーに配されるが、南東コーナーにおいては検出されなかった。P<sub>1</sub>が80cm×65cm深さ20cm、P<sub>2</sub>が50cm×40cm深さ10cm、P<sub>3</sub>が50cm×40cm深さ15cmを測るが、いずれも柱穴としては浅いものといえる。また、住居中央においては85cm×75cm深さ10cmを測るP<sub>4</sub>が検出された。

遺物は、南壁寄りの床面直上より1の須恵器坏の底部が検出された。この他は、いずれも覆土中からの出土である。

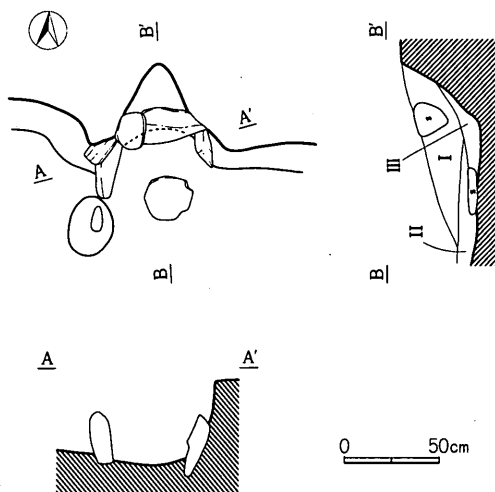
住居址覆土は、3層に分層された。I・III層はパミスをよく含むローム粒子が混入する黒褐色土層、II層も同様にパミスをよく含むスーム粒子が混入する暗褐色土層であった。

カマドは、北壁中央よりやや東寄りに存在し、その前方部はすでに破壊されていたが、その後方部は比較的よく残っていた。図のA-A'の断面では、西側に偏

平な面取り軽石の袖(a)が配され、東側には偏平な安山岩礫(b)が配されていることがわかる。aの手前のピットは、袖石の抜き取り痕である。また、B-B'の断面をみると、煙道部天井には角柱状の面取り軽石(c)が渡され、また火床部にはカマドの構材を用いられていたと考え

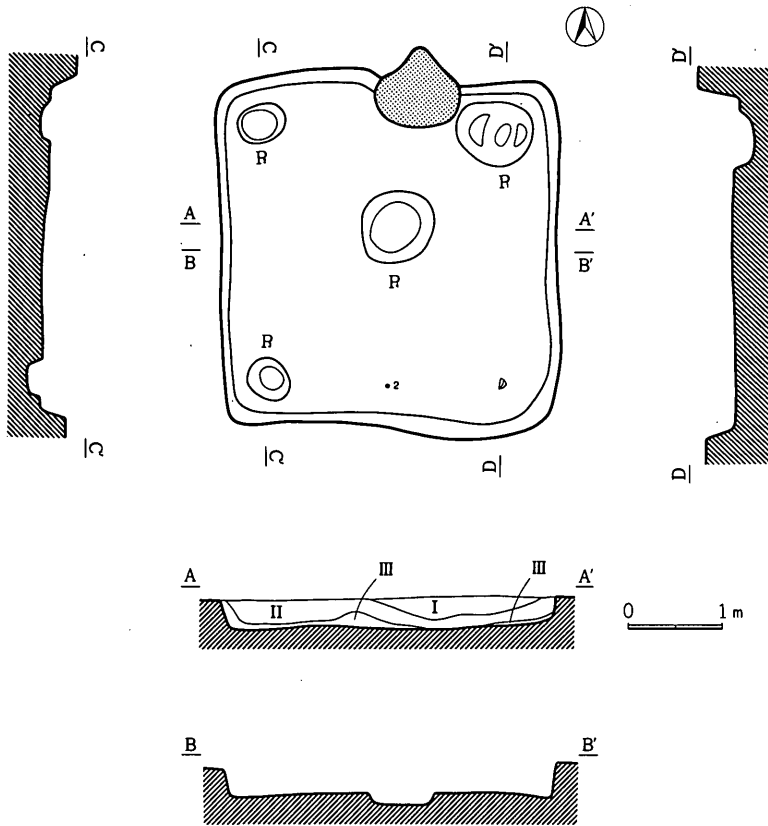
第78表 H-58号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
3	砥石	砂岩	(10.5)	6.3	6.3	(585)	
4	敲石	角閃岩 安山岩	11.3	5.0	2.6	140	

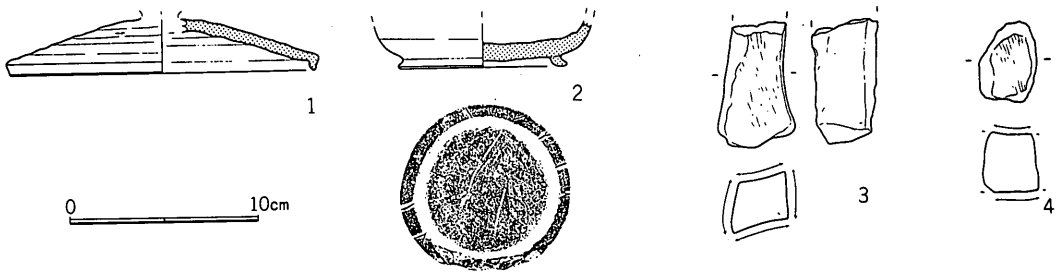


第177図 H-59号住居址カマド実測図(1:40)

1 竪穴住居址



第178図 H-59号住居址実測図 (1:80)



第179図 H-59号住居址出土遺物 (1:4)

られる偏平な面取り軽石 (d) が残置されていた。カマドの覆土は、3層に分層された。I層は若干のカーボンを含む茶褐色土層、II層はカーボン・焼土・灰をよく含む黒灰色土層、III層は赤褐色の焼土層であった。

遺物 第179図

本住居址より検出された遺物には、須恵器では蓋・坏が、土師器では甕がある。

第79表 H-59号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	— — (16.1)	つまみ部の形状は不明	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み み灰色 (10Y 6 / 1)
2 (完)	坏 (須)	— — 8.9	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み み灰色 (5 Y 5 / 1)

1は須恵器蓋で、つまみ部は欠失するがおそらく宝珠形を呈するものと思われる。

2は須恵器の高台付坏で、底部は切り離されて後手持ちヘラケズリがなされている。

土師器甕は、図示し得るものがなかったが、「く」の字状に外反する口縁部破片がみられた。

3は、砂岩製の砥石である。その表面は4面から構成されるが、4面とも研砥に供されている器体の半分を欠損する。

4も、砂岩製の流紋岩の断片である。相対する二面が研砥に供されていることがわかる。

#### 時 期

本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第Ⅶ期に位置付けられよう。

## (60) H-60号住居址

### 遺 構 第180図

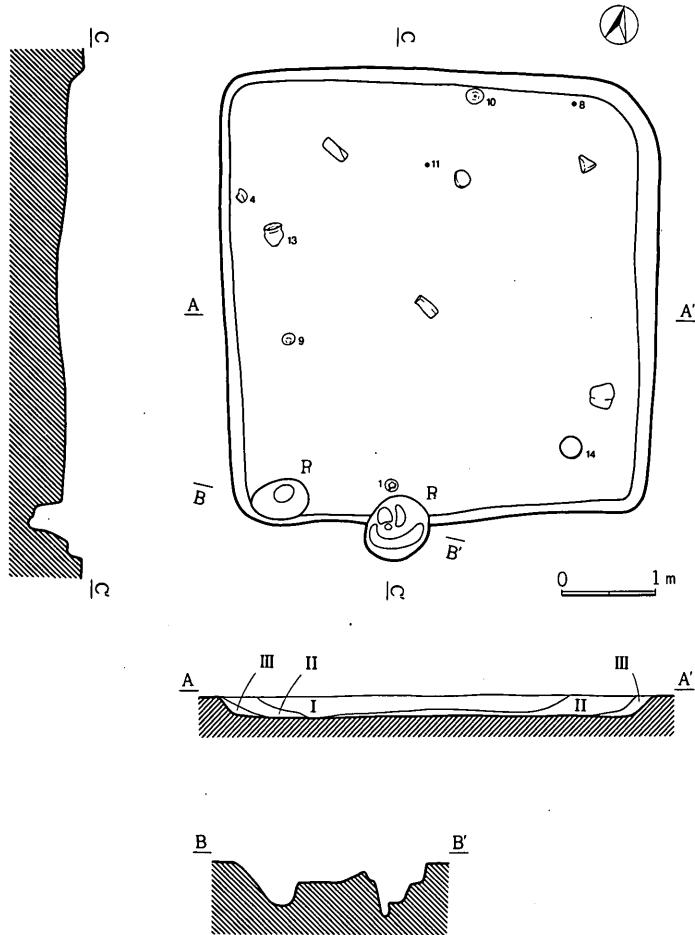
H-60号住居址は、第Ⅱ区シー24グリッドにおいて検出された。本住居址は、D-16・D-19号土壌と重複するが、一応これらより新しいものと捉えられた。

本住居址は、南北4.8m東西4.7mの隅丸方形を呈し、床面積18.7㎡を測り、南北軸方向はN-19°-Wを指す。壁高は15cm前後を測り、壁溝は認められない。ピットは、南西コーナーよりP<sub>1</sub>が、南壁中よりP<sub>2</sub>が検出された。P<sub>1</sub>は60×40cm深さ25cm、P<sub>2</sub>は75cm×65cm深さ45cmを測る。

遺物は、住居址の中央には分布せず壁際に寄って分布する傾向がみられた。図中にナンバーで示したのは遺存度の高い遺物である。1の礎はP<sub>2</sub>付近の床面より5cm程上から正常位で、9の埴は西壁寄りの床面上より正常位で、12の甕は西壁寄りの床面上より横倒しの状態で検出されている。この他、ナンバーで示さなかった遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

住居址覆土は3層に分層された。I層が黒色土層、II層が黒褐色土層、III層が茶褐色土層であった。

1 竪穴住居址



第180図 H-60号住居址実測図 (1:80)

なお、本住居址においては炉は認められなかった。

遺物 第181・182図

本住居址より検出された遺物は、器種的には埴・手捏・坏・器台・甗・甕の各種がみられた。

1は埴で、本住居址出土の唯一の須恵器である。ラップ状に開く口縁部とややつぶれた球状の胴部からなるもので、頸部には16単位の波状文が施こされている。焼成良好な優品である。

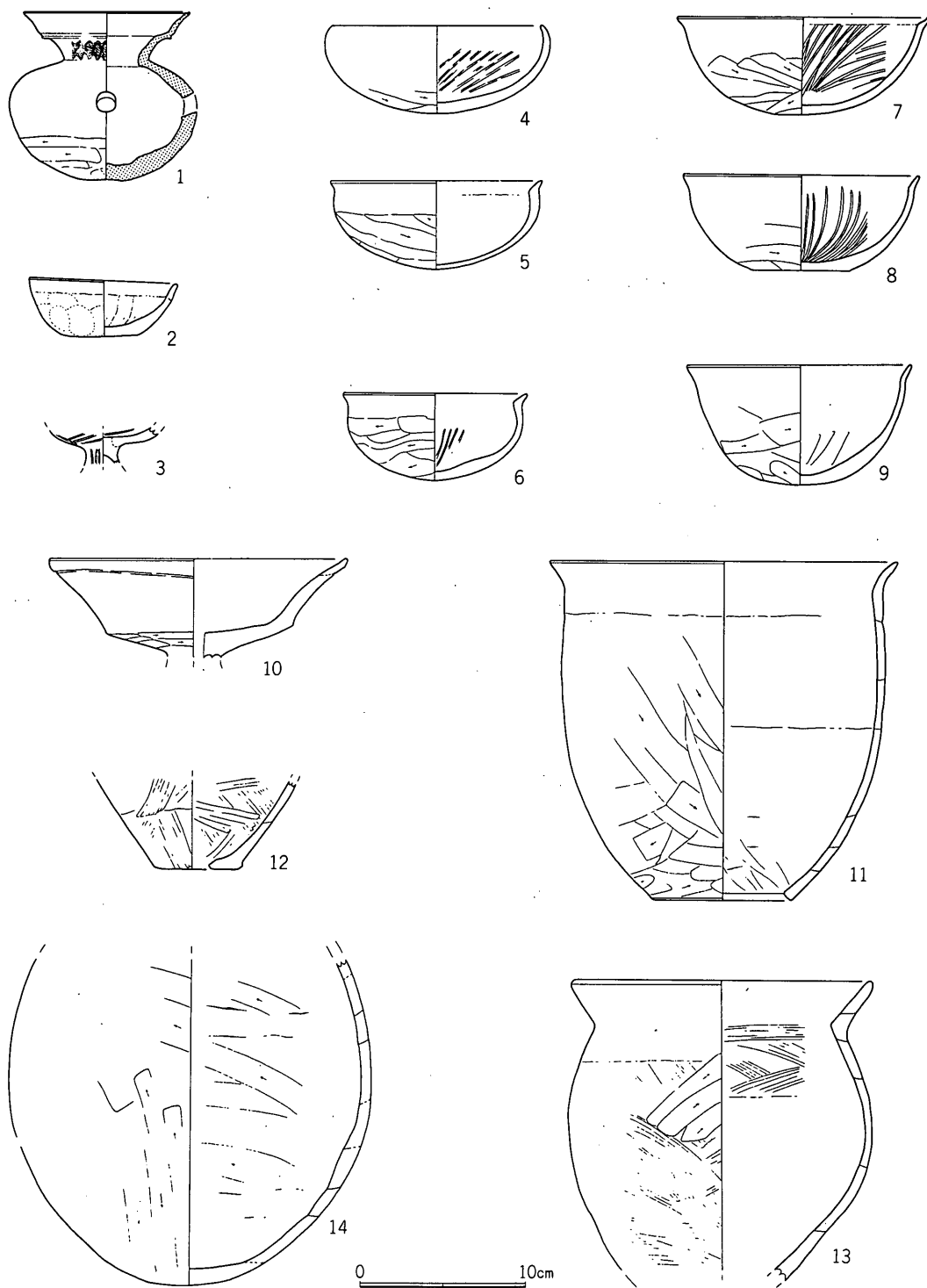
2・3は所謂手捏土器で、2は坏形態、3は高坏形態を呈する小形品である。

4～8は土師器坏で、4は素口縁で体部から口唇部にかけて内湾するもので、5～8は短く外反する口縁部をもつものである。6～8には内面に放射状の暗文が施こされている。また、9の埴もやや深み加わりますが大方のプロポーシオンとしては5～8の坏と同様なものと考えられる。

10は、脚部を失うものの高坏と同様なプロポーシオンを呈すると考えられるもので、内面の焼

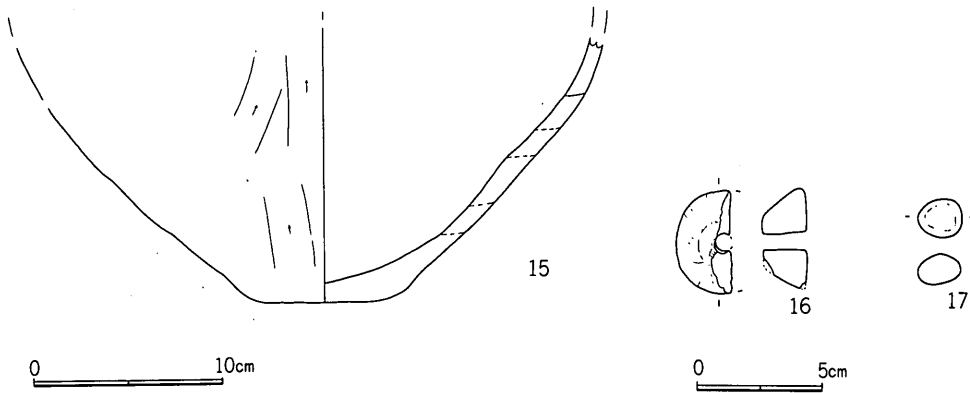


IV 遺構と遺物



第181図 H-60号住居址出土遺物 (1:4)

1 竪穴住居址



第182図 H-60号住居址出土遺物 (15=1:4, 16・17=1:3)

成前の穿孔から機種的には器台と考えられる。

甑は、いずれも単孔のものであるが、その径の大きい11と小さい12とが認められた。

第81表 H-60号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
16	紡錘車	滑石	4.1	(2.2)	1.8	(20)	
17	玉石	滑石	1.5	1.7	1.2	5	

土師器甕は、13~15を図示した。13は底部を除きほぼ完存するもので、「く」の字に外反する口縁部とややふくらんだ胴部をみせている。また、14は球胴で丸底の、15は平底の甕である。

石器では、16の滑石の紡錘車の半欠品が検出されている。H-53・54・55等でみた軽石の紡錘車と比べると小形品といえる。

石製品では、17の玉石がある。おそらく祭祀的・装飾的な意味をもつものであろう。

時期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第I期に位置付けられよう。

(61) H-61号住居址

遺構 第183・184図

H-61号住居址は、第II区シ-25グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北8.1m東西8.3mを測る隅丸方形の大形住居址で、床面積64.7㎡を測り、南北軸はN-7°-Wを指す。壁高は20cm前後を測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個がそれぞれ4ヶ所の各コーナーに配されていた。P<sub>1</sub>は90cm×85cm深さ30cm、P<sub>2</sub>は85cm×60cm深さ20cm、P<sub>3</sub>は75cm×60cm深さ30cm、P<sub>4</sub>は40×35cm深さ20cmを測った。また、柱穴かどうかかわからないが、南東コーナー寄りからP<sub>5</sub>が検出された。P<sub>5</sub>は55cm×50cm深さ20cmを測る。

## IV 遺構と遺物

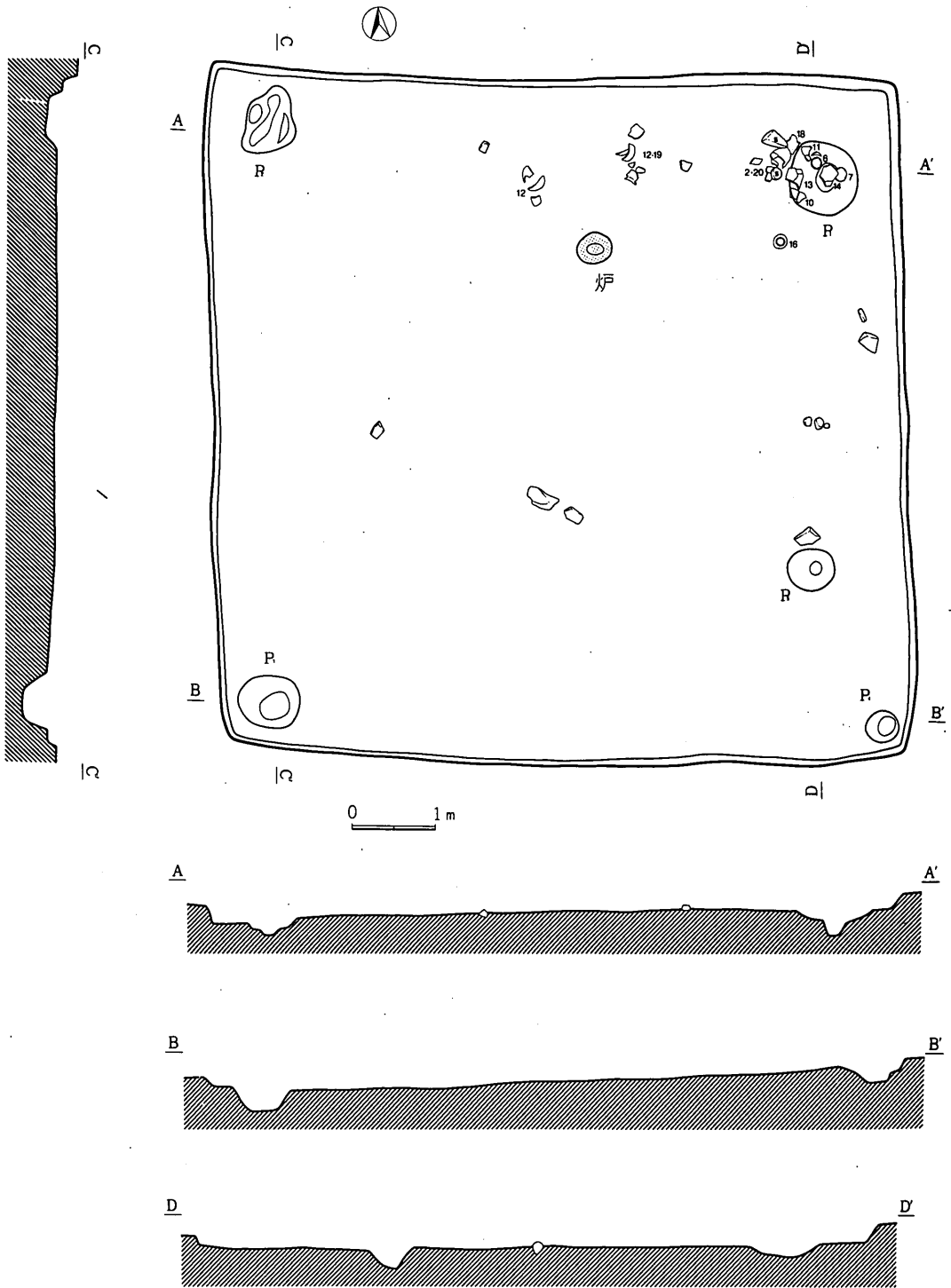
第82表 H-60号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (完)	腺 (須)	9.9 9.8 —	口縁部はラップ状にひらきその中央部にあまりシャープでない稜を有する。底部はやや偏平な丸底。胴部は中央よりやや上に最大径をもち円孔が外側より穿たれる。	外面 内面	胴下半部は弱い横位のヘラケズリ。上半部はヨコナデ。頸部には16単位の波状文が施される。口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	胎土は精選され灰褐色(7.5 YR 5/2)を呈する。内外面に自然釉が施す。
2 (回)	手捏	(9.0) 3.4 (4.5)	小形で底部は平底を呈する。器面には指頭による若干の凹凸あり環形態	外面 内面	底部～体部ナデ。口唇部ヨコナデ 粘土塊より直接成形	胎土は砂粒を多く含む橙色(7.5 YR 6/6)焼成は良好でない。
3 (回)	手捏	— —	高環形態	外面 内面	体部横位のヘラミガキ 脚部縦位のヘラミガキ ヘラミガキ	胎土は砂粒を含み灰黄褐色(10 YR 6/2)
4 (回)	坏	<12.8> 5.2 —	体部は口縁にかけて内湾し、底部は丸底を呈する。	外面 内面	口縁部ヨコナデ 体部から底部はヘラケズリ 放射状の暗文	胎土は砂粒を多く含む橙色(5 YR 6/8)焼成は良好でなく全体に風化が著しい。
5 (回)	坏	12.8 5.3 —	口縁部はやや内湾したのち、口唇部にかけて短く外反する。底部平底。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、体部～底部にかけてヘラケズリ ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含む赤褐色(2.5 YR 4/8)
6 (回)	坏	<11.2> 5.3 —	体部はやや内湾した後、口唇部が短く外反する。底部丸底。小形な器形。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、体部～底部にかけてヘラケズリ ヨコナデの後、放射状の暗文が施こされる。	胎土は精選されず明赤褐色を呈する(2.5 YR 5/6)
7 (完)	坏	15.2 5.8 —	体部は丸味をおびて外反し、口唇部で短く強く外反する。口縁部内面は僅かにかえりをもつ。底部丸底。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、体部～底部にかけてヘラケズリ 放射状の暗文が施こされる。	胎土は砂粒を含み橙色(5 YR 6/8)
8 (回)	坏	<14.2> 5.7 (6.0)	口縁部は丸味をおびてやや内湾した後、口唇部で短く外反する。底部平底。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、体部下半ヘラケズリ、底部ヘラケズリ 口唇部ヨコナデ、体部放射状の暗文が施こされる。	胎土は砂粒を含み明赤褐色(5 YR 6/8)
9 (完)	壺	13.6 7.1 —	体部は丸味をおびて外反し、口唇部で短くやや強く外反する。ほぼ完形。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、体部下半～底部にかけてヘラケズリ 口唇部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい橙色を呈する(7.5 YR 7/4)
10 (完)	器台	17.9 — —	坏部は下半に稜をもって外反し、口唇部外面には一条の沈線が認められる。坏部中央には焼成前の穿孔がありここにホゾはされていない。これにより器台と考えたい。	外面 内面	坏底部ヘラケズリ。体部ヨコナデ ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含む赤褐色(5 YR 5/8)を呈する。
11 (回)	甌	(21.0) 20.2 (8.4)	口縁部は外反し、胴部上半は直線的に胴部下半にかけてややすぼまる器形。底部は径の大きい単孔。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ。 胴部刷毛目状調整、最下部ヘラナデ	胎土は砂粒を含み明赤褐色(5 YR 5/6)
12 (完)	甌	— — 5.8	底部は平底で、径の小さい単孔が穿たれる。	外面 内面	胴部下半、あらい刷毛目状調整 刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含む褐色(7.5 YR 4/6)を呈する
13 (完)	甌	18.2 — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はややふくらみをもつ。底部は欠損する。	外面 内面	口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目状調整。 口縁部ヨコナデ。胴最上部刷毛目状調整。 胴下半部ヘラケズリ	胎土は砂粒を多く含む明赤褐色を呈する。(2.5 YR 5/6)
14 (完)	甌	— — —	胴部は球状を呈し、底部は僅かに偏平となる丸底。	外面 内面	胴上半部斜位のヘラケズリ 胴下半部縦位のヘラケズリ 横～斜位のヘラケズリ	胎土は砂粒等を多く含む精選されないにぶい褐色を呈する(7.5 YR 5/4)
15 (完)	甌	— — 9.0	底部は径の小さい平底を呈し、胴下半部は大きく外反する。	外面 内面	胴下半部斜～縦位のヘラケズリ ヨコナデ	胎土は砂粒を含みにぶい褐色(7.5 YR 6/4)内面は剥落がげしい。

覆土は、2層に分層された。I層が黒色土層、II層が黒褐色土層で、基本的にはH-60と同様な堆積であった。

遺物は、住居址I区の北半分集中して分布した。わけても炉の北側とP<sub>1</sub>の内外からの出土が目立った。図中にナンバーで示したのは、遺存率の高い個体である。まず、炉の北側からは12の壺19の甌の破片がまとまって出土し、P<sub>1</sub>の南からは壺16の口縁部が出土している。P<sub>1</sub>中からその

1 竖穴住居址



第183图 H-61号住居址实测图 (1:80)

西外にかけては、2・7・10・11・13・14・18・20の各個体の破片が一括出土している（図版参照）。

炉は、北壁寄りの中央に存在した。43cm×36cm深さ10cmを測る地床炉で、赤褐色の焼土(I層)の堆積がみられた。

#### 遺物 第185・186・187図

本住居址からは、比較的大量に遺物が検出され、さまざまな器種の土器がみられた。

1・2は、須恵器の甕である。口縁部はラッパ状に開き、胴部はやや潰れた球体を呈する。大観するなら、波状文が施されない事を除けばH-60の甕と同様な形態を呈するものとみなし得る。双方とも均一な器形を呈し、焼成良好な優品といえよう。

土師器坏には、体部が丸味をおびて内湾し素口縁の3と、体部が丸味をおび口縁部が短く外反する4・5がある。

6～9は土師器碗で、体部が丸味をおび口縁部が短く外反するものである。ただし、9については17と同様な小形甕の範疇で理解したほうがよいかもしれない。

10は、高坏と同様なプロポーションを呈するが、坏部の底に焼成前の穿孔があり、器台としての機能を果たしていたことが窺える。その坏部体の中央には鈍い稜が巡っている。

11は、土師器の高坏である。10とほぼ同様なプロポーションを呈しているが、坏体部の中央に稜は巡らない。

12は土師器壺である。胴部は球状を呈し、その下部において鈍い変換点をもって底部に至るものである。また、13・14は、結合はみななかったが同一個体の胴部上半と下半のそれぞれと考えられる。胴部全体の器形は、やや下ぶくれの球状を呈している。16も、壺の口縁部と考えられるがその口縁部の中央に鈍い稜が巡る点他と異なっている。

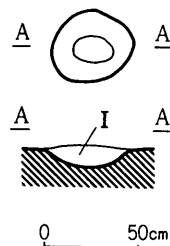
17～19は、土師器の小形丸底甕である。わけでも、17は、小形品である。また、18の口縁部には16と同様退化した稜が巡っている。なお、19の底部付近には、須恵器にみられる叩き目状の調整痕が残っており興味深い。

20は、土師器甕で、内外面には刷毛目状調整が残っている。焼成はあまり良好でない。この他21～23も甕の胴下半部以下である。

石製品としては、24～26が検出された。

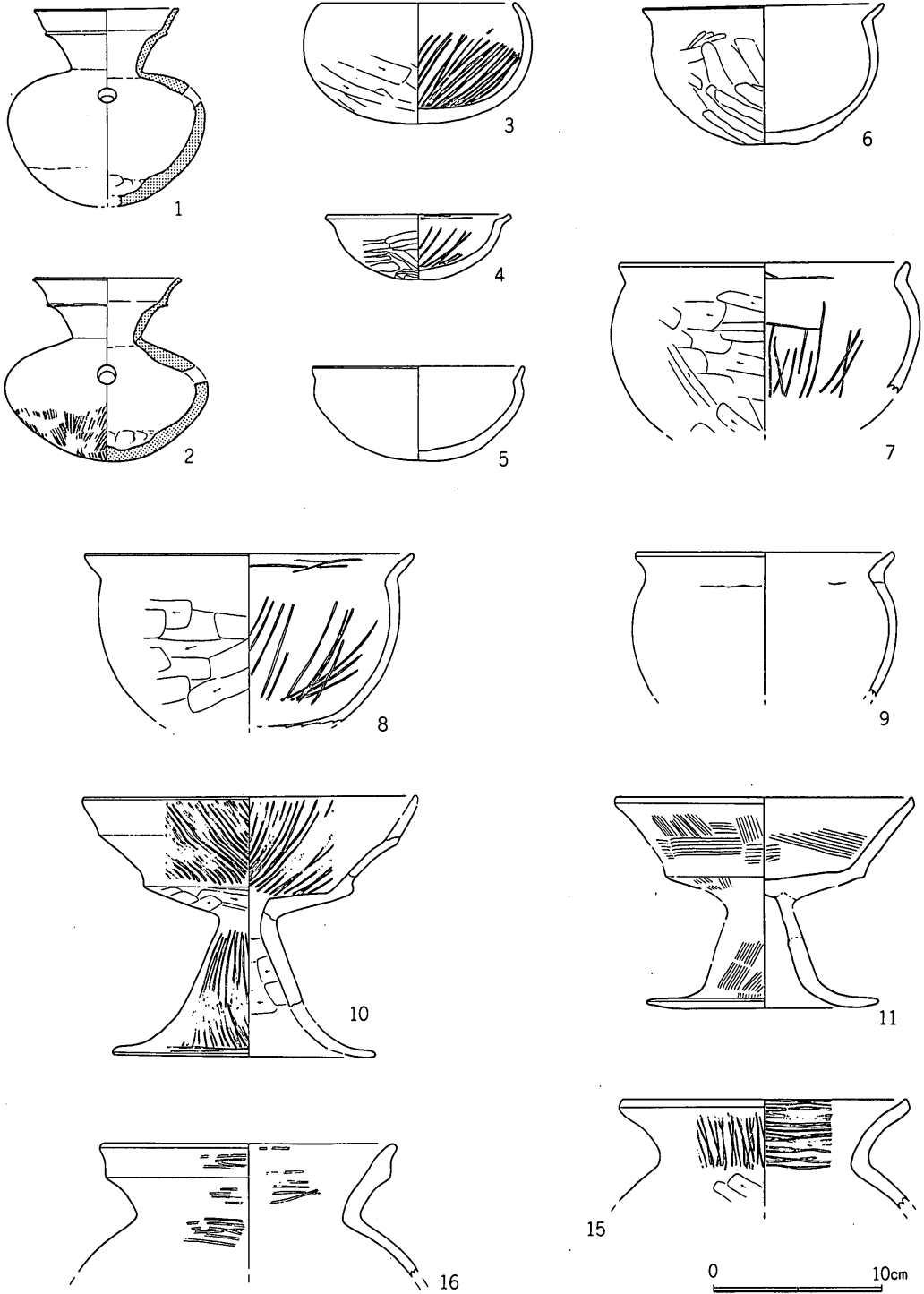
24・25は、滑石の有孔円盤である。24は円形・25は楕円形を呈し、相対する部分に孔が穿たれている。双方の表裏両面には、研磨時の線状痕が残る。

26は、粘板岩が扁平に研磨された石製品である。一端を欠損するが、あるいは有孔円盤の未成

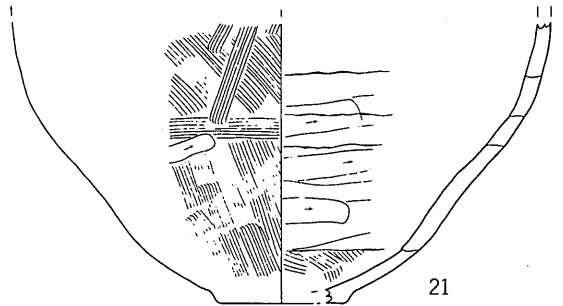
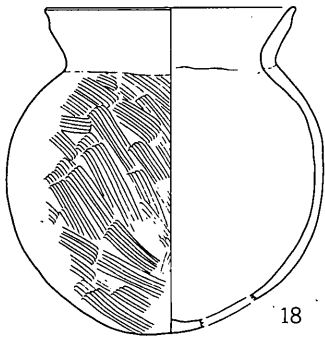
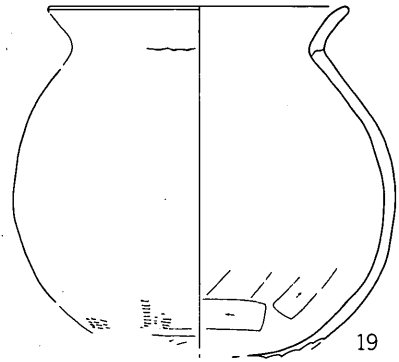
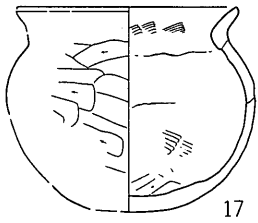
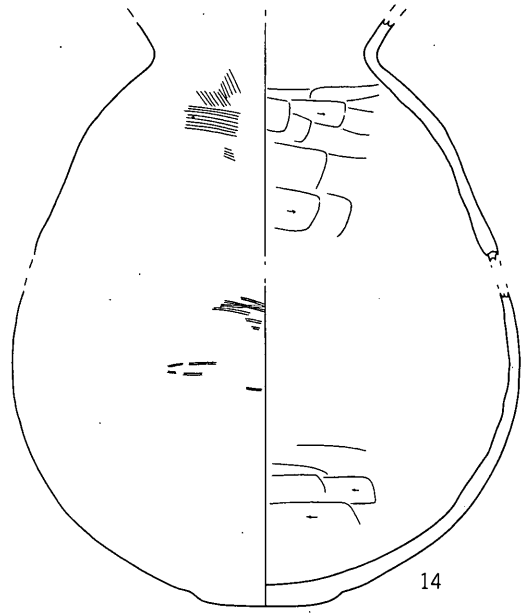
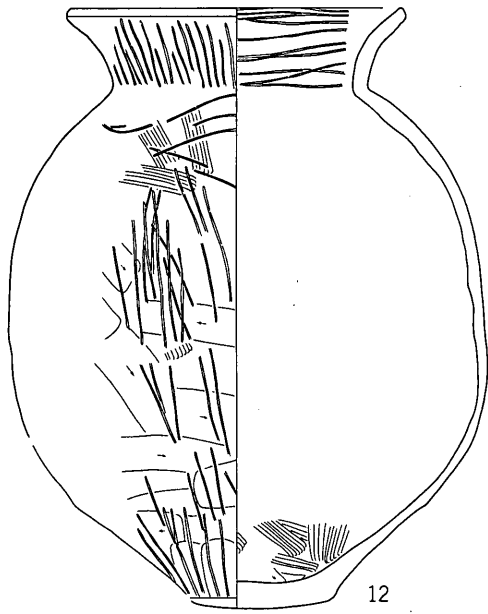


第184図 H-61号住居址炉 (1:40)

1 竖穴住居址



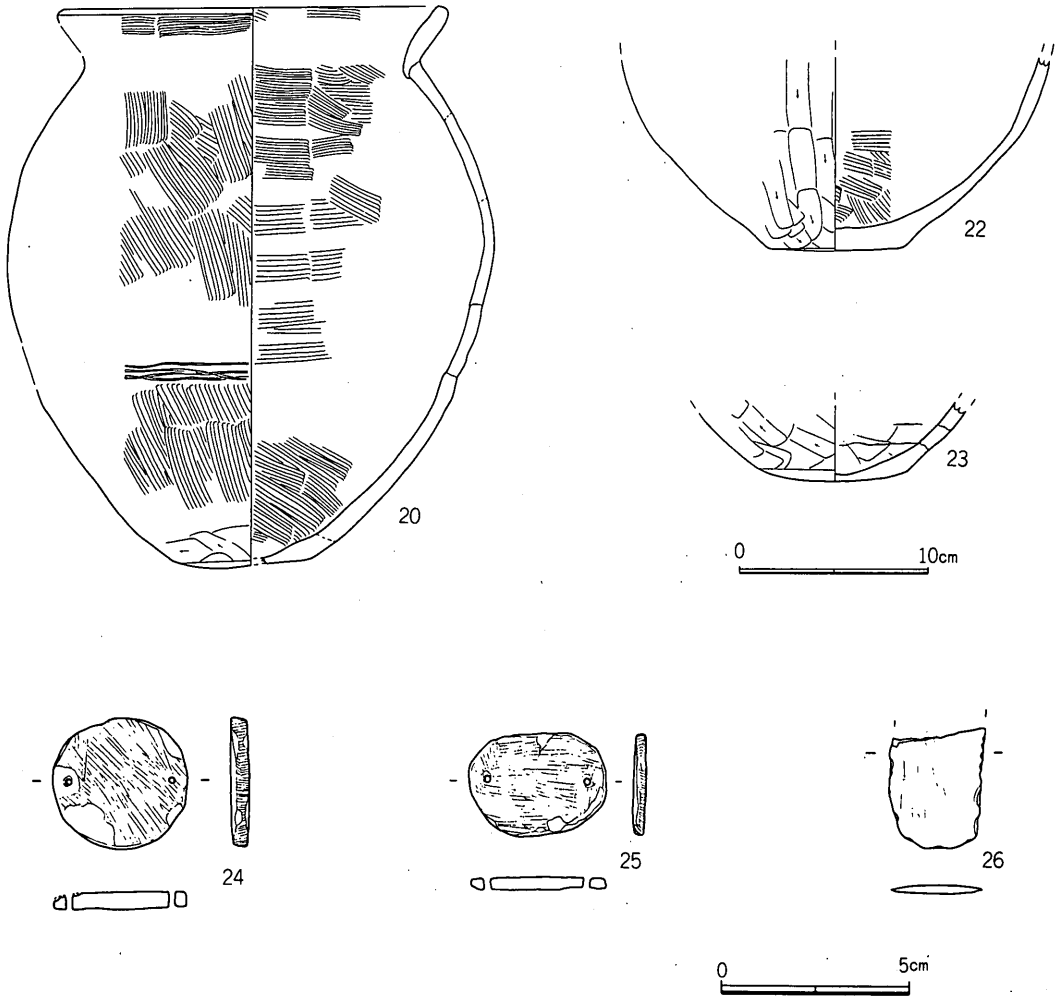
第185图 H-61号住居址出土遗物 (1:4)



0 10cm

第186図 H-61号住居址出土遺物 (1:4)

1 竪穴住居址



第187図 H-61号住居址出土遺物 (20~23 = 1 : 4, 24~26 = 1 : 2)

品とも考えられる。

時期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第I期に位置付けられよう。

第83表 H-61号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
24	有孔円盤	滑石	3.4	3.5	0.5	1.0	
25	有孔円盤	滑石	2.7	3.6	0.4	6	
26	不明	粘板岩	(3.0)	2.5	0.2	3	有孔円盤未成品?



## IV 遺構と遺物

第84表 H-61号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	碗 (須)	<8.6> <11.5> —	口縁部はラップ状に開き、その中央には鋭い稜がめぐる。胴部は球状を呈し、その最大径はやや上方にあり肩のはった形状となる。重みの少ない均一な器形。	外面 ヨコナデ、胴部上半に自然釉が付着する。 内面 ヨコナデ、口縁部に自然釉が付着する。	胎土は精選され褐色を呈する。(7.5 YR 4/1) 焼成良好
2 (完)	碗 (須)	(8.8) 10.6 —	口縁部はラップ状に開き、その中央には稜がめぐる。胴部はつぶれた形状を呈し、その中央にその最大径がくる。重みの少ない均一な器形	外面 胴部上半～口縁部にかけては横ナデがなされ自然彩が付着する。 内面 ヨコナデ、口縁部に自然釉が付着する。	胎土は若干の白色砂粒を含むが精選され、灰色(N5/0)焼成良好
3 (完)	坏	11.5 7.1 —	体部は丸味をおびて内湾し、底部はやや扁平な丸底。	外面 口縁部ヨコナデ、胴下半～底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデの後、放射状暗文が施される。	胎土は砂粒を多く含む明赤褐色(5 YR 5/6)焼成は良好でない。
4 (回)	坏	<10.7> 3.8 —	体部は丸味をおびて外反し、口唇部は短く外反する。底部丸底。	外面 口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラミガキ 内面 ヨコナデの後、放射状の暗文が施される。	胎土は砂粒を含み赤褐色(2.5 YR 4/8) 焼成は良好でなくもろい。
5 (完)	坏	12.5 5.5 —	体部は丸味をおびて内湾し、口唇部で短く外反する。	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含む赤褐色(2.5 YR 4/6)を呈する。
6 (完)	碗	14.3 8.1 —	体部は丸味をおびて内湾し、口唇部は短く外反する。底部丸底。完形品	外面 口唇部ヨコナデ、胴部～底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含む明赤褐色(5 YR 5/8)を呈する。
7 (完)	碗	17.2 — —	体部は丸味をおびて内湾し、口唇部は短く外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、体部には暗文が施される。	胎土は砂粒を多く含む明赤褐色(5 YR 5/8)を呈する。
8 (回)	碗	<19.5> — —	体部は丸味をおび、口縁部で外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデの後、放射状暗文が施される。	胎土は砂粒を多く含む褐色を呈する。(10 YR 6/1)
9 (回)	碗	<15.3> — —	体部はややふくらみ、口縁部で短く外反する。あるいは17と同様に小形瓿と考えたほうがよいかもかもしれない。	外面 口縁部ヨコナデ。体部調整不明 内面 口縁部および体部ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含むにぶい褐色を呈する。(7.5 YR 5/3)
10 (完)	器 台	(19.9) 15.3 15.6	坏部は2回の稜をもって外反し、脚部はラップ状にひろく。坏部底には焼成前の穿孔があり機能的には器台となるか。	外面 坏部体部はヘラミガキ、坏部底はヘラケズリ。脚部はヘラミガキ。 内面 坏部ヘラミガキ、脚部横位のヘラケズリ	胎土は砂粒を含み明赤褐色(5 YR 5/8)を呈する。
11 (完)	高 坏	17.7 12.4 13.8	坏部は一回の稜をもって外反し、脚部はラップ状に広がる。	外面 坏部・脚部ともに刷毛目状調整 内面 坏部口唇ヨコナデ 坏部口唇ヨコナデ。体部刷毛目状調整 脚部ナデ	胎土はにぶい黄褐色を呈する。
12 (完)	壺	18.0 31.4 7.6	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状にふくらみ、下半で僅かに変換点をもって逆「八」の字状にすばまり、平底の底部に至る。	外面 胴部はヘラケズリの後、若干の刷毛目状調整とヘラミガキ。口縁部は縦方向のヘラミガキ 内面 口縁部横位のヘラミガキ。胴部ヘラナデ。底部若干の刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含む明赤褐色(5 YR 5/6)
13 (回)	壺	— — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 全体に剥落が激しいが、僅かに刷毛目状調整が認められる。 内面 胴部ヘラケズリ	胎土は砂粒を多量に含む精選されず、にぶい褐色(7.5 YR 6/4) 14と同一個体か?
14 (回)	壺	— — 7.0	胴部は下ぶくれの球状を呈し、底部平底。	外面 全体に剥落が激しいが、胴部に僅かにヘラミガキが認められる。 内面 ヘラケズリ	胎土は砂粒を多量に含む精選されず、にぶい褐色(7.5 YR 6/4) 13と同一個体か?
15 (回)	壺	(17.2) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部縦位のヘラミガキ 内面 口縁部横位のヘラミガキ	胎土砂粒を含み明赤褐色(5 YR 5/6)
16 (回)	壺	17.6 — —	口縁部は中央に稜を有し外反する。	外面 口縁部は剥落が激しいが、僅かに横のヘラミガキが認められる。 内面 口縁部には僅かに横方向のヘラミガキが認められる。	胎土は砂粒を多く含むにぶい黄褐色を呈する。(10 YR 6/3)
17 (完)	甗	14.3 8.1 —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。底部丸底の小形の器形。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ。胴部と口縁部は僅かに刷毛目状調整が認められる。	胎土は砂粒を多く含む明赤褐色(2.5 YR 5/6)
18 (完)	甗	13.3 17.2 —	口縁部は「く」の字状に外反し、その中央部よりやや上方に鋭い稜を有する。胴部は球状を呈し、丸底の底部に至る。小形の器形。	外面 口縁部ヨコナデ。胴部は顕著な刷毛目状調整がなされる。 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は比較的精選されにぶい黄褐色を呈する。(10 YR 4/3)
19 (完)	甗	<15.9> — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈し、やや丸味をおびた平底に至る。小形の器形。	外面 口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。 内面 胴部下半には叩き目状の調整痕あり。口縁部ヨコナデ。胴上半部ヘラナデ。胴下半部ヘラケズリ。	胎土は砂粒を含み褐色(2.5 YR 6/6)を呈する。

1 竪穴住居址

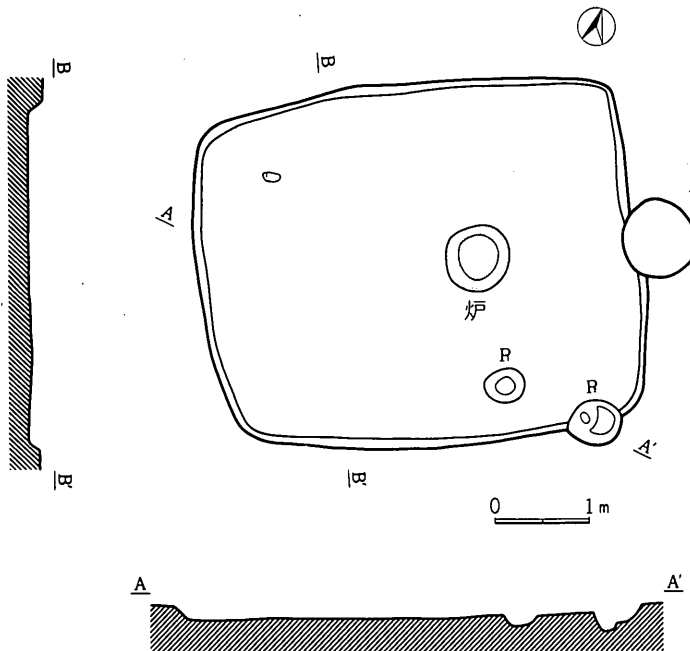
20 (完)	壘	20.7 29.3 7.2	口縁は「く」の字状に外反し、胴部はやや細長くふくらんだ形状を呈する。 底部平底。	外面 口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目状調整。 内面 胴部刷毛目状調整 口縁部刷毛目状調整の後、ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(5 YR 5/6) 胴部には輪紋が顕著に残る。
21 (回)	壘	- - 7.0	胴下半は逆「八」の字状にすぼまり、平底の底部に至る。	外面 胴下半部は全体的に刷毛目状調整がなされる。 内面 胴下半部横位のヘラケズリ。 底部若干の刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含み明黄褐色(10YR 6/6)を呈する。
22 (回)	壘	- - (7.1)	底部平底。	外面 胴下半部縦位のヘラミガキ。底部ヘラケズリ。 内面 刷毛目状調整	胎土は砂粒を含み橙色(5 YR 6/6)を呈する。
24 (完)	壘	- - 7.9	底部はやや丸味をおひた平底。	外面 胴下半部および底部ヘラケズリ。 内面 ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色(5 YR 5/3)

(62) H-62号住居址

遺物 第188・189図

H-62号住居址は、第II区ス-24グリッドにおいて検出された。その東壁はピットに切られ、またD-15号土壌を切って存在する。

本住居址は、南北3.8m東西4.7mの隅丸方形を呈し、南北軸の方向はN-23°-Wを指し、床面積15.3m<sup>2</sup>を測る。壁高は10~15cmを測り、壁溝は認められない。ピットは、南東コーナー寄りに



第188図 H-62号住居址実測図 (1:80)

IV 遺構と遺物

P<sub>1</sub>が南東コーナー壁中にP<sub>2</sub>が検出されたが、柱穴かどうかはわからない。P<sub>1</sub>は45cm×35cm深さ10cm、P<sub>2</sub>は55cm×48cm深さ20cmを測る。

覆土はI層のみで、小粒パミスを含む黒色土層であった。遺物はいずれも覆土中より出土している。

炉は、住居中央よりやや東寄りに位置する。70cm×70cm深さ10cmのほぼ円形を呈する地床炉で、その覆土は3層に分層された。I層は焼土を含む黒褐色土層、II層は赤褐色の焼土層、III層は焼土を含まない黄褐色土層であった。

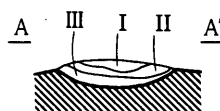
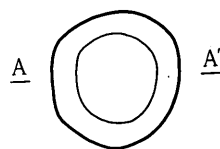
遺物 第190図

本住居址より検出された土器は、いずれも土師器のみである。

1は、坏形態を呈する小形の手捏土器である。

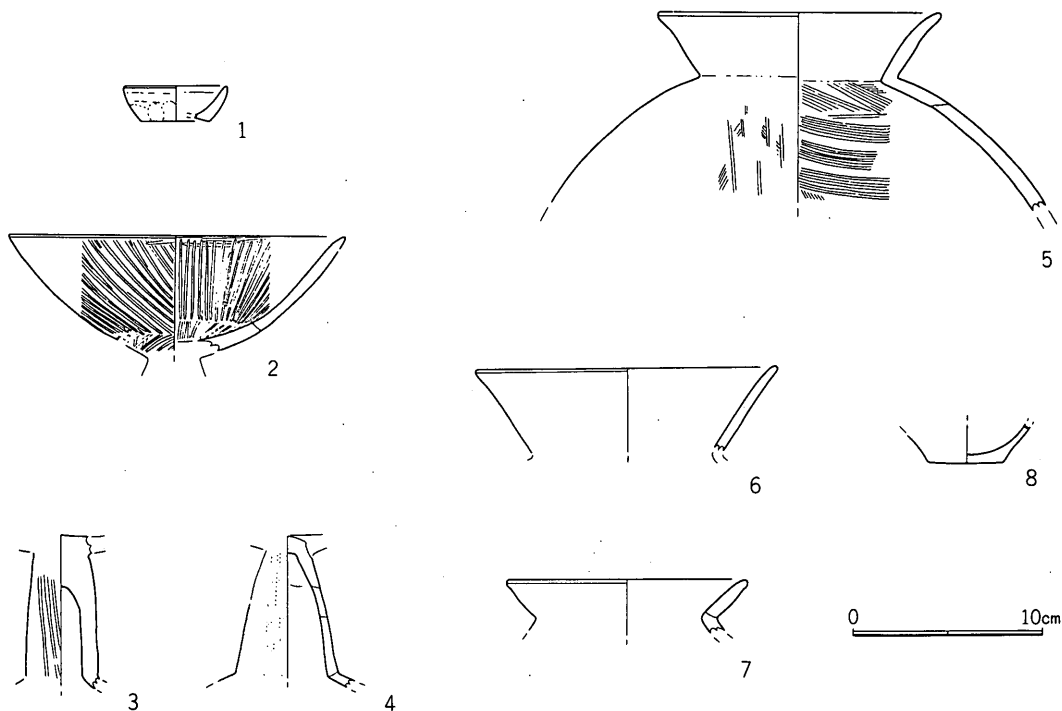
2は、内外面にミガキのなされた高坏の坏部である。3は、円筒状を呈する高坏の脚部で、4も高坏脚部であるがその外面には赤色塗彩がなされている。

5～7は、土師器壺の頸部～口縁部である。



0 50cm

第189図 H-62号住居址炉 (1:40)



第190図 H-62号住居址出土遺物 (1:4)

第85表 H-62号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	手 捏	5.5 1.8 3.6	体部は外反し、底部平底の坏形態を呈する。	外面 口唇部ヨコナデ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を多く 含む明赤褐色(5 YR 5/8)を呈す る。 焼成は良好でない。 胎土は比較的精選 されにぶい黄褐色 を呈する(10YR 7/4)。 焼成良好。
2 (完)	高 坏	17.8 — —	坏部はややふくらんで外反する。 脚部を欠損する。	外面 斜位のヘラミガキ 内面 縦位のヘラミガキ	胎土は比較的精選 されにぶい黄褐色 を呈する(10YR 7/4)。 焼成良好。
3 (完)	高 坏	— — —	脚部は筒状を呈する。	外面 縦位のヘラミガキ 内面 ナデ	胎土は砂粒を含 みにぶい黄褐色 を呈する。 (10YR 7/4)
4 (完)	高 坏	— — —	脚部は、円錐状に下降した後、変換点も って強く外反する。	外面 縦位のヘラミガキの後、赤色塗彩が施こされ る。 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含 みにぶい黄褐色 を呈する。 (10YR 6/4)
5 (回)	壺	(15.1) — —	口縁部は「く」の字状に強く外反する。 胴部は球状を呈するものと思われる。	外面 口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目状調整の後、ヘ ラミガキ。 内面 口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目状調整	胎土は砂粒を含 み明赤褐色を呈 する。 (5YR 5/6)
6 (回)	壺	(16.2) — —	口縁部はほぼ直線的に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土は砂粒を含 み褐色を呈する。 (7.5YR 6/6)
7 (回)	壺	(12.9) — —	口縁部の外反する小形の器形を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土は砂粒を含 み明黄褐色(10 YR 7/6)を呈する。
8 (完)		— — 3.0	底部平底の小形な器形を呈する。	外面 磨減が激しく調整不明 内面 磨減が激しく調整不明	胎土は砂粒を含 み明黄褐色(10 YR 7/6)を呈する。

この他、住居址内からは土師器壺・甕の破片が多量に出土している。

### 時 期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第I期に位置付けられよう。

## (63) H-63号住居址

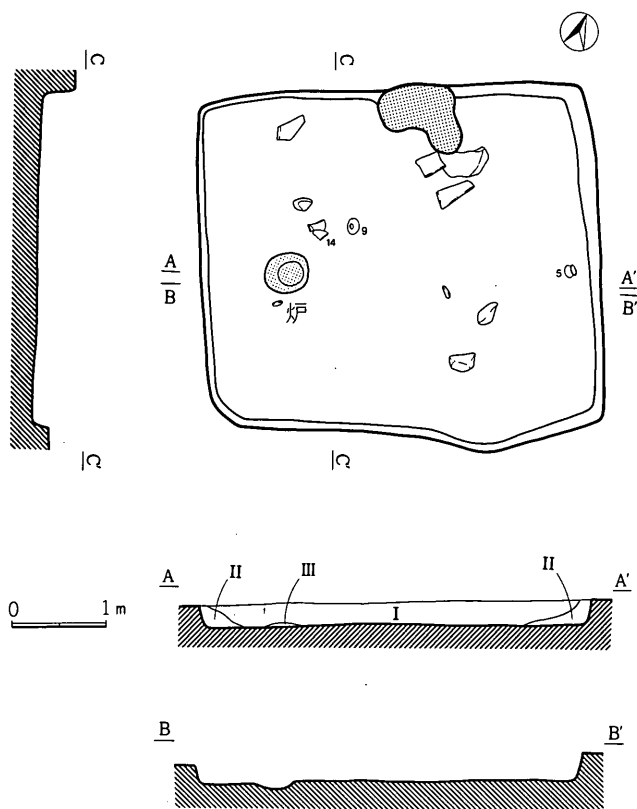
遺 構 第191・192・193図

H-63号住居址は、第II区ス-25グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.85m東西4.25mを測り、南壁のやや歪んだ隅丸方形を呈し、床面積13.5㎡を測り、主軸方向はN-28°-Wを指す。壁高は20cm前後を測り、壁溝は認められない。また、柱穴等ピットは、まったく認められなかった。

遺物は、良好な状態で出土したのものには、東壁中央寄りに検出された5の塚と、炉の付近から検出された9の埴がある。また14の壺底部も炉の付近から検出された。8の手捏の鉢は、カマド中からの出土である。この他の遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

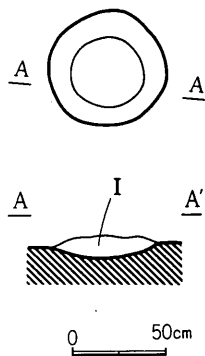
住居址覆土は、3層に分層された。I層が黒色土層、II層が黒褐色土層で、III層は炉上にみられる赤褐色の焼土層であった。



第191図 H-63号住居址実測図 (1:80)

本住居址においては、カマドと炉の両者がみられるのが非常に特異であった。カマドは北壁中央に存在し、炉は西壁寄りの住居中央に存在していた。

カマドは、すでにその一部を取り壊されていたが、両袖の一部と支脚が残っていた。その構材にはすべて偏平な安山岩礫を用いており、面取り軽石を多用する本遺跡の奈良・平安期のカマドとは異なり興味深い。さて、図のA-A'の断面をみると、東西両袖ともに偏平な安山岩礫が芯に据えられ、さらに粘土(III層)が貼られて袖部となっていることが窺える。これはB-B'の断面においてもそうであるが、ここでは円筒状の支脚石(b)かやや動いてしまった天井石(a)もみられる。また、C-C'の断面の礫二枚もカマド構材であるが、すでに抜き取られて東袖の手前に残置されたものであり、その手前の礫も同様なものであろう。カマド覆土は、2層に分層された。I層が焼土層である赤褐色土層、II層が若干の焼土を含む黒褐色土層であった。なお、カマド中からは、8の手捏



第192図 H-63号住居址炉 (1:40)

1 竪穴住居址

の鉢が検出されている。

炉は、48cm×42cm深さ8cmを測るもので、一面に赤褐色の焼土(I層)の堆積がみられた。

遺物 第194・195図

本住居址より検出された土器は、いずれも土師器ばかりである。

1は、坏形態を呈する手捏土器で、体部には一孔が穿たれている。

2・3は口縁部が短く外反する丸底の坏である。3には内面黒色研磨がなされている。4～6は小形の甕で、4には内面黒色研磨がなされている。7も、6と相似するところからとりあえず甕と分類したが、小形甕と理解したほうがよいかもしいない。

8は手捏の片口鉢で、内部体部には輪積み痕を顕著に残し、焼成は良好でない。

9・10の甕は、やや潰れた球状の胴部に外反する口縁部を見せるものである。

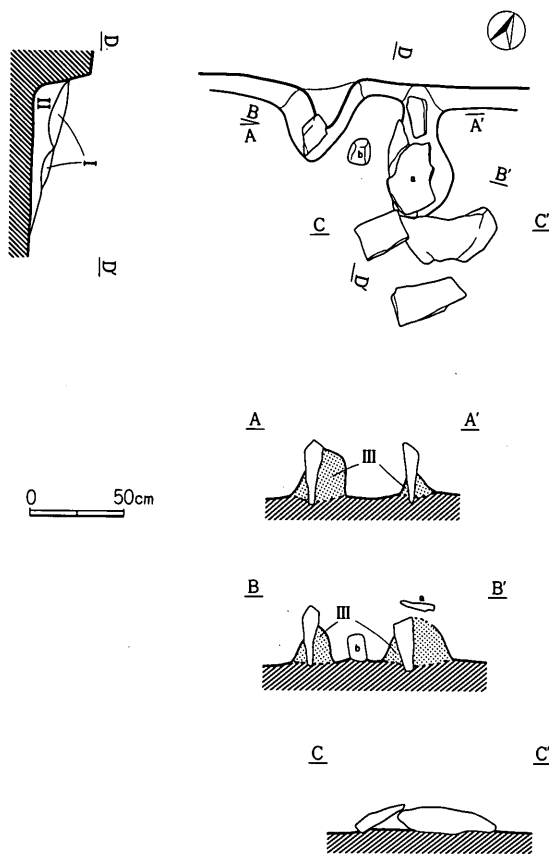
11・12は、短く直立する口縁部をみせる短頸壺である。また、13の壺は、底部と胴部上半以上が接合をみななかったが、胴部下半において変換点をもって底部に至るものと考えられる。

15は甕の胴下半以下で、上半部の形状は不明である。

石器は、敲石2点が検出されている。16は両端が敲打に供されたもので、全体に火熱を被っている。17は一端が敲打に供されている。双方とも河床礫が用いられたものである。

時期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第II期に位置付けられよう。

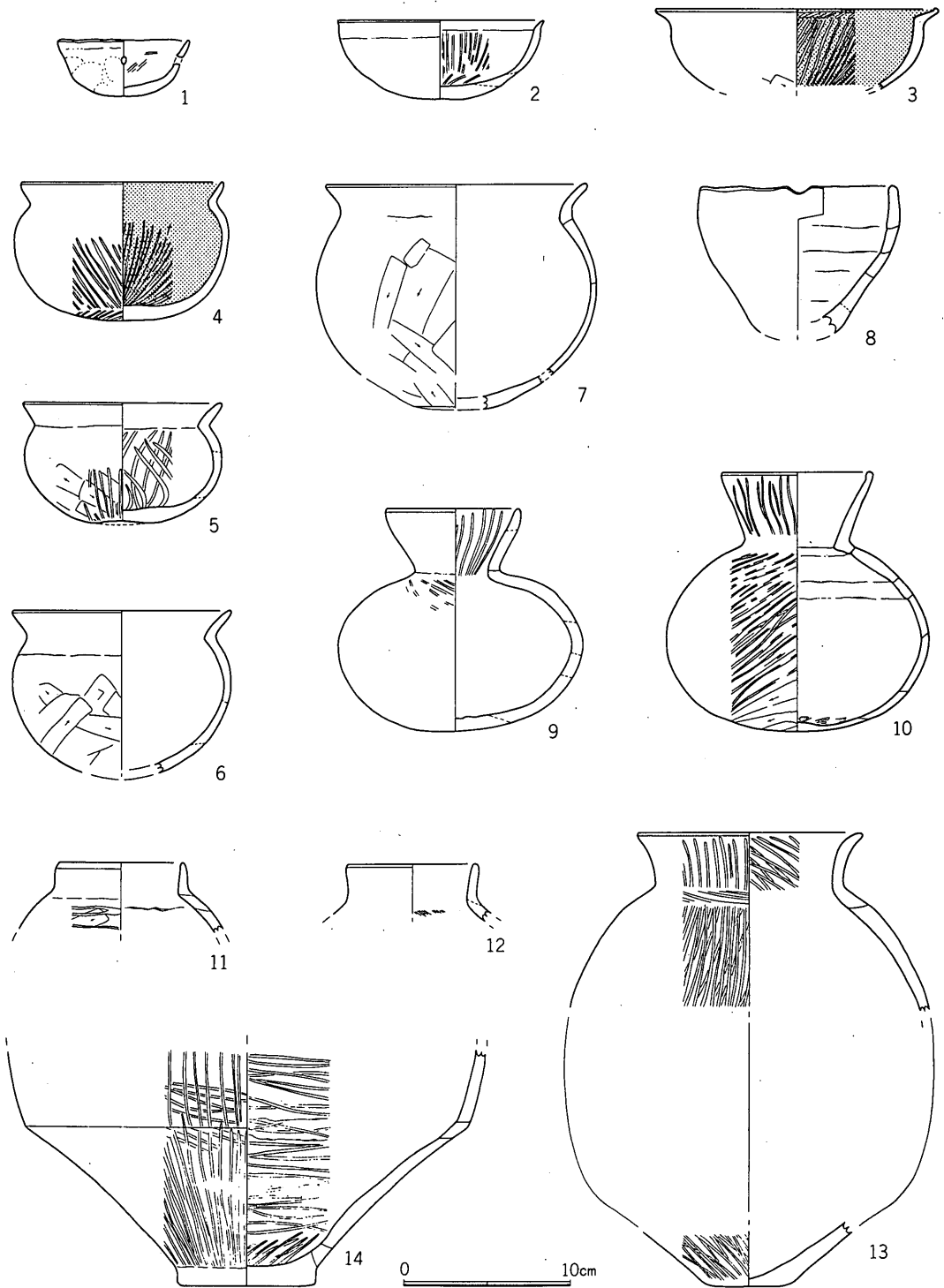


第193図 H-63号住居址カマド実測図(1:40)

第86表 H-63号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

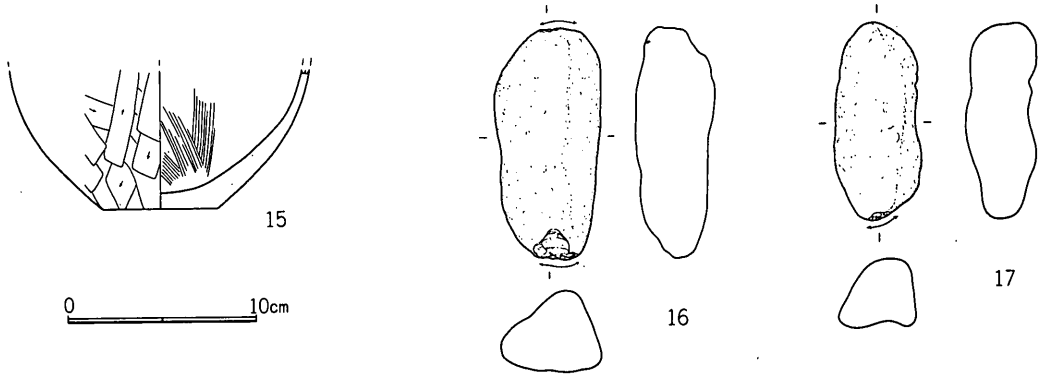
挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
16	敲石	安山岩	12.1	5.6	4.5	380	
17	敲石	安山岩	10.4	4.6	3.7	220	

IV 遺構と遺物



第194図 H-63号住居址出土遺物 (1:4)

1 堅穴住居址



第195図 H-63号住居址出土遺物 (1:4)

第87表 H-63号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (回)	手捏	<8.0> —	体部は外反し、底部は偏平な丸底の坏形態。体部に穿孔が一つあり。	外面 内面	口縁部ヨコナデ。体部ナデ 口縁部ヨコナデ。 底部および体部ヘラナデ。	胎土は暗灰黄色(2.5Y5/2)を呈し、焼成不良。
2 (完)	坏	12.4 4.7 —	体部は丸味をおびて外反し、口唇部に至って短くさらに外反する。底部平底。	外面 内面	体部ナデ。口唇部ヨコナデ。 口唇部ヨコナデ、体部ヘラナデ	胎土は精選され橙色(5YR6/6)を呈する。
3 (回)	坏	<17.0> —	体部は丸味をおびて外反し、口唇部に至って短くさらに外反、口唇部で僅かに立ち上がる。	外面 内面	体部上半~口唇部ヨコナデ 黑色研磨	胎土は砂粒を含み橙色を呈する(7.5YR6/6)
4 (完)	塊	12.2 8.2 —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はふくらむ。底部は偏平な丸底を呈する。	外面 内面	底部~体部下半ヘラミガキ 体部上半から口縁部ヨコナデ 体部内面黑色研磨。口縁部ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含み褐色を呈する(7.5YR4/3)
5 (完)	塊	12.0 7.2 —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はふくらむ。底部は偏平な丸底を呈する。完形	外面 内面	体部上半から口縁部はヨコナデ 体部下半から底部はヘラケズリの後若干のミガキ 体部ヘラミガキ(黑色研磨?) 口縁部ヨコナデ	胎土は砂粒を含み明赤褐色(5YR5/8)
6 (回)	壺	<13.2> —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。あるいは塊か。	外面 内面	体部ヘラケズリ。 頸部~口縁部ヨコナデ 全体にヨコナデ	胎土の一部は赤褐色(5YR4/8)を呈する。焼成はあまり良好でない
7 (回)	壺	15.8 <13.4> —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。底部は偏平な丸底。あるいは塊か。	外面 内面	体部ヘラケズリ 頸部~口縁部ヨコナデ 全体にヨコナデ	胎土は全体的に極暗赤褐色(5YR2/3)を呈する。焼成はあまり良好でない
8 (回)	鉢	11.8 —	逆「八」の字状の形態を呈する片口の鉢。底部は丸味をおびた平底を呈するものと思われる。手捏土器の範疇に入るものであろう。	外面 内面	風化が激しいが、おそらく全体にナデ。 ヨコナデ。輪積み痕をよく残す。	胎土は浅黄色(2.5Y7/3)を呈し、焼成はきわめて悪くもろい。
9 (完)	埴	8.2 13.3 —	体部はつぶれた球状を呈し、口縁部は若干外反しながら立ち上がる。底部は偏平な丸底。	外面 内面	口縁部ヨコナデ。胴部は風化が激しいがヘラミガキがなされるか。 口縁部ヨコナデの後、放射状暗文が施される。胴部ナデ?	胎土は砂粒を多く含みぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。
10 (回)	埴	<9.1> 15.4 —	体部はややつぶれた球状を呈し、口縁部は若干外反しながら立ち上がった後、口唇部が僅かに内側に突出する。底部は偏平な丸底。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、放射状の暗文を施す。 胴部ヘラミガキ。底部付近ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ。底部刷毛目状調整。	胎土は砂粒を多く含み橙色(5YR6/6)。焼成はあまり良好でない
11 (回)	短頸壺	<8.0> —	口縁部は短く直線的に立ち上がる。小形な器形。	外面 内面	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリの後、若干のミガキ 口縁部~胴上部ヨコナデ 輪積み痕が一部残る。	胎土は砂粒を多く含み浅黄褐色(10YR8/4)
12 (回)	短頸壺	<8.0> —	口縁部は短く直線的に立ち上がる。小形な器形。	外面 内面	口縁部ヨコナデ 口縁部ヨコナデ 胴部刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含み褐色(5YR6/6)
13 (回)	壺	<13.5> (5.0)	口縁部は逆「八」の字状に外反し、胴部はふくらむ。底部は径の小さい平底。	外面 内面	口縁部~胴部ヘラミガキ 口縁部ヘラミガキ、胴部ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(5YR5/8)



14 (回)	壺	— — (8.4)	底部より胴下半部にかけては逆「八」の字状を呈し、変換点をもって胴部上半に至る。底部平底。	外面 胴下半～底部ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	胎土は白色の砂粒を多く含み、にぶい赤褐色(5YR4/4)焼成はあまり良好でない。
15 (回)	甕	— — (6.2)	底部平底。	外面 胴下半部および底部ヘラケズリ 内面 刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含み浅黄橙色(10YR 8/4)

## (64) H-64号住居址

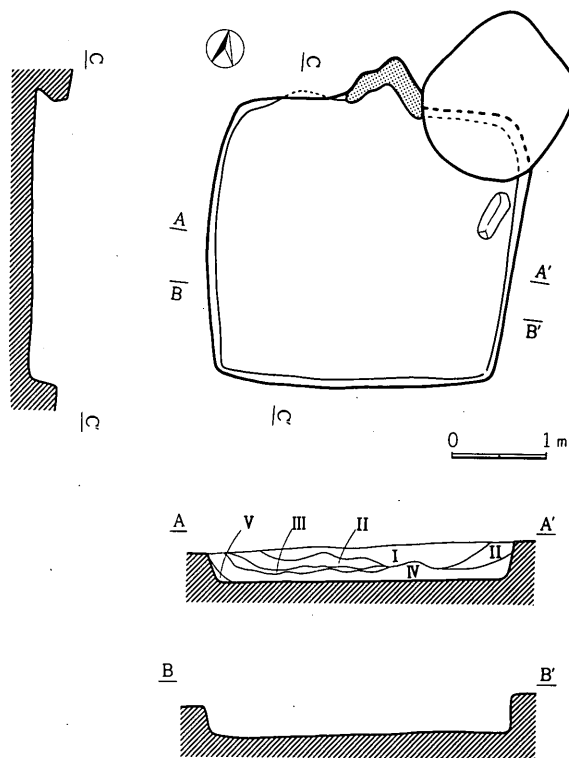
## 遺構 第196・197図

H-64号住居址は、第II区スー25グリッドにおいて検出された。その北東コーナーは、風倒木により攪乱されていた。

本住居址は、南北3.05m東西3.3mの隅丸方形を呈し、床面積8.4m<sup>2</sup>を測り、主軸方向N-13°-Wを指す。壁高は30~40cmを測り、壁溝は認められい。また、柱穴等のピットもまったく認められなかった。

覆土は、5層に分層された。I層が多量のロームが混入する混色土層、II層は少量のロームが混入する黒褐色土層、III・V層が黒色土層、IV層はロームがよく混じる黒褐色土層であった。遺物はいずれもこの覆土中より検出された。

カマドは、北壁中央に位置するが、すでに壊滅状態にあった。図にはその掘り方を示したが、東側の袖部分にあたるローム層が若干削り出されていることが窺える。また、その構材であったと考えられる面取り軽石が、東壁際に残置されていた。カマド覆土は、4層に分層された。I層が焼土を多く含む灰褐色土層、II層が焼土・灰を多く含む灰褐色土層、III層は若干の焼土を含む黒色土層、IV層が焼土・灰を多く含む灰褐色土層であった。なお、本カマドの構材に用いられていたと考えられる粘土や石材の大部分は住居外に廃棄さ



第196図 H-64号住居址実測図(1:80)

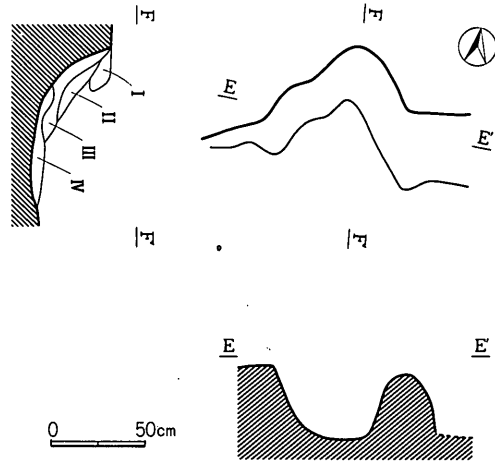
れたものと考えられよう。

遺物 第198図

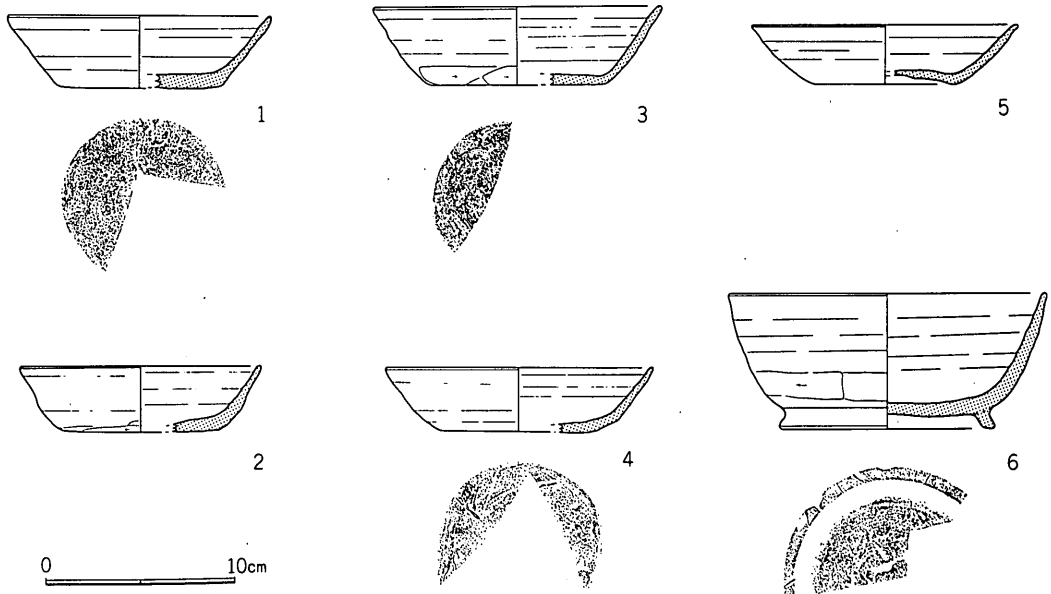
本住居址より検出された遺物には、須恵器では坏・甕、土師器では甕の破片がある。

須恵器坏は、1～6を図示した。1は回転ヘラキリによる底部をみせている。2～4は、底部切り離しの後手持ちヘラケズリのなされたもので、その切り離し方法は捉えられなかった。5は回転糸切りの後、手持ちヘラケズリのなされた底部をみせている。6は、底部切り離しの後、回転ヘラケズリのなされたもので、高台付坏である。

須恵器甕は、いずれも破片ばかりで図示しなかった。



第197図 H-64号住居址カマド実測図 (1:40)



第198図 H-64号住居址出土遺物 (1:4)

## IV 遺構と遺物

第88表 H-64号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	<13.9> 3.9 8.6	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケリ。 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰白色(N7/0) を呈する。 焼成良好
2 (回)	坏 (須)	<12.8> 3.5 <8.1>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部切り離しの後、手持 ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰色(7.5Y6/1) を呈する。
3 (回)	坏 (須)	<15.3> 4.2 (9.2)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部切り離しの後、手持 ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色(5Y6/1) を呈する。
4 (完)	坏 (須)	<14.2> 3.4 (8.3)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部切り離しの後、手持 ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色(5Y5/1) を呈する。内外面 に火襷きあり。
5 (回)	坏 (須)	<15.3> 3.2 <8.6>	体部は外反し、底部はややゆがんだ平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部回転系切りの後、手 持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多 く含み灰色(N6 /0)。外面に火 襷きあり。
6 (回)	坏 (須)	<16.9> 7.1 (9.1)	体部はやや直立気味に外反し、底部には、 高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ。体部下半部回転ヘラケズ リ、底部切り離しの後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含み灰色(N 5/0)を呈する。

土師器甕も図示し得なかったが、「く」の字状に外反する口縁部破片もみられた。

なお、本住居址において石器・鉄器等は検出されなかった。

## 時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

## (65) H-65号住居址

## 遺 構 第199・200図

H-65号住居址は、第II区スー26グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.1m東西3.5mの隅丸方形を呈し、床面積11.7㎡を測り、南北軸方向N-20°-Wを指す。壁高は20cm前後を測り、壁溝は認められない。また、柱穴等のピットもまったく検出されなかった。床面は貼り床ではなく、フラットに削平されたローム面がそのまま床となる。

覆土はI層のみで、小礫を多量に含んだ黒色土層であった。

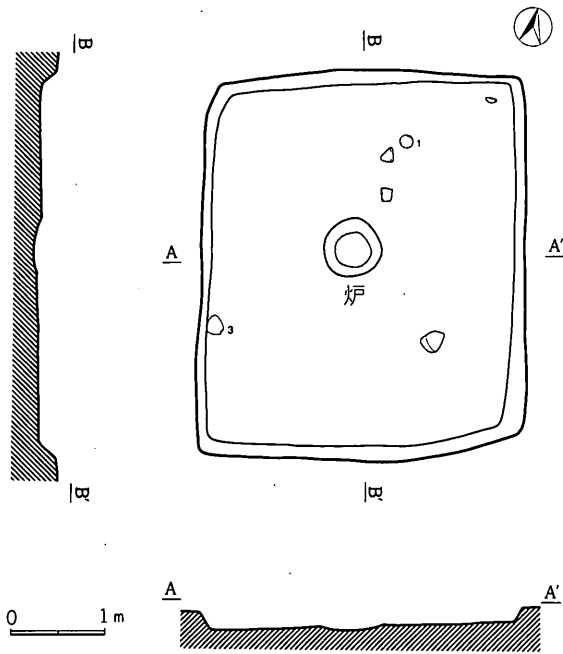
遺物は、北壁寄りに1の須恵器蓋が潰れた状態で検出されており、西壁際からは3の甎の破片が出土している。この他の遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

炉は、住居址のはほぼ中央部に存在していた。60cm×60cm深さ5cmを測る地床炉で、その内部には赤褐色の焼土(I層)堆積がみられた。

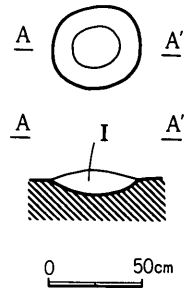
## 遺 物 第201図

本住居址より検出された遺物は少なく、図示し得たのは1~4のみであった。

1 竪穴住居址



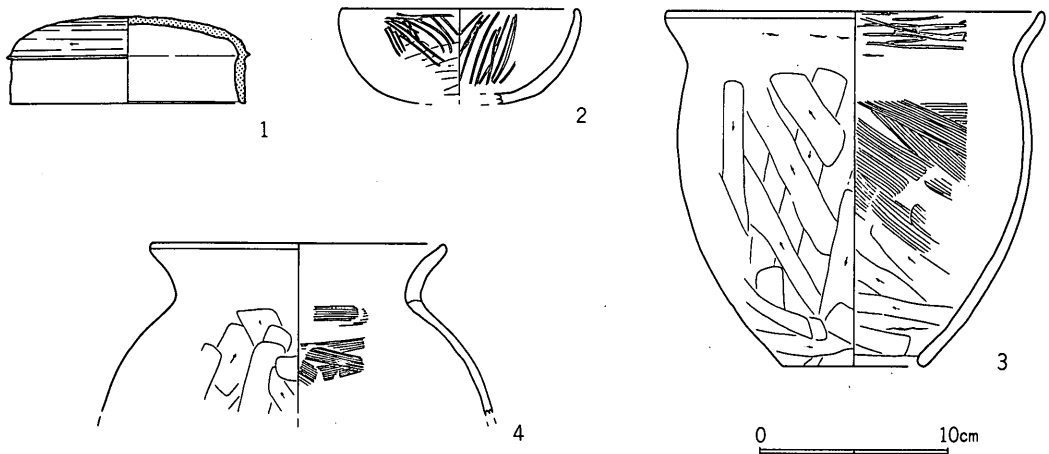
第199図 H-65号住居址実測図 (1:80)



第200図 H-65号住居址炉 (1:40)

1は、ほぼ完形に復原された須恵器蓋である。その天井部は丸味をおびるものの偏平で、鋭い稜をもった後、直降する体部へと続き、平坦に面をなした口唇部となるプロポーションを見せている。均一な器形で、胎土が精選され、焼成良好な優品である。

2は土師器坏で、湾曲する体部をみせ、底部は丸底となると考えられるもので、外面の一部と内面にはヘラミガキがなされている。



第201図 H-65号住居址出土遺物 (1:4)

3は、径の大きい単孔の甌で、外反する口縁部とやや膨らむ胴部を見せている。

4は、土師器壺の口縁部付近である。

### 時期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第I期に位置付けられよう。

第89表 H-65号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

插图番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (完)	蓋 (須)	— 4.5 12.5	天井部は丸味をおびているが偏平で、縁以下が長く直降し、口唇部は面をなして平坦に仕上げられる。縁は突出度が高くするとい。ほぼ完形。	外面 内面	天井部回転ヘラケズリ(縁の付近までおよぶ) 体部ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選されその断面は紫灰色(5P5/1)を呈する焼成良好
2 (回)	坏	<12.5> —	体部は丸味をおびて外反し、口唇部でやや内側に突出する。	外面 内面	体部ヘラケズリの後、体部上半ヘラミガキ ヘラミガキ	胎土は砂粒を多く含みにぶい黄橙色(10YR 7/3)
3 (回)	甌	(20.2) 18.8 7.4	口縁部はゆるく「く」の字状に外反し、胴部は弓なりに内側へすばまる。単孔。	外面 内面	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 口縁部ヘラミガキ。胴部上半刷毛目状調整 胴部下半ヘラケズリ	胎土は砂粒を含み黄橙色(10YR 8/3)
4 (回)	壺	15.7 —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。	外面 内面	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ 胴部刷毛目状調整	胎土は砂粒を含み橙色(7.5 YR 6/6)

## (66) H-66号住居址

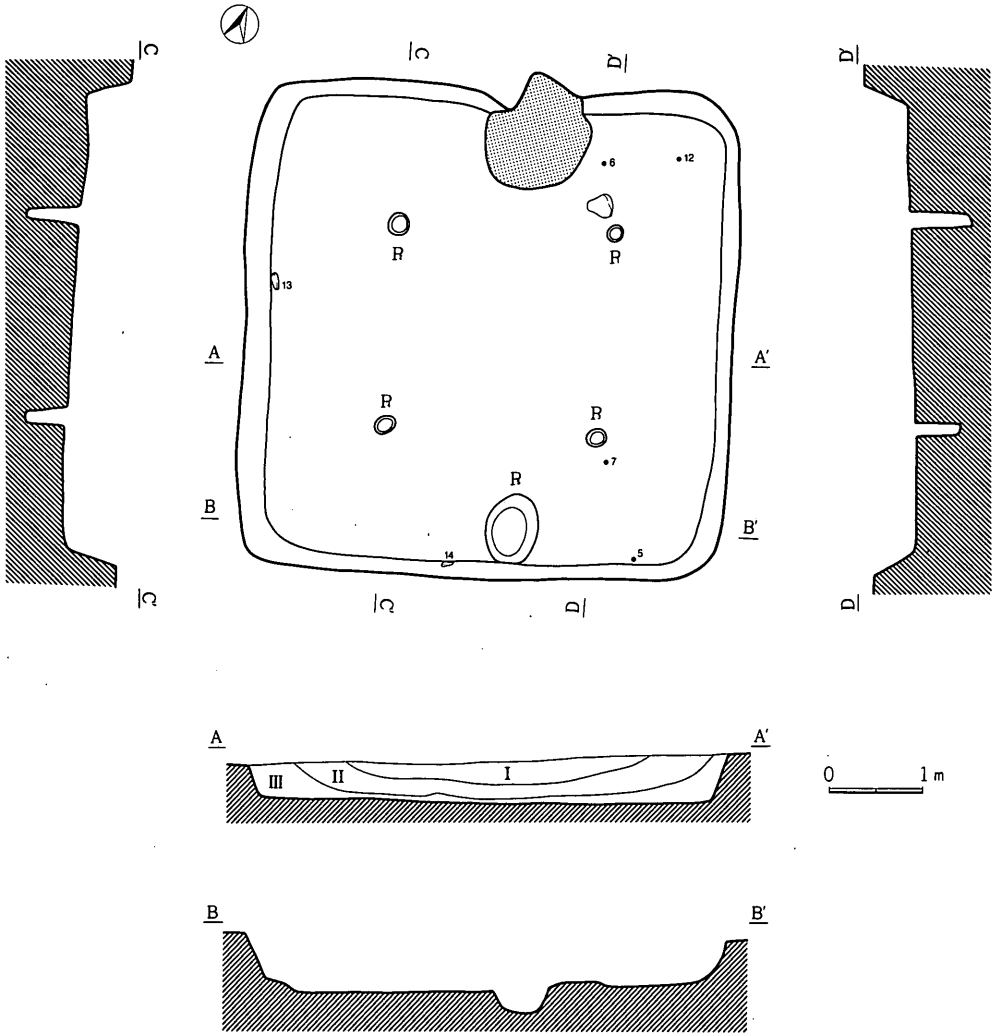
### 遺構 第202・203図

H-66号住居址は、第II区スー24グリッドにおいて検出された。本住居址は、南北5.15m東西5.2mの隅丸方形を呈し、床面積22.2m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-17°-Wを指す。壁高は30~50cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出されたが、いずれもその径が小さいことが特徴的である。P<sub>1</sub>は18cm×15cm深さ55cm、P<sub>2</sub>は25cm×20cm深さ55cm、P<sub>3</sub>は25cm×20cm深さ45cm、P<sub>4</sub>は20cm×20cm深さ50cmをはかる。また、南壁際中央には70cm×55cm深さ20cmを測るP<sub>5</sub>が検出された。

遺物は、北東コーナーの床面より25cm浮いた状態で12の曲玉が、カマド東袖脇の床面上より6の壺1個体分の破片が、P<sub>4</sub>の南の床面より20cm浮いて7の壺が、南東コーナー付近の床面上からは5の埴の破片1個体分が、南壁際の床面上からは14の敲石が、西壁際の床面上からは13の敲石が、それぞれ検出されている。これ以外の遺物は覆土中からの出土である。なお、P<sub>3</sub>の北東には馬一頭分の馬歯が検出されたが、河川堆積による覆土I層中からの出土である為混入品と考えられる。

住居址覆土は、3層に分層できた。I層は後世の河川堆積物で砂利・粘質土ブロックを含む暗茶褐色土層、II層が黒色土層、III層が黒褐色土層であった。

1 竪穴住居址

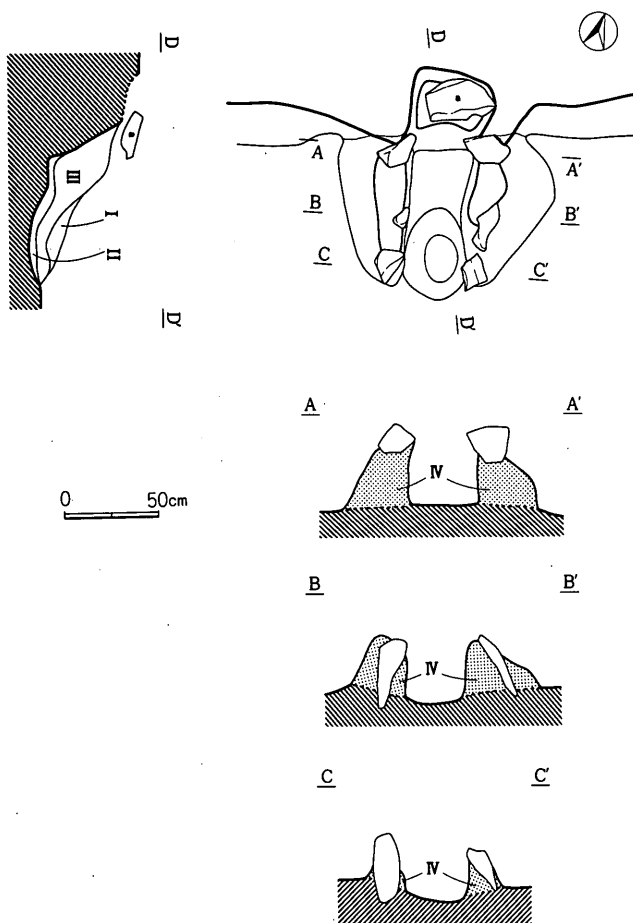


第202図 H-66号住居址実測図 (1 : 80)

カマドは、北壁中央よりやや東寄りに存在し、その天井部と袖部前方は破壊されているものの比較的よく原形をとどめていた。その構材には面取り軽石と安山岩礫が用いられ、それらが粘土 (IV層) で固められたものであった。図中 a は、偏平な安山岩で煙道部天井と考えられる。また B-B' の両袖の断面にみる石材も偏平な安山岩で、H-63号住居址のカマドに用いられた石材と同様なものと言える。C-C' の両袖の断面には面取り軽石がみられる。火床部は浅く窪んでいる。カマド覆土は、3層に分層された。I層は焼土を含まないロームのブロック状堆積である黄色土層、II層は焼土をよく含む黒褐色土層、III層は焼土をほとんど含まない黒褐色土層であった。

遺物 第204・205図

IV 遺構と遺物



第203図 H-66号住居址カマド実測図 (1:40)

本住居址より検出された土器は、いずれも土師器ばかりである。

1は口縁部が短く外反する坏で、底部は丸底を呈するものと思われる。

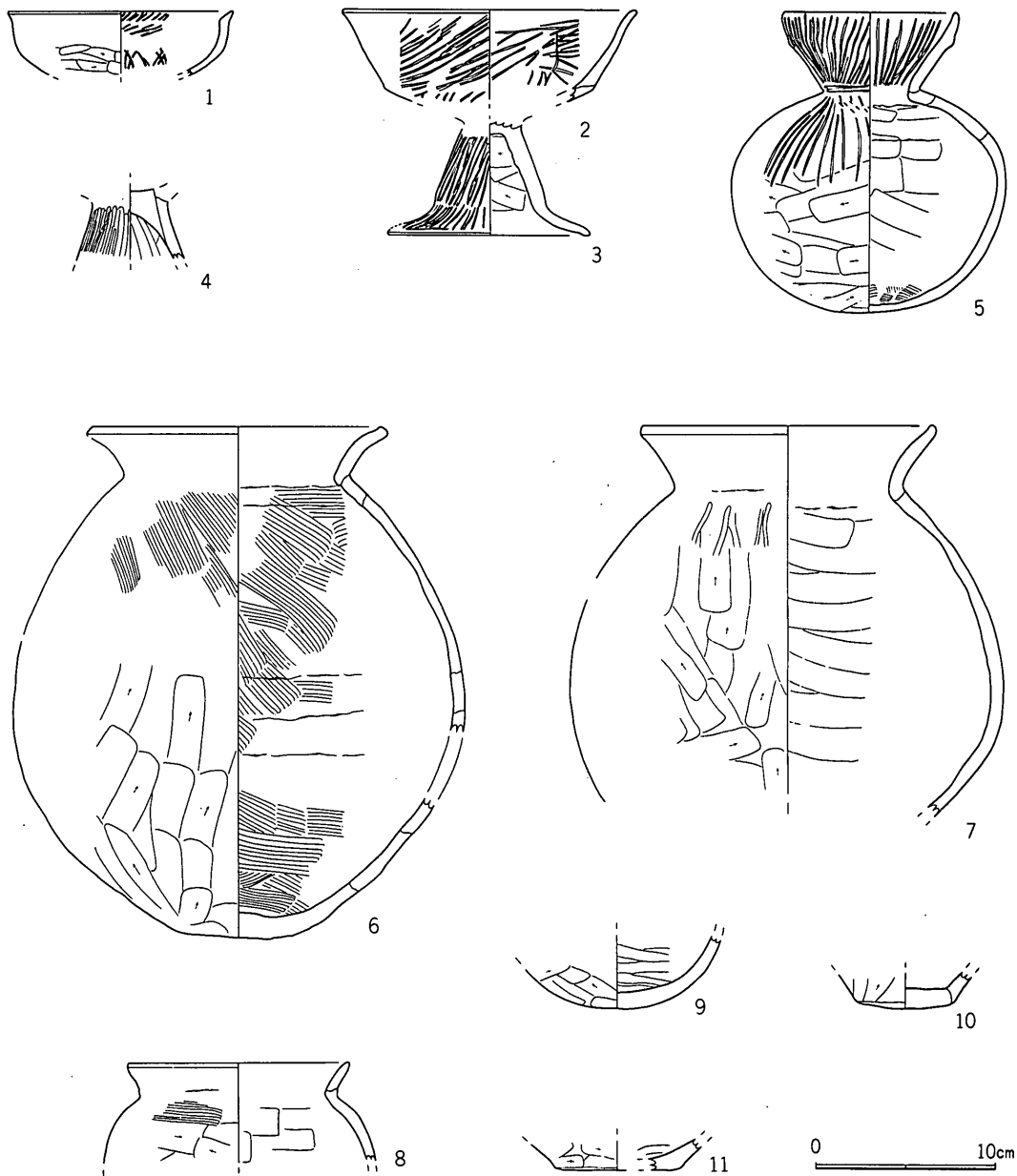
2～4は高坏の各部位で、このうち2・3は接合はみれなかったが、同一個体の坏部と脚部であると考えられる。

5は、球状の胴部と外反する口縁部をみせる罎で、その口縁中央には鈍い稜が巡っている。口縁部内外面と、外面胴部上半には縦方向のヘラミガキがなされている。

6・7はほぼ同様なプロポーションを呈するもので、頸部のすばまり具合等プロポーションから一応壺と認識したが、特に6などは調整レベルから甕と認識することもできよう。しかしいざれにしても、機能的裏付けがないかぎり厳密な器種認定は不可能といえる。

この他甕類には、8の小形甕の口縁部、9の小形甕の丸底、10・11の平底となるものがみられ

1 竪穴住居址



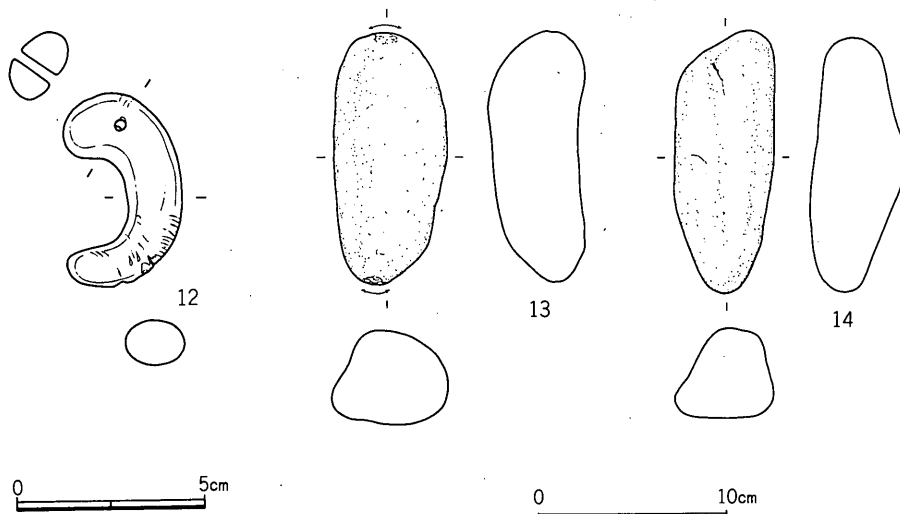
第204図 H-66号住居址出土遺物 (1 : 4)

た。

石製品では、12の滑石製の曲玉が検出されている。尾部に多く傷跡を残すが、全体によく研磨され、整った形状を呈している。穿孔は一つで、表裏両面から穿たれ貫通している。全長5cmを測る。



IV 遺構と遺物



第205図 H-66号住居址出土遺物 (12=1:2, 13・14=1:4)

第90表 H-66号住居址出土遺物一覧表 <土器>

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (回)	坏	<12.5> —	体部は弓なりに外反し、さらに口唇部で短く外反する。	外面 口縁部ヨコナデ 体部下半ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ		胎土は砂粒を含みにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。
2 (完)	高坏	<16.4> —	体部は稜をもって外反する。	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ		胎土は砂粒を含み橙色(5YR6/6)3と同一個体か
3 (完)	高坏	— — 11.2	脚部はラッパ状に広がる。	外面 ヘラミガキ 内面 体部ヘラケズリ 裾部ヨコナデ		胎土は砂粒を含み橙色(5YR6/6)2と同一個体か、H-75・12と接合
4 (回)	高坏	— —		外面 縦位のヘラミガキ 内面 ヘラナデ		胎土は砂粒を含み橙色(2.5YR6/6)
5 (完)	罎	(9.8) 16.5 —	口縁部は鈍い稜をもって外反し、胴部は球状を呈する。底部丸底。	外面 口縁部～胴上半部縦位のミガキ 胴下半部ヘラケズリ 内面 口縁部縦位のヘラミガキ、胴部ヘラナデ 底部若干の刷毛目状調整		胎土は比較的精選されにぶい橙色を呈する。(7.5YR7/4)
6 (完)	壺	<16.7> 28.2 (6.0)	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈し、底部平底。	外面 口縁部ヨコナデ。胴部上半部刷毛目状調整 胴部下半部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目状調整		胎土は砂粒を多く含み褐色(7.5YR7/6)焼成はあまり良好でない
7 (完)	壺	16.5 —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ		胎土は砂粒を多く含みにぶい褐色(7.5YR5/4)
8 (回)	甕	(12.3) —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する小形の器形。	外面 口縁部ヨコナデ。胴部上半部刷毛目状調整とヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ		胎土は砂粒を多く含み赤褐色(5YR4/8)内面黒色
9 (完)	甕	— —	底部丸底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ?		胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(5YR5/6)焼成不良
10 (回)		— — (5.6)	底部平底。壺あるいは甕の底部。	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ		胎土は砂粒を多く含み褐色(7.5YR7/6)
11 (回)		— — <6.9>	底部平底。壺あるいは甕の底部。	外面 ヘラケズリ 内面		胎土は砂粒を多く含み褐色(7.5YR4/4)焼成不良

1 竪穴住居址

13・14は、河床礫を用いた敲石である。  
13はその両端に顕著に敲打痕が残る。14  
にはほとんど敲打痕がみられないが、一  
応敲石と考えた。

第91表 H-66号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

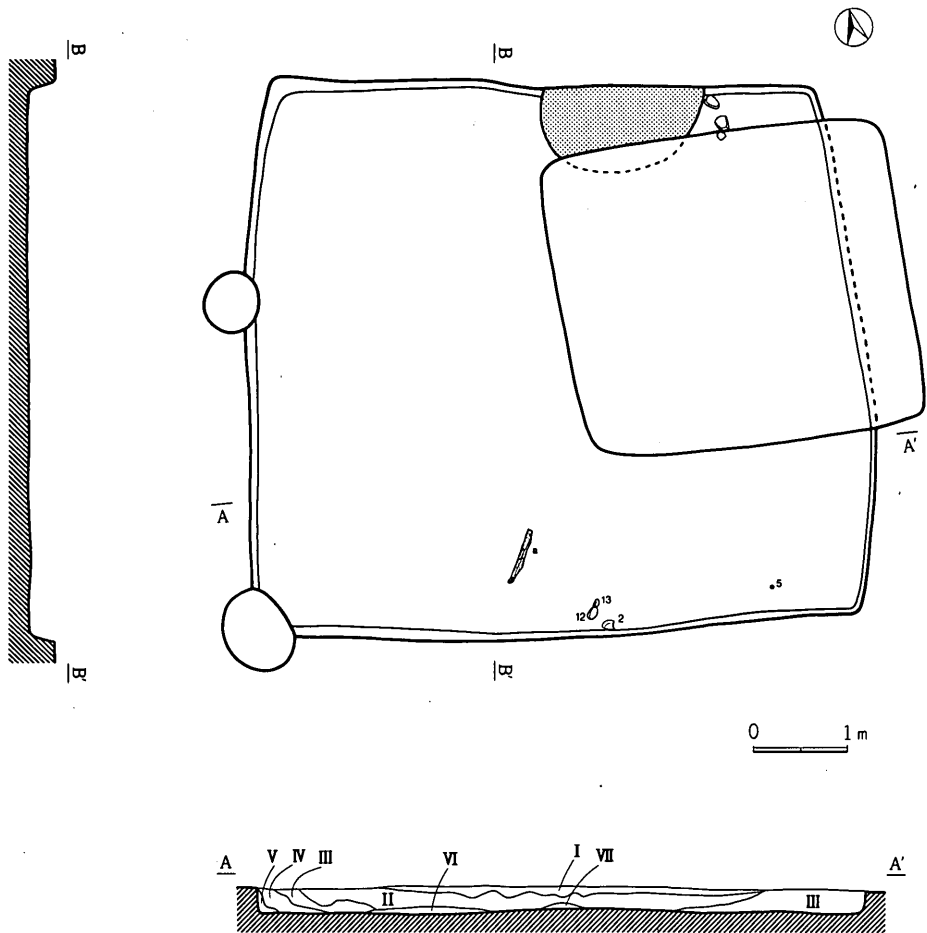
挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
12	曲玉	滑石	5.0	1.5	1.3	22	
13	敲石	安山岩	13.2	6.0	5.0	520	
14	敲石	安山岩	13.5	5.2	4.9	460	

時期

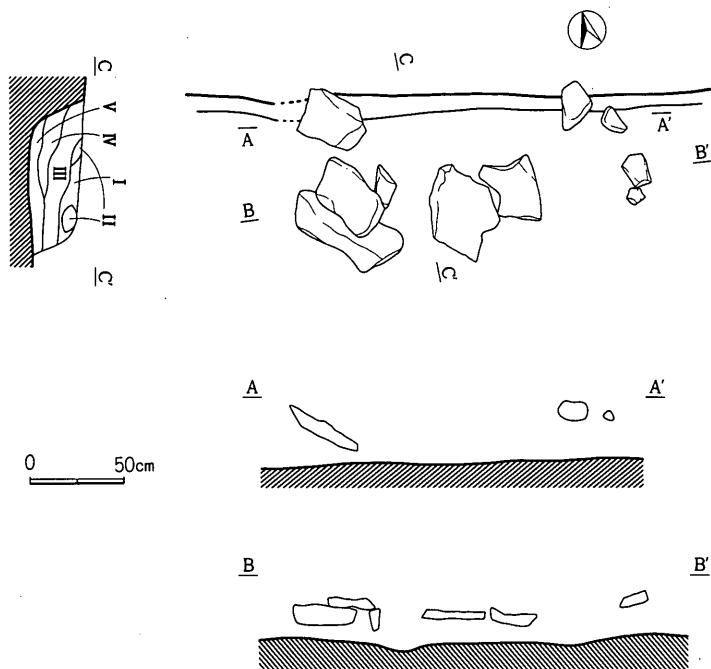
本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第II期に位置付けられよう。

(67) H-67号住居址

遺構 第206・207図



第206図 H-67号住居址実測図 (1:80)



第207図 H-67号住居址カマド実測図 (1:40)

H-67号住居址は、第II区ス・セ-25グリッドにおいて検出された。本住居址は、その南西コーナーをF-64号掘立柱建物址に、I区をH-68号住居址に切られている。

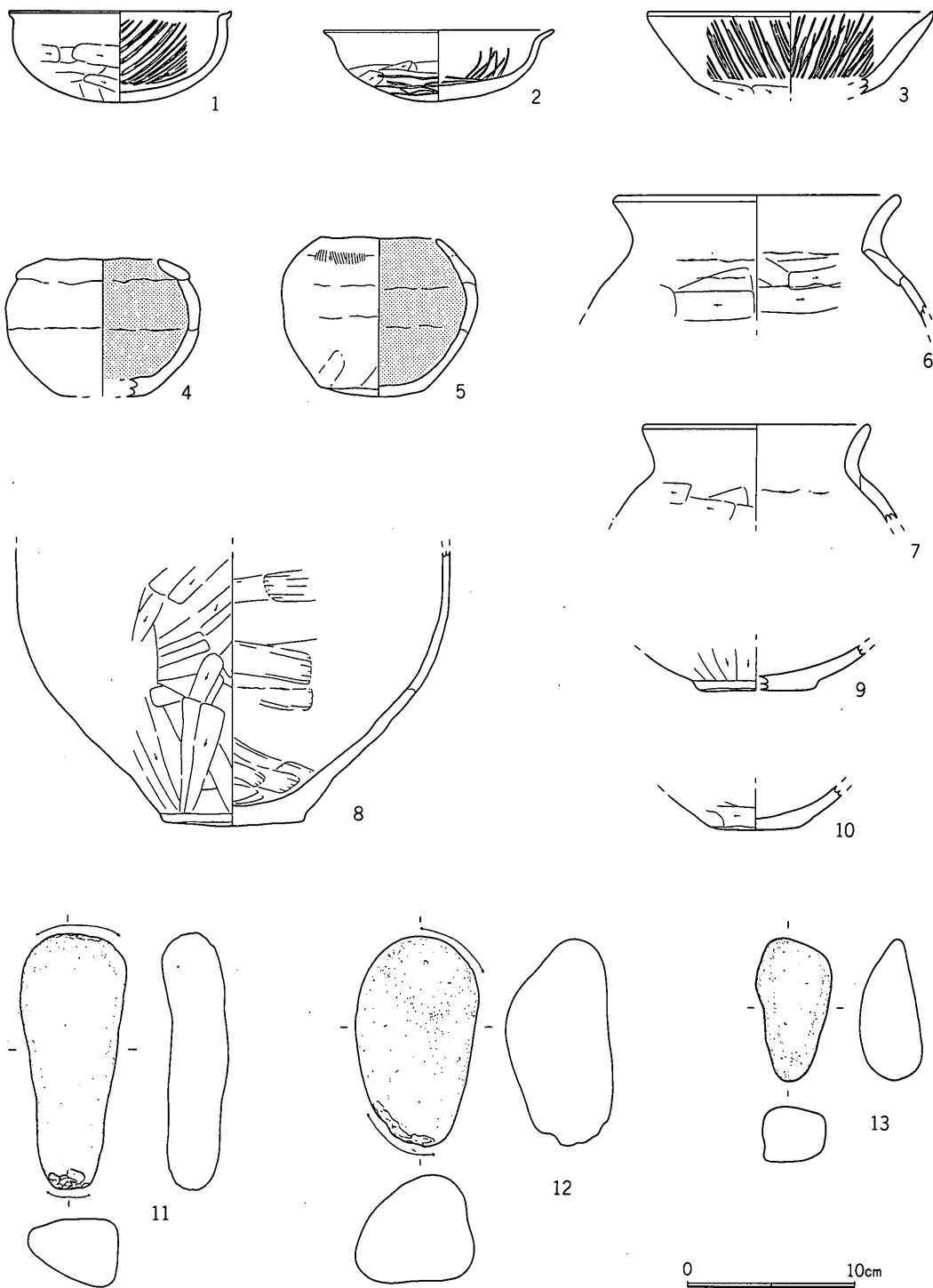
本住居址は、南北5.95m東西6.6mを測る隅丸方形を呈し、床面積35㎡を測り、主軸方向はN-7°-Eを指す。壁高は25~30cmを測り、壁溝は認められない。また、柱穴等のピットもまったく検出されなかった。

遺物は、南壁際中央の床面直上から2の坏と12の敲石・13の石錘が、また、南東コーナー付近の床面上からは5の無頸壺1個体分の破片が検出されている。これ以外は、いずれも覆土中からの出土である。なお、住居址の南壁寄りからは炭化材(a)が検出されている。

覆土は、7層に分層された。I層が茶灰色土層、II層が黒色土層、III-V層が暗褐色土層、IV層が黒褐色土層、VI層は砂層である灰色土層で、VII層は赤褐色の焼土層であった。ことにVII層の焼土層は住居址全体に分布するものではないが、床面に密着しており、またaの炭化材の出土も考え合わせると、本住居址の一部が火災に遭遇していることを想定できよう。

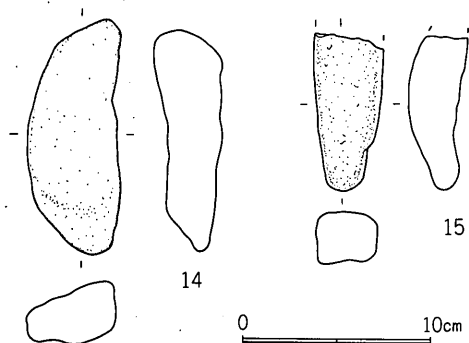
カマドは、北壁中央よりやや東寄りに存在するが、すでに破壊されており、その構材である扁平な安山岩は原位置を失っていた。なお、本カマドはその構材に扁平な安山岩を用いている点においてH-63と共通する。カマド覆土は、5層に分層された。I層が焼土・灰等を含まない茶灰

1 竖穴住居址



第208图 H-67号住居址出土遗物(1:4)

IV 遺構と遺物



第209図 H-67号住居址出土遺物 (1 : 4)

第92表 H-67号住居址出土遺物一覧表 <石器>

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
11	敲石	角閃石 安山岩	15.1	6.3	3.9	460	
12	敲石	輝石 安山岩	12.4	7.2	6.5	850	
13	石錘?	安山岩	4.8	4.5	3.7	170	
14	石錘?	安山岩	12.3	4.8	3.7	270	
15	石錘?	安山岩	(8.0)	3.7	2.8	(100)	

第93表 H-67号住居址出土遺物一覧表 <土器>

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏	<13.3> 5.4 -	体部は丸味をおびて外反し、口唇部は短く屈曲する。底部は偏平な丸底。	外面 体部～底部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ 内面 ヘラミガキ	胎土は砂粒を多く含み明赤褐色(5YR5/8)
2 (完)	坏	13.7 4.2 -	体部は丸味をおびて外反し、さらに口唇部で強く外反する。	外面 体部～底部ヘラケズリの後、若干のヘラミガキ 内面 ヨコナデの後ヘラミガキ	胎土は砂粒を含み明赤褐色(5YR5/8)内外面にスス付着
3 (回)	高坏	<17.1> -	体部は稜をもって外反する。	外面 体部の稜以上はヘラミガキ、稜以下はヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	胎土は砂粒を多く含み橙色(7.5YR7/6)
4 (回)	無頸壺	(6.8) -	体部は弓なりに内湾し、底部は平底を呈するか。手捏土器。	外面 風化が激しいが、ナデがなされているか。 内面 ナデの後、赤色塗彩。	胎土は精選されず砂粒を多く含みにぶい褐色(7.5YR6/4)焼成不良もろい。輪郭の痕を残す。
5 (完)	無頸壺	6.8 9.4 6.2	体部は弓なりに内湾し、底部は丸味をおびた平底。手捏土器。	外面 風化が激しいが、ナデがなされているか。 内面 ナデの後、赤色塗彩	胎土は精選されず砂粒を多く含みにぶい褐色(7.5YR6/4)焼成不良。内面に輪郭の痕を残す。
6 (回)	壺	<17.2> -	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は砂粒を多く含み橙色(7.5YR6/6)
7 (回)	壺	<13.6> -	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を多く含みにぶい黄褐色(10YR7/4)
8 (回)	壺	- 8.4	胴下半は弓なりにすぼまり、平底に至る。	外面 胴下半部から底部ヘラケズリ 内面 刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含み赤褐色(5YR5/6)
9 (回)		- <7.1>	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	胎土は砂粒を多く含み橙色(7.5YR6/6)
10 (回)		- <5.4>	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	胎土は砂粒を多く含み褐色(7.5YR4/3)

色土層、II層が灰層である黄灰色土層、III層が焼土を多量に含む赤褐色土層、IV層が若干の焼土を含む黒色土層、V層が焼土をまったく含まずロームが多く混入する黄色土層であった。

遺物 第208・209図

本住居址において検出された土器は、いずれも土師器のみであった。

1・2は、偏平な丸底から湾曲する体部、短く外反する口縁部をみせる土師器坏である。

3は、内外面に縦位のヘラミガキのなされた高坏の坏体部である。

4・5は、手捏ねの無頸壺で、内外面に輪積み痕が窺える。双方ともに焼成不良で風化が激しいが、内面に赤色塗彩のなされているのが特徴的である。

6・7は、壺の口縁部付近で、8は壺の胴下半部以下である。9・10は、平底の壺あるいは甕の底部であろう。

石器では、11・12の敲石と13~15の石錘？が検出されている。

11・12は、両端に顕著な敲打痕が認められる敲石で、河床礫を用いたものである。

13~15は、河床礫で、端部に特に敲打痕も認められないため敲石とは認めがたい。民俗事例において蓆などを編む際、石のおもりを使用するが、そのような石錘とも考えられようか。

時期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第II期に位置付けられよう。

(68) H-68号住居址

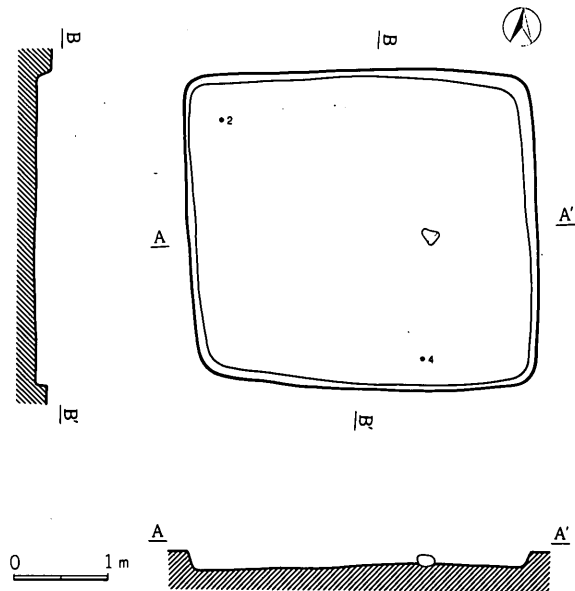
遺構 第210図

H-68号住居址は、第II区セ-25グリッドにおいて検出された。H-67号住居址と重複関係を持つが、本住居址のほうが新しいものである。

本住居址は、南北3.3m東西3.7mの隅丸方形を呈し、床面積10.9m<sup>2</sup>を測り、南北軸方向はN-13°-Wを指す。壁高は15~20cmを測り、壁溝は認められない。また、柱穴等のピットも認められなかった。

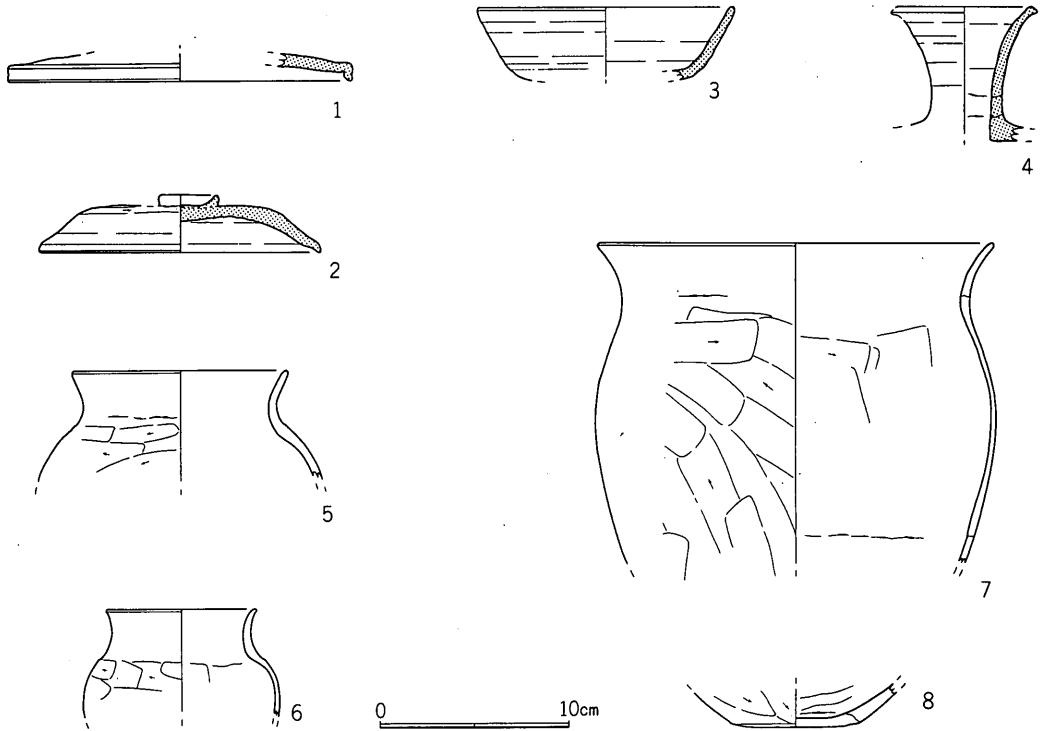
覆土はI層のみで、小粒パミスを含む黒色土層であった。

遺物は、北西コーナー付近の床面上から2の蓋が、南壁際の床面上からは4の長頸瓶の頸部が検出されている。それ以外の遺物は、いずれも覆土中から出土したもの



第210図 H-68号住居址実測図 (1:80)

IV 遺構と遺物



第211図 H-68号住居址出土遺物 (1:4)

である。

なお、本住居址においてカマドは認められなかった。

遺物 第211・212図

本住居址より検出された遺物は総じて少ないが、須恵器では蓋・坏・長頸瓶、土師器では甕の各機種がみられた。

1・2は須恵器の蓋である。2は、中央が皿状に窪んだつまみ部を有している。

3の坏は、体部破片で、底部の調整痕は明瞭に認め難いが周辺部に手持ちヘラケズリがなされていることが僅かに窺えた。切り離し方法は不明であるが、回転糸切りによるものかと思われた。

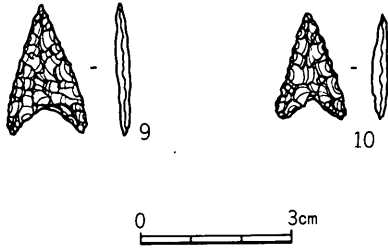
4は須恵器長頸瓶の頸部で、比較的小形品である。

5～8は、土師器甕の各部位である。5・6は小形甕の口縁部で、7はゆるく外反する口縁部をみせる長胴甕の破片である。

石器では、両面調整の石鏃9・10が検出されている。9はチャート製、10は黒曜石製である。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。



第212図 H-68号住居址出土遺物(2:3)

第94表 H-68号住居址出土遺物一覧表<石器>

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
9	石 鏃	チャート	2.5	1.6	0.3	0.7	
10	石 鏃	黒曜石	2.1	1.4	0.3	0.6	

第95表 H-68号住居址出土遺物一覧表<土器>

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	- - <18.1>		外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み暗赤褐色(5YR3/4)
2 (回)	蓋 (須)	3.1 3 <14.9>	つまみ部は皿状にくぼんだ形状を呈し、体部末端は強く屈曲しない。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y7/1)内面に朱が付着
3 (回)	坏 (須)	<13.6> - <9.1>	体部は外反し、底部は平底を呈するものと思われる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部切り離しの後、手持ちヘラケズリ? 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み暗緑灰色(10GY4/1)を呈する。
4 (完)	長頸瓶	<7.9> - -	頸部はラッパ状に外反する。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y6/1)内外面に自然釉付着
5 (回)	甕	<11.4> - -	口縁部は弓なりに外反し、胴部は球状を呈する小形の器形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
6 (回)	甕	<8.0> - -	口縁部は弓なりに立ち上がり、胴部は球状を呈する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は暗褐色(7.5YR3/3)
7 (回)	甕	<20.9> - -	口縁部はゆるく弓なりに外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色(5YR6/6)
8 (回)	甕	- - (6.8)	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は明赤褐色(5YR5/8)

(69) H-69号住居址

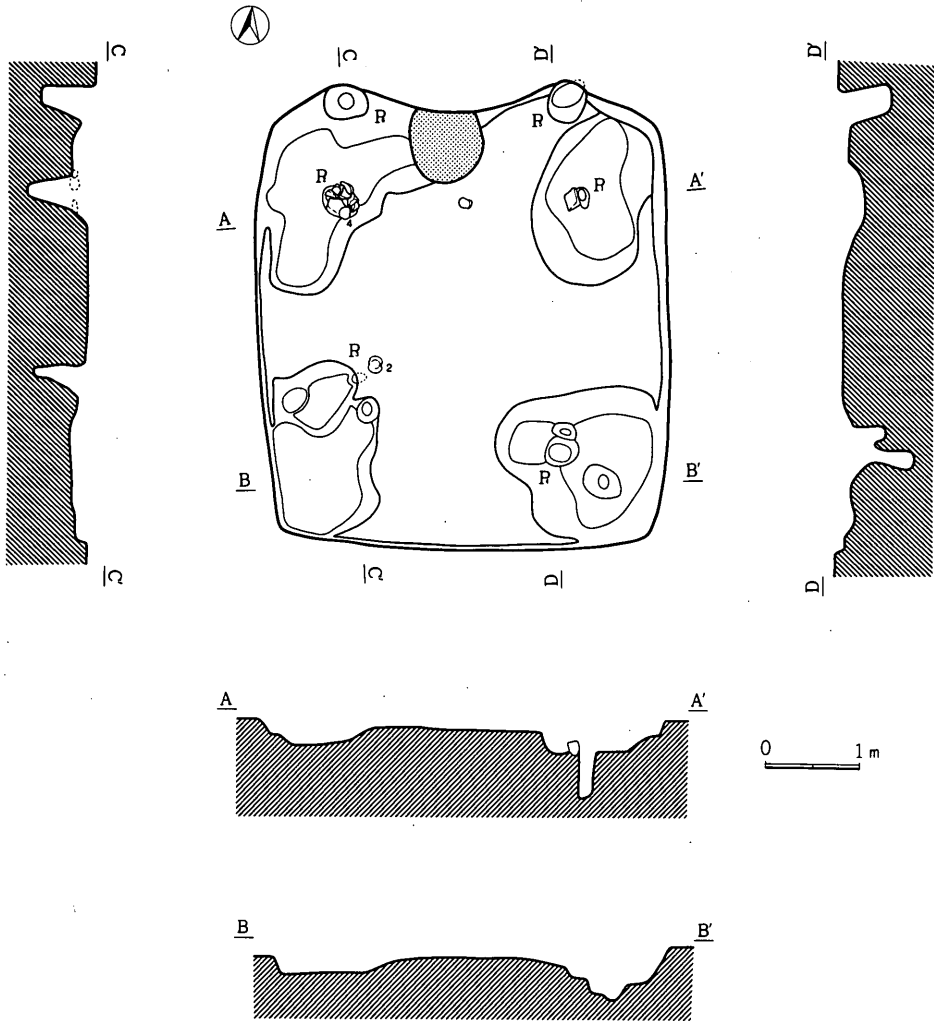
遺 構 第213・214図

H-69号住居址は、第II区セ-24・25グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.8m東西4.35mを測り、カマド両脇の北壁が山なりに突出するが全体的には隅丸方形を呈する。床面積17.9m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-9°-Wを指す。壁高は10~20cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。また、北壁のカマド両脇からも柱穴と考えられるP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>が検出されている。P<sub>1</sub>は20cm×10cm深さ50cmで、その上面には礫が



IV 遺構と遺物



第213図 H-69号住居址実測図 (1:80)

みられた。P<sub>2</sub>は40cm×30cm深さ50cmを測り、上面には礫7個がみられた。この礫は柱のまわりに配されていたものであろうか。P<sub>3</sub>は20cm×15cm深さ55cm、P<sub>4</sub>は40cm×35cm深さ70cmを測りその脇には深さ45cmの補助柱穴的なピットもみられた。また、P<sub>5</sub>はやや斜めに開くもので45cm×45cm深さ45cm、P<sub>6</sub>は50cm×35cm深さ40cmを測った。

住居址平面図には、その掘り方を加えておいたが、それによると住居址の中央床面は予め平らに掘り込まれ、支柱穴付近からコーナーにかけてが掘り鉢状に大きく掘り込まれていることが理解された。

遺物は、P<sub>2</sub>の上面から4の長頸瓶底部が、P<sub>3</sub>の床面上から2の坏が検出されている。その他の遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土はI層のみで、若干のパミスを含む黒色土層であった。

カマドは、北壁中央に位置するが、すでに破壊されており、その構材であった面取り軽石敷点が散在している状態にあった。その覆土は3層に分層された。I層が焼土を若干含む黒褐色土層、II層が赤褐色の焼土層、III層は焼土を含まない黒色土層である。また、IV層は火床部を構成する埋土である。

遺物 第215図

本住居址より検出された遺物は少ないが、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕、土師器では甕の各器種がみられた。

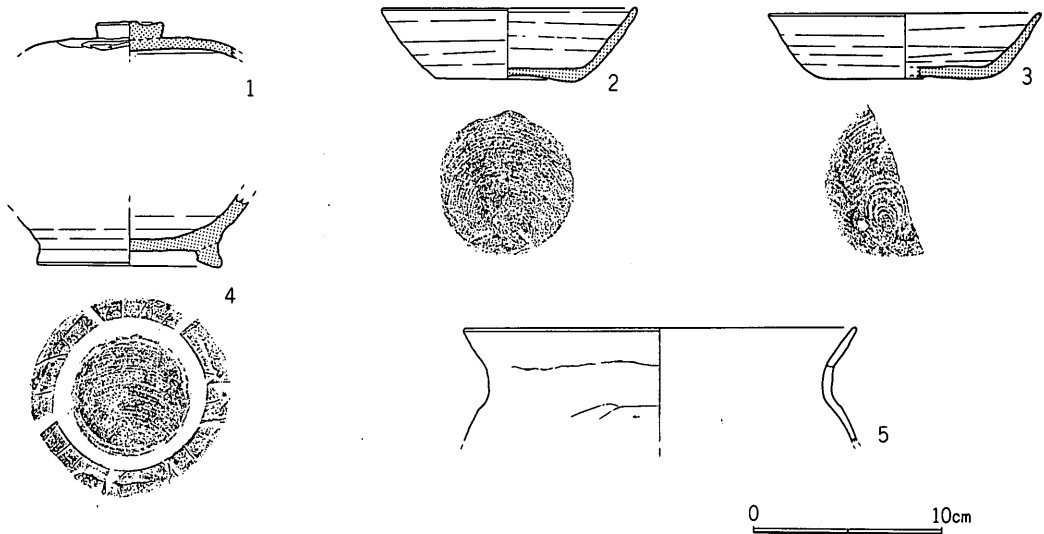
1は、盤状で中央の突出するつまみ部を有する須恵器蓋である。

2・3は須恵器坏で、いずれも回転糸切りによるものであるが、3の底部周囲には手持ちヘラケズリがなされている。また、4の長頸瓶底部も回転糸切りによるものである。

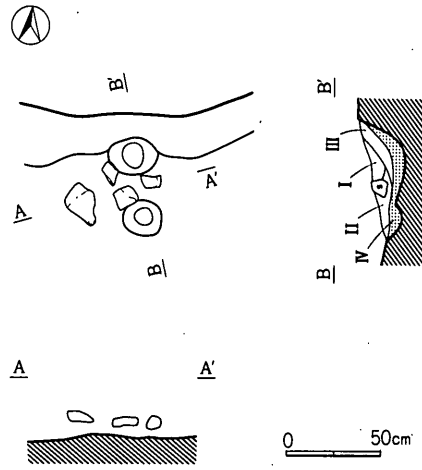
5は、ゆるく外反する口縁をみせる土師器甕である。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。



第215図 H-69号住居址出土遺物 (1:4)



第214図 H-69号住居址カマド  
実測図 (1:40)

第96表 H-69号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (回)	蓋 (須)	3.5 — —	つまみ部は盤状を呈するが、中央部がやや突出する。	外面 内面	ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰色(N5/0)を呈する。
2 (完)	坏 (須)	13.6 3.8 7.3	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y6/1)内外面に火燻あり。
3 (回)	坏 (須)	<14.5> 3.4 <9.4>	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、周囲手持ちヘラケズリ ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y6/1)内外面に火燻あり。
4 (完)	長頸瓶 (須)	— — 9.7	底部には高台が貼り付けられる。	外面 内面	ロクロヨコナデ、底部回転糸切り ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰色(N6/0)内外面に自然釉付着。
5 (回)	甕	<20.8> — —	口縁部はゆるく外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ	胎土は明赤褐色(5YR5/8)

## (70) H-70号住居址

## 遺構 第216・217図

H-70号住居址は、第II区セ-25グリッドにおいて検出された。

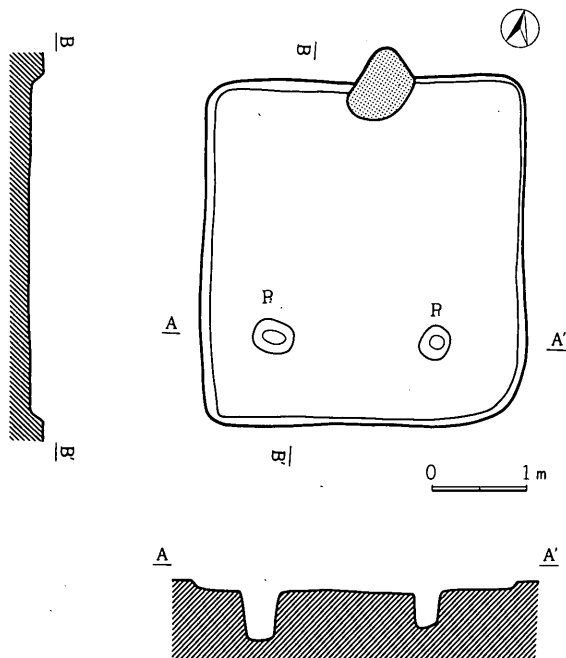
本住居址は、南北3.7m東西3.45mの隅丸方形を呈し、床面積11.0㎡を測り、主軸方向N-9°-Wを指す。壁高は10~15cmを測り、壁溝は認められない。支柱穴は南壁寄りにP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の2個が検出された。P<sub>1</sub>は35cm×35cm深さ35cm、P<sub>2</sub>は43cm×35cm深さ50cmを測る。

覆土は、黒褐色土層I層のみである。遺物はいずれもこの覆土からの出土で、床面に密着した良好な出土状態を示すものはなかった。

カマドは、北壁中央に位置するが、すでに壊滅状態にあり、その構材であった面取り軽石6点が認められたにすぎなかった。

## 遺物 第218図

遺物の出土量はきわめて少ない



第216図 H-70号住居址実測図(1:80)

1 竪穴住居址

が、土師器の坏・甕の破片がみられた。

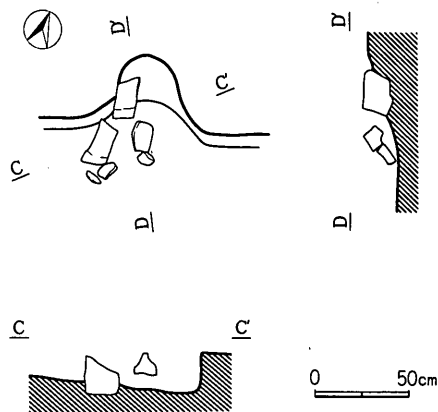
土師器坏は図示し得なかったが、外面体部～底部にヘラケズリが施され、内面体部には放射状暗文がみられるものであった。見込み部のラセン状暗文の有無は不明である。

1は、僅か「コ」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕である。また、2も、口縁部がゆるく外反する土師器甕である。

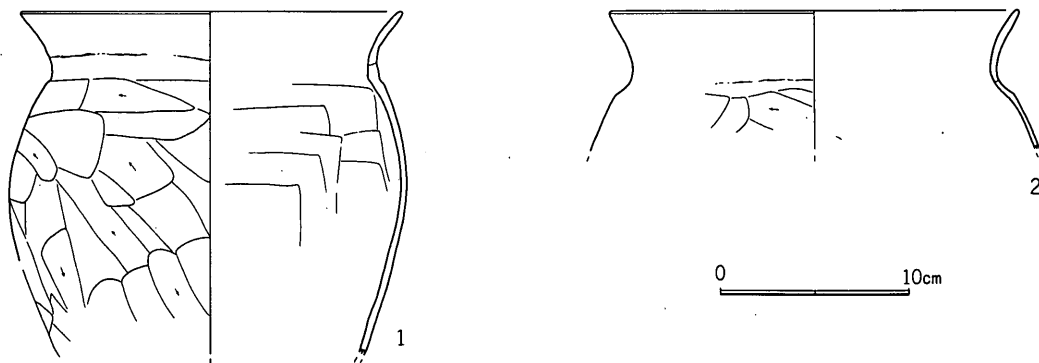
なお、この他須恵器坏等はまったく検出されなかった。

時期

本住居址は、時期決定の根拠となり得る遺物が少ないが、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期の所産と捉えておこう。



第217図 H-70号住居址カマド実測図 (1:40)



第218図 H-70号住居址出土遺物 (1:4)

第97表 H-70号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (完)	甕	20.2 — —	口縁部は僅か「コ」の字状に外反する	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ ヘラナデ	胎土は橙色 (7.5YR6/6)
2 (回)	甕	<21.7> — —	口縁部は弓なりにゆるく外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ	胎土は橙色 (7.5YR6/6)

## (71) H-71号住居址

## 遺構 第219図

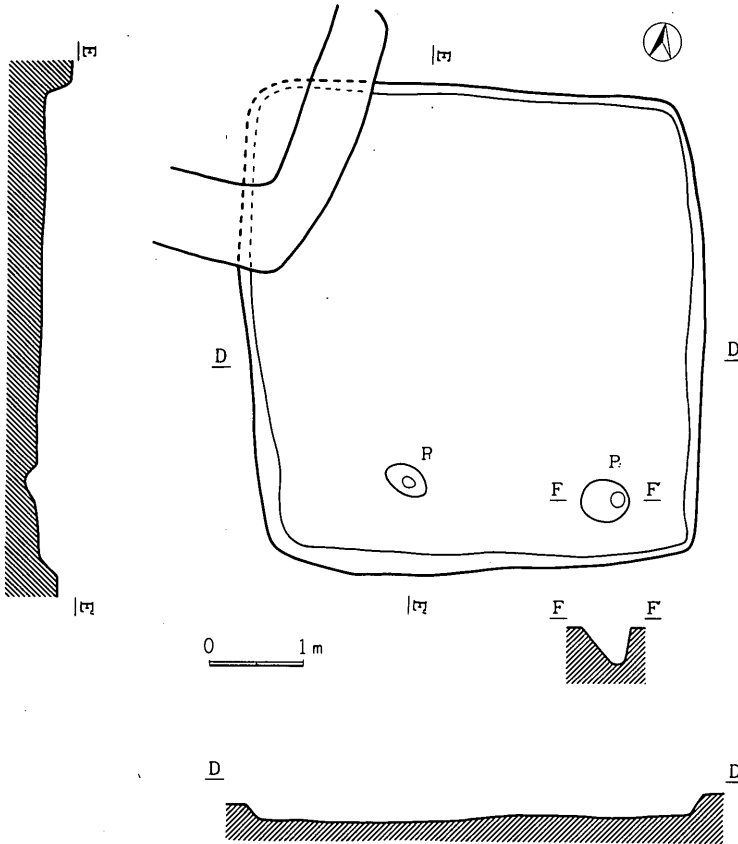
H-71号住居址は、第II区シ-25グリッドにおいて検出された。その北西コーナー部をH-90・H-72の両住居址に切られている。

本住居址は、南北5.2m東西4.9mの隅丸方形を呈し、床面積21.3m<sup>2</sup>を測り、南北軸方向はN-18°-Wを指す。壁高は15~25cmを測り、壁溝は認められない。ピットは、柱穴となるかどうかわからないが南東コーナー寄りにP<sub>2</sub>が検出された。また、南壁寄りに検出されたP<sub>1</sub>は、ピットと呼ぶにはやや貧弱かもしれない。P<sub>1</sub>が50cm×30cm深さ10cm、P<sub>2</sub>が50cm×45cm深さ37cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、パミスを多く含む黒褐色土層であった。10数点のみ検出された遺物は、いずれも覆土中からの出土であった。

なお、本住居址においてカマド・炉等は認められなかった。

## 遺物



第219図 H-71号住居址実測図 (1:80)

本住居址から検出された遺物は、土師器片10数点と須恵器片2点にすぎない。土師器には、壺の口縁部破片がみられた。

#### 時期

本住居址においては、遺物が皆無に等しいため、その時期決定が困難であるが、H-90・H-72との切り合い関係、カマド等を有さず、また柱穴等をもたない住居構造、壺の口縁部破片等の出土から、H-60・H-61号住居址と同時期、すなわち古墳時代中期、前田遺跡第I期のものと捉えておこう。

### (72) H-72号住居址

#### 遺構 第220・221図

H-72号住居址は、第II区シー25グリッドにおいて検出された。本住居址は、H-90号住居址の大部分とH-71号住居址を切って存在する。

本住居址は、南北3.1m東西3.2mの隅丸方形を呈し、床面積7.9m<sup>2</sup>を測り、主軸方向N-8°-Wを指す。壁高は40~50cmを測り、壁溝は認められない。また、柱穴等ピットもまったく認められなかった。

遺物は、6の小形甕の破片がカマド西脇の床面上より、また7の甕の破片がI区床面上より検出された。それ以外の遺物は覆土中よりの出土である。

住居址覆土はI層のみで、小石・パミスを含む黒褐色土層であった。

カマドは、住居址中央よりやや東寄りに検出された。すでに半壊状態にあったが、両袖の一部がかろうじて残っていた。その構材には、主に面取り軽石が用いられ、2点ほど安山岩礫もみられた。これらの袖石に粘土層（I層）が貼られ袖部となっている。

#### 遺物 第222図

本住居址より検出された遺物には、須恵器では蓋・坏、土師器では坏・甕がある。

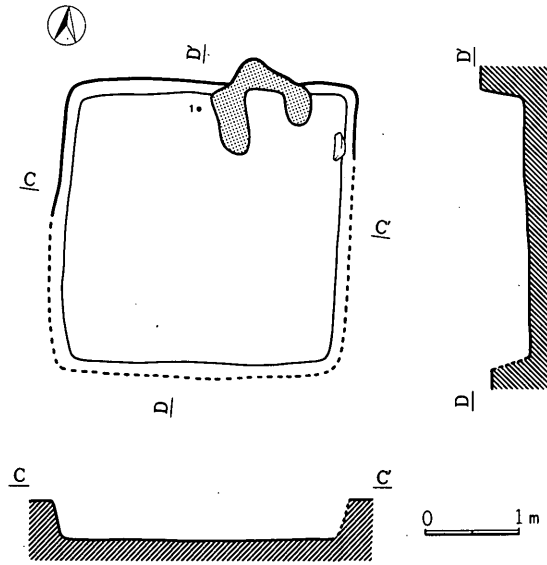
1~3は、須恵器蓋である。このうち2・3のつまみ部の形状に不明である。

4は須恵器坏で、回転糸切りの後周囲手持ちヘラケズリのなされた底部をみせるものである。また、5は土師坏で、全面手持ちヘラケズリのなされた底部をみせるものである。ロクロ整形によるものと思われるが、底部の切り離し方法は不明である。

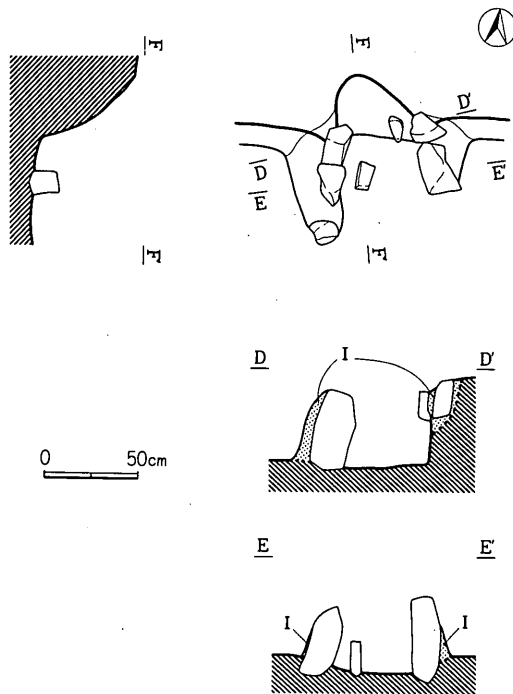
6は、土師器小形甕で、丸味をおびた平底の底部と球状の胴部を呈するものである。

7・8は、口縁部から底部にかけてのほぼ全体の器形を知り得ることのできる、遺存率の高い土師器甕である。口縁部はゆるく「く」の字状に外反し、底部は径4cmの狭い平底を呈する。双方とも法量はほとんど一致する。また、9・10も土師器甕の「く」の字状を呈する口縁部である。

IV 遺構と遺物

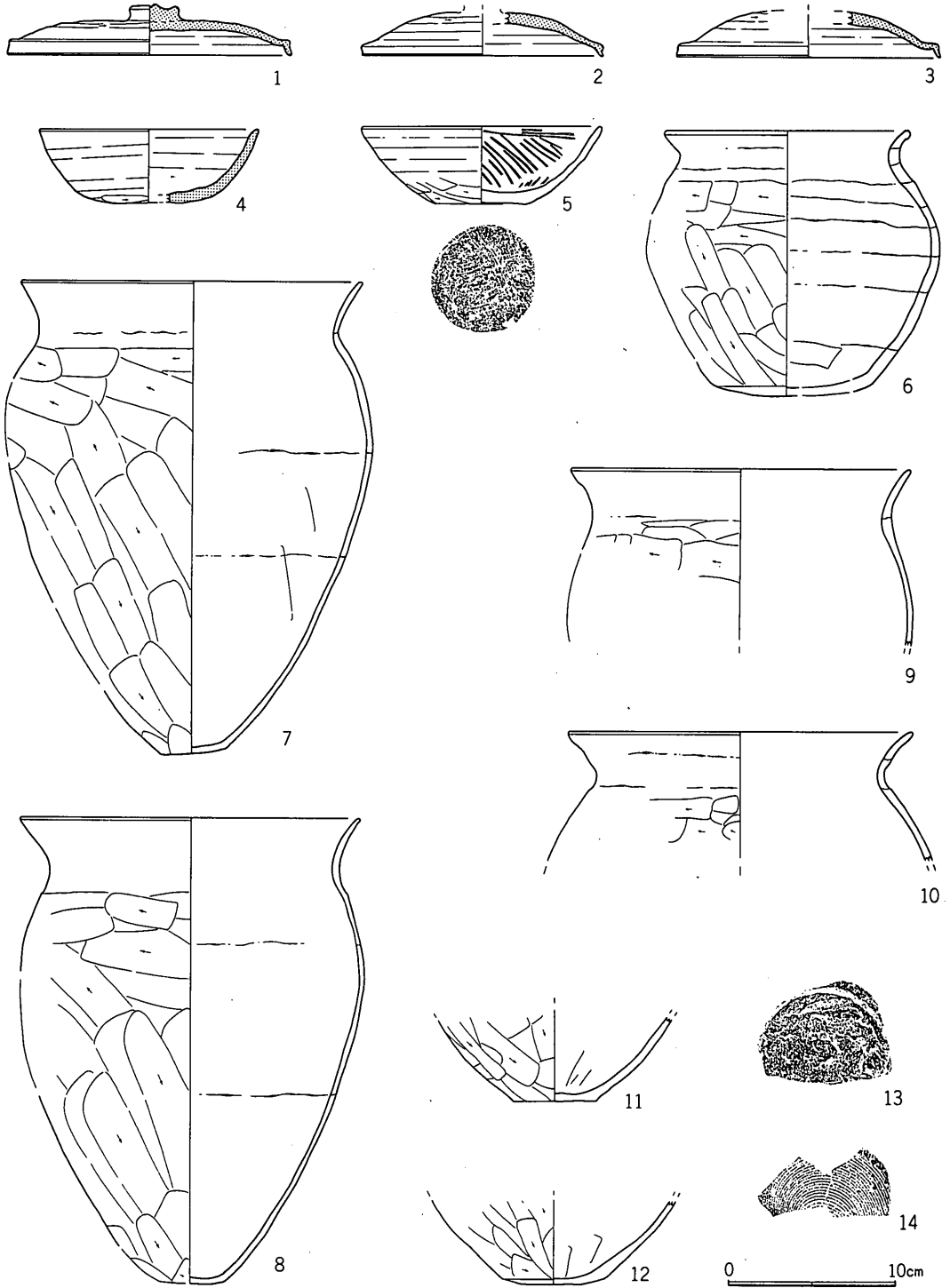


第220図 H-72号住居址実測図 (1 : 80)



第221図 H-72号住居址カマド実測図 (1 : 40)

1 竖穴住居址



第222图 H-72号住居址出土遗物(1:4)



第98表 H-72号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	2.9 3.0 (17.0)	つまみ部は、端部と中央部がやや突出した形状を呈する。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y5/0)
2 (回)	蓋 (須)	— — (14.4)		外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y5/1)
3 (回)	蓋 (須)	— — (15.7)		外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色(7.5Y7/1)
4 (回)	坏 (須)	(13.1) 4.4 (7.6)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転系切りの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多く含みオリーブ灰色(5GY6/1)
5 (回)	坏	(14.3) 4.6 5.4	体部は外反し、底部平底。	外面 体部下半ヘラケズリ、底部手持ちヘラケズリ 内面 ヘラミガキ (ロクロ整形)	胎土は砂粒を含み橙色を呈する。(5YR6/6)
6 (完)	甕	14.7 15.6 9.3	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状にふくらみ、底部はやや丸味をおびた平底の小形の器形。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部～底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は精選されず砂粒を多く含みにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。
7 (完)	甕	20.3 28.0 4.0	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は上半部にかけて最大径をもったあとすぼまり、平底の底部に至る。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部～底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色(5YR4/8)
8 (完)	甕	20.2 27.5 4.0	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は上半部にかけて最大径をもったあとすぼまり、平底の底部に至る。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部～底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色(5YR4/8)を呈する。
9 (完)	甕	20.3 — —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。
10 (回)	甕	(20.5) — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はややふくらむ。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土は橙色を呈する(5YR6/6)
11 (回)	甕	— — 5.0	底部平底。	外面 胴部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は浅黄褐色(10YR8/4)を呈する。
12 (回)	甕	— — (6.0)	底部平底。	外面 胴部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は橙色(5YR6/8)を呈する。

11・12は土師器甕の平底を呈する底部である。

#### 時 期

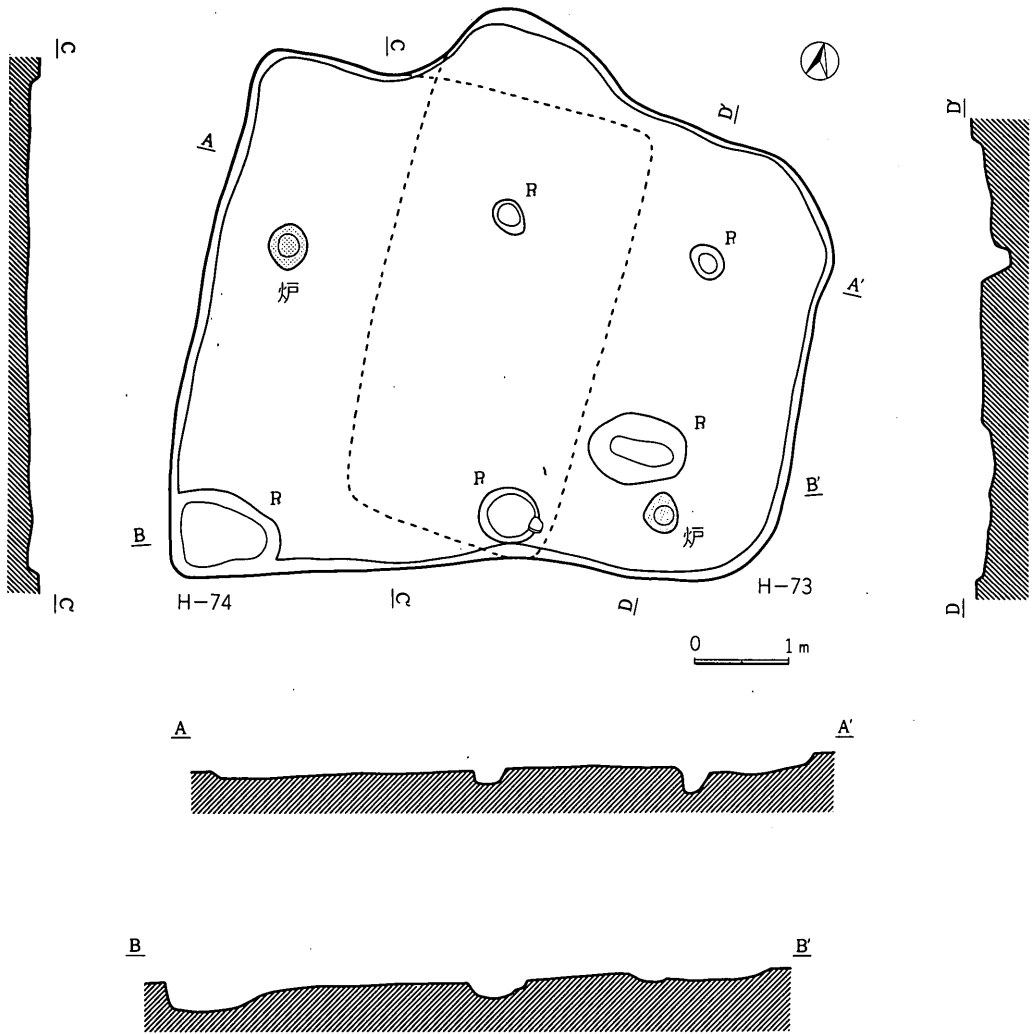
本住居址は、奈良時代、前田遺跡第Ⅵ期に位置付けられよう。

### (73・74) H-73・H-74号住居址

#### 遺 構 第223図

H-73・H-74号住居址は、第Ⅱ区セ-26グリッドにおいて検出された。両住居址は重複関係をもつものであるが、両者がきわめて浅い遺構であることと、覆土の差異がほとんど認められないことから、その新旧の把握が困難であった。

1 竪穴住居址

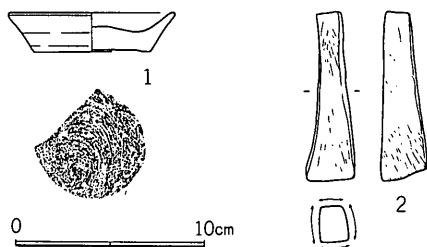


第223図 H-73・H-74号住居址実測図 (1:80)

H-73号住居址は、南北4.8mを測るもので、図に示した隅丸方形のプランを想定してよいであろう。推定床面積20.5m<sup>2</sup>を測る。その南北軸方向はN-7°-Wを指す。壁高は10cm前後を測るのみである。ピットは、主柱穴としてP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が検出され、また楕円形の浅い掘り込みであるP<sub>3</sub>が南東コーナー寄りにみられた。P<sub>1</sub>は40cm×30cm深さ30cm、P<sub>2</sub>は40cm×30cm深さ15cm、P<sub>3</sub>は100cm×75cm深さ7cmを測る。炉は、42cm×35cm深さ5cm不正円形を呈するもので、南東コーナー寄りに検出された。内部には赤褐色の焼土堆積がみられた。

H-74号住居址は、南北5.5mを測るもので、歪んだ隅丸方形のプランを想定でき、推定床面積19.8m<sup>2</sup>を測る。南北軸方向はN-8°-Wを指し、壁高は10cm程度を測るのみである。ピットとし

IV 遺構と遺物



第224図 H-73・H-74号住居址  
出土遺物 (1:4)

第99表 H-73・H-74号住居址出土遺物  
一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
2	砥石	流紋岩 風化物	8.8	2.6	2.4	60	

第100表 H-73・H-74号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	皿	(8.9) 2.1 6.1	小形で偏平な盤状の形態を呈する。 底部平底。かわらけ	外面 ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選されず 砂粒を多く含みに ぶい黄褐色を呈す (10YR 5/3)

ては、南東コーナーにP<sub>4</sub>、南西コーナーにP<sub>5</sub>が検出された。P<sub>4</sub>は60cm×57cm深さ20cmを測る円形のピットで、内部からは多量の炭化材が検出された。P<sub>5</sub>は110cm×85cm深さ20cmを測る。炉は西壁寄りに検出されており50cm×40cm深さ5cmを測るものである。

なお、これまでH-73・H-74号住居址の二軒ということ述べてきたが、この遺構が不規則な形状を呈し二ヶ所に炉を有する一軒の住居址である可能性も残ることも指摘しておこう。

遺物 第224図

検出された遺物はごく少量で、図示した1・2の他には須恵器片と土師器片数片がみられるのみである。これらの遺物はH-73・H-74のどちらかに伴うものなのかどうなのか判断できなかった。

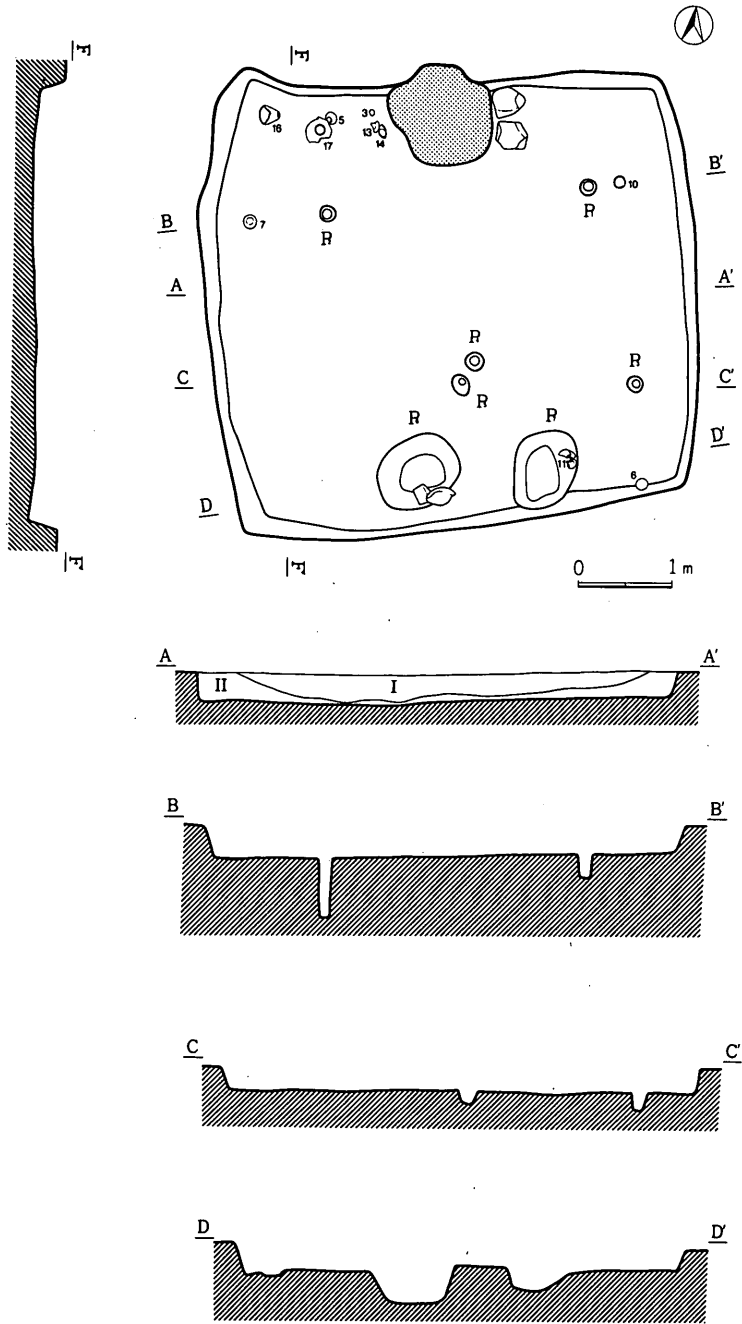
1は、いわゆる「かわらけ」である。その胎土は精選されず焼成も良好でない。ロクロ整形により、回転糸切りによる底部を見せている。

2は、流紋岩の砥石である。細身で、4面が研砥に供されている。

時期

H-73・H-74号住居址は、その切り合いによる新旧関係は明確でなく、出土遺物も少ないため時期決定が困難であるが、1のかわらけからするとどちらかは古代末期から中世に位置付けられることになろうか。屋内の火扱についても、古墳時代中期以降からはカマドが採用されるが再び古代末期になると炉が採用される傾向がある。両住居址の構造も古代末期から中世の住居形態にあてはまらないものではないといえる。

1 竖穴住居址



第225图 H-75号住居址实测图 (1:80)

## (75) H-75号住居址

## 遺構 第225・226図

本住居址は、第II区セー24グリッドにおいて検出された。

H-75号住居址は、南北4.75m東西5.2mの隅丸方形を呈し、床面積19.8㎡を測り、主軸方向N-17°-Wを指す。壁高は25~30cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴と考えられるピットは、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4コーナーが検出された。これらのうちP<sub>1</sub>はI区中央、P<sub>2</sub>はII区中央、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>はIV区のやや端に寄った位置にある。また、P<sub>4</sub>の横にあるP<sub>5</sub>も柱穴となるのかもしれない。P<sub>1</sub>は15cm×15cm深さ

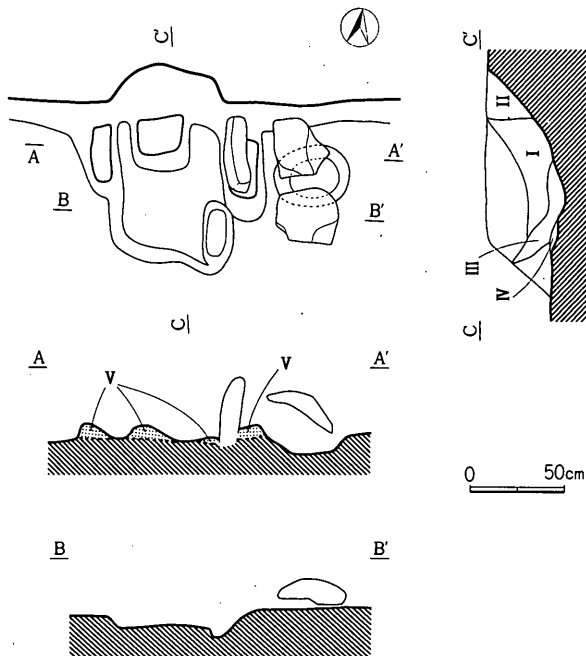
25cm、P<sub>2</sub>は18cm×17cm深さ60cm、P<sub>3</sub>は16cm×16cm深さ20cm、P<sub>4</sub>は18cm×18cm深さ15cm、P<sub>5</sub>は24cm×17cm深さ5cmを測る。また、南壁際にはP<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>が並んで検出された。P<sub>6</sub>は90cm×70cm深さ40cm、P<sub>7</sub>は90cm×70cm深さ22cmを測る。

覆土は、2層に分層された。I層が黒色土層・II層が黒褐色土層で、土層構成はH-66号住居址と同様であった。

遺物は、カマド西脇の床面上より13・14の高坏脚部・3の手捏・17の甕・5の無頸壺・16の甑の各器種が並んで検出された。また、西壁際の床面上からは7の坏が、P<sub>1</sub>の東脇床面上からは10の高坏坏部が検出された。またP<sub>7</sub>中からは11の器台が潰れた状態で、南東コーナーの床面上からは6の蓋が検出された。これ以外の遺物はいずれも覆土中から検出されたものであった。

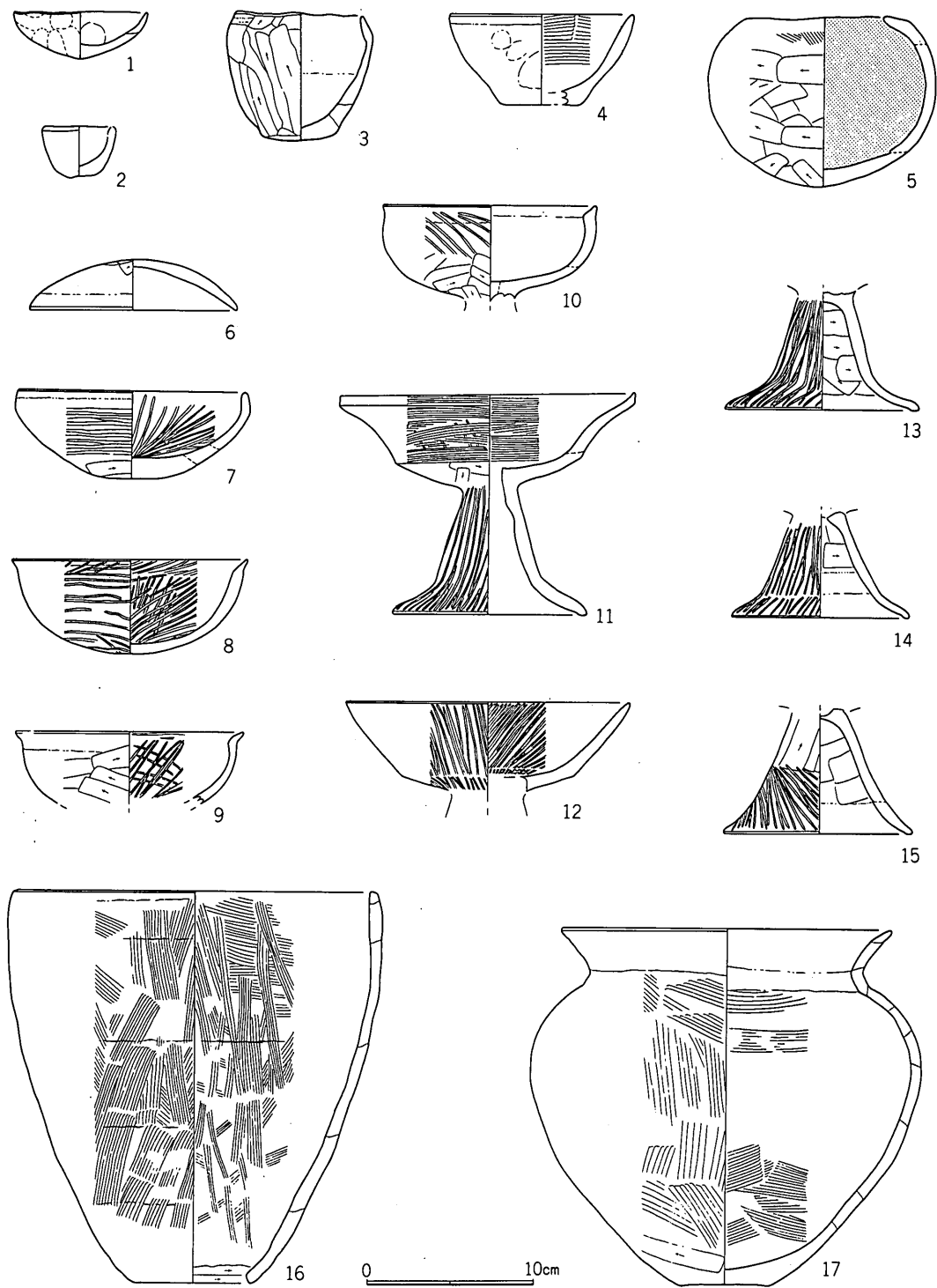
カマドは、北壁中央より検出された。僅か東袖の一部を残すのみで、その大半は破壊された状態にあった。残された東袖は、偏平な安山岩礫が据えられ粘土(V層)で固められた状態であった。また、カマドの東脇には2枚の偏平な安山岩礫がみられたが、これもカマドの構材として用いられていたものと考えられる。この礫の下位には、40cm×32cm深さ8cmの楕円形のピットが認められた。カマド覆土は4層に分層された。I層は焼土をよく含む黒褐色土層、II層は焼土を多く含む黒褐色土層、III層は焼土を若干含む黒褐色土層、IV層は赤褐色の焼土層であった。

## 遺物 第227・228図



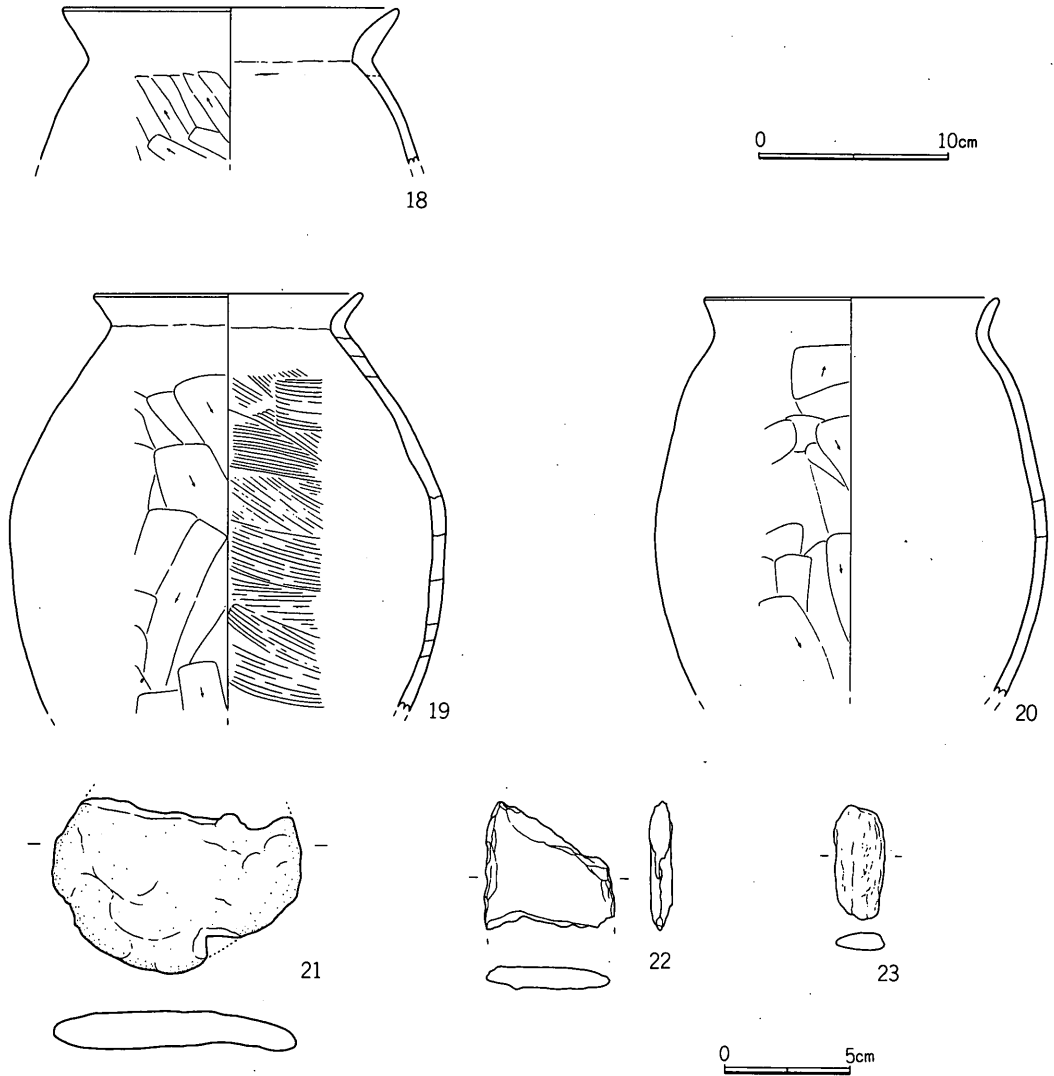
第226図 H-75号住居址カマド実測図(1:40)

1 竖穴住居址



第227图 H-75号住居址出土遗物 (1:4)

IV 遺構と遺物



第228図 H-75号住居址出土遺物 (18・19・20=1:4, 21・22・23=1:3)

本住居址から検出された土師器は、手捏・無頸壺・蓋・坏・高坏・器台・甌・甕と多器種に及んでいる。

手捏土器が数多く検出されているのが本住居址の特徴といえる。図示した1～4の他、4個体分の手捏土器破片がみられた。

5の無頸壺は、内面に赤色塗彩の施こされたもので、焼成のあまいものである。本例と同様な無頸壺に、H-67号住居址出土の4・5の2個態がある。

6は土師器蓋で、焼成良好な優品である。

7～9は土師器坏で、7は素口縁部縁を呈するもの、8・9は短く外反する口縁部をみせる坏

第101表 H-75号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	手捏	(8.1) 2.8 —	環形態を呈した小形の手捏土器。	外面 ナデ 内面 ナデ	胎土は精選されず灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。
2 (回)	手捏	4.5 — 2.8	断面が「U」字状を呈し、底部は丸味をおびた平底の小形の手捏土器。	外面 ナデ 内面 ナデ	胎土は精選されずにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。
3 (完)	手捏	7.7 7.6 4.6	口縁部は内湾し、底部は丸味をおびた平底をとる小形の手捏土器。鉢形態を呈する。	外面 口縁部ヨコナデの後、体部縦位のヘラケズリ(光沢をもつ) 内面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	胎土は精選されず赤褐色(5YR4/6)を呈する焼成不良。
4 (回)	手捏	(11.2) (5.4) (5.0)	逆「八」字状を呈する手捏土器。底部平底。	外面 全体に指頭によるナデ、口唇部ヨコナデ 内面 刷毛目状調整	胎土は精選されず明褐色(7.5YR5/8)で、焼成不良。
5 (完)	無頸壺	8.3 10.1 —	器形は球体を呈し、口縁部は内湾する。底部丸底。完形品。	外面 体部全体に横位のヘラケズリがなされ、若干の刷毛目状調整が認められる。 口唇部ヨコナデ。 内面 ヨコナデの後、赤色塗彩。	胎土は橙色(7.5YR6/6)で精選されず焼成不良。表面の剝離が著しい。
6 (完)	蓋	— 3.0 12.6	偏平な半球状を呈する。あるいは坏としてとらえられるか。完形品。	外面 ヘラケズリの後、体部ナデ、端部ヨコナデ 内面 ヨコナデ	胎土は比較的精選されにぶい橙色を呈する(5YR7/4)焼成良好。
7 (完)	坏	13.8 5.2 —	体部は丸味をおびて外反したのち、口唇部でやや内湾する。底部丸底。ほぼ完形。	外面 口唇部ヨコナデ、体部横位のヘラミガキ 底部ヘラケズリ 内面 口唇部ヨコナデの後、全体に放射状暗文が施される。	胎土は砂粒を含み橙色(7.5YR6/6)を呈する。
8 (回)	坏	14.2 5.7 —	底部から体部にかけては半球状の器形を呈し、口唇部は短く外反する。	外面 体部ヘラケズリ、口唇部ヨコナデの後全体に横位のヘラミガキ 内面 全体に放射状のヘラミガキ	胎土は砂粒を含み橙色(2.5YR6/6)を呈する。
9 (回)	坏	(13.8) — —	体部は球状を呈し、口唇部は短く外反する。底部は丸底になるものと思われる。	外面 口縁部ヨコナデの後、体部横位のヘラケズリ 内面 ナデの後、放射状の暗文が施される。	胎土は砂粒を含み橙色(7.5YR6/6)を呈する。
10 (完)	高坏	12.9 — —	坏部体は球状を呈し、口唇部は短く外反する。脚部の形状は不明。	外面 体部下半はヘラケズリ、上半はヨコナデの後ヘラミガキ 内面 口唇部ヨコナデ、他は全体に剝離が激しく調整不明。	胎土は精選されずにぶい赤褐色を呈する。(5YR4/4)
11 (完)	器台	17.8 13.1 11.7	台部は稜をもって外反し、脚部はラップ状に外反する。坏部底には焼成前の穿孔があり、これにより機能的には器台となる。ほぼ完形。	外面 坏体部は横位の刷毛目状調整、脚部はヨコナデの後、縦位のヘラミガキ 内面 坏部はヨコの刷毛目状調整 脚部はヨコナデ	胎土は砂粒を含み橙色(7.5YR6/6)を呈する。
12 (回)	高坏	(17.2) — —	坏部は稜をもって外反する。	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	胎土は比較的精選され橙色(2.5YR6/6)を呈するH-66の4と接合
13 (完)	高坏	— — 11.6	脚部は下位で大きく広がるラップ状を呈する。	外面 裾部分ヨコナデの後、全体に縦位のヘラミガキ 内面 体部横位のヘラケズリ、裾部分ヨコナデ	胎土は砂粒を含み橙色(5YR6/8)を呈する。
14 (回)	高坏	— — (10.8)	脚部は下位で大きく広がるラップ状を呈する。	外面 裾部分ヨコナデの後、全体に縦位のヘラミガキ 内面 上半部横位のヘラケズリ 下半部ヨコナデ	胎土は砂粒を含み橙色(5YR6/6)を呈する。
15 (完)	高坏	— — 11.4	脚部はラップ状にひろがる。	外面 上半部縦位のヘラケズリ、下半部ヘラミガキ 内面 横位のヘラケズリ、裾部ヨコナデ	胎土は砂粒を含み橙色(2.5YR6/6)
16 (回)	甔	(22.0) 23.3 7.0	器形は全体的にゆるく湾曲し、底部は径の大きい単孔となる。	外面 ヘラケズリの後、刷毛目状調整 内面 刷毛目状調整	胎土は砂粒を含み橙色(7.5YR6/6)を呈する。
17 (回)	甔	(20.0) 21.2 5.3	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状にふくらむ。底部は径の小さい平底を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目状調整 底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含み褐色(7.5YR4/3)を呈する。焼成不良。
18 (回)	甔	(17.9) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	胎土は砂粒を多く含み褐色(7.5YR7/6)
19 (回)	甔	(14.4) — —	口縁部は短く「く」の字状に外反する。胴部はややふくらみをおびた長胴を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含み褐色(7.5YR6/6)を呈する。



IV 遺構と遺物

20 (回)	甕	(15.7) 二	口縁部は短く弱く外反する。 胴部はふくらみをおびた長胴を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	胎土は砂粒を多く 含み橙色を呈する (5 YR 6 / 6)
-----------	---	-------------	-------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------

である。10は高坏であるがその坏部は  
8・9と同様な形態を呈している。

11は器台である。高坏は同様な器形を  
呈するが、その坏部底には焼成前の穿孔  
がみられる。

12～15は高坏の坏部あるいは脚部であ  
る。このうち12の坏部は、H-66出土の脚部4との接合をみた。

16は甑である。底部は径7cmを測る単孔となっている。

17～20は甕である。このうち17は胴部が球状を呈するものであり、19・20は口縁部が短く外反する長胴甕である。

土製品としては、21の土版が検出されている。不正楕円形を呈する偏平な焼き物で、手捏土器と同様胎土は精選されず焼成も良好でない。片面には全面にわたって指痕および指紋がみられる。本遺物は祭祀的な性格を有するものであろうか。

石製品としては、粘板岩の剥片2点が出土している。このうち22の片面は研磨されている。これらは、実用的な石器の素材とは考えられないものであり、21と同様祭祀的性格を有する遺物といえようか。

時 期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第II期に位置付けられよう。

(76) H-76号住居址

遺 構 第229・230図

H-76号住居址は、第II区セ-23グリッドにおいて検出された。

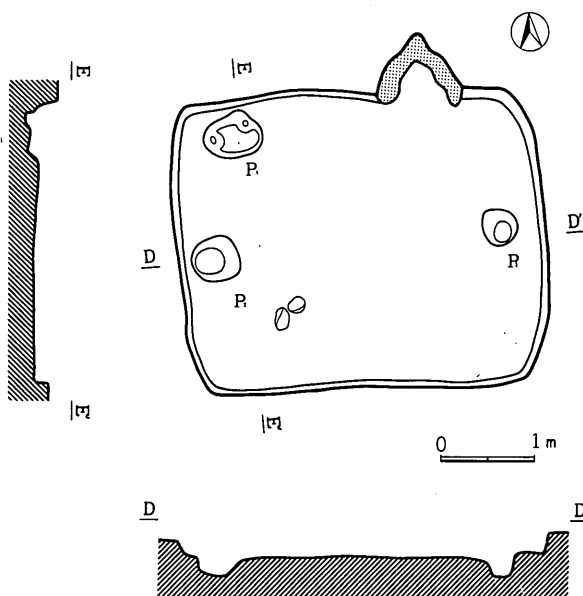
本住居址は、南北3.15m東西3.87mの隅丸方形を呈し、床面積10.7㎡を測り、主軸方向はN-11°-Wを指す。壁高は20cm前後を測り、壁溝は認められない。ピットは、東西両壁に沿って支柱穴であるP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の2個が認められ、北西コーナーにはP<sub>3</sub>が認められた。P<sub>1</sub>は40cm×35cm深さ20cm、P<sub>2</sub>は50cm×50cm深さ20cm、P<sub>3</sub>は63cm×50cm深さ15cmを測る。

覆土はI層のみで、パミスをよく含む黒色土層であった。遺物はいずれも覆土中から出土している。

第102表 H-75号住居址出土遺物一覧表〈土製品・石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
21	土 版	土製品	(6.4)	9.8	1.5	(80)	
22	不 明	粘板岩	(5.0)	5.2	0.9	(28)	
23	不 明	粘板岩	4.5	2.0	0.7	9	

1 竪穴住居址

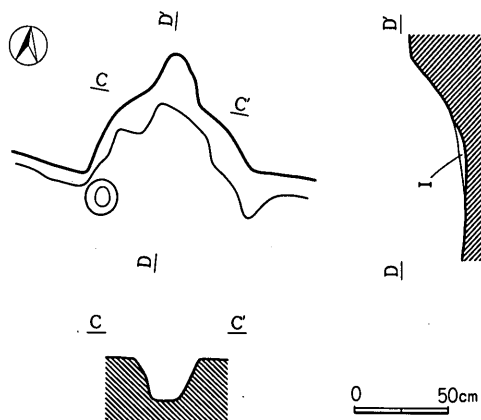


第229図 H-76号住居址実測図 (1:80)

カマドは、北壁中央よりやや東寄りに位置するが、すでに壊滅状態にあった。図にはその掘り方を示したが、プランは乳頭状に壁外に突出する。また、西側にみられるピットは袖石の抜き取り痕と考えられる。カマド使用にかかわると考えられる土層堆積はI層のみで、焼土を含む黒褐色土層である。

遺物 第231図

本住居址より検出された遺物はきわめて少ないが、須恵器では坏・長頸瓶、土師器では甕の各器種がみられた。

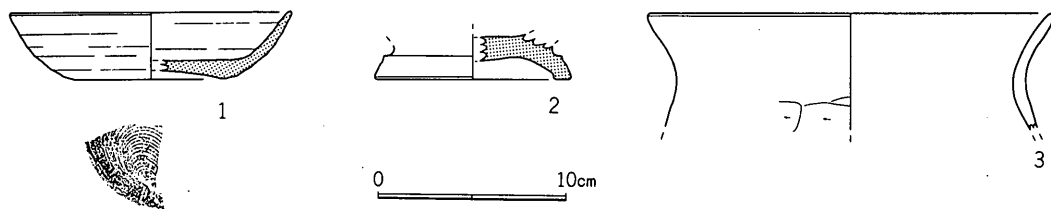


第230図 H-76号住居址カマド実測図 (1:40)

- 1は須恵器坏で、回転糸切りによる底部を見せている。
  - 2は、須恵器長頸瓶底部と考えられるもので、高台付のものである。
  - 3は、土師器甕のゆるく「く」の字状に外反する口縁部である。
- この他、鉄鏝の基部?が1点検出されている(4)。

時期

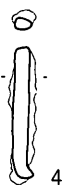
IV 遺構と遺物



第231図 H-76号住居址出土遺物 (1:4)

第103表 H-76号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	<15.0> 3.5 9.1	体部は丸味をもって外反し、底部平底。	外面 ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は灰色を呈する(10Y5/1)
2 (回)	長頸瓶 (須)	- - (10.5)	高台部。	外面 ロクロヨコナデ、底部に自然釉付着 内面 (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色を呈する(N7/0)
3 (回)	甕	<21.5> - -	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土は橙色を呈する。 (5YR6/6)



0 3cm

第104表 H-76号住居址出土遺物一覧表〈金属器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
4	鉄 鏃	鉄	-	-	-	(5)	

第232図 H-76号住居址  
出土遺物 (1:3)

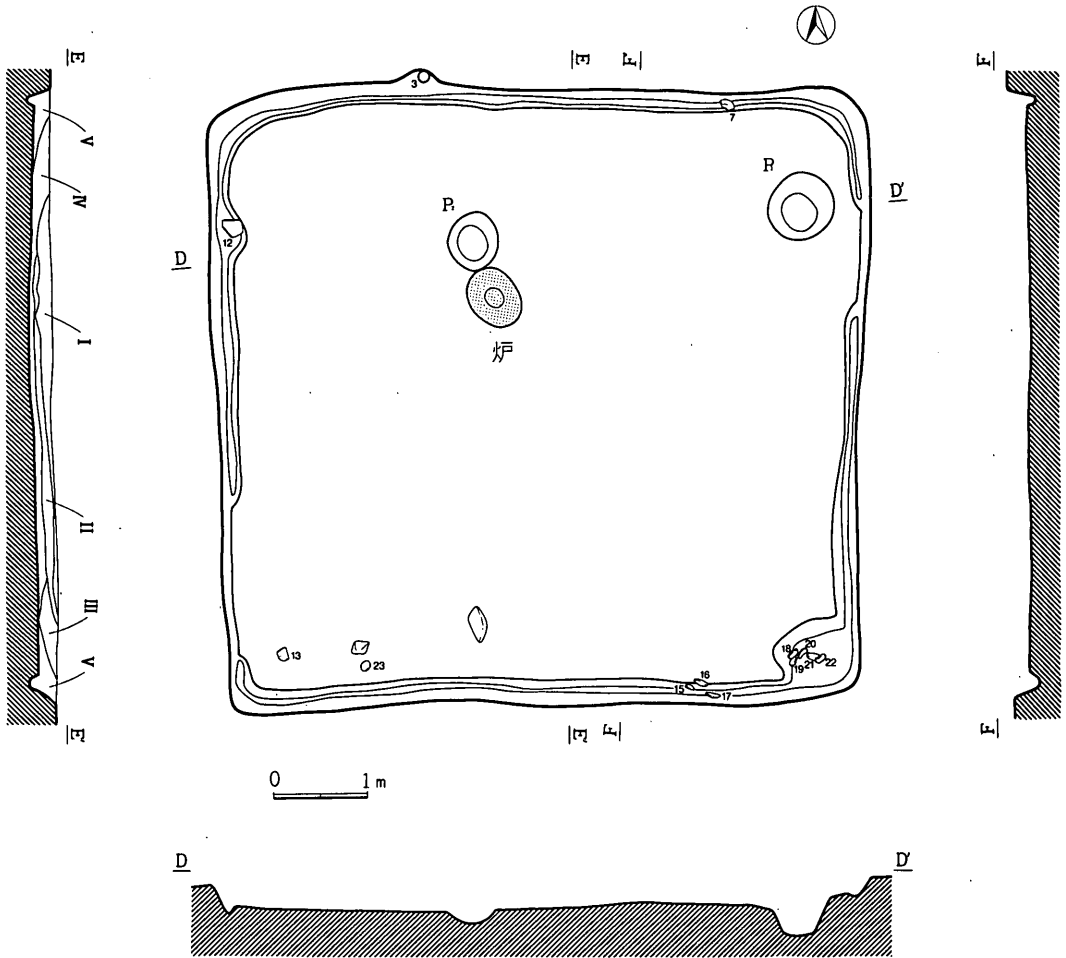
本住居址は、奈良・平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。

(77) H-77号住居址

遺 構 第233・234図

H-77号住居址は、第II区セー23グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北6.6m東西7.0mの大形隅丸方形を呈し、床面積41.6㎡を測り、南北軸方向はN-7°-Wを指す。壁高は20前後を測る。壁溝は、東壁の一部と西壁の一部を除きほぼ全周している。ピットは、北東コーナー寄りからP<sub>1</sub>が、炉の北隣りからP<sub>2</sub>が検出されたのみである。P<sub>1</sub>



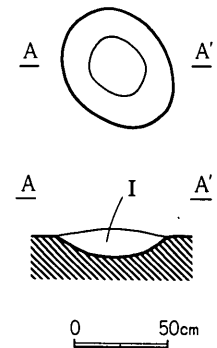
第233図 H-77号住居址実測図 (1 : 80)

は70cm×70cm深さ30cm、P<sub>2</sub>は60cm×55cm深さ10cmを測る。

遺物は、南東コーナーの床面上よりまとまって15~22の石錘が、南西コーナー付近の床面上からは23の磨石と13の底部が、西北コーナーの壁溝中からは12が、北壁上からは3の坏が、北壁壁溝中からは7の高坏坏部がそれぞれ検出されている。これ以外の遺物は、いずれも覆土中から出土したものである。

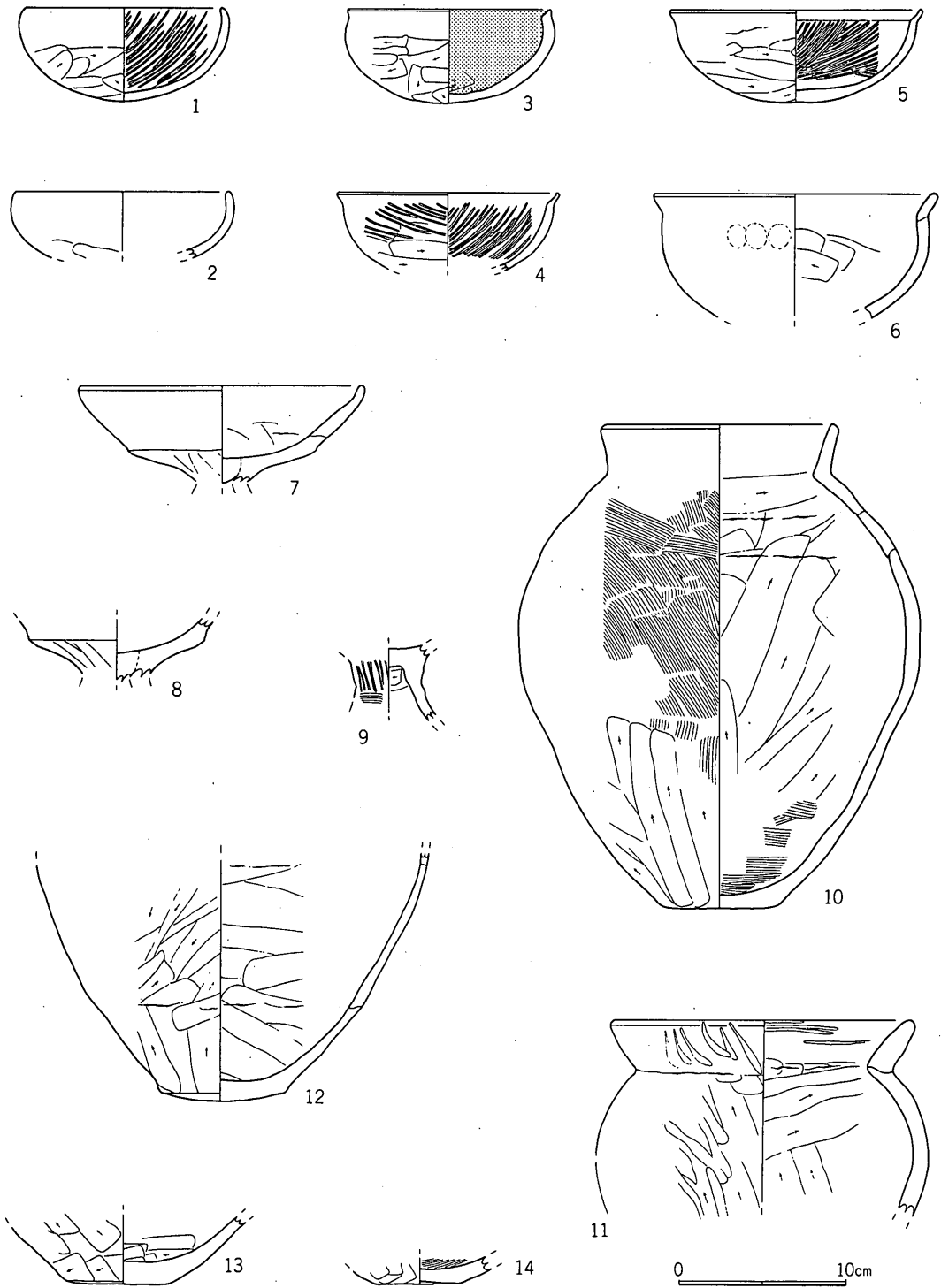
住居址覆土は、5層に分層された。I・III層が黒褐色土層、II層が茶褐色の砂層、IV層は黒色土層、V層は暗褐色土層で若干のロームが混入するものであった。

炉は、北壁寄りの中央より検出された。65cm×50cmの楕円形を呈



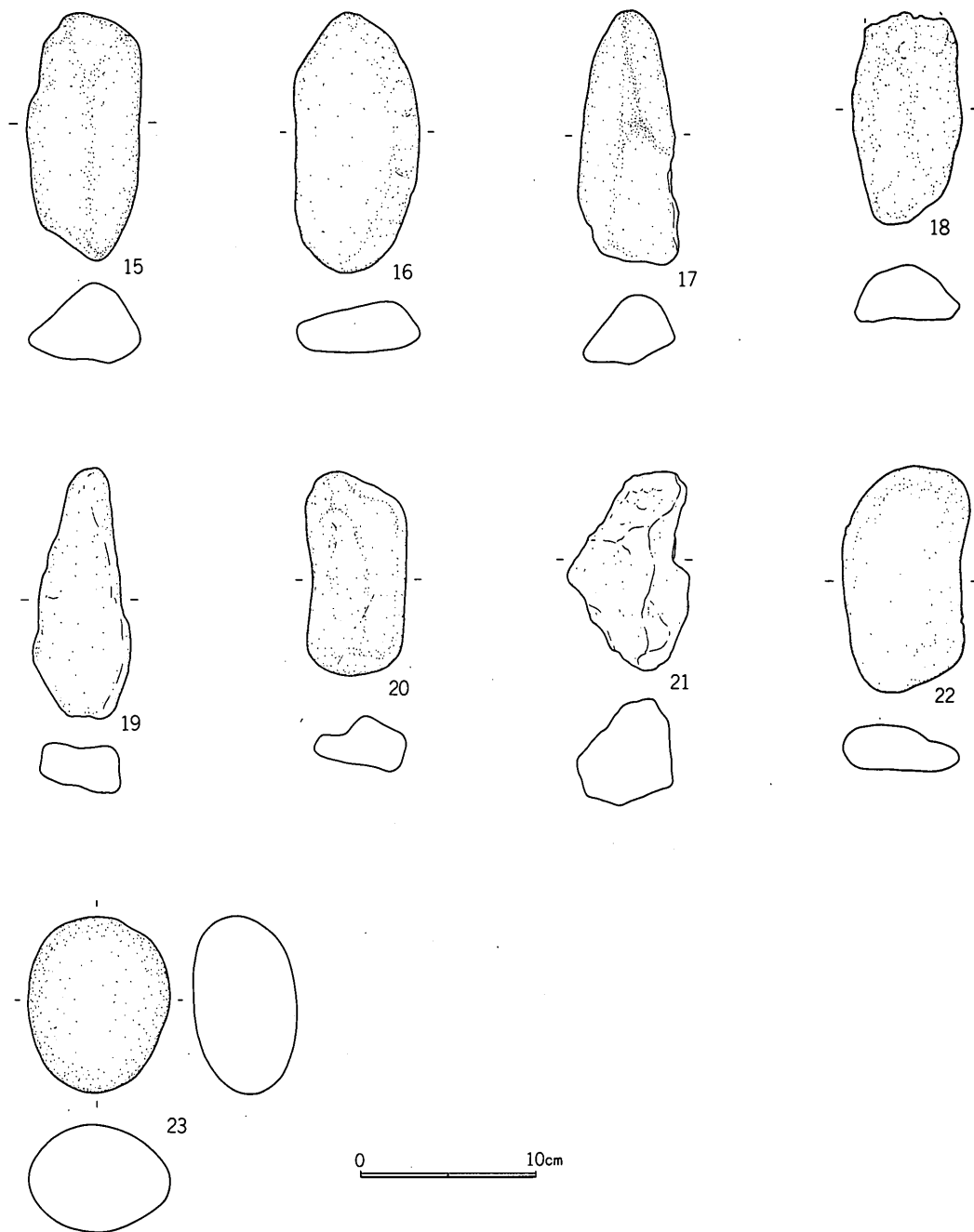
第234図 H-77号住居址炉 (1 : 40)

IV 遺構と遺物



第235図 H-77号住居址出土遺物 (1:4)

1 竪穴住居址



第236図 H-77号住居址出土遺物 (1 : 4)

するもので、褐色の焼土堆積が5cmほどみられた。

遺物 第235・236図

## IV 遺構と遺物

第105表 H-77号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	坏	(11.7) 5.5 —	底部から体部にかけて球状の器形を呈し、口唇部はやや内湾する。	外面 体部上半はヨコナデ 体部下半～底部はヘラケズリ 内面 体部上半ヨコナデの後、全体に放射状暗文を施す。	胎土は砂粒を多く含み、ぶい橙色を呈する。 (5YR6/4)
2 (回)	坏	(12.8) — —	体部は球状を呈するもので、口唇部はやや内湾する。	外面 体部上半はヨコナデ 体部下半はヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含み、ぶい橙色を呈する。 (7.5YR6/4)
3 (完)	坏	12.3 5.6 —	底部から体部にかけては球状の器形を呈し、口唇部で僅かに外反する。完形。	外面 口縁部ヨコナデ 体部下半～底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ(ヘラ?)の後、黒色処理	胎土は砂粒を含みにぶい黄褐色を呈する。 (10YR5/4)
4 (回)	坏	(13.4) — —	体部は球状を呈し、口縁部で短く外反したのち口唇部は内側へ突出する。	外面 口縁部ヨコナデ、体部はヘラケズリの後、若干のミガキが施こされる。 内面 ヨコナデの後、放射状にヘラミガキが施こされる。	胎土は砂粒を含み、ぶい橙色(5YR6/6)を呈する。
5 (回)	坏	(15.2) 5.5 —	底部から体部は球状を呈し、口縁部で短く外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、体部から底部にかけてヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデの後、体部ヘラミガキ	胎土は砂粒を含み、ぶい橙色(5YR6/6)
6 (回)	碗	(16.9) — —	体部は球状を呈し、口縁部は短く外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	胎土は精選されず、ぶい橙色(7.5YR7/6)を呈する。焼成不良。
7 (回)	高 坏	(17.1) — —	坏部は稜をもって外反する。	外面 体部上半ヨコナデ、体部下半ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は精選されず、ぶい橙色(5YR6/4)を呈する。焼成はあまり良好でない。
8 (回)	高 坏	— — —	坏部は稜をもって外反する。	外面 体部下半ヘラナデ 内面 ナデ	胎土は精選されず、ぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。焼成はあまり良好でない。
9 (完)	高 坏	— — —		外面 ミガキと若干の刷毛目状調整 内面 一部ヘラケズリ	胎土は精選されず、砂粒を多く含み、ぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。焼成不良。
10 (回)	壺	(14.3) 28.6 7.8	口縁部は直立気味に外反し、胴部はふくらんだ長胴となる。あるいは壺か。	外面 胴部刷毛目状調整の後、胴下半部ヘラケズリ、 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、 胴下半部刷毛目状調整	胎土は精選されず、砂粒を多く含み、ぶい黄褐色(10YR7/4)を呈する。焼成はあまり良好でない。
11 (完)	甕	(18.2) — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。器肉は全体に厚い。	外面 口縁部ヨコナデの後、若干のヘラナデ 胴部ヘラナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は精選されず、ぶい橙色(5YR6/4)を呈する
12 (完)		— 7.3	壺あるいは甕の下半部。底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ(刷毛目状調整)	胎土は砂粒を含み、ぶい橙色(7.5YR6/6)
13 (完)		— 6.4	壺あるいは甕の底部。平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は砂粒を多く含み、明赤褐色(5YR5/8)
14 (完)		— 5.0	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 刷毛目状調整	胎土は精選されず、砂粒を多く含み、ぶい赤褐色(5YR4/3)

本住居址からは、土師器の坏・碗・高坏・壺・甕が検出されている。

1～5は坏で、いずれも半球状のプロポーションを呈するが、素口縁の1・2と、口縁部が短く外反する3～5とがみられる。3は内面黒色研磨がなされている。

6は碗で、基本的には3～5の坏と同様な形状を呈している。

7・8は坏の坏部、9は脚部である。

10は、膨らんだ長胴を呈し口縁部が直立気味に外反する壺である。

11は、口縁部が外反し胴部が球状を呈するやや肉厚な甕である。

1 竪穴住居址

12～14は、壺あるいは甕の胴部下半～底部である。

石器では、15～22の石錘と、23の磨石が検出された。

15～22は、蓆などを編む際のおもりなどとして使用された石錘と考えられようか。

23は、楕円形の河床礫を用いた磨石で、全体に磨痕が認められる。

この他、図示しなかったが、H-75に

みられたような粘板岩の剥片が3点みられた。H-75のものと同様祭祀的な性格を帯びるものであろうか。

時期

本住居址は、古墳時代中期、前田遺跡第II期に位置付けられよう。

第106表 H-77号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
15	石錘	安山岩	13.8	6.4	4.5	525	
16	石錘	安山岩	14.7	7.1	2.8	425	
17	石錘	安山岩	14.1	5.4	3.9	370	
18	石錘	安山岩	(11.9)	6.2	3.3	(315)	
19	石錘	安山岩	14.2	5.5	2.7	285	
20	石錘	安山岩	11.4	5.7	3.3	295	
21	石錘	安山岩	11.2	7.0	6.0	450	
22	石錘	安山岩	12.7	6.7	2.8	345	
23	磨石	安山岩	9.9	8.0	6.0	695	

(78) H-78号住居址

遺構 第237・238図

H-78号住居址は、第II区セ-23グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.8m東西4.4mの隅丸方形を呈し、床面積15.5m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-10°-Wを指す。壁高は10～20cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は中段にテラスをもち60cm×40cm深さ40cm、P<sub>2</sub>は40cm×35cm深さ45cm、P<sub>3</sub>は60cm×45cm深さ65cm、P<sub>4</sub>は45cm×40cm深さ40cmを測る。

覆土はI層のみで、パミス・ローム粒子をよく含む黒褐色土層であった。遺物はいずれも覆土中からの出土で、床面に密着した状態のものは認められなかった。

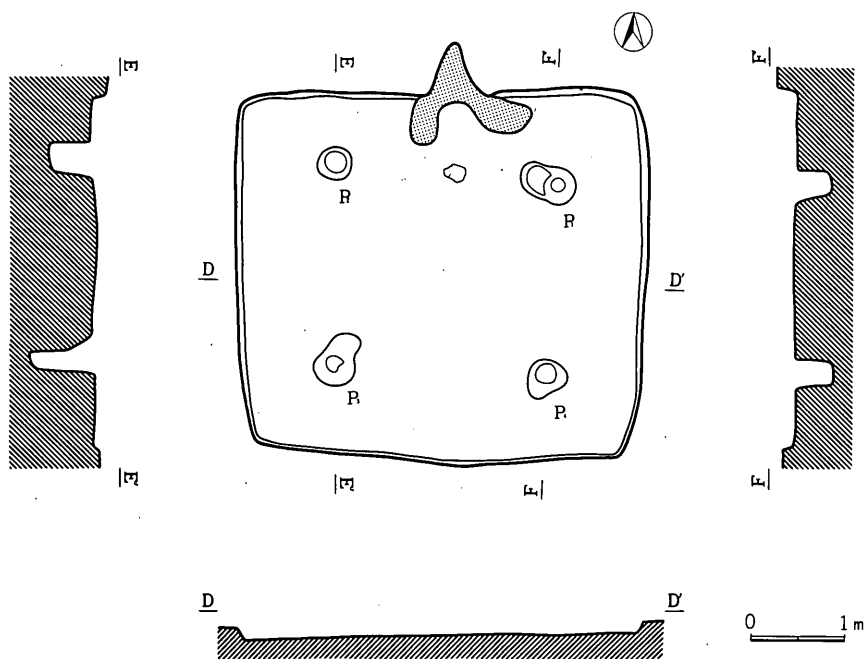
カマドは、北壁中央に存在するが、粘土（II層）からなる東西両袖の一部をとどめるのみであった。カマド覆土は6層に分層された。I層は黒色土層、II層は灰色粘土層で天井部を構成していたものと考えられる。III層はカーボンの堆積層で、IV層は若干の焼土を含む黒褐色土層、V層は赤褐色の焼土層、VI層は焼土・カーボン等をまったく含まない暗褐色土層であった。

遺物

本住居址より検出された遺物は、ごく僅かで、薄手の土師器甕の破片のみであった。中には、「く」の字状に外反する口縁部破片もみられたが、図示し得るものはなかった。



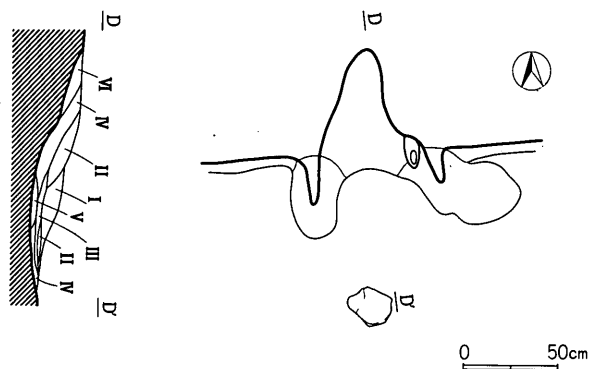
IV 遺構と遺物



第237図 H-78号住居址実測図 (1:40)

時期

本住居址は、出土遺物が土師器甕のみであるので、時期決定が困難であるが、その構造や周囲の住居址の位置付けを考え合わせ、奈良時代、前田遺跡第V期のものと想定しておこう。



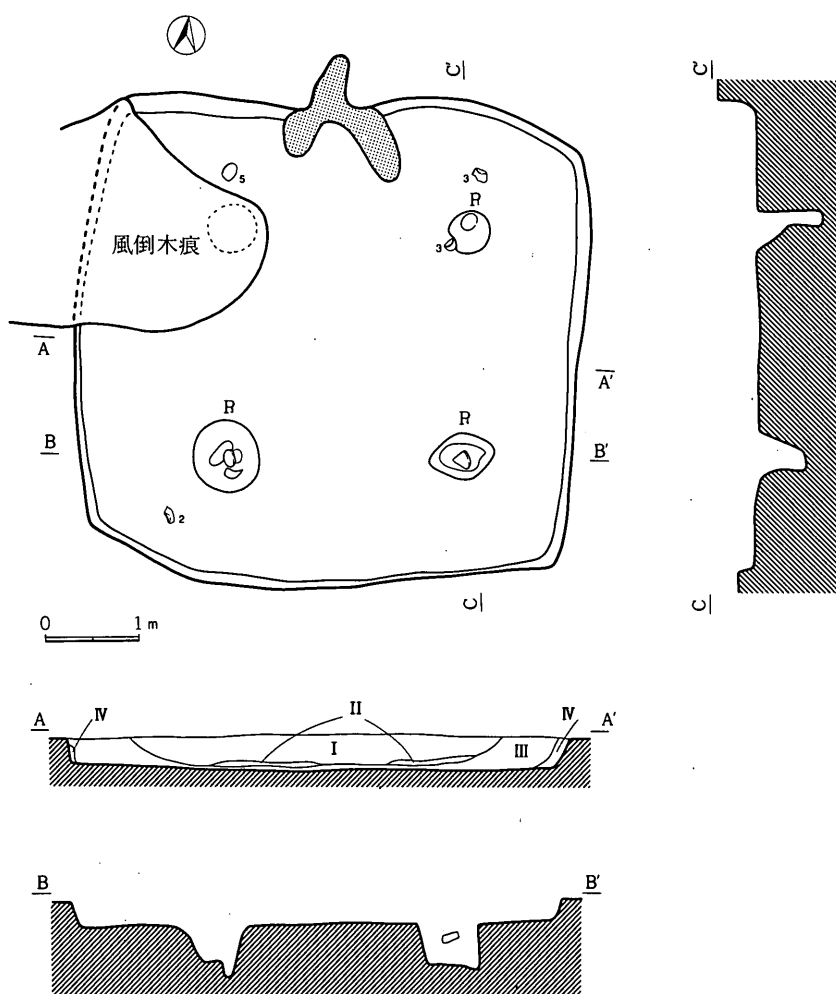
(79) H-79号住居址

遺構 第239・240図

第238図 H-78号住居址カマド実測図 (1:40)

H-79号住居址は、第II区ス・セ-24グリッドにおいて検出された。その西壁側の北半分は、風倒木によって攪乱を受けている。

本住居址は、南北5.1m東西5.4mの隅丸方形を呈し、床面積23.8㎡を測り、主軸方向はN-18°-Wを指す。壁高は20~30cmを測り、壁溝は認められない。支柱穴は、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の3個が確認されたが、おそらく風倒木による攪乱を受ける以前はII区においてP<sub>2</sub>が存在していたものと考え



第239図 H-79号住居址実測図 (1:80)

られる。P<sub>1</sub>は45cm×40cm深さ70cm、P<sub>3</sub>は75cm×70cm深さ55cmを測りテラスをもつものである。P<sub>4</sub>はその上部に偏平な礫がみられ、70cm×50cm深さ50cmを測る。

遺物は、南西コーナー部より2の坏が、P<sub>1</sub>付近の床面上より3の須恵器が、カマド西側の床面上より5の甕の底部がそれぞれ検出された。それ以外はいずれも覆土中からの出土である。

覆土は、4層に分層された。I層が小軽石を含む黒褐色土層、II層はローム粒子小軽石を含む明黄褐色土層、III層は小軽石を含む黒色土層、IV層はローム粒子を多量に含む黄褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに半壊状態にあった。その両袖は粘土層(VI層)からなり、火床部は一旦浅く掘り込まれた後ロームを含むV層で埋め戻されたものであった。カマド

IV 遺構と遺物

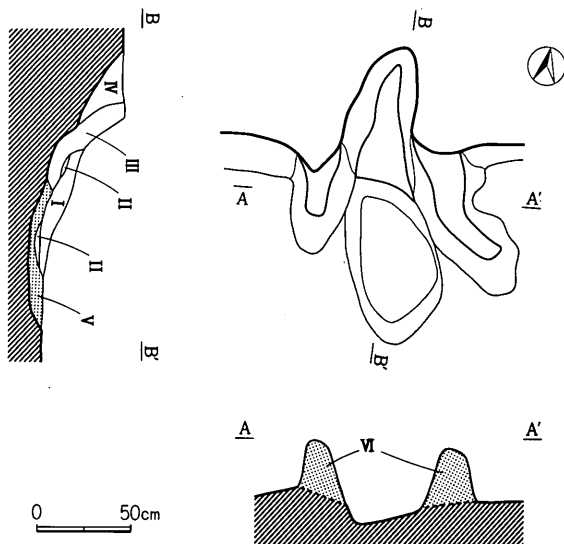
覆土は4層に分層された。I層が多量の焼土・灰を含む黄灰色土層、II層が赤褐色の焼土層、III層が若干の焼土・カーボンを含む黒褐色土層、IV層が焼土・カーボンを含まない黄褐色土層であった。

遺物 第241・242図

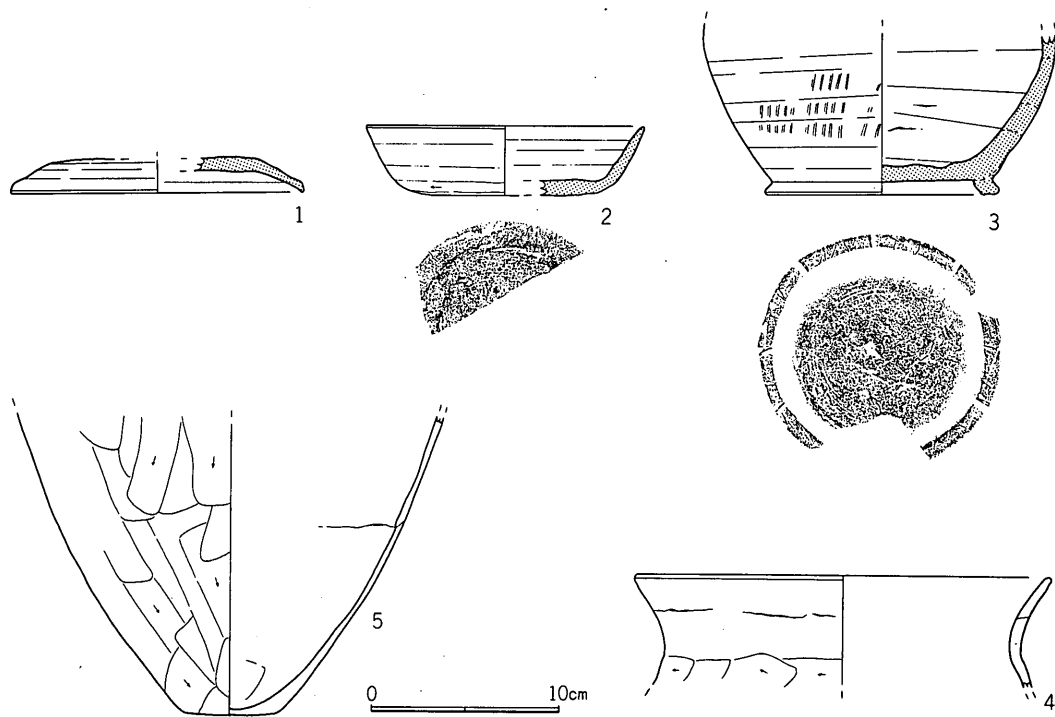
本住居址から検出された遺物には、須恵器では蓋・坏・長頸瓶、土師器では甕がある。

1は須恵器蓋で、つまみ部の形状は不明である。

2は須恵器坏で、回転ヘラケズ

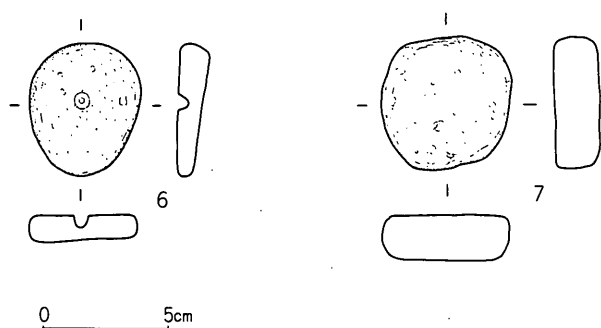


第240図 H-79号住居址カマド実測図 (1:40)



第241図 H-79号住居址出土遺物 (1:4)

1 竪穴住居址



第242図 H-79号住居址出土遺物(1:3)

師器甕の口縁部で、5は土師器甕の胴下半部である。

6・7は、偏平に面取りされた軽石で、紡錘車の未成品と考えられる。6には片面側に穿孔がなされ始めているが、7にはまだ穿孔はみられない。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第VI期に位置付けられよう。

りのなされた底部をみせている。この他、回転ヘラキリによる底部破片が一片みられた。

3は須恵器長頸瓶あるいは短頸壺の胴下半部で、高台付のものである。底部には回転ヘラケズリがなされており、切り離し方法は不明である。

4は「く」の字状に外反する土

第107表 H-79号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	蓋 (須)	— (15.5)	つまみ部の形状不明	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰白色(5Y8/1) を呈する。
2 (回)	坏 (須)	<14.8> 3.7 <9.8>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され ず砂粒を多く含 み灰白色 (7.5Y8/1)
3 (完)	(須)	— — 12.4	器種は短頸壺か長頸壺になるものと考えられる。 高台が貼り付けられる。	外面 体部は叩きの後ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラケズリの後、高台を付す。 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され、 灰褐色(5YR 4/2)呈する。 焼成良好。
4 (回)	甕	<22.1> —	口縁部は「く」の字状にゆるく外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい褐色を呈する (7.5YR5/4)
5 (回)	甕	— — 5.0	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は明赤褐色を呈する。 (5YR5/6)

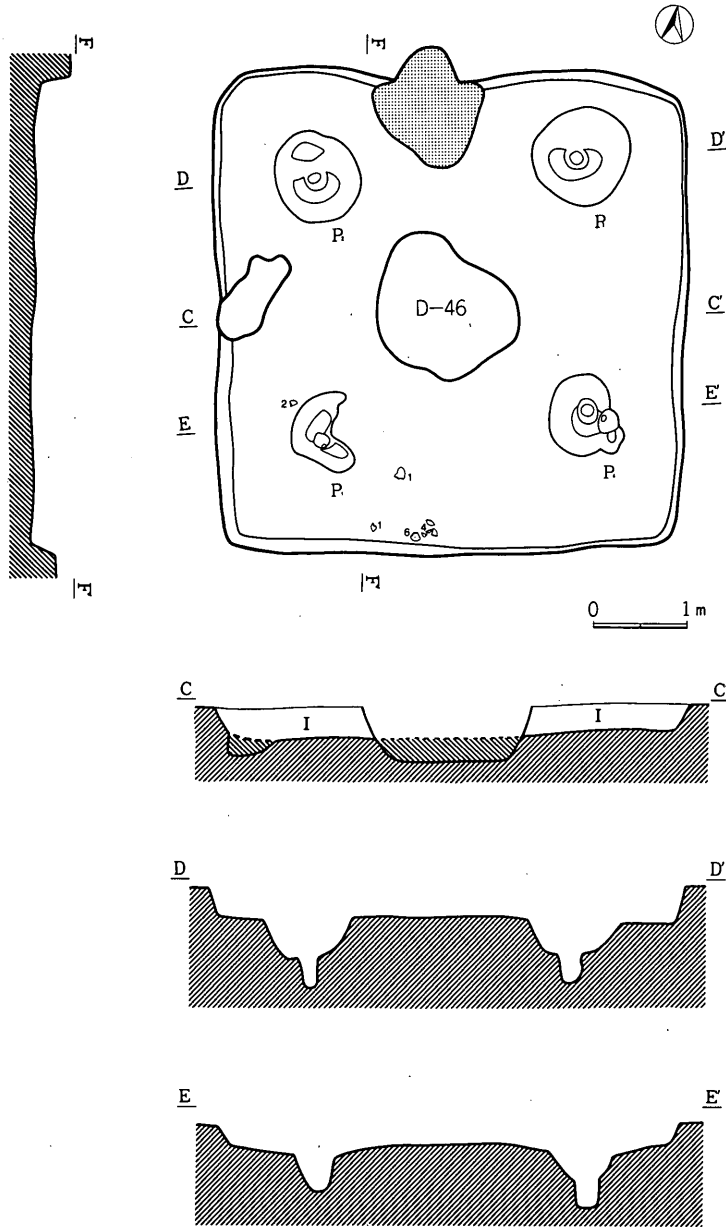
第108表 H-79号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
6	紡錘車?	軽石	5.2	4.4	1.2	10	未成品
7	紡錘車?	軽石	5.2	5.1	1.8	25	未成品

(80) H-80号住居址

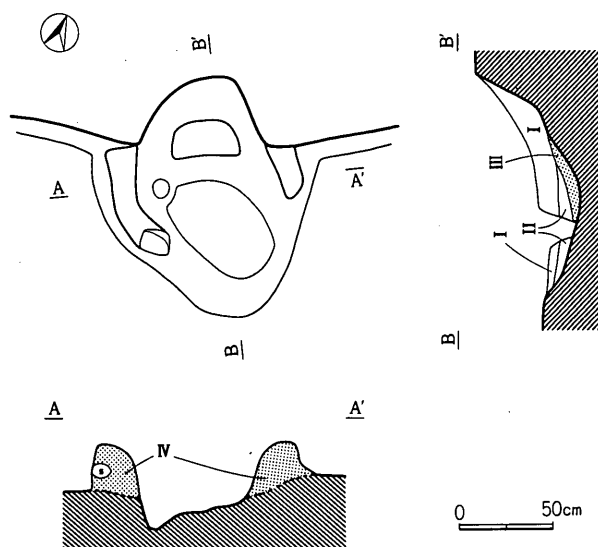
遺構 第243・244図

H-80号住居址は、第II区セ-24グリッドにおいて検出された。その中央部にはD-46が本住



第243図 H-80号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址



第244図 H-80号住居址カマド実測図 (1:40)

居址を切って存在し、また西壁際には攪乱がみられた。

本住居址は、南北5.1m東西5.0mの隅丸方形を呈し、床面積22.9m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-14°-Wを指す。壁高は20~40cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は100cm×105cm深さ65cm、P<sub>2</sub>は100cm×90cm深さ70cm、P<sub>3</sub>は不規則な形状を呈し90cm×40cm深さ40cm、P<sub>4</sub>は85cm×65cm深さ60cmを測る。

遺物は、南壁際より1の蓋・4・6の坏が、西壁寄りに2の蓋が検出された。それ以外の遺物はいずれも覆土中からの出土である。

覆土はI層のみで、パミスを若干含む粘性のある黒色土層であった。

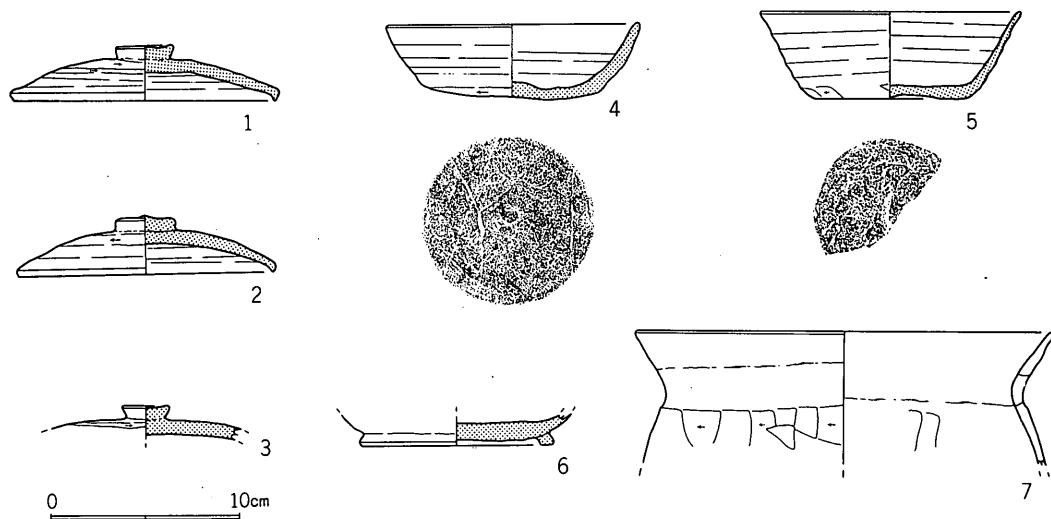
カマドは、北壁中央に検出されたが、東西両袖の一部を除いてほぼ壊滅状態にあった。残っていた袖部は粘土 (IV層) で構築されているものであった。その火床部は一旦掘り込まれた後、僅かに黒色土 (III層) で埋め戻されたもので、浅い窪みとなっていた。カマドの使用に伴うと考えられる覆土は2層で、I層が若干の焼土を含む暗褐色土層、II層は赤褐色の焼土層であった。覆土堆積の中央には支脚石の抜き痕がみられた。

遺物 第245図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・坏・甕、土師器では甕がある。

1~3は須恵器蓋で、つまみ部が偏平な盤状を呈するものである。このうち2の内面は光沢をもちかなりつるつるしており、研磨の客体となったことを窺わせる。あるいは転用硯等となったのであろう。ただし墨の付着等は認められない。

IV 遺構と遺物



第245図 H-80号住居址出土遺物 (1:4)

第109表 H-80号住居址出土遺物一覧表 <土器>

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	蓋 (須)	3.0 2.9 13.8	つまみ部は中央部のややくぼんだ盤状を呈する。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み暗青灰色(5BG4/1)
2 (回)	蓋 (須)	3.1 3.1 <13.4>	つまみ部は中央部はやや突出するが、全体に盤状を呈する。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ、全体につるつとしており転用硯等となったか(ただし墨の付着はなし) (ロクロ左回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み暗青灰色00B G4/1を呈する。
3 (回)	蓋 (須)	(2.5) — —	つまみ部は下にややすぼんだ盤状を呈する。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を含み灰白色(10Y7/1)
4 (完)	坏 (須)	13.6 3.8 9.2	体部は外反し、底部平底。完形。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は細砂粒を含み灰色(N6/0)
5 (回)	坏 (須)	<13.8> 4.6 (8.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y7/1)
6 (回)	坏 (須)	— — 10.2	底部には高台が貼り付けられる。	外面 底部回転ヘラケズリの後、高台貼り付ける。 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み緑灰色(10GY6/2)を呈する。
7 (回)	甕	(22.1) — —	口縁部は「く」の字状にゆるく外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

4~6は、須恵器坏で、6は高台付のものである。4は回転ヘラケリ、5はおそらく回転糸切りの後全面手持ちヘラケズリ、6は回転ヘラケズリによる底部を見せている。

7は、「く」の字状にゆるく外反する土師器甕の口縁部である。

時期

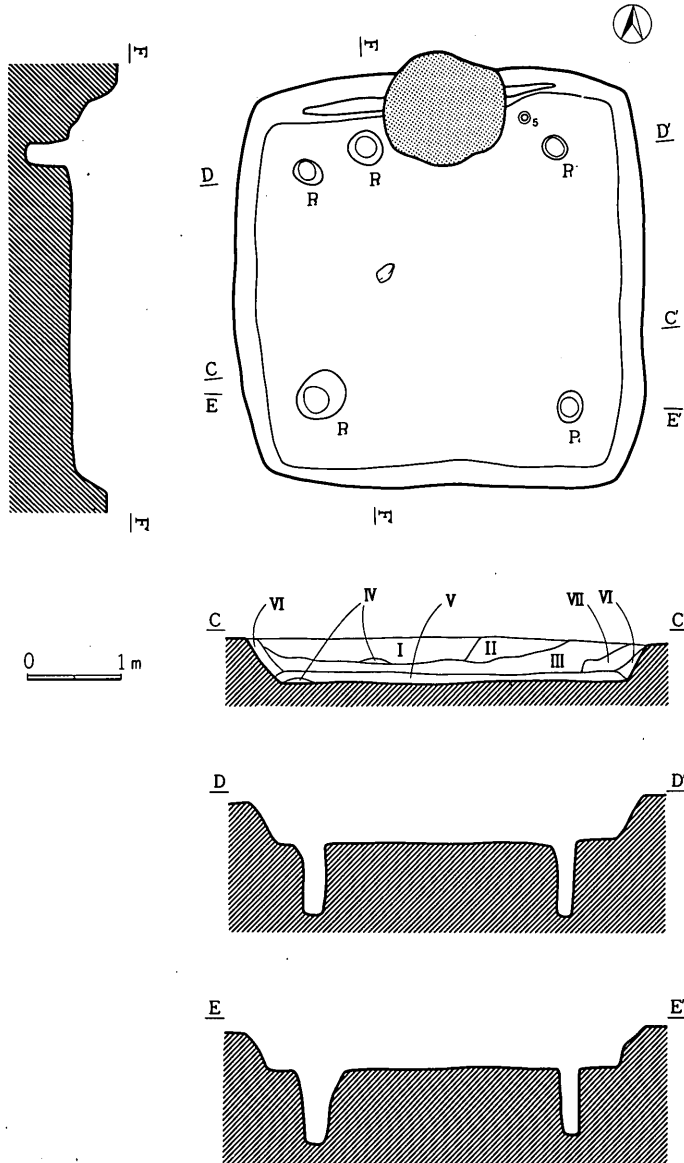
本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

(81) H-81号住居址

遺構 第246・247図

H-81号住居址は、第Ⅱ区ス・セ-23グリッドにおいて検出された。

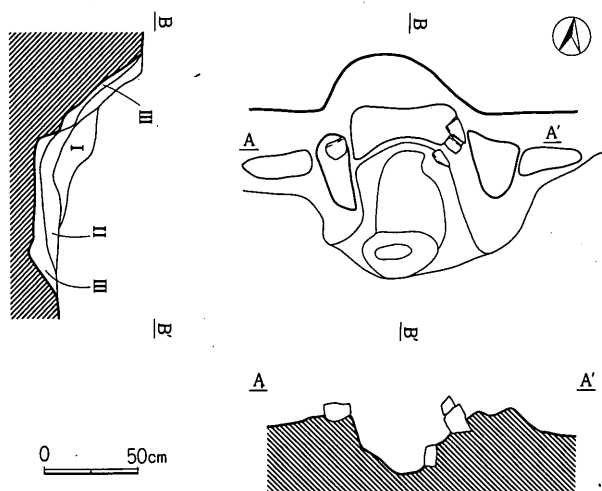
本住居址は、南北4.4m東西4.3mの隅丸方形を呈し、床面積14.6㎡を測り、主軸方向はN-10-Wを指す。壁片は40~50cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴としては、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個がみら



第246図 H-81号住居址実測図 (1:80)



IV 遺構と遺物



第247図 H-81号住居址カマド実測図 (1:40)

れ、また補助柱穴的な $P_5$ もみられた。 $P_1$ は25cm×25cm深さ80cm、 $P_2$ は30cm×25cm深さ75cm、 $P_3$ は55cm×48cm深さ75cm、 $P_4$ は35cm×27cm深さ70cm、 $P_5$ は35cm×35cm深さ45cmを測る。

遺物は、カマドの東脇の床面上より5の小形甕が検出された以外は、いずれも覆土中からの出土であった。

覆土は7層に分層された。I層が黒褐色土、II層は茶褐色土層、III層が暗茶褐色土層で、これら3層はいずれも小軽石を含み粘性の少ない層であった。IV層は黒褐色土層、V層はロームの二次堆積である黄褐色土層、VI層は黒色土層でいずれも小軽石を含まない粘性のない層である。VII層は小軽石を含む茶褐色土層であった。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに半壊状態にあった。僅かに残る両袖は、面取り軽石が据えられているものであった。火床部は、掘り方の段階ではやや掘り窪められていた。カマド使用に関連すると考えられる覆土は、3層に分層された。I層は灰層で若干のカーボンを含むものであった。II層は灰褐色土層で灰・焼土・カーボンを含み、III層は多量のカーボンを含む黒色土層である。

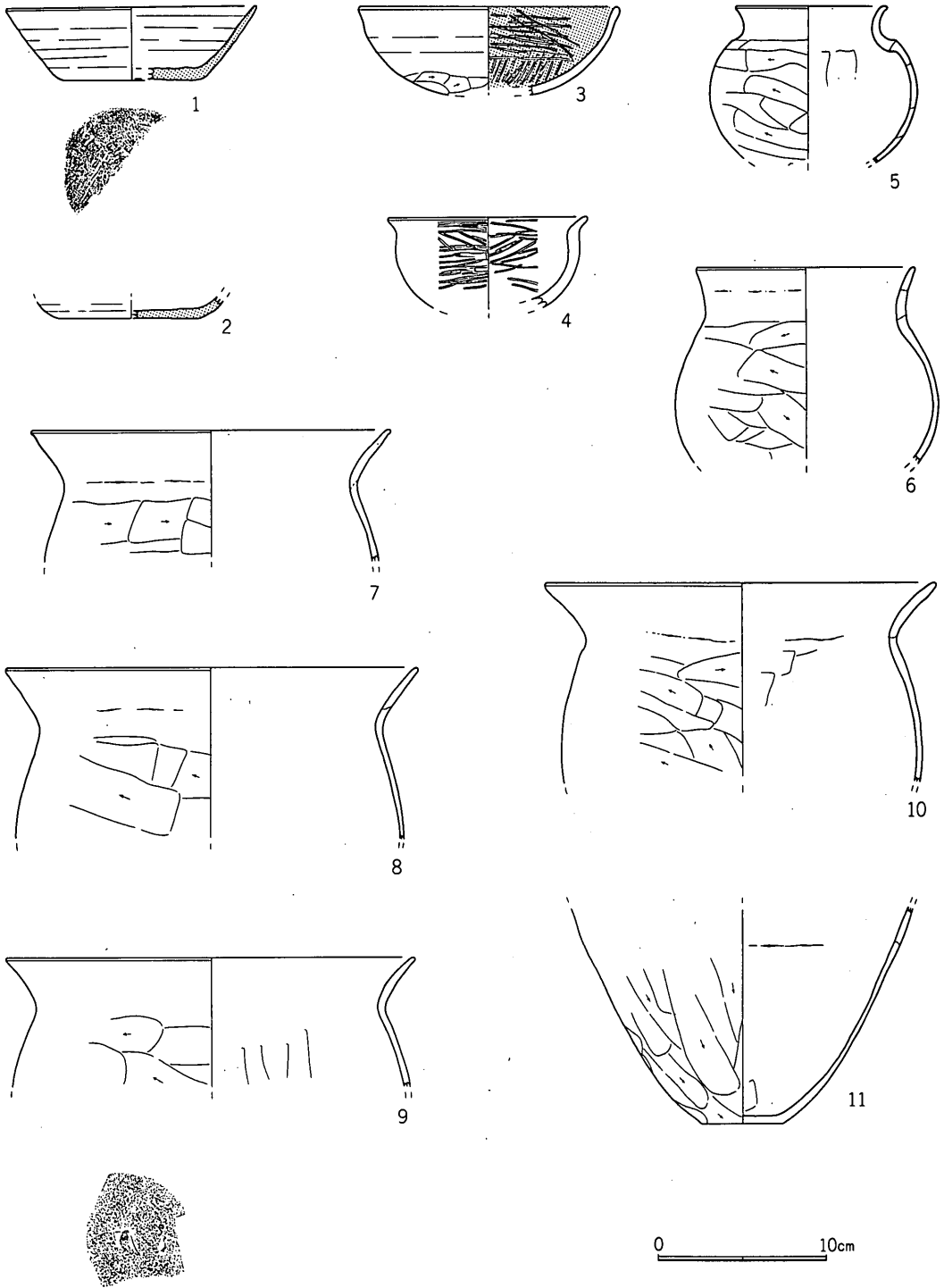
遺物 第248・249図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では坏、土師器では坏・甕がある。

1・2は須恵器坏である。1は回転ヘラキリ、2は回転ヘラケズリの底部をみせている。この他、回転ヘラキリによる須恵器底部破片が1片みられた。

3・4は土師器坏である。3はロクロ整形によるもので内面黒色研磨のなされた坏である。4は口縁部が短く外反するもので、おそらく古墳時代中・後期の遺物で、混入品であろう。

1 竖穴住居址

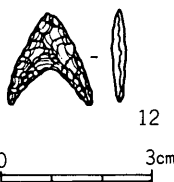


第248图 H-81号住居址出土遗物(1:4)

IV 遺構と遺物

第110表 H-81号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	(14.9) 4.2 (8.4)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y7/1)
2 (回)	坏 (須)	— — (8.1)	底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y6/1)を呈する。
3 (回)	坏	(15.5) — —	体部は弓なりに外反する。底部は丸底となるものと思われる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 黒色研磨 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい黄褐色(10YR7/4)を呈する。
4 (回)	坏	(11.9) — —	体部は球状を呈し、口縁部で短く外反する。	外面 ヨコのヘラミガキ 内面 口縁部ヨコナデの後、全体にヘラミガキ	胎土は精選され橙色(5YR6/6)を呈する。混入品であろう。
5 (完)	甕	9.0 — —	体部は球状を呈し、口縁部は弓なりに外反する小形の器形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。
6 (回)	甕	(13.0) — —	口縁部は直立気味に外反し、胴部のふくらむ小形の器形。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色を呈する(5YR6/6)
7 (回)	甕	(21.3) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色を呈する(7.5YR5/6)
8 (回)	甕	(24.5) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色を呈する(7.5YR6/6)
9 (回)	甕	(24.2) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ (全体に剥落が激しい)	胎土は明赤褐色を呈する。 (5YR5/6)
10 (回)	甕	(23.3) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色(5YR6/6)を呈する。
11 (回)	甕	— — (4.8)	底部平底。	外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴～底部ヘラナデ	胎土は明赤褐色(5YR4/6)を呈する。



第249図 H-81号住居址出土遺物(2:3)

第111表 H-81号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
12	石 鏃	黒曜石	1.8	1.7	0.3	0.4	

5は土師器の小形甕で、球胴を呈するものである。6も小形甕で直立気味に外反する口縁部をみせている。

7～10は「く」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕である。11は、土師器甕の胴部下半である。

石器では、II区より黒曜石の両面調整の石鏃(12)が検出されている。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

(82) H-82号住居址

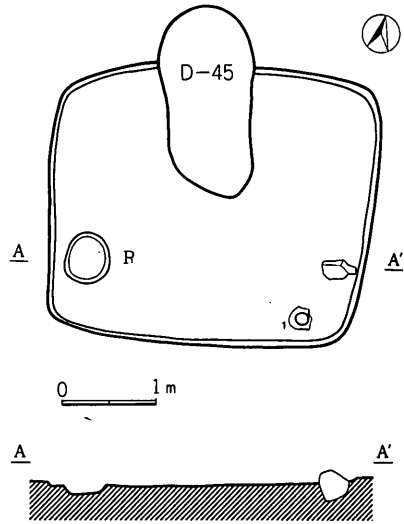
遺構 第250図

H-82号住居址は、第II区セ・ソ24グリッドにおいて検出された。その北側は、D-45号土壌によって切られている。

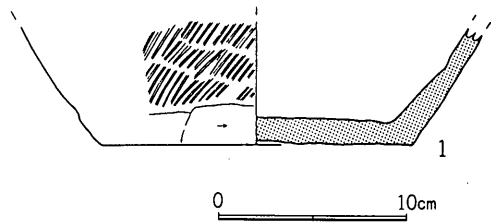
本住居址は、南北2.93m東西3.5mの隅丸方形を呈し、床面積9.0m<sup>2</sup>を測り、南北軸方向N-18°-Wを指す。壁高は5cm前後を測るのみで、壁溝は認められない。ピットは、西壁コーナー寄りに55cm×50cm深さ10cmの円形を呈するP<sub>1</sub>が検出されたのみである。

遺物は、1の須恵器甕底部が南東コーナーの床面直上より正常位で検出された。この他は、いずれも覆土中からの出土であった。

カマドは、現状においては存在しなかったが、あるいはD-45によって破壊され北壁中央付近に存在した可能性も残る。



第250図 H-82号住居址実測図(1:80)



第251図 H-82号住居址出土遺物(1:4)

遺物 第252図

本住居址より検出された遺物は、1の須恵器底部と、その他土師器甕破片数片のみであった。

1の須恵器甕は、外面に叩き目のみられるものであった。

土師器甕破片は、いずれも薄手の胴部破片ばかりである。

時期

本住居址は、時期決定の手がかりとなる遺物がごく僅かであるため、その位置付けに支障をきたすが、とりあえずは奈良・平安時代、前田遺跡第VII期のものとして捉えておこう。

第II表 H-82号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	甕 (須)	— 16.6	底部平底。	外面 胴部叩き、底部ヘラケズリ 内面 ナデ	胎土は砂粒を含み黄灰色(2.5Y5/1)を呈する。

## (83) H-83号住居址

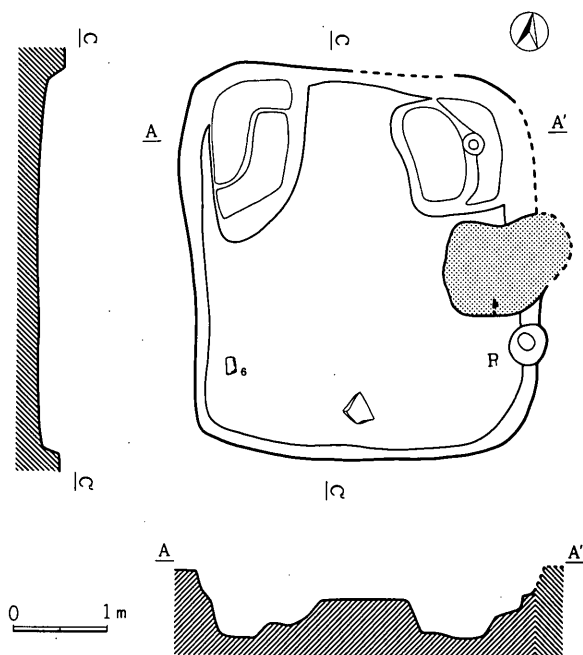
遺構 第252・253図

H-83号住居址は、第II区セ・ソ-23グリッドにおいて検出された。その北東コーナー部は、溝によって破壊されている。

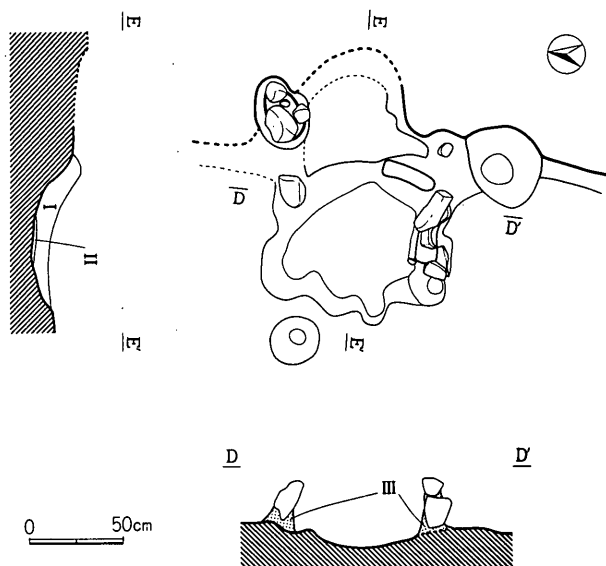
本住居址は、南北4.1m東西3.8mの隅丸方形を呈し、床面積11.9m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-82°-Eを指す。壁高は20cm前後を測り、壁溝は認められない。ピットは、カマド南脇の壁中よりP<sub>1</sub>が検出されたのみであった。P<sub>1</sub>は40cm×40cmを測る円形のピットであった。住居の北東コーナー・北西コーナーには床面が確認されず、図のような掘り方となったが、あるいは軟らかい床面が存在したのかもしれない。北東コーナー側の掘り方はテラスをもち深さ40cmを測る。北西コーナー側もテラスを有し40cm程の深さとなっている。

覆土は黒褐色土層I層のみで、遺物はいずれもこの覆土中からの出土であった。

カマドは、東壁中央より検出された。本遺跡における大部分のカマドが、北壁中央に存在することからすると本例は注意さ

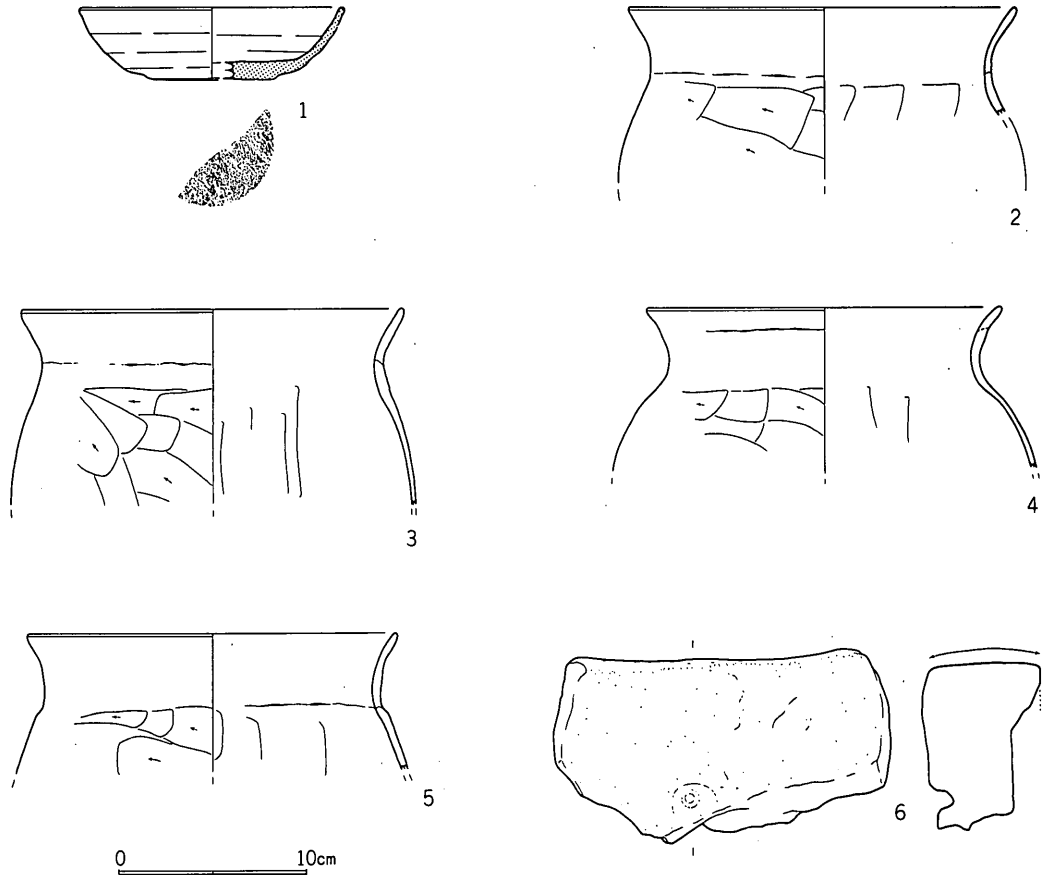


第252図 H-83号住居址実測図 (1:80)



第253図 H-83号住居址カマド実測図 (1:40)

1 竪穴住居址



第254図 H-83号住居址出土遺物 (1 : 4)

第113表 H-83号住居址出土遺物一覧表 <土器>

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	坏	< 14.0 > 3.8 (6.6)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色 (N6/0)
2 (完)	甕	20.7 — —	口縁部は僅か「コ」の字状に外反する。	外面 □縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 □縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色を呈する。 (5YR5/6)
3 (回)	甕	< 20.4 > — —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 □縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 □縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色を呈する。 (5YR6/6)
4 (回)	甕	(19.0) — —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 □縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 □縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色を呈する。 (5YR5/6)
5 (回)	甕	< 19.7 > — —	口縁部はゆるく「コ」の字状に外反する。	外面 □縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 □縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色を呈する。 (5YR5/8)

れる。カマド本体は、大部分破壊されているが、北側の袖石と南側の袖石数点をとどめていた。それらの袖石はさらに粘土 (III層) で固められ、袖部を構成している。袖石には軽石・安山岩等

が用いられていた。カマド使用に関する堆積は、2層認められた。I層が若干の焼土・灰を含む黒褐色土層、II層が赤褐色の焼土層であった。なお、本カマドの北袖の粘土中から石英の破片が検出された。何か祭祀的な意味があって封じ込められたものなのだろうか。

第114表 H-83号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

種別番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
6	砥石	砂岩	(9.6)	(17.9)	6.3	(1.100)	

遺物 第254図

本住居址より検出された遺物は少ないが、須恵器では坏・甕、土師器では甕がみられた。

1は須恵器坏で、回転糸切りによる底部をみせるものである。

須恵器甕は、口縁部と胴部破片が各1片ずつ認められたにすぎない。

土師器甕には、2の僅か「コ」の字状に外反する口縁部を見せるものや、3~5の「く」の字状に外反する口縁部をみせるものがみられた。

石製品では、3.5cm×2.4cm×2.2cmを測る石英塊が検出された。在地にはみられない石材であり、しかも袖の粘土中に込められていたとすると、何か祭祀的な性格をおびるのであろうか。

6は、砂岩の砥石である。研砥は1面においてなされているにすぎず、しかもあまり顕著な砥痕をみられない。一部には穿孔がみられた。

時期

本住居址は、奈良・平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。

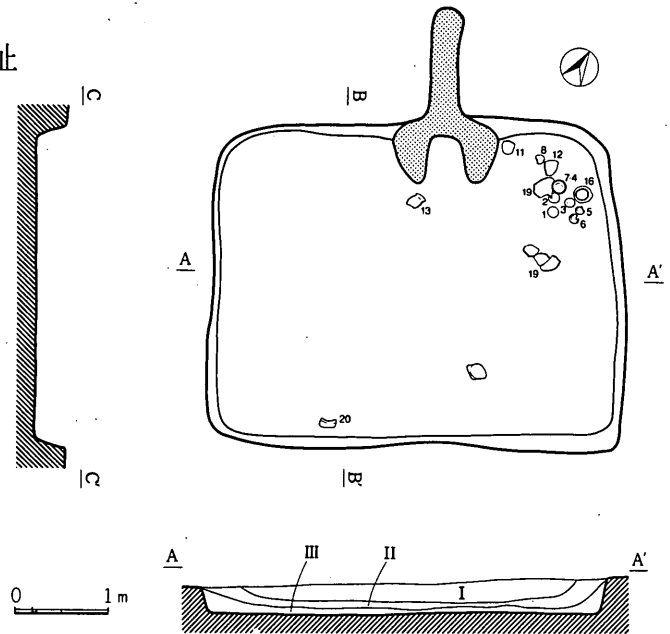
(84) H-84号住居址

遺構 第255・256図

H-84号住居址は、第II区スー23グリッドにおいて検出された。

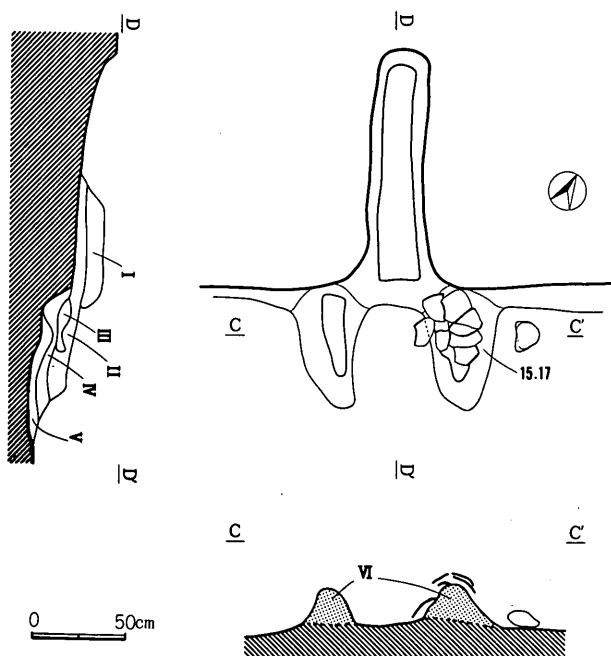
本住居址は、南北3.5m東西4.4mの隅丸方形を呈し、床面積13.1m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-45°-Wを指す。壁高は25~30cmを測り、壁溝は認められない。また、柱穴等のピットは検出されなかった。

住居址覆土は、3層に分層された。I層が黒褐色土層、II層がローム粒子を少量含む黒色土層、III



第255図 H-84号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址



第256図 H-84号住居址カマド実測図 (1:40)

層はローム粒子を多量に含む黒褐色土層であった。

遺物は、カマド東脇・北東コーナーの床面上から遺存率の高いものが10個近く一括して出土している(巻頭図版、図版参照)。1～8の土師器坏、11の須恵器短頸壺、12の甑、16の甕等で多くは正常位で出土した。また、カマド西袖の手前からは13の小形甕が、南壁際からは20の砥石も検出されている。この他の遺物はいずれも覆土中から検出されたものである。

カマドは、北壁中央に位置し、比較的良好な旧状をとどめているものと考えられる。東西両袖は赤みがかった粘土を構材としており、その芯に石材は用いられていなかった。また、東袖の上部には15・17の甕の大きな破片が乗っていた。煙道部は、本遺跡の他のカマドの煙道部と比較してかなり長く屋外に延び、およそ125cmを測った。カマドの使用に伴うと考えられる土層堆積は5層みられた。I層は焼土・灰をよく含む灰褐色土層、II層はカーボン・灰をよく含む黒灰色土層、III層は黄灰色の灰層、IV層は焼土を多量に含む茶褐色土層、V層は褐色の焼土層であった。

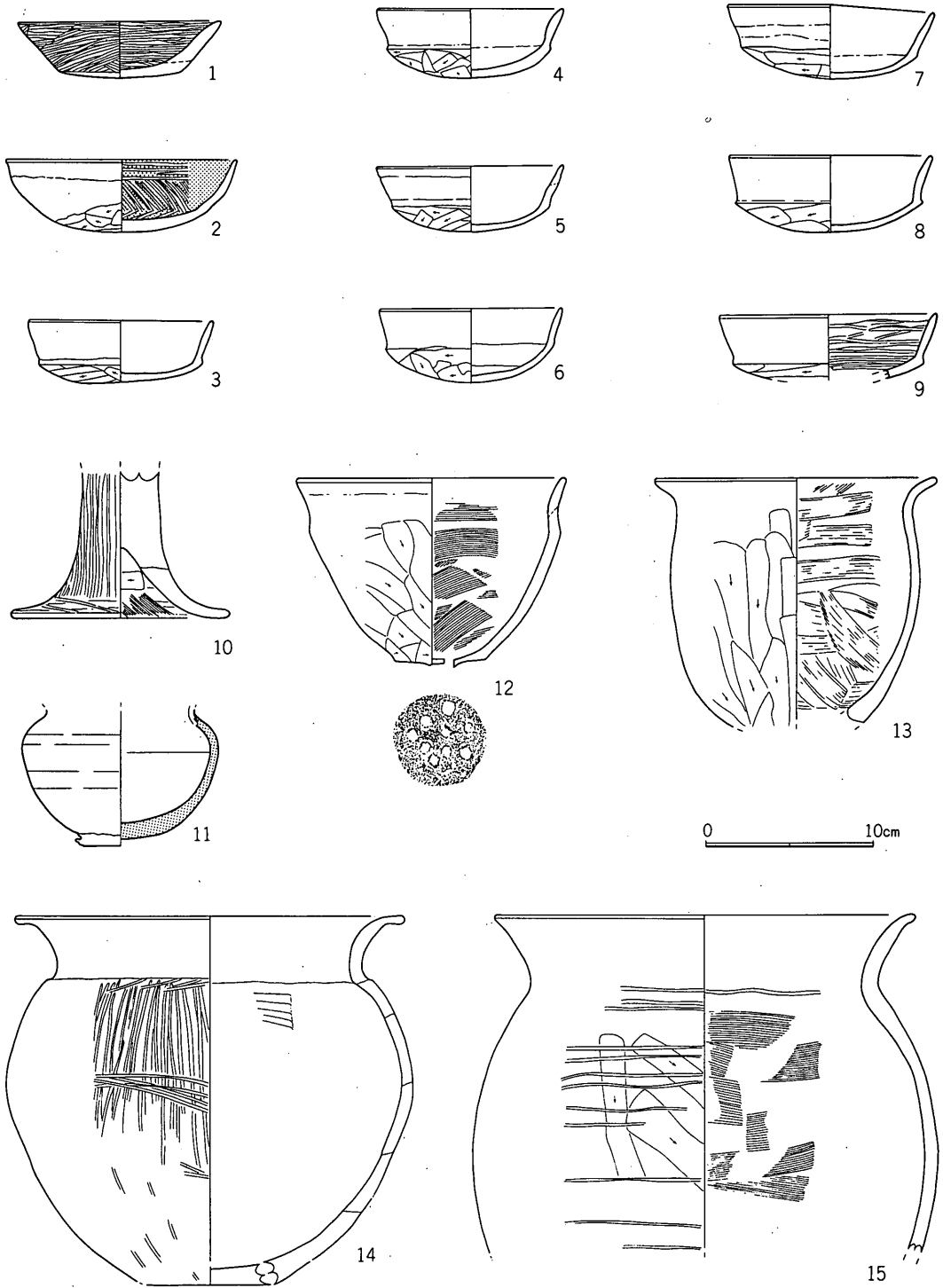
遺物 第257・258図

遺物は、前述したように遺存率の高いものが多く、土師器では坏・高坏・甑・甕が、須恵器では短頸壺・甕がみられた。

土師器坏には、9点を図示したが、1の底部平底で体部が直線的に強く外反するもの、2の半球状の器形を呈するもの、3～9の底部丸底で体部との境に稜を有し直線に外反する体部をみせ

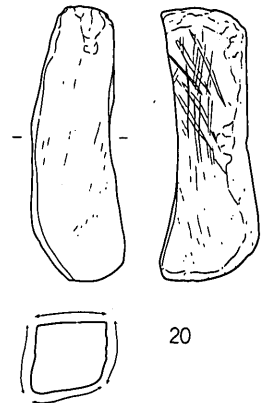
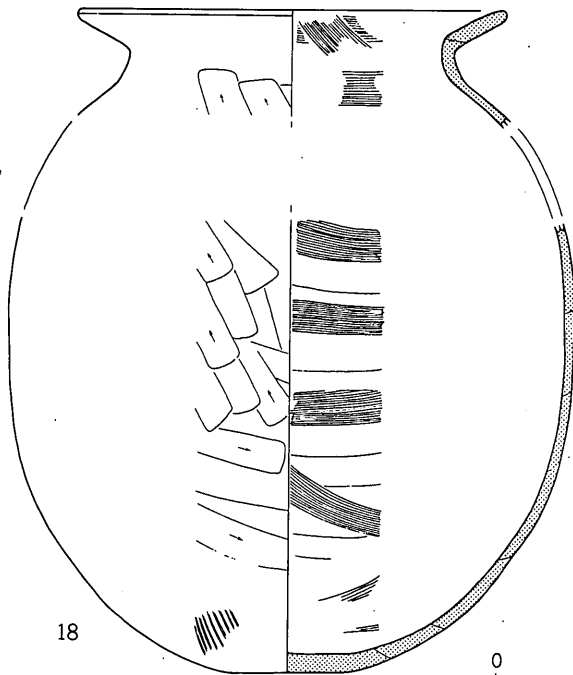
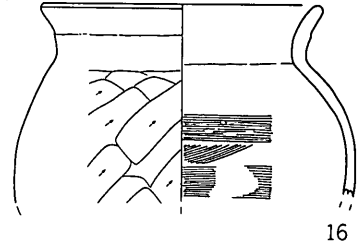
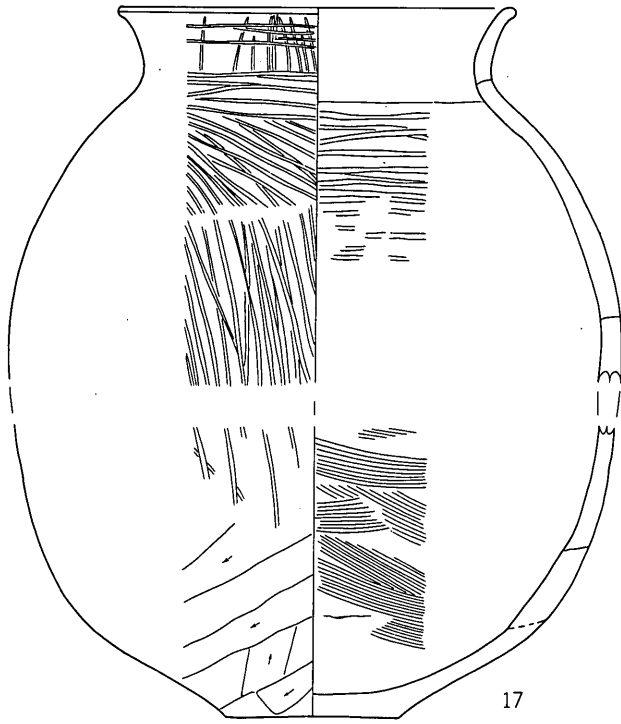


IV 遺構と遺物



第257図 H-84号住居址出土遺物 (1:4)

1 竖穴住居址



0 10cm

第258图 H-84号住居址出土遺物 (1:4)

## IV 遺構と遺物

第115表 H-84号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	坏	12.2 3.3 7.3	体部は外反し、底部平底。 完形	外面 入念なヘラミガキ 内面 入念なヘラミガキ	胎土はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。 焼成良好。
2 (完)	坏	13.9 4.3 —	底部～体部にかけて半球状の形態を呈する。 完形	外面 口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ 内面 黒色研磨	胎土は砂粒を含み明黄褐色を呈する。
3 (完)	坏	11.2 3.7 9.9	底部は偏平な丸底を呈し、稜をもった後直線的に外反する口縁部へと続く。 完形	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み橙色(5YR7/6)を呈する。 焼成はあまい。
4 (完)	坏	11.2 4.1 9.9	底部はやや偏平な丸底を呈し、稜をもって外反する口縁部へと続く。 完形	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み橙色(5YR7/6)を呈する。 焼成はあまい。
5 (完)	坏	11.3 3.9 9.4	底部はやや偏平な丸底を呈し、稜をもって外反する口縁部へと続く。 完形	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含みにぶい褐色(5YR7/4)を呈する。 焼成はあまい。
6 (完)	坏	11.0 4.4 10.1	底部はやや偏平な丸底を呈し、稜をもった後直線的に外反する口縁部へと続く。 完形	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み橙色(5YR6/6)を呈する。 焼成はあまい。
7 (完)	坏	12.5 4.4 10.6	底部は偏平な丸底を呈し、稜をもった後外反する口縁部となる。 ほぼ完形。器形のゆがみが顕著	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み褐色(7.5YR7/6)を呈する。 焼成はあまい。
8 (完)	坏	12.2 4.5 11.2	底部と口縁部の境に明瞭な稜を有し、口縁部はほぼ直線的に外反する。 完形	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み褐色(7.5YR7/6)を呈する。 焼成はあまい。
9 (回)	坏	< 13.1 > — < 11.5 >	底部と口縁部の境に明瞭な稜を有し、口縁部はほぼ直線的に外反する。 完形	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコのヘラミガキ	胎土は砂粒を含みにぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。 焼成は適当。
10 (回)	高坏	— — < 13.1 >	脚部は直線的に下降した後、大きく広がる。 完形	外面 脚部は縦位のヘラミガキ 裾部はヨコナデの後、若干のヨコヘラミガキ 内面 体部は横位のヘラケズリ 裾部は刷毛目状調整	胎土は砂粒を含み褐色(7.5YR7/6)を呈する。
11 (回)	短頸壺 (須)	— — —	胴部は球状を呈し、底部は丸底を呈するものと思われるが、焼成時の偏平な焼けつきがあり平になっている。小形の器形。 器種的には短頸壺となるか。	外面 ロクロヨコナデ、自然釉付着 内面 ロクロヨコナデ、自然釉付着	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色(N5/0)を呈する。
12 (完)	甌	16.2 11.2 5.5	器形は砲弾形を呈し、頸部が若干くびれる。9孔を有する底部は平底。 完形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部および底部ヘラケズリ 内面 ナナメ・ヨコの刷毛目状調整	胎土は精選されず砂粒を多く含み赤褐色(2.5YR4/6)を呈する。
13 (完)	甌	16.8 — —	胴部は砲弾形を呈し、口縁部は外反する。底部は焼成後の大きな穴がありあるいは甌として用いられたか。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部縦位のヘラケズリ 内面 ヘラナデ(刷毛目状)	胎土は砂粒を多く含み褐色(7.5YR7/6)を呈する。
14 (回)	甌	< 23.3 > < 21.9 > < 7.8 >	口縁部は弓なりに外反し、胴部はふくらむ。底部平底。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部は縦位のヘラミガキに若干のヨコヘラミガキ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含みにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。
15 (回)	甌	< 25.2 > — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はふくらむ。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部は縦位のヘラケズリの後、まばらなヘラミガキ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヨコの刷毛目状調整	胎土は砂粒を含み褐色(7.5YR7/6)を呈する。
16 (完)	甌	15.0 — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状を呈する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目状調整	胎土は砂粒を多く含みにぶい褐色(5YR7/4)を呈する。 焼成は良好でない。
17 (回)	甌	(21.2) — 9.2	口縁部はゆるく外反し、胴部は球状を呈する。底部平底。	外面 口縁部および胴上半部ヘラミガキ 胴下部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴上部ヨコヘラミガキ 胴下部刷毛目状調整	胎土は砂粒を含みにぶい黄褐色を呈する。 (10YR7/3)
18 (回)	甌 (須)	(22.8) — —	口縁部は強く外反し、胴部は球状を呈する。底部はやや偏平な丸底	外面 口縁部ヨコナデ。胴～底部ヘラケズリ 胴部下に叩き目状の調整あり。 内面 全体に細かな刷毛目状調整がなされる。	胎土は砂粒を含み灰白色(5Y7/1)完全な還元焼成となっていない。
19	甌 (須)	— — —	口縁部はゆるく外反する。	外面 口縁部には波状文が施され、胴部には叩き目がみられる。 内面 当て具痕(平行文)が残る。	

るものの三者が認められた。

10は高坏脚部で、坏部の形状は不明である。

11は、小形の須恵器短頸壺と考えられ、その底部には偏平な焼けつきがみられた。

12は甑で、底部には径5mm程度の穿孔が9個みられた。13は底の抜けた小形甕で、甑として再利用されたものかもしれない。

13～17は土師器甕である。いずれも球胴を呈するもので、16は小形、15・17は大形で、14はそれらのほぼ中間の器形を呈している。

18は、完全な還元炎焼成となっていない土師質の須恵器甕で、外反する口縁部と球状の胴部をみせている。底部近くには叩き目も観察される。

この他、口縁部に波状文が施こされ胴部に叩き目がみられる須恵器甕がある(19)。

20は、流紋岩の砥石で、四面とも研砥に供されているものである。このうち二面には線状の研砥痕も顕著に観察される。なお、本石器は火熱を被って、一部黒色化している。

#### 時期

本住居址は、古墳時代後期、前田遺跡第Ⅲ期に位置付けられよう。

第116表 H-84号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
20	砥石	砂岩	14.5	4.7	5.1	460	

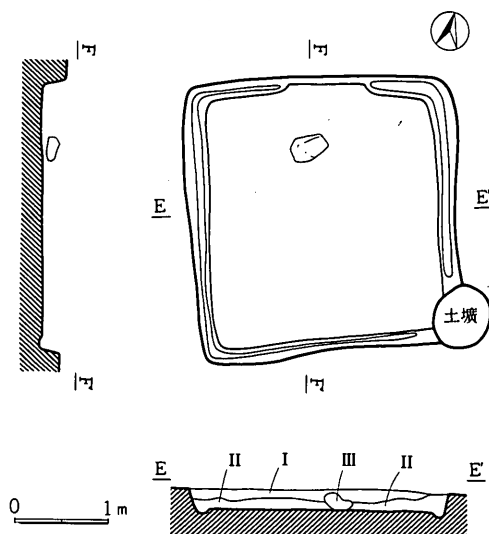
### (85) H-85号住居址

#### 遺構 第259図

H-85号住居址は、第Ⅱ区シー23グリッドにおいて検出された。その南東コーナーはD-18号土壌によって切られる。

本住居址は、南北2.9m東西2.9mの小形の隅丸方形を呈し、床面積7.3m<sup>2</sup>を測り、南北軸方向はN-19°-Wを指す。壁高は20～25cmを測る。壁溝は深さ5cm程度のものが、北壁中央を除いてほぼ全周する。柱穴等ピットはまったく検出されなかった。

住居址覆土は3層に分層された。Ⅰ層はパミスをよく含みローム粒子を少量含む黒褐色土層、Ⅱ層はパミスを少量含む黒色土



第259図 H-85号住居址実測図(1:80)

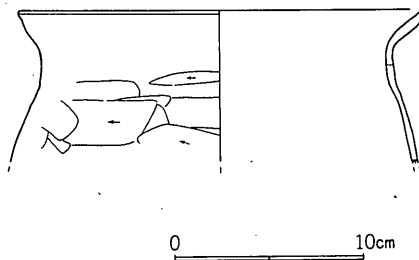
第117表 H-85号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	甕	21.5 — —	口縁部は弱く「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。

層、Ⅲ層はカマドより流出したと考えられる灰層であった。遺物はいずれも覆土中から検出されている。

カマドは、その痕跡をとどめなかったが、おそらく北壁中央に存在していたものと考えられる。

北壁寄りに礫がみられる事、覆土中に灰の堆積が



第260図 H-85号住居址出土遺物(1:4)

みられる事、北壁中央のみにおいて壁溝が切れる事などもカマドの存在を傍証している。

#### 遺物 第260図

本住居址より検出された遺物はきわめて少なく、須恵器数片と土師器甕がみられたのみであった。須恵器片には、蓋・坏・甕の各器種がみられたがいずれも図示するには至らなかった。

1は土師器甕で、「コ」の字状に外反する口縁部をみせている。

#### 時期

本住居址は、その規模・構造、僅かな出土遺物、他の住居址との関連性等から、奈良・平安時代、前田遺跡第Ⅶ期に位置付けられようか。

## (86) H-86号住居址

### 遺構 第261・262図

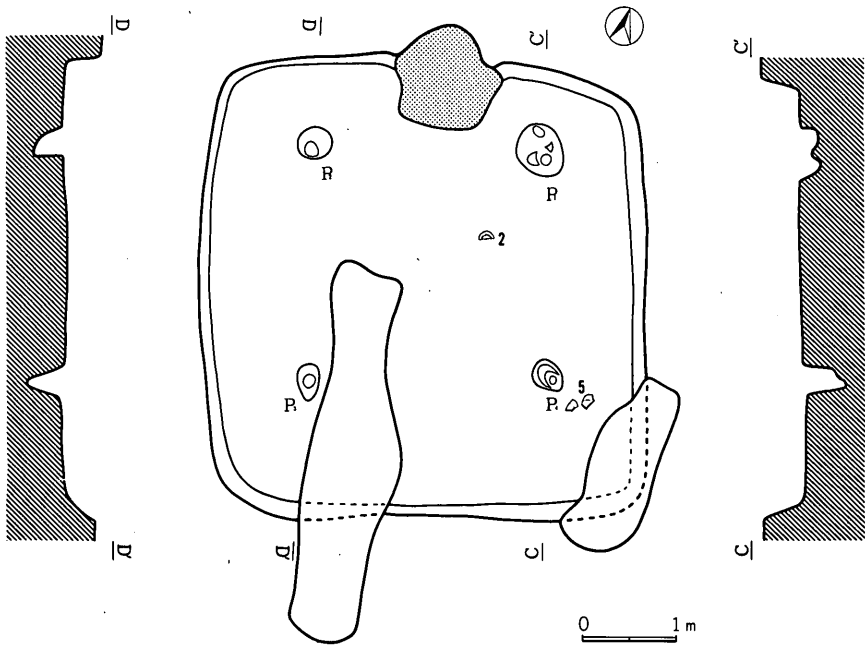
H-86号住居址は、第Ⅱ区ゾ-23グリッドにおいて検出された。その一部は、溝状遺構とD-47号土壇とによって攪乱を受けている。

本住居址は、南北4.9m東西4.75mの隅丸方形を呈し、床面積7.3m<sup>2</sup>を測り、主軸方向N-25°-Wを指す。壁高は30~45cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は60cm×50cm深さ20cm、P<sub>2</sub>は40cm×30cm深さ30cm、P<sub>3</sub>は40cm×25cm深さ40cm、P<sub>4</sub>は35cm×30cm深さ40cmを測るものであった。いずれのピットも比較的浅いものといえる。

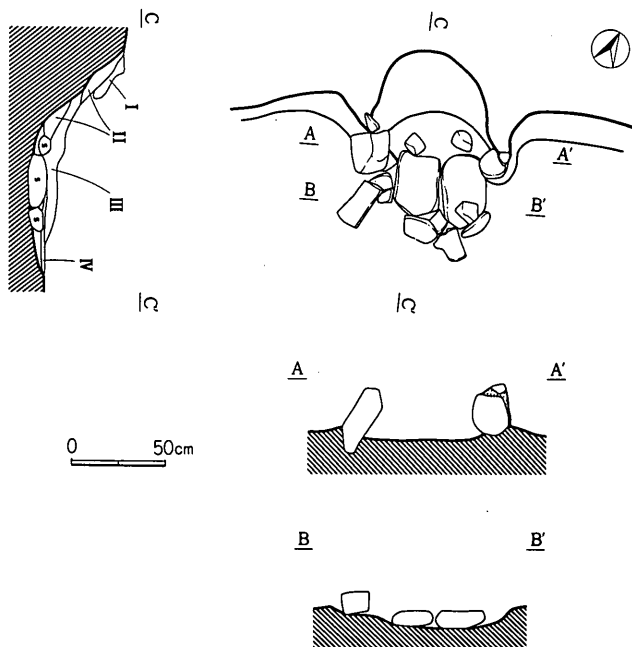
遺物は、2の須恵器坏が床面より20cm浮いて、5の坏の破片がP<sub>4</sub>の脇の床面上より検出されている。この他は、いずれも覆土中からの出土遺物である。

覆土はⅠ層のみで、パミス・ローム粒子をよく含む黒褐色土層であった。

1 竪穴住居址



第261図 H-86号住居址実測図 (1:80)



第262図 H-86号住居址カマド実測図 (1:40)

カマドは、北壁中央に存在している。東西両袖の奥の部分はそのまま残るものの、それ以外の部分はすでに破壊され、その構材であった面取り軽石は整然と火床部に置かれていた。なお、本カマドの石材にはすべて面取り軽石が用いられていた。プライマリーな堆積ではないが、カマド使用に関連すると考えられる土層堆積は4層に分層された。I層は多量の灰と若干の焼土を含む黄褐色土層、II層は多量の焼土・カーボンを含む黒褐色土層、III層は若干の焼土・カーボンを含む灰層、IV層は多量のカーボンを含む黒色土層であった。

## 遺物 第263図

本住居址より検出された遺物には、手捏土器、須恵器坏、土師器皿・甕がある。

1は手捏土器の底部で、カマド中から出土したものである。

2～4は須恵器坏で、2は回転ヘラケズリ、3・4は手持ちヘラケズリによる底部をみせている。三者とも切り離し方法は判明しなかった。

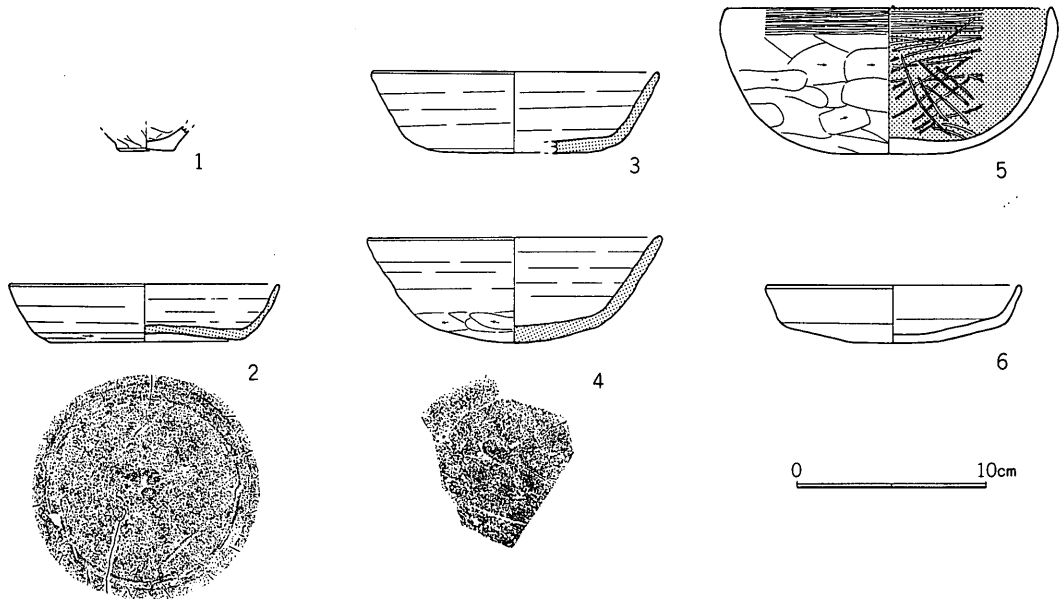
5は、半球状を呈する土師器坏で内面黒色研磨のなされるものである。

6は、偏平な土師器の皿である。

この他、図示し得なかったが「く」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕破片が検出されている。

## 時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。



第263図 H-86号住居址出土遺物 (1:4)

第118表 H-86号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

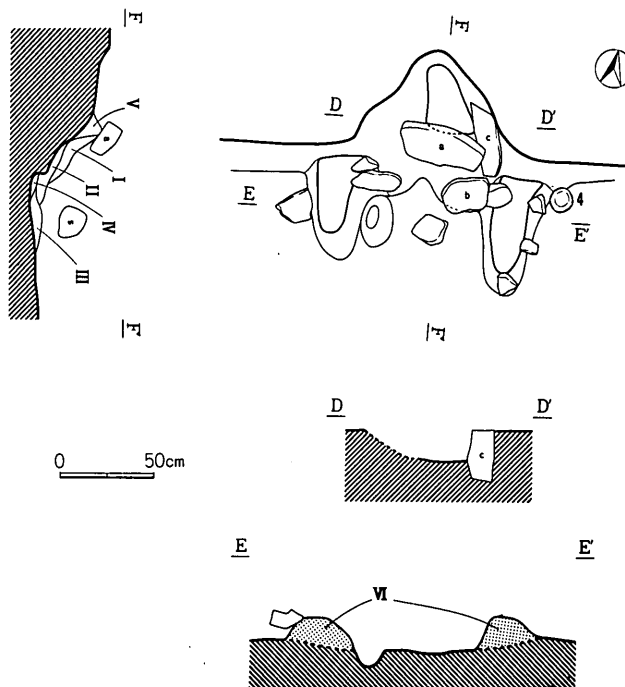
挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (完)	手捏	— 3.1	手捏土器	外面 ナデ 内面 ナデ	胎土はにぶい黄 橙色(10YR7/3) を呈する。
2 (完)	坏 (須)	14.4 3.1 10.2	底の浅い盤状の器形を呈する。 ほぼ完形。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ、若干自然釉付着 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色(N6/0) を呈する。
3 (回)	坏 (須)	15.4 4.3 8.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ 底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含 み灰色を呈する。 (10Y5/1) H-87・3と接合
4 (回)	坏 (須)	15.7 5.6 8.5	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ 底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多 く含み灰白色 (5Y8/2)
5 (完)	塊	17.4 7.7 —	体部は丸味をおびて外湾したのち、口唇 部でやや内湾する。底部は扁平な丸底。	外面 口縁部ヘラミガキ、底部～体部ヘラケズリ 内面 黑色研磨	胎土は砂粒を含 み淡黄色 (2.5Y8/4) を呈する。
6 (回)	皿	14.4 3.1 10.2	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 口縁部ヨコナデ、底部は剥落が激しく調整不明 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含 みにぶい黄橙色 (10YR7/4)焼成 は良好でない。

(87) H-87号住居址

遺物 第264・265図

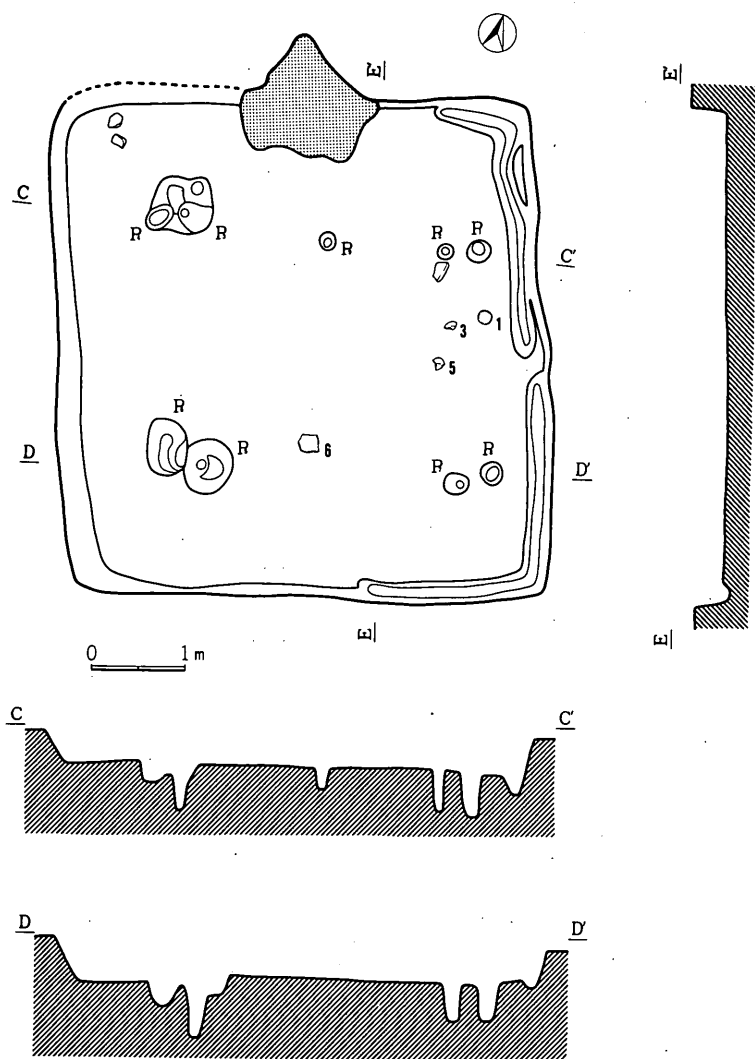
H-87号住居址は、第II  
区ター23グリッドにおいて  
検出された。

本住居址は、南北5.3m東  
西5.2mの隅丸方形を呈し、  
床面積24.3m<sup>2</sup>を測り、主軸  
方向はN-28°-Wを指す。  
壁高は30~50cmを測る。壁  
溝は北東コーナーより東  
壁・南東コーナーへと周っ  
ている。柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>8</sub>の  
8個が検出されている。そ  
れぞれ各区に2個づつが並  
んで配されている。また、  
P<sub>9</sub>も柱穴と考えられるか



第264図 H-87号住居址カマド実測図(1:40)





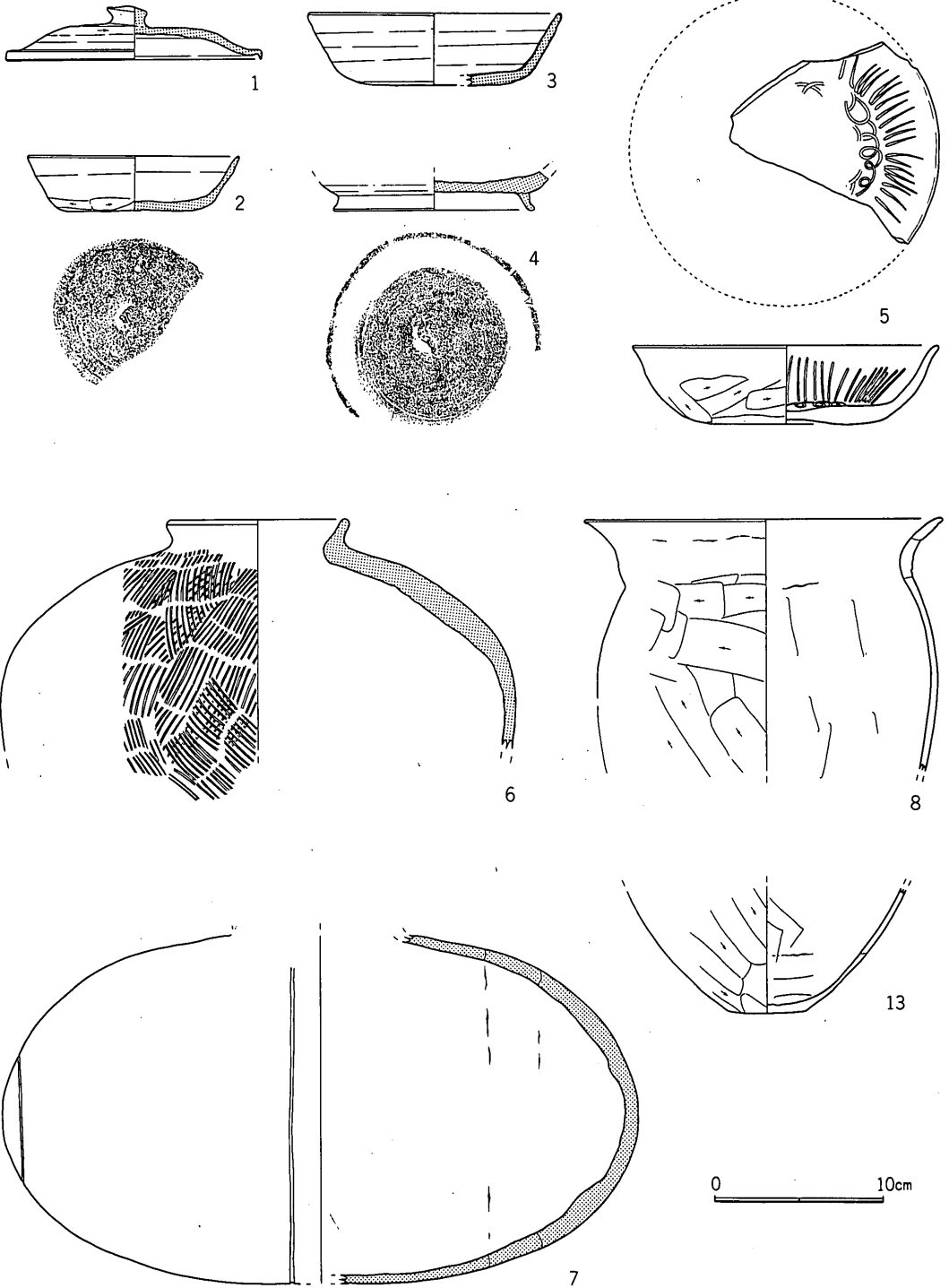
第265図 H-87号住居址実測図 (1:80)

もしれない。P<sub>1</sub>は25cm×22cm深さ45cm、P<sub>2</sub>は28cm×17cm深さ40cm、P<sub>3</sub>は65cm×50cm深さ48cm、P<sub>4</sub>は32cm×22cm深さ20cm、P<sub>5</sub>は60cm×50cm深さ68cm、P<sub>6</sub>は60cm×40cm深さ25cm、P<sub>7</sub>は30cm×23cm深さ40cm、P<sub>8</sub>は25cm×23cm深さ40cmを測る。このうち、P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>は他に比べやや浅いピットといえる。また、P<sub>9</sub>は20cm×18cm深さ22cmを測る。

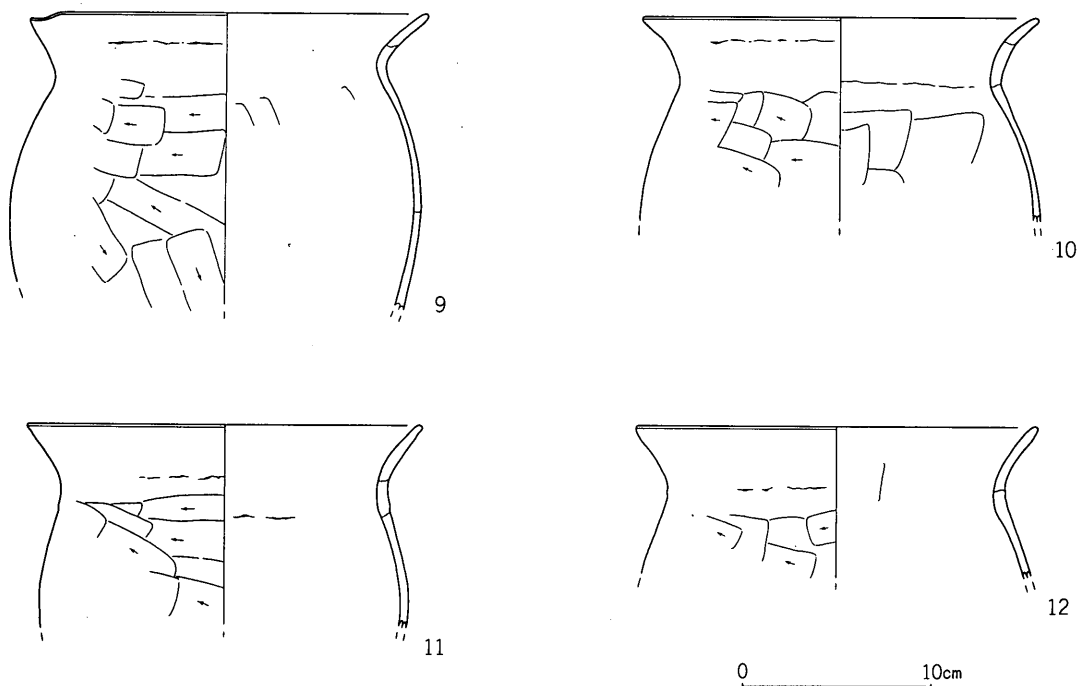
住居址覆土はI層のみで、パミス・ローム粒子をよく含む黒褐色土層であった。

遺物は、1の蓋・3・4の坏が東壁際の床面上よりまとまって検出され、6の横瓶は住居中央の床面上10cmの位置から検出された。また、4の坏はカマド東袖脇からの出土である。これ以外

1 竖穴住居址



第266图 H-87号住居址出土遗物 (1:4)



第267図 H-87号住居址出土遺物 (1:4)

の遺物は、いずれも覆土中から検出されている。

カマドは、北壁中央に存在し、すでに半壊状態にあったが、天井石の一部と両側の袖の一部をとどめておいた。天井石と考えられるものは図中 a・b で、面取りされた軽石である。また、b も面取りされた軽石の袖石である。袖部はこうした石材の他、赤褐色粘土 (IV層) 等も用いて構築されている。カマド使用にかかわると考えられる堆積は5層認められた。I層は焼土粒子を含む暗褐色土層、II層は若干の焼土粒子を含む黒褐色土層、三層が赤褐色の焼土層、IV層はカーボンを含む暗黄色土層、V層は黄色土層であった。

#### 遺物 第266・267図

本住居址から検出された遺物には、須恵器では蓋・坏・横瓶、土師器では坏・甕がある。

1は完形の須恵器蓋で、ボタン状のつまみ部を有している。

2・3は須恵器坏で、回転ヘラキリの後手持ちヘラケズリのなされる底部をみせるものである。

また、4は高台付坏で、回転ヘラケズリによる底部をみせている。

5は、土師器坏で内面体部に放射状暗文、見込み部にラセン状暗文が施こされている。

6・7は須恵器の横瓶である。6は短く外反する口縁部をみせ、7は口縁部を失う。6は胴部に叩き目がみられるが、7はロクロヨコナデのまま未調整である。

8~12は、「く」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕で、13はその底部と考えられる。

第119表 H-87号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	蓋 (須)	2.4 3.1 15.1	つまみ部はやや垂んだボタン状を呈する。 完形	外面 ロクロヨコナデの後天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色を呈する。 (10Y5/1)
2 (完)	坏 (須)	(12.6) 3.2 8.6	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰白色 (5Y7/2) を呈する。
3 (回)	坏 (須)	(15.4) 4.3 (8.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラキリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(10Y5/ 1)を呈する。 H-86・3と接合
4 (完)	坏 (須)	— — 12.0	底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰白色 (N7/0) を呈する。
5 (回)	坏	(18.1) 4.6 (12.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ 内面 体部はヨコナデの後、放射状暗文が施される。 底部はラセン状の暗文が施される。	胎土は赤褐色の 粒子を特徴的に 含む 橙色 (7.5YR7/6)
6 (回)	横瓶 (須)	(10.8) — —	胴部はつぶれた球状にふくらみ、口縁部 は短く外反する。	外面、口縁部ヨコナデ、胴部には叩きがなされる。 内面 一部ヨコナデ、当て具痕が一部みられる。	胎土は緑灰色を 呈する。 (10Y6/1)
7 (回)	横瓶 (須)	— — —	胴部はカプセル形を呈する。	外面 ヨコナデの後、縦位の沈線が二条施される。 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み 灰白色 (N7/0)を呈する。
8 (完)	甕	21.2 — —	口縁部は弱く「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土はにぶい黄橙 色(10YR7/4)を 呈する。
9 (完)	甕	(21.1) — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は ややふくらむ。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色を呈 する。 (7.5YR6/6)
10 (回)	甕	(21.0) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は暗赤褐色 を呈する。 (5YR3/4)
11 (回)	甕	(20.9) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色 (5YR5/6) を呈する。
12 (回)	甕	(21.3) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい橙 色を呈する。 (7.5YR6/4)
13 (回)	甕	— — 4.8	底部平底。	外面 胴部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土はにぶい橙 色を呈する。 (7.5YR7/4)

なお、本住居址において石器・鉄器等は認められなかった。

### 時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

## (88) H-88号住居址

遺 構 第268・269図

H-88号住居址は、第II区ター23グリッドにおいて検出された。

IV 遺構と遺物

本住居址は、南北2.8m東西3.6mの隅丸方形を呈し、床面積7.7m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-20°-Wを指す。壁高は20~30cmを測り、壁溝は認められない。ピットは、支柱穴は認められず、南壁際にテラスを有するP<sub>1</sub>がみられるのみであった。P<sub>1</sub>は75cm×30cm深さ40cmを測る。

覆土はI層のみで、パミス・ローム粒子をよく含む黒褐色土層であった。

遺物は、1の坏がカマド中より検出された以外は、いずれも覆土中からの出土であった。

カマドは、北壁中央において検出されたが、すでに壊滅状態にあった。その袖にあたる部分には袖石の抜き取り痕と考えられるピットが東西各1個ずつ検出されている。カマド使用に関連すると考えられる土層堆積は2層認められた。I層が多量の灰と若干の焼土・カーボンを含む灰色土層、II層は赤褐色の焼土層であった。

遺物 第270図

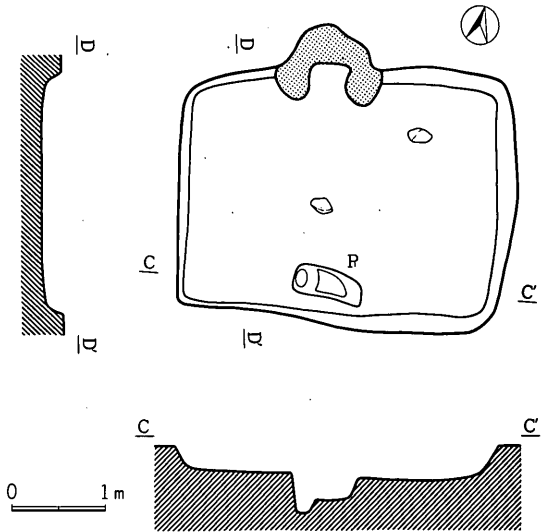
本住居址より検出された遺物は、須恵器坏1点と土師器甕破片8点のみであった。

1は須恵器坏で、底部は切り離しの後全面に手持ちヘラケズリがなされている。

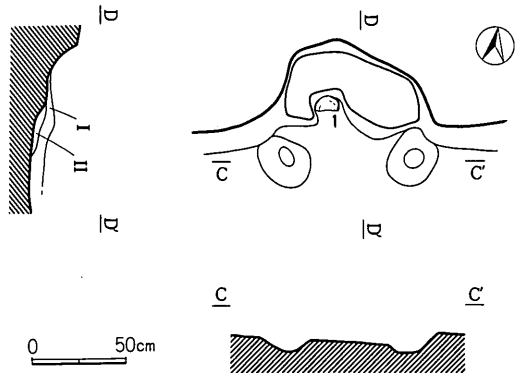
土師器甕破片は図示し得なかったが、「く」の字状に外反する口縁部破片が認められた。

時期

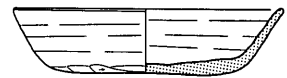
本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。



第268図 H-88号住居址実測図 (1:80)



第269図 H-88号住居址カマド実測図 (1:40)



第270図 H-88号住居址出土遺物 (1:4)

第120表 H-88号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	坏 (須)	(14.3) 3.4 (10.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ 底部回転ヘラキリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(5Y6/1)を呈する。 内外面に火漉あり。

(89) H-89号住居址

遺 構 第271・272図

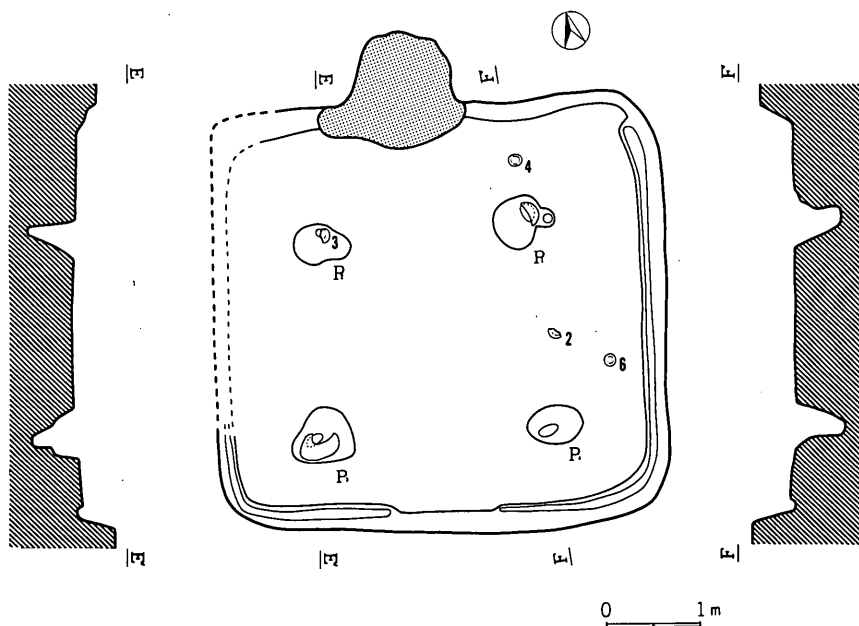
H-89号住居址は、第II区ター23グリッドにおいて検出された。その西壁の大部分は小河川によって攪乱されている。

本住居址は、南北4.55m東西4.8mの隅丸方形を呈し、推定床面積18.5m<sup>2</sup>を測り、主軸方向N-15°-Eを指す。壁高は20~40cmを測る。壁溝は、北壁・南壁中央・西壁の攪乱部分を除き認められる。支柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が認められた。P<sub>1</sub>は55cm×50cm深さ50cm、P<sub>2</sub>は60cm×45cm深さ50cm、P<sub>3</sub>は70cm×60cm深さ45cm、P<sub>4</sub>は60cm×40cm深さ50cmを測る。

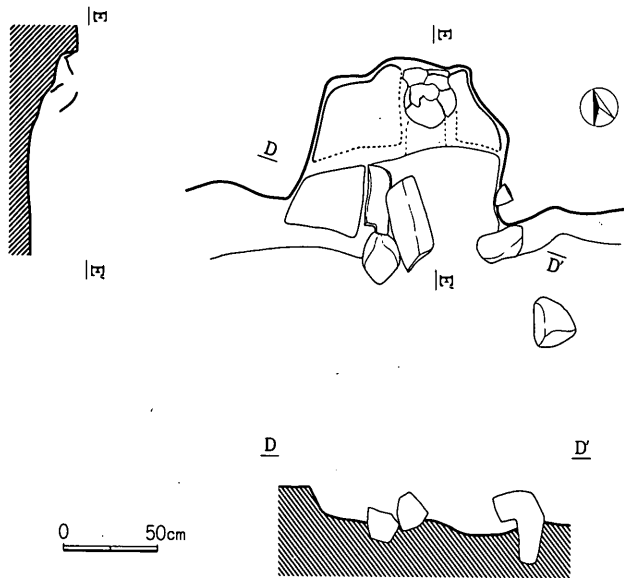
住居址覆土はI層のみで、小粒パミス・ローム粒子をよく含む黒色土層であった。

遺物は、4の坏がP<sub>1</sub>北の床面直上より正常位で、3の坏がP<sub>2</sub>中より、2・6の坏が東壁際の床面より15cmほど浮いて検出された。これ以外はいずれも覆土中からの出土である。

カマドは、北壁中央において検出されたが、すでに破壊されているものであった。西袖は畳ま



第271図 H-89号住居址実測図 (1:80)



第272図 H-89号住居址カマド実測図 (1:40)

れその構材である面取り軽石3個はその場に置かれていた。東側の袖石1個は据えられたままで、「『』」状に面取りされた軽石であった。煙道部には、底の抜かれた土師器甕が煙筒として用いられており興味深い事例といえる。

#### 遺物 第273図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・坏、土師器では甕がある。

1は非常に小形の須恵器蓋で、つまみ部は宝珠形を呈している。

2～4は須恵器坏で、2は回転ヘラキリ・3は回転糸切り・4は回転糸切りの後回転ヘラケズリのなされた底部をみせている。4は高台付坏である。

5・6は、ロクロ整形による土師器坏で、内面黒色研磨のなされたものである。5は底部の調整不明、6は底部全面に手持ちヘラケズリがなされており、切り離し方法は不明である。

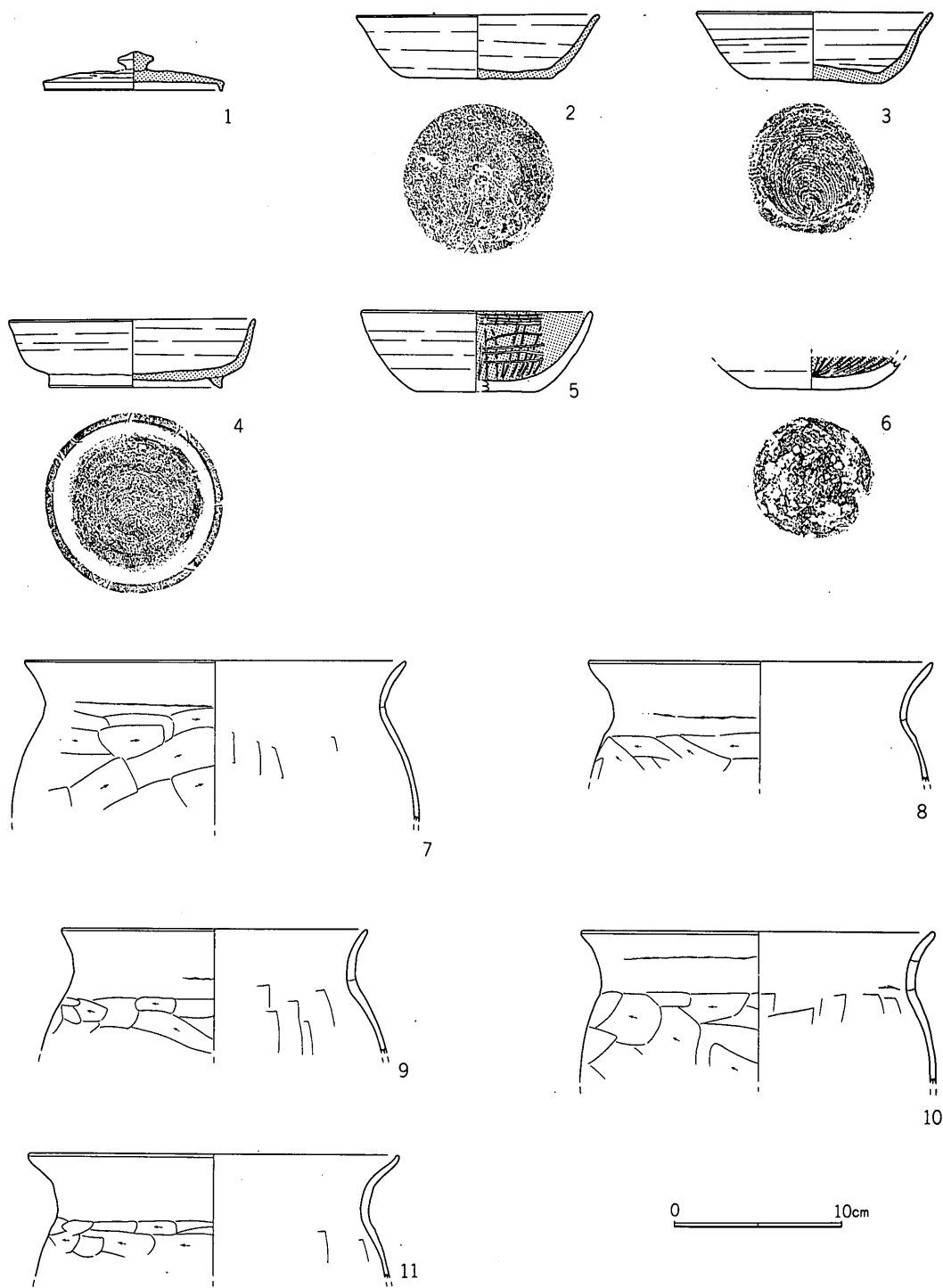
7～11は土師器甕で、7は「く」の字状、8～11は弱く「コ」の字状に外反する口縁部をみせるものである。

この他石器・鉄器類は検出されていない。

#### 時期

本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第七期に位置付けられよう。

1 竖穴住居址



第273图 H-89号住居址出土遗物 (1:4)



第121表 H-89号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

押 番 号	器 種	法 量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	2.1 2.3 <10.7>	つまみ部が宝珠形を呈する小形の器形	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(N5/0)を呈する。
2 (完)	坏 (須)	14.5 3.8 9.0	体部は外反し、底部平底。 ほぼ完形	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み 灰褐色(7.5YR5/2)を呈する。 内外面に火傷きあり。
3 (完)	坏 (須)	14.1 4.0 8.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選されず 砂粒を多く含み、 灰白色(5Y7/2)を呈する。
4 (完)	坏 (須)	(14.7) 4.0 10.4	底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。
5 (回)	坏	<13.8> 4.8 <7.2>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部調整不明 内面 黒色研磨 (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み にぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。
6 (完)	坏	- 7.2	底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 黒色研磨 (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を多く含み にぶい橙色(7.5YR7/3)を呈する。
7 (回)	甕	(22.7) - -	口縁は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色を呈する (5YR5/6)、外面にはすすか顕著に付着する。
8 (回)	甕	(20.5) - -	口縁部は弱く「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色を呈する。 (5YR4/6)
9 (回)	甕	(18.2) - -	口縁部は弱く「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は明赤褐色を呈する。 (5YR5/6)
10 (回)	甕	(21.1) - -	口縁部は弱く「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色を呈する。 (5YR6/6)
11 (回)	甕	(22.1) - -	口縁部は弱く「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色を呈する。 (5YR6/6)

## (90) H-90号住居址

## 遺 構 第274図

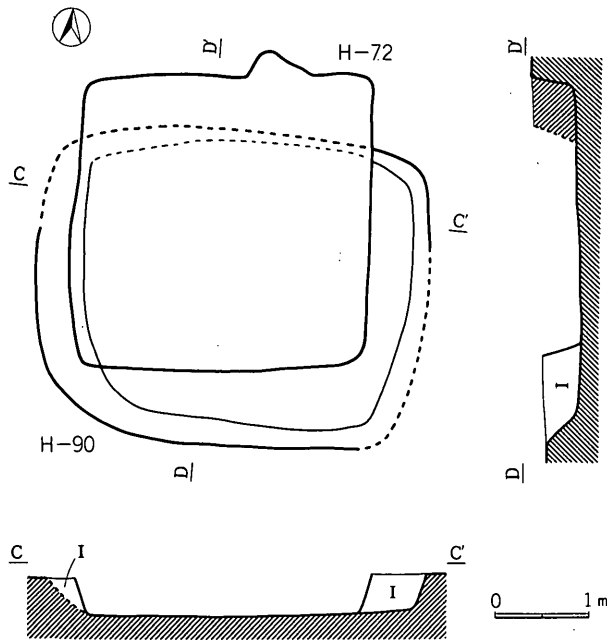
H-90号住居址は、第II区シ-25グリッドにおいて検出された。その大部分はH-72号住居址に切られ、またH-71号住居址を切って存在している。

本住居址の推定される規模は、南北3.1m東西4.1mで、床面積9.4㎡となろう。南北軸方向はN-8°-Wを指す。生きている部分の壁高は40cmを測り、壁溝は持たないものと考えられる。また、柱穴等のピットは認められなかった。

残存する住居址覆土は、小石・パミスを含む黒褐色土層I層のみであった。

カマドの存否は、大方のカマドの位置である北壁中央部が、H-72号住居址によって破壊されているため確認できなかった。

## 遺 物



第274図 H-90号住居址実測図 (1 : 80)

本住居址は残っている部分が僅かなため、遺物はまったく検出されなかった。

時期

本住居址は、遺物がまったくみられないため、その規模・構造と切り合い関係、他との関連分から時期を求める他はない。とりあえずは、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けておくのが、妥当といえよう。

(91) H-91号住居址

遺構 第275・276図

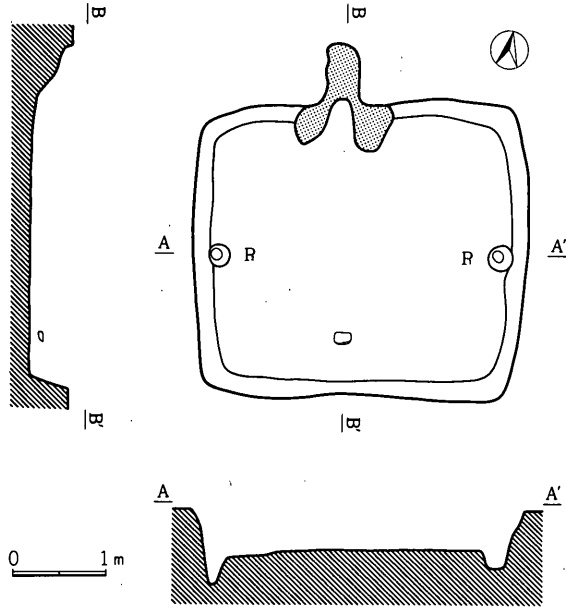
H-91号住居址は、第II区セ-25グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.15m東西3.6mの隅丸方形を呈し、床面積8.3m<sup>2</sup>を測り、主軸方向N-17°-Wを指す。壁高は40~50cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、東西両壁の中央に各1個ずつ配されている (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は25cm×25cm深さ20cm、P<sub>2</sub>は25cm×25cm深さ30cmを測る。

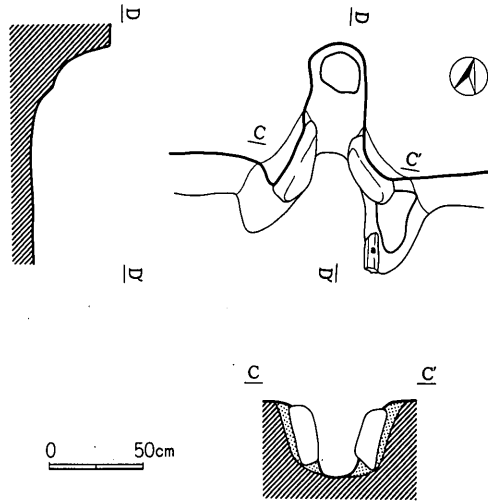
覆土はI層のみで、バミス・ローム粒子をよく含む黒褐色土層であった。遺物はいずれも覆土中から出土している。

カマドは、北壁中央に位置するが、すでに壊滅状態にあり、本体奥部の東西両壁の面取り軽石

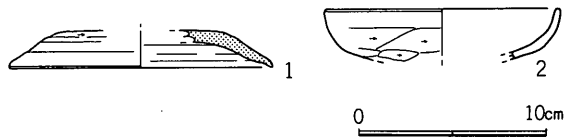
IV 遺構と遺物



第275図 H-91号住居址実測図 (1 : 80)



第276図 H-91号住居址カマド実測図 (1 : 40)



第277図 H-91号住居址出土遺物 (1 : 4)

第122表 H-91号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

神図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	— <14.0>		外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰白色(7.5Y7/1)
2 (回)	坏	<12.5> — —	体部は丸味をおびて外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み橙色(5YR6/8)を呈する。

と、暗褐色の粘土を構材とした東側の袖のごく一部をとどめるにすぎなかった。また、東側の袖部分には角柱状に面取りされた軽石の支脚(a)が放置されていた。煙道は細長く60cm程壁外へ延びていた。

## 遺物 第277図

本住居址より検出された遺物はごく僅かで、須恵器蓋、土師器坏・甕の破片のみであった。

1は須恵器蓋で、つまみ部の形状は不明である。

2は体部が丸味を帯びて外反する土師器坏である。

この他、図示し得なかったが、口縁部が弱く「コ」の字状に外反する土師器甕破片もみられた。

なお、本住居の構造や土師器の「コ」の字状口縁の甕の出土からいって、2の坏の形態はやや古く、これは本住居址に伴う遺物ではないかもしれない。

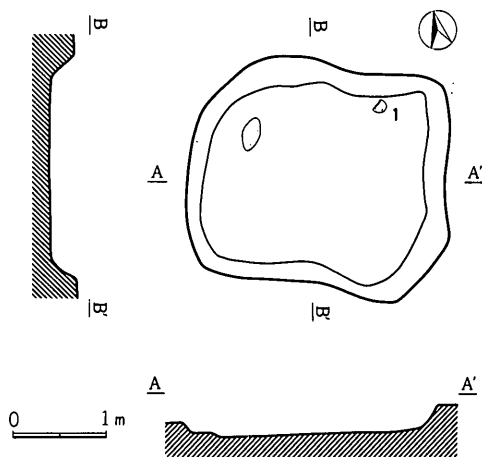
## 時 期

本住居址は、伴出遺物が少ないため時期決定が困難であるが、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期の所産と考えておきたい。

## (92) H-92号住居址

## 遺 構 第278図

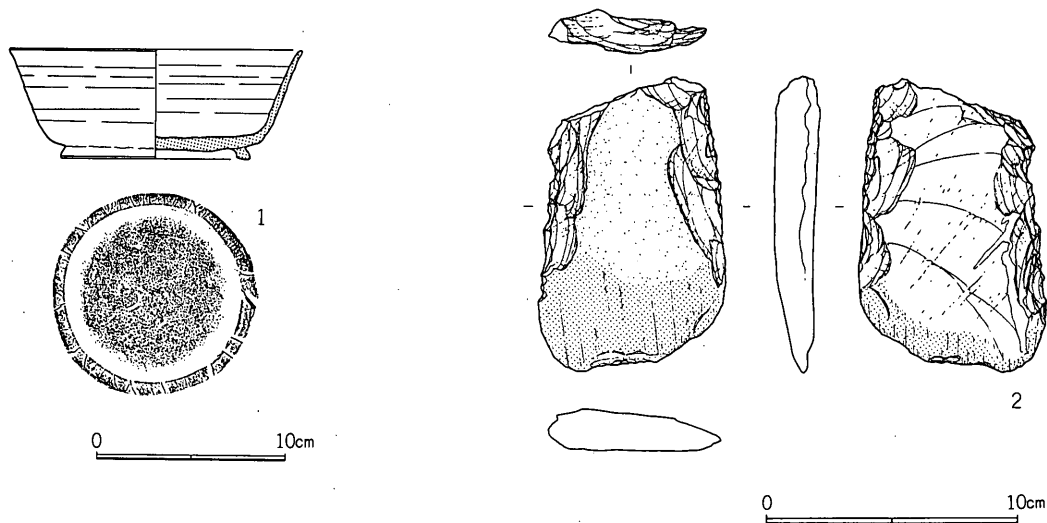
H-92号住居址は、第II区タ-23グリッドにおいて検出された。本址がカマドをもたない小形の竪穴であることから、その性格がまず住居址であるかどうか問題となろうが、消費生活の単位といわれているカマドをもつ住居址自体でも本例と変わらない小形なものも存在するため、ここでは一律に住居址という名称を用いることにした。



第278図 H-92号住居址実測図(1:80)

第123表 H-92号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	<15.5> 5.8 10.1	高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色を呈する。 (5 YR 5/3)



第279図 H-92号住居址出土遺物 (1 = 1 : 4, 2 = 1 : 3)

その機能的な問題については、後に言及することにした。

本址は、南北2.4m東西2.8mのやや歪

んだ隅丸方形を呈し、床面積4.2㎡を測り、南北軸方向はN-15°-Eを指す。壁高は15~30cmを測り、壁溝は認められない。また柱穴等のピットも認められなかった。

カマドは認められなかったが、北西コーナーより灰のブロックが検出されている(網点)。

遺物は、北東コーナーの床面上より1の坏が正常位で検出されている。それ以外の遺物は、いずれも覆土中より検出されたものである。

遺物 第279図

本住居址より検出された遺物は僅かで、須恵器坏、土師器甕の破片のみである。

1は須恵器高台付坏で、回転糸切りの後回転ヘラケズリのなされた底部をみせている。

土師器甕は図示し得なかったが、僅か「コ」の字状に外反する口縁部破片も見出せた。

石器では2の打製石斧が検出されている。玄武岩質安山岩の板状礫の両側縁を加工したもので、先端部両面には顕著な磨耗が認められる。基部を古く欠損する。

時期

第124表 H-92号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
2	打製石斧	玄武岩質安山岩	(10.6)	7.5	1.6	(180)	

本住居址は、僅かな出土遺物の特徴・その構造等より、奈良・平安時代、前田遺跡第VII期の所産と捉えておこう。

### (93) H-93号住居址

遺構 第280・281図

H-93号住居址は、第II区ター22グリッドにおいて検出された。その南東コーナーは、H-94号住居址の北西コーナーを切って存在する。また、その西壁の一部は攪乱を受けている。

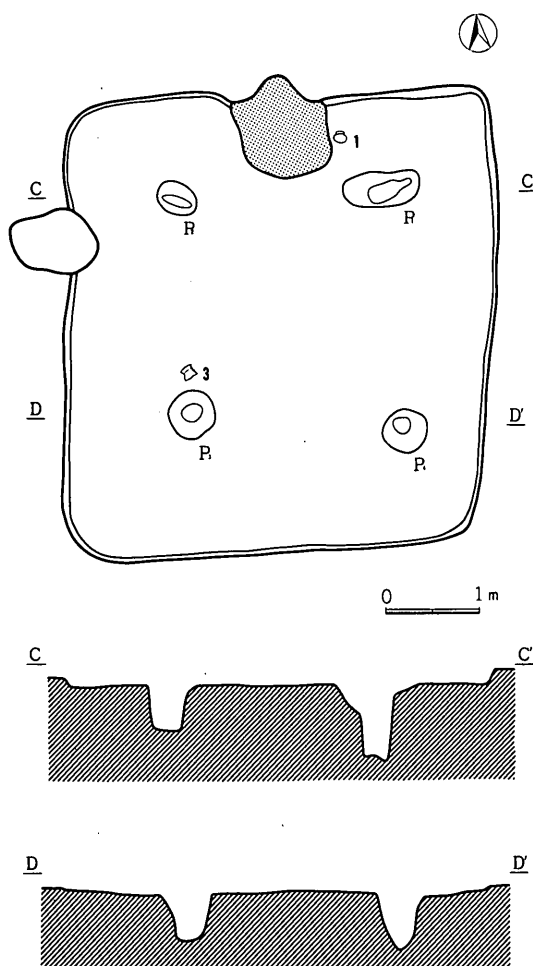
本住居址は、南北4.9m東西4.5mの隅丸方形を呈し、床面積20.5m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-6°-Wを指す。壁高は10~20cmを測るのみで、壁溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は80cm×40cm深さ80cm、P<sub>2</sub>は45cm×30cm深さ50cm、P<sub>3</sub>は50cm×50cm深さ50cm、P<sub>4</sub>は50cm×45cm深さ55cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、パミスを若干含む黒色土層であった。

遺物は、P<sub>3</sub>の脇より3の土師器甕の破片が、カマド東脇の床面上より1の土師器坏が正常位で検出されている。これ以外は、いずれも覆土中から検出されたものである。

カマドは、北壁中央に存在するが、その大半は破壊されており、僅かに東西両袖の一部をとどめているにすぎなかった。その火床部は一旦掘り込まれた後、ロームを含む黒色土層(III層)で埋め戻されていた。カマド覆土は、2層に分層された。I層は灰ブロック・若干のカーボンを含む黒色土層、II層は多量の焼土・若干の灰・カーボンを含む褐色土層であった。

遺物 第282図



第280図 H-93号住居址実測図(1:80)

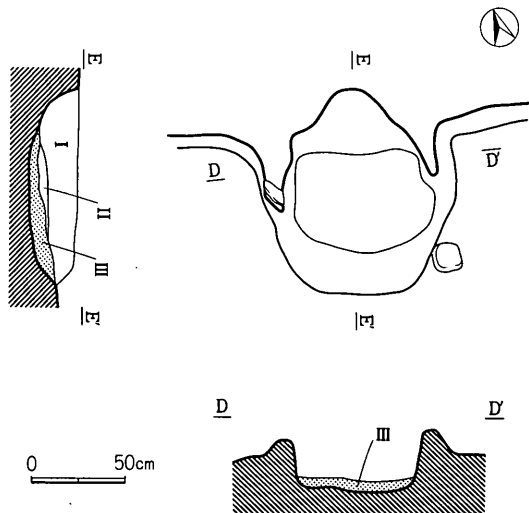
IV 遺構と遺物

本住居址より検出された遺物は、土師器のみであった。

1は、内面黒色研磨のなされた土師器高坏で、坏部に高台が付された後脚台部が貼り付けられるという特異な器形を呈している。本例と同様な器種は、須恵器ではあるが千葉県山田水呑遺跡（山田水呑遺跡発掘調査団 1977）の79号住居址出土遺物等に散見される。仏具等の模倣形態であろうか。

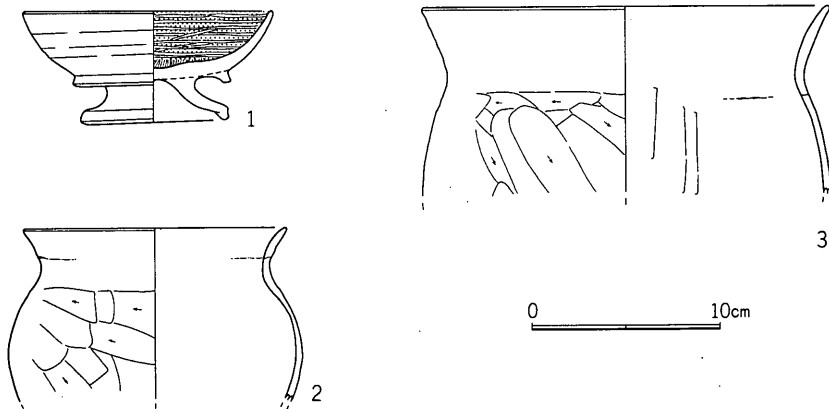
2・3は土師器甕で、2は小形で胴部が珠状を呈するもの、3は「く」の字状に外反する口縁部をみせるものである。

この他、石器・鉄器類は本住居址より検出されていない。



第281図 H-93号住居址カマド実測図 (1:40)

時期



第282図 H-93号住居址出土遺物 (1:4)

第125表 H-93号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	高坏	13.3 5.9 7.8	底部には高台が貼り付けられた後さらに「八」の字状の脚部が付けられる。特殊な器形。	外面 ロクロヨコナデ 内面 黒色研磨 (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み浅黄橙色 (10 YR 8/4) を呈する。
2 (回)	甕	<13.9> — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はやや丸味をおびる。小形の器形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色 (5 YR 4/6) を呈する。
3 (回)	甕	<26.1> — —	口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい橙色を呈する。(7.5 YR 7/4)

本住居址においては時期決定の積極的根拠となる遺物はみられないが、奈良時代、前田遺跡第VI期の所産と考えておきたい。

(94) H-94号住居址

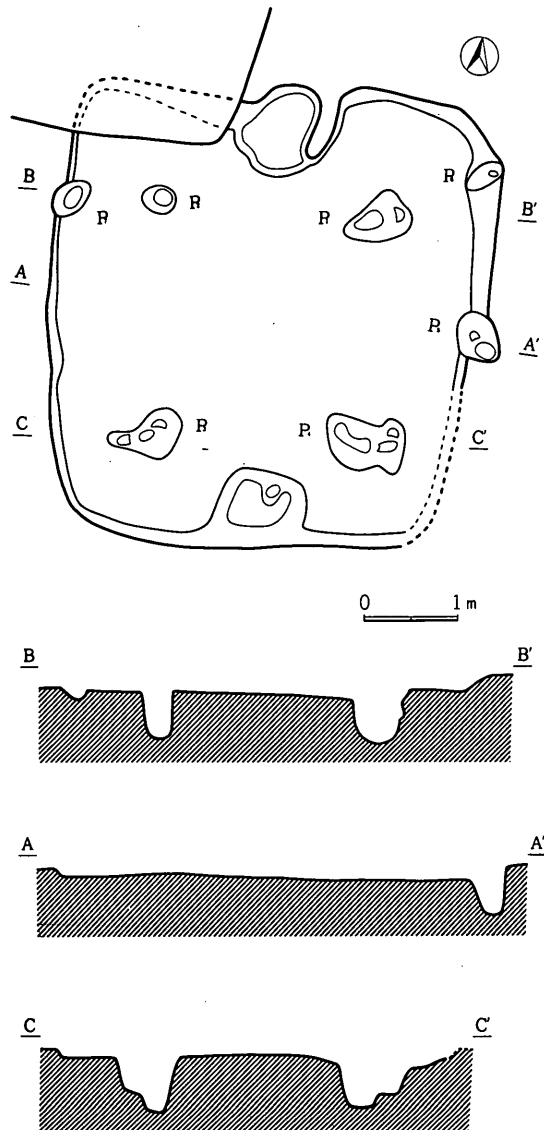
遺構 第283図

H-94号住居址は、第II区ター22グリッドにおいて検出された。その北西コーナーとカマドの一部は、H-93号住居址によって破壊されている。

本住居址は、南北4.9m東西4.7mの隅丸方形を呈し、床面積20.5㎡を測り、主軸方向はN-11°-Wを指す。壁高は2~12cmを測るのみで、特に西壁部分はほとんど残っていない。また、壁溝は認められなかった。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が認められた。この他、壁中にP<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>の3個が認められた。また、南壁際中央は95cm×70cmの楕円形の浅い掘り込みとなっていた。P<sub>1</sub>は75cm×50cm深さ60cm、P<sub>2</sub>は35cm×30cm深さ50cm、P<sub>3</sub>は80cm×45cm深さ60cm、P<sub>4</sub>は80cm×55cm深さ45cm、P<sub>5</sub>は60cm×45cm深さ45cm、P<sub>6</sub>は45cm×20cm、P<sub>7</sub>は48cm×30cm深さ10cmを測る。

覆土はI層のみで、パミス・ローム粒子を若干含む黒色土層であった。遺物はいずれも覆土中から出土したものである。

カマドは、北壁中央にみられたが、すでに壊滅しており、僅かに

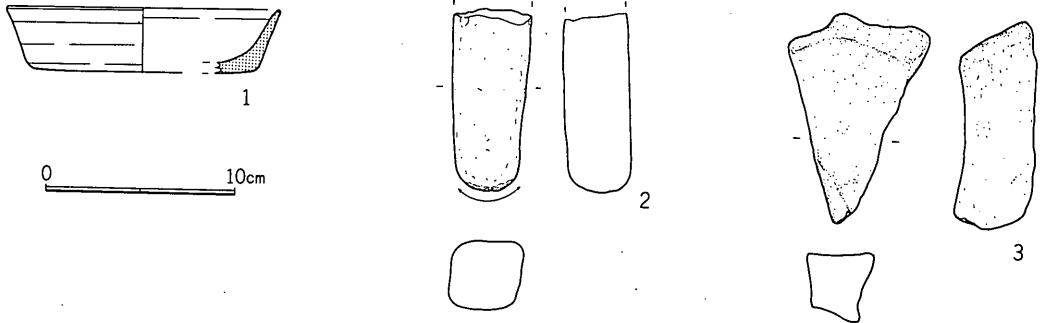


第283図 H-94号住居址実測図 (1:80)



第126表 H-94号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	<14.6> 3.4 <12.3>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (N6/0)



第284図 H-94号住居址出土遺物 (1:4)

東袖部分に相当すると考えられる部分のローム(地山)の盛り上がり認められたにすぎなかった。

遺物 第284図

遺物は、土師器坏・甕の破片若干と、須恵器坏の破片二点が検出されたにすぎなかった。

1は須恵器坏で、手持ちヘラケズリの底部をみせるものである。おそらく、その形態から切り離し法は回転ヘラキリによるものと思われる。

土師器坏では、内面黒色研磨のなされた破片がみられた。また、土師器甕では器形を知り得る破片はみられなかった。

石器は、半欠する敲石(2)と、三角形を呈する自然礫の先端部を用いた敲石(3)の二点が検出された。

時期

本住居址は、僅かな出土遺物とその規模・構造、切り合い関係等から、奈良時代、前田遺跡第IV期の所産と考えておこう。

第127表 H-94号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
2	敲石	安山岩	(9.5)	4.1	3.6	(205)	
3	"	"	10.9	7.4	4.0	295	

(95) H-95号住居址

遺構 第285図

H-95号住居址は、第II区ター21グリッドにおいて検出された。

## 1 竪穴住居址

本住居址は、南北3.2m東西3.1mの隅丸方形を呈し、床面積8.3m<sup>2</sup>を測り、南北軸方向N-20°-Wを指す。壁高は20~30cmを測り、壁溝は認められない。ピットは、北壁寄りに18cm×16cm深さ15cmの小形なP<sub>1</sub>がみられたのみであった。

住居址覆土はI層のみで、若干のパミスとローム粒子を含む黒色土層であった。遺物はいずれも覆土中から出土している。

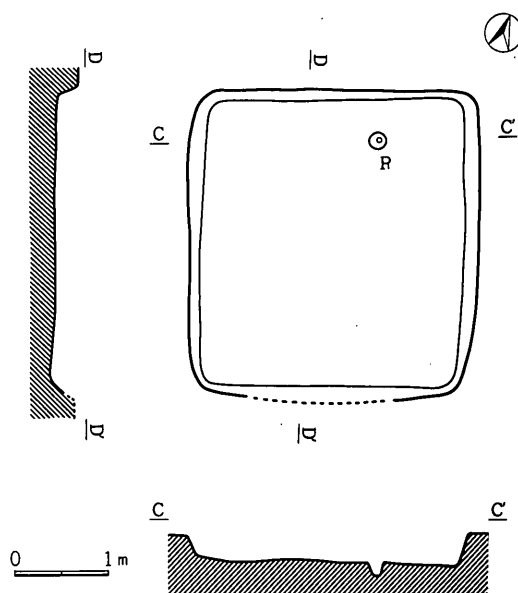
なお、本住居址においてカマドは存在していなかった。

### 遺物

本住居址からは、土師器甕の胴部破片8片が検出されたのみであり、これらは図示し得るに至らなかった。

### 時期

本住居址においては遺物が皆無に等しいため、その時期決定が困難である。しかし、他の住居址の位置付けから類推して、奈良~平安時代、前田遺跡第VII期の所産と考えて大過あるまい。



第285図 H-95号住居址実測図(1:80)

## (96) H-96号住居址

### 遺構 第286図

H-96号住居址は、第II区チ-21グリッドにおいて検出された。その上面の大部分は削平されており、北側のプランは捉えられなかった。

本住居址の推定規模は、南北3.9m東西4.1mの隅丸方形を呈し、床面積15.2m<sup>2</sup>程度を測る。南北軸方向は、N-44°-Wを指す。ピットは、南東コーナーにP<sub>1</sub>が、南西コーナー寄りにP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>の二個が認められた。P<sub>1</sub>は40cm×40cm深さ38cm、P<sub>2</sub>は40cm×40cm深さ20cm、P<sub>3</sub>は50cm×40cm深さ17cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、小粒パミスを若干含む黒色土層であった。

住居址中央には、60cm×50cmの卵形を呈する炉がみられ、薄く焼土の堆積が認められた。

### 遺物

本住居址においては、遺物はまったく検出されなかった。

時期

本住居址は出土遺物がないため時期決定が困難であるが、炉を有するその構造からすると、本遺跡においては古墳時代中期～後期か、あるいは古代末期から中世のいずれかの時期に位置づけられることになろうか。

(97) H-97号住居址

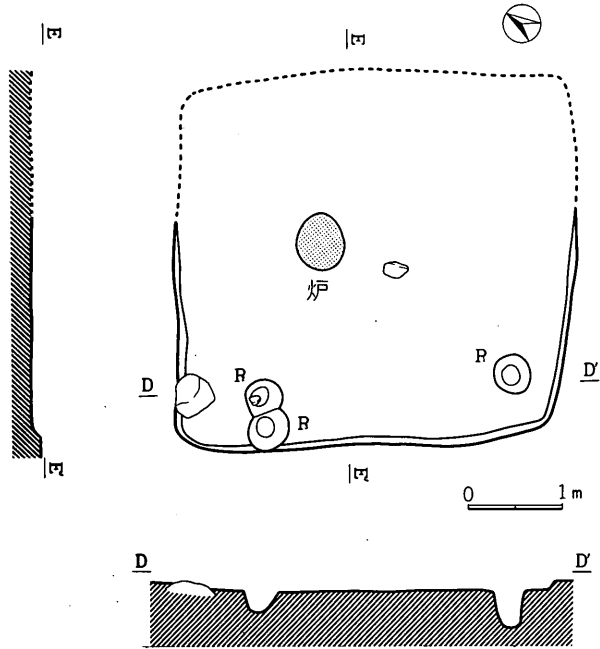
遺構 第287・288図

H-97号住居址は、第Ⅲ区テ-24グリッドにおいて検出された。

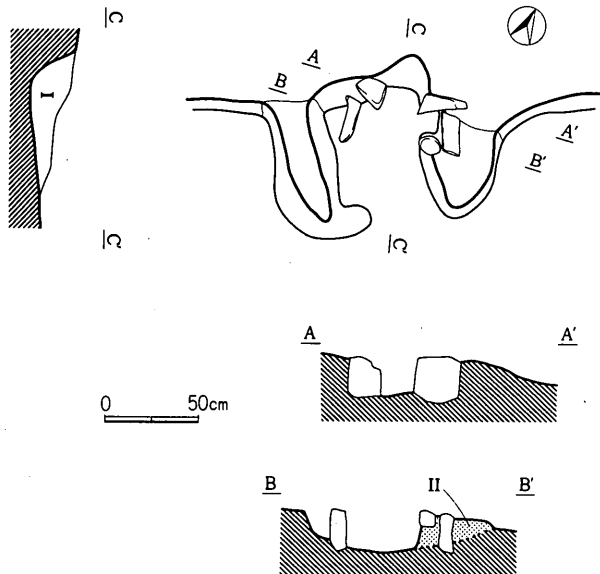
本住居址は、南北5.0m東西3.95mの隅丸方形を呈し、床面積15.2m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-36°-Wを指す。壁高は10~20cmを測るのみで、壁溝は認められない。なお、南壁東半分と南西コーナー部には、土中より巨大な自然礫が突出していた。これらは、当然住居使用時においても屋内にあったことになり、不都合さは感じられなかったのであろうか。

本住居址においては、支柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が認められた。P<sub>1</sub>は55cm×45cm深さ30cm、P<sub>2</sub>は70cm×60cm深さ35cm、P<sub>3</sub>は50cm×45cm深さ35cm、P<sub>4</sub>は55cm×55cm深さ30cmを測るものである。

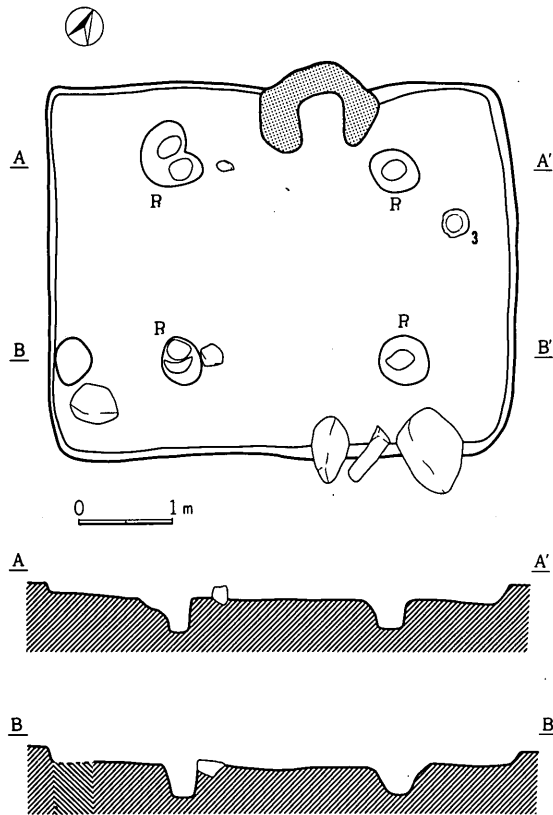
住居址覆土は、I層のみで、パミス・小石をよく含む黒色土層であった。



第286図 H-96号住居址実測図 (1:80)



第287図 H-97号住居址カマド実測図 (1:40)



第288図 H-97号住居址実測図 (1:80)

遺物は、P<sub>1</sub>の脇の床面上に3の土師器甕の胴部上半以上が伏せられた状態で出土した。これ以外の遺物は、いずれも覆土中から出土したものである。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに半壊状態にあり、僅かに袖の一部と袖石をとどめるにすぎなかった。A-A'・B-B'の断面でみるように、袖石には面取り軽石が用いられ、さらにそれらに赤褐色の粘土層(II層)が貼られていた。カマド中の堆積土は、若干のカーボンを含む黒色土層であった。

遺物 第289図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では坏・甕・土師器では甕がある。

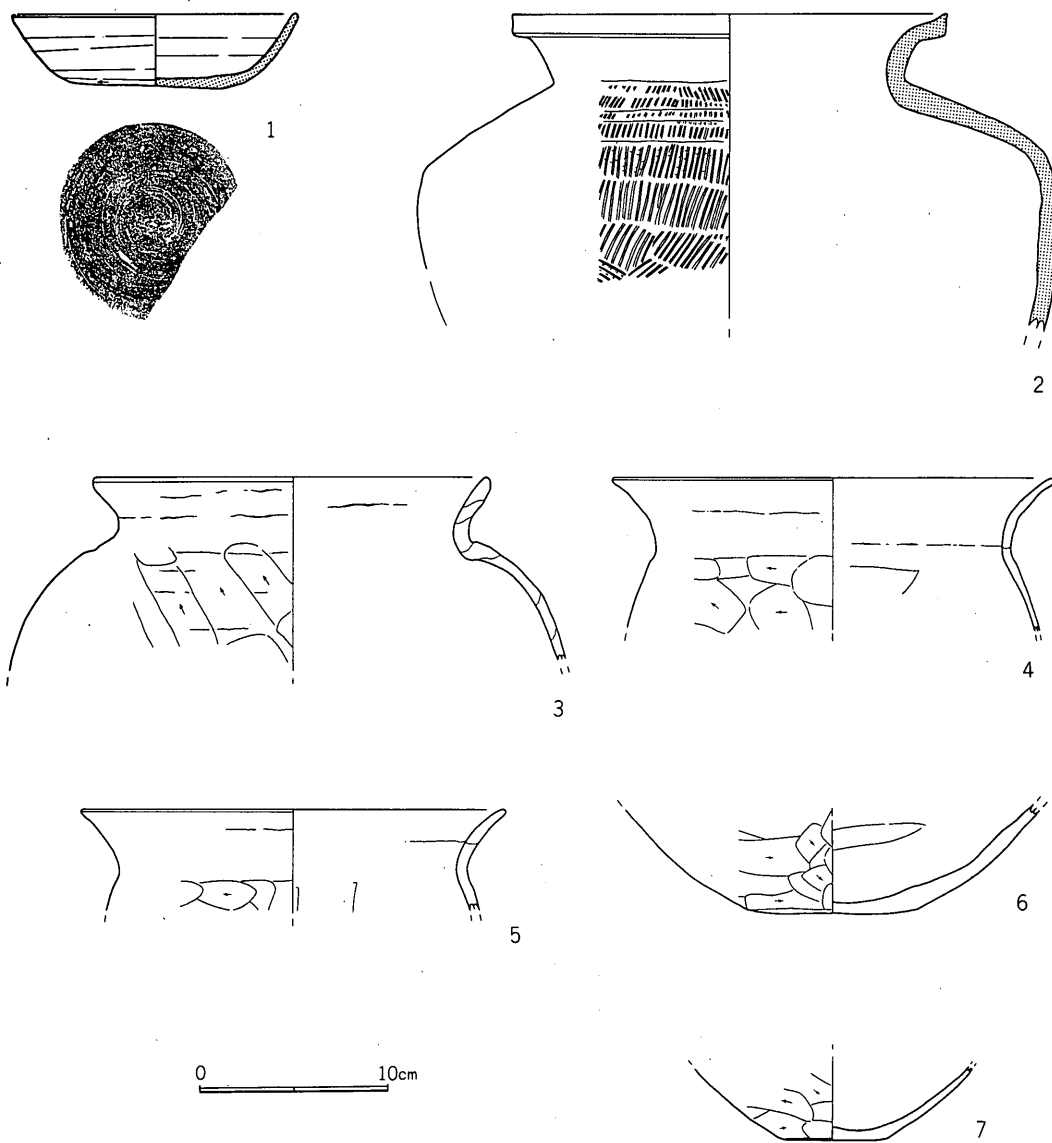
1は、回転ヘラケズリのなされた底部をみせる須恵器坏であるが、その切り離し方法は不明。

2は、肩の張る須恵器甕で、口唇部は帯状を呈している。

3は、土師器の球胴を呈する甕で、6がその底部になるものと思われる。胎土が精選されず、焼成もあまり良好でない。

4・5は土師器甕で、4は僅か「コ」の字状に外反する口縁部、5は「く」の字状に外反する

IV 遺構と遺物



第289図 H-97号住居址出土遺物 (1 : 4)

口縁部である。

この他、石器・鉄器類は検出されなかった。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

第128表 H-97号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徵	調 整	備 考
1 (完)	坏 (須)	<15.7> 3.8 <8.2>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y7/1)を呈する。
2 (完)	甗 (須)	(23.1) — —	器形は肩が張り、口唇部が帯状を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部は叩きがなされる。 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y7/1)を呈する。
3 (完)	甗	(21.1) — —	口縁部は外反し、胴部は球胴を呈する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は精選されず砂粒を多く含み、褐色(7.5YR7/6)を呈する。 焼成はあまい。
4 (回)	甗	<23.4> — —	口縁部は僅か「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は浅黄色を呈する。 (10YR8/4)
5 (回)	甗	<23.1> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい赤褐色を呈する。 (5YR5/4)
6 (回)	甗	— — <8.9>	底部平底。3と同一個体の底部と考えられる。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ、炭素が付着する。	胎土は精選されず砂粒を多く含み、褐色を呈する。 (7.5YR7/6) 焼成はあまい。
7 (回)	甗	(21.1) — —	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土はにぶい橙色を呈する。 (5YR6/4)

## (98) H-98号住居址

## 遺 構 第290・291図

H-98号住居址は、第III区テ-24グリッドにおいて検出された。

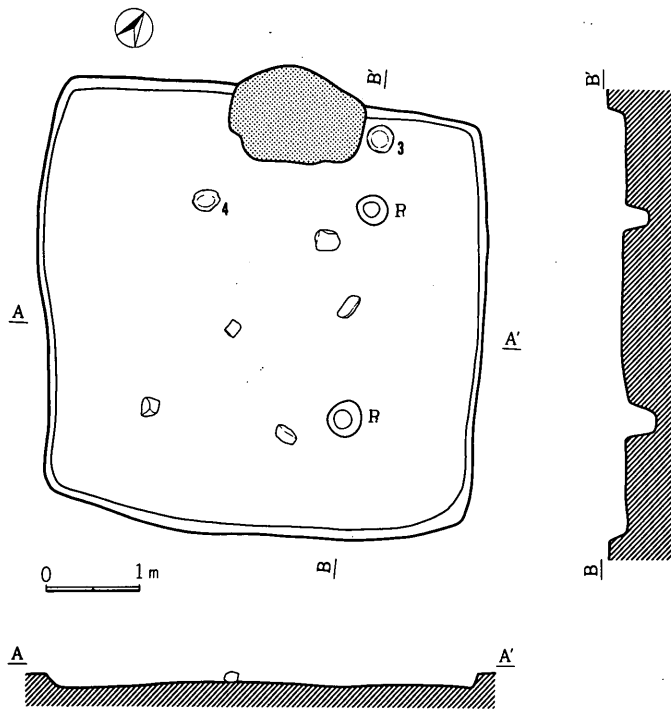
本住居址は、南北4.7m東西4.8mの隅丸方形を呈し、床面積17.6㎡を測り、主軸方向N-39°-Wを指す。壁高は15~20cmを測るのみで、壁構は認められない。主柱穴は、I区中央にP<sub>1</sub>、IV区中央にP<sub>2</sub>が検出され、当然これに対応するピットがII区・III区に存在すると考えられたが、床面は丹念に精査したにもかかわらず相当のピットは検出されなかった。P<sub>1</sub>は35cm×30cm深さ25cm、P<sub>2</sub>は40cm×35cm深さ30cmを測る。

住居址覆土は、I層のみで、小石・パミスをよく含む黒色土層であった。

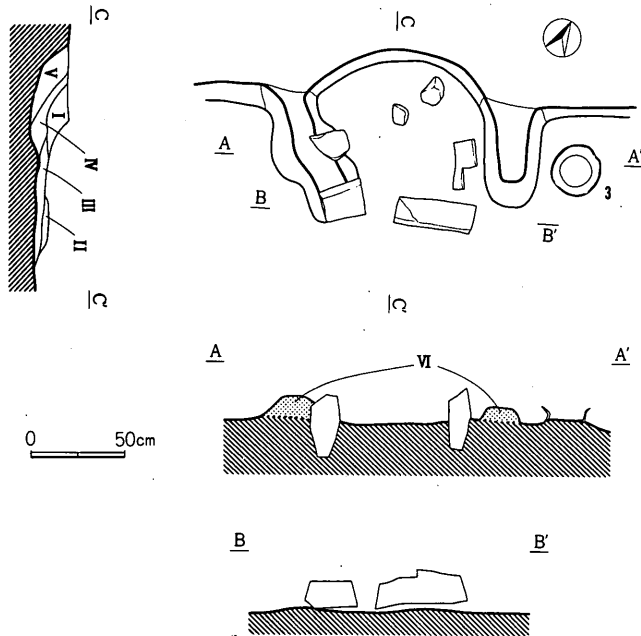
遺物は、H-48と同様須恵器大甗の口縁部3がカマドの東脇に残置されていた。また、4の土師器甗口縁部がII区の床面上より検出された。これ以外の遺物はいずれも覆土中より検出されたものである。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに半壊状態にあり、袖の一部をとどめるのみであった。断面図をみると、A-A'では両袖に面取り軽石と粘土(IV層)が用いられていることがわかる。また、B-B'の断面にみられる直方体の面取り軽石二点は、焚口部の天井石であろうか。カマド使用に係る土層堆積は、5層に分層された。I層は多量の灰と若干の焼土を含む灰褐色土層、II層は多量の灰を含む灰色土層、III層は若干のカーボンを含む黒色土層、IV層は褐色の焼土層、V層は多量の焼土と若干のカーボンを含む褐色土層であった。

IV 遺構と遺物



第290図 H-98号住居址実測図 (1:80)



第291図 H-98号住居址カマド実測図 (1:40)

遺物 第292図

本住居址より検出された遺物は、須恵器には坏・甕、土師器には高坏・甕がある。

1は須恵器坏で、回転ヘラキリの後若干の手持ちヘラケズリのなされた底部をみせている。

2は、ロクロ整形による土師器で、大方の器形は知り得ないが、本例と同様なものは第I区H-19号住居址にみられる。

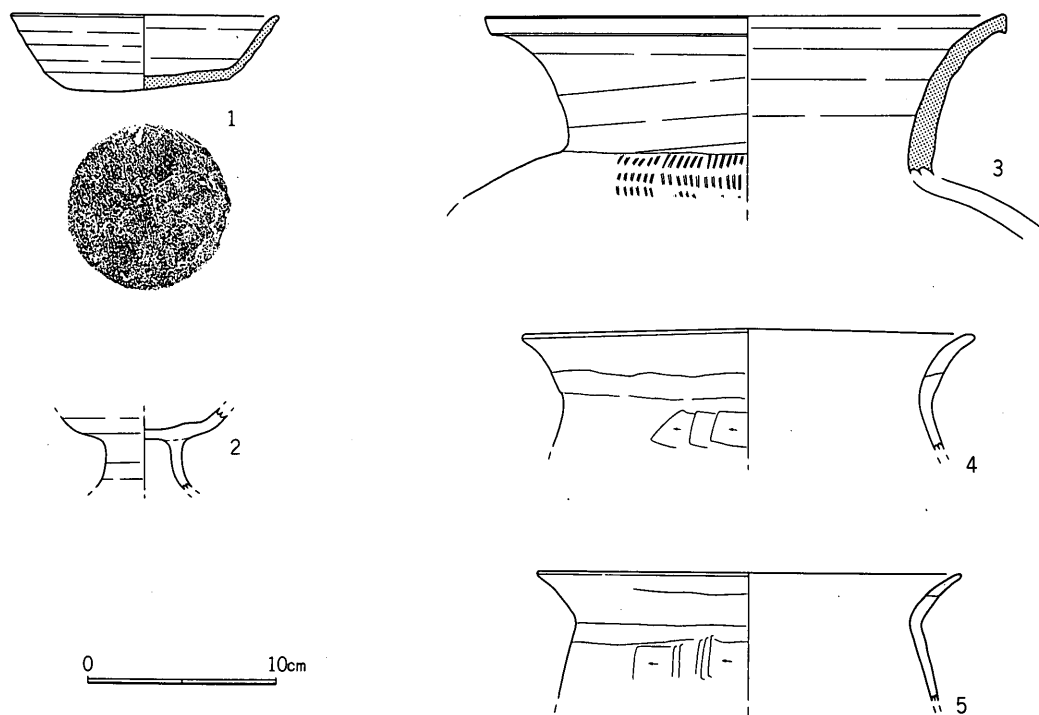
3は、須恵器甕の口縁部で、胴部以下の破片は住居址内にみられなかった。

4・5は土師器甕で、4は僅か「コ」の字状に外反する口縁部、5は「く」の字状に外反する口縁部である。

なお、本住居址において石器・鉄器等は検出されなかった。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期の所産と考えておこう。



第292図 H-98号住居址出土遺物(1:4)



第129表 H-98号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (完)	坏 (須)	14.2 4.0 8.2	体部は外反し、底部平底。 完形、器形は歪む。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラキリの後、 若干の手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み明赤褐色 (5YR 5/6)
2 (回)	高坏	- - -		外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含みにぶい黄褐色 (10YR 7/4)を呈する。
3 (完)	甕 (須)	27.8 - -	口縁部は逆「八」の字状に外反し、口唇部は带状となる。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (10Y 5/1)
4 (回)	甕	<24.1> - -	口縁部は僅か「コ」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい黄褐色を呈する。 (10YR 7/4)
5 (回)	甕	<22.6> - -	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は浅黄褐色を呈する。 (10YR 8/3)

## (99) H-99号住居址

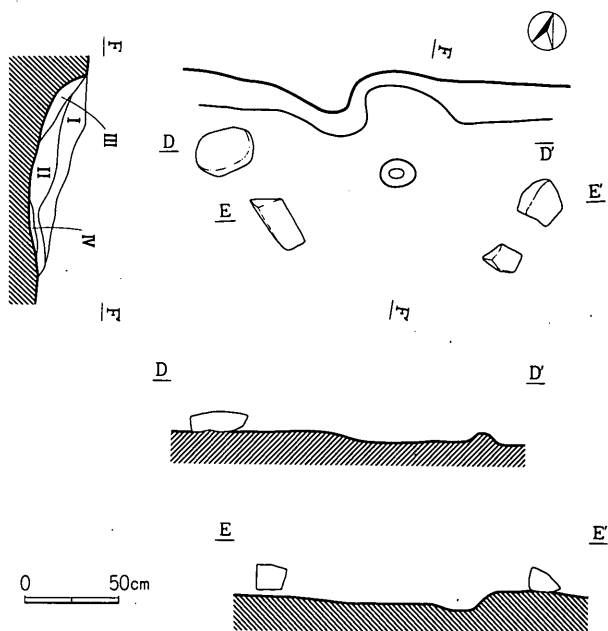
## 遺構 第293・294図

H-99号住居址は、第Ⅲ区テ-24グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北5.4m東西5.4mの隅丸方形を呈し、床面積26.4m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-25°-Wを指す。壁高は15~25cmを測り、壁溝はP<sub>6</sub>は部分を除きほぼ全周していた。主柱穴と考えられるピットは、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は75cm×50cm深さ35cm、P<sub>2</sub>は55cm×55cm深さ38cm、P<sub>3</sub>は53cm×48cm深さ55cm、P<sub>4</sub>は50cm×35cm深さ50cmを測る。また、南壁より中央からはP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>が検出されたが、P<sub>6</sub>付近の壁はやや突出していた。P<sub>5</sub>は40cm×35cm、P<sub>6</sub>は14cm×12cmを測った。

住居址覆土はI層のみで、小石・パミスをよく含む黒色土層であった。遺物はいずれも覆土中より出土している。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに壊滅状態にあった。カマド付近には、その構材に用いられていたと考えられる石材がみられた。その西側には面取り軽石二点がその東側には安山岩礫二点がみられた。カマド使用の関連すると考えられる堆積は、プライマリーではないが4



第293図 H-99号住居址カマド実測図 (1:40)

層に分層された。I層が灰と若干カーボン・焼土を含む灰色土層、II層が多量の炭化物を含む黒色土層、III層が若干の焼土を含む茶褐色土層、IV層は多量の灰と少量のカーボンを含む灰褐色土層であった。

遺物 第295図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では坏・甕、土師器では甕がある。

1・2は、回転ヘラキリの後若干の手持ちヘラケズリがなされた底部をみせるもので、1は須恵器坏、2は須恵器で器種は坏となるかどうかかわからない。

3は土師器小形丸底甕で、胎土は精選されず肉厚なものである。外面には息の長い縦長のヘラケズリが、内面には細かなミガキ状のヘラナデが観察される。

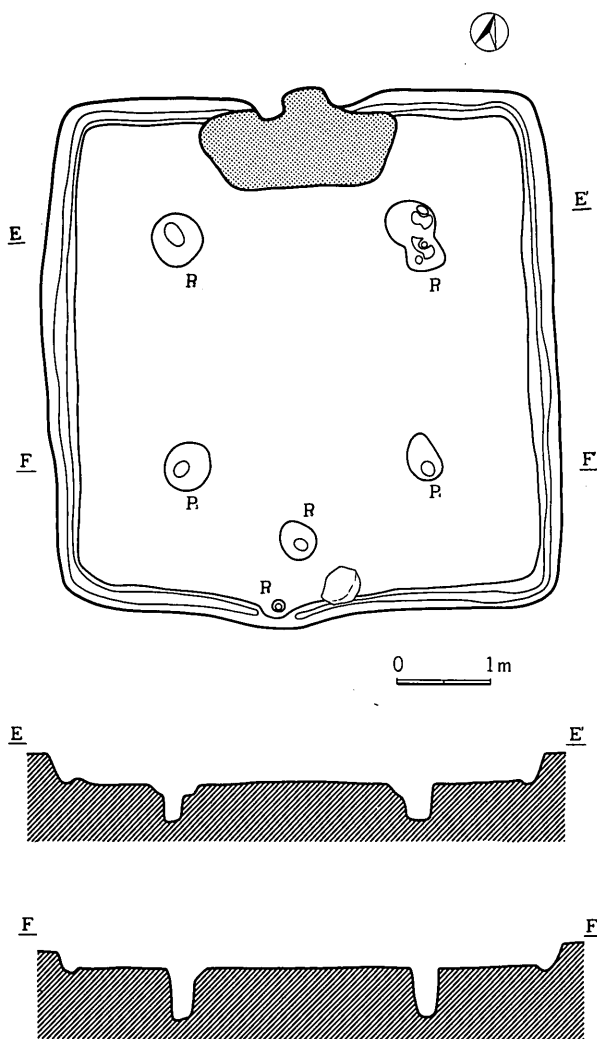
4・5は口縁部が「く」の字状に外反する薄手の土師器甕である。また、7は小形な土師器甕底部で、内面には細かな刷毛目状調整が観察される。

8と、土師器大甕で、須恵器の模放形態と考えられる。帯状の口唇から口縁部、ふくらみを持つ胴部へと続き、丸底と考えられる底部へと至る器形を呈する。

なお、本住居址においては、石器・鉄器等は検出されなかった。

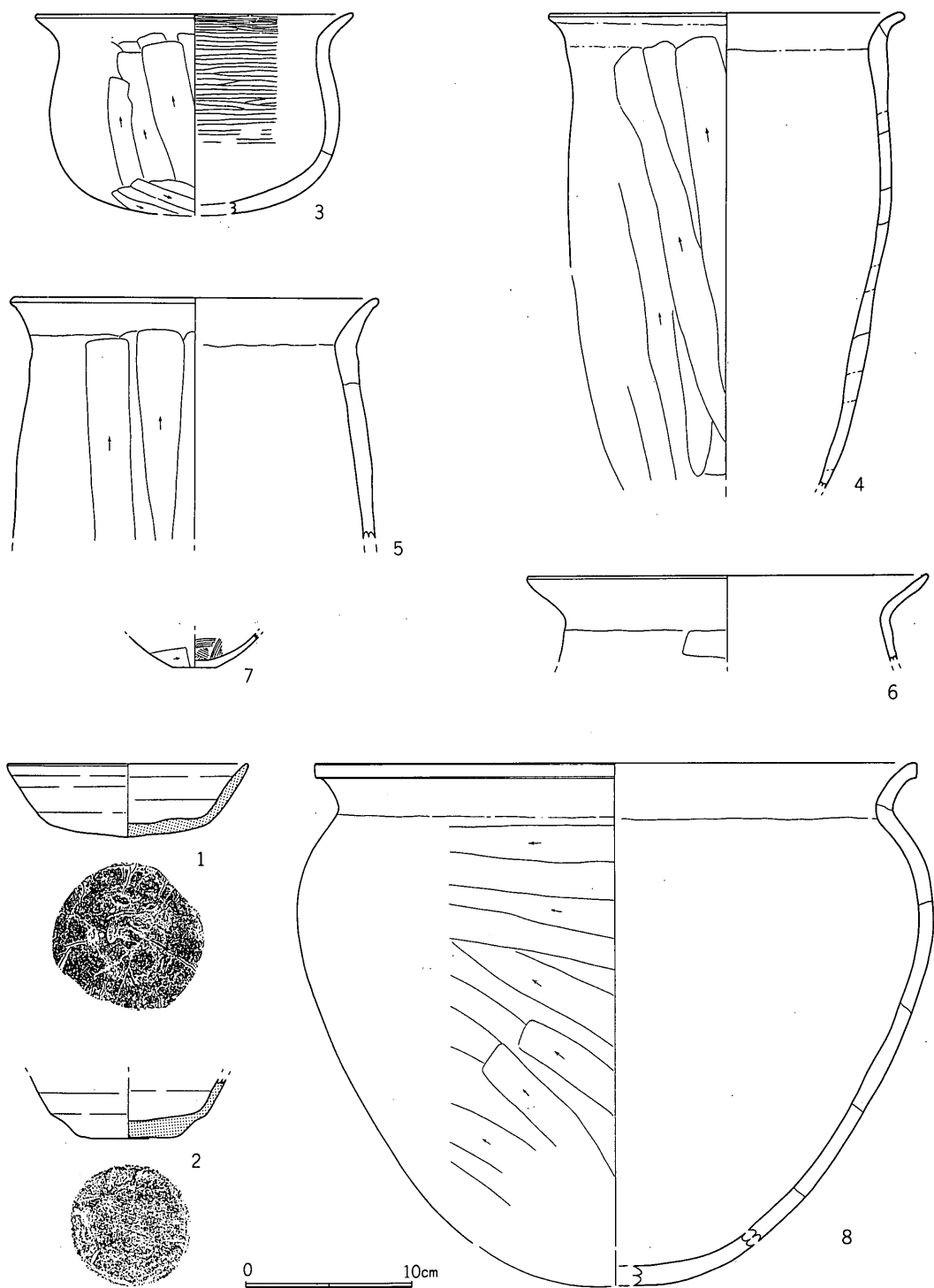
時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。



第294図 H-99号住居址実測図 (1:80)

IV 遺構と遺物



第295図 H-99号住居址出土遺物 (1 : 4)

第130表 H-99号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

押図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	<14.6> 4.4 9.5	体部は外反し、底部はやや丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリの後、若干手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい褐色(7.5 YR 5/4)を呈する。
2 (回)	坏? (須)	— — 6.0	底部平底。 あるいは坏とは異なる器種かもしれない。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラキリの後、若干の手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(2.5 Y 7/1)を呈する。
3 (回)	甕	(19.1) (12.0) —	小形で丸底の器形を呈し、口縁部は外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 細い単位のヨコヘラナデ(ヘラミガキ状)	胎土は精選されず砂粒を多く含み、にぶい褐色(7.5 YR 5/4)を呈する。
4 (完)	甕	21.3 — —	口縁部は短く外反し、胴部は長く直線的に下降する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部縦位のヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	胎土は精選されず、にぶい橙色を呈する。 (7.5 YR 7/4)
5 (回)	甕	<22.1> — —	口縁部は外反し、胴部は直線的に下降する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部縦位のヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は精選されず、浅黄褐色(10 YR 8/3)を呈する。焼成は不良でもらう。
6 (回)	甕	<24.1> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土は橙色を呈する。 (5 YR 6/6)
7 (回)	甕	— — (2.5)	底部平底の小形な器形	外面 ヘラケズリ 内面 細かな刷毛目状調整	胎土は精選されず砂粒を多く含み、灰黄褐色(10 YR 6/2)を呈する。焼成不良。
8 (回)	甕	(36.2) (36.4) —	口縁部は外反し、胴部はふくらみもち丸底と考えられる底部に至る。 器形は須恵器大甕の模倣によるものと思われる。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	胎土はにぶい橙色(7.5 YR 7/4)を呈する。

## (100) H-100号住居址

## 遺 構 第296・297図

H-100号住居址は、第Ⅲ区テ-24・25グリッドにおいて検出されたが、その床面近くが確認されたにすぎない。

本住居址の推定プランは、南北3.4m東西3.2mの隅丸方形を呈し、床面積は10.8㎡程度を測るものと考えられる。主軸方向は、N-27°-Wを指す。柱穴等を含むピットは、一切認められない。

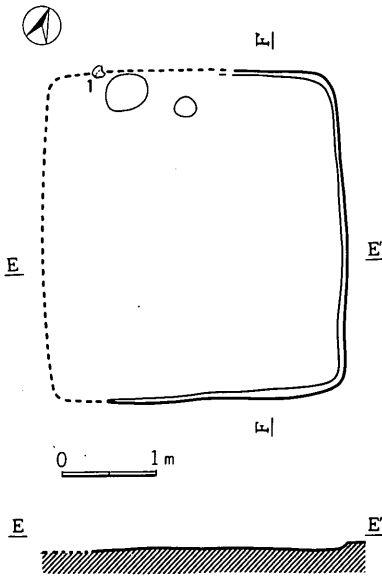
カマドは、北壁中央に存在したのと考えられ、カマド部分には、焼土と灰の分布が認められた。また、この部分からは1の須恵器坏が検出されている。

本住居址から検出された遺物は、1の須恵器のみで、回転ヘラキリの後手持ちヘラケズリのなされた底部をみせるものである。

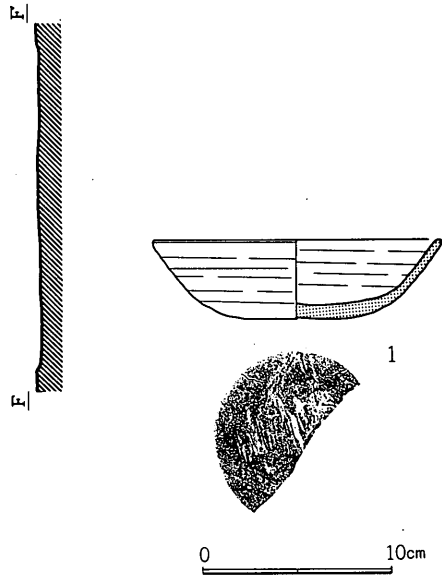
## 時 期

本住居址の位置づけについては、手掛かりとなる遺物は1の坏のみであるが、とりあえず奈良時代、前田遺跡第Ⅳ期の所産として捉えておきたい。

IV 遺構と遺物



第296図 H-100号住居址実測図 (1:80)



第297図 H-100号住居址出土遺物 (1:4)

第131表 H-100号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	<15.4> 4.1 (7.3)	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラキリの後、 手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する焼成はあまい。

(101) H-101号住居址

遺 構 第298・299図

H-101号住居址は、第III区テ-24グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.5m東西4.0mの隅丸方形を呈し、床面積12.5㎡を測り、主軸方向はN-22°-Wを指す。壁高は20cm前後を測り、壁溝は認められない。支柱穴と考えられるピットは、それぞれ4カ所のコーナー寄りにP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は60cm×60cm深さ15cm、P<sub>2</sub>は60cm×50cm深さ25cm、P<sub>3</sub>は50cm×45cm深さ10cm、P<sub>4</sub>は40cm×40cm深さ20cmを測る。また、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>の中間にP<sub>5</sub>が検出された。P<sub>5</sub>は55cm×40cm深さ15cmを測る。いずれも浅いピットといえる。

住居址覆土はI層のみで、小石・パミスをよく含む黒色土層であった。

遺物は、P<sub>4</sub>の北の床面上から1の蓋が、カマドの西側からは2の坏と4の甕が検出された。これ以外の遺物はいずれも覆土中から出土したものである。

カマドは、北壁中央より検出されていたが、ほぼ壊滅状態にあり、粘土(V層)によって構成

される東西両袖の一部が僅かに残っているにすぎない。また、東側の袖の前方部には土中より大きな自然礫が突出しており、これを被うように構築されていたものと考えられる。この礫は、袖石の代用的なものとしてかえって好都合だったのであろうか。

カマドの使用にかかわる土層堆積は、3層に分層された。I層は多量のカーボンを含む黒色土層、II層は灰・焼土を含む灰褐色土層、III層は灰・カーボンを含む灰褐色土層であった。また、火床部は僅かに掘り込まれた後、黒色土（IV層）で埋め戻されていた。

遺物 第300図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では蓋・坏、土師器では坏・甕がみられた。

1は須恵器蓋で、つまみ部は中央部の窪む円形を呈している。

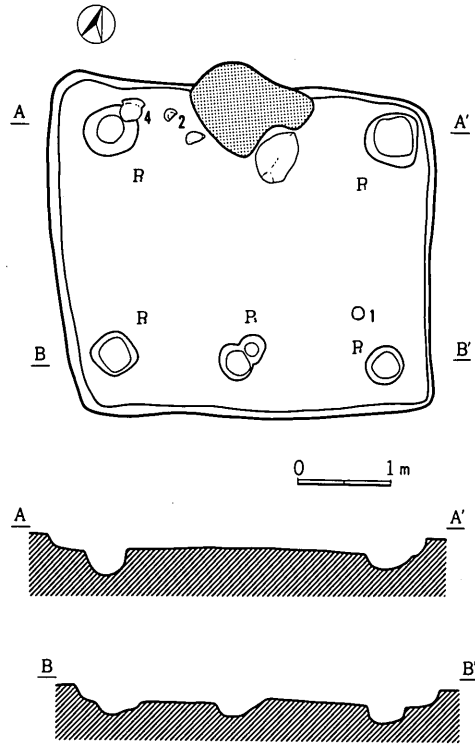
2は須恵器坏で、回転ヘラキリの後回転ヘラケズリのなされた底部をみせる。

3は土師器坏で、全体に風化が激しいが内面体部に僅かに放射状暗文が観察される。見込み部の調整は不明である。

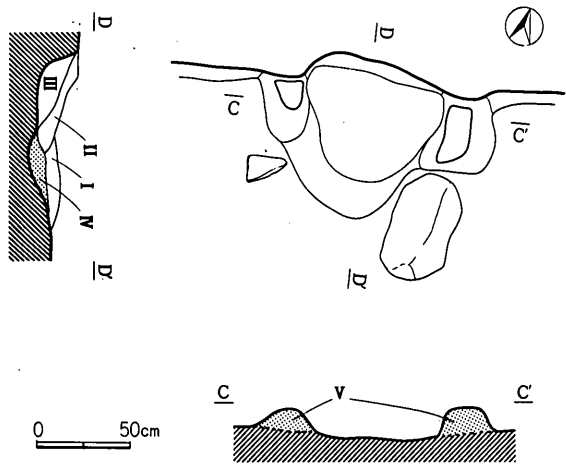
4は、口縁部が「く」の字状に外反する土師器甕である。

6は器種不明の底部で、手持ちヘラケズリがなされている。坏と考えるのが無難であろうか。

この他、石器・鉄器類は本住居址からは検出されなかった。

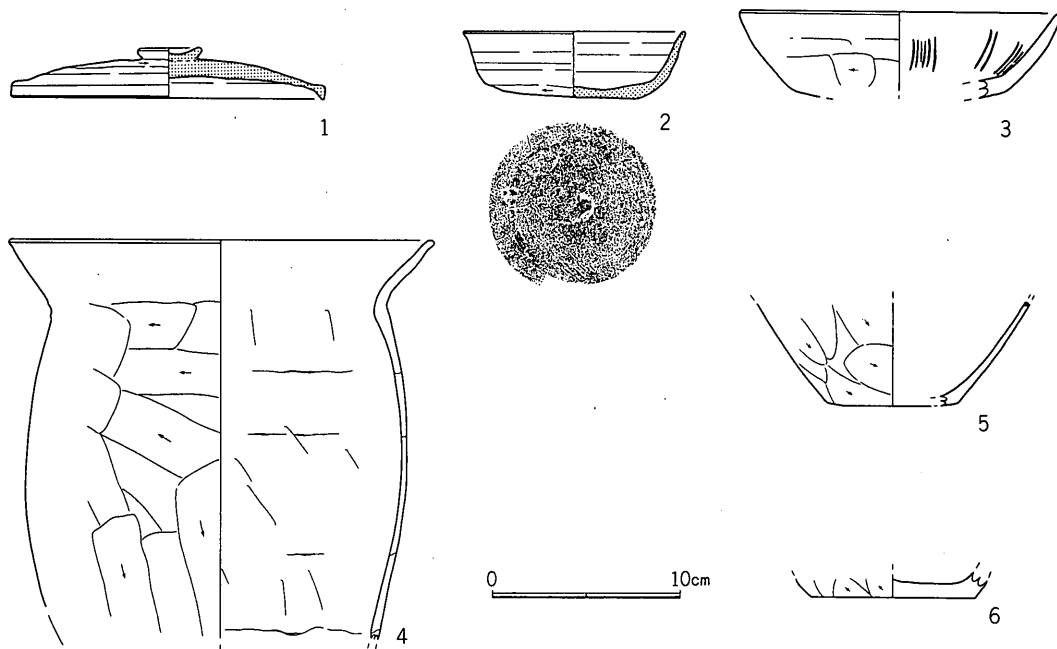


第298図 H-101号住居址実測図 (1:80)



第299図 H-101号住居址カマド実測図 (1:40)

IV 遺構と遺物



第300図 H-101号住居址出土遺物実測図(1:4)

第132表 H-101号住居址出土遺物一覧表<土器>

押図 番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (完)	蓋 (須)	3.3 2.6 16.6	つまみ部は中央部のくぼむ円形を呈する。 ほぼ完形	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み灰色(N4/0)を呈する。 焼成良好
2 (完)	坏 (須)	11.8 3.4 7.1	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラキリの後、 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色を呈する。(N7/0)
3 (回)	坏	<17.1> — —	体部は外反し、底部平底。	外面 口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ 内面 体部はヨコナデの後、放射状暗文が施される。	胎土は砂粒を多く含み橙色を呈する。(7.5YR7/6)
4 (完)	甕	22.6 — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい橙色を呈する。 (7.5YR6/4)
5 (回)	甕	— — 7.0	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は橙色を呈する。 (7.5YR6/6)
6 (完)		— — 8.7	底部平底、器種は坏となるか。	外面 底部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	胎土は砂粒を含み橙色(7.5YR6/6)を呈する。 焼成不良。

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

(102) H-102号住居址

遺構 第301・302図

H-102号住居址は、第IV区ニ-32グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.6m東西4.5mの隅丸方形を呈し、床面積17.1㎡を測り、主軸方向はN-3°-Wを指す。壁高は20cm前後を測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は55cm×40cm深さ35cm、P<sub>2</sub>は45cm×40cm深さ30cm、P<sub>3</sub>は50cm×40cm深さ25cm、P<sub>4</sub>は40cm×40cm深さ30cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、若干のパミス・スコリアを含む黒色土層であった。遺物は、良好な出土状態を示すものはなく、いずれも覆土中から出土している。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに破壊されており、その構材であった面取り軽石7点と安山岩礫1点がまとめて整然と置かれていた状態であった。

遺物 第303図

本住居址より検出された遺物には、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕がみられた。

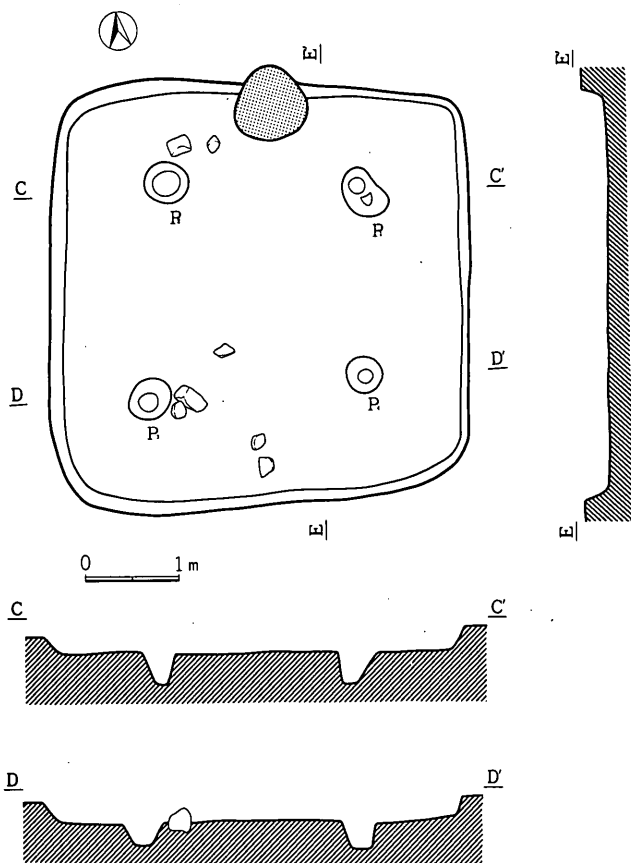
須恵器坏は、図示し得るものがなかったが、全面手持ちヘラケズリのなされた底部破片が認められた。また、須恵器甕も胴部破片のみで全体の器形を知り得るものがなかった。

1は、胎土が精選されず焼成も良好でない土師器坏の破片で、体部に放射状暗文、見込み部にラセン状暗文が施こされている。

2・3は、口縁部が「く」の字状に外反する土師器甕である。

時期

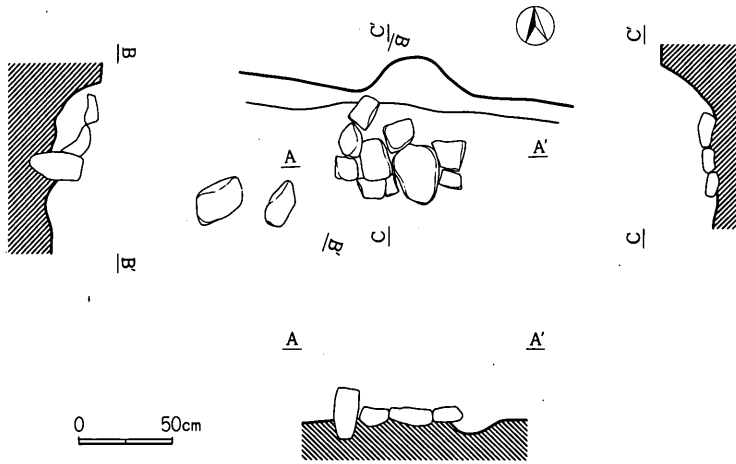
本住居址は、僅かな出土遺物を手掛かりに、奈良時代、前田遺跡第V期の所産と考えておこう。



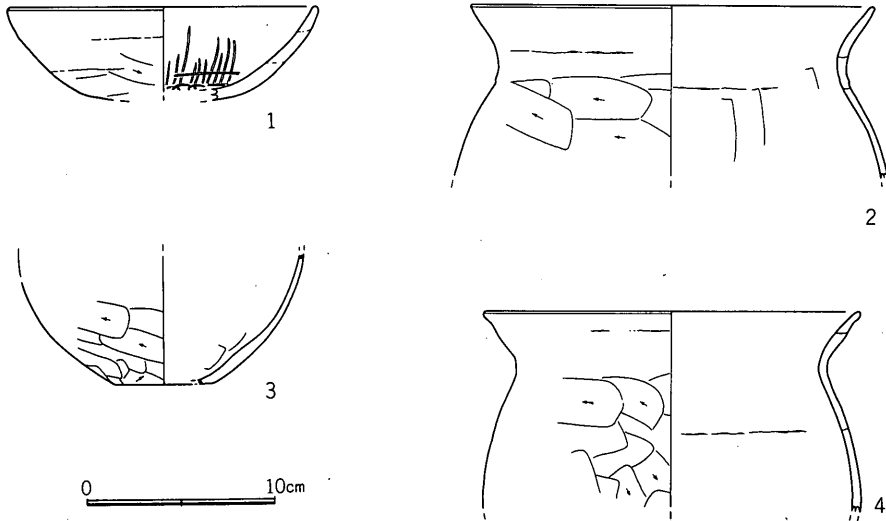
第301図 H-102号住居址実測図(1:80)



IV 遺構と遺物



第302図 H-102号住居址カマド実測図 (1:40)



第303図 H-102号住居址出土遺物 (1:4)

第133表 H-102号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

押図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	坏	<16.5> — —	体部は外反する。	外面 □縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面 体部放射状暗文が施される 底部ラセン状暗文が施される。	胎土は精選されず砂粒を含み、褐色(10YR 4/1)を呈する。粘土紐痕がみとめられる。
2 (回)	甕	(21.4) — —	□縁部は「く」の字状に外反する。	外面 □縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 □縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は浅黄褐色を呈する。 (10YR 8/3)
3 (回)	甕	(19.9) — —	□縁部はゆるく「く」の字状に外反する。	外面 □縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 □縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい褐色を呈する。 (7.5YR 5/4)
4 (完)	甕	— (5.1)	底部は平底を呈し、胴下半部は球状を呈する。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土はにぶい褐色を呈する。 (7.5YR 6/4)

(103) H-103号住居址

遺構 第304・305図

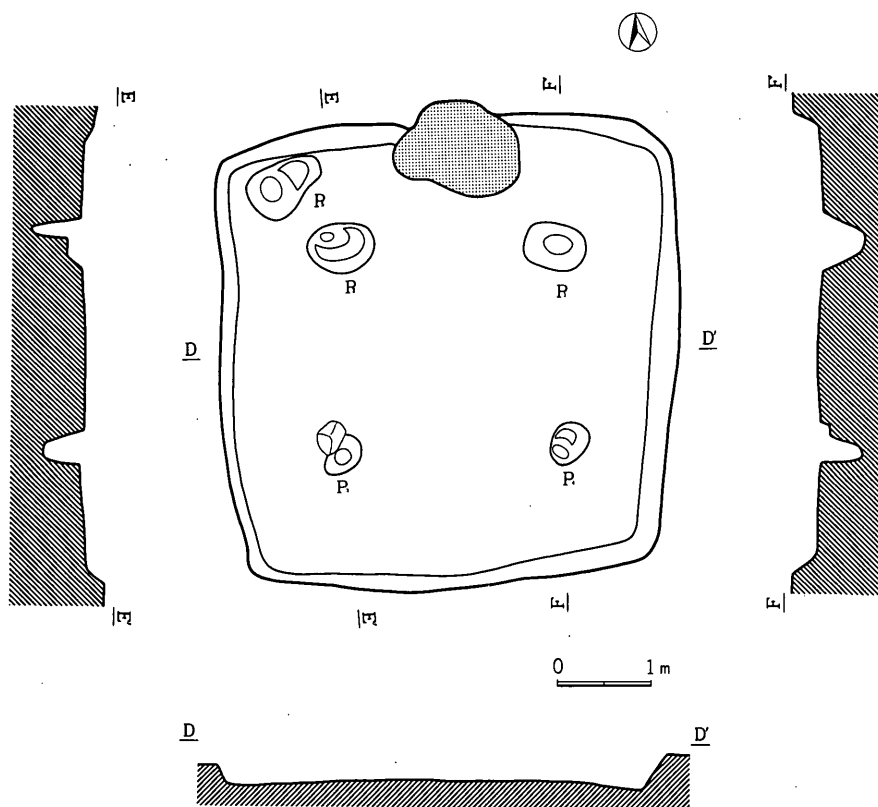
H-103号住居址は、第IV区ニ-32グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.9m東西4.9mの隅丸方形を呈し、床面積19.5m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-3°-Eを指す。壁高は20~40cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。また、北西コーナーにはP<sub>5</sub>が認められた。P<sub>1</sub>は65cm×50cm深さ45cm、P<sub>2</sub>は70cm×50cm深さ50cm、P<sub>3</sub>は45cm×35cm深さ40cm、P<sub>4</sub>は48cm×38cm深さ45cm、P<sub>5</sub>は84cm×55cm深さ23cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、若干のパミス・スコリアを含む黒色土層であった。遺物は、良好な出土状態を示すものはなく、いずれも覆土中から出土している。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに破壊されており、その構材であった面取り軽石はまとめて整然と火床部に置かれていた。また、火床部は円形に一旦掘り込まれた後、黒色土層（I層）で埋め戻され、火床面となっている。

遺物 第306図



第304図 H-103号住居址実測図 (1:80)

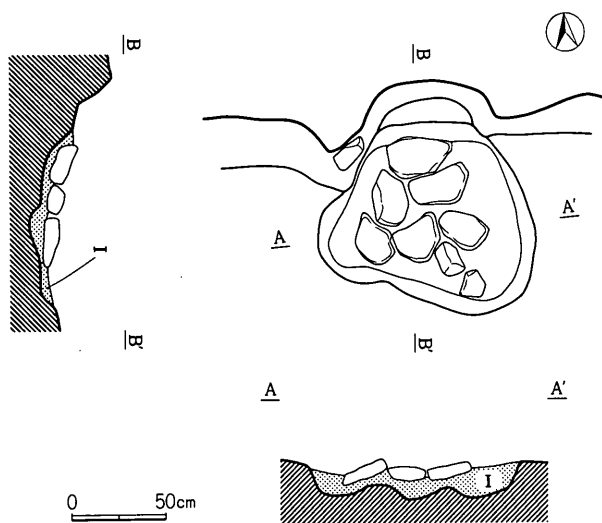
本住居址より検出された遺物には、須恵器では蓋・坏・甕、土師器には坏・甕がある。

1は、須恵器蓋で、つまみ部の形状は不明である。

2～5は須恵器坏で、2は回転ヘラケリ、3～5は全面手持ちヘラケズリの底部をみせている。なお、3～5の坏の底部切り離し方法については不明である。

土師器坏の破片は図示し得なかったが、内面体部に放射状暗文が施され、外面体部は口唇部近くまで横位のヘラケズリがなされるものであった。

6の須恵器甕は、外面に格子目叩きのなされる胴部下半以下の破片である。

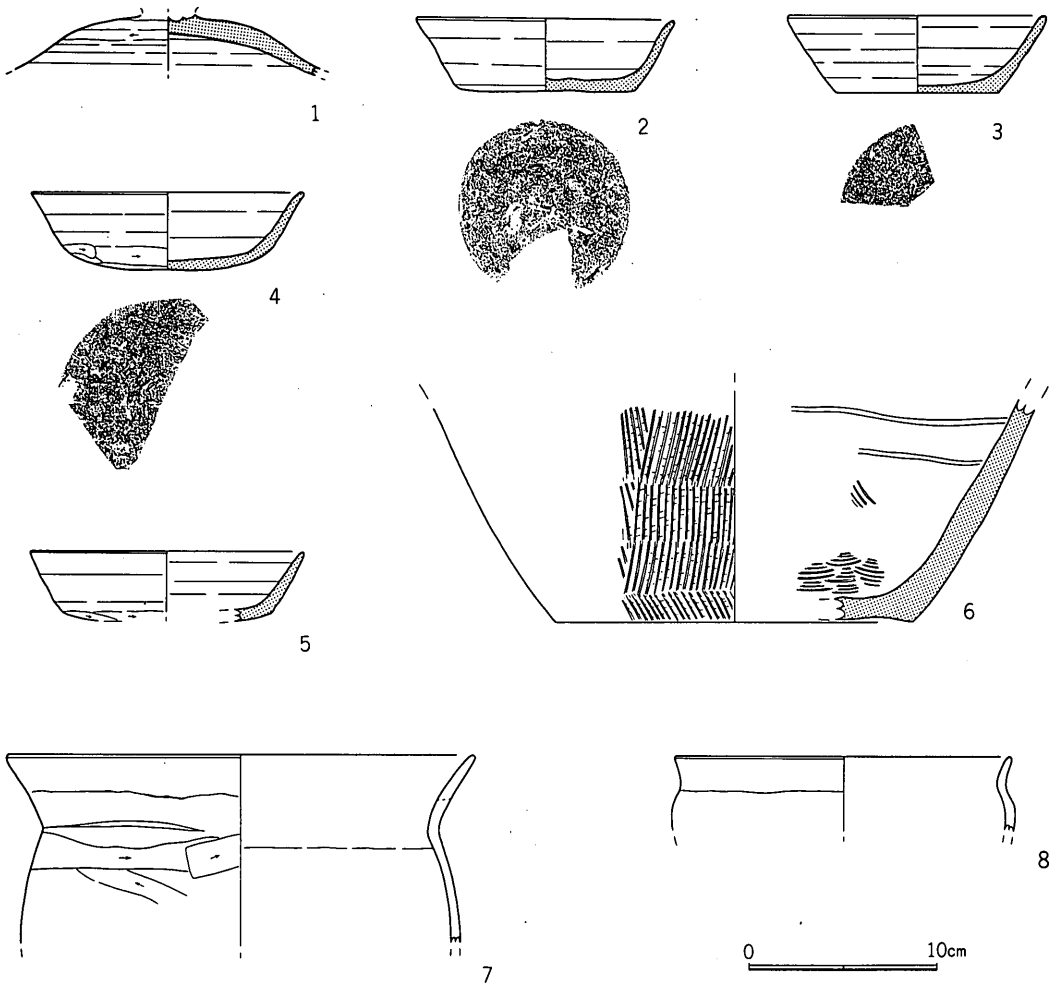


第305図 H-103号住居址カマド実測図(1:40)

第134表 H-103号住居址出土遺物一覧表<土器>

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	— — —	つまみ部の形状は不明	外面 ロクロヨコナデの後、天井部ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みオリブ灰色を呈する。 (2.5GY6/1)
2 (完)	坏 (須)	13.8 3.9 9.7	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰色(5Y6/1)を呈する。
3 (回)	坏 (須)	<13.9> 4.1 <8.6>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y6/1)を呈する。
4 (回)	坏 (須)	<13.9> 4.1 <9.0>	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y7/1)を呈する。
5 (回)	坏 (須)	<14.6> — <11.2>	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y7/1)を呈する。4と同一個体か。
6 (回)	甕 (須)	— — <19.0>	底部平底。	外面 胴部下半には叩きが施される。 内面 一部には当て具痕が残る。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色を呈する。 (5YR5/3)
7 (回)	甕	<25.0> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胎土は橙色を呈する。 (7.5YR6/6)
8 (回)	甕	<18.0> — —	口縁部は僅かに外反し、頸部のくびれは強くない。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土はにぶい黄褐色を呈する。 (10YR7/4)

1 堅穴住居址



第306図 H-103号住居址出土遺物 (1:4)

7. 8は土師器甕で、7は「く」の字状に外反する口縁部付近の破片、8は直立気味に外反する口縁部破片である。

なお、本住居址においては、石器・鉄器類は検出されなかった。

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

## (104) H-104号住居址

遺構 第307・308図

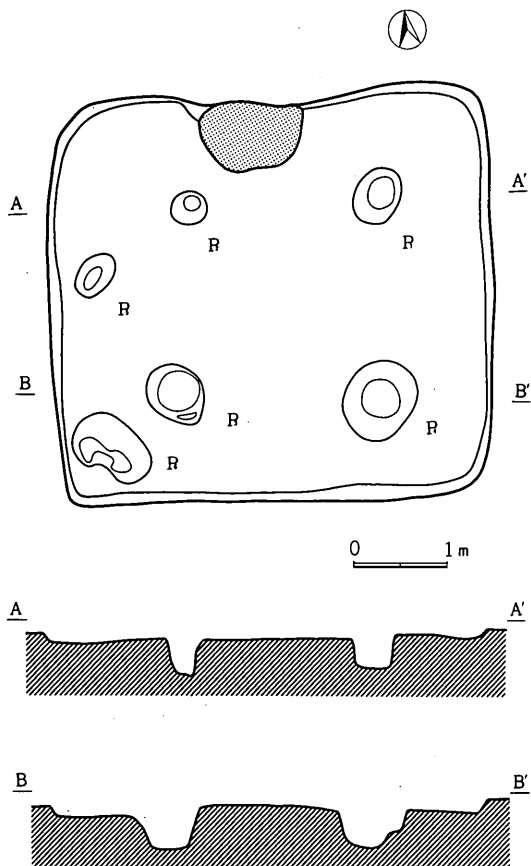
H-104号住居址は、第IV区ニ-32グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.35m東西4.6mの隅丸方形を呈し、床面積17.8㎡を測り、主軸方向はN-2°-Wを指す。壁高は10~15cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。また、性格はわからないが、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>が西壁寄りに検出された。P<sub>1</sub>は60cm×50cm深さ35cm、P<sub>2</sub>は40cm×35cm深さ40cm、P<sub>3</sub>は70cm×55cm深さ50cm、P<sub>4</sub>は85cm×70cm深さ40cm、P<sub>5</sub>は50cm×35cm、P<sub>6</sub>は90cm×60cmを測る。

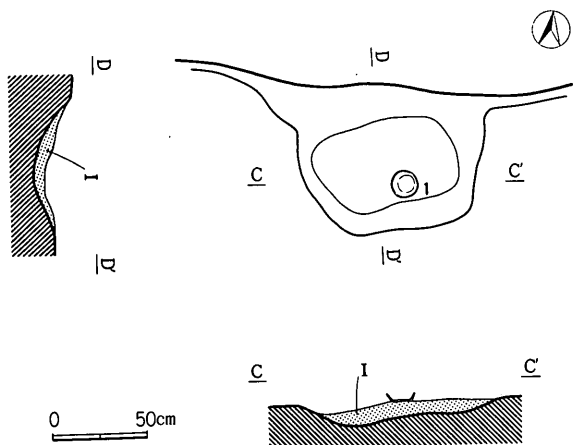
住居址覆土はI層のみで、若干のパミス・スコリアを含む黒色土層であった。

遺物は、1の完形の坏がカマド部分より正常位で検出された。それ以外は、良好な出土状態を示すものではなく、いずれも覆土中から出土したものであった。

カマドは、北壁中央において検出されたが、完全に破壊されており、本体の痕跡をとどめなかった。破壊後のカマド部分には、1の土師器坏が正常位で置かれていた。また、カマド火床部は一旦掘り込まれた後、黒色土層（I層）で埋め戻されたものであった。

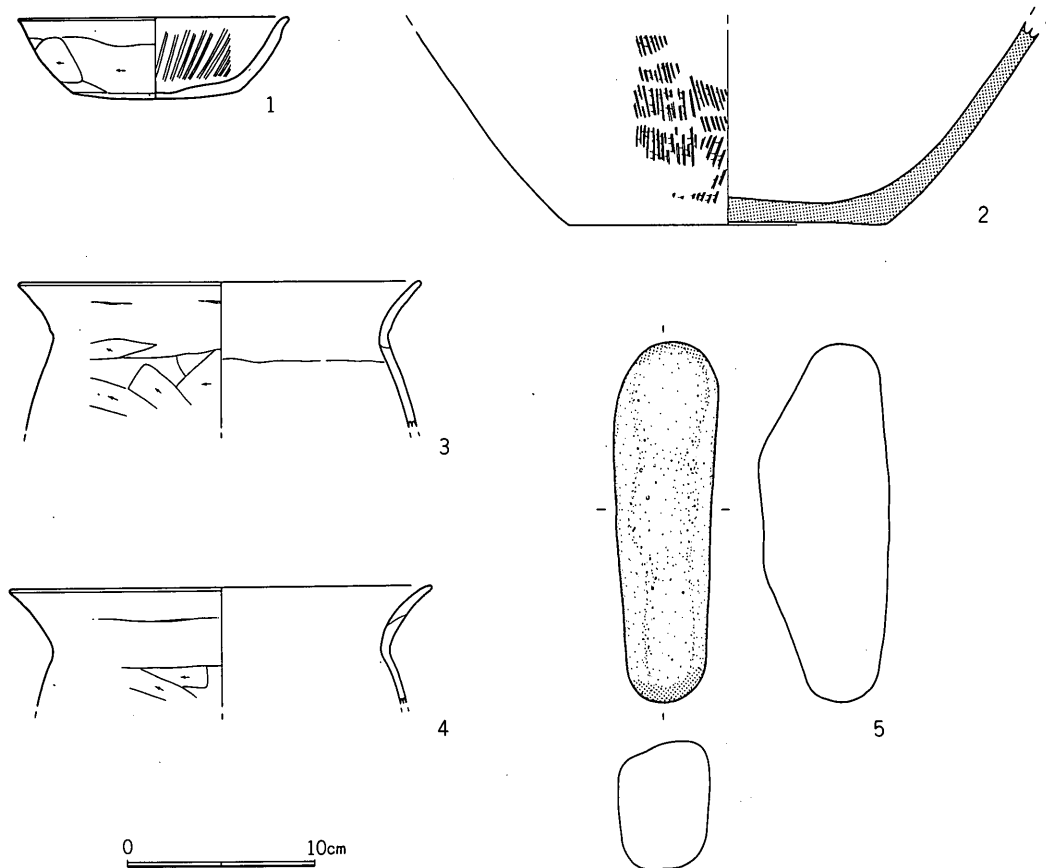


第307図 H-104号住居址実測図 (1:80)



第308図 H-104号住居址カマド実測図 (1:40)

1 竖穴住居址



第309図 H-104号住居址出土遺物 (1:4)

第135表 H-104号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (完)	坏	14.5 4.3 8.8	体部は外反し、底部平底。	外面 口縁部ヨコナデ、体部および底部ヘラケズリ 内面 体部には放射状の暗文が施される。 見込み部にはラセン状暗文が僅かに窺える。	胎土は砂粒を多く 含み橙色を呈する。 (7.5YR7/6)
2 (回 須)	甕 (須)	— — (16.8)	底部平底	外面 胴部には叩きがなされる。 内面 ナデ	胎土は砂粒を含 み灰白色を呈す る。(5Y7/1)
3 (回)	甕	<21.4> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色を呈 する。 (7.5YR6/6)
4 (回)	甕	<22.5> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土はにぶい黄 橙色を呈する。 (10YR6/4)

第136表 H-104号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
5	敲石	輝石 安山岩	19.0	5.4	7.1	1,195	

## 遺物 第309図

本住居址より検出された遺物は、須恵器では甕、土師器では坏・甕がみられた。

1は完形の土師器坏で、外面の体部～底部には手持ちヘラケズリがなされ、内面体部には放射状暗文が施されている。見込み部は剥落が激しいが、僅かにラセン状暗文が観察される。

2は、須恵器甕の胴部下半以下で、外面には叩き目が窺える。

3・4は、「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部である。

この他、河床礫を用い一他を敲打に供した敲石（5）が1点検出されている。

## 時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

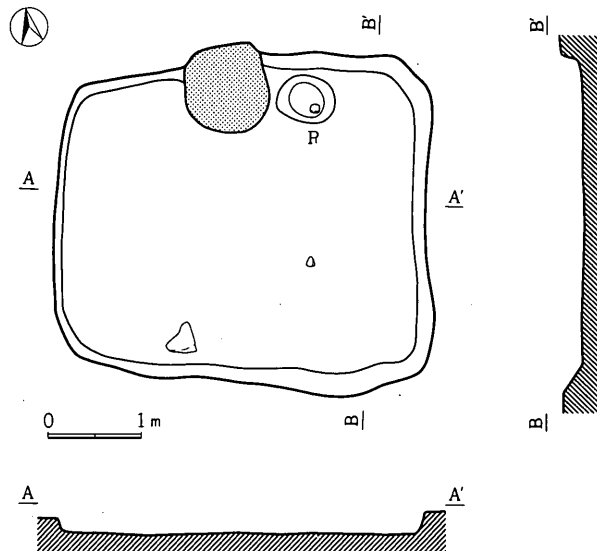
## (105) H-105号住居址

## 遺構 第310・311図

H-105号住居址は、第IV区ニ-32グリッドにおいて検出された。

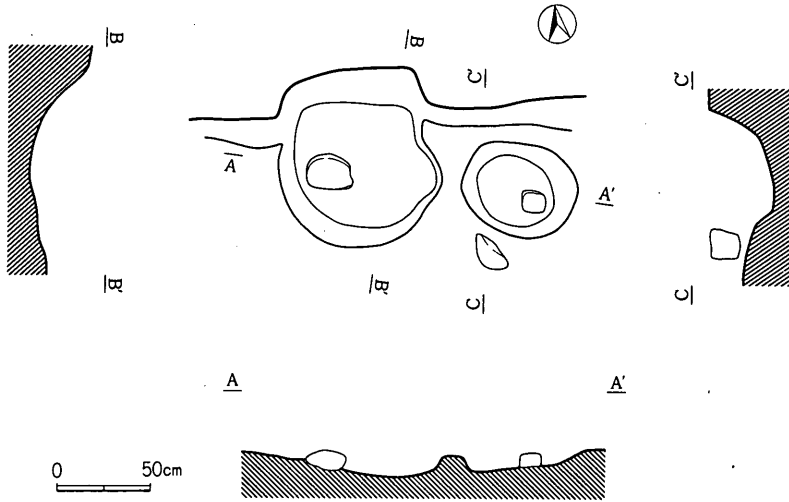
本住居址は、南北3.6m東西4.0mの隅丸方形を呈し、床面積11.2m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-0°-Wを指す。壁高は15~20cmを測り、壁溝は認められない。柱穴は認められず、ピットはカマド東脇にP<sub>1</sub>が認められたのみであった。P<sub>1</sub>は60cm×50cm深さ10cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、若干のパミス・スコリアを含む黒色土層であった。遺物は、良好な

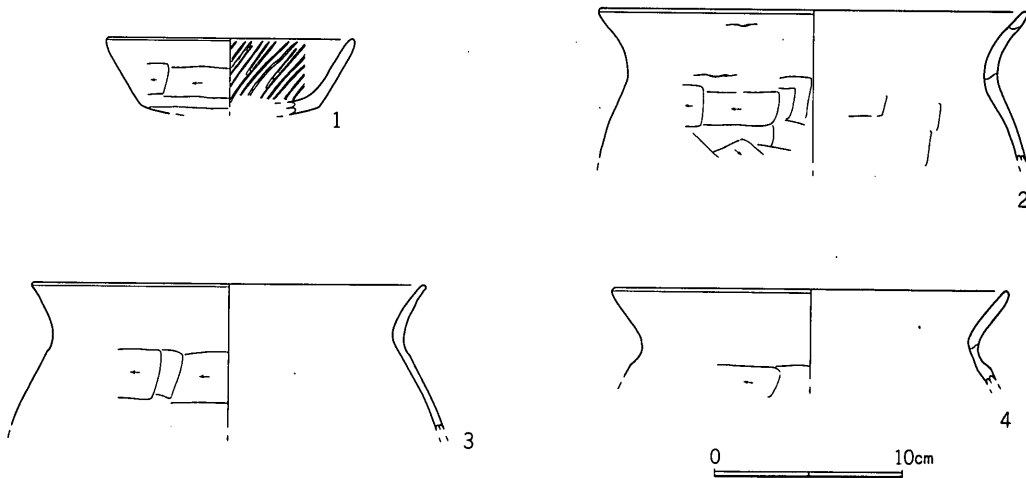


第310図 H-105号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址



第311図 H-105号住居址カマド実測図 (1:40)



第312図 H-105号住居址出土遺物 (1:4)

出土状態を示すものはなく、いずれも覆土中から出土したものであった。

カマドは、北壁中央に検出されたが、すでに壊滅状態にあり、円形の火床部の掘り方のみが捉えられたにすぎなかった。

遺物 第312図

本住居址より検出された遺物には、須恵器では蓋・坏・土師器では坏・甕の破片がある。

須恵器蓋・坏は、いずれも小破片で図示するに至らなかった。

1は土師器坏で、内面体部には放射状暗文が施されているのが特徴的である。見込み部の調整は不明。



第137表 H-105号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	坏	<13.3> — <9.4>	体部は外反し、底部平底。	外面 口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ 内面 体部はヨコナデの後、放射状の暗文が施される。	胎土は精選されず、 砂粒を多く含みに ぶい褐色を呈する。 (75YR7/6) 焼成は良好でない。
2 (回)	甕	(22.9) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい黄 橙色を呈する。 (10YR7/3)
3 (回)	甕	<21.0> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい黄 橙色を呈する。 (10YR7/3)
4 (回)	甕	(21.2) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土はにぶい黄 橙色を呈する。 (10YR7/4)

2～4は土師器甕で、「く」の字状に外反する口縁部である。

### 時 期

本住居址は、僅かな出土遺物等より、奈良時代、前田遺跡第V期の所産と考えておこう。

## (106) H-106号住居址

### 遺 構 第313・314図

H-106号住居址は、第IV区ナー32グリッドにおいて検出された。

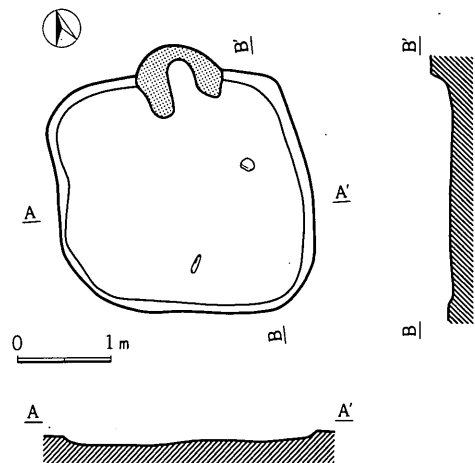
本住居址は、南北3.2m東西3.3mの歪んだ小形の隅丸方形を呈し、床面積5.4m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-0°-Wを指す。壁高は10～20cmを測るのみで、壁溝は認められない。また、柱穴等のピットは一切認められない。

住居址覆土は一層のみで、パミスを少量含む黒色土層であった。

遺物は、1の土師器甕がカマド中より検出されたのみである。

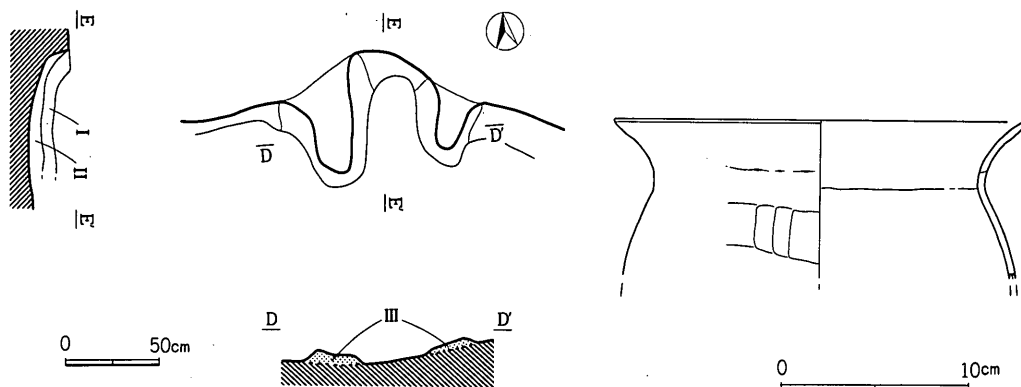
カマドは、北壁中央に存在するが、赤褐色の粘土(III層)を用いた東西両袖が僅かに残っているにすぎなかった。また、カマド覆土は、2層に分層された。I層は焼土を多く含む茶褐色土層、II層は焼土をまったく含まない黒色土層であった。

### 遺 物 第315図



第313図 H-106号住居址実測図(1:80)

1 竪穴住居址



第314図 H-106号住居址カマド実測図 (1:40)

第315図 H-106号住居址出土遺物 (1:4)

第138表 H-106号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	甕	<21.8> — —	口縁部は僅か「コ」の字状に外反する。	外面 □縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 □縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土にはぶい橙色を呈する。 (5YR6/4)

遺物は、1の僅か「コ」の字状に外反する土師器甕の口縁部が検出されたのみであった。

時 期

本住居址は、検出された遺物が1のみであるため、その位置付けは困難である。ただし、他との比較検討から、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期の所産と考えるのが妥当であろう。

(107) H-107号住居址

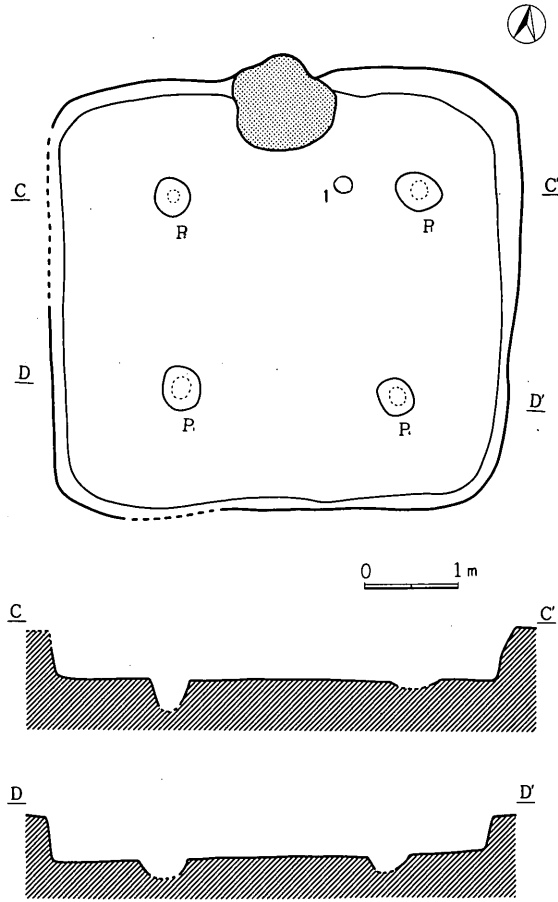
遺 構 第316・317図

H-107号住居址は、第V区ニ-36・37グリッドにおいて検出された。

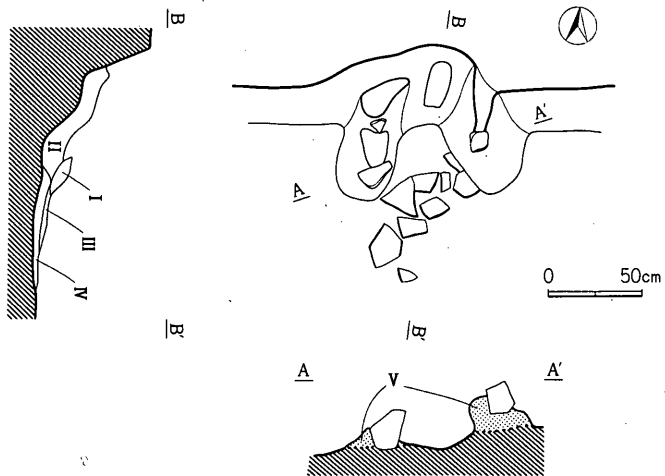
本住居址は、南北4.65m東西5.0mの隅丸方形を呈し、床面積19.1m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-6°-Wを指す。壁高は35~60cmを測り、壁溝は認められない。支柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は50cm×40cm、P<sub>2</sub>は40cm×40cm、P<sub>3</sub>は50cm×40cm、P<sub>4</sub>は40cm×35cmを測った。なお、これらのピットの底面は湧水が激しく確認できず、したがってその深さもよくわからなかった。

住居址覆土はI層のみで、パミスを多量に含み、ロームがブロック状に混入する黒色土層であった。

遺物は、1の完形の須恵器蓋がP<sub>1</sub>の西の床面上より検出された以外は、いずれも覆土中から出

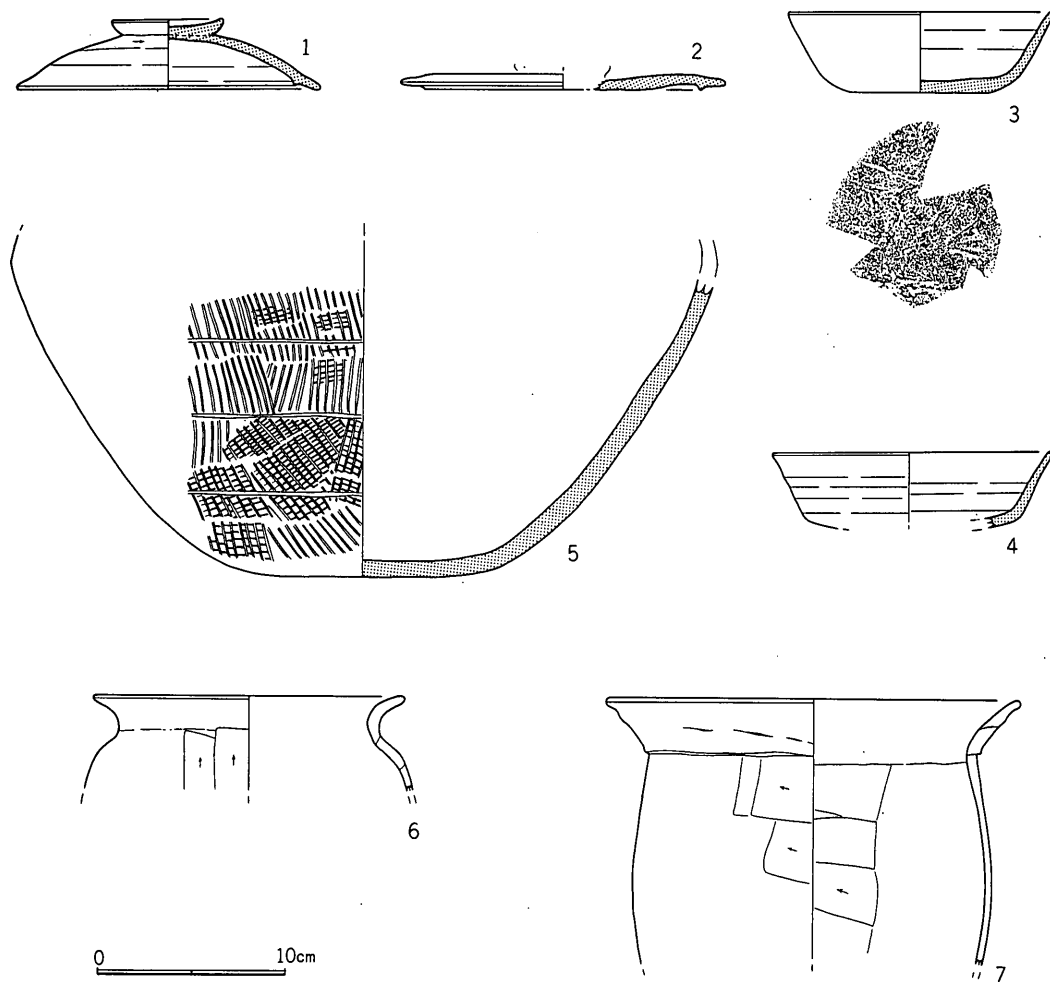


第316図 H-107号住居址実測図 (1:80)



第317図 H-107号住居址カマド実測図 (1:40)

1 竪穴住居址



第318図 H-107号住居址出土遺物 (1:4)

土している。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに半壊状態にあった。僅かに残された両袖の断面A-A'をみると、面取り軽石と粘土(V層)によって構成されていた。また、火床部には須恵器甕の大形破片が9点みられた。カマド使用に係ると考えられる土層堆積は、4層に分層された。I層は多量の灰と若干の焼土を含む灰色土層、II層は若干の焼土・カーボンを含む黒色土層、III層は赤褐色の焼土層、IV層は多量のカーボンを含む黒色土層であった。

遺物 第318図

本住居址から検出された遺物には、須恵器では蓋・坏・甕が、土師器では甕がある。

1・2は、内面にかえりを有する須恵器蓋である。1は完形で、つまみ部は中央の窪んだ円形

## IV 遺構と遺物

第139表 H-107号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

押図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	蓋 (須)	5.9 3.7 16.1	つまみ部は径の大きい皿状の形状を呈し、内面にはかえりを有する。	外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 自然釉が全体にかかる。 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され灰白色を呈する。 (N7/0)
2 (回)	蓋 (須)	— — (17.4)	体部は中央部の高まらない偏平な形状を呈する。内面にはかえりを有する。	外面 ロクロヨコナデの後、中央部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(N6/0)を呈する。
3 (回)	坏 (須)	(14.1) 4.2 (10.4)	体部は外反し、底部平底。	外面 全体に剥落が激しいが、体部はロクロヨコナデ 底部は回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色を呈する。 (5Y5/1)
4 (回)	坏 (須)	<15.1> — <11.5>	体部は外反し、底部平底になるものと思われる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラケリによるものと思われる。 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰色を呈する。 (5Y6/1)
5 (回)	甕 (須)	— — (14.6)	底部平底。	外面 胴部には叩きがなされ、平行するへら描き沈線が数条走る。 内面 当て具痕が若干観察できる。	胎土は精選されず にぶい褐色 (7.5YR7/4)を呈する。 完全な還元炎焼成 とはなっていない。
6 (回)	甕	(16.6) — —	口縁部は弓なりに外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は精選されず 砂粒を多く含みに ぶい赤褐色を呈す る。(2.5YR5/4)
7 (回)	甕	(22.2) — —	口縁部は比較的強く「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにぶい褐色を呈する。 (7.5YR5/4)

を呈している。2は、1に比べ天井部の高まらない偏平なもので、つまみ部を欠失する。

3・4は須恵器坏で、いずれも回転ヘラケリによるものと考えられるが、3はその後底部に手持ちヘラケズリがなされている。

5は、外面に叩き目がみられる須恵器甕の胴下半部である。

6は小形の土師器甕の口縁部である。また、7は口縁部が「く」の字状に外反する土師器甕の胴上半部である。

この他本住居址においては、石器・鉄器類は認められなかった。

## 時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

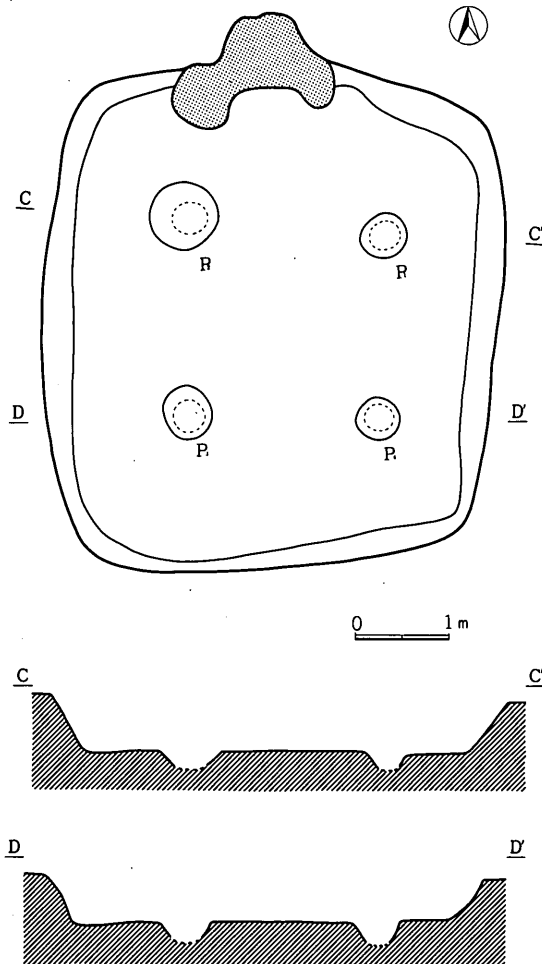
## (108) H-108号住居址

## 遺 構 第319・320図

H-108号住居址は、第V区ニ-37グリッドにおいて検出された。本住居址は、H-109号住居址を切って存在している。また、F-73と重複するが、新旧関係は不明である。

本住居址は、南北5.3m東西4.9mの隅丸方形を呈し、床面積19.2㎡を測り、主軸方向はN-7°-Wを指す。壁高は50~60cmを測り、壁溝は認められない。主柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は50cm×45cm、P<sub>2</sub>は75cm×70cm、P<sub>3</sub>は55cm×50cm、P<sub>4</sub>は50cm×45cmを測る。なお、本住居址

1 竪穴住居址



第319図 H-108号住居址実測図 (1 : 80)

は床面近くからの湧水が激しく、ピットの深さが確認できなかった。

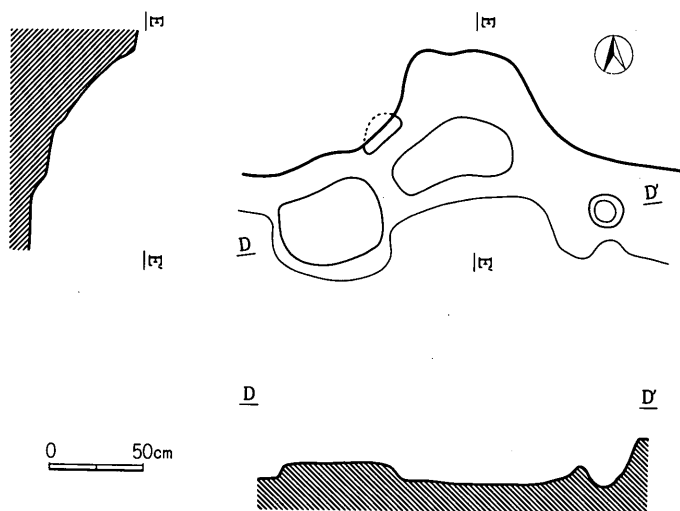
住居址覆土はI層のみで、多量のパミスと少量のローム粒子を含む黒色土層であった。遺物は、良好な出土状態を示すものではなく、いずれも覆土中より出土している。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに壊滅状態にあり、図にはその掘り方を示した。図の東側にはピットがみられるが、袖石の抜き取り痕かと考えられる。また、西側のロームは若干テラス状に削り出されていた。

遺物 第321・322・323図

本住居址からは比較的少量に土器が検出された。そのうち須恵器では円面硯・蓋・坏・甕・長頸瓶・短頸・壺、土師器では坏・甕の各器種が認められた。

IV 遺構と遺物



第320図 H-108号住居址カマド実測図(1:40)

1は、小破片であるが、須恵器円面硯と考えられる。硯面部には特に墨磨による研滅や墨の付着は認められなかった。本例と同様な円面硯には、本遺跡佐久市分のH-3・H-5号住居址出土の2例があり、それらから類推すると本例の脚台部は透しをもたないものと考えられる。

2は須恵器蓋であるが、つまみ部の形状は不明である。

須恵器坏は、3～6の4点を図示した。そのうち、3・4は回転ヘラキリ、5は回転ヘラケズリ、6は回転糸切りによる底部をみせている。また、9の長頸瓶の底部かと考えられるものも回転糸切りによっている。

7・8は土師器坏である。7はロクロ整形による比較的小形品で、内面は丹念にヘラミガキがなされている。8は、7に比べるは大ぶりで内面黒色研磨のなされた坏である。

10は、小形の須恵器短頸壺である。

11は、須恵器鉢と考えられるもので、把手の貼り付けられていた痕跡が窺える。

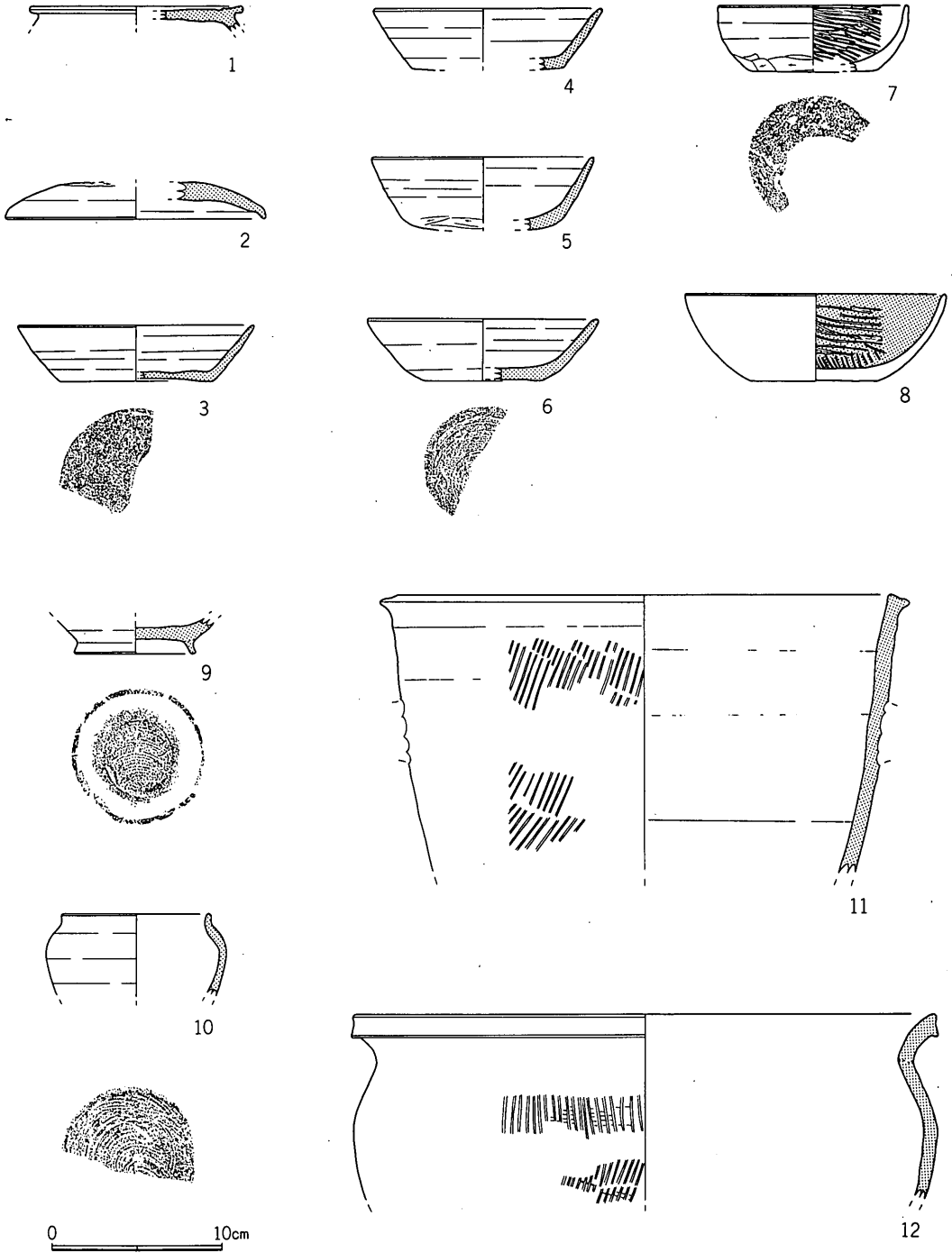
12～15は須恵器甕で、12・13は口縁部付近、14・15は底部付近である。

16～18は土師器甕で、16は「く」の字状に外反する口縁部破片、18は台付甕の一部である。

鉄器としては、19の燧鉄かと考えられるものが出土している。一边はW字状もう一边は弓状のラインを示す扁平な製品である。

この他、石器としては、扁平な円礫である20が検出されている。あるいは台石等として用いられたのであろうか。

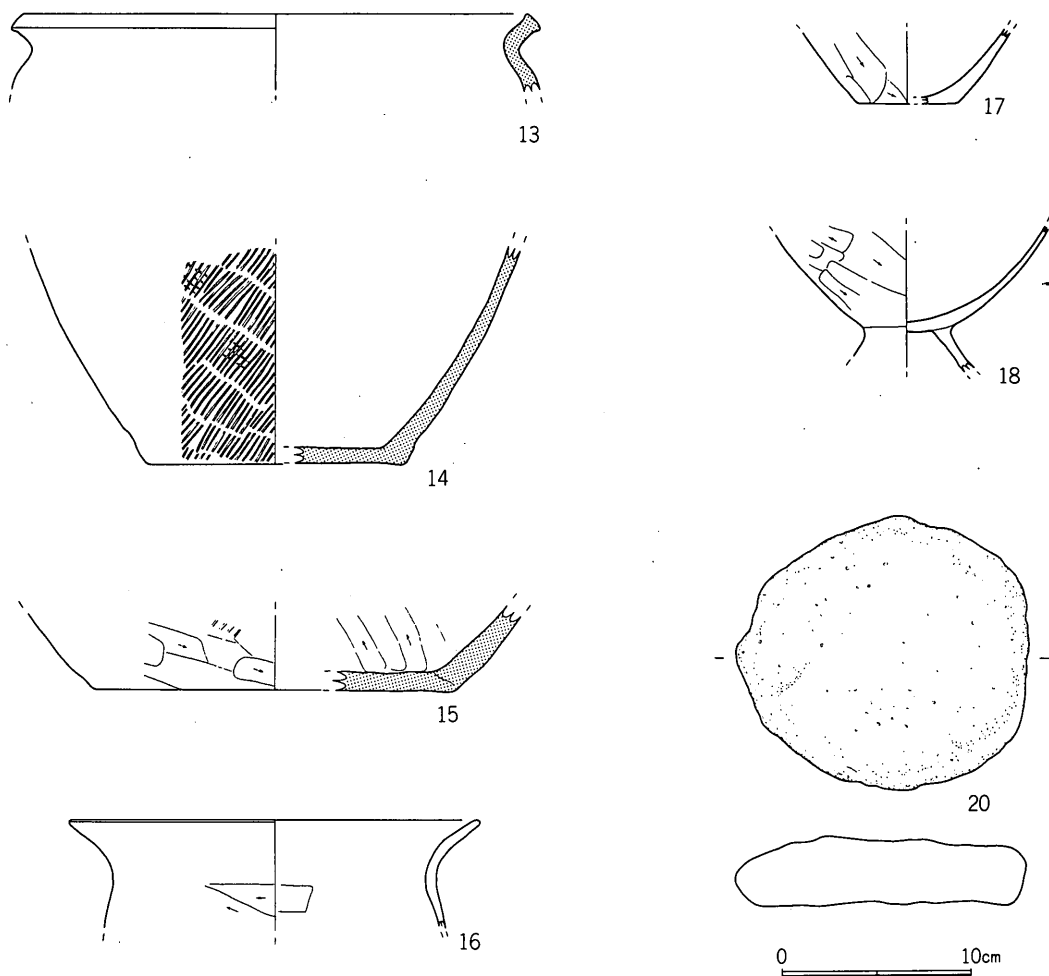
1 竖穴住居址



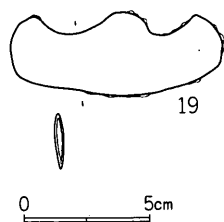
第321图 H-108号住居址出土遗物 (1:4)



IV 遺構と遺物



第322図 H-108号住居址出土遺物 (1:4)



第323図 H-108号住居址出土遺物 (1:3)

第140表 H-108号住居址出土遺物一覽表 <金属器・石器>

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
19	燧鉄	鉄	8.4	(3.2)	(0.3)	(22)	
20	台石?	安山岩	15.4	14.3	3.8	1.115	

時期

本住居址は、奈良・平安時代、前田遺跡第七期に位置付けられよう。

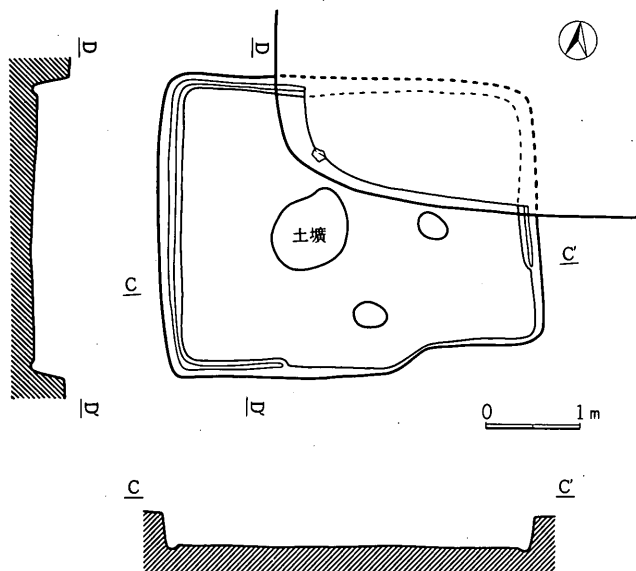
第141表 H-108号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	円面硯 (須)	<12.8> — —	硯面部は内提を持たず縁のみとなる。 脚台部の形状は不明	外面 硯面部には全体に自然釉が付着し、墨磨による 磨減は認められない。 内面 ロクロヨコナデ	胎土は砂粒を含み 灰色(10Y6/1) を呈する。
2 (回)	蓋 (須)	— — <15.3>		外面 ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(10Y6/1) を呈する。
3 (回)	坏 (須)	<13.9> 3.3 <9.0>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選され 灰褐色(5Y4/2) を呈する。
4 (回)	坏 (須)	<13.6> — <9.0>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選され 灰白色を呈する。 (5Y7/1)
5 (回)	坏 (須)	<13.2> — —	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部切り離しの後、回転 ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(N6/0) を呈する。
6 (回)	坏 (須)	(13.7) 3.6 (7.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(N5/0) を呈する。
7 (回)	坏	<11.2> — (7.6)	体部は弓なりに外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、体部下半～底部ヘラケズリ 内面 ヨコヘラミガキ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み みぶい橙色を 呈する。 (5YR6/4)
8 (回)	坏	<15.4> 5.1 7.3	体部は弓なりに外反し、底部平底。	外面 全体に剥落が激しく調整不明 内面 黒色研磨	胎土は砂粒を含み みぶい橙色を呈す る。(75YR6/4)
9 (完)	(須)	— — 7.2	底部には高台が貼り付けられる。 長頸瓶の底部となるか。	外面 底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色を呈する。 (10Y6/1)
10 (回)	短頸壺 (須)	<8.8> — —	口縁部の短く直立する小形の器形	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(10Y6/1) を呈する。
11 (回)	鉢 (須)	<31.3> — —	体部は直線的に外傾し、外縁部は外側へ つまみ出される。把手が付されるものと 考える。	外面 叩きがなされたのち、ロクロヨコナデがなされ る。 内面 ロクロヨコナデ	胎土は砂粒を多く 含み灰白色を呈す る。(25Y7/1)
12 (回)	甕 (須)	<34.7> — —	口縁部はゆるく外反し、口唇部は帯状を 呈する。	外面 胴部に叩きがなされた後、全体にロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土は砂粒を含み 灰色を呈する。 (10Y5/1)
13 (回)	甕 (須)	— — <5.3>	口縁部はゆるく外反し、口唇部は帯状を 呈する。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土は砂粒を含み 灰白色(10Y7/1) を呈する。
14 (回)	甕 (須)	— — <13.8>	底部平底。	外面 胴部には叩きがなされる。 内面 ナデ	胎土は灰褐色を 呈する。 (5YR4/2)
15 (回)	甕 (須)	— — <19.3>	底部平底。	外面 叩きとヘラケズリがなされる。 内面 胴部下半ヘラナデ、底部刷毛目状調整	胎土は砂粒を含み 黄灰色(2.5Y5/1) を呈する。
16 (回)	甕	<22.0> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はみぶい橙 色を呈する。 (7.5YR6/4)
17 (回)	甕	— — <5.3>	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土はみぶい橙 色を呈する。 (5YR6/4)
18 (完)	台付甕	— — —	底部には脚台部が貼り付けられる。	外面 胴部ヘラケズリ、脚台部ヨコナデ 内面 胴部ヘラナデ、脚台部ヘラナデ	胎土はみぶい橙 色を呈する。 (5YR6/4)

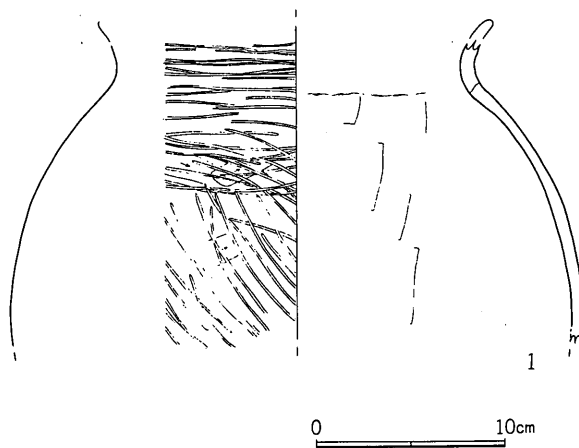
(109) H-109号住居址

遺構 第324・325図

H-109号住居址は、第V区ナ・ニ-37グリッドにおいて検出された。本住居址は、I区をH-



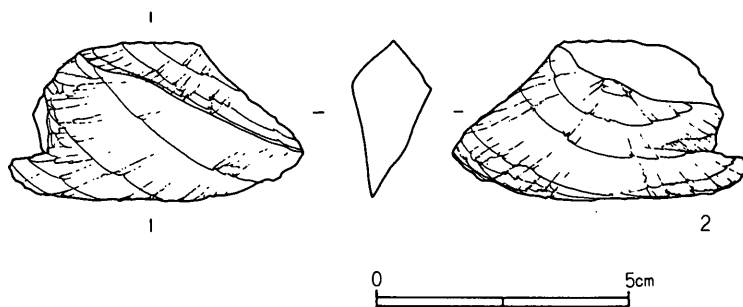
第324図 H-109号住居址実測図 (1:80)



第325図 H-109号住居址出土遺物

第142表 H-109号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	壺	— — —	口縁部は「く」の次状に外反し、胴部は球状を呈する。	外面 ヘラミガキがなされる。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を含みにぶい黄褐色を呈する。 (10YR7/3)



第326図 H-109号住居址出土遺物 (2 : 3)

第143表 H-109号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
2	剥片	玄武岩	5.8	3.2	1.8	19	

108号住居址に切られ、また、一部をF-73号掘立柱建物址に、中央を土壌に切られている。

本住居址は、南北3.2m東西4.0mを測り、南壁のプランがやや乱れるものの全体的には隅丸方形のプランを呈するものと考えられる。推定床面積は10.8㎡を測り、南北軸方向はN-12°-Wを指す。壁高は30cm前後を測った。壁溝は、H-108に破壊された部分は不明であるが、南壁と東壁の一部を除いて認められる。なお、本住居址に伴うと考えられるピットは存在しなかった。

住居址覆土はI層のみで、若干のパミスを含み、ローム粒子の混入する黒褐色土層であった。遺物は、良好な出土状態を示すものはなく、覆土中から出土している。

カマドは、大方がそうであるように北壁中央に存在していたとすれば、すでにH-108号住居址の構築時に破壊されてしまっていることになる。

#### 遺 物 第325・326図

本住居址から検出された土器は、1の壺1個分の破片のみであった。

1の土師器壺は、外面口縁部および胴部、内面口縁部にヘラミガキのなされたものである。この他、石器では2の玄武岩の剥片1点が検出されている。

#### 時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期の所産と考えておこう。

## (110) H-110号住居址

遺構 第327・328図

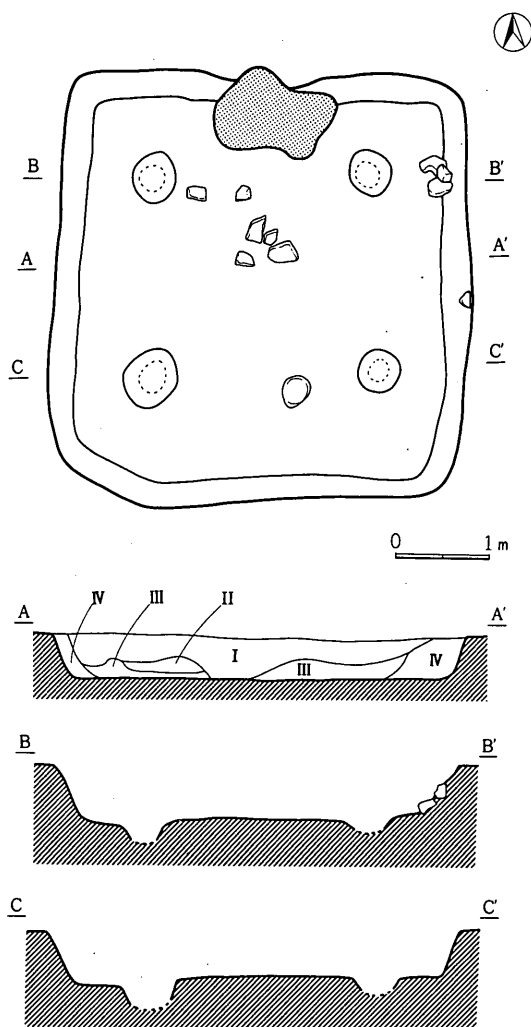
H-110号住居址は、第V区ト・ナー37グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.6m東西4.4mの隅丸方形を呈し、床面積14.9m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-5°-Wを指す。壁高は、40~60cmを測り、壁溝は認められない。支柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出されている。P<sub>1</sub>は50cm×45cm、P<sub>2</sub>は55cm×45cm、P<sub>3</sub>は65cm×60cm、P<sub>4</sub>は45cm×45cmを測る。なお、床面以下は湧水が激しく、それぞれのピットの深さを確認することはできなかった。

住居址覆土は4層に分層された。I層は僅かにパミスを含む黒色土層、II層は多量のロームを含む黄褐色土層、III層は若干ローム粒子を含む黒褐色I層、IV層はローム粒子を含まない黒褐色土層であった。

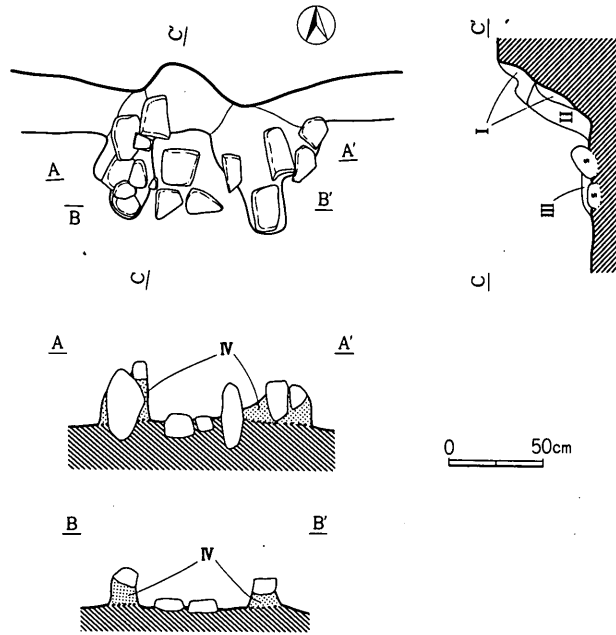
遺物は、良好な出土状態を示すものはなく、いずれも覆土中から出土したものであった。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに半壊状態にあり、その構材の一部である面取り軽石3点と安山岩礫3点は、II区の床面上に散乱していた。図の断面A-A'・B-B'をみると、両袖部は袖石と粘土(IV層)によって構築されていることがわかる。また、火床部には3点の礫がみられた。カマド使用に係ると考えられる堆積は、3層認められた。I層が多量の灰と若干の焼土を含む灰褐色土

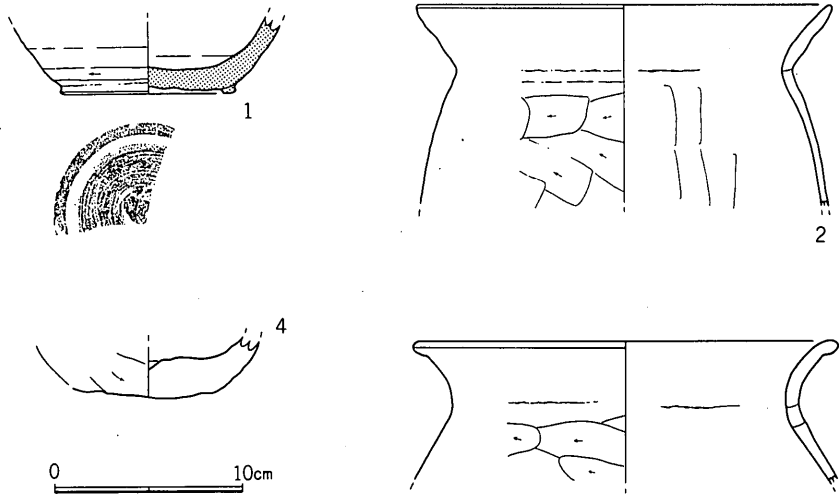


第327図 H-110号住居址実測図(1:80)

1 竪穴住居址



第328図 H-110号住居址カマド実測図 (1:40)



第329図 H-110号住居址出土遺物 (1:4)

層、II層が若干のカーボン焼土を含む黒褐色土層、III層が多量のカーボンを含む黒色土層であった。

遺物 第329図

本住居址より検出された遺物は、須恵器は長頸瓶・甕、土師器では甕がある。

1は、須恵器長頸瓶と考えられるものの底部で、回転ヘラケズリの後、高台が付されている。

第144表 H-110号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	長頸瓶 (須)	— (9.4)	底部には高台が貼り付けられる。	外面 ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(10Y 6/1) 焼成良好
2 (回)	甕	<22.0> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は赤褐色を 呈する。 (5YR 4/6)
3 (回)	甕	(22.7) — —	口縁部は外反し、口唇部はさらに外側に やや巻き込まれる。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	胎土は精選されず 砂粒を多く含み橙 色(5YR 6/6) を呈する。
4 (完)	甕	— 8.1	底部は部厚い丸味をおびた平底。	外面 ヘラケズリ 内面 剥落が激しく調整不明	胎土は精選されず 砂粒を多重に含み にぶい赤褐色を呈 する。(5YR 5/4)

2は、「く」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕である。3も土師器甕であるが、2に比べやや肉厚で胎土も精選されていない。4も3と同様胎土の精選されない分厚い土師器甕底部である。

なお、本住居址において石器・鉄器類は認められなかった。

時期

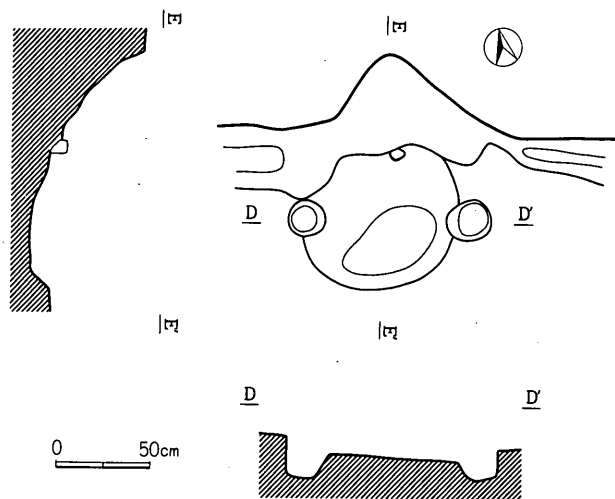
本住居址は、僅かな出土遺物を手掛りに、奈良時代、前田遺跡第IV期の所産とみなし得よう。

(111) H-111号住居址

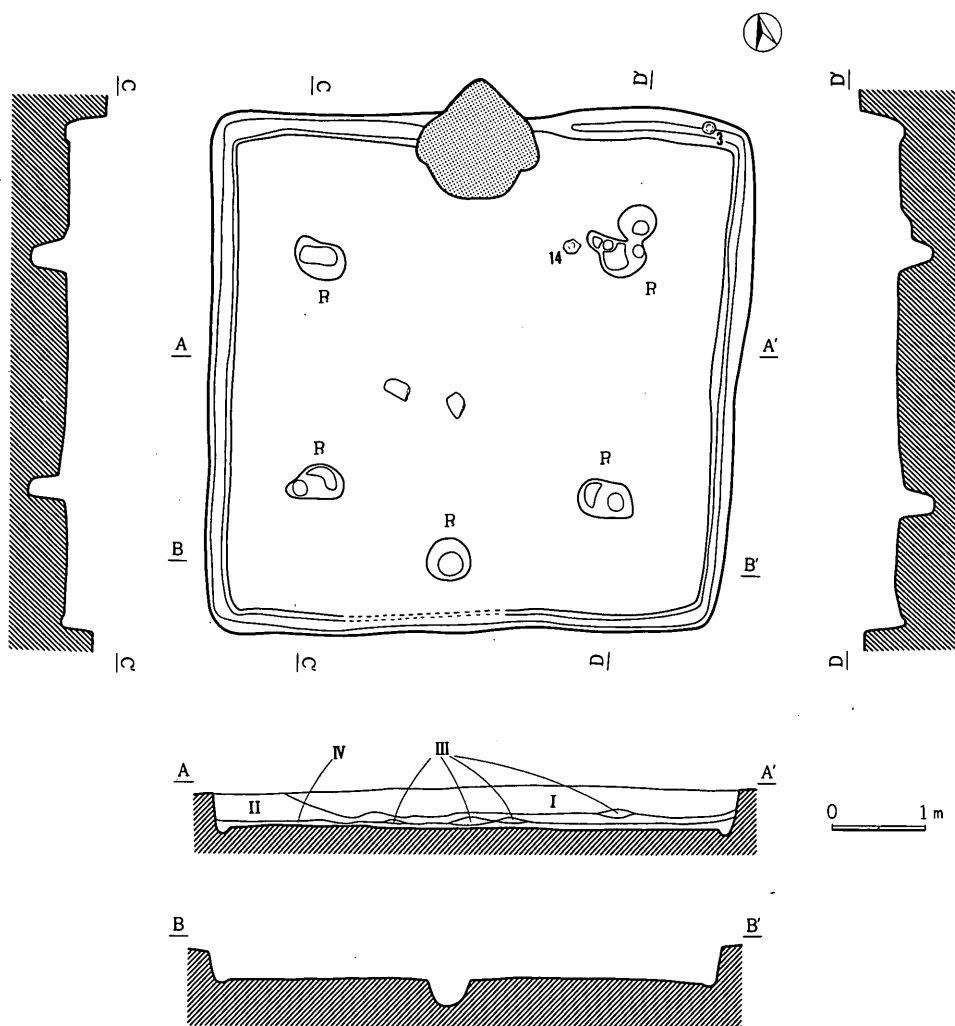
遺構 第330・331図

H-111号住居址は、第V区ナ-38グリッドにおいて検出され、M-1号溝状遺構を切って存在している。

本住居址は、南北5.5m東西5.8mの隅丸方形を呈し、床面積28.4㎡を測り、主軸方形はN-9°-Eを指す。壁高は30~40cmを測り、壁溝は全周に認められる。主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は不規則なテラスをもつもので80cm×50cm、P<sub>2</sub>は60cm×40cm深さ40cm、P<sub>3</sub>は60



第330図 H-111号住居址カマド実測図(1:40)



第311図 H-III号住居址実測図 (1:80)

cm×35cm深さ30cm、P<sub>4</sub>は60cm×35cm深さ35cmを測る。また、南壁寄りの中央には50cm×45cm深さ28cmを測るP<sub>5</sub>が検出された。

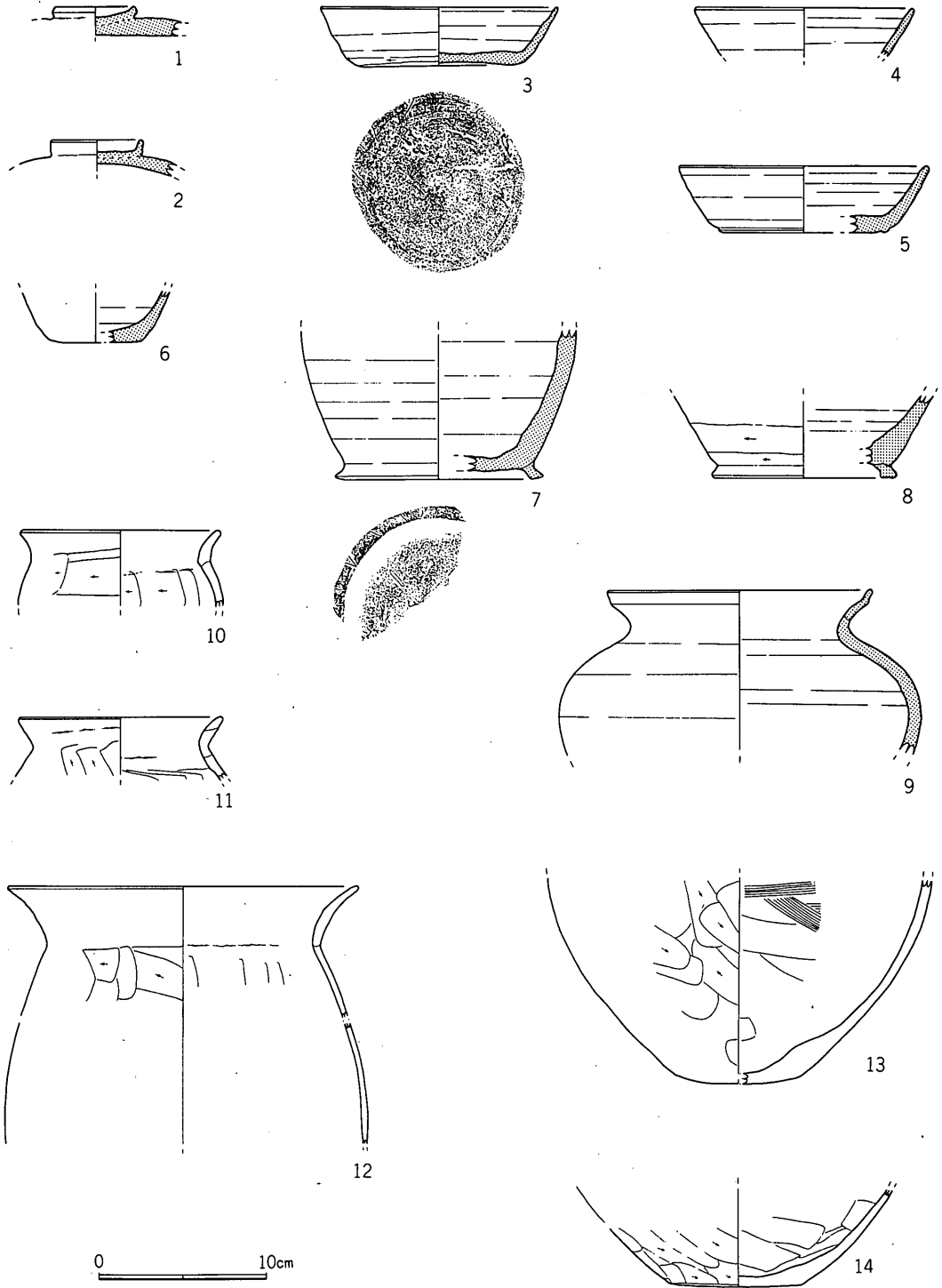
住居址覆土は、4層に分層された。I層はパミス・スコリアをよく含む黒褐色土層、II層はパミス・スコリアをよく含む若干のカーボン・灰を含む黒色土層、III層は黄色ロームのブロック状堆積、IV層は黒色土層であった。

遺物は、3の須恵器坏が北東コーナーの壁上より、14の土師器甕底部がP<sub>1</sub>西の床面直上より検出されている。これ以外の遺物は、いずれも覆土中より出土したものである。

カマドは、北壁中央に存在するが、すでに壊滅状態にあり、図にはその掘り方を示した。それ



IV 遺構と遺物



第332図 H-III号住居址出土遺物 (1:4)

第145表 H-III号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (完)	蓋 (須)	4.7 — —	つまみ部は中央が皿状にくぼんだ形態を呈する。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色を呈する。(7.5Y8/1)
2 (回)	蓋 (須)	(5.5) — —	つまみ部は環状の帯が巡らされた形状を呈する。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され灰白色を呈する。(10Y8/1)
3 (完)	坏 (須)	14.2 3.5 8.9	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色を呈する。(N5/0)
4 (回)	坏 (須)	<13.1> — —	体部は外反し、底部は平底になるものと考えられる。	外面 体部ロクロヨコナデ 内面 体部ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され灰色を呈する。(N6/0)
5 (回)	坏 (須)	<14.9> — —	体部は外反し、底部は高台が削り出される。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリによる高台部削り出し 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は砂粒を含み灰色(7.5Y6/1)を呈する。
6 (回)	長頸瓶 (須)	— — <5.4>	底部平底。	外面 ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色を呈する。(N5/0)内外面に自然釉付
7 (回)	長頸瓶 (須)	— — <12.5>	底部には高台が貼り付けられる。全体に焼成時の火ぶくれが激しい。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(N5/0)を呈する。
8 (回)	長頸瓶 (須)	— — <11.2>	底部には高台が貼り付けられる。	外面 胴部下半回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選されず砂粒を含み灰色(N5/0)
9 (回)	壺 (須)	<15.8> — —	口縁部は外反し、さらに変換点をもって口唇部で、短く立ち上がる。胴部は球状を呈する。	外面 口縁部および胴部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選され灰白色を呈する。(7.5Y8/2)
10 (回)	甕	<11.9> — —	口縁部がゆるく外反するやや肉厚で小形な器形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を多く含み赤褐色を呈する。(2.5YR4/6)
11 (回)	甕	<12.2> — —	口縁部の外反するやや肉厚で小形な器形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を含みにぶい褐色を呈する。(7.5YR5/4)
12 (回)	甕	<20.9> — —	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色を呈する。(5YR6/6)
13 (回)	甕	— — <7.4>	底部は丸味をおびた平底を呈し、胴下半部は球状を呈する。	外面 胴下半部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ、一部には刷毛目状の調整痕がうかがえる。	胎土は砂粒を含みにぶい褐色を呈する。(7.5YR5/4)
14 (完)	甕	— — 7.9	底部平底。	外面 胴部および底部ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は明赤褐色を呈する。(5YR5/6)



第333図 H-III号住居址  
出土遺物(2:3)

第146表 H-III号住居址出土遺物一覽表〈土製品〉

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
15	装飾品?	土師器	3.7	2.7	0.4	4	

によると、火床部は浅く掘り込まれていることがわかる。また、東西両袖の抜き取り痕と考えられるピットが各1個ずつみられた。なお、原位置をとどめているとは思われないが、角柱状に面取りされた軽石の支脚石が壁際より検出された。なお、カマド使用に係る焼土等のプライマリな堆積は認められなかった。

#### 遺物 第332・333図

本住居址より検出された遺物には、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕・壺、土師器では甕がみられた。

1・2は須恵器蓋の環状を呈するつまみ部である。

3・4は、須恵器坏で、3は回転ヘラケズリによる底部をみせている。

5は、高台付坏であるが、高台部は削り出しによる特異な例である。

6～8は、須恵器長頸瓶の下半部～底部で、6は無高台、7・8は高台付のものである。6は手持ちヘラケズリ、7・8は回転ヘラケズリによる底部をみせており、いずれも切り離し方法は不明である。

9は、須恵器壺で、二段に外反する口縁部と球状の胴部をみせている。

10・11は、土師器小形甕で、胎土が精選されずやや肉厚なものである。

12は、「く」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕である。

なお、15は薄手の土師器甕破片に、穿孔がなされたものであり、一種の装飾品であろうか。穿孔は表裏両面からなされ、貫通している。

#### 時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

### (112) H-112号住居址

#### 遺構 第334図

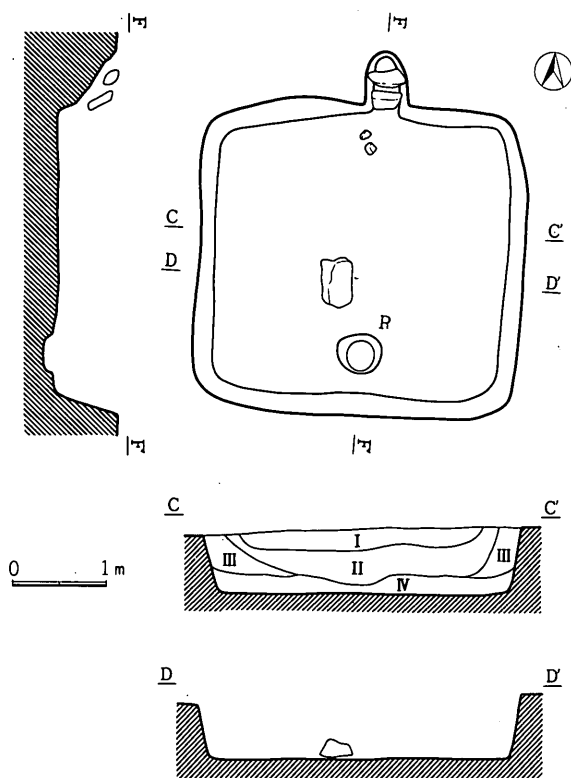
H-112号住居址は、第V区ナ-38・39グリッドにおいて検出された

本住居址は、南北3.3m東西3.5mの隅丸方形を呈し、床面積8.8㎡を測り、主軸方向はN-5°-Wを指す。壁高は70cm前後を測り、壁溝は認められない。また、柱穴は認められず、ピットは南壁寄り中央に50cm×45cm深さ10cmを測るP<sub>1</sub>が検出されたのみであった。

住居址覆土は、4層に分層された。位置層がロームが多く混じる黒褐色土層、II層はロームが混じる黒色土層、III層はロームが大量に混入する黄褐色土層で、IV層はロームが多く混じる暗褐色土層である。

遺物は、良好な出土状態を示すものはなく、いずれも覆土中から出土している。

1 竪穴住居址



第334図 H-112号住居址実測図 (1:80)

カマドは、北壁中央の存在するが、煙道部を除き完全に破壊されていた。煙道部は細長く55cm程壁外にのびるもので、その天井部には二点の面取り軽石が乗せられていた。

遺物 第335図

本住居址より検出された土器は少ないが、須恵器では蓋・長頸瓶・甕、土師器では甕の各器種がみられた。

須恵器蓋は、図示し得なかったが、かえりを有するものの破片2点がみられた。

1の須恵器坏は、底部全面に手持ちヘラケズリがなされたものである。

2は、須恵器甕口縁部の小破片である。

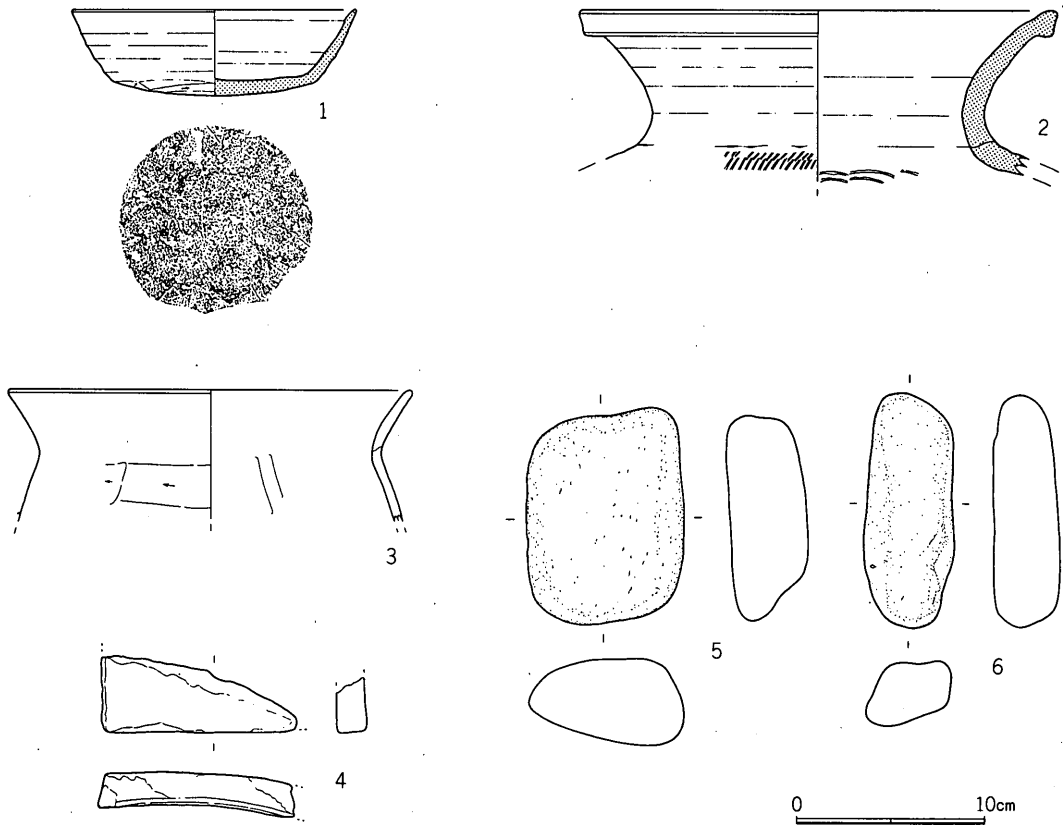
3は、「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部である。

この他、瓦片も1点検出されている(14)。明褐灰色(7.5YR 7/2)の色調を呈し、焼成良好なものである。5・6は、河床礫を用いた石錘と考えられようか。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

IV 遺構と遺物



第335図 H-112号住居址出土遺物(1:4)

第147表 H-112号住居址出土遺物一覧表<土器>

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	<15.1> 4.5 (10.6)	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色(10Y5/1)を呈する。外面に「+」の火跡あり。
2 (回)	甕 (須)	<25.3> - -	口縁部は外反し、口唇部は帯状を呈する。	外面 口縁部ロクロヨコナデ、胴部は叩きがなされる。 内面 口縁部ロクロヨコナデ、胴部には当て具痕が残る。	胎土は砂粒を含み灰白色を呈する。(10Y7/1)
3 (回)	甕	<21.4> - -	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色を呈する。(7.5YR6/6)

第148表 H-112号住居址出土遺物一覧表

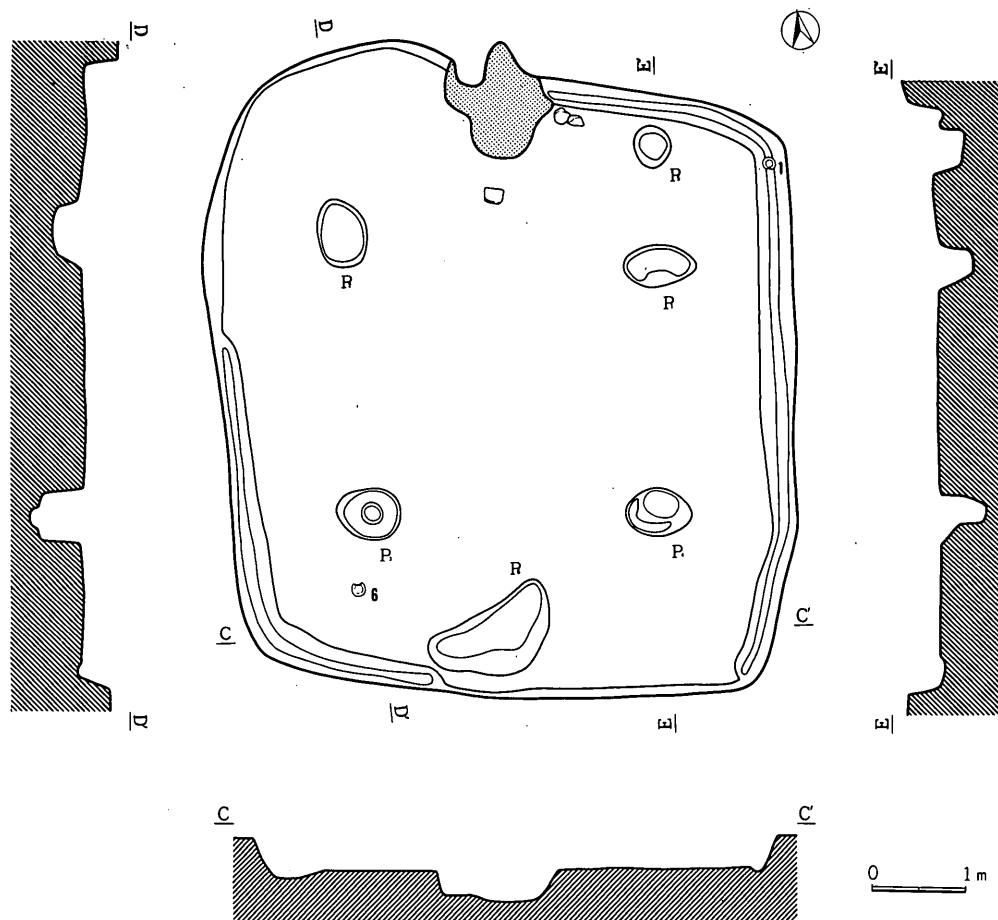
挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
4	瓦		(10.3)	(3.9)	1.8	(70)	
5	石 鐘	安山岩	10.9	8.4	4.6	670	
6	"	"	12.2	4.8	3.4	325	

(113) H-113号住居址

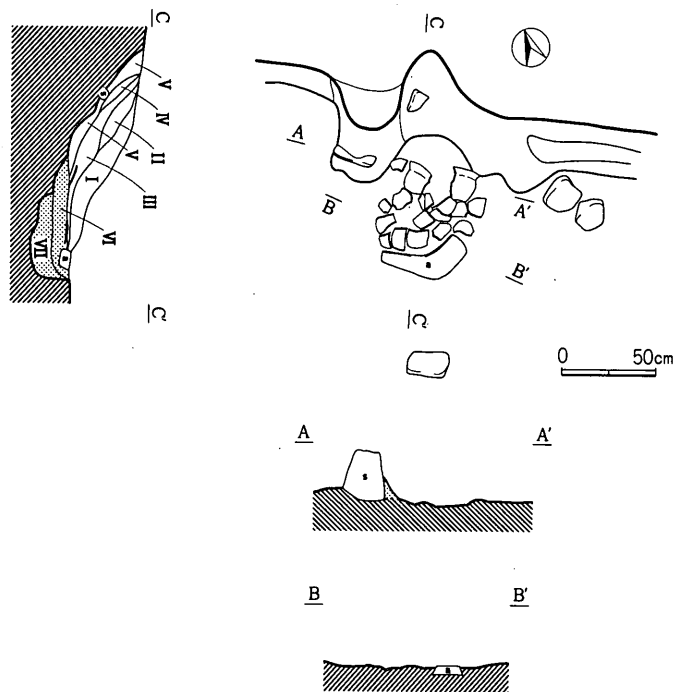
遺構 第336・337図

H-113号住居址は、第V区ト-38グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北6.8m東西6.3mやや歪んだ隅丸方形を呈し、床面積35.8m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-0°-Wを指す。壁高は30~35cmを測り、壁溝は南西コーナーから西壁と北東コーナーから東壁にかけて認められる。ピットは、主柱穴と考えられるP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個と、P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>の延長線上の北壁際にP<sub>5</sub>、南壁際中央に不整形なP<sub>6</sub>がそれぞれ検出された。P<sub>1</sub>は80cm×45cm深さ35cm、P<sub>2</sub>は70cm×50cm深さ30cm、P<sub>3</sub>は70cm×55cm深さ55cm、P<sub>4</sub>は70cm×50cm深さ50cm、P<sub>5</sub>は45cm×40cm深



第336図 H-113号住居址実測図 (1 : 80)



第337図 H-113号住居址カマド実測図 (1:40)

さ30cm、P<sub>6</sub>は140cm×75cm深さ30cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、小粒パミスをよく含む黒褐色土層であった。

遺物は、1の坏が北東コーナーの壁際より、6の坏が南西コーナーの床面よりやや浮いた状態で検出されている。また、カマド火床部には、13の土師器甕破片と須恵器甕破片が敷かれていた。これ以外の遺物は、いずれも覆土中から検出されている。

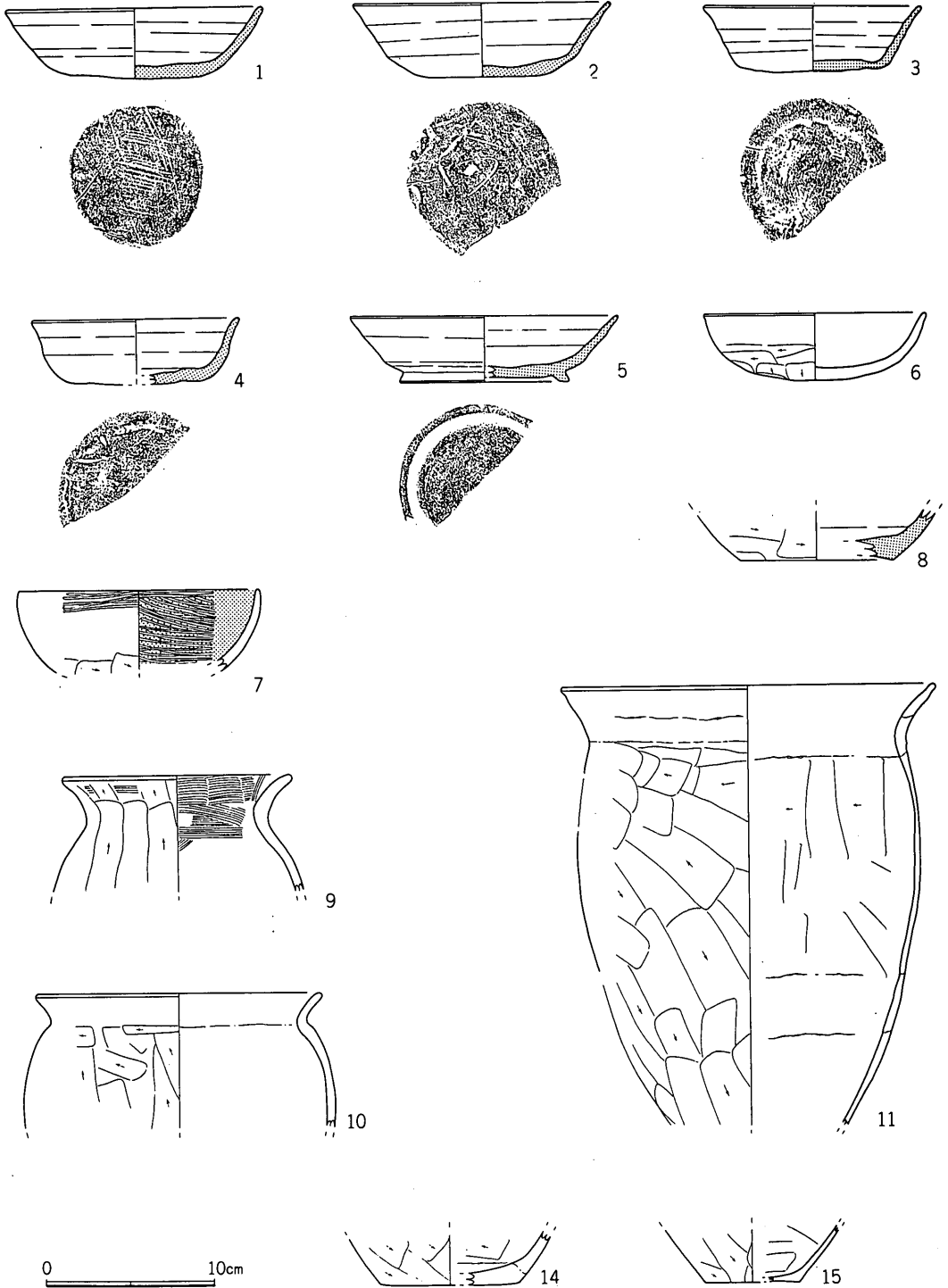
カマドは、北壁中央に存在するが、すでに壊滅していた。なお、その火床部は、一旦掘り込まれた後、黒褐色土層(VII層)と黄褐色土層(VI層)で埋め戻され、火床面には鉄平石(a)と土師器甕・須恵器甕の破片が敷き詰められている状態を呈していた。また、カマド使用に係ると考えられる土層堆積は5層に分層された。I層は若干の焼土・灰を含む黒褐色土層、II層は多量の焼土・灰を含み若干のカーボンを含む暗褐色土層、III層は焼土・灰を含む黒褐色土層、IV層は灰層である黄灰色土層、V層は焼土・灰を含まない黒色土層であった。

#### 遺物 第338・339図

本住居址より検出された遺物には、須恵器では坏・長頸瓶・甕、土師器では坏・甕の各器種がみられた。

1～4は、須恵器坏で、いずれも手持ちヘラケズリのなされた底部をみせている。このうち、

1 竖穴住居址



第338图 H-113号住居址出土遗物(1:4)



## IV 遺構と遺物

第149表 H-113号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	坏 (須)	15.3 4.2 8.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色を呈する。(10Y7/1)
2 (回)	坏 (須)	<15.4> 4.4 (8.4)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラキリ後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色を呈する。(5Y7/2)
3 (完)	坏 (須)	13.0 3.9 8.7	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラキリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ回転不明)	胎土は砂粒を含み灰褐色(7.5YR4/1)を呈する。
4 (回)	坏 (須)	<12.4> — <8.4>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラキリの後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(5Y7/1)を呈する。
5 (回)	坏 (須)	(15.9) 4.0 (10.1)	体部は外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み橙色(7.5YR7/6)完全な環元炎焼成となっていない。
6 (回)	坏	13.3 3.9 —	体部は外反し、底部は偏平な丸底。	外面 □縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ 内面 風化が激しく調整不明	胎土は砂粒を多く含み橙色(7.5YR7/6)焼成はあまり良好でない。
7 (回)	坏	<14.3> — —	体部は丸味をおびて外反する。	外面 □縁部ヘラミガキ、体部ロクロヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 黑色研磨	胎土は砂粒を含み橙色(7.5YR7/6)を呈する。
8 (回)	(須)	— — (9.0)	底部平底。 器種は長頸瓶となるか?	外面 ロクロヨコナデの後、ヘラケズリ、底部は回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色を呈する。(10Y7/1)
9 (回)	甕	<13.7> — —	□縁部は「く」の字状に外反する小形の器形	外面 □縁部ヨコナデの後、胴部縦位のヘラケズリ 内面 □縁部刷毛目状調整	胎土は精選されず砂粒を含み灰褐色(7.5YR4/2)
10 (回)	甕	<17.0> — —	□縁部は「く」の字状に外反する。	外面 □縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 □縁部および胴部ヨコナデ	胎土は砂粒を含みにおい橙色を呈する。(7.5YR6/4)
11 (完)	甕	22.3 — —	□縁部は「く」の字状に外反し、胴部は長胴を呈する。	外面 □縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 □縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにおい橙色を呈する。(7.5YR6/4)
12 (完)	甕	21.1 — —	□縁部は「く」の字状に外反する。	外面 □縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 □縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにおい橙色(7.5YR7/4)を呈する。
13 (回)	甕	<23.0> — —	□縁部は「く」の字状に外反する。	外面 □縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 □縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土はにおい橙色を呈する。(7.5YR6/4)
14 (回)	甕	— — <8.4>	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は砂粒を含み淡黄色(2.5Y8/4)を呈する。
15 (回)	甕	— — <5.6>	底部平底。	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は褐色を呈する。(7.5YR4/3)

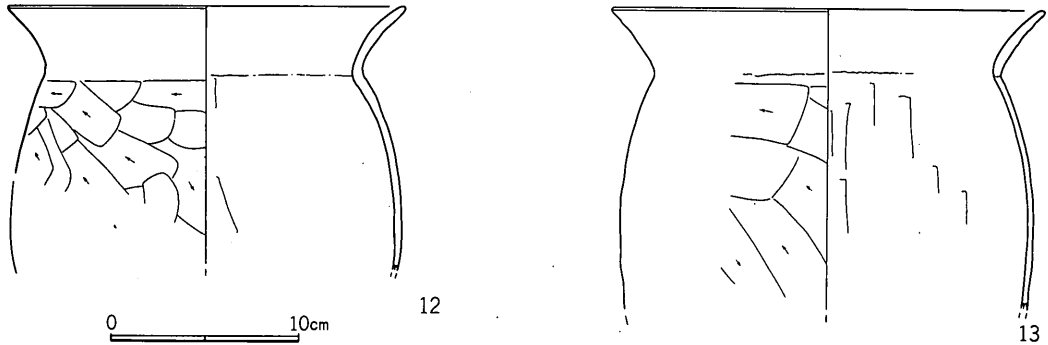
2～4は回転ヘラキリによる切り離しのなされたものであることが窺える。

5は、高台付坏で、回転ヘラケズリのなされた底部をみせるものであった。一応須恵器と捉えたが、色調は橙色を呈しており、完全な環元炎焼成となっていないものであった。

6は土師器坏で、内面は風化が激しく調整は不明であるが、体部に放射状暗文・見込み部にラセン状暗文の施されるものであったと考えられる。

7は、内面黑色研磨のなされた土師器坏である。

1 竪穴住居址



第339図 H-113号住居址出土遺物 (1:4)

9・10は、土師器のやや肉厚な小形甕である。9の内面には刷毛状調整が観察される。

11~13は、「く」の字状に外反する口縁部をみせる土師器甕である。また、14・15は土師器甕の底部である。

なお、本住居址においては、石器・鉄器等は検出されていない。

時期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第V期に位置付けられよう。

(114) H-114号住居址

遺構 第340図

H-114号住居址は、第V区ト-39グリッドにおいて検出された。その中央を南北に用水路によって破壊されている。

本住居址は、南北5.4m東西5.2mの隅丸方形を呈し、床面積25m<sup>2</sup>を測り、南北軸方向はN-0°-Wを指す。壁高は20~40cmを測り、壁溝は認められない。支柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が検出された。P<sub>1</sub>は70cm×45cm深さ35cm、P<sub>2</sub>は80cm×75cm深さ40cmを測り、その内部には大きな礫がみられた。P<sub>3</sub>は75cm×70cm深さ50cm、P<sub>4</sub>は65cm×50cm深さ45cmを測る。

住居址覆土はI層のみで、パミスを含む黒色土層であった。

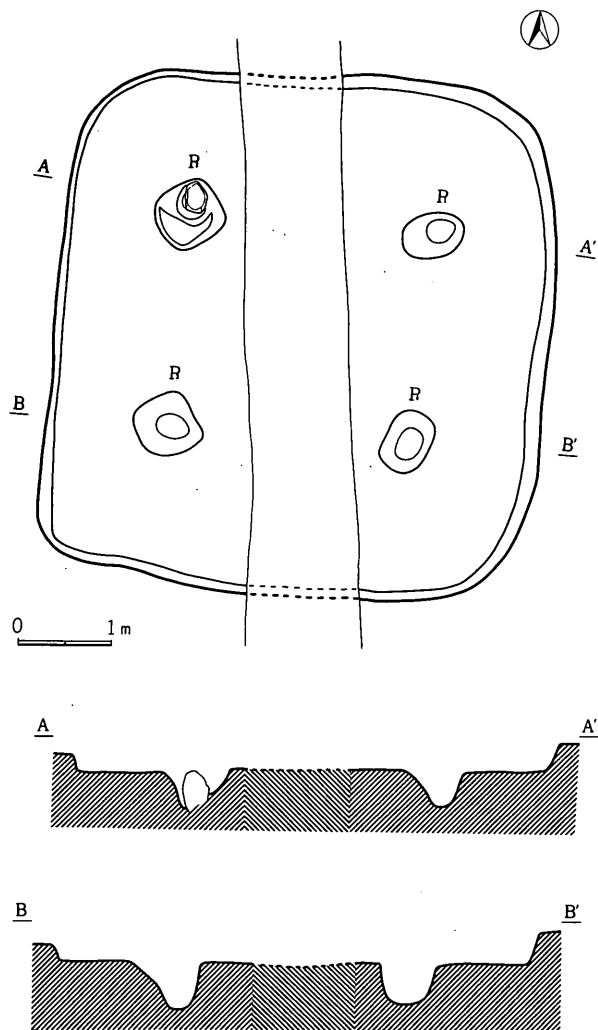
遺物は、良好な出土状態を示すものはなく、いずれも覆土中から出土している。

カマドは、北壁中央に存在したと考えられるが、肝心な部分を用水路によって破壊されており、その存在を確かめられなかった。

遺物 第341図

本住居址から検出された遺物には、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕がある。

1は須恵器坏で、回転ヘラキリの後若干の手持ちヘラケズリのなされた底部をみせている。



第340図 H-114号住居址実測図 (1:80)

2は、体部が弓なりに外反する土師器坏である。

3は、須恵器蓋の底部である。

4は、「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部である。

5は、やや肉厚な土師器甕の破片で、胴部には縦方向のヘラケズリが認められる。

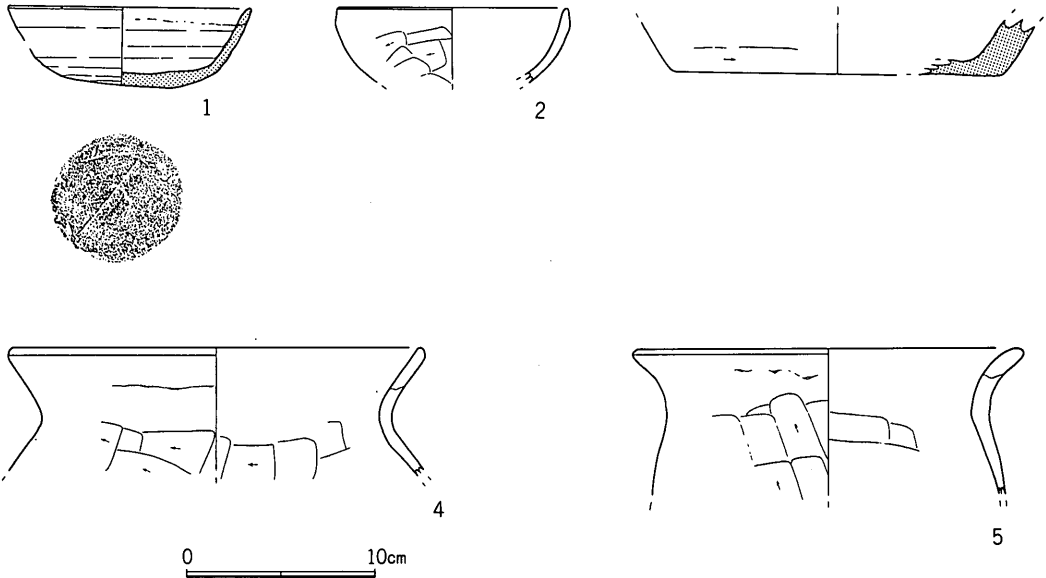
なお、本住居址においては、石器・鉄器類は検出されなかった。

時 期

本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。

第150表 H-114号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (完)	坏 (須)	(13.0) 4.2 6.4	体部は外反し、底部は丸味をおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリの後、 若干の手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色(10Y5/1) 内面上部には粘土 結核が一部残る。
2 (回)	坏	<12.4> — —	体部は丸味をおびて外反する。	外面 □縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み 明赤褐色を呈 する。 (5YR5/6)
3 (回)	甕 (須)	— — <17.5>	底部平底。	外面 胴最下部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	胎土は砂粒を含み 灰白色を呈す る。(10Y7/1)
4 (回)	甕	<22.1> — —	□縁部は「く」の字状に外反し、胴部は やふくらむものと思われる。	外面 □縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ 内面 □縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は橙色を呈 する。 (7.5YR7/6)
5 (回)	甕	<20.7> — —	□縁部は外反し、胴部は比較的直線的に 下降するものと思われる。	外面 □縁部ヨコナデの後、胴部縦位のヘラケズリ 内面 □縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を含み にぶい黄橙色 を呈する。 (10YR6/3)



第341図 H-114号住居址出土遺物(1:4)

(115) H-115号住居址

遺 構 第342・343図

H-115号住居址は、第V区テ-38グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.0m東西3.2mの隅丸方形を呈し、床面積10.8㎡を測り、主軸方向はN-5°-Wを指す。壁高は10cm程度を測るのみである。壁溝は、住居のほぼ全周にみられる。また、柱穴等のピットはまったく検出されなかった。

住居址覆土はI層のみで、パミス・ローム粒子を若干含む黒色土層であった。

遺物は、東壁際より5の坏が、西壁際の床面直上より2の坏が検出された。また、カマド部分からは1の坏が半割した状態で出土している。これ以外の遺物は、いずれも覆土中より出土している。

カマドは、北壁中央よりやや西寄りに存在するが、完全に破壊されており本体はまったく残っていない。カマド部分の覆土は、2層に分層された。I層は若干の焼土・カーボンを含む灰層、II層はカーボンを含む黒色土層であった。

#### 遺物 第344図

本住居址より検出された遺物には、須恵器・土師器ともに坏がある。

1～5は須恵器坏である。このうち底部の残らない4を除くと、いずれも回転糸切りによる底部をみせており、その後1は

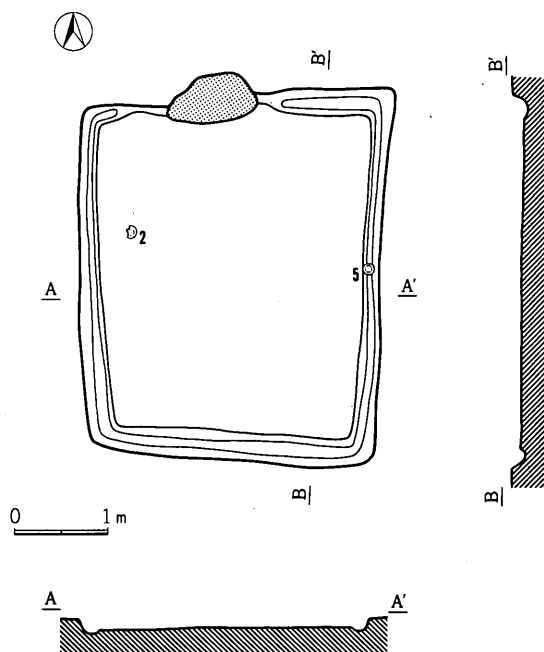
周囲に手持ちヘラケズリが、5は周囲に回転ヘラケズリがなされている。

6は、土師器坏の底部で、全面に手持ちヘラケズリがなされている。

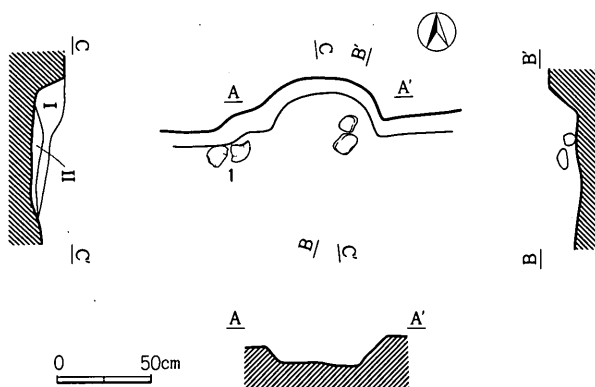
なお、本住居址において石器・鉄器類は検出されなかった。

#### 時期

本住居址は、奈良～平安時代、前田遺跡第VII期に位置付けられよう。



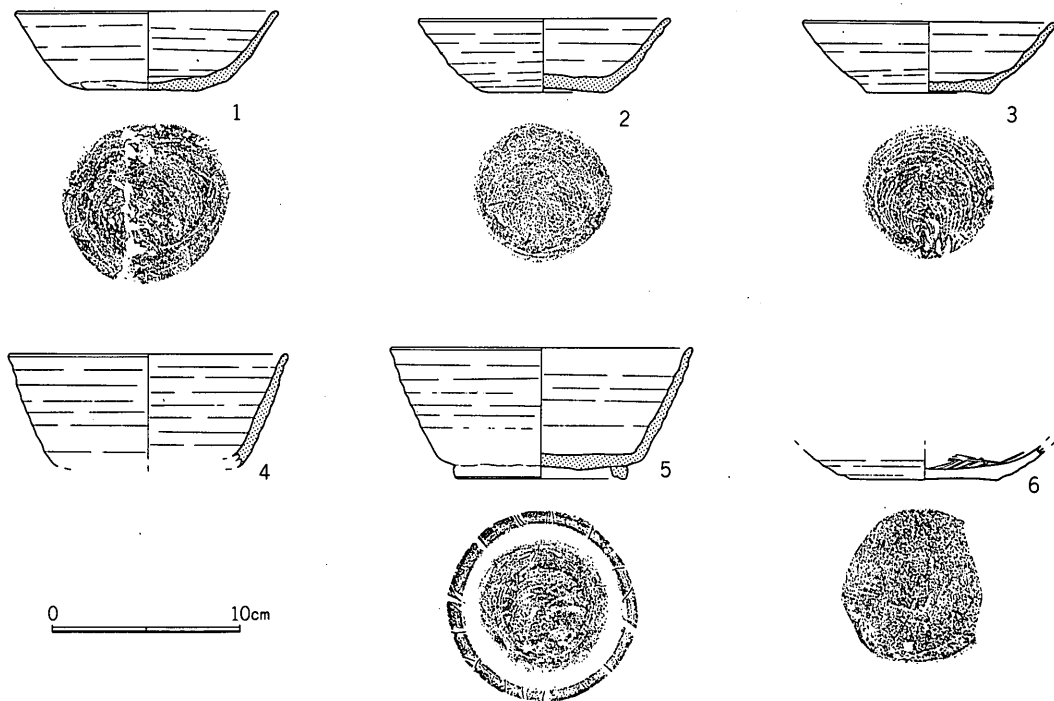
第342図 H-115号住居址実測図 (1:80)



第343図 H-115号住居址カマド実測図 (1:40)

第151表 H-115号住居址出土遺物一覽表 <土器>

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (完)	坏 (須)	14.0 4.2 8.4	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部は回転糸切りの後、 周曲手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ左回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色(5Y6/0)内外面に「×」の火襷有り。
2 (完)	坏 (須)	13.5 3.9 6.7	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y6/1)内面に「+」の火襷有り。
3 (回)	坏 (須)	(13.5) 3.8 6.7	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色(10Y5/1)
4 (回)	坏 (須)	<14.9> - -	体部は直線的に外反する。底部にはおそらく高台が貼り付けられているものと考えられる。	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色を呈する。(10Y6/1)
5 (回)	坏 (須)	<16.1> 6.9 9.1	体部は直線的に外反し、底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、回転ヘラケズリの後高台部貼り付け 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含みにぶい赤褐色(5YR4/4)完全な珪石炭焼成になっていない。
6 (回)	坏	- - (7.9)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部切り離しの後、全面手持ちヘラケズリ 内面 ヘラミガキ (ロクロ右回転)	胎土はにぶい赤褐色を呈する。(2.5YR5/4)



第344図 H-115号住居址出土遺物 (1:4)

(116) H-116号住居址

遺 構 第345図

H-116は、第IV区ナ-33グリッドにおいて検出された。他の小形の竪穴遺構と同様その機能が住居かどうか問題となろうが、とえあえずここでは住居址と呼称しておこう。

本址は、南北2.1m東西2.4mの隅丸方形を呈し、床面積3.8㎡を測り、南北軸方向はN-19°-Wを指す。壁高は20cm前後を測った。柱穴等のピットはまったく検出されず、また、カマドも認められなかった。

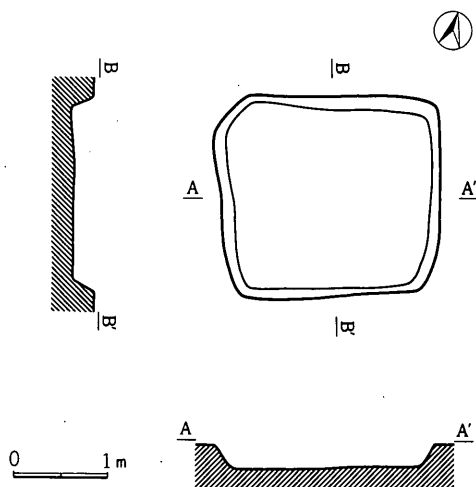
遺構覆土はI層のみで、若干のパミス・ローム粒子を含む黒色土層であった。

#### 遺物

本遺構より検出された遺物は、叩き目のみられる須恵器甕の破片二点のみであった。

#### 時期

本址は、奈良・平安時代の所産と考えることに大過なかろうが、詳しい時期については遺物が皆無に等しいため決定できない。前田遺跡第VII期の所産とみなせようか。



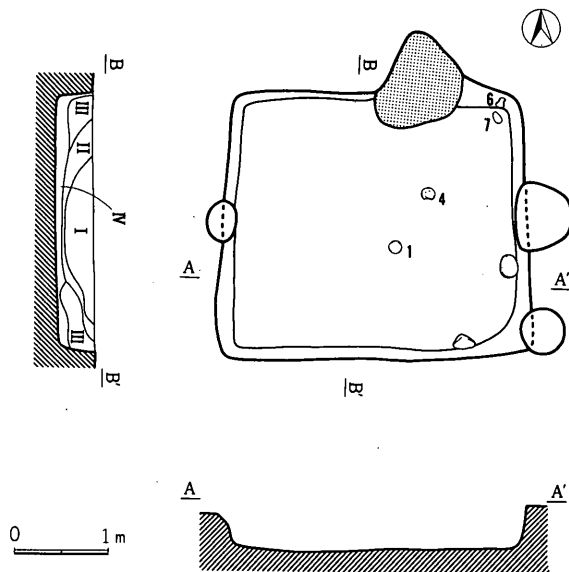
第345図 H-116号住居址実測図(1:80)

### (117) H-117号住居址

#### 遺構 第346・347図

H-117号住居址は、第I区チ-36グリッドにおいて検出された。その東壁二カ所と西壁1カ所を後出するピットによって切られている。

本住居址は、南北2.8m東西3.3mの隅丸方形を呈し、床面積7.6㎡を測り、主軸方向はN-8°-Wを指す。壁高は40~50cmを測り、壁溝は認められない。また、柱穴等のピットも一切みられなかった。



第346図 H-117号住居址実測図(1:80)

1 竪穴住居址

住居址覆土は、4層に分層された。I層はロームを多量に含む黄褐色土層、II層は黒色土層、III層はロームを多量に含む暗褐色土層、IV層が黒色土層であった。

遺物は、1の蓋が住居中央の床面上より、4の坏がI区床面上より、7の敲石が北東コーナーの床面上より、6の横瓶が北東コーナー壁際より検出されている。この他の遺物は、いずれも覆土中より出土したものである。

カマドは、北壁中央に存在し、その石組の一部をとどめていた。図のA-A'の断面をみると、火床部には柱状の支脚石二個が据えられている

のがわかる。また、B-B'の断面では、東西に面取り軽石が一個ずつ配され、その上部に直方体状に面取りされた軽石が乗せられているのが窺えよう。この石組みに、さらに粘土が貼られ、カマド本体となっていたものと考えられる。

遺物 第348図

本住居址より検出された遺物には、須恵器では蓋・坏・甕・横瓶、土師器には甕がある。

1は、完形の須恵器蓋で、つまみ部は潰れた宝珠形を呈している。

2～5は須恵器坏で、2は回転ヘラキリ、3は回転糸切り、4・5は回転ヘラケズリによる底部をみせている。また、これ以外に全面手持ちヘラケズリのなされた底部破片も認められた。なお、4・5は高台付坏である。

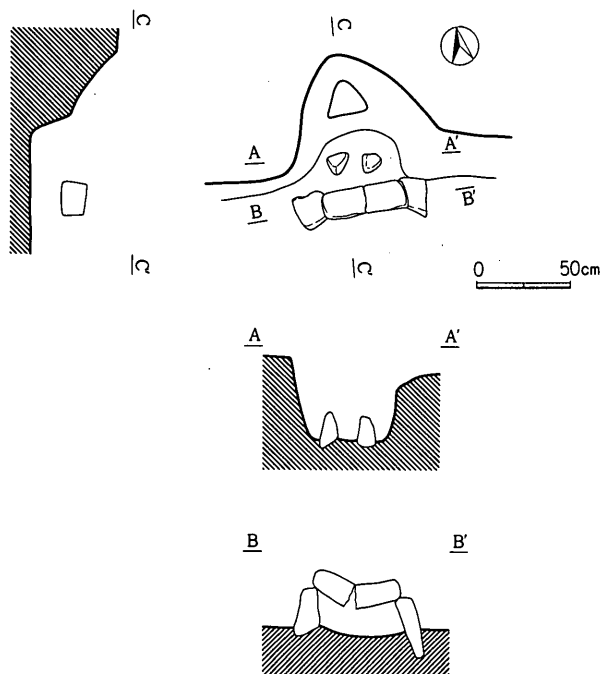
6は、須恵器横瓶で、胴部の一部を大きく欠損し、また、口縁部はゆがんでいる。胴部には叩き目がみられ、他の須恵器片の焼けつきもみられる。

この他、土師器甕は胴部の小破片で、大形の器形を知り得なかった。

7は、扁平な楕円礫の敲石で、両端に敲打痕が認められる。

時期

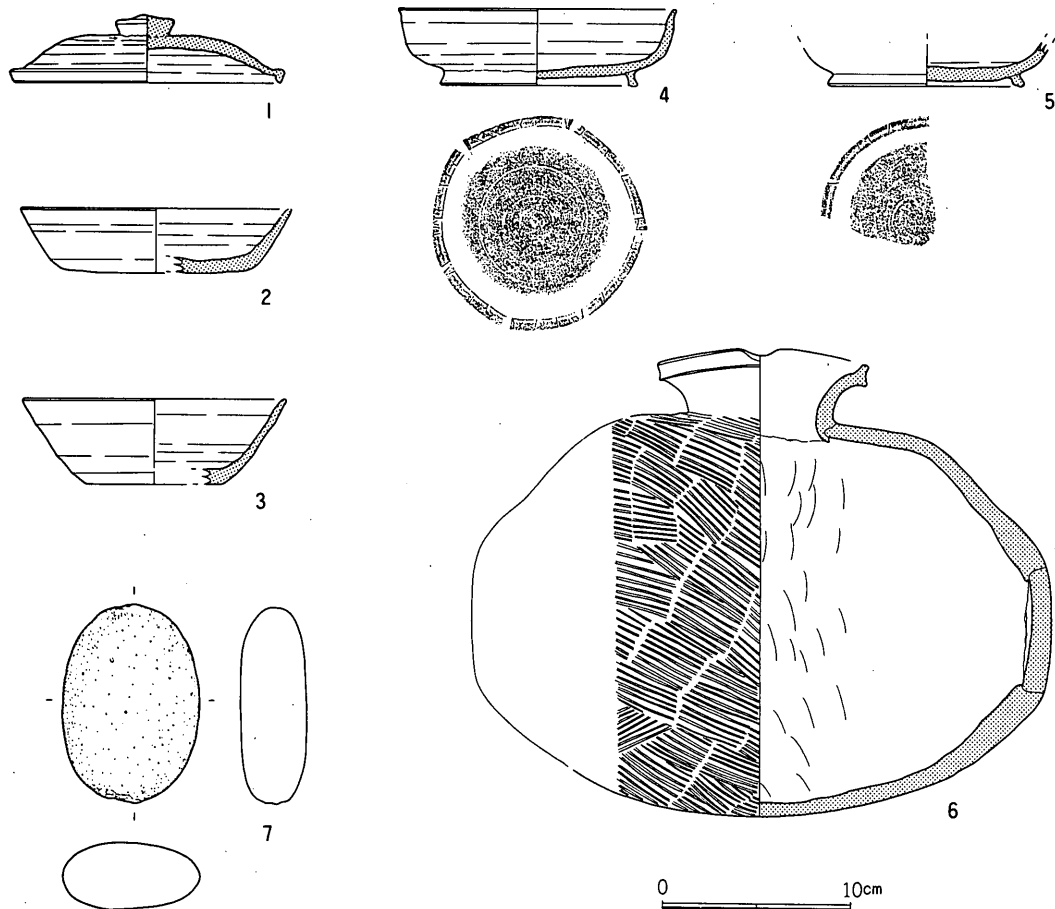
本住居址は、奈良時代、前田遺跡第IV期に位置付けられよう。



第347図 H-117号住居址カマド実測図(1:40)



IV 遺構と遺物



第348図 H-117号住居址出土遺物 (1:4)

第152表 H-117号住居址出土遺物一覧表 <土器>

挿図 番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (完)	蓋 (須)	3.1 3.5 14.1	つまみ部はつぶれた宝珠形を呈する。 完形	外面 ロクロヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色を呈する。 (10Y5/1)
2 (回)	坏 (須)	<14.3> 3.4 <10.0>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され 灰白色を呈する。 (10Y8/1)
3 (回)	坏 (須)	<14.0> 4.5 <7.2>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色を呈する。 (N6/0)
4 (完)	坏 (須)	14.7 4.1 10.5	体部は外反し、底部には高台が貼り付け られる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み にぶい褐色 (7.5YR5/3) 完全な還元炎焼成 となっていない。
5 (回)	坏 (須)	- -<10.5>	底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰褐色を呈す る。(7.5YR5/1)
6 (完)	横瓶 (須)	11.2 24.5 -	口縁部はラッパ状に外反し、口唇部は帯 状となり胴部は端の潰れた卵形を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部は叩きがなされる。 内面 当て具痕がみられる。	胎土は砂粒を含み灰 色(N6/0)。一部に自然 釉が付着する。 外面に他の須恵器片 付着

## 2 掘立柱建物址

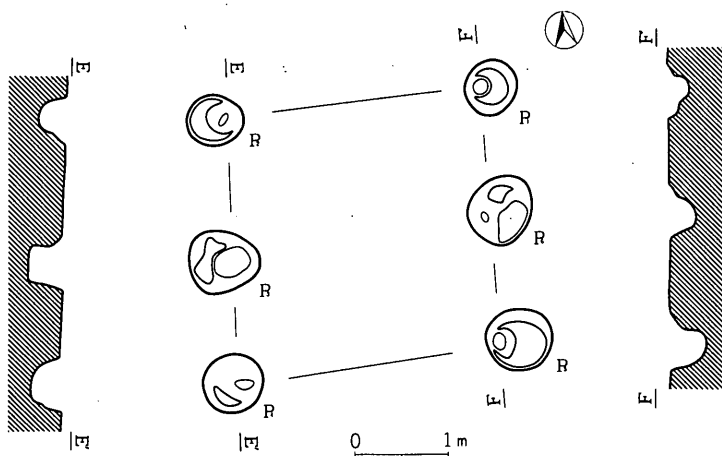
## (1) F-1号掘立柱建物址 第349図

F-1号掘立柱建物址は、第I区シー44グリッドにおいて検出された。

F-1は、2間×1間(2.8m×2.8m)の掘立柱建物址で、柱間は東西列1.4m・南北列2.8mを測る。主軸方向はN-12°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈している。掘り方の埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。ただし、掘り方より、柱は西例では東側に、東例では西側に寄って存在したことが窺える。

本址からは、遺物は一点も検出されていない。



第349図 F-1号掘立柱建物址実測図(1:80)

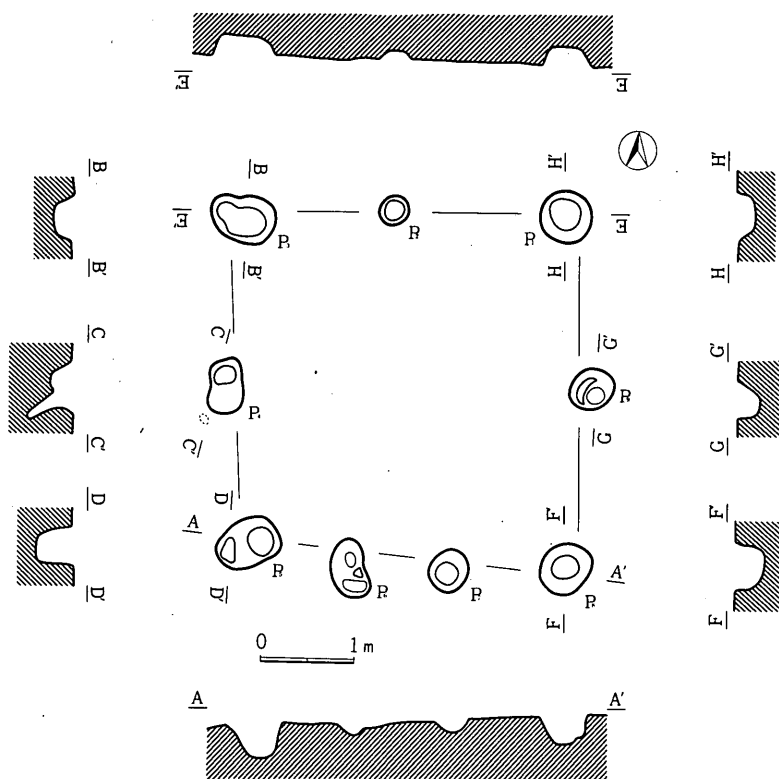
## (2) F-2号掘立柱建物址 第350図

F-2号掘立柱建物址は、第I区シー43グリッドにおいて検出された。

F-2は、南列3間・北列2間×東・西列2間(3.5m×3.5m)の掘立柱建物址である。柱間は南列が1~1.2m、北・東・西列が1.6~1.9mを測る。主軸方向は、N-9°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、円形あるいは歪んだ楕円形を呈している。掘り方の埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは、遺物は一点も検出されなかった。



第350図 F-2号掘立柱建物址実測図 (1:80)

### (3) F-3号掘立柱建物址 第351図

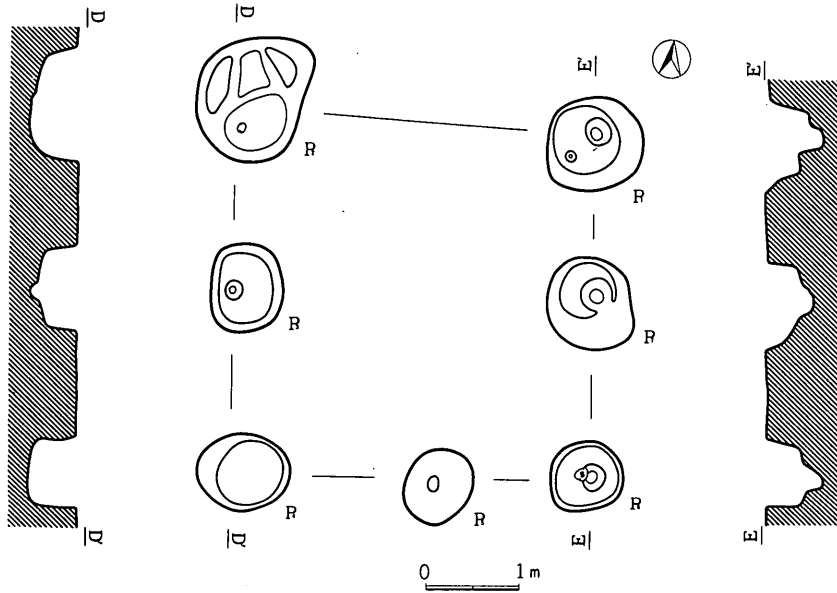
F-3号掘立柱建物址は、第I区シ、ス-42グリッドにおいて検出された。

F-3は、東西2間×北列1間・南列2間(3.6m×3.8m)の掘立柱建物址で、柱間は、東西列で1.7~1.9m、南列で1.7~2.2m、北列で3.8mを測る。主軸方向はN-8°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、P<sub>3</sub>が隅丸方形に近い平面プランを呈する以外は、いずれも円形である。掘り方の埋土は黒色土層1層のみで、その上面では埋土と柱痕の区別がつかなかったが、その底面において柱痕が確認されたピットがいくつかある(P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>)。確認された柱痕は、およそ20cm前後を測るものであった。

遺物は、ピット埋土中より土師器片・須恵器片が検出されている。須恵器片には坏の底部が二点みられたが、一方は回転ヘラケズリ、一方は手持ちヘラケズリのなされたものであった。した

がって本址は、こうした底部調整手法のみられる時期とほぼ同時期か、あるいはそれ以後の時期の所産とみることができる。



第351図 F-3号掘立柱建物址実測図(1:80)

#### (4) F-4号掘立柱建物址

F-4号掘立柱建物址は、第I区スー42グリッドにおいて検出された。本址は、F-3号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-4は、東西南列2間・北列1間(3.4m×3.2m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-8°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈し、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は認められなかった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。

#### (5) F-5号掘立柱建物址 第352図

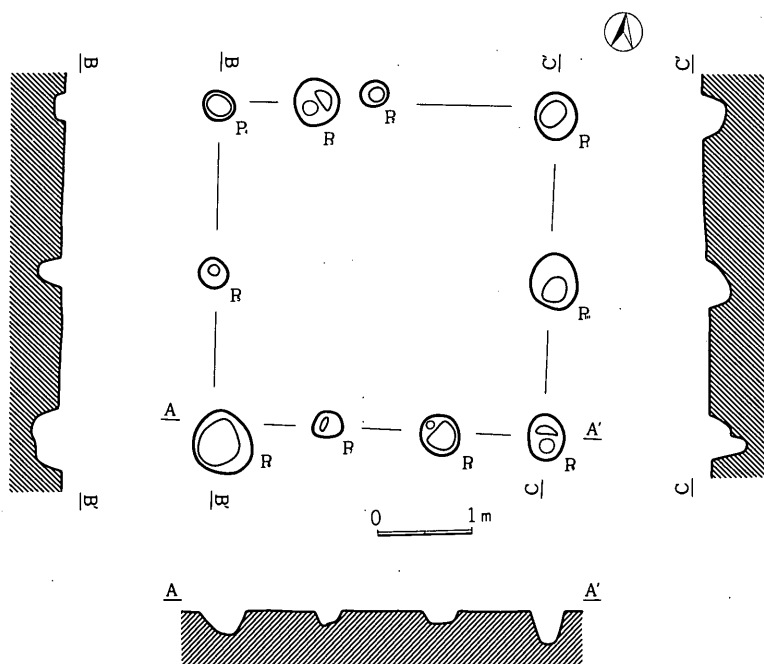
F-5号掘立柱建物址は、第I区スー43グリッドにおいて検出された。

F-5は、3間×2間(3.5m×3.5m)の掘立柱建物址である。柱穴の配置は、P<sub>2</sub>が片寄った

位置にある他は規則正しいものであった。柱間は、南列で1.2m、西列で1.7m、 $P_1$ ・ $P_2$ 間で1.9mを測る。主軸方向は $N-14^\circ-W$ を指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈している。掘り方の埋土は黒色土層1層のみで、そのなかにおいて柱痕は確認されなかった。

なお、本址において遺物は一点も検出されなかった。



第352図 F-5号掘立柱建物址実測図(1:80)

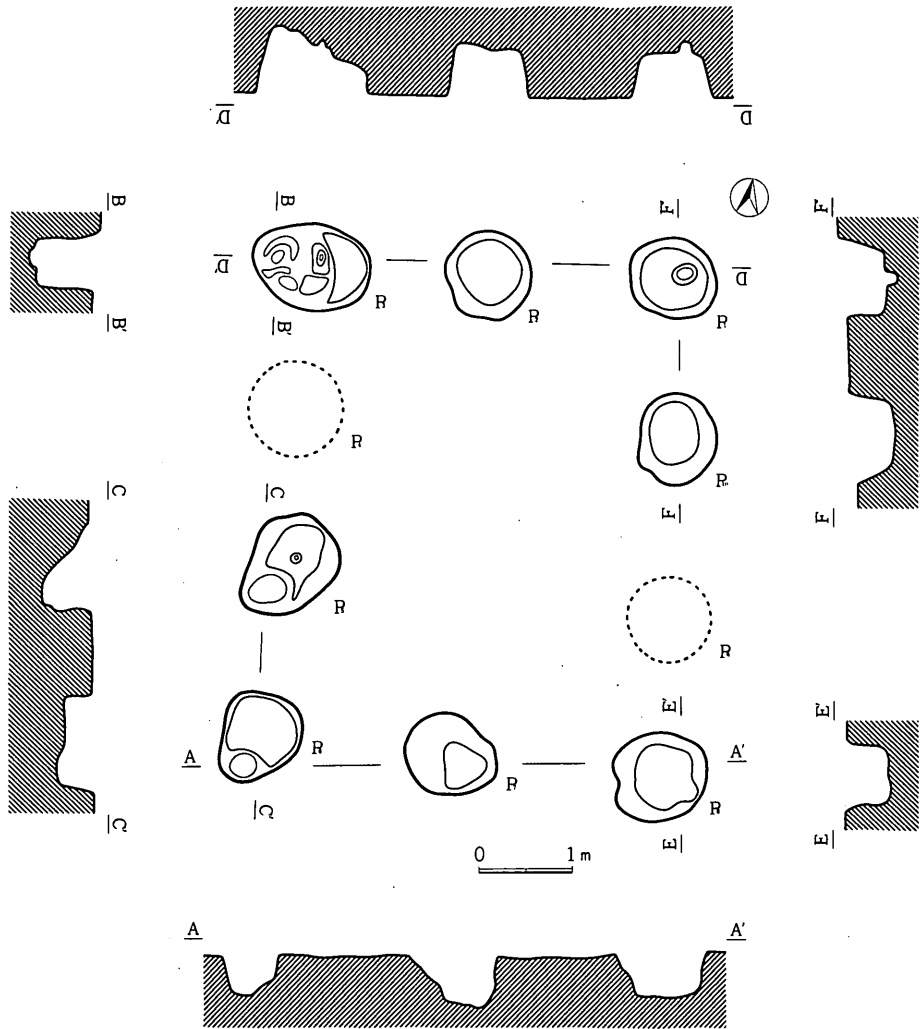
### (6) F-6号掘立柱建物址 第353図

F-6号掘立柱建物址は、第I区ス-44グリッドにおいて検出された。そのうち、 $P_4$ ・ $P_9$ は水路によつて消滅していた。また、F-7と一部重複するが、新旧関係は捉えられない。

F-6は、3間×2間(5.3m×4.4m)の掘立柱建物址で、柱間は東西列で2.2m、南北列で1.9m程度を測る。主軸方向は $N-14^\circ-W$ を指す。

各ピットの掘り方は、円形ないし楕円形を呈するもので、その埋土はローム層混じりの黒色土であった。残念ながら埋土中において柱痕を確認できるものはなかったが、ピットの底面において柱痕の確認できたものがあった( $P_1$ ・ $P_3$ )。

なお、F-6において遺物はまったく検出されなかった。



第353図 F-6号掘立柱建物址実測図 (1:80)

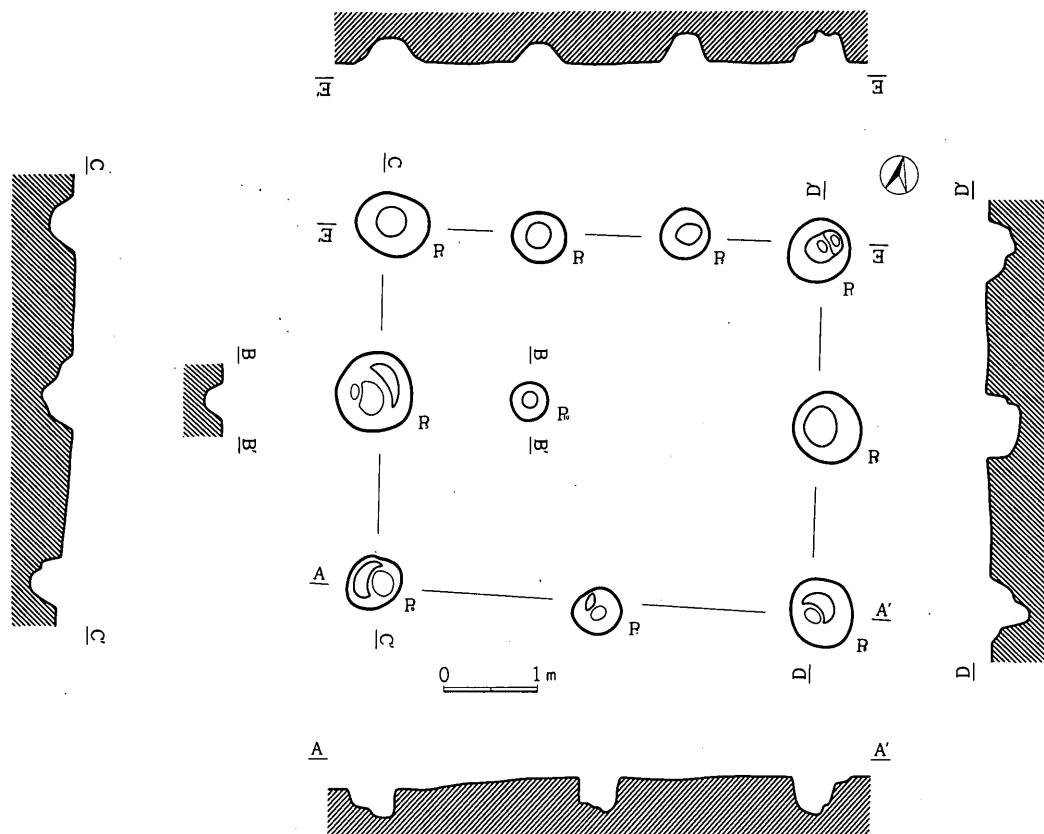
(7) F-7号掘立柱建物址 第354図

F-7号掘立柱建物址は、第I区ス-44グリッドにおいて検出された。F-6とは直接的な切り合い関係は持たないため新旧関係は不明であるが、その占地が一部重複する。

F-7は、北列3間・南列2間×東西列2間(4.6m×3.8m)の掘立柱建物址で、その建物内部( $P_3 \cdot P_5$ の延長線上の交点)において $P_{10}$ の存在をみるものである。柱間は、因みに、 $P_1 \cdot P_2$ 間では1.5m、 $P_4 \cdot P_5$ 間で1.9m、 $P_6 \cdot P_7$ 間で2.3m、 $P_8 \cdot P_9$ 間で1.9mを測る。主軸方向はN-74°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈するもので、その埋土は黒色土層1層のみである。埋土中において柱痕は確認されなかった。

なお、本址において遺物は検出されなかった。



第354図 F-7号掘立柱建物址実測図 (1:80)

### (8) F-8号掘立柱建物址

F-8号掘立柱建物址は、第I区ス-44グリッドにおいて検出された。本址は、F-25号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-8は、1間×1間(2.3m×1.5m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-10°-Wを指す。各ピットの掘り方はいずれも歪んだ楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は確認できなかった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。

(9) F-9号掘立柱建物址

F-9号掘立柱建物址は、第I区セ-42グリッドにおいて検出された。F-9は、その東列をD-6号土壌によって切られている。

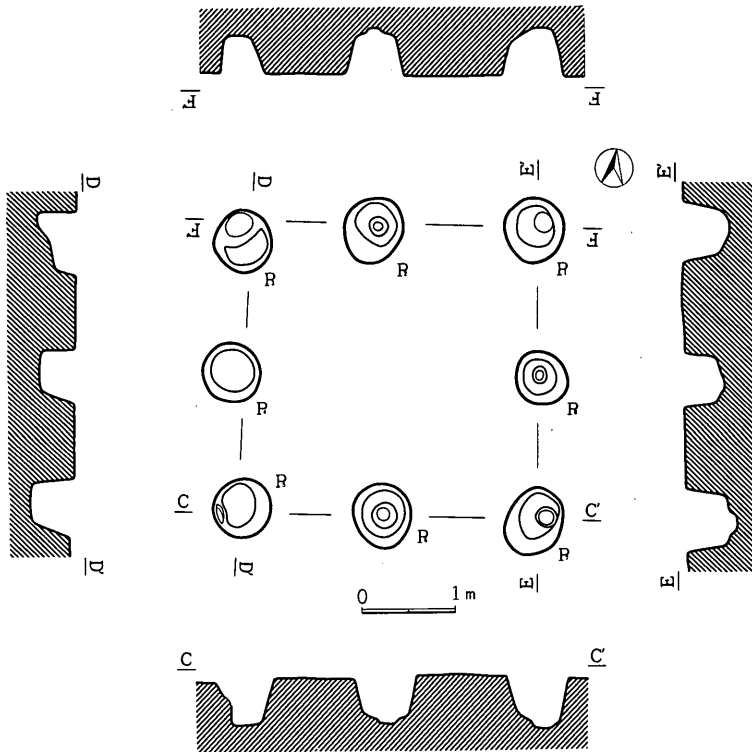
F-9は、2間×2間(3.4m×3.0m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-13°-Wを指す。各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

(10) F-10号掘立柱建物址 第355図

F-10号掘立柱建物址は、第I区ソ-40グリッドにおいて検出された。

F-10は、2間×2間(3.2m×3.1m)の掘立柱建物址で、柱間は南北列で1.6m東西列で1.5mを測る。主軸方向はN-8°-Wを指す。



第355図 F-10号掘立柱建物址実測図(1:80)



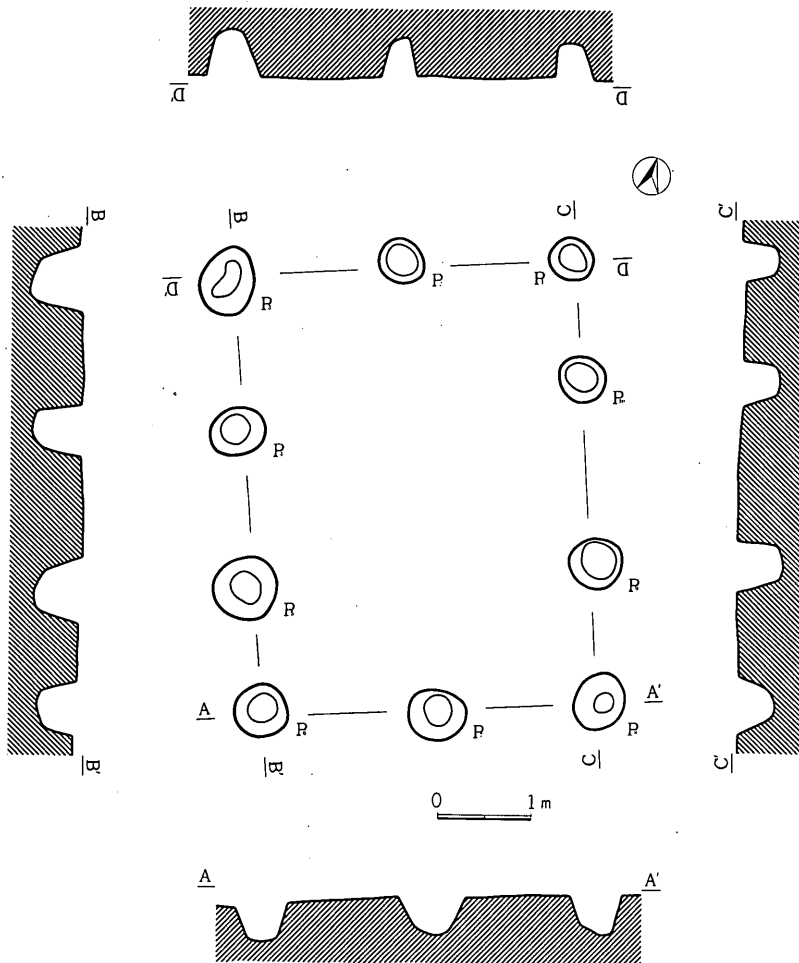
各ピットの掘り方は円形を呈し、その埋土は黒色土層1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認できなかったが、その底面において柱痕が確認されたものがいくつかある ( $P_2 \cdot P_6 \cdot P_7 \cdot P_8$ )。それらの柱痕はおよそ20cm前後を測るものであった。

なお、本F-10からは、遺物は検出されなかった。

(11) F-11号掘立柱建物址 第356図

F-11号掘立柱建物址は、第I区ソ-39グリッドにおいて検出された。

F-11は、3間×2間 (4.7m×3.6m) の掘立柱建物址で、柱間は、因みに、 $P_1 \cdot P_2$ 間で1.8m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で1.5mを測る。主軸方向はN-25°-Wを指す。



第356図 F-11号掘立柱建物址実測図 (1 : 80)

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈する。掘り方の埋土は、黒色土層1層のみで、埋土中において柱痕は確認されなかった。

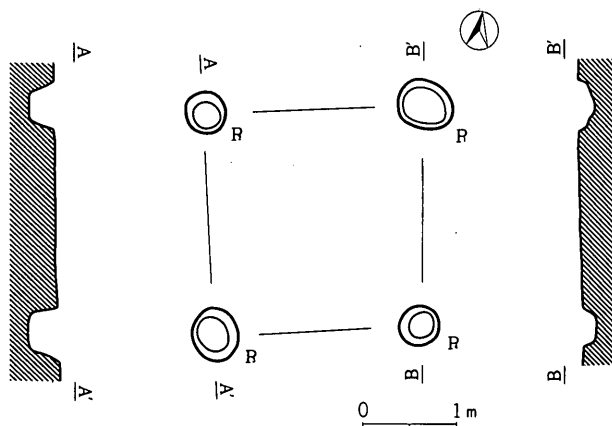
なお、本F-11からは遺物は検出されていない。

### (12) F-12号掘立柱建物址 第357図

F-12号掘立柱建物址は、第I区セ-41グリッドにおいて検出された。その西列は、H-23号住居址東壁と接するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-12は、1間×1間(2.4m×2.2m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-17°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈し、その埋土は黒色土層1層のみである。埋土中において柱痕は確認されなかった。



第357図 F-12号掘立柱建物址実測図(1:80)

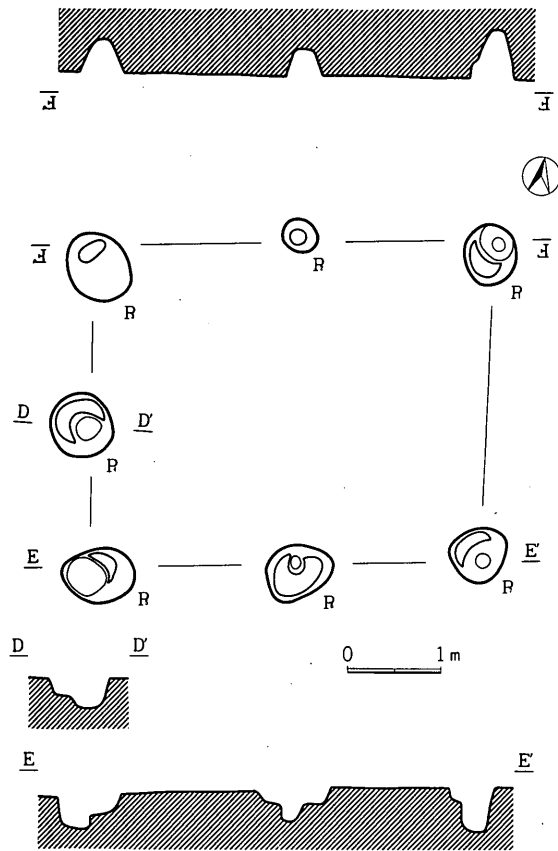
F-12においては、遺物はまったく検出されていない。

### (13) F-13号掘立柱建物址 第358図

F-13掘立柱建物址は、第I区セ-41グリッドにおいて検出された。本址は、F-14と隣接するが、両者は棟方向や柱の並びもそろっており、一連の建造物であった可能性も残る。

F-13は、南北列2間×西列2間・東列1間(4.2m×3.3m)の掘立柱建物址で、因みに柱間は、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間で2.0m、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間で1.8mを測る。主軸方向はN-67°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈し、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中におい



第358図 F-13号掘立柱建物址実測図 (1 : 80)

ては、柱痕は確認されなかった。

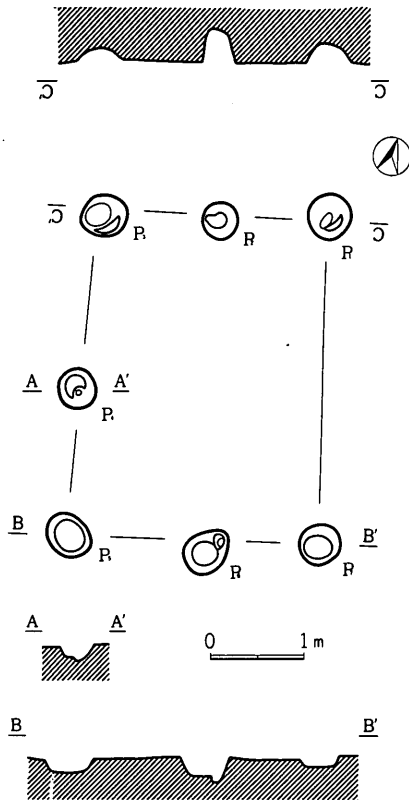
なお、本址のピット埋土中からは、回転ヘラケズリのなされた須恵器底部破片が検出されている。したがって本址は、この須恵器の調整手法が示す時期とほぼ同時期か、それに後出する時期の所産とみなすことができよう。

#### (14) F-14号掘立柱建物址 第359図

F-14号掘立柱建物址は、第I区セー42グリッドにおいて検出された。本址は、前述したように、隣接するF-13と棟方向や柱の並びもそろっており、一連の建造物であった可能性も残る。

F-14は、南北列2間×西列2間・東列1間 (3.4m×2.7m) の掘立柱建物址で、因みに柱間は、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間で1.2m、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間で1.9mを測った。主軸方向はN-18°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈し、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中におい



第359図 F-14号掘立柱建物址実測図 (1:80)

ては柱痕は確認されなかった。

なお、本F-14において、遺物はまったく検出されなかった。

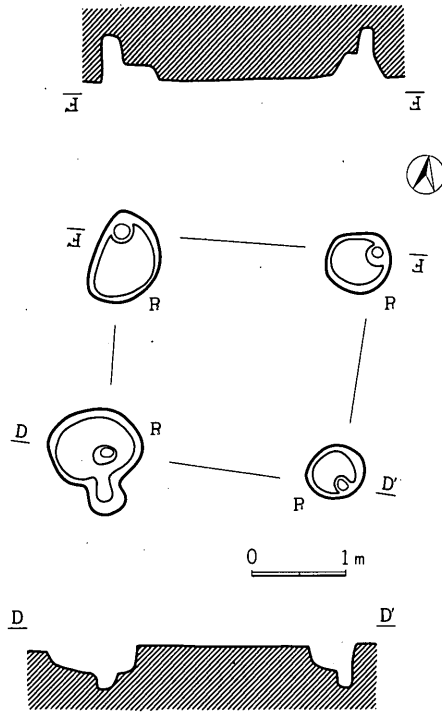
### (15) F-15号掘立柱建物址 第360図

F-15号掘立柱建物址は、第I区セ-42グリッドにおいて検出された。

F-15は、1間×1間(2.7m×2.4m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-80°-Wを指す。

各ピットの掘り方は基本的には円形を呈し、その埋土は黒色土層I層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかったが、その底面に柱痕が確認された。それらは15~20cm程の径を測るものであった。

なお、本址においては、遺物は一点も検出されなかった。



第360図 F-15号掘立柱建物址実測図 (1:80)

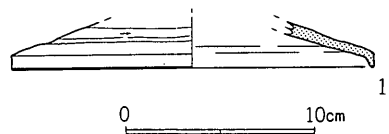
## (16) F-16号掘立柱建物址 第361・362図

F-16号掘立柱建物址は、第I区セ-42グリッドにおいて検出された。本址は、F-17号掘立柱建物址と直接的な切り合いをもたないが、両者の占地の大部分は重複している。

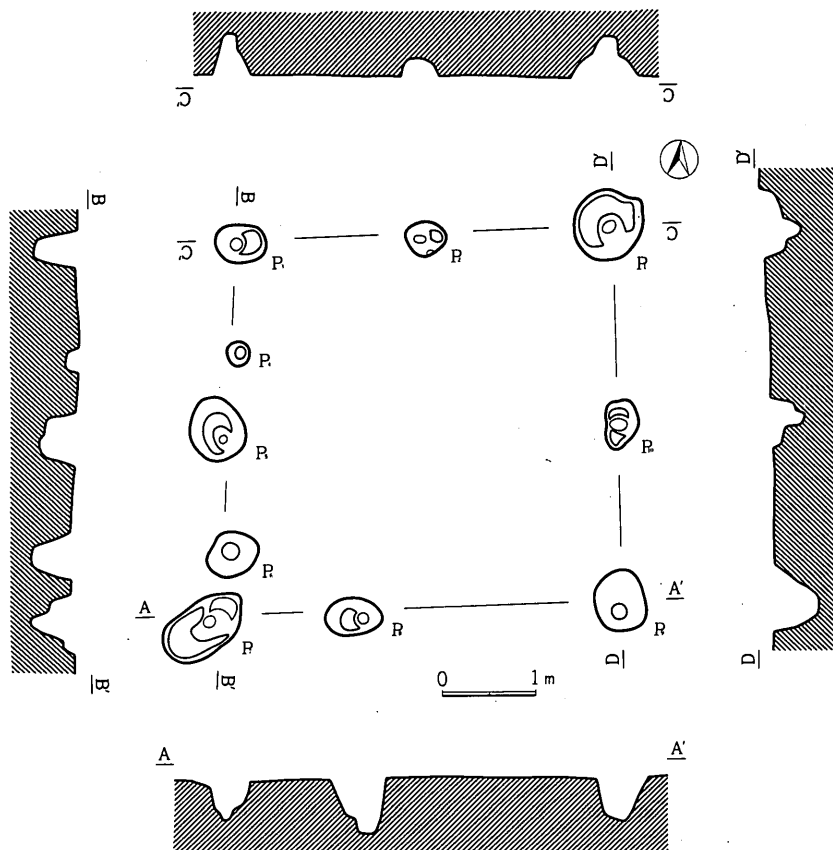
F-16は、西列4間・東列2間×南北列2間(4.0m×4.0m)の掘立柱建物址で、特に西列のP<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>、南列のP<sub>8</sub>は片寄った位置に存在する。因みに柱間は、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間で2.0m、P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>間で2.7mを測る。主軸方向はN-11°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形ないしは長楕円形を呈しており、その埋土は黒色土層1層のみであった。埋土中において柱痕が確認できるものはなかったが、掘り方の底面において柱痕が確認されたものがいくつかある(P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>10</sub>)。いずれの柱痕も15~20cm程度の径を測るものであった。

本址のピットの埋土中からは、須恵器片・土師器片が検出された。1の須恵器蓋の破片の他、回転ヘラケズリのなされた須恵器坏底部がみられた。本址の所産



第361図 F-16号掘立柱建物址出土遺物 (1:4)



第362図 F-16号掘立柱建物址実測図 (1:80)

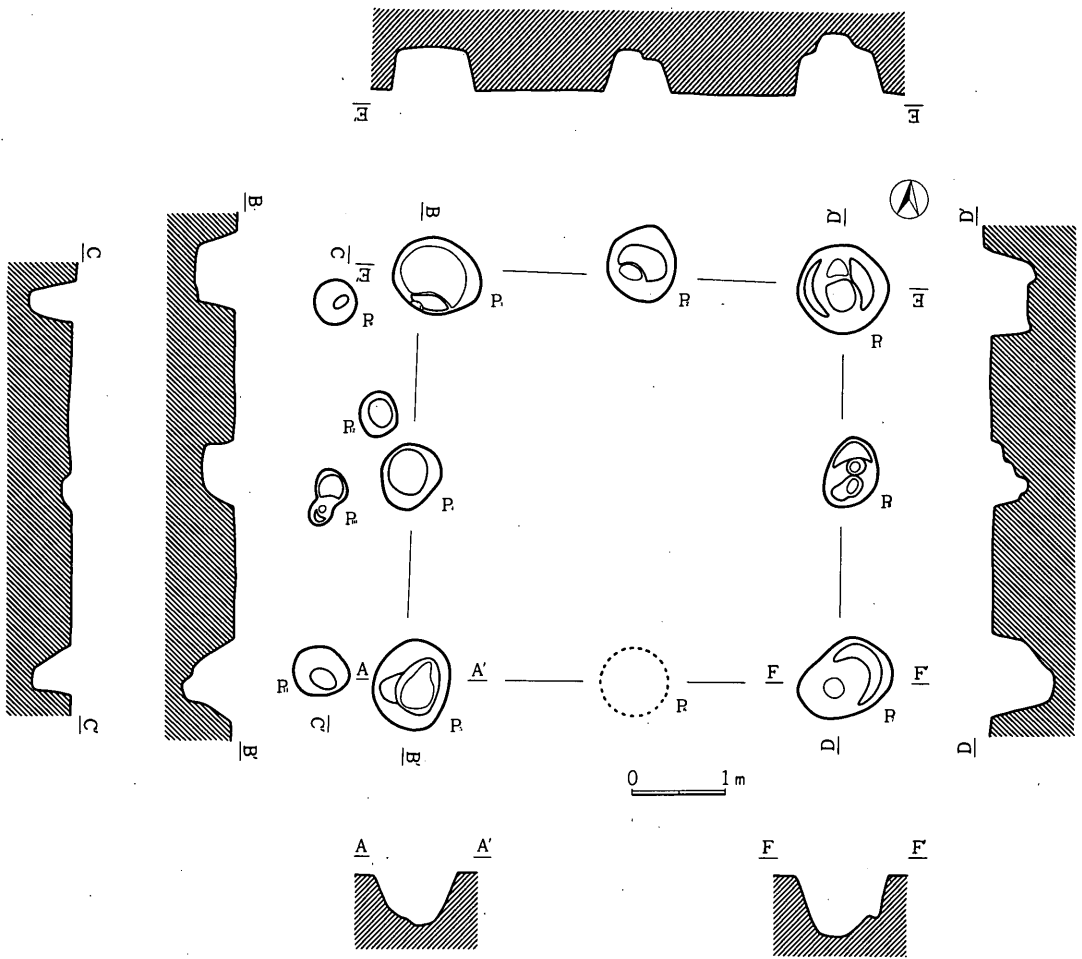
第153表 F-16号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	- < 9.2 >	つまみ部の形状不明	外面 全体ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く 含み灰白色 (10Y7/1)

期は、これらの遺物の特徴が示す時期と同時期か、あるいは以降の時期とみられよう。

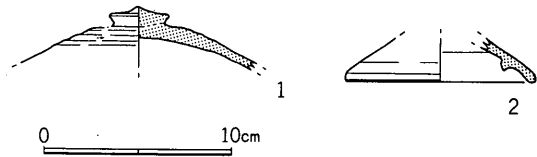
(17) F-17号掘立柱建物址 第363・364図

F-17号掘立柱建物址は、第I区セー42グリッドにおいて検出された。本址は、F-16号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。また、P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>間は攪乱を受けており、ピットの存在は確認できなかった。



第363図 F-17号掘立柱建物址実測図(1:80)

F-17は、2間×2間(4.3m×4.3m)の掘立柱建物址で、その西側には廂と考えられるピットが付属するものである(P<sub>9</sub>~P<sub>11</sub>)。因みに柱間は、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間で2.2m、P<sub>8</sub>・P<sub>1</sub>間で2.1mを測る。また、西列と廂の柱列との距離は0.9mを測る。主軸方向はN-79°-Eを指す。



第364図 F-17号掘立柱建物址出土遺物(1:4)

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土層1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかったが、その底面で柱痕が確認できるものがいくつかあった(P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>8</sub>)。

本址のピット埋土中からは、須恵器片・土師器片・陶器?片が検出されている。

第154表 F-17号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	3.2 — —	つまみ部は宝珠形を呈する。	外面 全体ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (7.5Y4/1)
2 (回)	蓋 (陶)	— — <10.0>	内面にはかえりを有する。	外面 全体ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され灰白色(10Y7/1)。焼成良好。内外面には褐色の釉がかかる。(7.5YR4/4)

1は、宝珠形つまみ部を有する須恵器蓋である。2は、内面にかえりを有する小形の蓋で、内外面に褐色に釉薬が掛かり陶器かと考えられるものである。つまみ部の形状は不明。

本址は、1、2の遺物が示す時期と同時期かそれに後出するものとして捉えられる。

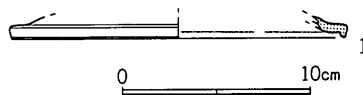
### (18) F-18号掘立柱建物址 第365・366図

F-18号掘立柱建物址は、第I区セ-42グリッドにおいて検出された。本址は、F-19と僅かに重複をみせるが、両者の新旧関係は不明である。

F-18は、3間×2間(5.0m×4.4m)の掘立柱建物址である。その内部には不規則な配列をみせるピットが5個(P<sub>11</sub>~P<sub>15</sub>)存在するが、本址に伴うものかどうかは不明と言わざるを得ない。因みに柱間距離は、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>間で2.2m、P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>間で1.7mを測る。主軸方向は、N-76°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、円形かあるいは蕨形で、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかったが、掘り方の底面において柱痕が確認されたものがある(P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>)。

本址のピットの埋土中からは、1の須恵器蓋の破片と、「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部破片等が検出された。したがって本址は、これらの遺物が提示する時期とほぼ同時期か、あるいはそれ以降の所産とみなし得よう。

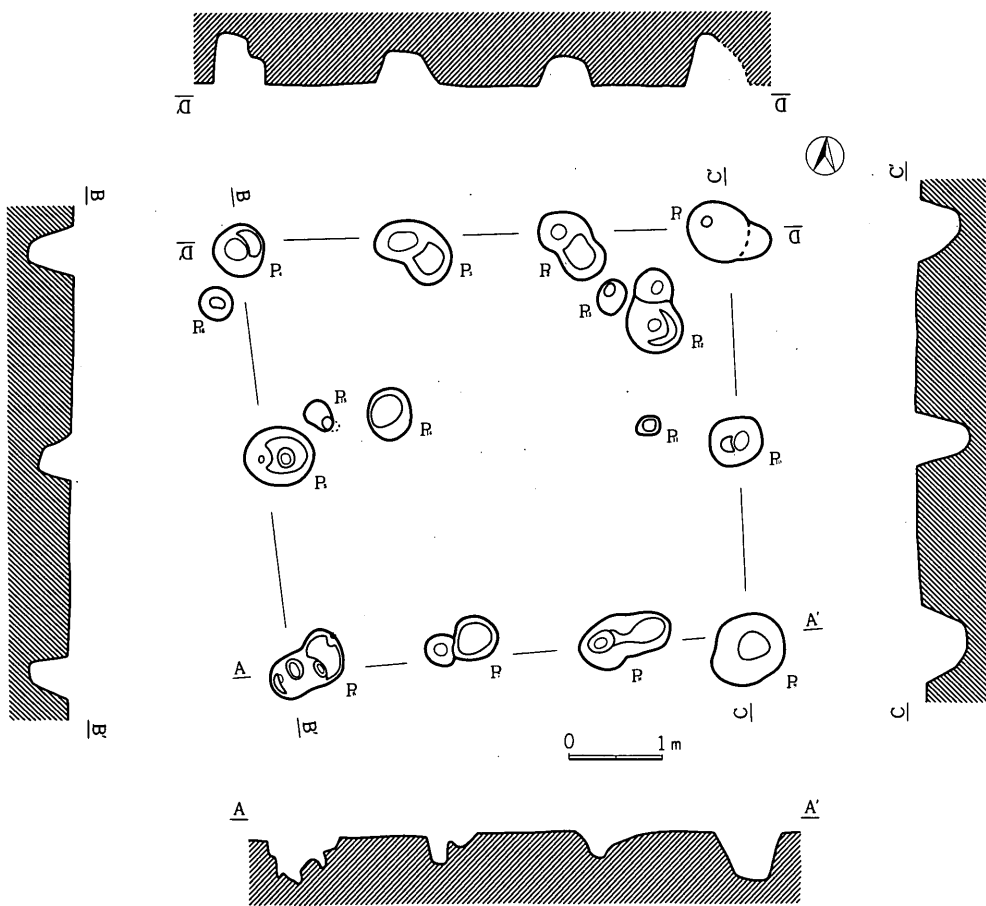


第365図 F-18号掘立柱建物址  
出土遺物(1:4)

第155表 F-18号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回)	蓋 (須)	— — <17.7>	小破片、つまみ部の形状不明	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい褐色 (7.5Y5/4)





第366図 F-18号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(19) F-19号掘立柱建物址 第367・368図

F-19号掘立柱建物址は、第I区セ-42グリッドにおいて検出された。本址は、F-20号掘立柱建物址・F-18号掘立柱建物址と一部重複するが、これらとの新旧関係は捉えられなかった。

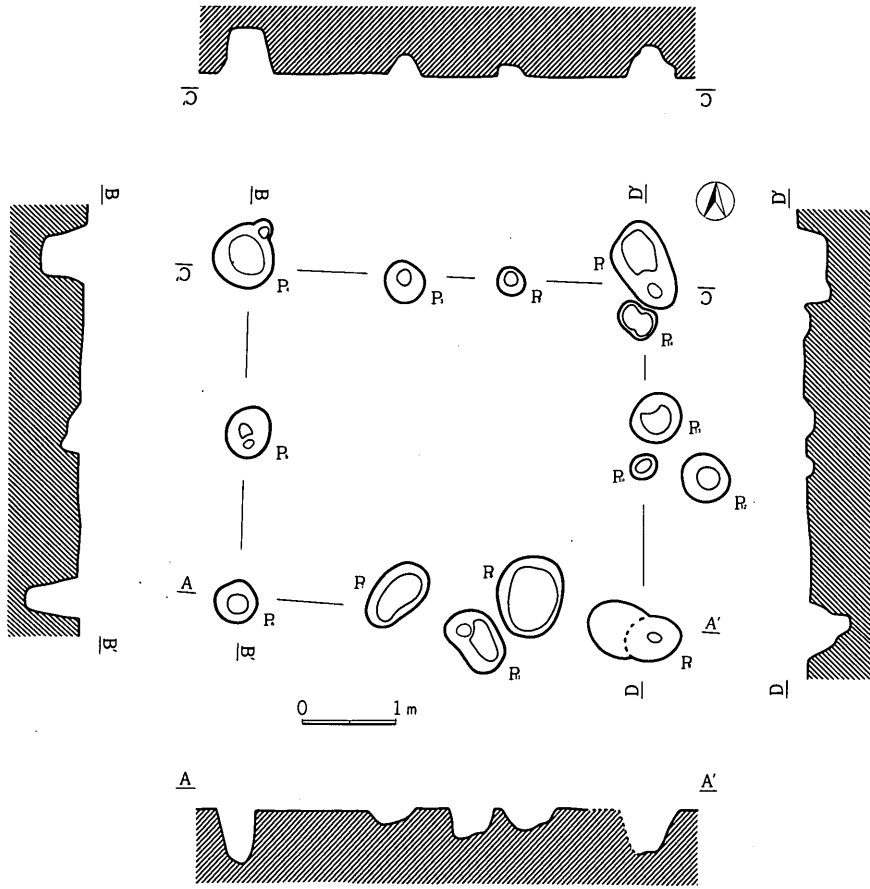
F-19は、3間×2間(4.3m×3.5m)の掘立柱建物址で、その柱列間には不規則なピットがいくつかみられるが(P<sub>11</sub>~P<sub>14</sub>)、本址に伴うものかどうかはわからない。ちなみに柱間は、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間で1.5m、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>間で1.6mを測った。主軸方向はN-79°-Eを指す。

各ピットの掘り方は円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は

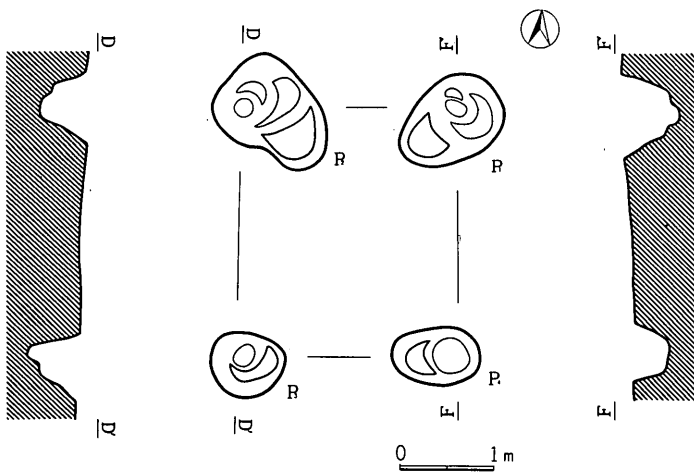


第367図 F-19号掘立柱建物址出土遺物 (1:4)

2 掘立柱建物址



第368图 F-19号掘立柱建物址实测图 (1:80)



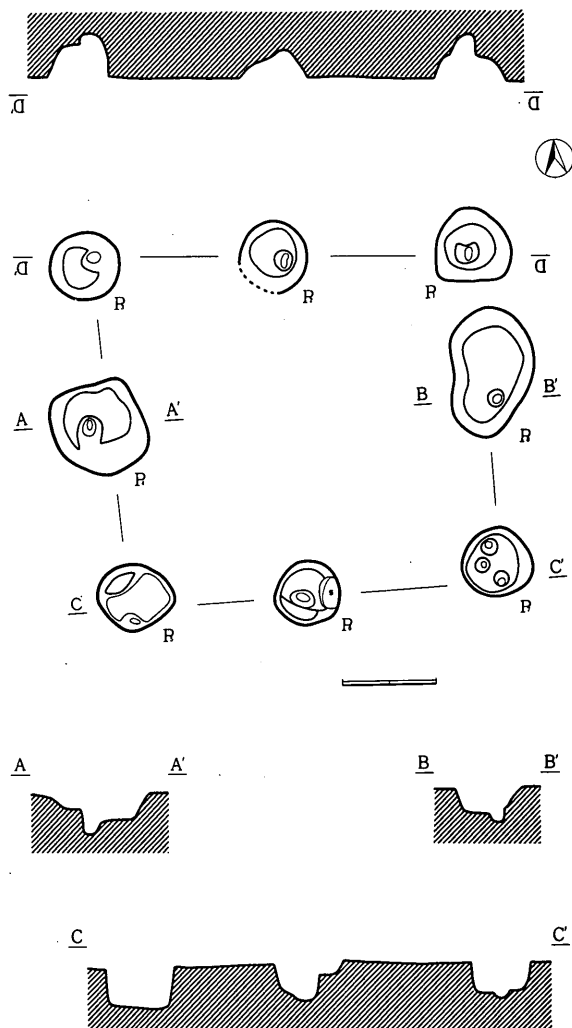
第369图 F-20号掘立柱建物址实测图 (1:80)

黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかった。

本址のピットの埋土中からは、回転ヘラキリによる須恵器坏底部の破片1点が検出されている。したがって本址は、その調整手法が見出せる時期とほぼ同時期か、あるいはそれ以降の所産とみることができよう。

(20) F-20号掘立柱建物址 第369図

F-20号掘立柱建物址は、第I区セ・ソー42グリッドにおいて検出された。本址は、F-19号



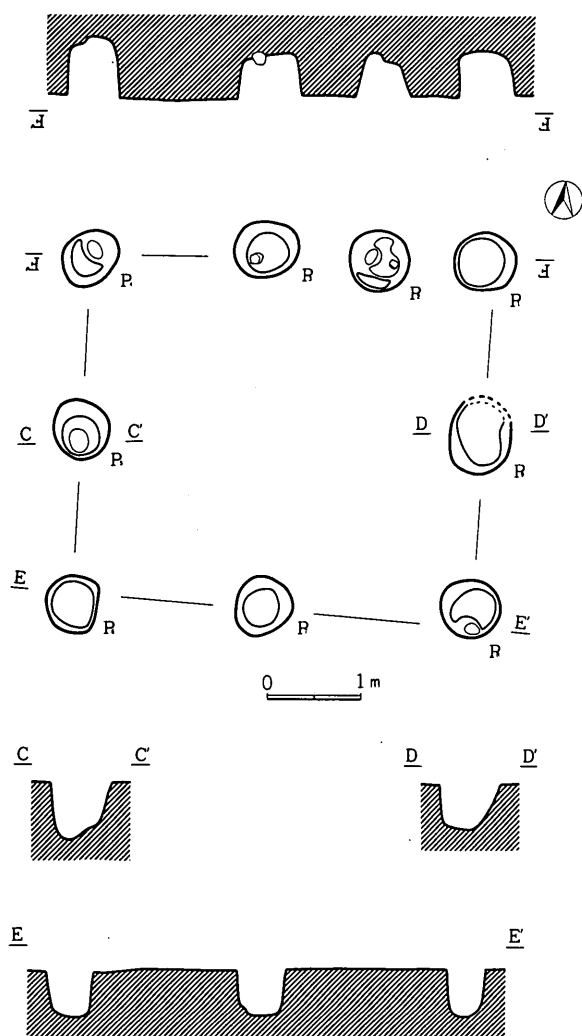
第370図 F-21号掘立柱建物址実測図 (1:80)

掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-20は、1間×1間（2.6m×2.4m）の掘立柱建物址で、主軸方向はN-12°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは歪んだ楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。その埋土中において柱痕を確認することはできなかったが、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>の底面においては柱痕を捉えることができた。それらの柱痕は、径15~20cm程度を測るものであった。

なお、本址のピットの埋土中からは、土師器甕破片1片と、縄文土器片2片が検出された。



第371図 F-22号掘立柱建物址実測図（1：80）

## (21) F-21号掘立柱建物址 第370図

F-21号掘立柱建物址は、第I区セ-43グリッドにおいて検出された。本址は、F-53号掘立柱建物址と重複するが、その新旧関係は不明である。

F-21は、2間×2間(4.0m×3.4m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で2.0m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で1.7mを測る。主軸方向は、N-78°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認できなかったが、 $P_5$ を除く他のピットの掘り方の底面において柱痕が捉えられた。それらの柱痕はおおよそ15~20cm程度を測るものであった。

なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。

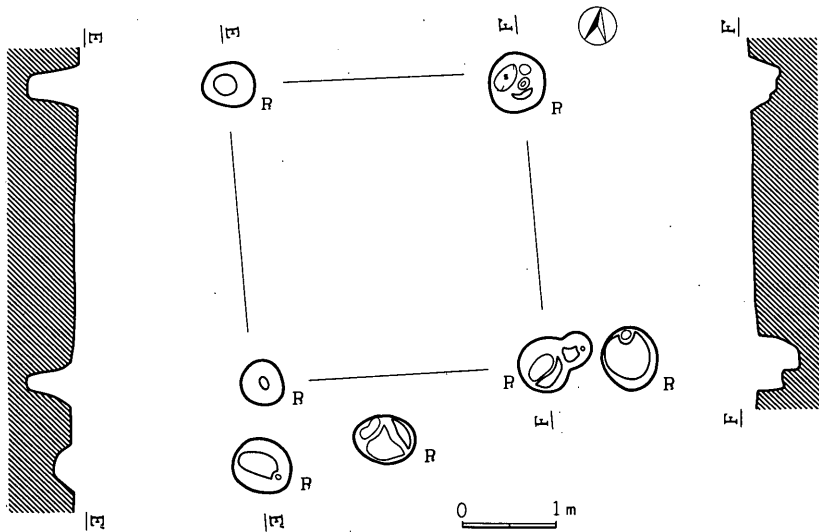
## (22) F-22号掘立柱建物址 第371図

F-22号掘立柱建物址は、第I区セ-43グリッドにおいて検出された。本址の $P_9$ は、F-53の $P_5$ と切り合うが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-22は、北列3間・南列2間×東西列2間(4.1m×3.9m)の掘立柱建物址で、柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で1.3m、 $P_4 \cdot P_5$ 間で2.0m、 $P_7 \cdot P_8$ 間で2.2mを測る。主軸方向はN-78°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては、柱痕は確認されなかった。

なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。



第372図 F-23号掘立柱建物址実測図(1:80)

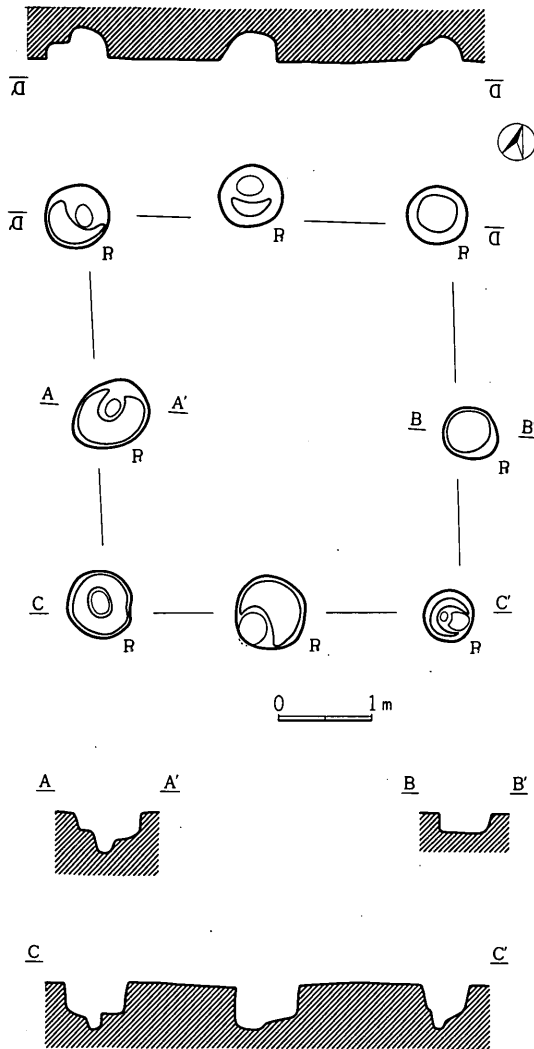
(23) F-23号掘立柱建物址 第372図

F-23号掘立柱建物址は、第I区スー41グリッドにおいて検出された。

F-23は、1間×1間(3.2m×3.1m)の掘立柱建物址で、柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で3.2m、 $P_4 \cdot P_1$ 間で3.0mを測る。主軸方向はN-27°-Wを指す。なお、 $P_1 \sim P_4$ の他に不規則な配列をみせる $P_5 \sim P_6$ がみられた。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては、柱痕は捉えられなかった。

本址においては、遺物はまったく検出されていない。



第373図 F-24号掘立柱建物址実測図 (1:80)

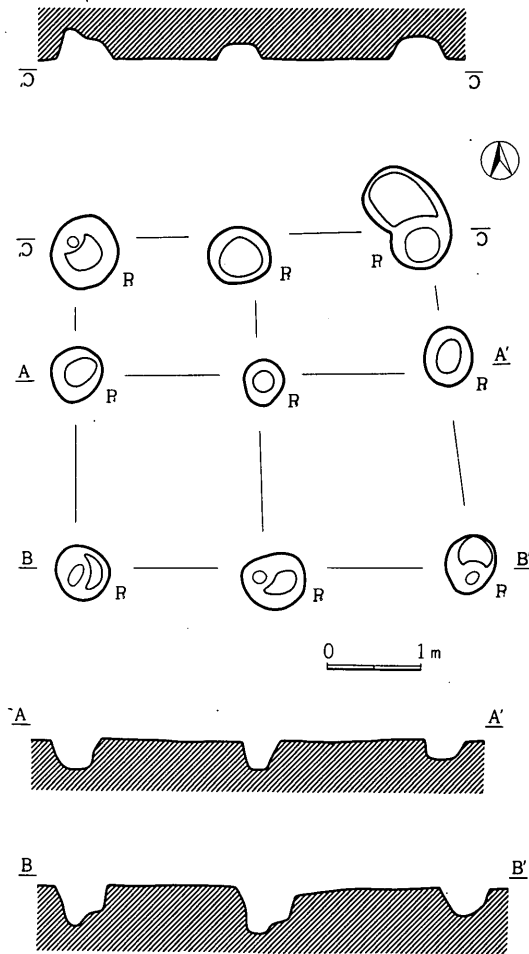
## (24) F-24号掘立柱建物址 第373図

F-24号掘立柱建物址は、第I区ス-41グリッドにおいて検出された。

F-24は、2間×2間(4.1m×3.8m)の掘立柱建物址で、柱間は、 $P_4 \cdot P_5$ 間で2.0m、 $P_5 \cdot P_6$ 間で1.7mを測る。主軸方向はN-28°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかったが、その掘り方の底面において柱痕が確認されたものがかいつかあった( $P_4 \cdot P_5 \cdot P_7$ )。それらの柱痕は、10~15cmを測っている。

なお、本址においては遺物はまったく検出されていない。



第374図 F-25号掘立柱建物址実測図(1:80)

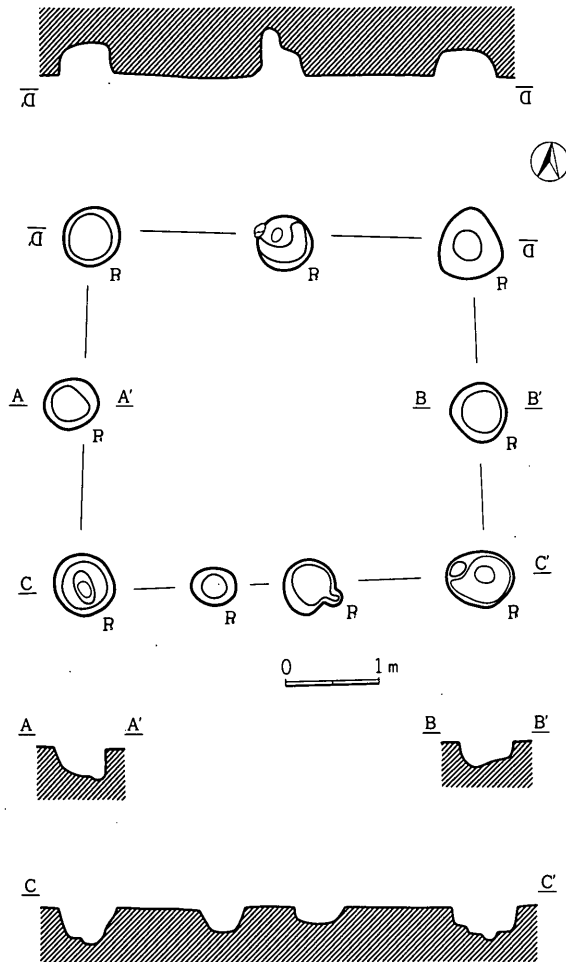
(25) F-25号掘立柱建物址 第374図

F-25号掘立柱建物址は、第I区スー44グリッドにおいて検出された。その一部は、F-8号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-25は、2間×2間(4.1m×3.5m)の総柱の掘立柱建物址で、その柱列は、中央列がやや北列側に寄った位置にある。柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で2.0m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で1.4m、 $P_4 \cdot P_5$ 間で2.0mを測る。主軸方向は、 $N-78^\circ-E$ を指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形で、その埋土は1層のみであった。埋土中において柱痕を捉えることはできなかった。

なお、本址においては、遺物は1点も検出されていない。



第375図 F-26号掘立柱建物址実測図(1:80)



## (26) F-26号掘立柱建物址 第375図

F-26号掘立柱建物址は、第I区セ-43グリッドにおいて検出された。

F-26は、南列3間・北列2間×東西列2間(4.2m×3.5m)の掘立柱建物址で、柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間は2.0m、 $P_3 \cdot P_4$ 間は1.8m、 $P_5 \cdot P_6$ 間1.4m、 $P_6 \cdot P_7$ 間は1.0mを測る。主軸方向はN-77°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかったが、その掘り方の底面において柱痕が捉えられたものがあった( $P_2 \cdot P_5 \cdot P_8$ )。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

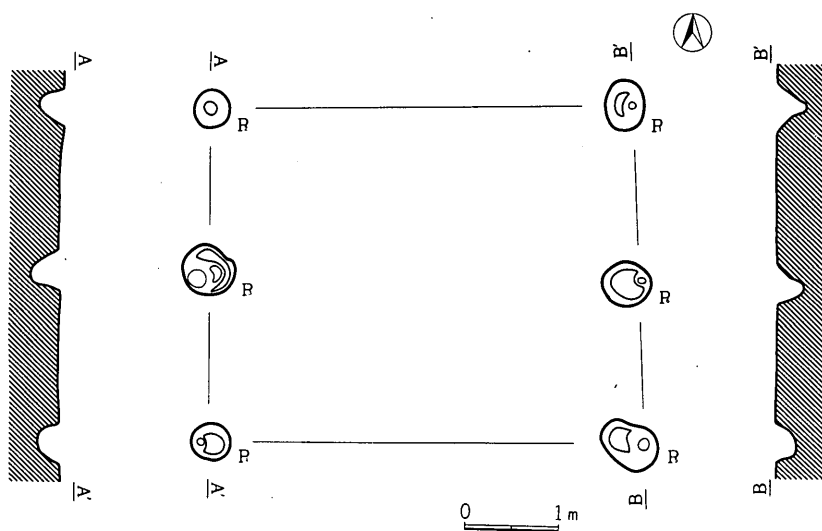
## (27) F-27号掘立柱建物址 第376図

F-27号掘立柱建物址は、第I区セ-44グリッドにおいて検出された。

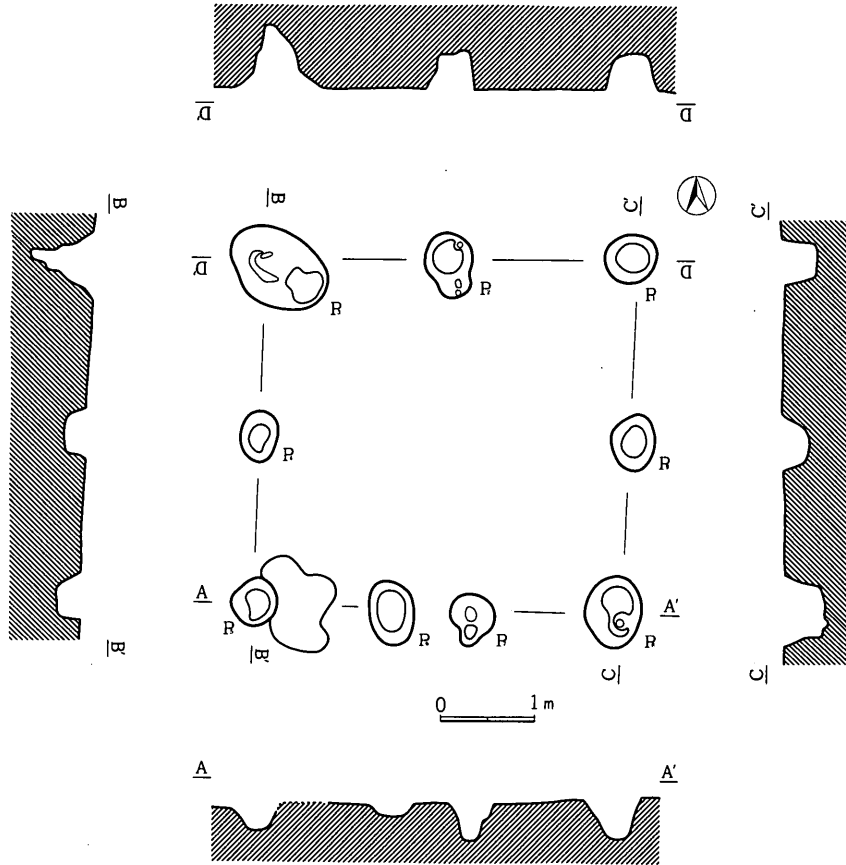
F-27は、2間×1間(4.5m×3.5m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_2 \cdot P_3$ 間で1.7mを測る。主軸方向はN-83°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも小形な円形を呈しており、その埋土は黒色土I層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかった。

なお、本址からは遺物の出土が認められなかった。



第376図 F-27号掘立柱建物址実測図(1:80)



第377図 F-28号掘立柱建物址実測図 (1:80)

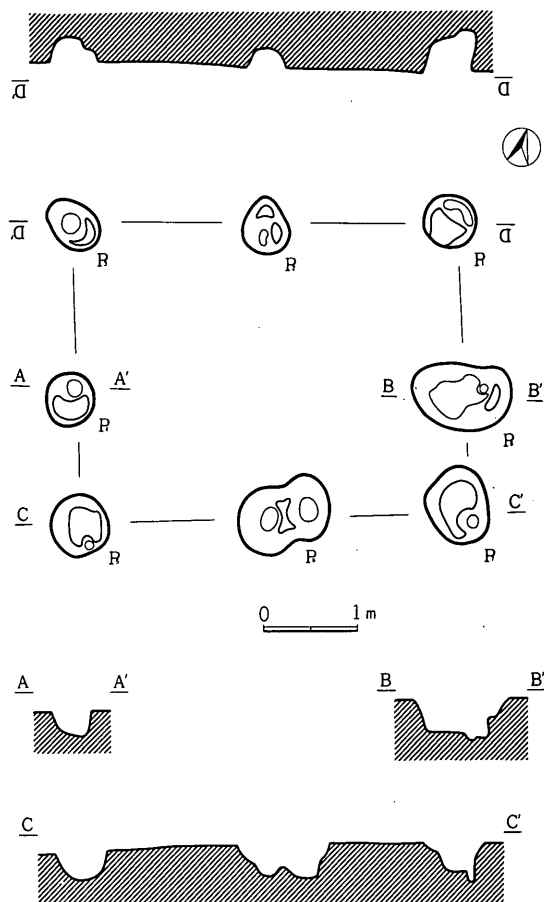
(28) F-28号掘立柱建物址 第377図

F-28号掘立柱建物址は、第I区セ-43・44グリッドにおいて検出された。

F-28は、南列3間・北列2間×東西列2間(3.8m×3.7m)の掘立柱建物址で、柱間は、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間で1.8m、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間で1.8m、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>間で1.5m、P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>間で0.8mを測った。主軸方向はN-82°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは歪んだ楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかったが、掘り方の底面において柱痕の捉えられたものがあった(P<sub>3</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>)。ちなみに柱痕は、P<sub>3</sub>のもので10cmを測った。

なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。



第378図 F-29号掘立柱建物址実測図 (1:80)

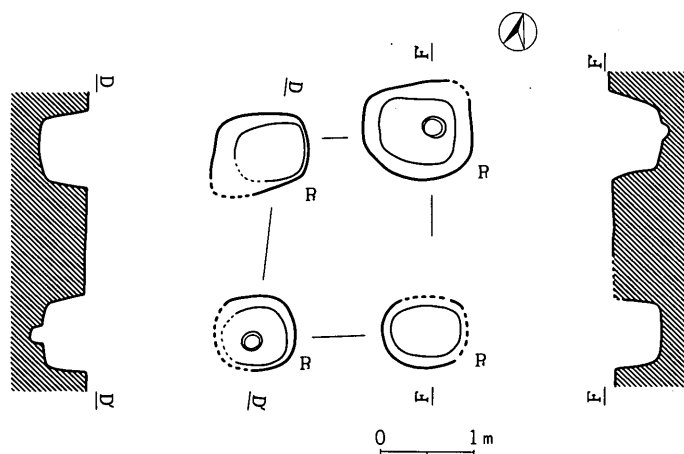
## (29) F-29号掘立柱建物址 第378図

F-29号掘立柱建物址は、第I区セー40グリッドにおいて検出された。

F-29は、2間×2間(4.2m×3.2m)の掘立柱建物址で、柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で2.1m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で1.7m、 $P_7 \cdot P_8$ 間で1.4mを測る。主軸方向は $N-70^\circ-E$ を指す。

各掘り方は、円形ないしは歪んだ楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかったが、その掘り方の底面において柱痕を確認できるものがいくつかあった( $P_1 \cdot P_7 \cdot P_8$ )。また、 $P_6$ はW字状の断面を呈しており、2本の柱をもつものであったかもしれない。

なお、本址の掘り方の埋土中からは須恵器横瓶の破片1片が検出されている。



第379図 F-30号掘立柱建物址実測図 (1:80)

## (30) F-30号掘立柱建物址 第379図

F-30号掘立柱建物址は、第I区シ-42グリッドにおいて検出された。F-30は、F-31・F-33号掘立柱建物址と重複するが、三者の新旧関係は捉えられなかった。

F-30は、1間×1間 (2.0m×1.8m) の掘立柱建物址で、その主軸方向はN-16°-Wを指す。

その各ピットの掘り方は、丸味を帯びた方形を呈するもので、掘り方の埋土はロームと黒色土が混じるものであった。埋土上面においては柱痕の検出ができなかったが、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>については掘り方の底面において柱痕が確認された。両者の柱痕は、およそ20cm前後を測った。

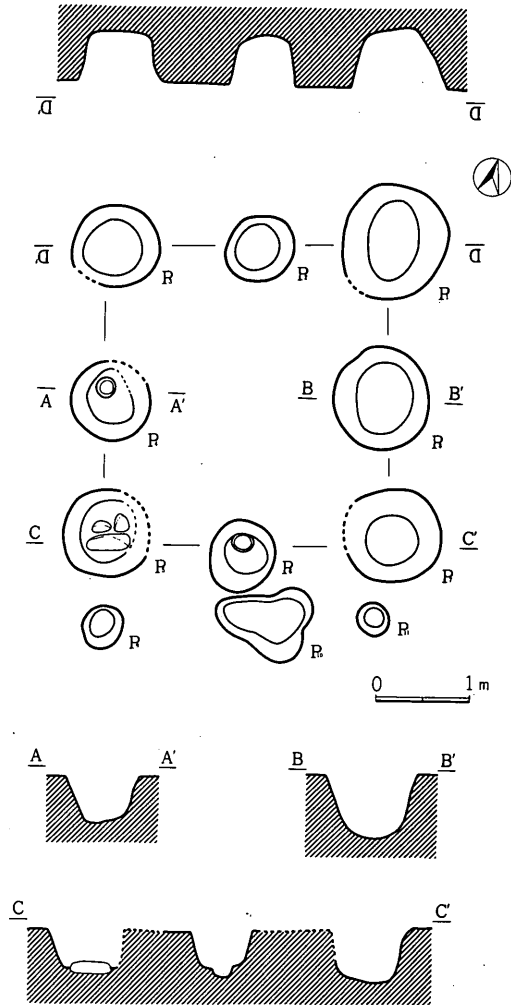
なお、本址の掘り方の埋土中からは、叩き目のみれる須恵器甕の破片と、須恵器坏の破片数片が検出されている。

## (31) F-31号掘立柱建物址 第380図

F-31号掘立柱建物址は、第I区シ-21グリッドにおいて検出された。F-31は、F-30・F-33号掘立柱建物址と重複するが、三者の新旧関係は捉えられなかった。

F-31は、2間×2間 (3.0m×3.0m) の掘立柱建物址で、柱間はP<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>間で1.5m、P<sub>9</sub>・P<sub>6</sub>間で1.5mを測る。本址の南列に平行してP<sub>9</sub>~P<sub>11</sub>がみられたが、これらは本址に付随する廂の柱穴かとも考えられる。主軸方向はN-16°-Wを指す。

F-31の各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈するもので、その埋土はロームと黒色土が混じるものであった。埋土上面においての柱痕の把握は困難であったが、その底面において柱痕が



第380図 F-31号掘立柱建物址実測図 (1:80)

確認されたものがあつた。因みにその柱痕は20cm程度を測つた。なお、P<sub>5</sub>の掘り方の底面にあつては、礎石と考えられる偏平な礫3点が据え置かれており注意される。

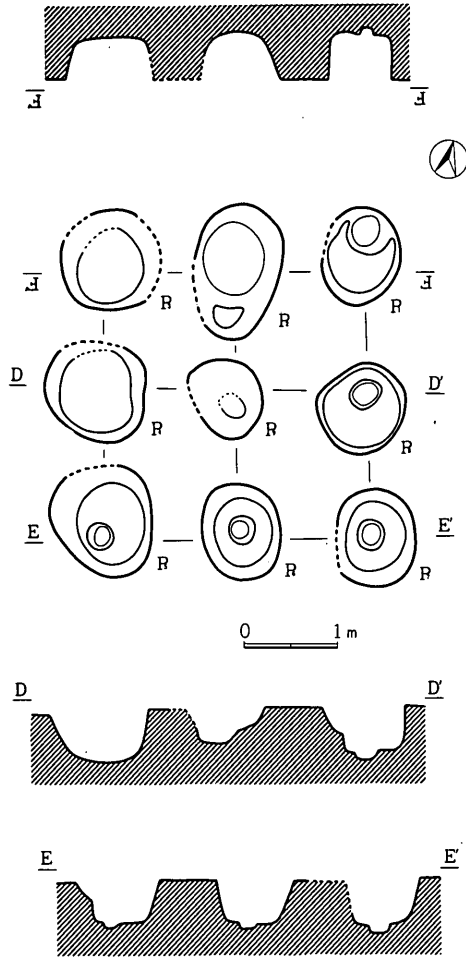
本址のピットの掘り方の埋土中からは、叩き目のみられる須恵器甕の破片1点が検出されている。

(32) F-32号掘立柱建物址 第381図

F-32号掘立柱建物址は、第I区シ-42グリッドにおいて検出された。F-32は、F-33・F-36号掘立柱建物址と重複関係にあるが、三者の新旧関係は捉えられなかつた。

F-32は、2間×2間(2.9m×2.9m)の総柱の掘立柱建物址で、柱間は、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>間で1.5

2 掘立柱建物址

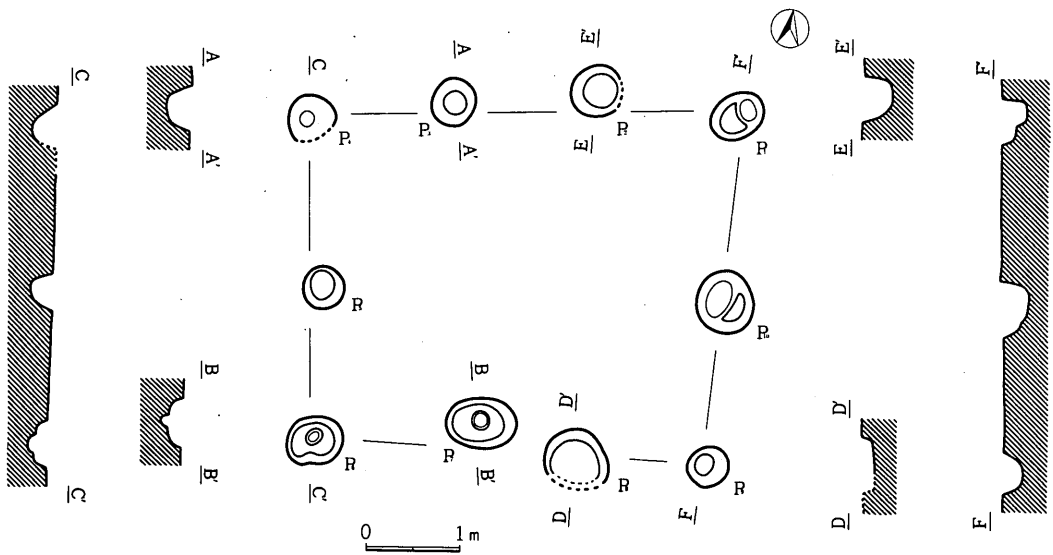


第381図 F-32号掘立柱建物址実測図 (1:80)

m、 $P_6 \cdot P_7$ 間で1.4m、 $P_7 \cdot P_8$ 間で1.5m、 $P_6 \cdot P_9$ 間で1.3mを測る。主軸方向はN-16°-Wを指す。

F-32の各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土はロームと黒色土が混じるものであった。埋土上面においての柱痕の把握は困難であったが、その底面において柱痕が確認されたものがいくつかあった ( $P_5 \cdot P_6 \cdot P_7 \cdot P_8 \cdot P_9$ )。ちなみにそれらの柱痕は、30cm程度を測る太いものであった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。



第382図 F-33号掘立柱建物址実測図 (1:80)

## (33) F-33号掘立柱建物址 第382図

F-33号掘立柱建物址は、第I区シー42グリッドにおいて検出された。F-33は、F-30・F-31号掘立柱建物址と重複するが、三者の新旧関係は捉えられなかった。

F-33は、3間×2間(4.7m×3.3m)の掘立柱建物址であるが、 $P_7$ はややずれた配置をみせ、また南列は北列にくらべ柱間距離が短く、全体的にやや歪んだプランを見せている。因みに柱間は、 $P_3$ ・ $P_4$ 間で1.6m、 $P_4$ ・ $P_5$ 間で1.7m、 $P_6$ ・ $P_7$ 間で1.8mを測る。主軸方向はN-16°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土上面においては、柱痕は捉えられなかった。

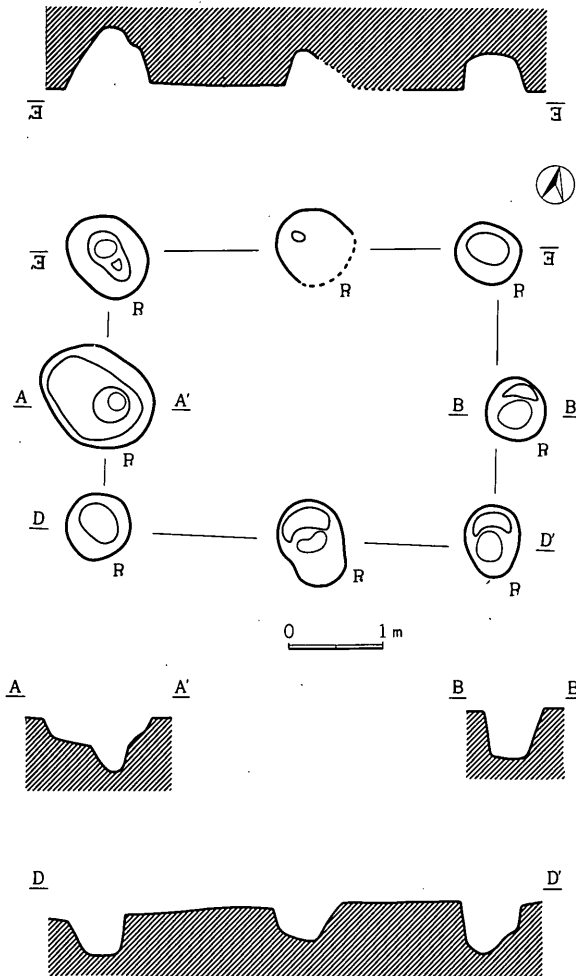
なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。

## (34) F-34号掘立柱建物址 第383図

F-34号掘立柱建物址は、第I区セー40グリッドにおいて検出された。

F-34は、2間×2間(4.1m×2.9m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_3$ ・ $P_4$ 間で1.6m、 $P_5$ ・ $P_6$ 間で1.8mを測る。主軸方向はN-77°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土上面においては柱痕は確認されなかったが、その掘り方の底面において柱痕の



第383図 F-34号掘立柱建物址実測図 (1:80)

確認されたものがいくつかあった ( $P_3 \cdot P_4$ )。

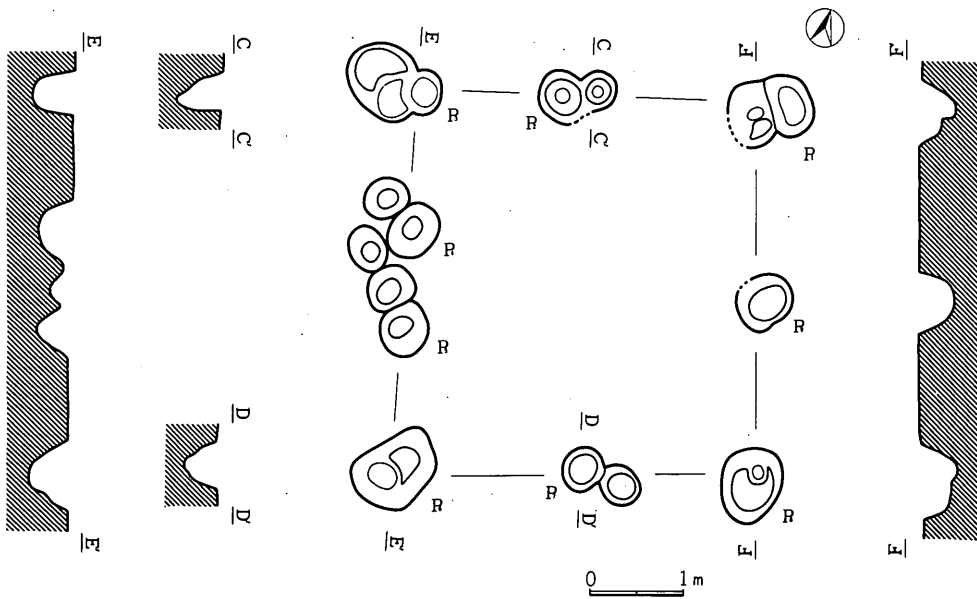
なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。

(35) F-35号掘立柱建物址 第384図

F-35号掘立柱建物址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。F-35は、F-40号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-35は、基本的には西列3間・東列2間×南北列2間 (3.8m×3.8m)の掘立柱建物址であるが、 $P_2 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot P_6$ に近接して不規則にピットがみられる。柱間は、 $P_6 \cdot P_7$ 間で2.1m、 $P_8 \cdot P_9$ 間で1.8mを測る。主軸方向はN-19°-Wを指す。





第384図 F-35号掘立柱建物址実測図 (1:80)

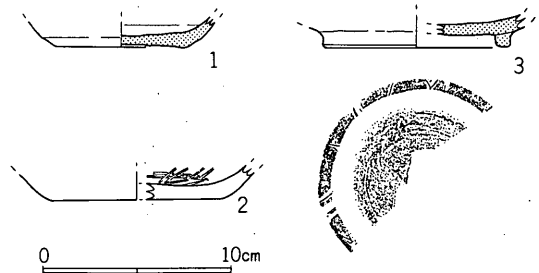
各ピットの掘り方は、おおよそ円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は捉えられなかった。

なお、本址ピットの掘り方の埋土中からは、須恵器甕の破片一点と土師器甕の破片数十点が出土している。

(36) F-36号掘立柱建物址 第385・386図

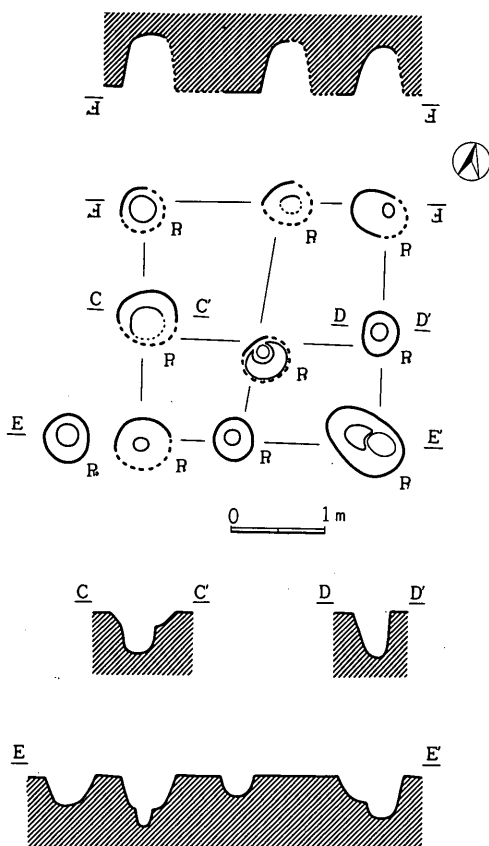
F-36号掘立柱建物址は、第I区シー42グリッドにおいて検出された。F-36は、F-32・F-33号掘立柱建物址と重複するが、三者の新旧関係は捉えられなかった。

F-36は、2間×2間(2.5m×2.5m)の総柱の掘立柱建物址であるが、中央のピットP<sub>9</sub>はややずれた位置にあり、また南列の延長線上にはP<sub>10</sub>がみられるものである。因みに柱間は、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間で1.2m、P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>間で1.5mを測る。主軸方向はN-16°-Wを指す。



第385図 F-36号掘立柱建物址出土遺物 (1:4)

2 掘立柱建物址



第386図 F-36号掘立柱建物址実測図 (1:80)

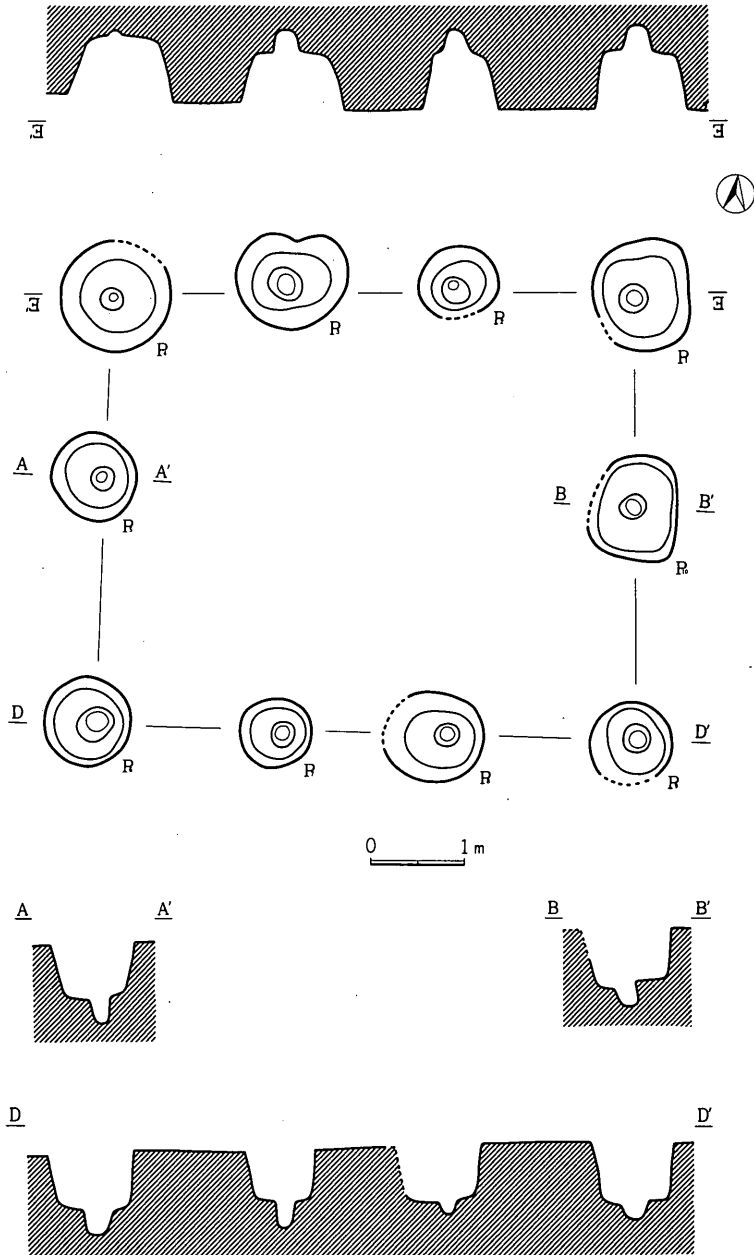
第156表 F-36号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	- < 6.8	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色 (N4/1)
2 (回)	坏	- < 9.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部切り離しの後、手持ちヘラケズリ 内面 ヘラミガキ (ロクロ回転不明)	胎土は砂粒を含みに ぶい黄橙色 (10YR7/3)
3 (回)	坏 (須)	- < 10.0	底部には高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選されず 砂粒を多く含み 灰色 (10Y5/1)

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中にある柱痕は捉えられなかったが、その底面において柱痕が確認されたものがあった(P<sub>5</sub>)。

本址のピットの掘り方の埋土中からは、須恵器坏・甕、土師器坏、馬歯が検出されている。

1は須恵器坏で、回転糸切りによる底部をみせるものである。また、2は土師器坏の底部で切



第387図 F-37号掘立柱建物址実測図 (1:80)

り離しの後全面に手持ちへラケズリがなされている。馬歯は1点のみの検出である。

なお、本址の時期は、1・2遺物が存在した時期と同時期かそれ以降と考えられる。また、馬歯は逆に、本址の存在した以前に生存していた馬のものとみることができる。

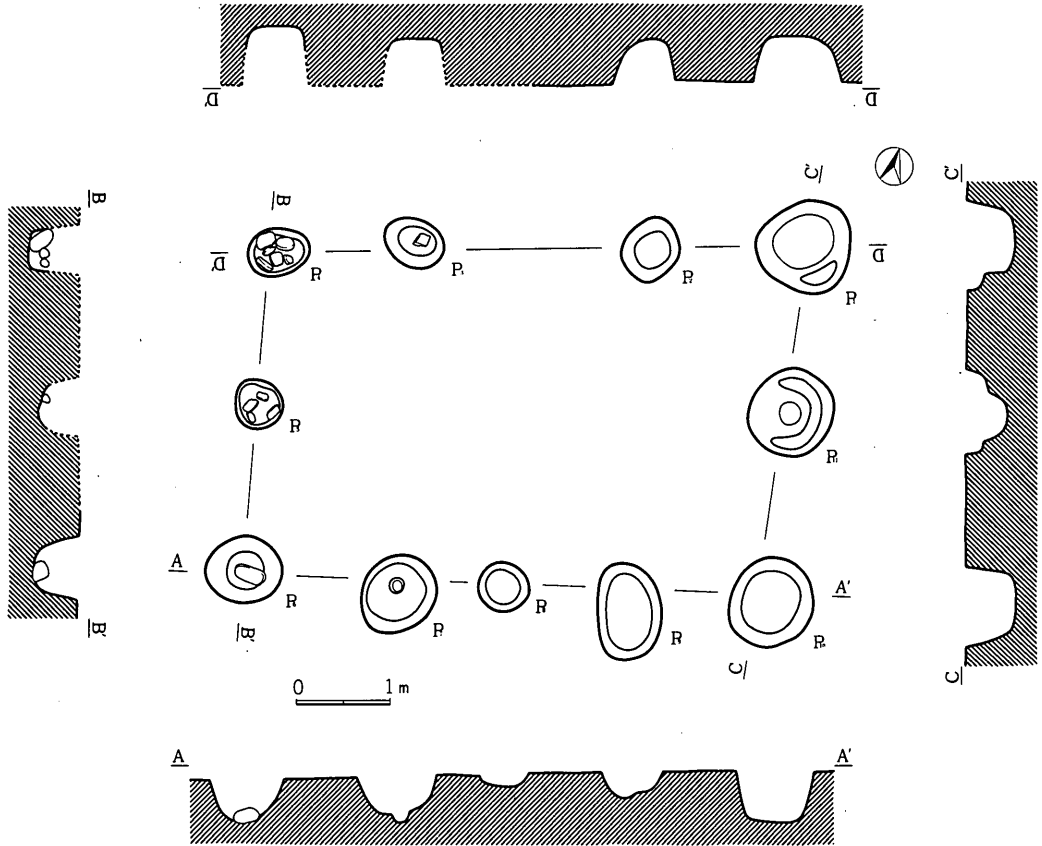
(37) F-37号掘立柱建物址 第387図

F-37号掘立柱建物址は、第I区セ-43グリッドにおいて検出された。F-37は、F-45・F-46号掘立柱建物址と重複するが、三者の新旧関係は捉えられなかった。

F-37は、3間×2間(5.6m×4.5m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.9m、 $P_4 \cdot P_5$ 間で1.9m、 $P_6 \cdot P_7$ 間で2.0mを測る。主軸方向は、N-79°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、 $P_1 \cdot P_{10}$ が丸味をおびた方形を呈し、それ以外はいずれも円形を呈するもので、その掘り方の埋土はロームと黒色土が混じるものであった。埋土中においては柱痕は確認できなかったが、掘り方の底面において各ピットとも柱痕が確認された。各柱痕は25~30cm程の径を測るもので、その並びは四方の列ともに直線的にそろっていた。

本址のピット埋土中からは、須恵器甕の破片2点と土師器甕の破片1点が検出されている。



第388図 F-38号掘立柱建物址実測図(1:80)

## (38) F-38号掘立柱建物址 第388図

F-38号掘立柱建物址は、第I区ス-42グリッドにおいて検出された。F-38は、H-11号住居址と重複するが、本址のほうが新しい時期の建物として捉えられた。また本址は、H-4号住居址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-38は、南列4間・北列3間×東西列2間(5.6m×3.4m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.6m、 $P_2 \cdot P_3$ 間で2.5m、 $P_4 \cdot P_5$ 間で1.6m、 $P_7 \cdot P_8$ 間で1.1mを測った。主軸方向は、 $N-70^\circ-E$ を指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認できなかったが、掘り方の底面において柱痕が確認されたものがある( $P_7$ )。また、礎石と解してよいものかどうかかわからないが、 $P_3 \cdot P_4 \cdot P_5 \cdot P_6$ の底面には礫がみられた。 $P_3 \cdot P_5$ は各1個、 $P_4$ が6個、 $P_5$ は4個の礫が認められた。

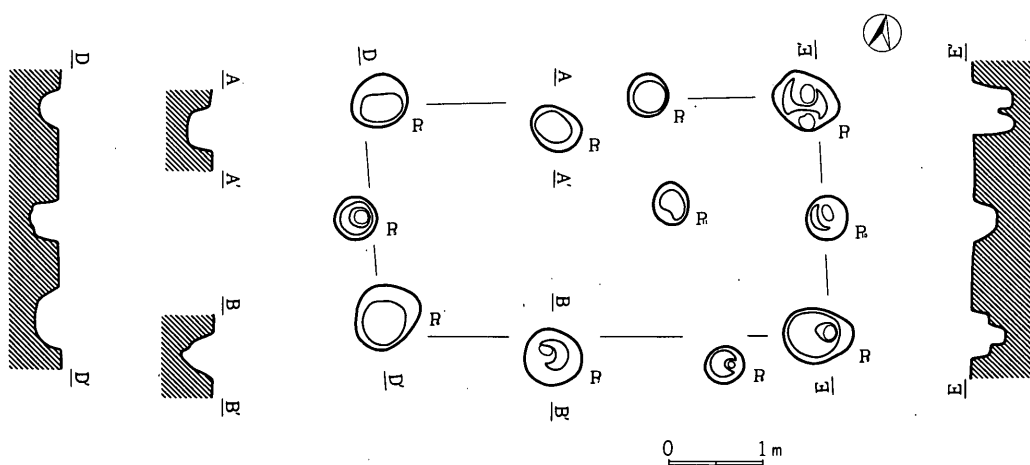
本址の $P_7$ は埋土中からは、叩き目のみられる須恵器片一片が出土している。

## (39) F-39号掘立柱建物址 第389図

F-39号掘立柱建物址は、第I区ス-42グリッドにおいて検出された。

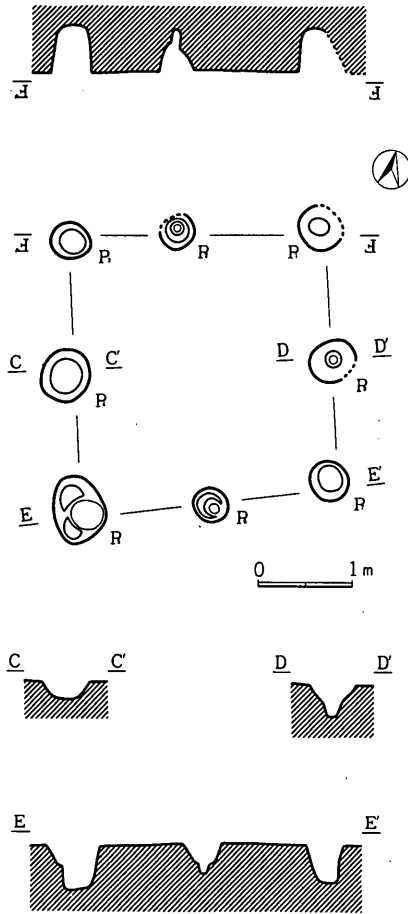
F-39は、3間×2間(4.8m×2.5m)の掘立柱建物址であるが、全体的に柱列のそろわないやや不規則ともいえるプランを呈している。因みに柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で1.7m、 $P_9 \cdot P_{10}$ 間で1.2mを測る。なお、プラン内にみられる $P_{11}$ は、本址に伴うかどうかはわからなかった。本址の主軸方向は $N-76^\circ-E$ を指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中



第389図 F-39号掘立柱建物址実測図(1:80)

2 掘立柱建物址



第390図 F-40号掘立柱建物址実測図 (1:80)

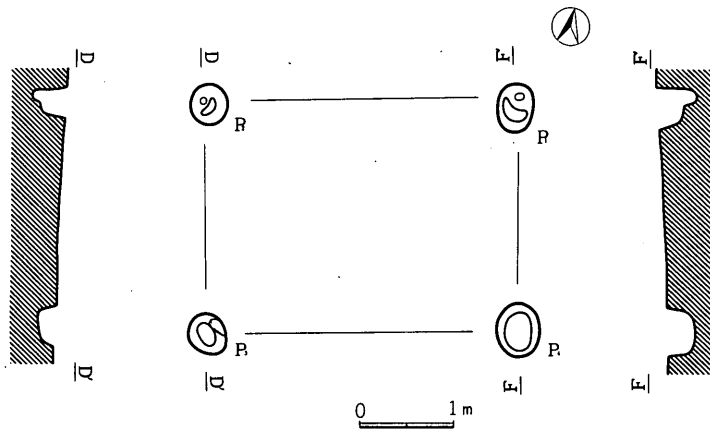
にあつては柱痕は捉えられなかったが、埋り方の底面において柱痕の捉えられたものがいくつかあった (P<sub>1</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>9</sub>)。それらの柱痕は20cm前後を測るものであった。

なお、本址においては遺物は検出されていない。

(40) F-40号掘立柱建物址 第390図

F-40号掘立柱建物址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。本址は、F-35号掘立柱建物址と重複するが両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-40は、2間×2間 (2.9m×2.7m) の掘立柱建物址で、柱間はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間で1.5m、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>間で1.3m、P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>間で1.3mを測った。主軸方向はN-19°-Wを指す。



第391図 F-41号掘立柱建物址実測図(1:80)

## (41) F-41号掘立柱建物址 第391図

F-41号掘立柱建物址は、第I区セ-41グリッドにおいて検出された。

F-41は、1間×1間(3.4m×2.5m)の掘立柱建物址として捉えられたが、あるいはその柱列が南にさらに1間延び2間×1間のプランとなることも想定できる。その主軸方向はN-73°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は捉えられなかったが、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>はその底面に柱痕が残っていた。いずれも10~15cm程度の径を測るものであった。

なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。

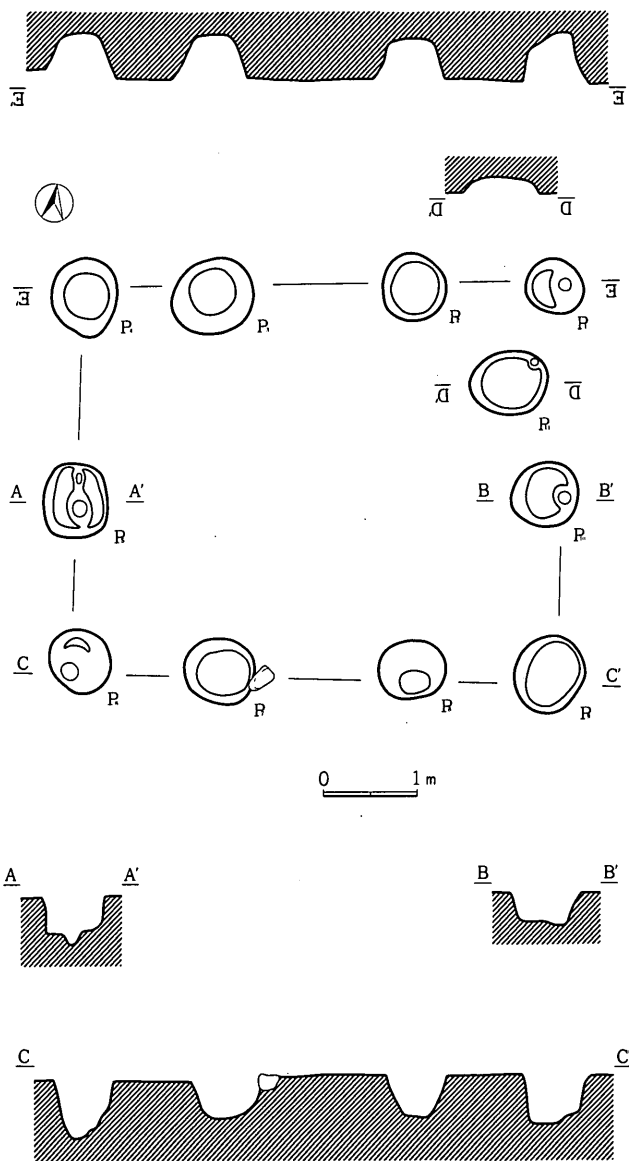
## (42) F-42号掘立柱建物址 第392図

F-42号掘立柱建物址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。本址は、F-83・F-84号掘立柱建物址と付随するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-42は、3間×2間(5.2m×4.2m)の掘立柱建物址である。東列のP<sub>11</sub>はややずれた位置にあり、本址に付随するものかどうかかわからない。柱間は、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間で1.6m、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>間で1.7m、P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>間で2.1mを測る。主軸方向はN-72°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかったが、その掘り方の底面において柱痕が捉えられたものがあった。(P<sub>2</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>)。それらの柱痕は10~15cm程度の径を測った。

なお、本址においては遺物はまったく検出されていない。



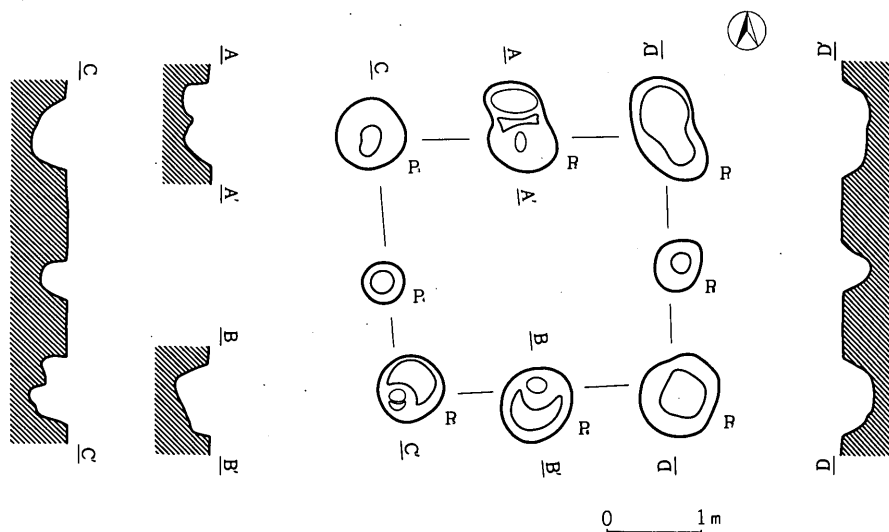
第392図 F-42号掘立柱建物址実測図 (1:80)

本址のピットの埋土中からは、内面黒色研磨のなされた土師器破片と土師器甕破片数点が出土している。

(43) F-43号掘立柱建物址 第393図

F-43号掘立柱建物址は、第I区チ-36グリッドにおいて検出された。





第393図 F-43号掘立柱建物址実測図 (1:80)

F-43は、2間×2間 (3.1m×2.6m) の掘立柱建物址で、柱間は $P_4 \cdot P_5$ 間で1.2m、 $P_5 \cdot P_6$ 間で1.5mを測る。主軸方向は $N-12^\circ-W$ を指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。その埋土中においては柱痕は捉えられなかった。

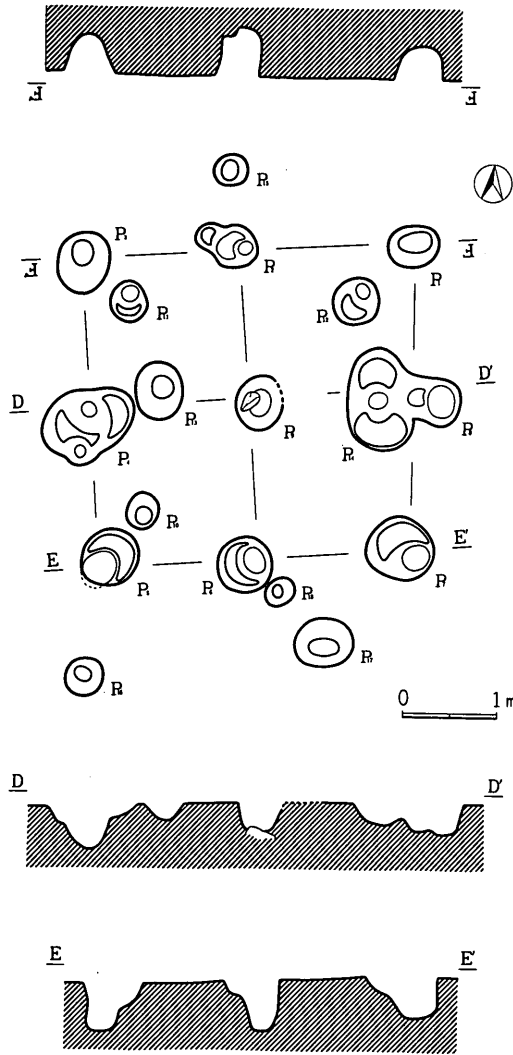
なお、本址のピット埋土中からは遺物は検出されなかった。

#### (44) F-44号掘立柱建物址 第394図

F-44は、2間×2間 (3.4m×3.3m) の総柱の掘立柱建物址で、さらにそのプラン内には $P_{10} \sim P_{14}$ 、プラン外には $P_{15} \sim P_{18}$ がみられるが、これらのすべてのピットが本址に付随するものかどうかはわからない。ただし、その配列性から $P_{10} \sim P_{15}$ のピットは伴うものと見てよいかもしれない。柱間は $P_2 \cdot P_3$ 間で1.7m、 $P_4 \cdot P_5$ 間で1.7m、 $P_5 \cdot P_6$ 間で1.6m、 $P_2 \cdot P_9$ 間で1.6mを測った。主軸方向は $N-9^\circ-W$ を指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形ないし楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。その埋土中であっては柱痕は捉えられなかった。

なお、本址のピット埋土中からは須恵器のかえりのある蓋の破片が出土している。したがって本址の所産期は、かえりのある蓋のみられる時期と併行するかそれに後行する時期とみられる。



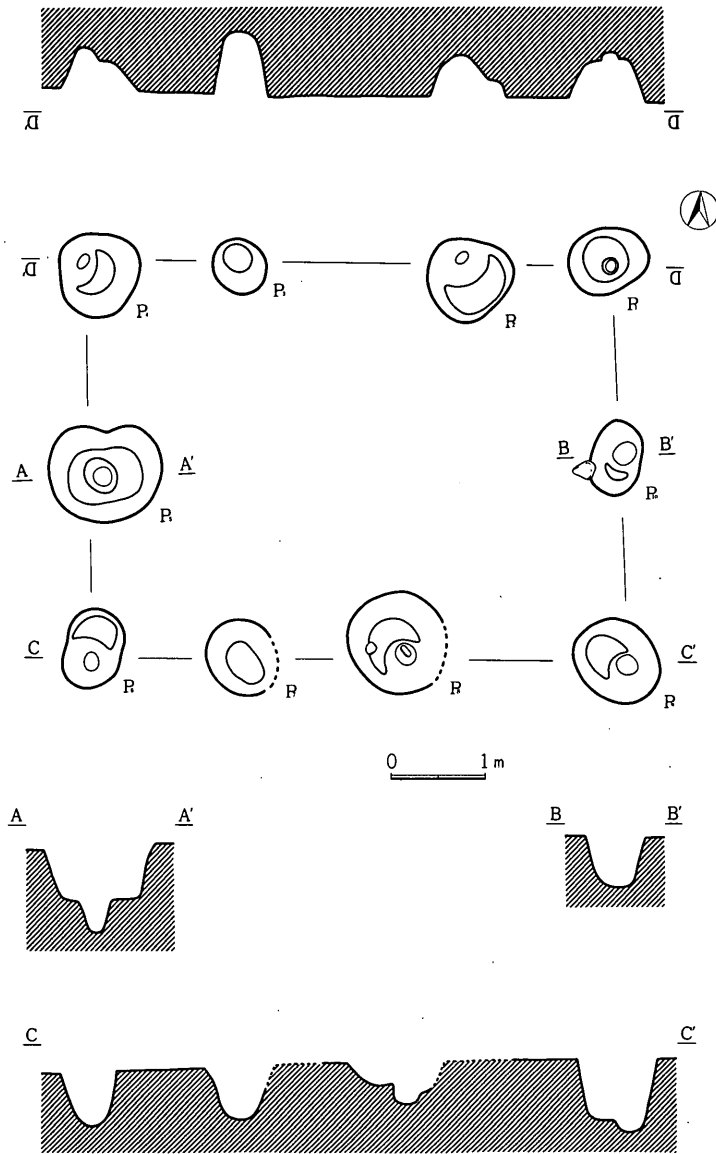
第394図 F-44号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(45) F-45号掘立柱建物址 第395図

F-45号掘立柱建物址は、第I区セ-43グリッドにおいて検出された。本址は、F-37号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-45は、3間×2間(5.6m×4.2m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.6m、 $P_2 \cdot P_3$ 間で2.4m、 $P_4 \cdot P_5$ 間で2.3m、 $P_6 \cdot P_9$ 間で2.3mを測る。主軸方向はN-78°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土はロームと黒色土が混じったものであった。その埋土中であっては柱痕は捉えられなかったが、いくつかはその底面において柱痕が確認できた。因みにその柱痕は15~30cm前後を測るものであった。

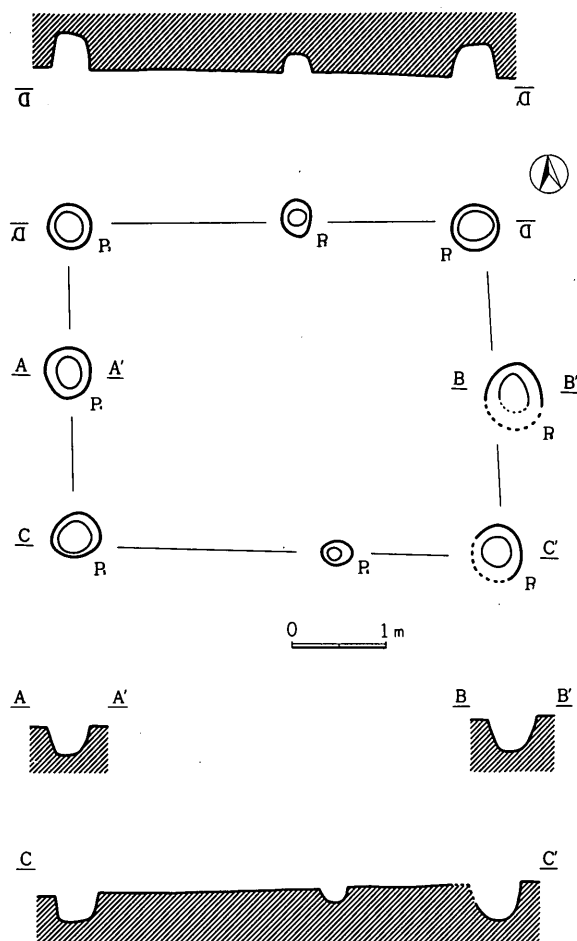


第395図 F-45号掘立柱建物址実測図 (1:80)

なお、本址においては遺物は検出されなかった。

(46) F-46号掘立柱建物址 第396図

F-46号掘立柱建物址は、第I区セ-43・44グリッドにおいて検出された。本址は、F-37号掘立柱建物址と重複するが、その新旧関係は把握できなかった。



第396図 F-46号掘立柱建物址実測図 (1:80)

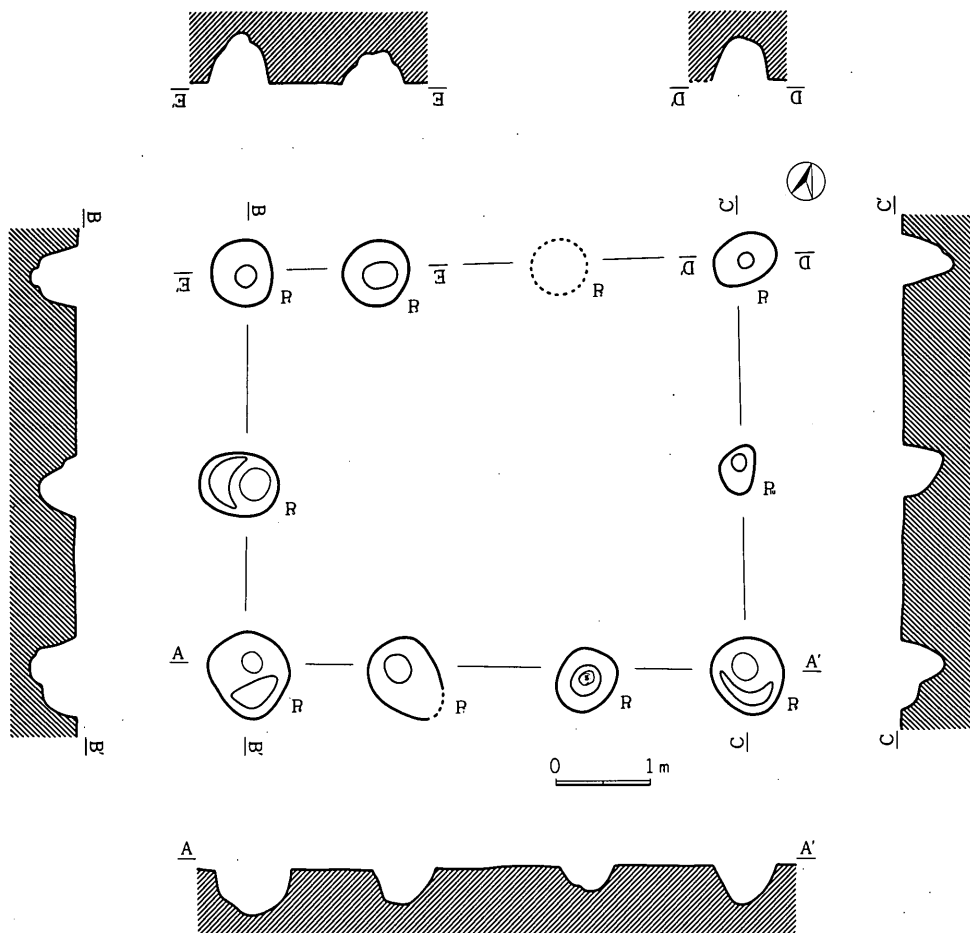
F-46は、2間×2間 (4.3m×3.3m) の掘立柱建物址で、その柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で1.9m、 $P_2 \cdot P_3$ 間で2.4m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で1.6mを測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈し、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

#### (47) F-47号掘立柱建物址 第397図

F-47号掘立柱建物址は、第I区ス-42グリッドにおいて検出された。F-47は、H-17号住居址と重複関係をもつが、H-17の床面下にその $P_1 \cdot P_{10}$ のプランがあり、本址がF-17に先行



第397図 F-47号掘立柱建物址実測図(1:80)

するものとして捉えられた。また、その南列はF-48号掘立柱建物址と重複するが両者の新旧関係は捉えられなかった。なお、本址のP<sub>2</sub>は風倒木の攪乱により確認されなかった。

F-47は、3間×2間(5.3m×4.3m)の掘立柱建物址で、その柱間はP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間で1.5m、P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>間で2.2m、P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>間で2.0mを測る。主軸方向はN-66°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土土中においては柱痕は捉えられなかったが、その底面において柱痕が確認されたのがいくつかある(P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>)。それらの柱痕は20cm弱を測るものであった。

なお、本址のピット掘り方の埋土中からは、須恵器甕の破片が出土している。これは詳しい時期を示す特徴的な遺物ではないが、本址の時期はこの遺物の所産期以降・H-17の所産期未満に限定されよう。

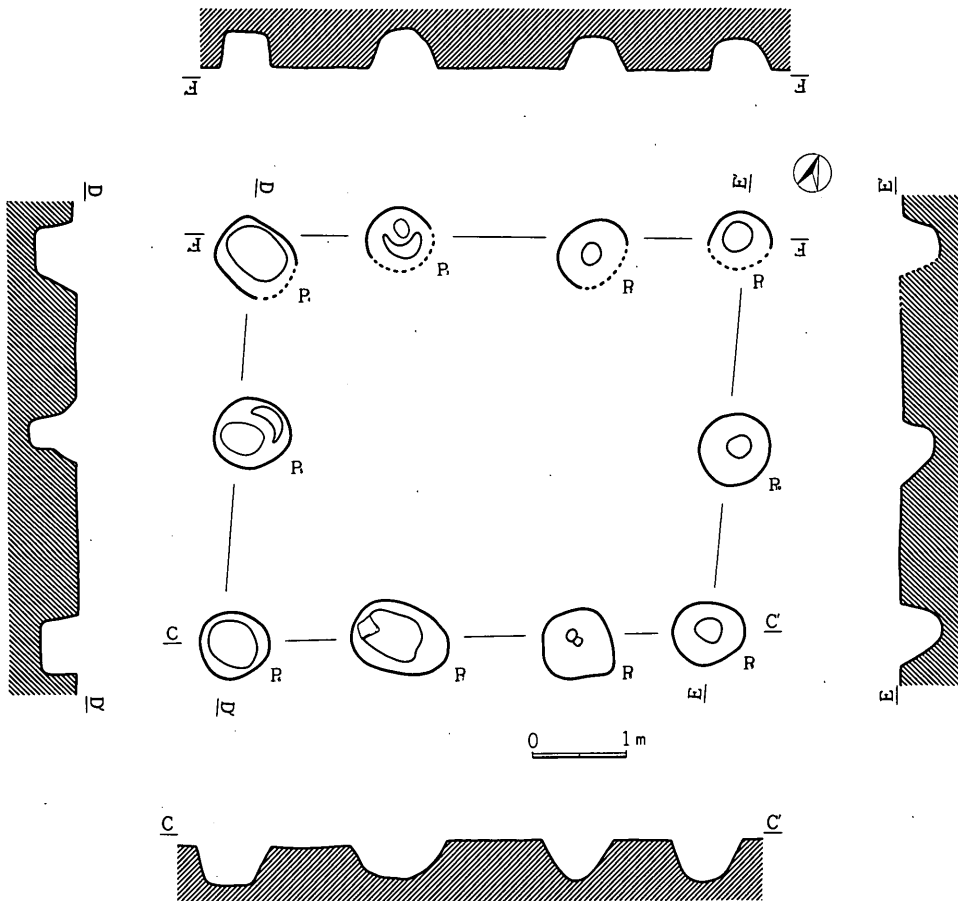
(48) F-48号住居址 第398・399図

F-48号掘立柱建物址は、第I区ス-42グリッドにおいて検出された。F-48は、F-47・F-49号掘立柱建物址と重複関係にあるが、三者の新旧関係は捉えられなかった。

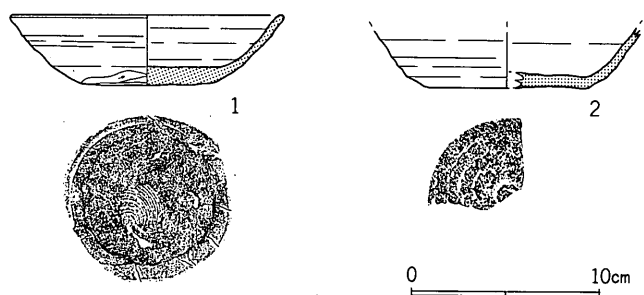
F-48は、3間×2間(5.2m×4.1m)の掘立柱建物址で、その柱間はP<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>間で1.4m、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>間で2.3m、P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>間で2.0mを測った。主軸方向はN-69°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は捉えられなかった。

なお、本址のP<sub>1</sub>の埋土中からは、図示した1・2の須恵器片が検出されている。1は、回転糸切りの後中央を除き全面に手持ちヘラケズリのなされた底部をみせるもので、2は回転ヘラキリ



第398図 F-48号掘立柱建物址実測図(1:80)



第399図 F-48号掘立柱建物址実測図(1:4)

第157表 F-48号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	(14.6) 3.7 6.8	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切りの後、中央を除き全面手持ちヘラズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (7.5Y7/1)
2 (回)	坏 (須)	— — (8.7)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 体部ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (7.5Y7/1)

による底部をみせるものである。このなかで1の坏は器形の6割程度遺存しており、埋土中に紛れ込んだものというよりは、恣意的に埋め込まれたものかもしれない。

本址の所産期は少なくともこれらの遺物の特徴が見出せる時期以降とみなせよう。

#### (49) F-49号掘立柱建物址 第400・401図

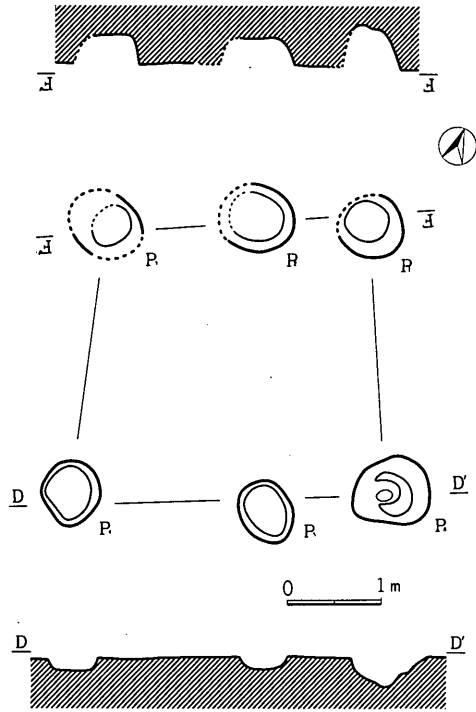
F-49号掘立柱建物址は、第I区ス-42グリッドにおいて検出された。F-49は、F-48号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-49は、2間×1間(3.3m×2.9m)の掘立柱建物址であるが、西列のP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>はややずれた配置をみせている。柱間はP<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>間で1.9m、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>間で1.4mを測る。主軸方向はN-69°-Eを指す。

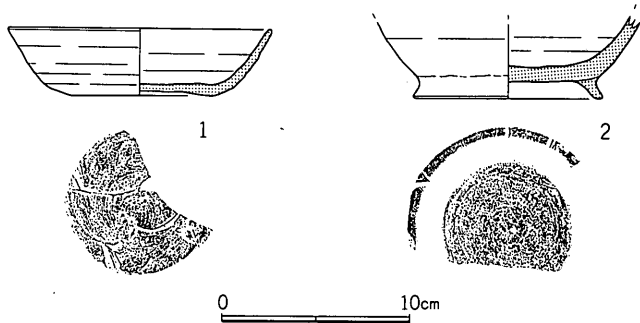
各ピットの掘り方は、概ね円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認されなかった。

なお、本址のピット埋土中からは、1の回転糸切りによる底部をみせる須恵器坏、2の回転ヘラケリによる須恵器長頸瓶底部(高台付)、その他「く」の字状に外反する土器器口縁部破片等が出土している。殊に1・2は、比較的大きな破片であり埋土中に紛れ込んだものというよりは、恣意的に埋め込まれたものかもしれない。

2 掘立柱建物址



第400図 F-49号掘立柱建物址実測図 (1:80)



第401図 F-49号掘立柱建物址出土遺物 (1:4)

第158表 F-49号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	坏 (須)	14.0 3.5 7.5	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色を呈する。 (10Y5/1)
2 (回)	長頸瓶 (須)	— — (10.0)	底部には高台が貼り付けられる。	外面 胴部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 灰色 (N5/0)



いずれにしても本址の所産期は、1・2のような遺物の特徴が見出せる時期以降と考えられよう。

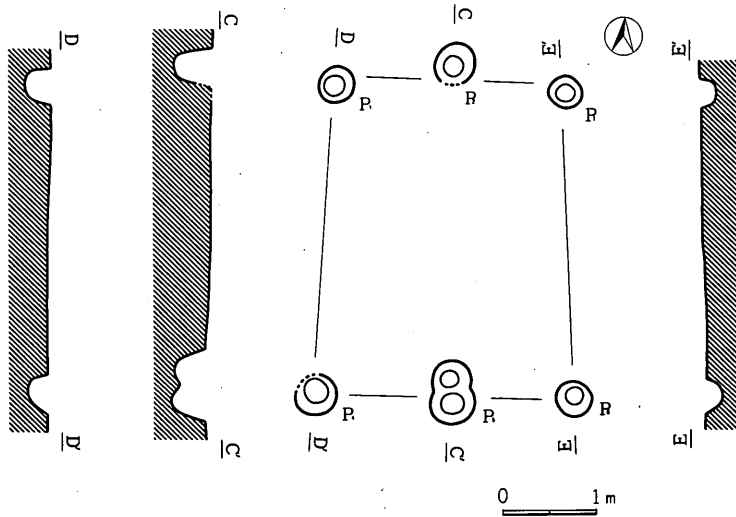
### (50) F-50号掘立柱建物址 第402図

F-50号掘立柱建物址は、第I区セ-43グリッドにおいて検出された。本址は、F-53号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-50は、2間×1間(3.2m×2.7m)の掘立柱建物址で、その柱間は、 $P_4 \cdot P_5$ 間で1.4mを測る。主軸方向はN-13°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しているが、 $P_5$ のみ蕨形を呈し主柱とそれに付随する柱の二者の存在を暗示させた。なお、掘り方の埋土はI層のみで、そのなかには柱痕は捉えられなかった。

本址においては、遺物は一点も検出されなかった。



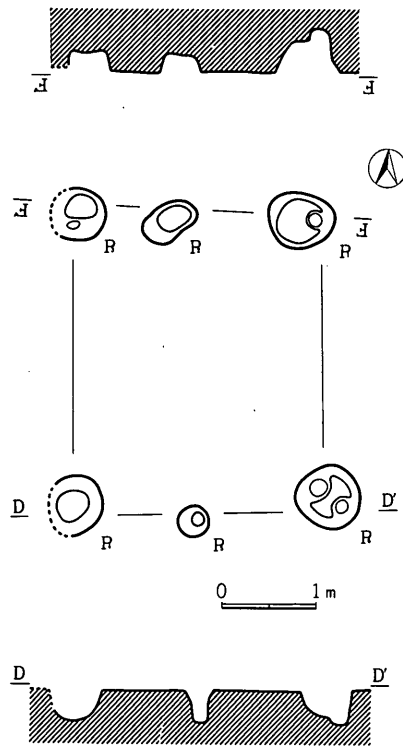
第402図 F-50号掘立柱建物址実測図(1:80)

### (51) F-51号掘立柱建物址 第403図

F-51号掘立柱建物址は、第I区ス-42グリッドにおいて検出された。

F-51は、2間×1間(2.9m×2.6m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.5m、 $P_5 \cdot P_6$

2 掘立柱建物址



第403図 F-51号掘立柱建物址実測図 (1 : 80)

間で1.5mを測る。主軸方向はN-9°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、埋土中においては柱痕は捉えられなかった。

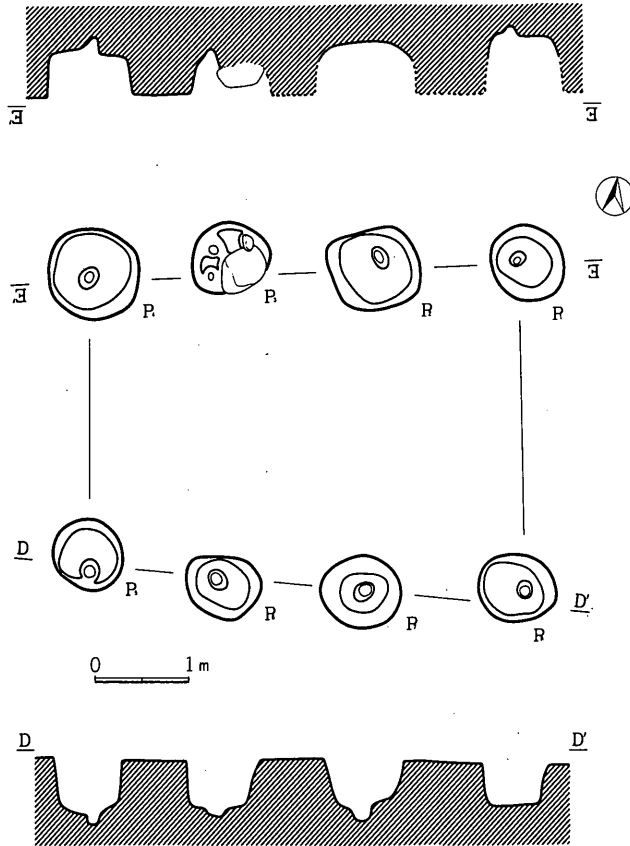
なお、本址のピット中からは遺物は検出されなかった。

(52) F-52号掘立柱建物址 第404図

F-52号掘立柱建物址は、第I区ソ-40グリッドにおいて検出された。本址は、H-43号住居址と重複関係にあり、両者の新旧関係は微妙であったが、一応本F-52がH-43に後出するものとして捉えられた。

F-52は、3間×1間の掘立柱建物址で、北列4.4m・南列4.6m・東列3.5m・西列3.1mと西列が東列に比べ0.4m程短く、やや歪んだプランを呈している。柱間はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間で1.5m、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>間で1.4m、P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>間で1.7mを測る。主軸方向は、N-80°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈し、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中にある



第404図 F-52号掘立柱建物址実測図 (1:80)

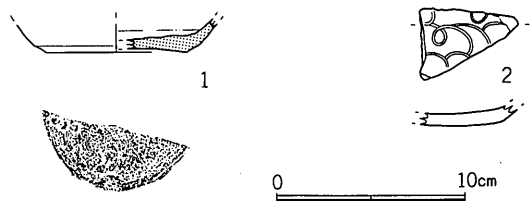
ては柱痕は捉えられなかったが、いずれのピットもその底面において柱痕が確認できた。ちなみにP<sub>7</sub>の柱痕は20cm前後を測った。

なお、本址のピット中からは遺物は検出されていない。

(53) F-53号掘立柱建物址 第405・406図

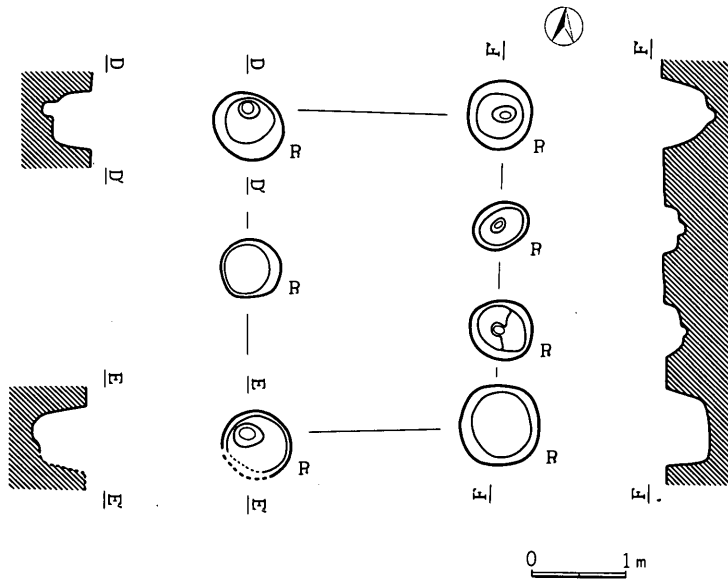
F-53号掘立柱建物址は、第I区セー43グリッドにおいて検出された。F-53は、F-21・F-22号掘立柱建物址と重複するが、三者の新旧関係は捉えられなかった。

F-53は、東列3間・西列2間×南北列1間(3.4m×2.7m)の掘立柱建物址



第405図 F-53号掘立柱建物址出土遺物 (1:4)

2 掘立柱建物址



第406図 F-53号掘立柱建物址実測図 (1:80)

第159表 F-53号掘立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉

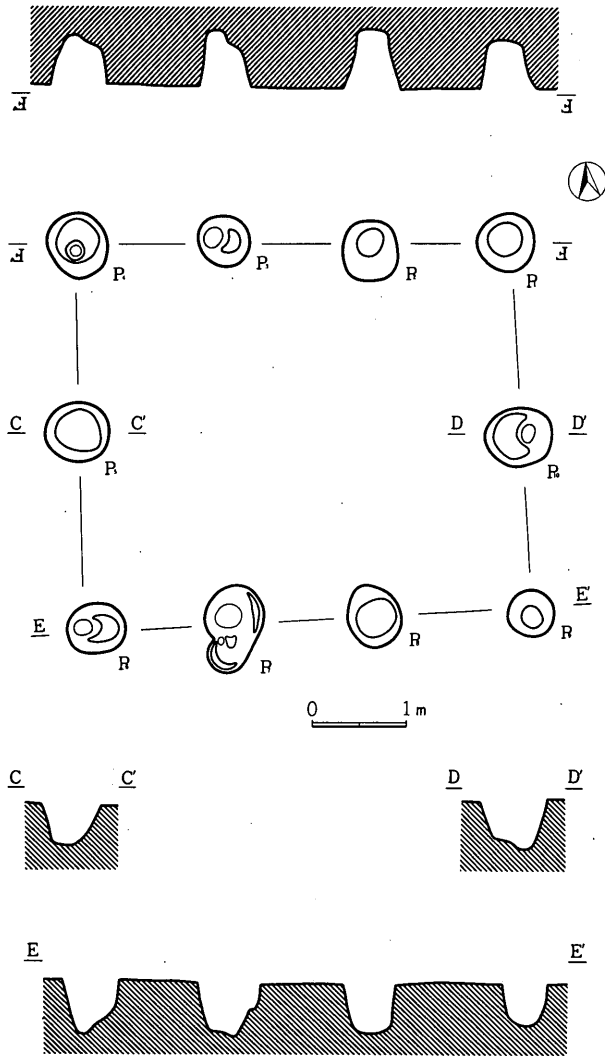
挿図 番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (回)	坏 (須)	— — (7.5)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	胎土は精選され ず灰色(N5/0) を呈する。
2	坏	— — —	体部は外反し、底部はやや丸味をおびた 平底になると思われる。	外面 底部手持ちヘラケズリ 内面 見込み部にラセン暗文が施される。	胎土は砂粒を含み 橙色(7.5YR6/6) を呈する。

で、柱間は $P_1 \cdot P_7$ 間で1.2mを測る。主軸方向はいずれも円形を呈しており、その深さは四隅のピット ( $P_1 \cdot P_2 \cdot P_5 \cdot P_6$ ) が深く、その中間 ( $P_3 \cdot P_4$ ) は浅いものであった。いずれのピットの埋土も黒色土I層のみで、そのなかにあつては柱痕は捉えられなかったが、掘り方の底面において柱痕が捉えられた ( $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4 \cdot P_6 \cdot P_7$ )。

本址のピット埋土中からは、須恵器坏・甕、土師器坏・甕の破片が検出されている。

1は回転糸切りによる須恵器坏底部である。2は見込み部にラセン暗文のみえる土師器坏底部である。この他図示しなかったが弱く「コ」の字状に外反する土師器甕の口縁部破片が検出されている。

本址の所産期は、これらの遺物の諸特徴がみられる時期以降と考えられよう。



第407図 F-54号掘立柱建物址実測図 (1:80)

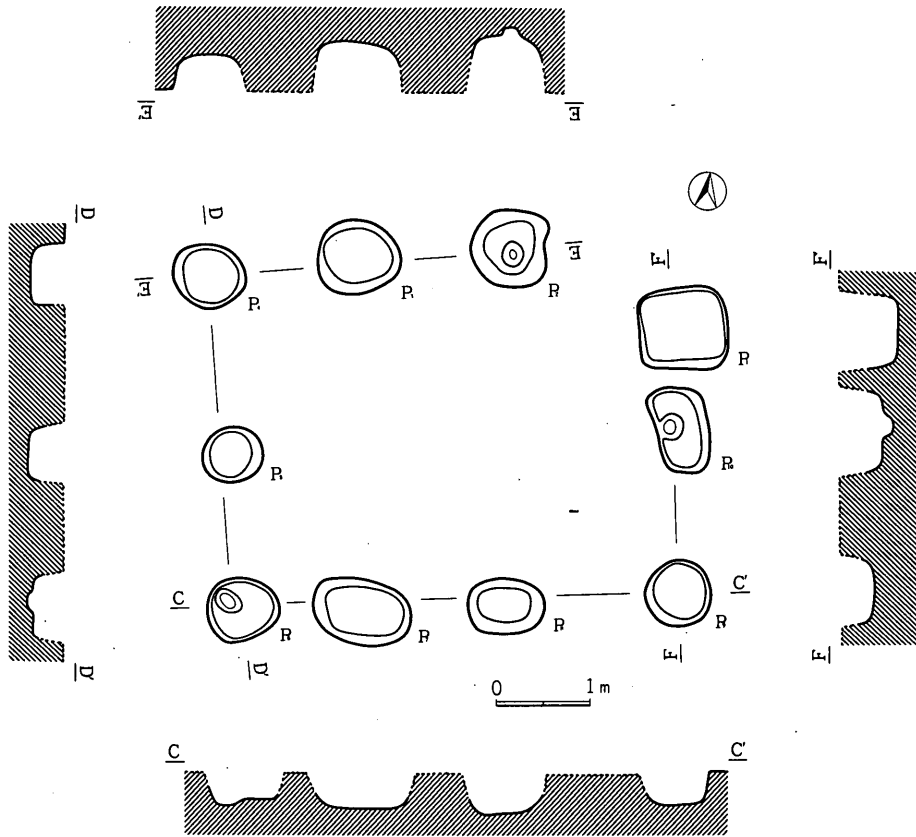
(54) F-54号掘立柱建物址 第407図

F-54号掘立柱建物址は、第I区ター37グリッドにおいて検出された。

F-54は、3間×2間(4.6m×3.9m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.4m、 $P_{10} \cdot P_1$ 間で2.0mを測る。主軸方向は $N-86^\circ-E$ を指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで柱痕は捉えられなかった。

なお、本址のピット中からは遺物は検出されていない。



第408図 F-55号掘立柱建物址実測図 (1:80)

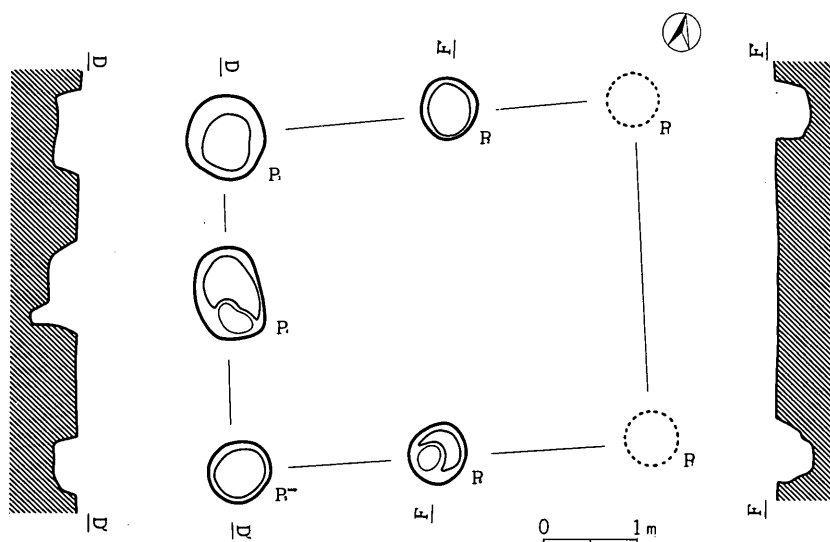
(55) F-55号掘立柱建物址 第408図

F-55号掘立柱建物址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。本F-55は、H-36・H-37号住居址と重複する。本址とH-37号住居址については本址が新しいものとして確認できたが、H-36との新旧関係は捉えられなかった。しかし本址はH-36に後出するものとしてみたほうが妥当であろう。したがってその順序は古いものよりH-37→H-36→F-55となろうか。

F-55は、3間×2間(4.7m×3.5m)の掘立柱建物址であるが、P<sub>1</sub>は北列よりややずれた位置に存在している。柱間はP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>間で1.7m、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>間で1.5mを測る。主軸方向はN-78°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、P<sub>1</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>10</sub>は方形が意図され、他は円形のプランを呈している。ピットの埋土は黒色土1層のみで柱痕は捉えられなかったが、その底面において柱痕が確認できたものがあった(P<sub>2</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>10</sub>)。それらの柱痕は25cm程度を測るものであった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。



第409図 F-56号掘立柱建物址実測図 (1:80)

## (56) F-56号掘立柱建物址 第409図

F-56号は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。F-56は、H-34号住居址・F-83号掘立柱建物址と重複する。本址は、H-34より新しいものとして捉えられたが、F-83との新旧関係は把握できなかった。

F-56は、南北列2間×東列1間・西列2間(4.4m×3.5m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_2 \cdot P_3$ 間で2.4m、 $P_4 \cdot P_5$ 間は1.6mを測る。主軸方向は $N-70^\circ-E$ を指す。

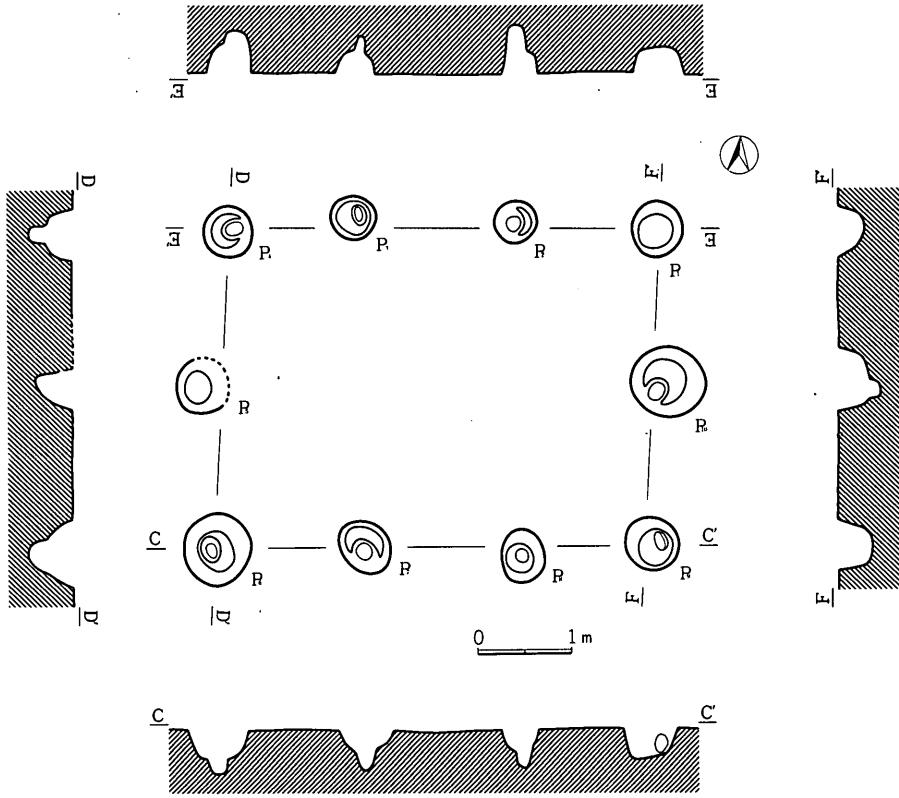
各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中において柱痕が捉えられるものはなかったが、 $P_4$ はその底面に径20cm程度の柱痕が捉えられた。

なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。

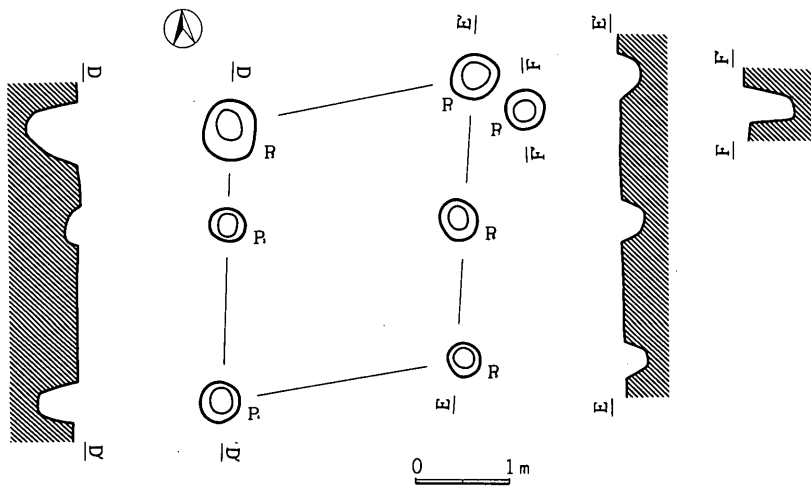
## (57) F-57号掘立柱建物址 第410図

F-57号掘立柱建物址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。本址は、F-59号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-57は、3間×2間(4.6m×3.4m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_2 \cdot P_3$ 間で1.6m、 $P_9 \cdot P_{10}$ 間で1.7mを測る。主軸方向は $N-66^\circ-E$ を指す。

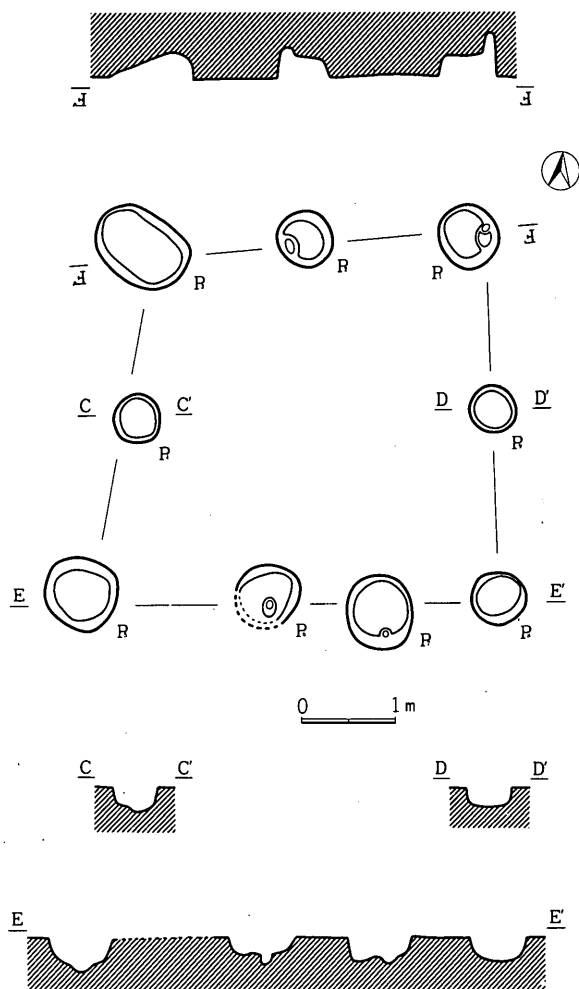


第410图 F-57号掘立柱建物址实测图 (1 : 80)



第411图 F-58号掘立柱建物址实测图 (1 : 80)





第412図 F-59号掘立柱建物址実測図 (1:80)

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は捉えられなかったが、その底面に柱痕の確認されたものがあった(P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>10</sub>)。それらの柱痕の径は10~25cm程度を測った。

本址のピット埋土中からは、須恵器甕破片・土師器甕破片が検出されている。土師器甕は、弱く「コ」の字状に外反する口縁部破片であった。

### (58) F-58号掘立柱建物址 第411図

F-58号掘立柱建物址は、第I区ター37グリッドにおいて検出された。

F-58は、2間×1間(2.9m×2.6m)の掘立柱建物址であるが、ピットの配置が全体的にややずれ、歪んだプランを呈している。柱間は、 $P_2 \cdot P_3$ 間で1.0m、 $P_5 \cdot P_6$ 間で1.5mを測る。主軸方向は $N-6^\circ-E$ を指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで柱痕は捉えられなかった。

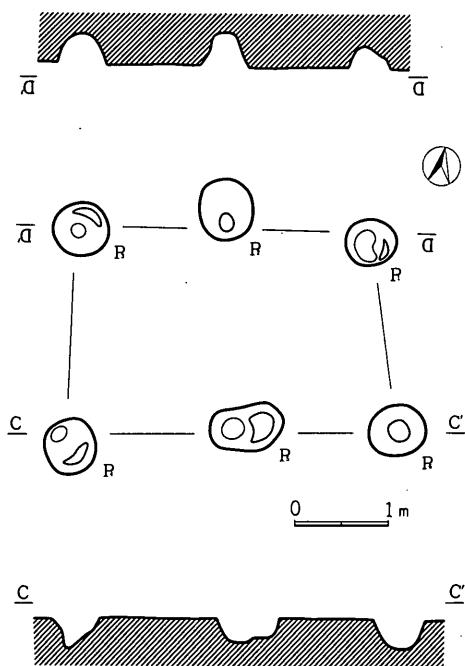
なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

(59) F-59号掘立柱建物址 第412図

F-59号掘立柱建物址は、第I区セ-40・41グリッドにおいて検出された。本址は、F-57号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係はつかめなかった。

F-59は、南列4間・北列3間×東西列2間(4.5m・3.9m×3.4m)の掘立柱建物址で、 $P_5$ がややずれた配置をみせている。柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で2.1m、 $P_3 \cdot P_4$ 間で1.9mを測る。主軸方向は $N-72^\circ-E$ を指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中



第413図 F-60号掘立柱建物址実測図 (1:80)

においては柱痕は捉えられなかったが、底面において柱痕が確認できたものがある ( $P_1 \cdot P_2 \cdot P_6$ )。ちなみにその柱痕の太さは、 $P_1$ で15cm、 $P_2$ で15cm、 $P_6$ で10cm程度を測る。

なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。

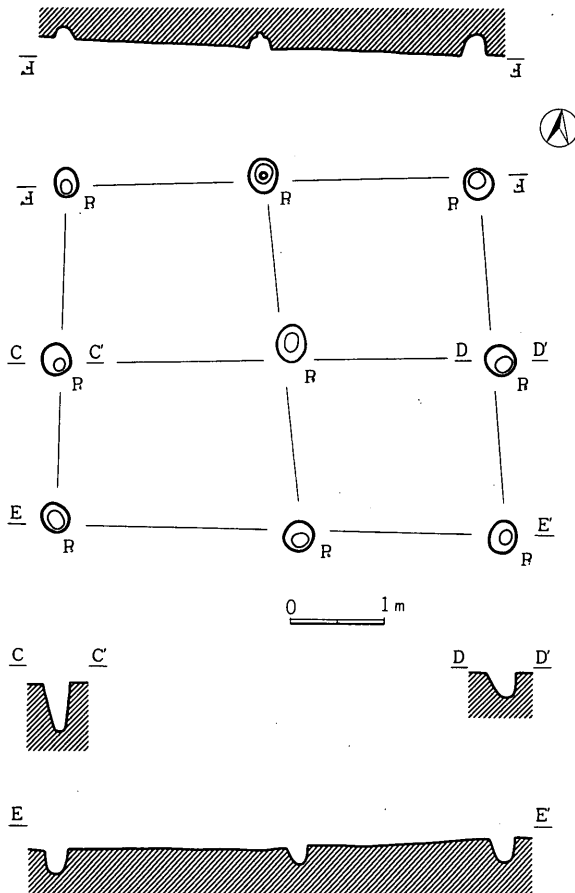
(60) F-60号掘立柱建物址 第413図

F-60号掘立柱建物址は、第I区ス-44グリッドにおいて検出された。

F-60は、2間×1間(3.5m×3.1m×2.1m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_2 \cdot P_3$ 間で1.6m、 $P_5 \cdot P_6$ 間で1.8mを測る。主軸方向はN-77°-Eを指す。

各ピットの掘り方はおおよそ円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。



第414図 F-61号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(61) F-61号掘立柱建物址 第414図

F-61号掘立柱建物址は、第II区ス-23グリッドにおいて検出された。

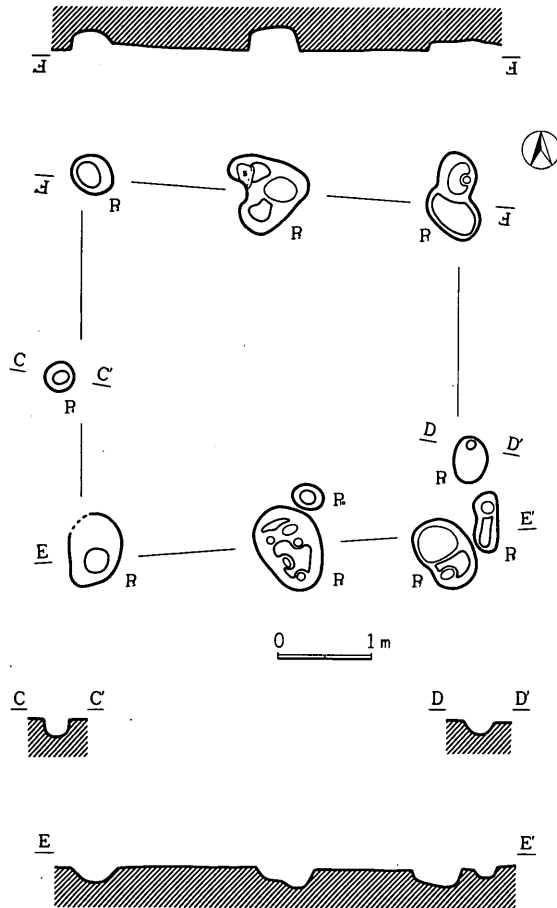
F-61は、2間×2間(4.8m×3.7m)の総柱の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で2.4m、 $P_3 \cdot P_1$ 間で2.0mを測る。主軸方向は $N-74^\circ-E$ を指す。

各ピットの掘り方はいずれも小形の円形を呈し、比較的浅いものであった。その埋土は黒色土1層のみである。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

(62) F-62号掘立柱建物址 第415図

F-62号掘立柱建物址は、第II区ス-24グリッドにおいて検出された。



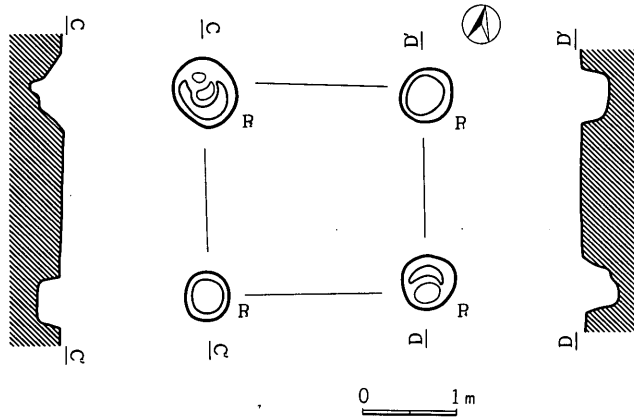
第415図 F-62号掘立柱建物址実測図(1:80)

IV 遺構と遺物

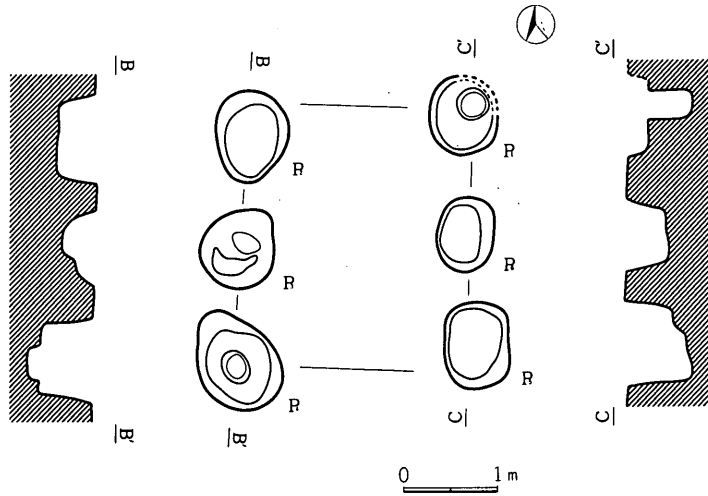
F-62は、2間×2間の掘立柱建物址であるが、やや歪んだ方形のプランを呈し、北列4.0m・南列3.8m・東列3.8m・西列4.0mを測る。柱間はP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間で2.1m、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>間で2.2mを測る。主軸方向はN-7°-Wを指す。

各ピットの掘り方は基本的には円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみで柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。



第416図 F-63号掘立柱建物址実測図 (1:80)



第417図 F-64号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(63) F-63号掘立柱建物址 第416図

F-63号掘立柱建物址は、第II区ター23グリッドにおいて検出された。

F-63は、1間×1間(2.3m×2.3m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-13°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

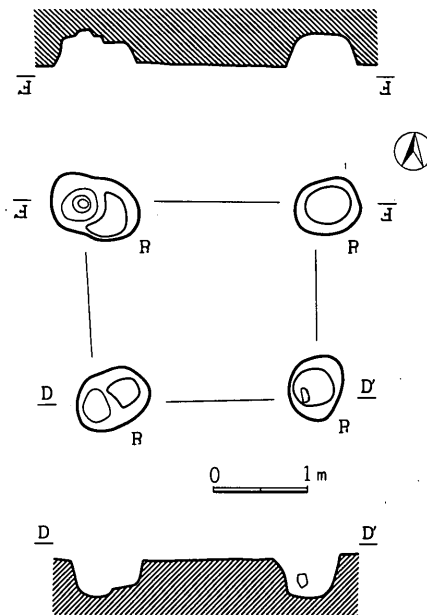
(64) F-64号掘立柱建物址 第417図

F-64号掘立柱建物址は、第II区ス-25グリッドにおいて検出された。F-64は、H-67号住居址を切って存在している。

F-64は、2間×1間(2.8m×2.5m)の掘立柱建物址で、柱間はP<sub>1</sub>・P<sub>6</sub>間で1.5m、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間で1.3mを測る。主軸方向はN-8°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみである。埋土中においては柱痕は捉えられなかったが、その底面において柱痕が確認されたものがあった(P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>)。ちなみにそれらの柱痕は30cm程度を測った。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。



第418図 F-65号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(65) F-65号掘立柱建物址 第418図

F-65号掘立柱建物址は、第II区ター22グリッドにおいて検出された。

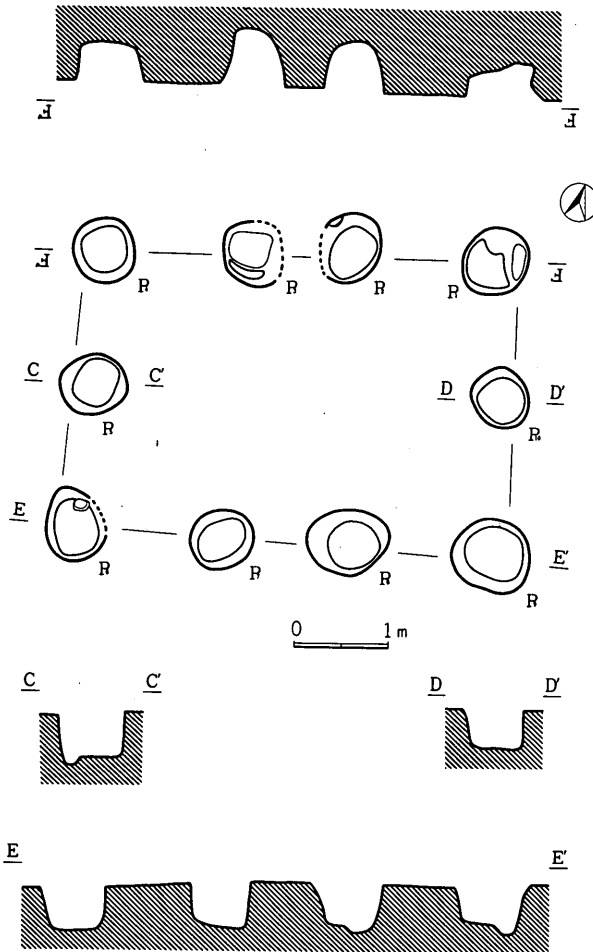
F-65は、1間×1間 (2.4m×2.1m) の掘立柱建物址で、主軸方向はN-73°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

(66) F-66号掘立柱建物址 第419図

F-66号掘立柱建物址は、第II区タ・チ-22・23グリッドにおいて検出された。



第419図 F-66号掘立柱建物址実測図 (1:80)

2 掘立柱建物址

F-66は、3間×2間(4.7m×3.2m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_5 \cdot P_6$ 間で1.5m、 $P_8 \cdot P_9$ 間で1.6mを測る。主軸方向はN-72°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は捉えられなかった。

本址のピット埋土中からは、須恵器蓋破片2点、須恵器甕破片1片が検出されている。蓋は縁部が短く下降するものである。

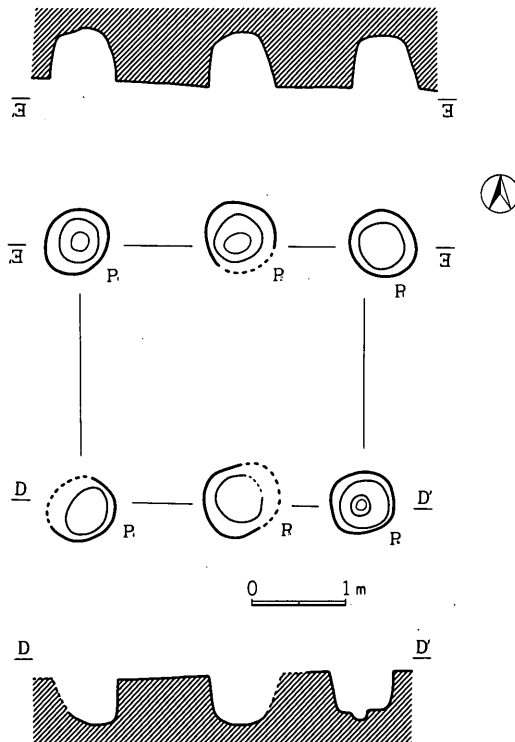
(67) F-67号掘立柱建物址 第420図

F-67号掘立柱建物址は、第II区チ-21グリッドにおいて検出された。

F-67は、2間×1間(2.9m×2.4m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.5mを測る。主軸方向はN-72°-Eを指す。

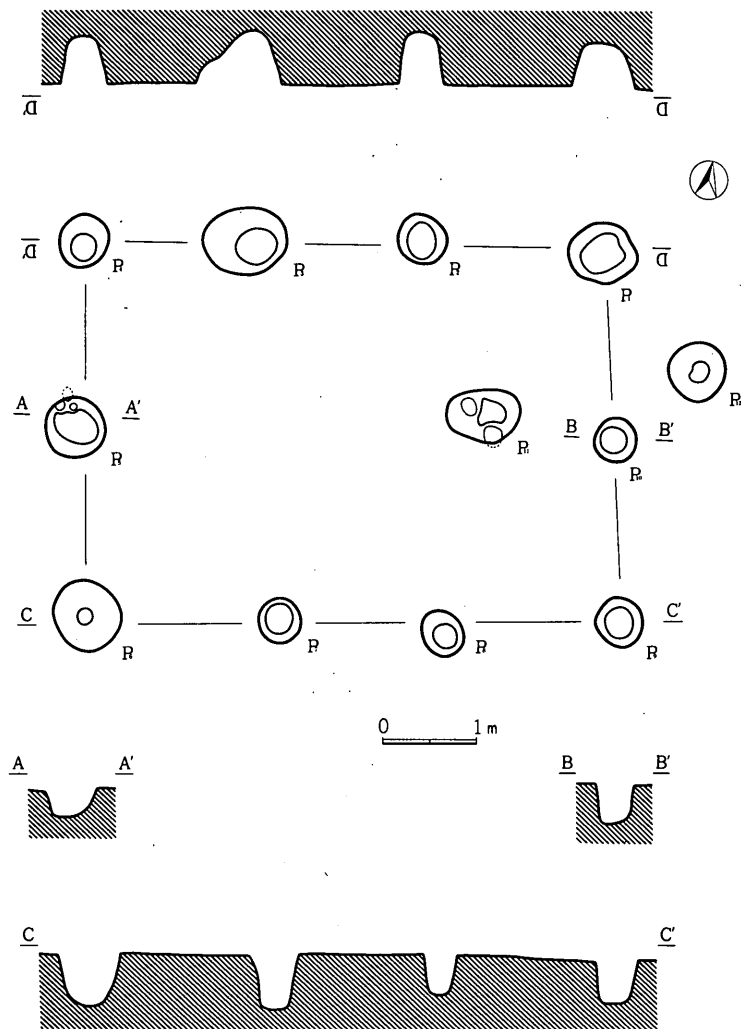
各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は確認できなかった。

なお、本址においては遺物はまったく検出されなかった。



第420図 F-67号掘立柱建物址実測図(1:80)





第421図 F-68号掘立柱建物址実測図 (1:80)

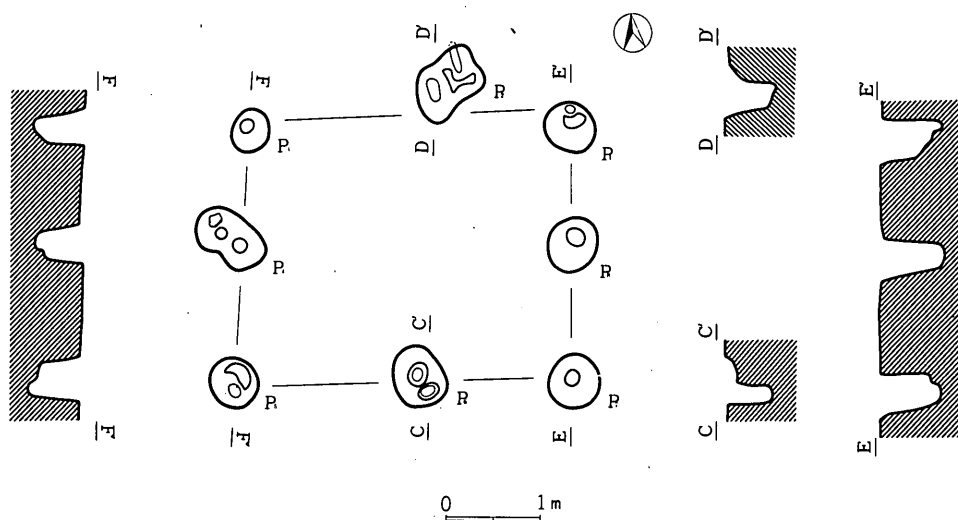
## (68) F-68号掘立柱建物址 第421図

F-68号掘立柱建物址は、第III区テ-25グリッドにおいて検出された。

F-68は、3間×2間 (5.7m×3.9m) の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で2.0m、 $P_2 \cdot P_3$ 間で1.8m、 $P_9 \cdot P_{10}$ 間で1.9mを測る。なお、 $P_{11} \cdot P_{12}$ は本址に付随するものかどうかはわからない。主軸方向はN-72°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。



第422図 F-69号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(69) F-69号掘立柱建物址 第422図

F-69掘立柱建物址は、第IV区ナ・ニー32グリッドにおいて検出された。

F-69は、2間×2間 (3.6m×2.8m) の掘立柱建物址で、柱間はP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間で1.3m、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>間で1.9m、P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>間で1.5mを測る。主軸方向はN-86°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、基本的には円形ないしは楕円形を呈するもので、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中において柱痕が捉えられるものはなかったが、その底面において柱痕が残るものがいくつかあった (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>)。それらの柱痕は10~20cmを測るものであった。

本址からは遺物はまったく検出されていない。

(70) F-70号掘立柱建物址 第423・424図

F-70号掘立柱建物址は、第IV区ナ-33グリッドにおいて検出された。

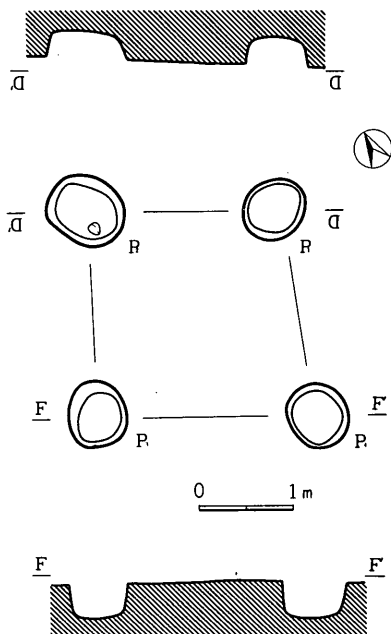
F-70は、1間×1間 (2.2m×2.2m) の掘立柱建物址で、主軸方向はN-13°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、埋土中においては柱痕は捉えられなかった。



0 5cm

第423図 F-70号掘立柱建物址出土遺物 (1:4)



第424図 F-70号掘立柱建物址実測図(1:80)

本址の埋土中からは、1の回転糸切りによる須恵器坏底部が検出されている。したがって本址の所産期も、回転糸切り手法のみられる時期以降とみることができよう。

### (71) F-71号掘立柱建物址 第425図

F-71号掘立柱建物址は、第V区ナ-36グリッドにおいて検出された。

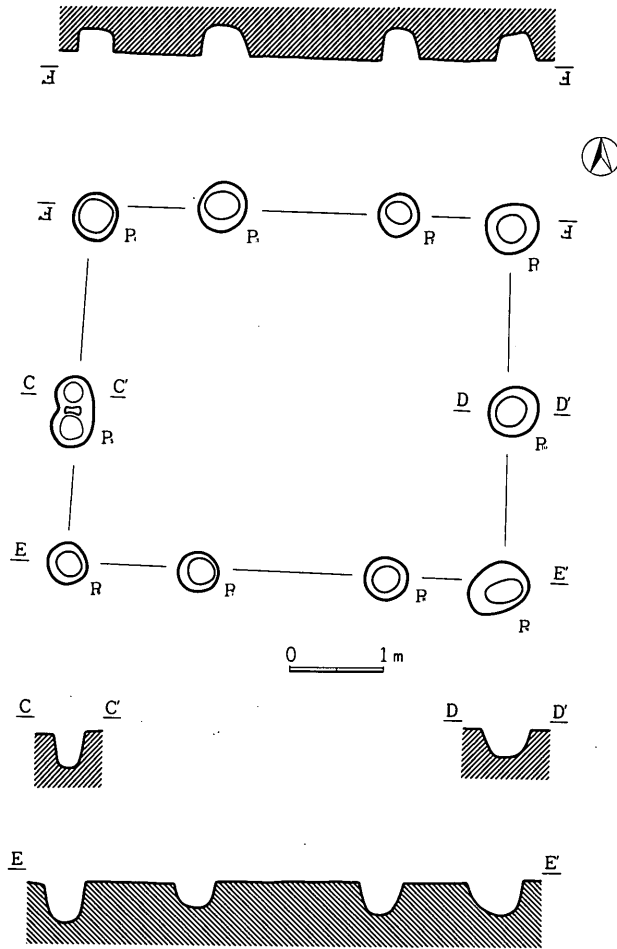
F-71は、3間×2間(4.6m×3.8m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間で1.2m、 $P_2 \cdot P_3$ 間で1.9m、 $P_1 \cdot P_{10}$ 間で1.9mを測る。なお、 $P_4$ 中には柱2本が立っていたものと思われる。主軸方向はN-84°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

### (72) F-72号掘立柱建物址 第426図

F-72号掘立柱建物址は、第V区ニ-38グリッドにおいて検出された。本址は、F-77号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

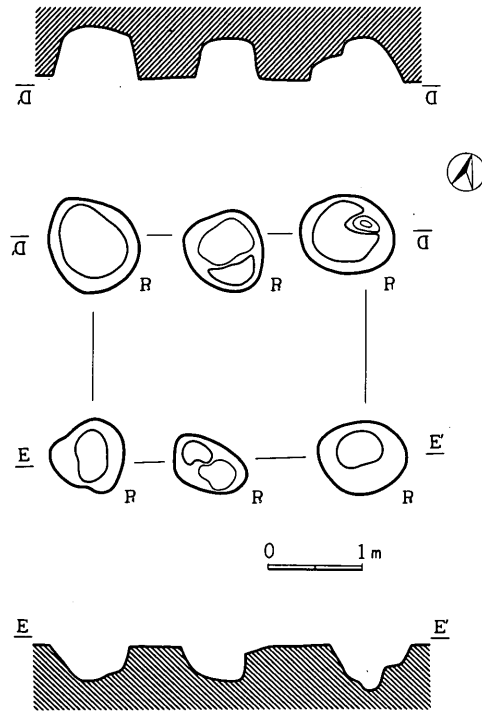


第425図 F-71号掘立柱建物址実測図 (1 : 80)

F-72は、2間×1間(3.0m×2.7m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_5 \cdot P_6$ 間で1.3m、 $P_2 \cdot P_3$ 間で1.7mを測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層みであった。埋土中においては柱痕は捉えられなかったが、 $P_6$ についてはピットの底面に径20cmを測る柱痕が確認された。

なお、本址のピット埋土中からは、須恵器甕破片・土師器甕破片の他、見込み部にラセン状暗文の施される土師器坏底部破片が検出されている。



第426図 F-72号掘立柱建物址実測図 (1:80)

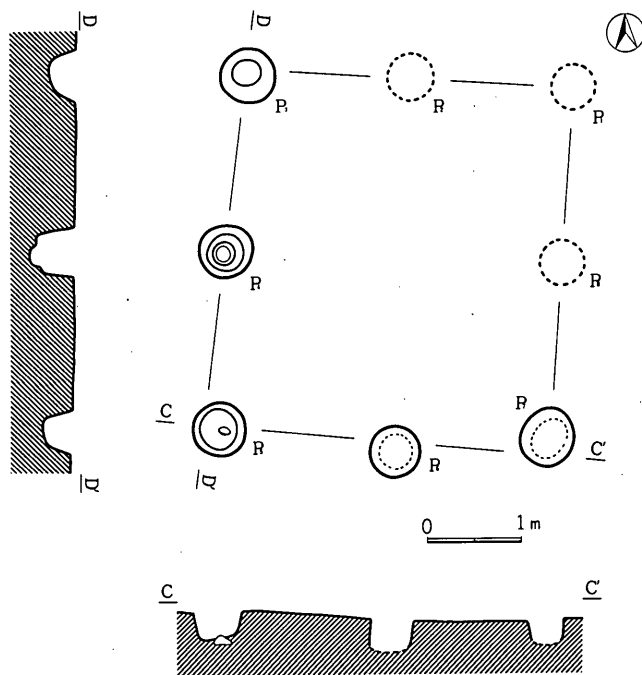
## (73) F-73号掘立柱建物址 第427図

F-73号掘立柱建物址は、第V区ナ・ニ-37グリッドにおいて検出された。本址は、H-109号住居址を切って存在しており、また、H-108号住居址と重複関係にあるがこれとの新旧関係は捉えられなかった。

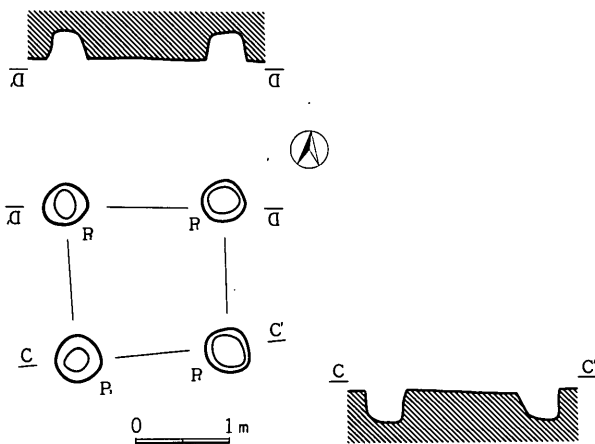
F-73は、2間×2間(3.5m×3.7m)の掘立柱建物址で、柱間は $P_3 \cdot P_4$ 間で1.9m、 $P_5 \cdot P_6$ 間で1.9mを測る。主軸方向はN-0°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中においては柱痕は捉えられなかったが、 $P_4$ はその底面において径23cm程を測る柱痕が残っていた。

なお、本址からは遺物は検出されていない。



第427図 F-73号掘立柱建物址実測図 (1:80)



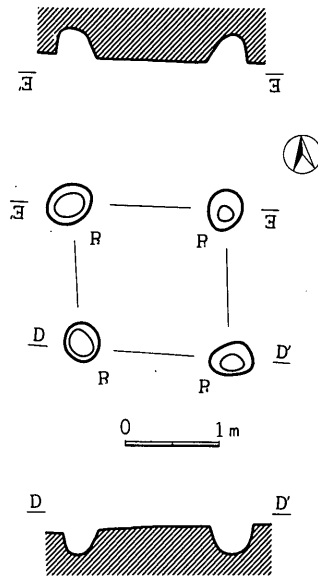
第428図 F-74号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(74) F-74号掘立柱建物址 第428図

F-74号掘立柱建物址は、第V区ニ-39グリッドにおいて検出された。

F-74は、1間×1間 (1.7m×1.7m) の掘立柱建物址で、主軸方向はN-7°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。



第429図 F-75号掘立柱建物址実測図  
(1:80)

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

### (75) F-75号掘立柱建物址 第429図

F-75号掘立柱建物址は、第V区ニ-38グリッドにおいて検出された。本址は、F-76号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-75は、1間×1間(1.7m×1.5m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-6°-Wを指す。各ピットの掘り方はいずれも小形な円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

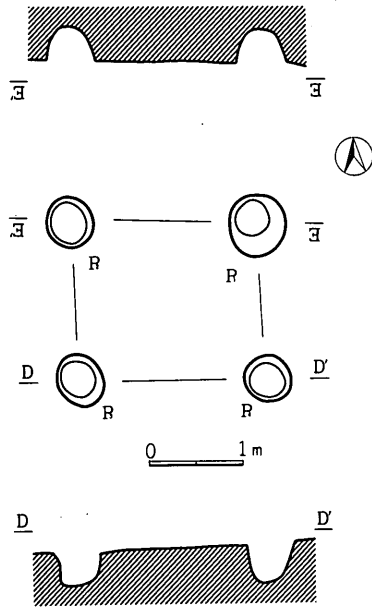
なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

### (76) F-76号掘立柱建物址 第430図

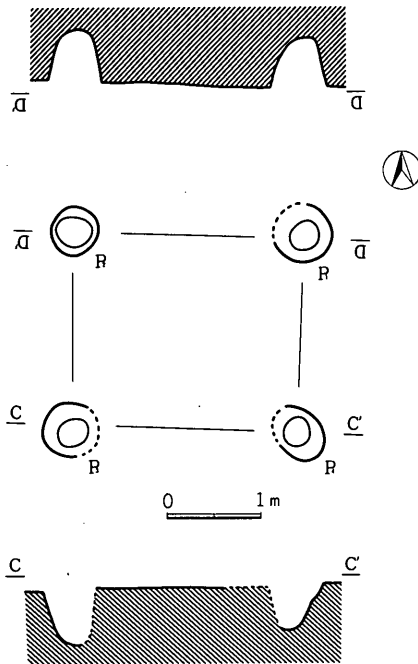
F-76号掘立柱建物址は、第V区ニ-38グリッドにおいて検出された。本址は、F-75号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-76は、1間×1間(2.0m×1.7m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-6°-Wを指す。各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

2 掘立柱建物址



第430图 F-76号掘立柱建物址实测图  
(1:80)



第431图 F-77号掘立柱建物址实测图  
(1:80)



なお、本址においては遺物はまったく検出されていない。

(77) F-77号掘立柱建物址 第431図

F-77号掘立柱建物址は、第V区ニ-38グリッドにおいて検出された。本址は、F-72号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-77は、1間×1間(2.5m×2.0m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-0°-Wを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

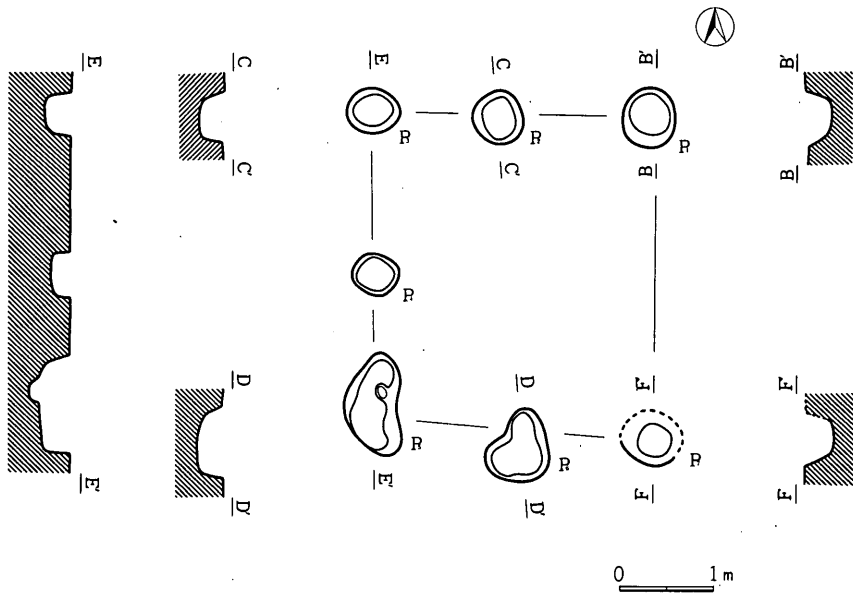
(78) F-78号掘立柱建物址 第432図

F-78号掘立柱建物址は、第V区ニ-37グリッドにおいて検出された。本址は、F-81号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

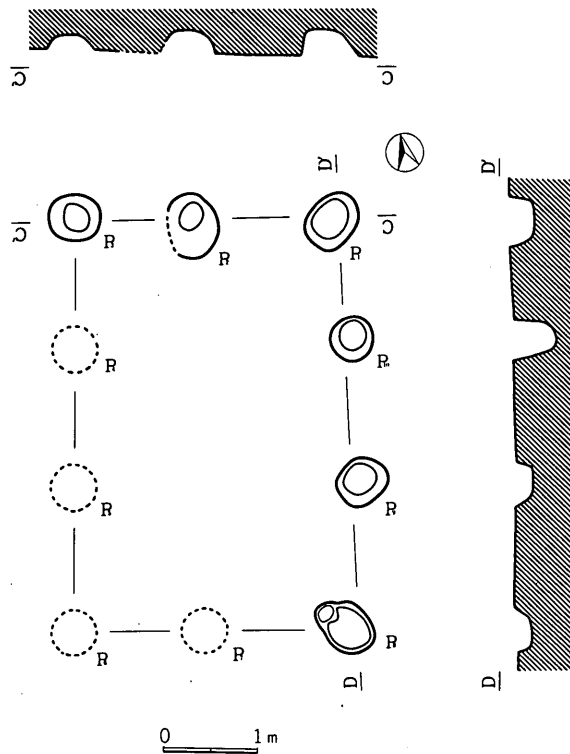
F-78は、南北列2間×東列1間・西列2間(3.4m×3.0m)の掘立柱建物址で、柱間はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間で1.6m、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間で1.7mを測る。主軸方向はN-8°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>が不整形である以外はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。



第432図 F-78号掘立柱建物址実測図(1:80)



第433図 F-79号掘立柱建物址実測図 (1:80)

## (79) F-79号掘立柱建物址 第433図

F-79号掘立柱建物址は、第V区ニ-37グリッドにおいて検出された。

F-79は、3間×2間(4.3m×2.7m)の掘立柱建物址となると考えられるが、その $P_4 \sim P_7$ 相当のピットが存在すると考えられる部分は土山の下にあり調査が不可能であった。その柱間は、 $P_1 \cdot P_2$ 間で1.4m、 $P_8 \cdot P_9$ 間で1.7mを測り、主軸方向は $N-0^\circ-W$ を指す。

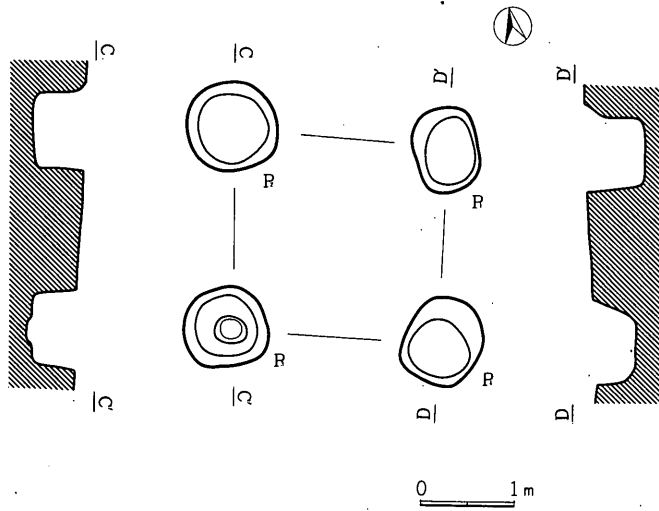
各ピットの掘り方は円形を呈し、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。なお、本址からは遺物は検出されていない。

## (80) F-80号掘立柱建物址 第434図

F-80掘立柱建物址は、第V区ニ-38グリッドにおいて検出された。

本址は、1間×1間(2.3m×2.1m)の掘立柱建物址で、主軸方向は $N-0^\circ-W$ を指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみであった。埋土中において柱痕は捉えられなかったが、 $P_3$ はその底面において径30cm程を測る柱痕が確認されて



第434図 F-80号掘立柱建物址実測図 (1:80)

いる。

本址のピット埋土中からは、須恵器甕の小破片2片が出土している。

### (81) F-81号掘立柱建物址

F-81号掘立柱建物址は、第V区ニ-37グリッドにおいて検出された。F-81は、F-78号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられなかった。

F-81は南列3間・北列2間×東西列2間(5.2m×3.5m)の掘立柱建物址で、 $P_2$ ・ $P_3$ 間、 $P_7$ ・ $P_8$ 間の距離のあくピットの配置をみせている。主軸方向はN-86°-Wを指す。

各ピットの掘り方は、いずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。

### (82) F-82号掘立柱建物址

F-82号掘立柱建物址は、第I区ス-42グリッドにおいて検出された。F-82は、F-4号掘立柱建物址と重複するが、両者の新旧関係は捉えられない。

F-82は、北列3間(4.0m)×東列2間(3.0m)のみのピットの配置をみせるもので、隣接するF-3とは棟方向・柱の並び等が一致することから、F-3の付属的な建物であったとも推測

される。主軸方向はN-79°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物はまったく検出されていない。

### (83) F-83号掘立柱建物址

F-83号掘立柱建物址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。本址は、F-42・F-56・F-84号掘立柱建物址・H-35号住居址と重複関係にあるが、これらとの新旧関係は捉えられなかった。

F-83は、東西列2間×南列2間・北列1間(4.0m×3.6m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-19°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、P<sub>4</sub>を除くといずれも円形ないしは楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられない。

なお、本址のピット中からは遺物は検出されていない。

### (84) F-84号掘立柱建物址

F-84号掘立柱建物址は、第I区セ-40グリッドにおいて検出された。

本址は、その東列3間と南北列1間のみ確認できたものであるが、3間×2間の掘立柱建物址と想定しておくことが妥当と考えられる。東列は5.0mを測り、南北軸方向はN-19°-Eを指す。

各ピットの掘り方はいずれも円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。

### (85) F-85号掘立柱建物址

F-85号掘立柱建物址は、第II区タ-23グリッドにおいて検出された。

F-85は、2間×2間(4.9m×4.1m)の掘立柱建物址で、主軸方向はN-1°-Wを指す。

各ピットの掘り方は円形ないしは楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

本址からは、遺物は検出されていない。

### (86) F-86号掘立柱建物址

F-86号掘立柱建物址は、第II区ター21グリッドにおいて検出された。

F-86は、南北列3間×東列1間・西列2間(4.5m×3.1m)の掘立柱建物址で、さらにその西列に平行して廂になるかとも考えられる2個のピットがみられる。主軸方向はN-71°-Eを指す。

各ピットの掘り方は円形ないしは楕円形を呈しており、その埋土は黒色土1層のみで、柱痕は捉えられなかった。

本址からは遺物は検出されていない。

### (87) F-87号掘立柱建物址

F-87号掘立柱建物址は、第III区ツ・テ-25グリッドにおいて検出された。

F-87は、南列3間・北列2間×東西列2間(7.0m×5.0m)の掘立柱建物址と考えられるが、南西コーナーのピットは地区外に外れており検出できなかった。また、その内部にも5個程ピットが認められたが、本址に伴うものかどうかはわからなかった。主軸方向はN-67°-Eを指す。

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形を呈しており、その埋土は黒色土のみで、柱痕は捉えられなかった。

なお、本址からは遺物は検出されていない。

2 掘立柱建物址

第160表 掘立柱建物址ピット一覧表〈その1〉

	No.	長径	短径	深さ		No.	長径	短径	深さ		No.	長径	短径	深さ
F-1	P <sub>1</sub>	60	58	22	F-6	P <sub>6</sub>	103	87	38	F-13	P <sub>1</sub>	62	53	50
	P <sub>2</sub>	62	54	29		P <sub>7</sub>	101	86	53		P <sub>2</sub>	38	32	28
	P <sub>3</sub>	77	65	35		P <sub>8</sub>	107	96	46		P <sub>3</sub>	76	61	34
	P <sub>4</sub>	65	64	33		P <sub>9</sub>	(90)	(90)	—		P <sub>4</sub>	68	67	31
	P <sub>5</sub>	72	65	37		P <sub>10</sub>	96	80	46		P <sub>5</sub>	77	58	34
	P <sub>6</sub>	74	64	27		F-7	P <sub>1</sub>	69	63		29	P <sub>6</sub>	72	55
F-2	P <sub>1</sub>	56	55	20	P <sub>2</sub>		52	51	29		P <sub>7</sub>	58	56	46
	P <sub>2</sub>	32	29	9	P <sub>3</sub>		57	52	19	F-14	P <sub>1</sub>	48	44	20
	P <sub>3</sub>	69	43	21	P <sub>4</sub>		78	65	25		P <sub>2</sub>	39	38	33
	P <sub>4</sub>	57	33	23	P <sub>5</sub>		85	81	31		P <sub>3</sub>	50	44	12
	P <sub>5</sub>	69	52	38	P <sub>6</sub>		62	52	28		P <sub>4</sub>	42	42	15
	P <sub>6</sub>	63	34	9	P <sub>7</sub>		53	47	36		P <sub>5</sub>	50	40	14
	P <sub>7</sub>	46	41	12	P <sub>8</sub>		75	65	39		P <sub>6</sub>	53	41	27
	P <sub>8</sub>	59	50	29	P <sub>9</sub>		73	69	34		P <sub>7</sub>	43	40	10
	P <sub>9</sub>	49	42	25	P <sub>10</sub>		38	35	19	F-15	P <sub>1</sub>	70	65	51
F-3	P <sub>1</sub>	108	98	58	F-10	P <sub>1</sub>	67	59	49		P <sub>2</sub>	93	68	48
	P <sub>2</sub>	142	28	48		P <sub>2</sub>	71	61	49		P <sub>3</sub>	100	80	43
	P <sub>3</sub>	93	80	49		P <sub>3</sub>	63	60	40		P <sub>4</sub>	62	55	44
	P <sub>4</sub>	99	88	51		P <sub>4</sub>	63	58	37	F-16	P <sub>1</sub>	80	71	42
	P <sub>5</sub>	82	71	—		P <sub>5</sub>	62	59	44		P <sub>2</sub>	42	36	19
	P <sub>6</sub>	81	71	60		P <sub>6</sub>	68	60	47		P <sub>3</sub>	60	39	44
	P <sub>7</sub>	103	93	48		P <sub>7</sub>	73	58	53		P <sub>4</sub>	25	25	14
F-5	P <sub>1</sub>	50	43	24		P <sub>8</sub>	57	52	41		P <sub>5</sub>	66	57	37
	P <sub>2</sub>	29	26	—	F-11	P <sub>1</sub>	46	44	35		P <sub>6</sub>	56	47	42
	P <sub>3</sub>	48	47	—		P <sub>2</sub>	49	44	40		P <sub>7</sub>	96	53	44
	P <sub>4</sub>	38	30	11		P <sub>3</sub>	72	56	52		P <sub>8</sub>	59	38	57
	P <sub>5</sub>	32	30	25		P <sub>4</sub>	58	49	51		P <sub>9</sub>	63	57	47
	P <sub>6</sub>	67	61	29		P <sub>5</sub>	68	64	38		P <sub>10</sub>	52	33	35
	P <sub>7</sub>	31	27	14		P <sub>6</sub>	57	57	39	F-17	P <sub>1</sub>	96	92	63
	P <sub>8</sub>	44	41	13		P <sub>7</sub>	61	56	39		P <sub>2</sub>	71	68	43
	P <sub>9</sub>	48	37	35		P <sub>8</sub>	62	51	40		P <sub>3</sub>	94	80	45
	P <sub>10</sub>	58	49	22		P <sub>9</sub>	55	55	48		P <sub>4</sub>	68	63	32
F-6	P <sub>1</sub>	96	82	58		P <sub>10</sub>	49	45	38		P <sub>5</sub>	94	80	53
	P <sub>2</sub>	95	87	55	F-12	P <sub>1</sub>	59	52	17		P <sub>6</sub>	(70)	(70)	—
	P <sub>3</sub>	126	91	78		P <sub>2</sub>	45	42	26		P <sub>7</sub>	102	75	64
	P <sub>4</sub>	(100)	(100)	—		P <sub>3</sub>	56	48	32		P <sub>8</sub>	74	54	35
	P <sub>5</sub>	113	93	51		P <sub>4</sub>	43	41	13		P <sub>9</sub>	47	46	48

※単位はcm

## IV 遺構と遺物

第160表 掘立柱建物址ピット一覧表〈その2〉

	No	長径	短径	深さ
F-17	P <sub>10</sub>	38	33	10
	P <sub>11</sub>	60	50	40
	P <sub>12</sub>	48	40	—
F-18	P <sub>1</sub>	68	58	53
	P <sub>2</sub>	82	44	30
	P <sub>3</sub>	83	50	33
	P <sub>4</sub>	54	53	53
	P <sub>5</sub>	73	61	33
	P <sub>6</sub>	86	45	40
	P <sub>7</sub>	51	47	13
	P <sub>8</sub>	100	45	26
	P <sub>9</sub>	82	69	49
	P <sub>10</sub>	58	51	56
	P <sub>11</sub>	27	20	—
	P <sub>12</sub>	65	55	—
	P <sub>13</sub>	36	30	—
	P <sub>14</sub>	53	46	—
	P <sub>15</sub>	33	23	—
F-19	P <sub>1</sub>	96	53	32
	P <sub>2</sub>	30	27	11
	P <sub>3</sub>	45	40	21
	P <sub>4</sub>	67	63	48
	P <sub>5</sub>	54	45	19
	P <sub>6</sub>	45	44	55
	P <sub>7</sub>	80	45	15
	P <sub>8</sub>	86	72	20
	P <sub>9</sub>	60	48	45
	P <sub>10</sub>	29	26	7
	P <sub>11</sub>	68	56	30
	P <sub>12</sub>	52	49	—
	P <sub>13</sub>	53	52	10
	P <sub>14</sub>	43	28	6
F-20	P <sub>1</sub>	118	84	59
	P <sub>2</sub>	131	98	49
	P <sub>3</sub>	74	69	54
	P <sub>4</sub>	92	60	35
F-21	P <sub>1</sub>	81	77	47
F-21	P <sub>2</sub>	75	73	27
	P <sub>3</sub>	75	70	45
	P <sub>4</sub>	110	101	40
	P <sub>5</sub>	82	72	41
	P <sub>6</sub>	70	68	40
	P <sub>7</sub>	74	74	37
	P <sub>8</sub>	135	83	34
	F-22	P <sub>1</sub>	66	62
P <sub>2</sub>		64	64	45
P <sub>3</sub>		69	60	43
P <sub>4</sub>		65	53	61
P <sub>5</sub>		64	58	59
P <sub>6</sub>		61	61	46
P <sub>7</sub>		64	58	46
P <sub>8</sub>		64	62	49
P <sub>9</sub>		(82)	(62)	45
F-23	P <sub>1</sub>	62	59	31
	P <sub>2</sub>	56	47	54
	P <sub>3</sub>	47	43	47
	P <sub>4</sub>	56	53	43
	P <sub>5</sub>	65	58	—
	P <sub>6</sub>	65	51	—
	P <sub>7</sub>	63	58	20
F-24	P <sub>1</sub>	63	60	24
	P <sub>2</sub>	66	64	29
	P <sub>3</sub>	68	67	32
	P <sub>4</sub>	84	67	42
	P <sub>5</sub>	72	68	49
	P <sub>6</sub>	77	77	45
	P <sub>7</sub>	53	53	46
	P <sub>8</sub>	60	54	20
F-25	P <sub>1</sub>	114	64	21
	P <sub>2</sub>	67	59	15
	P <sub>3</sub>	76	69	30
	P <sub>4</sub>	59	52	31
	P <sub>5</sub>	60	54	41
	P <sub>6</sub>	68	62	44
F-25	P <sub>7</sub>	64	51	29
	P <sub>8</sub>	61	50	20
	P <sub>9</sub>	49	42	29
F-26	P <sub>1</sub>	74	65	27
	P <sub>2</sub>	57	57	50
	P <sub>3</sub>	63	58	31
	P <sub>4</sub>	57	52	32
	P <sub>5</sub>	62	62	37
	P <sub>6</sub>	47	39	24
	P <sub>7</sub>	58	53	16
	P <sub>8</sub>	72	57	35
	P <sub>9</sub>	63	58	25
F-27	P <sub>1</sub>	51	41	30
	P <sub>2</sub>	41	38	26
	P <sub>3</sub>	53	53	30
	P <sub>4</sub>	42	40	22
	P <sub>5</sub>	63	44	20
	P <sub>6</sub>	52	47	26
F-28	P <sub>1</sub>	55	49	43
	P <sub>2</sub>	68	50	41
	P <sub>3</sub>	111	78	66
	P <sub>4</sub>	52	39	23
	P <sub>5</sub>	50	48	25
	P <sub>6</sub>	68	49	11
	P <sub>7</sub>	55	47	40
	P <sub>8</sub>	75	58	44
	P <sub>9</sub>	59	48	27
F-29	P <sub>1</sub>	57	55	42
	P <sub>2</sub>	59	49	19
	P <sub>3</sub>	63	44	25
	P <sub>4</sub>	56	50	26
	P <sub>5</sub>	65	61	29
	P <sub>6</sub>	98	57	35
	P <sub>7</sub>	80	65	40
	P <sub>8</sub>	105	69	43
F-30	P <sub>1</sub>	122	(119)	62
	P <sub>2</sub>	(118)	85	50

第160表 掘立柱建物址ピット一覧表〈その3〉

	No	長径	短径	深さ		No	長径	短径	深さ		No	長径	短径	深さ
F-30	P <sub>3</sub>	87	(87)	58	F-34	P <sub>6</sub>	90	68	37	F-38	P <sub>6</sub>	82	71	48
	P <sub>4</sub>	90	(75)	48		P <sub>7</sub>	74	56	53		P <sub>7</sub>	87	76	49
F-31	P <sub>1</sub>	122	110	62		P <sub>8</sub>	65	64	50		P <sub>8</sub>	54	51	13
	P <sub>2</sub>	74	69	52	F-35	P <sub>1</sub>	65	48	37		P <sub>9</sub>	100	67	26
	P <sub>3</sub>	93	85	51		P <sub>2</sub>	84	50	48		P <sub>10</sub>	95	86	53
	P <sub>4</sub>	83	83	47		P <sub>3</sub>	105	82	44	P <sub>11</sub>	94	92	43	
	P <sub>5</sub>	96	(94)	40		P <sub>4</sub>	60	46	35	F-39	P <sub>1</sub>	72	57	43
	P <sub>6</sub>	75	68	47		P <sub>5</sub>	58	1	34		P <sub>2</sub>	46	43	—
	P <sub>7</sub>	103	96	55		P <sub>6</sub>	95	66	40		P <sub>3</sub>	53	44	25
	P <sub>8</sub>	108	100	66		P <sub>7</sub>	48	44	35		P <sub>4</sub>	62	52	20
	P <sub>9</sub>	47	40	—		P <sub>8</sub>	78	64	35		P <sub>5</sub>	45	45	29
	P <sub>10</sub>	100	70	—		P <sub>9</sub>	62	57	37		P <sub>6</sub>	74	64	26
	P <sub>11</sub>	35	33	—		F-36	P <sub>1</sub>	58	42		49	P <sub>7</sub>	62	57
F-32	P <sub>1</sub>	103	80	54			P <sub>2</sub>	53	44		57	P <sub>8</sub>	42	40
	P <sub>2</sub>	143	91	49	P <sub>3</sub>		47	46	58		P <sub>9</sub>	74	69	35
	P <sub>3</sub>	111	105	44	P <sub>4</sub>		64	55	44		P <sub>10</sub>	47	42	24
	P <sub>4</sub>	110	102	52	P <sub>5</sub>		58	54	52		P <sub>11</sub>	46	38	—
	P <sub>5</sub>	122	104	49	P <sub>6</sub>		44	40	21	F-40	P <sub>1</sub>	50	47	45
	P <sub>6</sub>	103	84	50	P <sub>7</sub>		85	58	45		P <sub>2</sub>	40	37	43
	P <sub>7</sub>	102	(83)	56	P <sub>8</sub>		44	38	48		P <sub>3</sub>	43	38	48
	P <sub>8</sub>	94	90	56	P <sub>9</sub>		50	42	—		P <sub>4</sub>	56	52	19
	P <sub>9</sub>	86	75	37	P <sub>10</sub>		50	47	30		P <sub>5</sub>	71	57	47
F-33	P <sub>1</sub>	59	44	24	F-37	P <sub>1</sub>	120	110	89		P <sub>6</sub>	38	36	30
	P <sub>2</sub>	55	(53)	31		P <sub>2</sub>	86	72	82		P <sub>7</sub>	43	38	39
	P <sub>3</sub>	50	48	25		P <sub>3</sub>	120	95	79		P <sub>8</sub>	49	43	33
	P <sub>4</sub>	50	(46)	24		P <sub>4</sub>	118	114	69	F-41	P <sub>1</sub>	50	38	41
	P <sub>5</sub>	44	43	22		P <sub>5</sub>	92	89	83		P <sub>2</sub>	42	40	36
	P <sub>6</sub>	61	51	20		P <sub>6</sub>	95	91	86		P <sub>3</sub>	45	39	18
	P <sub>7</sub>	75	53	22		P <sub>7</sub>	76	70	80		P <sub>4</sub>	51	46	28
	P <sub>8</sub>	70	63	12		P <sub>8</sub>	106	95	72	F-42	P <sub>1</sub>	61	56	52
	P <sub>9</sub>	43	43	20		P <sub>9</sub>	88	85	80		P <sub>2</sub>	72	67	41
	P <sub>10</sub>	64	61	29		P <sub>10</sub>	115	105	80		P <sub>3</sub>	89	77	45
F-34	P <sub>1</sub>	69	65	38	F-38	P <sub>1</sub>	100	98	48		P <sub>4</sub>	86	70	42
	P <sub>2</sub>	82	79	37		P <sub>2</sub>	70	60	45		P <sub>5</sub>	80	75	50
	P <sub>3</sub>	93	72	60		P <sub>3</sub>	66	50	52		P <sub>6</sub>	70	62	61
	P <sub>4</sub>	124	100	54		P <sub>4</sub>	66	50	64		P <sub>7</sub>	75	68	40
	P <sub>5</sub>	71	66	40		P <sub>5</sub>	54	51	43		P <sub>8</sub>	72	60	44



IV 遺構と遺物

第160表 掘立柱建物址ピット一覧表〈その4〉

	No.	長径	短径	深さ
F-42	P <sub>9</sub>	83	72	51
	P <sub>10</sub>	72	68	34
	P <sub>11</sub>	83	67	17
F-43	P <sub>1</sub>	115	62	28
	P <sub>2</sub>	98	65	28
	P <sub>3</sub>	74	73	36
	P <sub>4</sub>	43	43	27
	P <sub>5</sub>	70	70	40
	P <sub>6</sub>	82	72	34
	P <sub>7</sub>	87	80	32
	P <sub>8</sub>	58	48	29
F-44	P <sub>1</sub>	54	44	34
	P <sub>2</sub>	68	45	50
	P <sub>3</sub>	66	55	38
	P <sub>4</sub>	101	72	45
	P <sub>5</sub>	63	57	50
	P <sub>6</sub>	58	58	53
	P <sub>7</sub>	73	66	43
	P <sub>8</sub>	60	51	32
	P <sub>9</sub>	58	50	30
	P <sub>10</sub>	38	33	—
	P <sub>11</sub>	42	38	—
	P <sub>12</sub>	52	48	—
	P <sub>13</sub>	60	50	18
	P <sub>14</sub>	108	64	20
	P <sub>15</sub>	36	33	—
	P <sub>16</sub>	42	40	—
	P <sub>17</sub>	62	54	—
	P <sub>18</sub>	33	26	—
F-45	P <sub>1</sub>	85	69	49
	P <sub>2</sub>	92	86	44
	P <sub>3</sub>	59	52	65
	P <sub>4</sub>	87	82	42
	P <sub>5</sub>	120	95	89
	P <sub>6</sub>	85	58	56
	P <sub>7</sub>	84	71	55
	P <sub>8</sub>	109	101	44

	No.	長径	短径	深さ
F-45	P <sub>9</sub>	97	82	77
	P <sub>10</sub>	79	53	52
F-46	P <sub>1</sub>	49	48	34
	P <sub>2</sub>	39	30	18
	P <sub>3</sub>	47	45	36
	P <sub>4</sub>	52	47	29
	P <sub>5</sub>	51	44	28
	P <sub>6</sub>	32	25	15
	P <sub>7</sub>	59	52	40
	P <sub>8</sub>	68	59	34
F-47	P <sub>1</sub>	70	50	52
	P <sub>2</sub>	(60)	(60)	—
	P <sub>3</sub>	71	66	33
	P <sub>4</sub>	69	67	51
	P <sub>5</sub>	83	66	38
	P <sub>6</sub>	92	83	47
	P <sub>7</sub>	93	67	36
	P <sub>8</sub>	68	62	25
	P <sub>9</sub>	82	73	43
	P <sub>10</sub>	51	36	42
F-48	P <sub>1</sub>	67	58	35
	P <sub>2</sub>	76	62	35
	P <sub>3</sub>	70	67	43
	P <sub>4</sub>	86	68	39
	P <sub>5</sub>	81	74	50
	P <sub>6</sub>	73	70	40
	P <sub>7</sub>	104	72	39
	P <sub>8</sub>	84	76	44
	P <sub>9</sub>	76	64	45
	P <sub>10</sub>	77	73	33
F-49	P <sub>1</sub>	68	65	46
	P <sub>2</sub>	80	69	28
	P <sub>3</sub>	83	65	30
	P <sub>4</sub>	68	62	12
	P <sub>5</sub>	69	52	12
	P <sub>6</sub>	85	73	30
F-50	P <sub>1</sub>	36	33	16

	No.	長径	短径	深さ
F-50	P <sub>2</sub>	46	42	40
	P <sub>3</sub>	38	37	27
	P <sub>4</sub>	46	43	20
	P <sub>5</sub>	68	42	36
	P <sub>6</sub>	38	37	16
	F-51	P <sub>1</sub>	70	58
P <sub>2</sub>		61	36	19
P <sub>3</sub>		59	56	19
P <sub>4</sub>		65	58	34
P <sub>5</sub>		32	32	33
P <sub>6</sub>		68	67	35
F-52	P <sub>1</sub>	82	75	67
	P <sub>2</sub>	95	56	54
	P <sub>3</sub>	85	70	47
	P <sub>4</sub>	100	94	61
	P <sub>5</sub>	78	70	68
	P <sub>6</sub>	81	62	58
	P <sub>7</sub>	85	74	64
	P <sub>8</sub>	84	69	43
F-53	P <sub>1</sub>	72	67	55
	P <sub>2</sub>	72	67	50
	P <sub>3</sub>	64	64	—
	P <sub>4</sub>	74	70	56
	P <sub>5</sub>	88	88	45
	P <sub>6</sub>	69	64	22
	P <sub>7</sub>	61	47	21
F-54	P <sub>1</sub>	60	60	50
	P <sub>2</sub>	65	62	61
	P <sub>3</sub>	56	52	59
	P <sub>4</sub>	69	62	50
	P <sub>5</sub>	69	62	42
	P <sub>6</sub>	62	52	56
	P <sub>7</sub>	93	57	55
	P <sub>8</sub>	65	56	51
	P <sub>9</sub>	50	50	43
	P <sub>10</sub>	71	60	50
F-55	P <sub>1</sub>	106	102	63

第160表 掘立柱建物址ピット一覧表〈その5〉

	No	長径	短径	深さ	
F-55	P <sub>2</sub>	88	87	67	
	P <sub>3</sub>	88	80	53	
	P <sub>4</sub>	79	67	37	
	P <sub>5</sub>	63	58	37	
	P <sub>6</sub>	76	66	37	
	P <sub>7</sub>	105	70	36	
	P <sub>8</sub>	82	57	40	
	P <sub>9</sub>	70	70	34	
	P <sub>10</sub>	95	61	56	
	F-56	P <sub>1</sub>	(55)	(55)	—
P <sub>2</sub>		63	59	37	
P <sub>3</sub>		85	84	27	
P <sub>4</sub>		97	72	47	
P <sub>5</sub>		65	64	24	
P <sub>6</sub>		64	60	38	
P <sub>7</sub>		(55)	(55)	—	
F-57	P <sub>1</sub>	57	54	29	
	P <sub>2</sub>	45	44	53	
	P <sub>3</sub>	48	47	39	
	P <sub>4</sub>	52	51	44	
	P <sub>5</sub>	60	58	38	
	P <sub>6</sub>	76	70	45	
	P <sub>7</sub>	62	49	40	
	P <sub>8</sub>	55	45	40	
	P <sub>9</sub>	60	54	34	
	P <sub>10</sub>	79	73	44	
F-58	P <sub>1</sub>	52	45	24	
	P <sub>2</sub>	62	53	53	
	P <sub>3</sub>	38	34	14	
	P <sub>4</sub>	42	42	38	
	P <sub>5</sub>	36	34	23	
	P <sub>6</sub>	42	39	23	
	P <sub>7</sub>	42	41	49	
F-59	P <sub>1</sub>	65	64	46	
	P <sub>2</sub>	60	58	31	
	P <sub>3</sub>	102	73	28	
	P <sub>4</sub>	52	48	25	
F-59	P <sub>5</sub>	79	77	35	
	P <sub>6</sub>	73	65	29	
	P <sub>7</sub>	78	71	27	
	P <sub>8</sub>	57	54	25	
	P <sub>9</sub>	50	48	19	
	F-60	P <sub>1</sub>	52	48	23
		P <sub>2</sub>	63	56	35
		P <sub>3</sub>	60	55	30
		P <sub>4</sub>	61	56	30
P <sub>5</sub>		78	48	24	
P <sub>6</sub>		60	55	29	
F-61	P <sub>1</sub>	30	30	21	
	P <sub>2</sub>	36	29	16	
	P <sub>3</sub>	30	22	11	
	P <sub>4</sub>	32	31	50	
	P <sub>5</sub>	30	27	28	
	P <sub>6</sub>	30	30	16	
	P <sub>7</sub>	34	28	24	
	P <sub>8</sub>	34	30	25	
	P <sub>9</sub>	(33)	(31)	(26)	
F-62	P <sub>1</sub>	94	45	10	
	P <sub>2</sub>	85	79	24	
	P <sub>3</sub>	45	39	18	
	P <sub>4</sub>	30	30	17	
	P <sub>5</sub>	80	54	16	
	P <sub>6</sub>	92	65	20	
	P <sub>7</sub>	75	57	17	
	P <sub>8</sub>	47	35	12	
	P <sub>9</sub>	63	22	10	
	P <sub>10</sub>	32	25	—	
F-63	P <sub>1</sub>	57	54	28	
	P <sub>2</sub>	72	65	33	
	P <sub>3</sub>	51	50	23	
	P <sub>4</sub>	57	54	35	
F-64	P <sub>1</sub>	84	72	69	
	P <sub>2</sub>	97	76	42	
	P <sub>3</sub>	87	78	34	
F-64	P <sub>4</sub>	112	82	68	
	P <sub>5</sub>	89	68	67	
	P <sub>6</sub>	77	60	43	
F-65	P <sub>1</sub>	67	58	32	
	P <sub>2</sub>	96	66	35	
	P <sub>3</sub>	78	58	39	
	P <sub>4</sub>	68	55	42	
F-66	P <sub>1</sub>	74	65	37	
	P <sub>2</sub>	75	65	50	
	P <sub>3</sub>	72	65	59	
	P <sub>4</sub>	69	68	40	
	P <sub>5</sub>	72	64	52	
	P <sub>6</sub>	80	62	45	
	P <sub>7</sub>	67	64	48	
	P <sub>8</sub>	86	70	50	
	P <sub>9</sub>	84	74	52	
	P <sub>10</sub>	64	58	39	
F-67	P <sub>1</sub>	98	81	44	
	P <sub>2</sub>	90	80	39	
	P <sub>3</sub>	104	89	51	
	P <sub>4</sub>	77	71	36	
	P <sub>5</sub>	82	51	35	
	P <sub>6</sub>	94	77	47	
F-68	P <sub>1</sub>	73	61	45	
	P <sub>2</sub>	52	50	54	
	P <sub>3</sub>	90	70	55	
	P <sub>4</sub>	54	50	49	
	P <sub>5</sub>	65	63	28	
	P <sub>6</sub>	74	65	54	
	P <sub>7</sub>	47	45	56	
	P <sub>8</sub>	50	42	41	
	P <sub>9</sub>	52	47	43	
	P <sub>10</sub>	46	45	41	
	P <sub>11</sub>	77	54	—	
	P <sub>12</sub>	61	59	—	
F-69	P <sub>1</sub>	54	49	63	
	P <sub>2</sub>	85	66	50	

第160表 掘立柱建物址ピット一覧表〈その6〉

	No.	長径	短径	深さ
F-69	P <sub>3</sub>	46	38	53
	P <sub>4</sub>	80	44	48
	P <sub>5</sub>	53	50	53
	P <sub>6</sub>	64	52	48
	P <sub>7</sub>	57	53	64
	P <sub>8</sub>	60	53	65
F-70	P <sub>1</sub>	69	60	39
	P <sub>2</sub>	82	70	27
	P <sub>3</sub>	70	67	36
	P <sub>4</sub>	69	62	37
F-71	P <sub>1</sub>	56	54	30
	P <sub>2</sub>	46	43	32
	P <sub>3</sub>	53	49	31
	P <sub>4</sub>	50	46	23
	P <sub>5</sub>	72	37	37
	P <sub>6</sub>	44	44	40
	P <sub>7</sub>	42	41	25
	P <sub>8</sub>	46	45	32
	P <sub>9</sub>	65	51	35
	P <sub>10</sub>	55	50	29
F-72	P <sub>1</sub>	72	67	55
	P <sub>2</sub>	75	73	57
	P <sub>3</sub>	72	63	55
	P <sub>4</sub>	72	64	47
	P <sub>5</sub>	86	78	51
	P <sub>6</sub>	70	70	50
F-73	P <sub>1</sub>	(45)	(45)	—
	P <sub>2</sub>	(50)	(50)	—
	P <sub>3</sub>	58	57	27
	P <sub>4</sub>	57	54	46
	P <sub>5</sub>	55	55	30
	P <sub>6</sub>	53	53	(37)
	P <sub>7</sub>	61	56	(28)
	P <sub>8</sub>	(48)	(48)	—
F-74	P <sub>1</sub>	46	44	29
	P <sub>2</sub>	47	42	29
	P <sub>3</sub>	49	49	32
F-74	P <sub>4</sub>	50	47	30
	F-75	P <sub>1</sub>	42	34
P <sub>2</sub>		50	40	28
P <sub>3</sub>		40	37	22
P <sub>4</sub>		45	33	28
F-76	P <sub>1</sub>	63	60	45
	P <sub>2</sub>	53	49	34
	P <sub>3</sub>	56	48	34
	P <sub>4</sub>	51	48	40
F-77	P <sub>1</sub>	60	60	50
	P <sub>2</sub>	51	50	54
	P <sub>3</sub>	59	59	58
	P <sub>4</sub>	62	45	45
F-78	P <sub>1</sub>	62	55	25
	P <sub>2</sub>	55	54	25
	P <sub>3</sub>	56	47	27
	P <sub>4</sub>	50	45	20
	P <sub>5</sub>	107	54	42
	P <sub>6</sub>	77	68	28
	P <sub>7</sub>	65	59	30
F-79	P <sub>1</sub>	61	47	26
	P <sub>2</sub>	66	55	24
	P <sub>3</sub>	54	48	14
	P <sub>4</sub>	(49)	(49)	—
	P <sub>5</sub>	(49)	(49)	—
	P <sub>6</sub>	(49)	(49)	—
	P <sub>7</sub>	(49)	(49)	—
	P <sub>8</sub>	70	50	15
	P <sub>9</sub>	56	50	17
	P <sub>10</sub>	48	44	44
F-80	P <sub>1</sub>	86	68	63
	P <sub>2</sub>	100	96	56
	P <sub>3</sub>	91	90	51
	P <sub>4</sub>	95	90	44

## 3 土 壙

土壙は、第Ⅰ区から第Ⅴ区において総数52基が検出された。

各区の内訳は、第Ⅰ区で29基、第Ⅱ区で19基、第Ⅲ区・第Ⅳ区はともに検出されず、第Ⅴ区において4基検出された。

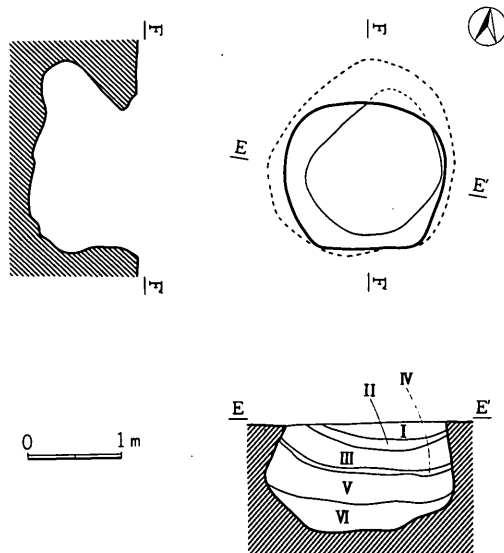
ここでは、検出された個々の土壙について取り上げるスペースがないため、そのうちの主なものについてふれておくことにする。

## (1) D-1号土壙 第435図

D-1号土壙は、第Ⅰ区ター37グリッドにおいて検出された。

D-1は、その上面は1.6m×1.7mの円形を呈しているが、底面にかけてやや広がり、いわゆるフラスコ状の断面形態を呈しているものである。その土層堆積は、いずれも均等な堆積をみせる6層に分層された。Ⅰ層は若干のカーボンを含む黒褐色土層、Ⅱ層は多量のロームを含む灰褐色土層、Ⅲ層は若干のパミスを含む黒褐色土層、Ⅳ層は多量のロームを含む灰褐色土層、Ⅴ層はパミスを含む黒褐色土層、Ⅵ層はロームをよく含む茶褐色土層であった。

なお、本址の覆土中からは、1. 2の底部回転ヘラケズリのなされた須恵器片、3の土師器小



第435図 D-1号土壙実測図 (1:80)

形甕の他、須恵器蓋・甕破片、土師器甕破片等が検出されている。

## (2) D-4号土壌 第436図

D-4号土壌は、第I区ター37グリッドにおいて検出された。

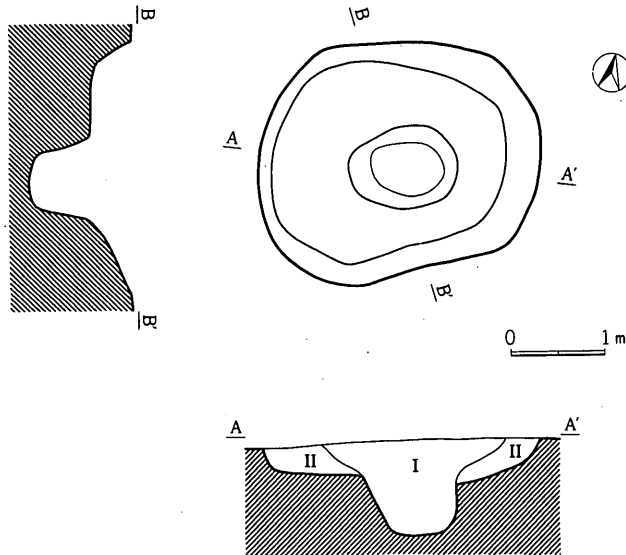
D-4は、平面形が楕円状を呈し断面形が逆凸状を呈する土壌で3.1m×2.5m深さ1.0mを測る。覆土は2層に分層された。I層はパミスを含む黒色土層、II層はパミスとローム粒子を含む黒褐色土層であった。

なお、本土壌中からは、1の回転ヘラキリのなされた須恵器坏底部の他、内面黒色研磨のなされた土師器坏破片、底部回転糸切りの後周囲手持ちヘラケズリのなされた須恵器坏破片、土師器甕・須恵器甕破片等が検出されている。

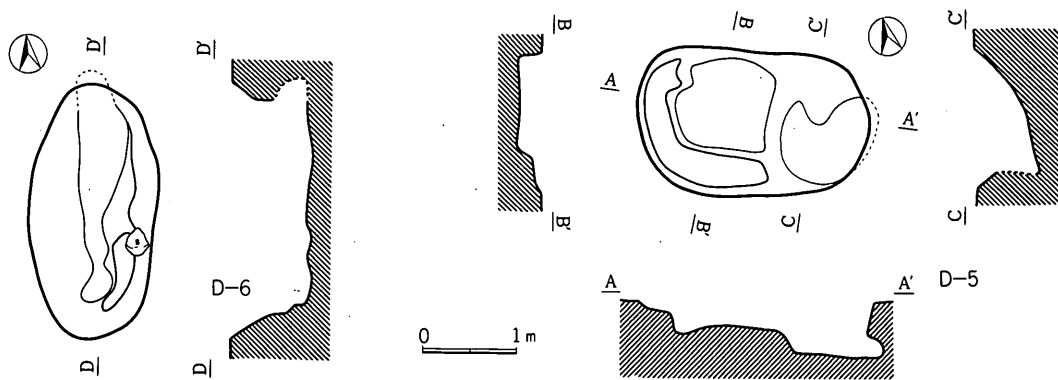
## (3) D-6号土壌 第437図

D-6号土壌は、第I区セー42グリッドにおいて検出され、F-9号掘立柱建物址を切って存在している。

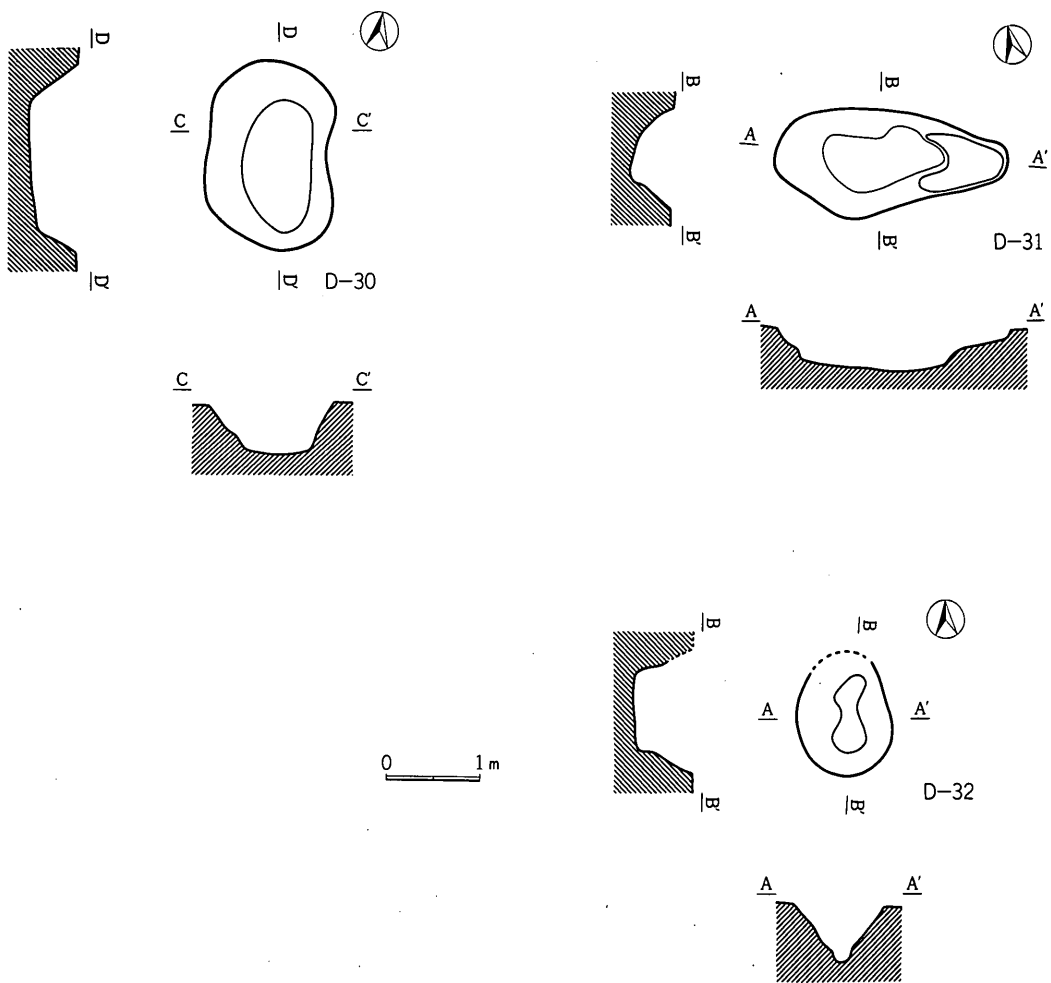
D-6は、2.6m×1.3mの長楕円形を呈する土壌で、深さ90cmを測る。なお、本土壌からは遺物はまったく遺物されていない。



第436図 D-4号土壌実測図 (1:80)



第437图 D-6, D-5号土壤实测图 (1:80)



第438图 D-30, D-31, D-32号土壤实测图 (1:80)

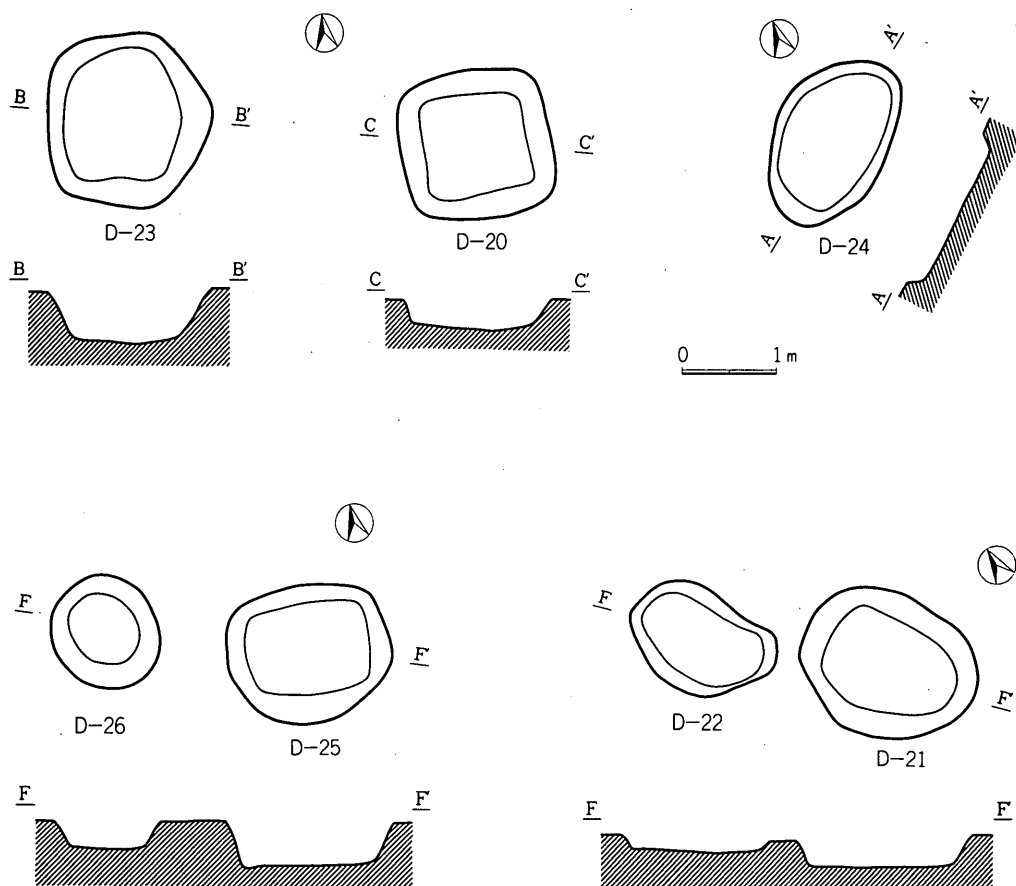
## (4) 第I区シー41・42グリッドの土壌群 第438図

第I区シー41・42グリッドにかけては、D-2・D-3・D-9・D-29～D-36の12基の土壌が検出されたが、これらの各土壌はいずれもやや歪んだ小形の楕円形を呈しており、一連の土壌群として把握できよう。そして、これらは住居址・掘立柱建物址のいずれとも切り合わず、独自のまとまりを見せているため、前田遺跡のある時期を構成する集落に伴って形成されたものと考えられることもできる。

なお、これらの各土壌からは遺物はまったく検出されていない。

## (5) 第I区ソー41グリッドの土壌群 第439図

第I区ソー41グリッドにおいては、D-20～D-26の7基の土壌が検出されている。これらの



第439図 D-23・20, D-24, D-26・25, D-22・21号 (1:80) 土壌実測図

土壙も、その形状・分布等のまとまりをみせており、一連の土壙群として捉えられよう。

これらのうち、D-21・D-22・D-24・D-26はやや歪んだ楕円形を呈しており、D-20・D-23・D-25は隅丸方形のプランをみせている。

なお、これらの土壙群も本遺跡のある時期の集落に付随するものと考えることができよう。

## (6) 第Ⅱ区シ・ス-23・24・25グリッドの土壙群 第440・441図

第Ⅱ区シ・ス-23・24・25グリッドにおいて検出された土壙のうち、D-10～D-17号土壙はいずれも長楕円形を呈しその断面形も一致するもので、一連の土壙群として捕らえた。

これらの土壙からは遺物がまったく検出されていないため、その時期決定が難しいが、D-15はH-62号住居址に、D-16はH-60号住居址に切られており、この両住居址は古墳時代中期に位置付けられるものであるため、これらの土壙が同一期に所産であるとすればそれは古墳時代中期以前ということになる。なお、各土壙の主軸方向はまちまちといえる。

以下、各土壙の覆土について説明する。

D-12号土壙覆土は、2層に分層された。I層は小パミスを含む黒褐色土層、II層がローム粒子を含む黄褐色土層で、ともに粘性のない土層であった。

D-13号土壙覆土は、2層に分層された。I層が黒褐色土層、II層が黒色土層で、ともにパミスを含まず粘性のない土層であった。

D-15号土壙覆土は、2層に分層された。I層は少量のパミスとローム粒子を含む黒色土層、II層は多量のロームを含みパミスをよく含む茶褐色土層であった。

D-16号土層覆土は、3層に分層された。I層が多量のローム粒子を含みパミスをよく含む茶褐色土層、II・III層が少量のロームとパミスを含む黒褐色土層であった。

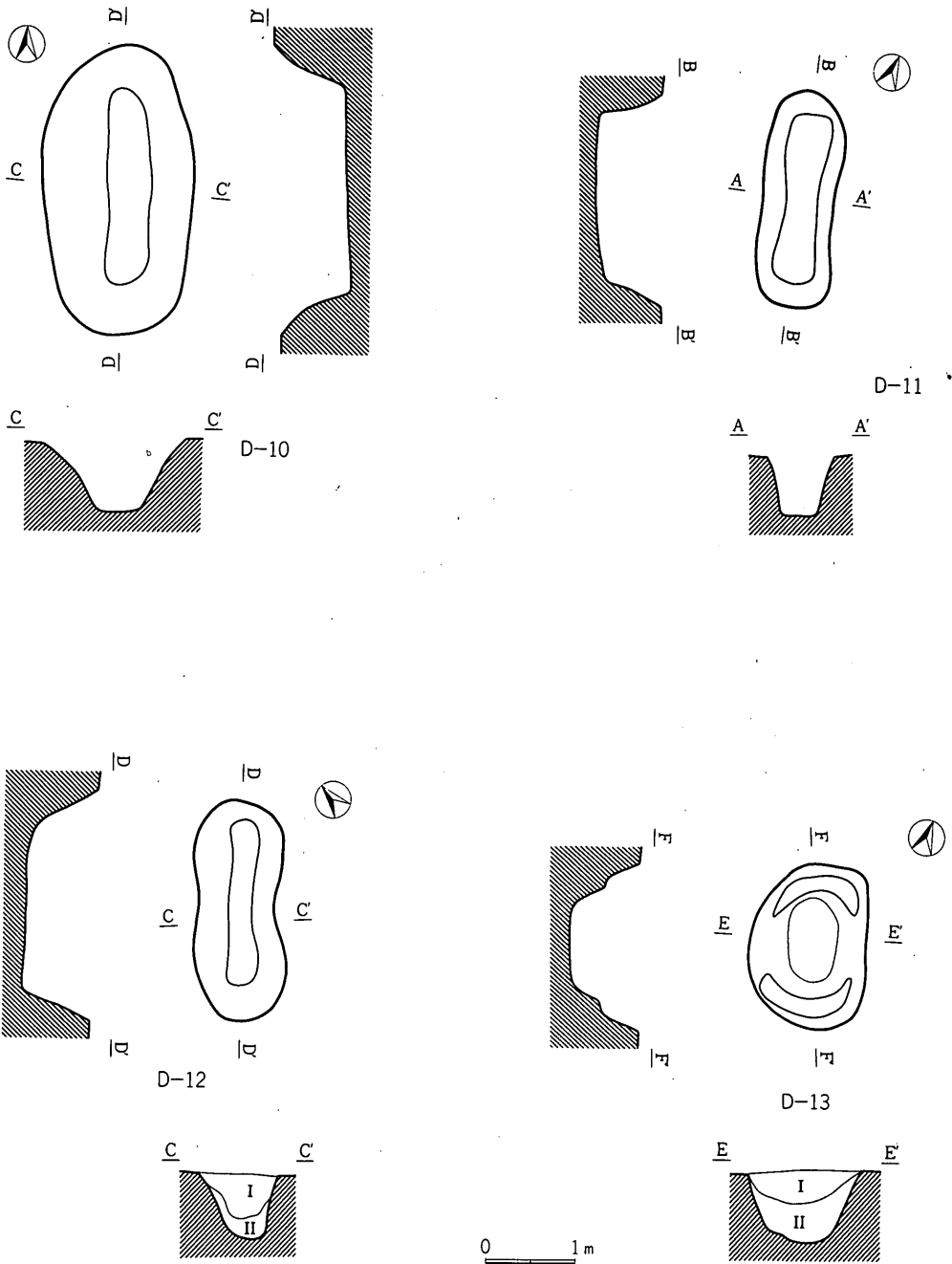
## (7) D-52号土壙

D-52号土壙は、第Ⅴ区ニ-37グリッドにおいて検出された。

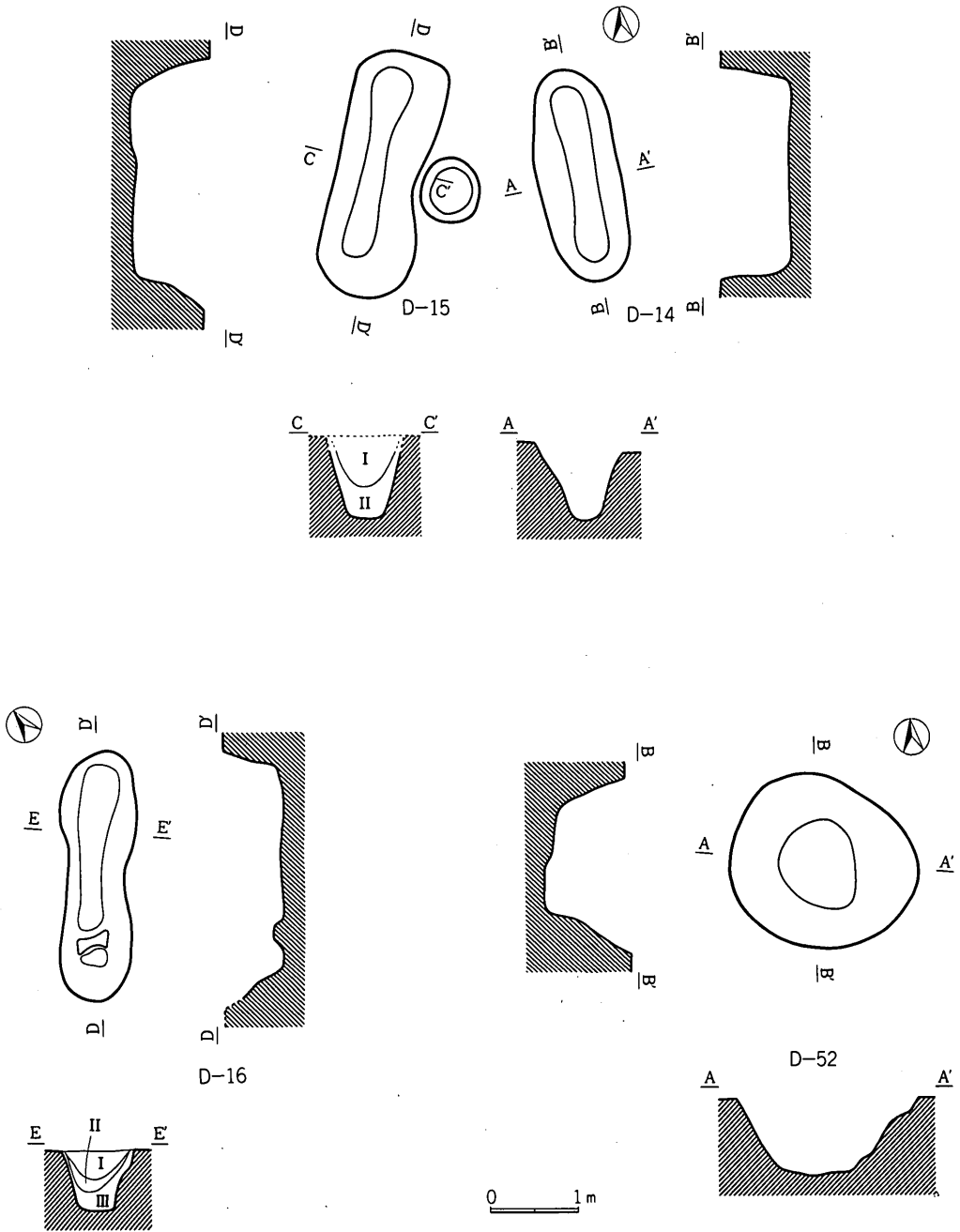
D-52は、2.1m×2.0mの円形を呈し、断面は深さ0.9mを測る逆台形状を呈する土壙である。

本土壙からは、1・2の底部回転ヘラケズリのなされた須恵器環の他、内面黒色研磨のなされた土師器環破片、須恵器甕破片等が検出されている。



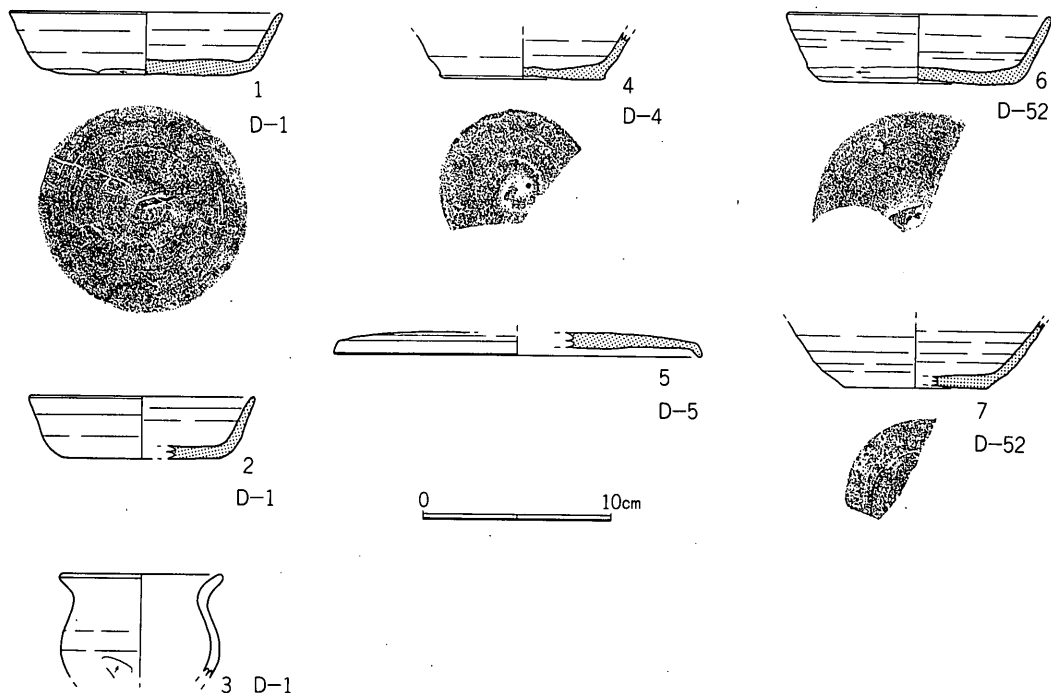


第440図 D-10, D-11, D-12, D-13号土坑実測図 (1:80)



第441图 D-15·14, D-16号土壤 D-52号土壤实测图 (1:80)

IV 遺構と遺物



第442図 土壌出土遺物 (1 : 4)

第161表 土壌出土遺物一覧表〈土器〉

押図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	14.5 3.3 11.0	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	D-1出土 胎土は比較的精選された灰白色(10Y7/1)
2 (回)	坏 (須)	<12.0> 3.2 <8.4>	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	D-1出土 胎土は砂粒を含み灰色(5Y5/1)内外面に自然黏付着
3 (回)	甕	(8.5) — —	口縁部は「く」の字状に外反し、胸部のやや膨らむ小形の器形	外面 口縁部~胸部上半ロクロヨコナデ、胸部下半ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	D-1出土。胎土は比較的精選され橙色(7.5YR6/6)焼成良好
4 (回)	坏 (須)	— — (8.8)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラケリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	D-4出土 胎土は砂粒を含み灰色(5Y6/1)内外面に自然黏付着
5 (回)	蓋 (須)	— — (19.6)	天井部の高まらない偏平な形状を呈する。つまみ部形状不明	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	D-5出土 胎土は砂粒を含み灰白色(7.5Y7/1)
6 (回)	坏 (須)	(14.0) 3.6 (10.3)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	D-52出土 胎土は砂粒を含み灰色(5Y4/1)焼成良好
7 (回)	坏 (須)	— — (7.5)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	D-52出土 胎土は砂粒を含み灰白色(10Y7/1)

## 4 溝状遺構

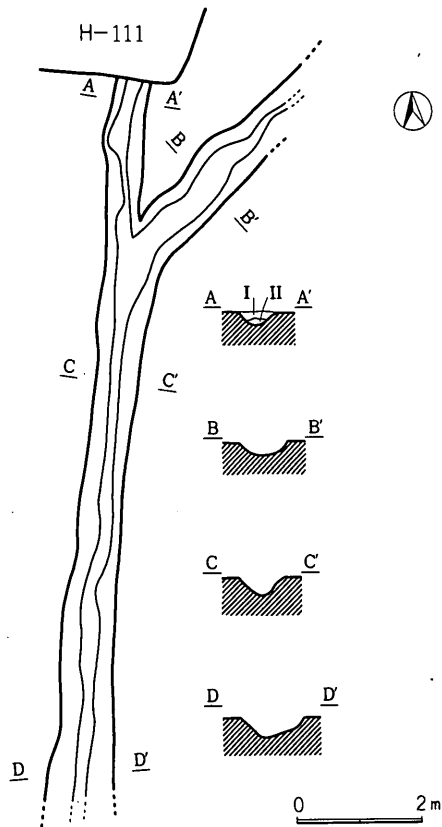
## (1) M-1号溝状遺構 第443図

M-1号溝状遺構は、第V区ト・ナー38グリッドにおいて検出された。

M-1は、38列を南北に延びる溝であり、図には示していないがニ-38グリッド・テ-38グリッドにおいてもそのプランは確認できた。なお、M-1はナー38グリッドにおいてH-111号住居址に切られており、少なくともその所産期はH-111号住居址の所産期である前田遺跡第IV期以前と考えられる。

M-1は、その幅およそ60~100cm深さ30cm程を測るもので、その覆土は2層に分層された。I層は黒色土層、II層は黒灰色の砂層であった。II層の堆積により本溝遺構において水の流れたことを認めることができ、本遺構が水路としての機能を果たしていたことを想定させる。

なお、M-1からは須恵器甕の破片三片が検出されたのみである。



第443図 M-1号溝状遺構実測図 (1:120)

## 5 表面採集遺物 第444図

表面採集遺物は、およそテンバコ1箱分程あるが、そのうちの主なものを図示した。

- 1・2は須恵器坏で、奈良時代の遺物と考えられる。2は、高台付坏である。第I区表採品。
- 3は、土師器坏で、古墳時代後期の所産かと考えられる。第I区表採品。
- 4・5は、土師器小形丸底甕である。奈良時代の遺物と考えられようか。第I区表採品。
- 6・7は、須恵器長頸瓶の頸部で、沈線が施こされたものである。6は第II区表採品。
- 8は、土製の紡錘車で、山口伸彦氏の採集品である。第V区付近のものと思われる。
- 9も、山口伸彦氏の採集品で、石臼の欠損品である。第III区付近採集。

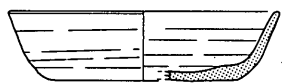
第162表 表面採集遺物一覧表〈土器〉

押図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	(14.4) 3.7 (10.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	第I区表面採集遺物 胎土は灰白色 (2.5YR8/2) 完全な珪元素焼成 となっていない。
2 (回)	坏 (須)	— — —	体部には高台の貼り付けられた痕跡が残る。	外面 体部ロクロヨコナデ、底部切り離しの後、 手持ちヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	第I区表面採集遺物 胎土は砂粒を 含み黒褐色 (10YR3/2)
3 (回)	坏	<14.3> 4.0 —	底部は偏平な丸底を呈し、稜をもった後、 直線的に外反する口縁部となる。	外面 口縁部ヨコナデの後、底部手持ちヘラケズリ 内面 ヨコヘラミガキ	第I区表面採集遺物 胎土は砂粒を 多く含み褐色 (7.5YR6/6)
4 (完)	甕	14.8 15.8 —	口縁部は外反し、胴部球状を呈し、底部 丸底の小形の器形。完形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部縦位のヘラケズリ 内面 刷毛目状調整と若干のヘラミガキが認められる。	第I区表面採集遺物 胎土は砂粒を 多く含み褐色 (7.5YR6/6)
5 (完)	甕	12.1 12.4 —	口縁部は外反し、胴部球状を呈し、底部 丸底の小形の器形。完形	外面 口縁部ヨコナデの後、胴部縦位のヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	第I区表面採集遺物 胎土は砂粒を 多く含み褐色 (7.5YR4/4)
6 (完)	長頸瓶 (須)	— — —	口縁部から頸部にゆくにつれてすぼまる 器形	外面 ロクロヨコナデ、二条の沈線が施される。 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ右回転)	第II区表面採集 胎土は若干の砂 粒を含み灰白色 (7.5Y6/1)
7 (完)	長頸瓶 (須)	— — —	頸部は中位から下位につれて、太まる器 形を呈する。	外面 ロクロヨコナデ、頸部に一条の沈線が施される。 内面 ロクロヨコナデ (ロクロ回転不明)	胎土は精選されず 灰色(7.5Y6/1) 外面には自然釉 が付着する。

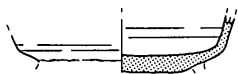
第163表 表面採集遺物一覧表〈土製品・石器〉

押図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
8	紡錘車	土製品	7.3	7.3	2.7	175	
9	石臼	輝石 安山岩	(12.0)	26.8	12.6	(4,800)	

5 表面採集遺物



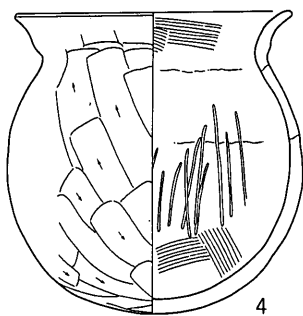
1



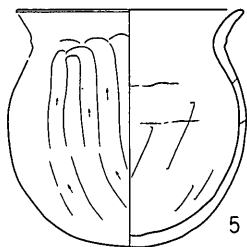
2



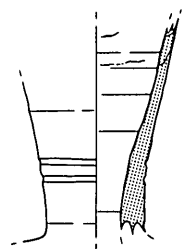
3



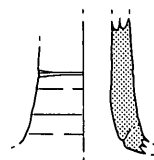
4



5

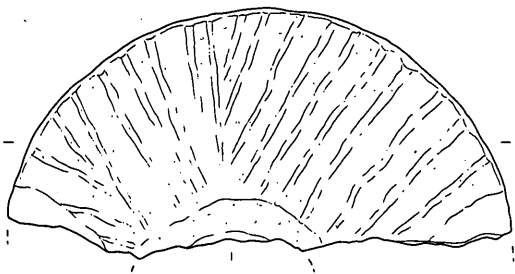


6

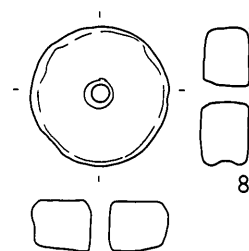
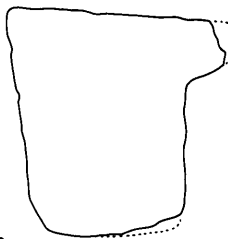


7

0 10cm

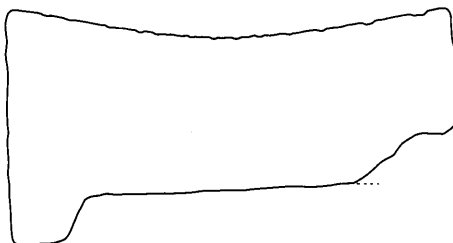


9



8

0 5cm



0 10cm

第444図 表面採集遺物（8のみ1：3，他は1：4）



# V 総 括

## 1 はじめに

最後に、鑄師屋遺跡群前田遺跡の発掘調査成果についての整理を試み、それに若干の考察を加え、総括としたい。

その手順としては、まず各時代毎の土器様相を把握し、その時期細分を試みる。次に、そこにおいて細分された時期別に集落様相を明らかにしよう。そして各期の集落がどのような変遷を辿るのかを捉えてみる。また、それと併行させ遺構の構造等にもふれてみることにしよう。

## 2 前田遺跡における古墳時代中・後期の土器様相

### (1) 古墳時代中期（前田遺跡第Ⅰ期）

本遺跡の第Ⅱ区においては、古墳時代中期に比定できる住居址が5軒検出されている。すなわち、H-60・H-61・H-62・H-65・H-71の各住居址である。これらのうち、H-60・H-61号住居址の出土遺物は比較的充実したものであり、当該期の土器様相を知るうえでの格好な資料であるといえる。この2軒の住居址の資料を中心に本遺跡の古墳時代中期の土器様相についてふれてみることにする。

なお、当該期は前田遺跡において集落が形成される初源期であり、これをもって前田遺跡第Ⅰ期と位置付けよう。

#### 1 各器種の特徴 第445図

本遺跡において古墳時代中期に位置付けることのできる土器には次の器種がみられる。須恵器では甗・蓋、土師器では手捏・坏・高坏・器台・埴・甑・壺・甕・小形甕の各器種である。

以下、各器種の個々について述べる。

#### 須恵器

甗 甗はH-60で1点、H-61で2点検出されている。いずれもやや肩の張る球胴をみせ、頸部から口縁部にかけてシャープな稜を有し、均整のとれた器形を呈している。また、H-60・1は頸部に波状文が施されている。3個体とも外面に自然釉が認められるが、ことにH-61の1が顕著である。



蓋 蓋はH-65号住居址において1点検出されている。天井部は丸味をおびるものの偏平で、その端において鋭い稜をもった後、直降する体部へと続き、平坦な面をなした口唇部となるプロポーションを見せるものである。口唇部はヘラケズリによらない。内外面ともに自然釉は付着していない。

さて、これらの須恵器4点は、いわゆる「初期須恵器」と呼称されているものの範疇に入るものと思われる。「初期須恵器」は、これまで和泉陶邑窯における一元的供給品と考えられていたが、近年愛知県東山218号窯（荒木他 1978）・宮城県大蓮寺窯（渡辺他 1976）等地方窯の存在が知られるようになり、多元的供給も想定されつつある。

このような問題も含めて、本4点の須恵器をめぐる論考を木下氏に寄稿していただき、付編として掲載することとした。したがってここでは、これ以上ふれないことにする。

また、本4点の須恵器についての原産地同定の手掛りを得るため、奈良教育大学三辻利一教授に胎土分析を依頼した。これについても付編として掲載するが、本稿の段階においては胎土分析の結果が得られていないため、その成果に対する見解は別の機会に提示しよう。

ところで、「初期須恵器」は、通常古墳の副葬品等としてみられ、一般集落からの出土はあまり認められない。須恵器が奈良時代以後にあって日常の食器等として用いられるようになるのとは異なり、「初期須恵器」が祭祀的な性格を色濃く帯びていることを示す証左であろう。

本遺跡においても、甕の検出されたH-61号住居址からは有孔円板2点が検出され、手捏土器などの存在もあって屋内祭祀が行われたことであろうことを窺わせている。これら4点の貴重な須恵器は、一般の日常雑器とは異なり祭器として用いられたものと想定しておこう。

#### 土師器

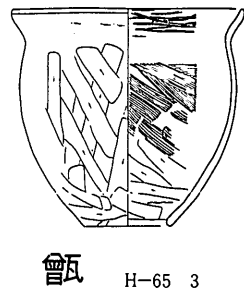
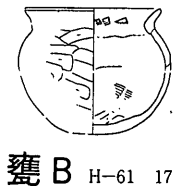
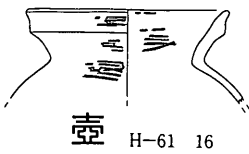
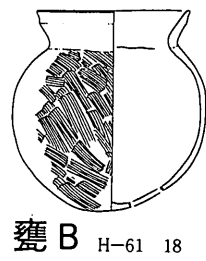
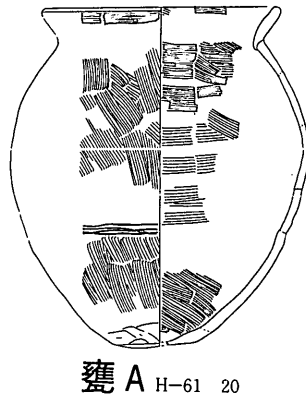
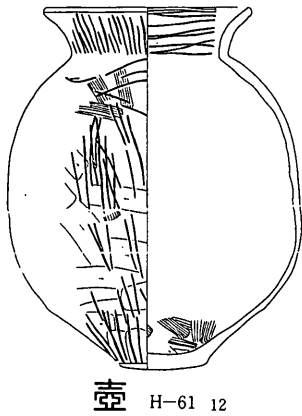
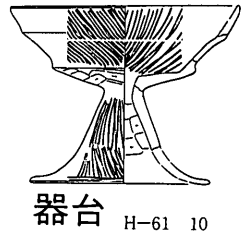
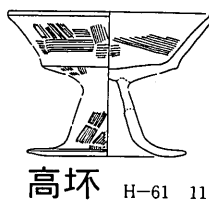
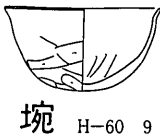
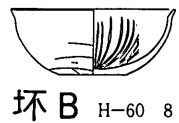
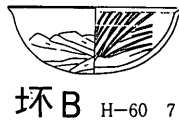
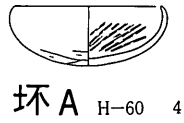
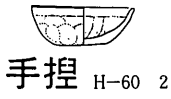
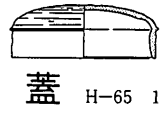
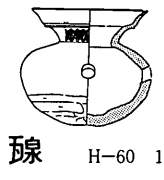
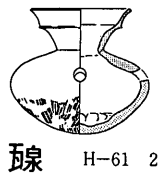
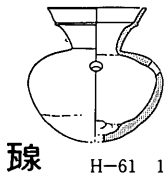
手捏 手捏土器は、坏形態のものが2点（H-60・2、H-62・1）、高坏形態のものが1点（H-61・1）みられた。

坏 坏には、A・Bがみられる。

A 素口縁・丸底・口縁部内湾の特徴をみせるもの。内面は放射状にヘラミガキがなされ、外面体部下半～底部にかけてはヘラケズリ、口縁部はヨコナデかヘラミガキがなされる。3個体認められた（H-60・4、H-61・3、H-65・2）。

B 体部が丸味を帯びて外湾し、口縁部で短く強く外反するもの。ほとんどが丸底となっているが、平底の例もある（H-60・8）。また、口縁部が僅かに立ち上がる特徴をみせるものもある（H-60・7、H-61・4）。器形の大きさにも大小バラエティをみせる。調整では、内面に放射状のヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、外面体部下半～底部にヘラケズリのなされる場合が多い。6個体認められた（H-60・5・6・7・8、H-61・4・5）。

2 前田遺跡における古墳時代中・後期の土器様相



第445図 第I期土器分類図

坩 体部が湾曲し、口縁部で短く外反するもの。器形は坏Bと相似形をなすが、口径に対し器高の数値が高いものを坩として捉えた。底部は平底（H-61・6）丸底（H-60・9）の両者が認められる。調整は、口縁部はヨコナデ、外面体部～底部にはヘラケズリが一般的に認められ、内面にはヘラミガキのみられる場合もある。5個体認められた（H-60・9、H-61・6・7・8・9）。

高坏 4点（H-61・11、H-62・2・3・4）検出されているが、H-61・11を除くといずれも部分品である。H-61・11は坏部が稜を有し外反するが、H-62・2は坏部に稜を有さない。また、H-61・11においては刷毛目状調整がなされているが、他にはヘラミガキがなされている。H-61・4には赤色塗彩がなされている。

器台 器台は2点認められたが（H-60・10、H-61・10）、器形は高坏と何ら変わりのないものである。ただし双方とも坏部底において焼成前の穿孔が認められており、器台と認識した。H-61・10は、坏部底から体にかけて稜をもって変換し、さらに体部中央に鈍い稜を有する特徴的な器形をみせており、坏部内外面・脚部外面にはヘラミガキがなされている。

壺 壺と考えられるものは何個体か認められたが、いずれも部分であり、器形の全体を知り得るのはH-61・12のみであった。H-61・12は、外反する素口縁をみせ、胴部は球状を呈しその下位で鈍い稜をもって逆「八の字」状にすぼまり、平底へと至る器形をみせている。口縁部および胴部外面にはヘラミガキがなされ、胴部内面には刷毛目状調整を窺える。なお、H-61・16の壺の口縁部には鈍い稜が巡っており、有段もしくは折り返し口縁の名残かと思われる。

甕 甕としたもののうち器形の大方を知り得たのは5個体ある（H-60・13、H-61・17・18・19・20）。このなかでも、口縁が「く」の字状に外反し膨らんだ長胴を呈し平底をみせるA（H-60・13、H-61・20）と、小形・球胴・丸底・「く」の字状口縁のB（H-61・17・18・19）とが認められた。調整は全般に刷毛目状調整が顕著にみられる。なお、H-61・18の口縁には僅かに鈍い稜が認められ注意される。

甗 甗は3点認められた（H-60・11・12、H-65・3）。このうちH-60・11、H-65・3は近似した器形をみせている。すなわち、口縁部がゆるく外反し、胴部がゆるやかにすぼまり、径7～8cmを測る単孔の底部へと至る器形である。なお、他の1点、H-60・12は底部のみのため器形の全体を知り得ないが、底部の単孔の径が2cmと前二者に比べ小さいといえる。

## 2 前田遺跡第Ⅰ期土器群の編年の位置付け

### 編年の位置付け

これまで、前田遺跡の古墳時代中期に比定できうる土器群について、その器種構成と代表的な個体の把握につとめてきた。ここでは、その編年の位置付けについて考えてみよう。

さて、佐久平において古墳時代中期相当の土器群を伴出した遺跡には、佐久市市道遺跡（H-2・T-3）、同舞台場遺跡（H-25）、同中道遺跡、同西裏遺跡（T-1）、同北西久保遺跡、小諸市久保田遺跡等が散見される。このうち、良好な一括遺物が検出されすでに報告書の刊行をみたものは、市道遺跡（佐久市教育委員会 1976・西裏遺跡（佐久埋蔵文化財調査センター 1986）の二遺跡である。

まず、市道遺跡第2号住居址（H-2）・第3号竪穴状遺構（T-3）出土の土器群についてであるが、花岡氏によるとこの両者は「同時期の所産」として捉えられるという（花岡 1976）。そして、その器種構成は、高坏・埴・甕が主体的にみられ、僅かに坏・甑・須恵器蓋が伴うといったあり方をみせている。この器種構成は、坏・埴類が主体となる本土器群とは異なっており、両者の比較見当を困難なものにさせている。殊にメルクマールとなる土師器埴が、市道には多くみられるのに対し本群にはまったくみられないということがその決定的要因となっているものと思われる。

ところで、本土器群に後続して出現する前田遺跡第Ⅱ期の土器群中には埴3点が含まれている。これらの埴は、口縁部が短く、その最大径を胴部にもつものである。これに対し、市道遺跡の埴は、口縁部が長く、その最大径は口唇にあり、古式な要素をみせている。土師器埴における器形変化（口縁部の短縮化・最大径の口縁部から胴部への移動）を迫ってみても、市道の埴から前田Ⅱ期への埴へという継続的な器形変化は追えそうにない。したがって、前田第Ⅱ期に前続する第Ⅰ期の土器群中において、本来的には埴が存在していたとしても、それは市道遺跡における埴よりは新しい様相が見出せなければならないことになる。ここにおいて、きわめて消極的ではあるが、市道遺跡の土器群は、本Ⅰ期土器群に先行するものという捉えかたができる。また一方、市道遺跡においては、坏部底から体にかけてゆるやかな変換を呈する高坏が3点程見出せるが、これなども本Ⅰ期の稜の明瞭化した高坏等と比べ古い様相をみせているものと考えられよう<sup>(1)</sup>。いずれにしても本土器群は市道遺跡の古墳時代中期の土器群に後出するものとして捉えられようが、両者の関係が継続的であるのか、時間的間隙をもつのかという点については、今後佐久平の当該期資料の類例増加をまって論じられなければならない。

さて、次に西裏遺跡第1号特殊遺構出土遺物についてであるが、この中には壺・甕・坏・高坏などの器種がみられる。西裏の坏類は本群の坏類と形態的にはよく類似するようである。高坏は、

本群の高坏類に比べると坏体部の外頻度がゆるやかで口縁部にかけて丸味を帯びる特徴をみせており、本群よりやや新しい様相といえるかもしれない。また、西裏の土器様相は、後述する前田遺跡第Ⅱ期にあてはめてみても決しておかしいものではなく、西裏の土器群の位置付けの微妙さを露呈させている。このことは、西裏にみられる土師器器種の少なさにも起因しよう。したがって、ここではとりあえず、西裏の土器群が本Ⅰ期の土器群とほぼ同時期か、あるいはやや後出するものとして幅をもって捉えておきたい。

なお、千曲川水系においては、本Ⅰ期の土器群とほぼ同時期のものに、中野市新井大ロフ遺跡の一括資料（金井 1971 1982）、更埴市城内遺跡第Ⅲ期土器群（岩崎 1982）等があげられよう。また、長野市駒沢新町遺跡一号祭祀遺構一括資料（笹沢 1982）は、これらに先行するものとして捉えられようか。

#### 時間的位置付け

さて、当該土器群の時間的位置付けにあたっては、伴出した4点の須恵器が有力な手掛かりとなり得る。これら4点の須恵器については、和泉陶邑窯の製品であるかどうかの問題は別としても、いわゆる陶邑編年との比較において時間的位置付けを行うことができる。

4点の須恵器の詳細については付編に譲るとして、これらは陶邑のどの型式段階と対応するものであろうか。木下氏の御教示によれば、H-61・1の甕はTK-73、H-61・2の甕はTK-216、H-60・1の甕はTK-208、H-65・1の蓋はTK-216の各型式にそれぞれ対応させることができるという。すなわち、これら4点は陶邑における最古型式であるTK-73からTK-216・TK-208の3段階の範囲に収まるものとみることができる。<sup>(2)</sup>

実年代でいえば、TK-73・TK-216は五世紀第Ⅲ四半紀、TK-208は五世紀第Ⅳ四半紀の年代が与えられる。ここにおいて、本須恵器4点も五世紀第Ⅲ四半紀から第Ⅳ四半紀にかけてのものであることが想定できよう。

したがって、これら4点の須恵器を伴出した前田遺跡第Ⅰ期の土器群については、やや時間幅をもたせたにしても、五世紀第Ⅳ四半紀を中心に展開したものであると考えることができる。

#### 註

(1) 佐久市教育委員会 1976 『市道』 P P77、第43図1・2・3の高坏

(2) これらの須恵器の型式段階の異なりをもって本期がさらに細分される可能性も考えられようが、これらに伴う土師器の様相は共通し、細分されるべき可能性をみせていない。また、H-61においては、比定される型式の異なる甕が実際に共存している。よって、これらを含む土器群は一時期のものとして一括して扱われるべきものとする。

## (2) 古墳時代中期末(前田遺跡第Ⅱ期)

本遺跡第Ⅱ区においては、古墳時代中期末の集落が認められた。これは前田遺跡第Ⅰ期に継続して営まれるものであり、前田遺跡第Ⅱ期の集落として位置付けられる。

前田遺跡第Ⅱ期を構成する住居址は、H-63・H-66・H-67・H-75・H-77の5軒である。この5軒の住居址の出土土器について検討を加え、その土器様相を探ってみることにする。

## I 各器種の特徴 第446図

古墳時代後期初頭前田遺跡第Ⅱ期の土器群中に認められる器種としては、手捏・蓋・坏・埴・高坏・器台・埴・甑・壺・甕・小形甕などがある。いずれも土師器のみで、須恵器は認められなかった。

以下、個々の器種について述べる。

手捏 手捏土器は9点図示したが、まず内面赤色塗彩の無頸壺が特徴的に存在する(H-67・4・5、H-75・5)。また、鉢形態のものも2例みられ(H-63・8、H-75・3)、その一方には片口が付されている。坏形態もみられるようである(H-75・1・2・4、H-63・1)。

蓋 蓋は1点みられたのみであった(H-75・6)。つまみ部をもたず、偏平な半球状の器形を呈するものであった。

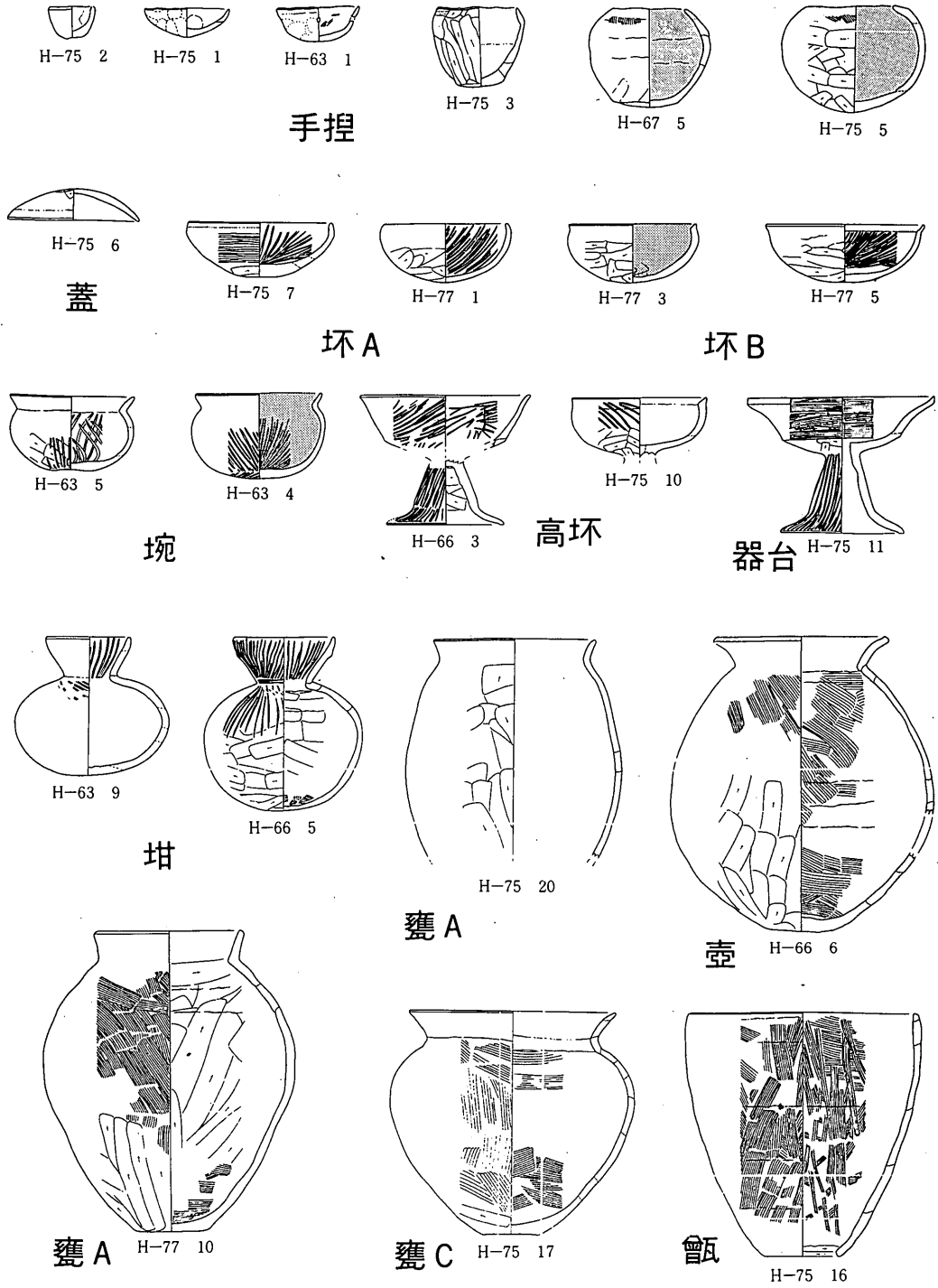
坏 坏には、第Ⅰ期と同様な器形をみせるA・Bがある。

A 素口縁・丸底・口縁部内湾の特徴をみせるもの。2個体を図示した(H-75・7、H-77・1)。内面に放射状のヘラミガキ・外面口縁部ヨコナデ・体部下半～底部ヘラケズリ等の調整が認められる。

B 丸底で、体部が丸味をおびて外半し、口縁部で短く強く外半するもの。口唇部が僅かに立ち上がる特徴をみせるものもある。基本的には、内面に放射状のヘラミガキ・口縁部ヨコナデ・外面体部～底部ヘラケズリの調整がなされる場合が多い。また内面黒色研磨のなされるものも2例認められる(H-63・3、H-77・3)。図示し得たのは、10個体である(H-63・2・3、H-66・1、H-67・1・2、H-75・8・9、H-77・3・4・5)。

埴 体部が球状を呈し、口縁部が短く外半するもの。底部は偏平な丸底をとっている。3個体を図示した(H-63・4・5、H-77・6)。内外面に放射状のヘラミガキがなされたり、内面黒色研磨がなされるものがある(H-63・4)。

高坏 高坏は11点を図示したが(H-66・3・4、H-67・3、H-75・10・13・14・15、H-77・7・8・9)、いずれも坏部または脚部の部分品で、器形の全体を知り得るもの



第446图 第II期土器分類图

ではない。脚部では「八」の字状に広がるものが多く、坏部では底部から体部にかけて稜をもって外半するものがほとんどであった。唯一例外として坏Bと同様な坏部をみせるものがある(H-75・10)。調整は全体的にヘラミガキが顕著といえる。

**器台** 器台は1点みられたのみで(H-75・11)、高坏の器形と同様なものであるが、坏底部に焼成前に穿孔がなされ器台となっている。坏部は稜をもって外反し、脚部はラッパ状に広がる。坏部内外面には刷毛目状調整、脚部外面にはヘラミガキがなされている。

**埴** 埴は3個体ある(H-63・9・10、H-66・5)。口縁部が外反し、胴部球状、底部平底を呈するもので、最大径が胴部中央にくるものである。このうち、H-66・5の口縁部には退化した稜がみられる。また、H-63・10はややなで肩となる胴部をみせている。調整は胴部内面以外にはヘラミガキが一般的に認められそうである。

**壺** 壺は、何個体か認められたが、H-66・6にみるように「く」の字状口縁を呈し胴部が下ぶくれの球状を呈する平底のものや、口縁部が直立する小形の短頸壺が2個体ほど検出された(H-63・11・12)。

**甕** 甕として捉えたもののなかでも、口縁部を残すものは10個体認められた。それらは、A・B・Cの3者に分類された。

A 口縁部が短くあまり強くなく外反し、長胴を呈するもの。長胴化は、カマドの登場に伴う器形変化と考えられる。3個体がこれに相当した(H-75・19・20、H-77・10)。

B 小形・球胴・「く」の字状口縁を呈するもの。3個体認められた(H-63・6・7、H-66・8)。

C 「く」の字状口縁を呈し、胴部はやや膨らんだ後すぼまり、底部平底となる器形をみせるもの。H-75・17に代表され、この他類例が4例程認められた(H-67・6・7、H-75・18、H-77・11)。

**甗** 甗は1点検出されたのみである(H-75・16)。素口縁で、底部にゆくにつれてゆるやかにすぼまる器形を呈している。底部は径の大きい単孔をとる。内外面には刷毛目状調整が顕著に認められた。

## 2 第Ⅰ期から第Ⅱ期にかかる土師器様相の同異について

第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけては、遺構においては、後述するように炉からカマドへというきわめて重大な火扱の変容が窺えるのである。それでは土器様相にはどのようなありかたの違いが認められるのであろうか。それについて若干ふれてみよう。

① 手捏土器は、Ⅰ期・Ⅱ期を通じて認められる。小形の坏形態は両時期に共通してみられる。



II期には内面赤彩の無頸壺・鉢が顕在化する。

- ② 土師器蓋はII期において1点のみ認められる。
- ③ 土師器坏A・Bの器形変化は、I期・II期を通じて認められない。内面放射状ヘラミガキ・口縁部ヨコナデ・体部下半～底部ヘラケズリという調整手法も基本的には変化がみられない。ただし、II期において内面黒色処理のなされるものが登場してくることは注意される。
- ④ 土師器碗では、II期においてより頸部が締まる器形をとることが窺える。また、坏と同様、II期において内面黒色処理のなされたものがみられる。
- ⑤ 土師器高坏では、坏底部と体部との境に稜をもって外半するものについては、I期・II期を通じて変化は認められない。また、坏Bにみられる器形の坏部を有するものが、II期には1点認められた(H-75・10)。
- ⑥ 土師器器台は、高坏と同様な器形を呈し底部に穿孔されたものが、I期・II期を通じて認められる。この中で、坏部体の中央に鈍い稜を有する器形は第I期H-61に1点みられた。
- ⑦ 土師器埴は、第II期においてのみ認められたが、これは第I期の本来的な土器組成中に埴が存在しないということの意味するものではないであろう。
- ⑧ 土師器壺においては、I期にみられた口縁部中央に鈍い稜を有するものが、第II期に消失する。また、胴部下半から底部へと至る変換点が、II期において明瞭化しなくなるようである。II期には小形の短頸壺も認められる。
- ⑨ 土師器甕Aでは、I期からII期にかけて、長胴化、頸部の締化、口縁部短縮・直立化、外面胴部のヘラケズリの多用化という傾向が窺える。殊にその長胴化は、カマドの登場に対応したものと考えられる。
- ⑩ 土師器甕Bでは、I期からII期にかけて、有稜口縁の消失、外面胴部ヘラケズリの多用化の傾向が窺える。
- ⑪ 土師器甑は、I期・II期を通じて比較的径の大きい単孔のものが認められる。I期では、「く」の字状口縁、II期では素口縁のものが認められた。
- ⑫ 須恵器は、第I期においては4点認められたが、第II期においてはみられなかった。

以上、前田遺跡第I期・第II期の土器様相の違いについて論及してきた。これを総括すると、土器様相全体としては第I期・第II期を通じて大きな変化は認められないといえる。ただしその細部においての変化は窺えよう。すなわち、坏・碗類における内面黒色処理化、壺・甕類における有稜口縁の消失、カマド登場に伴う甕の長胴化等がそれである。

### 3 前田遺跡第II期土器群の編年的位置付け 付図 5

前田遺跡第II期の土器群についてこれまで述べてきたが、それは編年的にはどのように位置付

けられるのであろうか。

さて、前田遺跡第Ⅰ期の土器群は、伴出した4点の須恵器から5世紀の第Ⅳ四半紀を中心に位置付けられることが明らかになった。そして、本第Ⅱ期の土器群は、その土器様相から第Ⅰ期土器群に継続して出現することも捉えられた。そこからは、当然の帰結として、本第Ⅱ期土器群が6世紀初頭に位置付けられるものであることが導き出される。

ところで、6世紀初頭といえば、古墳時代中期から後期へ、関東では和泉式から鬼高式へと移行する時期でもある。本第Ⅱ期土器群は、古墳時代後期いわゆる鬼高式土器メルクマールとされる須恵器模倣の坏（底部丸底、底部と体部の境に稜を有し、体部が直立するもの）を含まないことや、基本的には前時期とあまり変わりのない土器様相を示すことから、古墳時代中期の最終末期の土器群として位置付けておこう。

なお、本第Ⅱ期の土器群と同様なものとしては、佐久市西裏遺跡第1号特殊遺構出土土器群が該当してくる可能性がある。ただし西裏の土器群については前述したように、本第Ⅰ期に併行させるか、本第Ⅱ期に併行させるかが微妙な問題ではある。また、この他、小諸市五ヶ城遺跡第7号住居址出土土器群（小諸市教育委員会 1981）は、本土器群に近似した様相を呈しているといえる。

### （3） 古墳時代後期中葉（前田遺跡第Ⅲ期） 第447図

本遺跡において古墳時代後期中葉に位置付けられる土器群を伴出した住居址は、第Ⅱ区H-84号住居址1軒のみであった。H-84号住居址の北東区コーナーからは、良好な状態で一括資料が検出された。このH-84号住居址の一括資料をもって、前田遺跡第Ⅲ期が設定される。

H-84の土器群中には、須恵器短頸壺・土師器坏・高坏・壺・甕・甑の各器種がみられた。

#### 土師器

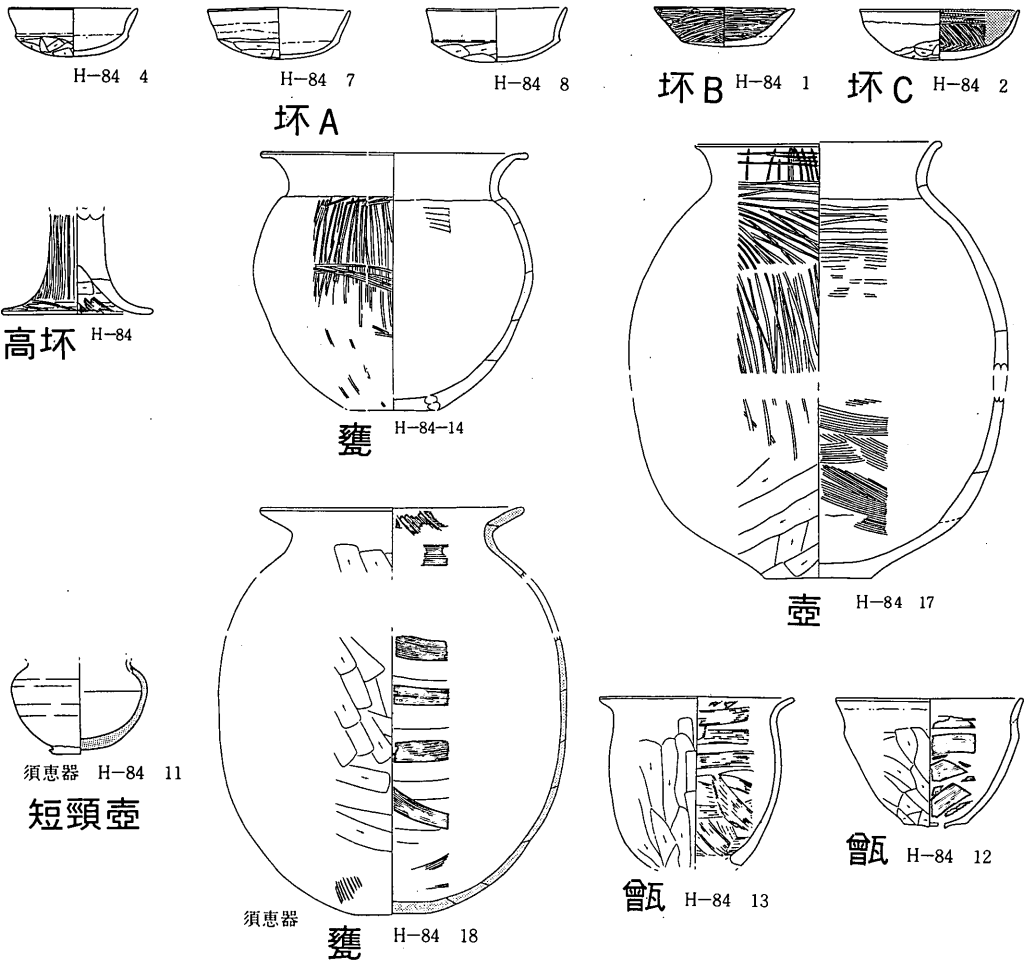
坏 9点検出された。A・B・Cの三者に分類される。

A 底部丸底、底部と体部の境に稜を有し、体部が直線的に外反するもの。7点認められた（3～9）。調整は、内面がヨコナデ・外面体部ヨコナデ・外面底部ヘラケズリが一般的である。

B 底部平底、体部は底部との境に稜をもって外反するもの。1のみが該当する。内外面にはヘラミガキが施されている。

C 底部は偏平な丸底を呈し、体部が丸味をおびて外半するもの。2のみが該当する。内面には黒色研磨がなされている。

高坏 脚部1点のみが認められたにすぎず、詳細は不明。



第447図 第III期土器分類図

甕 3個体認められたが、長胴のものは含まれなかった。14は、ほぼ全体の器形を知り得るもので、口縁部が外湾し胴部球状を呈し底部平底の甕であった。

甑 甑は、口縁部が胴部との境に稜をもって外反し、胴部は底部にかけて逆「八」の字状にすぼまる9孔の甑12が1点認められた。また、底部が接合帯より欠損したために甑として再利用されたと思われる13も認められた。

須恵器

甕 18は、土師質の須恵器甕である。内面には土師器にみられる刷毛目状調整が窺える。

短頸壺 11は、須恵器短頸壺と考えられるものである。

以上が前田遺跡第III期の土器群の内訳である。これらの土器群は、殊に坏A・甕・甑等の形態をもって古墳時代後期中葉の所産と考えられるのである。その実年代については、特徴ある須恵

器等が認められないなどしてやや論拠に乏しいため、6世紀後葉から7世紀前葉にかけてと幅をもって理解しておこう。

なお、本第Ⅲ期の土器様相は前述した第Ⅱ期土器様相に直接継続し得るものではなく、また、後述する第Ⅳ期の土器様相がこれに直接継続し得るものではない。したがって本第Ⅲ期の前後に空白期が介在していることが解される。

### 3 前田遺跡における奈良・平安時代の土器様相

#### (1) 須恵器坏について

須恵器坏は、奈良時代から平安時代にかけての土器組成中における普遍的な器種であり、量的な保障もあって、当該期の土器様相を知るうえでの重要な鍵となっている。

まず前田遺跡における当該期の土器様相を探るための骨子として、この須恵器坏の様相変化に目を向けてゆくこととし、それに付随させて他の器種の様相変化を捉えてみることにする。

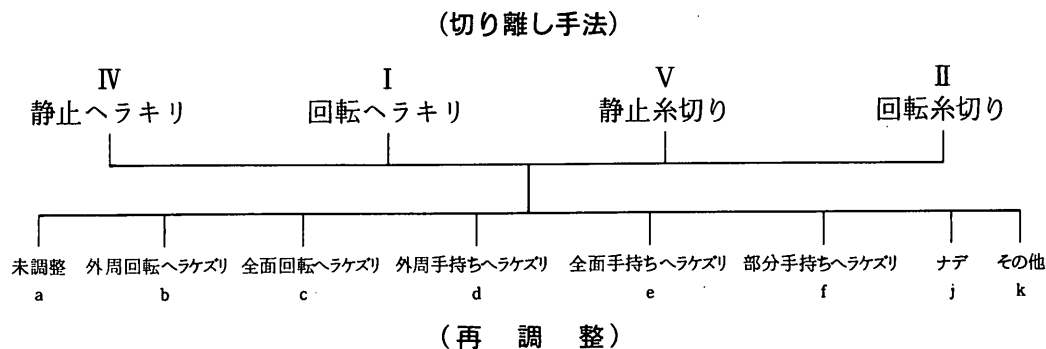
なお、本遺跡において検出され図示された須恵器坏は177点におよぶが、それらについて以下の視点に沿って分析を進めてゆこう。

- (1) 須恵器坏の底部切り離し手法および底部調整手法のあり方を捉えその変化を追う。
- (2) 須恵器坏の形態と器形を捉え、その器形変化を追う。
- (3) 須恵器坏の製作・焼成のあり方について考えてみる。

#### Ⅰ 底部切り離し手法と底部調整のあり方について

底部切り離し手法および底部調整手法のバラエティ

第164表 須恵器坏底部調整手法概念表



第165表 須恵器坏底部調整数一覧表

I 回転ヘラキリ						II 回転糸切り						II 不明					計
a	b	c	d	e	f	a	b	c	d	e	f	c	e	g	h	i	
32	0	4	1	21	7	54	2	0	11	0	0	11	21	1	9	3	177

ここで取り上げている須恵器坏は、いうまでもなくすべてロクロ整形によるものである。

それらの坏はどのような手法によってロクロから切り離されているのか。そして、さらにその底部にはどのような調整が施されるのかを検討してみることにする。

第164表は、その底部切り離し手法および調整手法のバラエティを概念的にまとめたものである。須恵器坏の底部のあり方は、概ねその分類の最末端のいずれかで理解できるものである。

それでは、ここで扱う底部には具体的にはどのようなものがみられるのであろうか（第165表）。

まず、その後の調整等によって消されることなく底部切り離し手法の確認できるものを観察すると、回転ヘラキリ手法（I類）が65例、回転糸切り手法（II類）が67例認められ、それ以外の静止ヘラキリ手法や静止糸切り手法は認められなかった。

また、底部切り離し手法の確認できないもの（III類・切り離しの後全面に調整が施されるもの、破片、風化剝落の激しいもの）は、45点（26%）みられた。これらがどのような手法によってロクロから切り離されているかは、厳密には判断しかねるが、切り離し手法の捉えられるものの中に、静止ヘラキリや静止糸切りがまったく認められないことを勘案すると、概ね回転ヘラキリまたは回転糸切り手法によるものである蓋然性が高いといえよう。

続いて底部調整手法についてみてみることにする。

そのバラエティとしては、a・切り離しのまま未調整のもの、b・周囲回転ヘラケズリのなされるもの、c・全面回転ヘラケズリのなされるもの、d・周囲手持ちヘラケズリのなされるもの、e・全面手持ちヘラケズリのなされるもの、f・部分手持ちヘラケズリのなされるものがある。なお、破片等のためその調整範囲が不明なものでは、回転ヘラケズリのみられるものをg（実際にはbまたはcに属する）、手持ちヘラケズリのみられるものをh（実際にはd・e・fのいずれかに属する）、また、風化・剝落等により調整の不明なものをiとして扱った。<sup>(1)</sup>

まず、回転ヘラキリによるI類では、aが32例、bが0例、cが4例、dが1例、eが21例、fが7例認められた。a・eが圧倒的に多く、b・dがほとんど認められない傾向がみられる。

次に、回転糸切りのなされるII類では、aが54例、bが2例、cが0例、dが11例、eが0例、

f が 0 例となった。a が圧倒的に多いが、d もいくつか確認でき、b の事例も僅かに認められた。また、I 類に認められた f 例はまったく認められなかった。なお、c・e 例は後述する III 類の c・e 例に含まれている可能性も残るため、これをもってのみその事例が存在しないとは言い切れない。

最後に、切り離し手法の不明な III 類であるが、その c・e・g・h・i は、I・II 類の a～f のいずれかに包括される蓋然性が高いことは前述したとおりである。ここでは、c が 11 例、e が 21 例認められ、実態が不明瞭な g が 1 例、h が 9 例、i が 3 例あった。

#### 住居址毎における底部切り離し手法および調整手法の構成とその変化

さて、前述した須恵器坯底部切り離し手法および調整手法が、一住居址内においてどのような構成をみせるかについて考えてみる。つきつめれば当然扱った住居址分だけの構成が捉えられることともなろうが、その主な構成様相を取り上げてみることにする。

第 166 表を参考にして捉えられる主な構成様相とは以下の 4 様相である。

1. 主に回転ヘラキリのまま未調整である I 類 a が認められ、殊に回転糸切り手法のみられない構成様相。以下の住居址に代表される。

H-1、H-6、H-19、H-21、H-29、H-38、H-39、H-107。

2. 全面手持ちヘラケズリ調整 (I e・III e) の認められる構成で、回転ヘラキリ手法は認められるが、回転糸切り手法の存在が不明な構成様相。以下に代表される。

H-32・H-37、H-47、H-48、H-53

3. 全面手持ちヘラケズリ調整をみせる e と回転糸切りによる II 類 d が主な構成要素となるもので、回転ヘラキリ手法と回転糸切り手法の共存がみられる構成様相。以下の住居址に代表される。

H-23、H-28、H-44、H-46、H-55、H-64

4. 回転糸切りのまま未調整である II 類 a が主体を占め、他の類例のあまりみられない構成。殊に、回転ヘラキリ手法がほとんどみられなくなる。以下の住居址がある。

H-3、H-4、H-20、H-26、H-115。

以上、代表的な 4 つの構成様相について述べたが、これらの構成様相が底部切り離し手法および調整手法の時間差あるいは段階差を示しているのではないかということに気がつく。それではそれはどのようにしたら確かめることができるのであろうか。そしてその変化をどのように追うことができるのか。

幸いなことにそれらを検証する手だては残っている。すなわち住居址の切り合い関係による検証である。上記の構成様相の代表例としてあげた住居址のいくつかは切り合い関係をもっている。そうした切り合い関係をもとに構成様相の変化を追ってみよう。

V 総 括

第166表 須恵器坏底部調整事例一覧表 (住居址毎)

	I						II						III						I						II						III				
	a	b	c	d	e	f	a	b	c	d	e	f	c	e	g	h	i		a	b	c	d	e	f	a	b	c	d	e	f	c	e	g	h	i
H-1	2																H-53	1	1	3								1	1						
H-2																	H-54					1													
H-3							3										H-55	1		1		2		2				1							
H-4							6										H-56										1								
H-5							1										H-57					2													
H-6	1															H-58					1														
H-7							2									H-59																			
H-8							1									H-64	1						1				2	1							
H-9																H-68																1			
H-10	1															H-69					2														
H-11													1			H-70																			
H-12																H-72				1		1													
H-13	1						2									H-76					1														
H-14													1	1		H-78																			
H-15																H-79											1								
H-16	1											2	1			H-80	1										1								
H-17																H-81	2										1								
H-18																H-82																			
H-19	1															H-83	1																		
H-20							4									H-85																			
H-21	1															H-86		1	2																
H-22																H-87				3															
H-23			1				1	2				1	1			H-88																			
H-24							2									H-89	1					1													
H-25							2									H-90																			
H-26							5	1								H-91																			
H-27							2									H-92																			
H-28							1									H-93																			
H-29	1															H-94																1			
H-30							1									H-95																			
H-31							1									H-96																			
H-32	1												2			H-97											1								
H-33	1						2									H-98																			
H-34																H-99																			
H-35																H-100				1															
H-36	1															H-101			1																
H-37		1	1										1	1		H-102																			
H-38	1															H-103	1											2	1						
H-39	1															H-104																			
H-40																H-105																			
H-41	1															H-106																			
H-42																H-107	1															1			
H-43													1			H-108	2					2						1							
H-44	1							2				2	1			H-109																			
H-45													1			H-110																			
H-46	1															H-111											1					1			
H-47				1	1								1	1		H-112												1							
H-48	1			3	2									1		H-113				3								1							
H-49							1					1				H-114					1														
H-50																H-115						2			1										
H-51																H-116																			
H-52	1			1									1	1		H-117	1																		

まず、構成様相1のH-19号住居址は、構成様相4のH-20号住居址に切られている。したがってその序列は、構成様相1→構成様相4と捉えられる。

次に、構成様相1のH-29号住居址は、構成様相3のH-28号住居址に切られている。したがって、構成様相1→3の順となる。

構成様相1のH-39号住居址は、構成様相2のH-47号住居址に切られている。したがって、構成様相1→2の順となる。

構成様相2のH-37号住居址は、代表例とはいえないが構成様相3のなかで捉えられるH-36号住居址に切られており、その序列は、構成様相2→3となる。

ここまでで捉えられた構成様相の序列を整理すると1→2→3となる。また、構成様相4は1より新しいものであることが捉えられたが、2・3との序列は住居址の切り合い関係からは導き出すことができなかつた。しかし、回転糸切りのまま未調整である底部II類aが凌駕するという構成様相4は、3に後続させ最も新しい段階として捉えることが可能である。これは、これまでの当該期の研究成果からみても妥当かつ容易なことであり、何びとも異論のないものであろう。したがってその構成様相の変化は、

構成様相1→構成様相2→構成様相3→構成様相4

の順で追えると結論できる。

この構成様相の変化は、従来からいわれている当該期の回転ヘラキリ手法から回転糸切り手法への転化という大きな流れのなかにあっても矛盾せずよく符合するものといえる。<sup>(2)</sup>

## 2 須恵器坏の形態と器形

本項で扱う須恵器坏については、まずその器形および法量の相異をもって大きくA・B・Cの3形態に分類し、さらにその形態下における器形を類型化することにした(第448・449図)。

### 形態 A

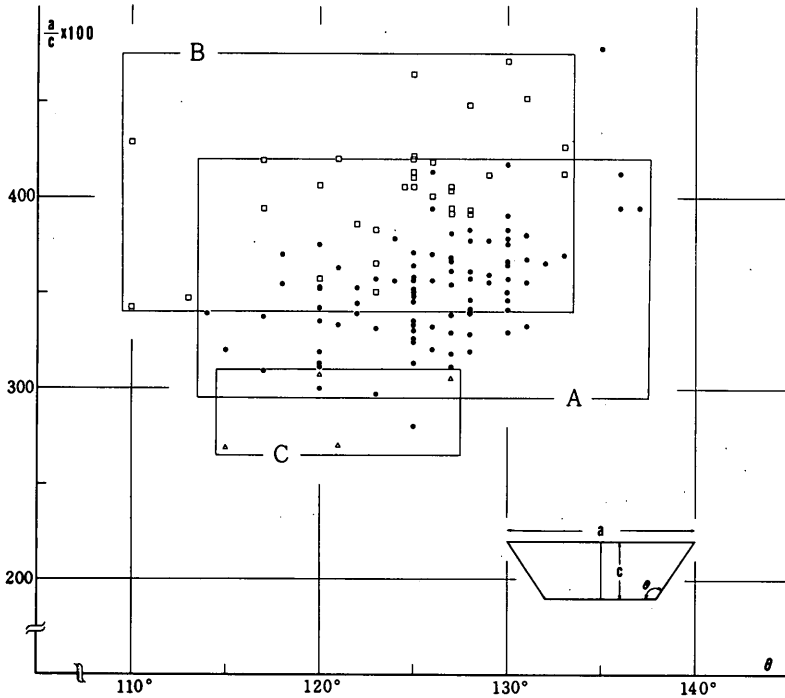
体部が外反し底部が平底を呈する器形。形態Bに比べ体部の外傾度が強く、器高が高いのが特徴。法量は、口径15.7~12.4cm、底径11.3~6.0 cm、器高4.7~3.2cm、外傾度114°~137°の範囲におよぶ。

A<sub>1</sub> 底部は縁部から中央に向けてやや突出するため、丸味を帯びた平底を呈するもので、底部から体部にかかる変換点もシャープにならない器形。

A<sub>2</sub> A<sub>1</sub>に比べると底部の突出はほとんどなくなり、平坦な平底をみせる器形。ただし、底部から体部への折り返しはシャープとはいえず、丸味を帯びて外反する。

A<sub>3</sub> 底部の突出はなくなり、偏平かあるいは中央のやや窪む底部をみせる器形。ただし底部から体部への折り返しは依然としてシャープとはいえず、丸味を帯びて外反する





第448図 須恵器坏形態 A(●)・B(□)・C(△)の法量分化

もの。

- A<sub>4</sub> 底部は突出のみられない平底を呈し、底部と口縁部の変換点もシャープとなる器形。体部は比較的直線的に外反する。

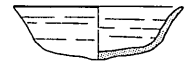
- A<sub>5</sub> 口径に比して底径が小さくなり、その外傾度が急になる器形。底部は突出のない平底を呈し、底部から体部にかけての変換点もシャープになるもの。

形態 B

体部が外反し底部平底を呈する器形。形態Aに比べ体部の外傾度が弱く、器高が低いのが特徴。いわゆる盤状の形態を呈するもの。法量は、口径15.3~11.8cm、底径12.3~7.0cm、器高4.0~2.8cm、外傾度110°~133°におよぶ。

形態 C

体部が外反し底部平底を呈する器形。形態A・Bに比べ口径・底径ともに小さくなるが、口径・底径に対し器高が高いもの。肉厚な小形品である。3点みられたのみである。法量は、口径13.5~11.6cm、底径7.4~6.4cm、器高5.0~3.8cm、外傾度115°~127°を測る。



A1 H-39-2



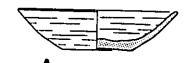
A2 H-113 2



A3 H-23 6



A4 H-13 1



A5 H-30 2



B H-37 4



C1 H-53 3



C2 H-3 3

第449図 須恵器坏分類図

- C<sub>1</sub> 底部が丸味を帯びた平底を呈する器形  
 C<sub>2</sub> 底部は丸味を帯びない偏平な平底で、底部から体部にかけてシャープに変換する。

### 3 底部切り離し手法および調整手法と器形

さて、これまで調整手法あるいは器形の個々のレベルで話を進めてきたが、ひとつの坯は両属性の総合体であり、決してその結びつきを切り離して考えることはできない。ここでは、底部切り離し手法および調整手法がどのように器形を規制するかを考え、両者の結びつきをみてみることにする。

まず、かかる手法がどのように器形を規制するかを以下に列記しよう。

#### ① 底部切り離し手法によって規制される底部の形状は次のようである。

まず、回転ヘラキリの場合、ヘラがロクロ中心に向かって下向きに切り込まれると、A<sub>1</sub>類のように中央の突出した底部となる。

逆に、ヘラがロクロ中心に向かって水平あるいは上向きに切り込まれると、B形態にみれるような平坦な底部か中央のやや窪む底部となる。

回転糸切りによる場合は、平坦な底部か中央のやや窪む底部となるが、A<sub>1</sub>類のように中央が突出する底部は生み出されない。

#### ② 底部調整によって意図される形状は次のようである。

まず、回転糸切りの後周囲手持ちヘラケズリがなされた場合、底部から体部への折り返し部分の角がとれてシャープさがなくなり、A<sub>2</sub>類にみられるような器形となる。

底部全面手持ちヘラケズリがなされる場合、主に外周部がよく削られA<sub>1</sub>類にみるような丸味を帯びた底部が形成される場合と、突出部分中心に削りがなされより平坦な底部が形成される場合とが認められる。

部分手持ちヘラケズリがなされる場合、例えば回転ヘラキリの際の中央のヘソの除去など、不都合な突起の除去等が意図される。

回転ヘラケズリがなされる場合、より平坦な底面の確保が意図される。

以上が、切り離し技法および調整手法によって規制される器形である。では、それをふまえての両者の結びつきはどのようであろうか。その主な結びつきを以下に記しておこう。

- ① 器形A<sub>1</sub>は、調整手法I類aと強い結びつきをみせる。
- ② 器形A<sub>2</sub>は、調整手法eとも強い結びつきをみせる。
- ③ 器形A<sub>2</sub>は、調整手法I類aと強い結びつきをみせる。
- ④ 器形A<sub>2</sub>は、調整手法eとも強い結びつきをみせる。
- ⑤ 器形A<sub>3</sub>は、I類aとの結びつきもみられるが、殊にII類a・dとの結びつきが特徴的であ

る。

- ⑥ 器形A<sub>4</sub>は、調整手法II類aとの結びつきが強い。
- ⑦ 器形A<sub>5</sub>は、調整手法II類aとの結びつきが強い。
- ⑧ 器形(形態)Bは、I類・II類のいずれとも結びつきを見せている。
- ⑨ 器形C<sub>1</sub>は、I類との結びつきをみせる。
- ⑩ 器形C<sub>2</sub>は、II類aとの結びつきをみせる。

#### 4 底部調整手法の変遷からみた須恵器坏の器形変化

さて、前項では調整手法と器形との結びつきが明らかとなった。また、調整手法の構成様相が1～4の順で変遷することも前述しておいたとおりである。それでは、調整手法の変遷に基づいて須恵器坏の器形変化がどのように追えるかを明らかにしておこう。

- ① まず、坏形態Aにおいては、相互に重なる部分がありながらも、おおよそA<sub>1</sub>→A<sub>2</sub>→A<sub>3</sub>→A<sub>4</sub>→A<sub>5</sub>の順での器形変化が追える。
- ② ①に述べた坏の器形変化とは、具体的には、丸味を帯びた平底からより平坦な平底への変化(底部の平坦化)、底部から体部にかかる変換点の明瞭化、体部の外傾化、底部径の縮小化であるといえる。
- ③ 形態Bの器形は、底部調整手法の変換に鑑みて追っても、ほとんど変化がないものといえる。
- ④ 形態Cにおいては、C<sub>1</sub>→C<sub>2</sub>の器形変化が追え、底部の平坦化がみられる。

#### 5 須恵器坏の製作・焼成について

須恵器坏の製作・焼成について簡単にふれておこう。

まず、その成形について考えてみる。かつて須恵器坏の成形技法は、ロクロ水挽き技法によるものとされたが(阿部 1971)、近年ではマキアゲ水挽き技法によるものであることが有力視されている(中村 1980、田辺 1981)。事実、本遺跡のH-114号住居址出土の須恵器坏内面体部には、粘土の紐痕が残っており、また本遺跡と隣接する小諸市鋳物師屋遺跡においては、体部に幾重にもわたってかなり明瞭な粘土紐痕を残す須恵器坏が検出されている。この僅か数例をもってのみ、その成形技法がマキアゲ水挽きによるものであると判断するのはいささか危険であるが、須恵器生産の統一性・均質性をふまえてみた場合、数少ない資料から引き出される様相もある程度の普遍化が可能であるといえる。したがって、本遺跡にみられる須恵器坏の成形技法としても、一般に考えられているマキアゲ水挽き技法を想定しておくのが妥当といえよう。

次に須恵器坏の成形の際のロクロの回転方向についてはどうであろう。図示した個体のうち、ロクロの回転方向の捉えられる個体は165個体であり、その内訳は以下のようである。



(2) ちなみに多摩ニュータウン地域の古代の土器編年のメルクマールは次の通りとされている(栗城・鶴間・比由井 1982)。

第Ⅰ期 口縁部と体部の境界に稜を有する鬼高的様相をもつ坏

第Ⅱ期 従来、美濃須衛窯跡群からの搬入品とされている高台坏の須恵器坏

第Ⅲ期 底部が回転糸切りの後、全面あるいは外周をヘラケズリ調整されている須恵器坏

第Ⅳ期 底部が回転糸切りのままで、調整の施されない須恵器坏

第Ⅴ期 体部外面がヘラケズリ調整された粗雑なつくりものや、内面にヘラミガキ調整を施し、黒色処理されるなどバラエティー富む土師坏

殊にこのなかでも、第Ⅲ期・第Ⅳ期の指標は、本構成様相3・4と共通するものであり、本構成様相が編年のメルクマールたり得る妥当性を支持してくれている。

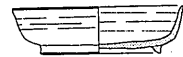
(3) 小諸市教育委員会花岡弘氏の御厚意により実見させていただいた。



A H-19 3



B H-26 9



C H-89 4

## (2) 須恵器高台付坏

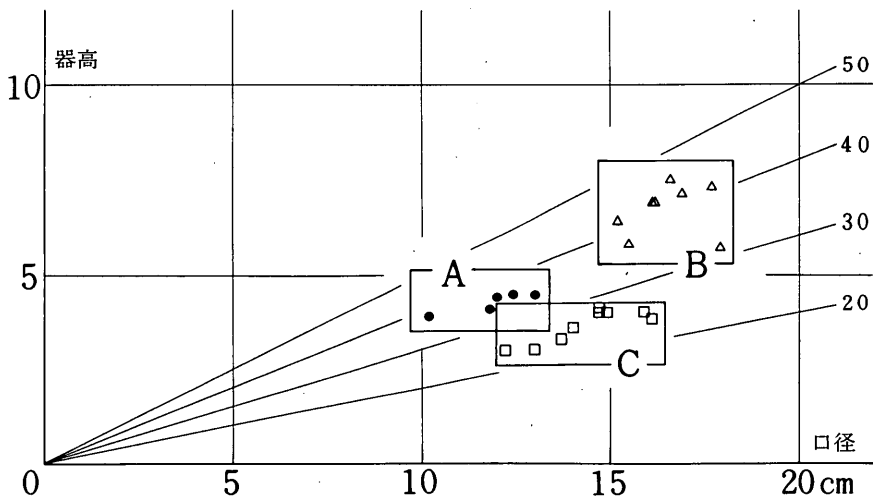
### I 須恵器高台付坏の形態

本遺跡で検出されている須恵器高台付坏は、主にその法量の分化と器形によって以下に形態分類ができる(第450・451図)。

形態 A

口径13.0~10.2cm、底径(高台部径)8.7~6.4cm、器高4.5~

第450図 須恵器高台付坏の形態



第451図 須恵器高台付坏形態A・B・Cの法量分化

第167表 須恵器高台付坏底部調整数一覧表

I 回転ヘラキリ						II 回転糸切り						III 不明					計
a	b	c	d	e	f	a	b	c	d	e	f	c	e	g	h	i	
0	0	0	0	0	0	2	5	0	0	0	0	18	2	1	0	2	30

3.9cm、の範囲におよぶもので、体部が比較的直線的に外反し、底部平底を呈する器形。形態Bとは相似形をなすが、法量によって小形に分化する器形。5例認められた。

#### 形態 B

口径17.9～15.2cm、底径14.1～9.9cm、器高7.5～5.7cmの範囲におよぶもので、体部が比較的直線的に外反し、底部平底を呈する器形。形態Aとは相似形をなすが、法量の点で大形に分化する。9例認められる。

#### 形態 C

口径16.1～12.2cm、底径12.1～9.8cm、器高4.0～3.0cmの範囲におよぶもので、形態A・Bに比べ、口径・底径・器高の三種の属性のなかで器高の数値が低くなる盤状の器形を呈する。9例認められた。

## 2 須恵器高台付坏の底部調整と高台

須恵器高台付坏の底部調整にどのような手法がみられるかを、須恵器坏の項で前述したそのバリエーションに即応させ検討してみよう（第167表）。

まず、その底部切り離し手法については、回転糸切り手法によるものが確実に認められた。また回転ヘラキリ手法によるものは確認できなかったが、数多く検出されている底部切り離し手法の不明なIII類のなかに含まれているものと考えられる。

次に、その底部調整手法についてであるが、殊に周囲回転ヘラケズリ調整bと全面回転ヘラケズリ調整cが特徴的にみられることが注意される。前述したように、回転ヘラケズリの意図は平坦な底面の確保にあるといえる。平坦な底面は高台部貼り付けの際に有効でもあったのであろう。いずれにしても、底部回転ヘラケズリ調整は本器種における重要な特性と評価できよう。なお、回転ヘラケズリ調整の他、切り離しのまま未調整のaや全体手持ちヘラケズリによるeも若干みられた。

さて、高台部は1点を除きすべて貼り付けによるものであった。例外の1点とは、H-111・5にみられる削り出し高台である。なお、西弘海氏によれば削り出し高台は9世紀前半の緑釉陶器に

みられるもので、晩唐越州糸青磁の影響下における革新技术であるという（西 1974）。しかし、後に位置付けられるようにH-111号住居址は8世紀代の住居址であり、削り出し高台の出現期を溯る住居址ということになってしまう。また5の坏の高台部は底部をこえて突出しておらず用をなしていないこともあって、本個体が恣意的に生み出されたものであることを考えさせるのである。

### (3) 須恵器長頸瓶

須恵器長頸瓶と考えられるものは、21個体みられるが、いずれも部分品のみで完形が存在せず実態はわからない。また、頸部を失うものについて長頸瓶と判断するにはいささか危険が伴う。したがってここでは、その若干の様態についてふれておくのみとする。

まず、その口縁は外側に折り返し帯状を呈する口縁をみせるものが4点あるが、H-41・4にみるような素口縁のものもある。

底部では、高台の貼り付けられるものと、高台をもたないものの二者がある。また、底部調整のバラエティとしては、回転糸切りのまま未調整のII類aが6例、全面回転ヘラケズリのなされるIII類cが6例と目立った。

なお、底部径から推測して、これらの長頸瓶の器形には大小の二種が認められるらしいことがわかった。

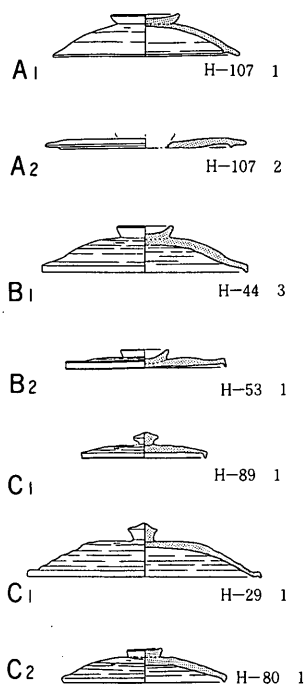
### (4) 須恵器蓋 第452図

須恵器蓋は47点を図示したが、それらを次の視点によって分類してみた。すなわち、①内面のかえりの有無、②つまみ部の形状、③偏平度の3点である。導き出された形態を以下に記そう。

形態 A<sub>1</sub> 内面にかえりを有する蓋で、つまみ部は径が大きく中央が窪む皿状のもの。その中央に向かって器高が高まる器形。主に2例が該当する。

A<sub>2</sub> 内面にかえりを有する蓋で、中央においても器高の高まらない偏平な器形を呈する。1例のみでありつまみ部の形状は不明。

形態 B<sub>1</sub> 底面にかえりを有さない蓋で、つまみ部が環状もしくは皿状を呈するもの。その中央に向か



第452図 須恵器蓋分類図

って器高が高まる器形。主に3例が該当する。

B<sub>2</sub> 内面にかえりを有さない蓋で、つまみ部が皿状を呈するもの。その中央においても器高が高まらず、偏平な器形を呈する。偏平な点においてはA<sub>2</sub>と共通する。1例認められた。

形態 C<sub>1</sub> 内面にかえりを有さず、つまみ部が宝珠形を呈するもの。なお、口径の点においてH-29-1のように口径の大きいものと、H-89-1のように口径のきわめて小さいものなどがみられる。主に16例が該当する。

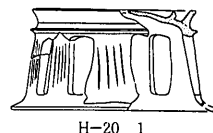
C<sub>2</sub> 内面にかえりを有さず、つまみ部が偏平なボタン状を呈するもの。なお、本例のつまみ部の形状は、C<sub>1</sub>の宝珠形つまみの退化したものと捉えることができ、C<sub>1</sub>の範疇に含めて理解することも妥当といえる。9例認められる。

以上、須恵器蓋の形態を示したが、これらの蓋は基本的には坏類とセットをなすものと考えられる。ちなみにH-7号住居址では、須恵器坏と蓋がセットで出土しており、貴重な事例といえる。一方、B<sub>1</sub>の蓋は、佐波理坑蓋の模放形態とされ(西 1974)、特定形態の坑とのセット関係も想定できようが、むしろ在地にあってはそのようなセット関係は崩れ、独立した器種として存在しているものとも思われる。

### (5) 須恵器円面硯 第453図

須恵器円面硯は、H-20号住居址・H-108号住居址の2軒から各1点ずつ検出されている。この2軒は、前田遺跡第VII期(8世紀第IV四半紀から9世紀初頭)に位置付けられるものである。

H-20の円面硯は、脚台部に9ヶ所の透しを有するもので、その脚部には4条の沈線が認められた。磨墨面には顕著な磨滅もみられず、墨の付着も認められなかった。



H-20 1



H-108 1

第453図 円面硯

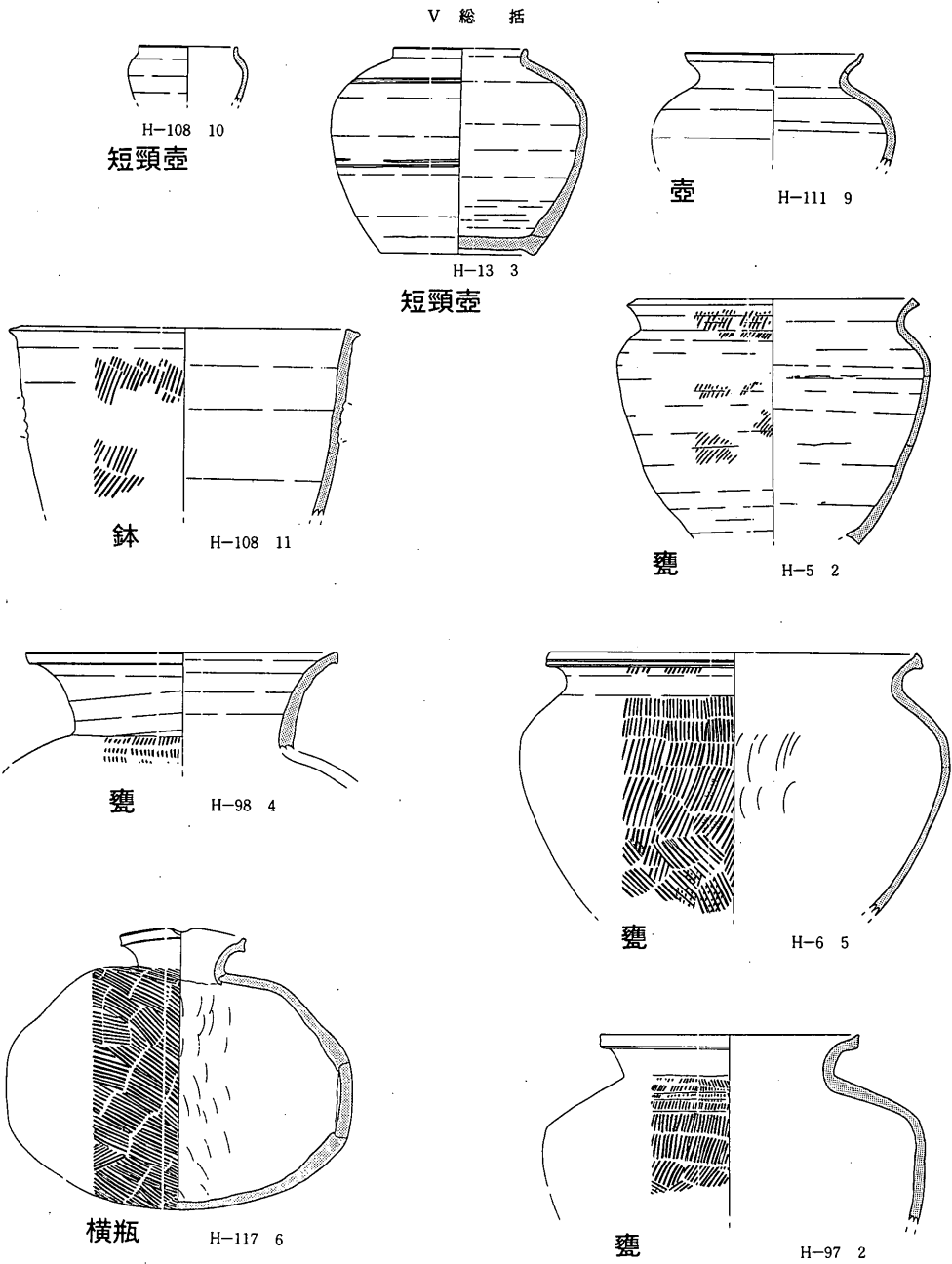
H-108の円面硯は、脚台部を失うが、おそらくその脚台部に透しを持たないことが、前田遺跡佐久市分出土の円面硯二例から類推できる。本円面硯の磨墨面には、磨墨による磨滅や墨の付着は認められなかった。<sup>(1)</sup>

なお、鑄師屋遺跡群における円面硯の出土事例は、現在までに総数5例となっている。内訳は、前田遺跡御代田町分2例・同佐久市分2例、小諸市鑄物師屋遺跡1例である。<sup>(2)</sup>

#### 註

- (1) 佐久市前田遺跡では、本第II期(8世紀第II四半期中心)に位置付けられる住居址2軒(H-3、H-5)から1点ずつ円面硯が検出されている。
- (2) 小諸市教育委員会花岡弘氏の御厚意により、実見させていただいた。





第454図 須恵器その他の器種

(6) 須恵器その他の器種 第454図

須恵器では、これまで扱ってきた器種の外、壺・短頸壺・鉢・甕などが検出されている（第454図）。しかしいずれの器種も断片であったり、僅少であったりして実態を捉えるに至らなかった。